
全ての終焉より戻りし1000歳のネギ

ラグエス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ての終焉より戻りし1000歳のネギ

【Nコード】

N7454I

【作者名】

ラグエス

【あらすじ】

全てが終わわり、魔法等で寿命を引き延ばす結果が出てしまい、その状態で1000歳（外の時間）になったネギが逆行するお話です。

※原作（捏造）からオリジナル（捏造）最終話後の数百年経過したネギが主人公。

性格も違うのでオリジナル主人公化したネギに近いです。

原作の中のイベントが無くなっていたり変わっていたりします。
時間軸も違う部分と逆行、最強、ハーレム、オリジナル要素、魔法、
チート、アンチ偉大なる魔法使い（予定）があります。苦手な方は
ご注意ください。

第1話『終焉から戻ってきたネギ』（前書き）

このSSは最強・逆行・ハーレムで構成されていますので苦手な方はご注意ください。

第1話『終焉から戻ってきたネギ』

青空が広がっているが、鳥すら飛んでいない不思議な光景だった。20ぐらいの青年が退屈そうな表情で空中に浮いていた。

「もう千年も生きてるのか、人類が一人もいないのはなぜ？」

今、ネギがいる場所は麻帆良学園で飛び回っている。

うろちよろするが学生一人すらもいなかった。

それどころか生き物すらいなかった。

「無理もない……戦いを繰り返す馬鹿共がやり合ってたらこうなるか」

全てが終わった後、起きたのが魔法世界と旧世界の戦争。

旧世界は核など。魔法世界はもちろん魔法で対抗している。

各地に核を落とされて世界が破滅に向かってしまった。

山ほど飛んでくる核を防御魔法で防げると思っていたのかな。

僕には効かないけどな〜と懐かしく魔力が無くなって枯れてしまった世界樹を眺める。

色はかなり枯れていて変色していた。巨大な樹がこんな黒に近い色だと気味が悪い。

「それじゃあ、過去へ戻るか」

世界に1人しかいないのにいつまでもここにいるのがアホらしくなった。

そんな気分でネギは決心をして時空転移魔法を使う。

この魔法はネギしか使用できない固有魔法。

それが作動した瞬間、この世から消えた。

……………

（麻帆良学園）

過去へ着いたら、何かが騒がしかった。

人の声、慌ただしく走っていく人の気配

上を見ると、電車の音や飛行機が飛んでいる音がした。

上を見るのをやめて周りを見たら、学生たちが走っていた。

初めて、この学園に来た時と同じ再現されている。

「ああ……ここに来たのか」

「10歳になってる……魔力は1000歳の頃のまんまって事は、うん、考えるのは止めよう」

何で止めたか理由は簡単、魔力がエヴァや木乃香やサウザンドマスターやアスナ達が居た時のラスボスらしき者より遥かに上回ってるから。

魔力を誤魔化すなんて簡単だけど、面倒だからこの状態で行こう。

「それにしても懐かしい……」

懐かしいという事はネギにとってかなりの年月が経過している事になる。

それにしても背中に何かあるなっを見ると杖があった。

こんな邪魔な杖をよく持ってたなあ。

今までの自分を否定していくネギだったが、ある声で我に返る。

「遅刻遅刻〜!!」

「急がないと先生がうるさいぞ!」

周りを見ると、愚痴を言いながら走っている生徒などがいた。
1000年生きているせいで初めから理解できる。

今更だけど、この学園の結界弱すぎるよ。

ヘルマンも侵入できるくらいだから結界の意味がない。

今からで言うとも未来の出来事だからどうでもいいや。

さて、アスナイや、明日菜さんに会わなきゃね。

懐かしく思いながら走って行った。

走っていると明日菜さんと木乃香さんがいた。

三回まわってワンとか言ってるってあれ、そうだったけ?

そろそろ接触しようかな。

明日菜さんの隣に並んで前と同じいや、ちょっと違う言葉をあげた。

「あなたの恋愛運は大吉で初恋は実らないですよ?」

その言葉に明日菜さんが僕の裾をつかんで

「何ですって!?!」

「まあまあ、子供の言う事を気にせんでええやん」

木乃香さん、相変わらずですね。

僕は木乃香さんを見る。

「やあ、ネギ先生」

タカミチの声がした。
同じ立ち位置でタカミチが立っていた。
何も変わらないんだね。
過去には来たけど何も変わらない。

「高畑先生、おはようございます」

「やあ、明日菜くん」

「タカミチ、久しぶり」

本当に何百年ぶりなんだろうか？
100年後、調べたらほとんどの知ってる人が亡くなってる事を聞いた。

その時だけしか覚えてなかったんだよ、タカミチ……ゴメンネ。

「ここはどうですか？ ネギ先生」

「いい所ですね、ここが今日から教師として通う学園ですね」

教師という部分で明日菜さんが僕に突っかかってきた。
この頃はまだデレ期でもフラグも経ってないからどうしたものか。

「教師ってどういう意味ですか？」

「そのまんまの意味だよ。ネギ先生は英語の教師としてこの学園に赴任してきたんだ」

「えええええ！？」

「ウソオオオ！？」

木乃香さんと明日菜さんが驚いてる。
当り前か……10歳の子供が先生っておかしいもんね。
完全に違法そのものだし

「初めまして、今日からこの学園の教師をする事になりましたネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いしますね。明日菜さん、木乃香さん」

と挨拶した瞬間、2人は目を見開いた。

あれ、何で驚いてるの？

明日菜さんが僕の頭を掴んでこう言ってきた。

「何で、私の名前知ってるの？」

「え？」

「まあ、高畑先生が私の名前は言ってたから、それは良いとして、何で木乃香の事を知ってるわけ？」

しまったああああー！！

そうか、僕はまだ木乃香さんの事全然知らないんだった。
どうやって誤魔化す？

あ、走ってる途中の会話を聞いてた事にしよう。

さすが僕、そう言えばOKだね。

その事を明日菜さんに言った。

「ふーん、まあいいわ」

「ネギ君かー、かわええなー」

僕に抱きついてくる木乃香ってあれ？

こんな事、前にあったっけ？

この程度の出来事で影響はしないか……

お気楽な考えで止めることにした。

「それより、ネギ先生、学園長の所に行きましよう」
「はい」

あの箒頭の所か、相変わらず箒頭なんだろうな
思いつきり失礼な事を考え中のネギを連れてタカミチは学園長室へ向かう。

明日菜と木乃香は教室へ向かった。

「学園長室」

ここは学園長室。

ここまで来るまでのお話？

残念ながら無言で案内されたからそんなものはないんだよ。

それはいいとして、こちらを見る学園長を観察する。

本当に人なんですか？

「よく来てくれた。ネギくん」

「初めまして、ネギ……」

「知つとるぞ。それよりも」

何か真剣な表情になった。

しかも、何かを警戒してるって魔力かな……。

「ネギくん、魔力を抑えた方がいいんじゃないか」

「なぜですか？ 普通の人には感じないんじゃないんですか、オーラも出てませんし」

「そうなんじゃが、ある一人の生徒がのう」

学園長がそう呟いた。ああ、エヴァンジェリンの事か……
懐かしいと言えば懐かしい。

僕に修行を付けてくれた先生なんだけど厳しかったんだよね。
そういえば、3年からじゃないの？警戒するのって
あまりの懐かしさに僕はその生徒の名を呟く。

「エヴァンジェリン……ですか？」

「知っておるのか？」

「はい、600年も生きてるのに小さい女の子ですよ」

僕にとって600年程度子どもみたいなものだ。

それに向こうでは亡くなってるから追いつかれる事もない。

もしも、生きていたら約1500歳？

そんな思考を考えていた。

「そうじゃ……わしも手を焼いておるんじゃ」

「なるほど、ってタカミチ、さっきから何をしてるの？」

タカミチがなぜか座り込んで俯いていた。

前回はそんなことしてなかったと思うけど

「ネギくん、僕は影が薄いんだろうか」

「どうなんでしょうか……ところでまだ話を聞いていないんですが」

この時期にこんなタカミチ見るのは初めてだけど面倒なので、この
際は、無視。

「そうじゃったな、担当するクラスじゃが、2-Aの担任と英語教師
をしてほしいんじゃ」

「良いですよ。断る理由ありません」

ここで断ったらウェールズに戻されるんだろうから、別に断る理由
すらない。

マジステル・マギを目指す気はさらさらない。

魔法世界と旧世界の戦争のせいで、何のために目指してたのかよく
わからなかった。

学園長がクイツと指を曲げると、ドアから人が入ってきた。

その人はしずな先生だった。

「初めまして、源しずなです。ネギ先生、じゃあ案内するわね」

「はい、よろしくお願いします。しずな先生」

僕としずな先生はこの学園長室から出て行った。

2人が出て行った後、学園長はタカミチに

「ネギ君の魔力が魔法学校の報告よりも高いんじゃないが」

「ええ、それはちよっと気になりますね」

「わしよりも上かもしれないのう」

ネギの潜在能力を計ってそう推測する学園長だった。

まったくの見当違いであり、桁違いな魔力を持つという事を後にな
って気づく事になる。多分……、

しずな先生に学園の事を色々聞いていた。

ここは女子寮があるとかまあ、色々。

僕も今回は気をつけようと思う。

特に惚れ薬の事とか……ね、

前回の失敗を繰り返さないための重点を考えていたら、2－Aの教室前に来た。

「ここがその教室よ」

しずな先生が後ろに下がる。

何で下がるの？ 明らかに何かあるんだけど……

どうぞつとご丁寧に譲っているように見える。

まあ、気にせずに扉を開くと黒板消しが上から落ちてくる。

「はあ……」

溜息を漏らして落下してくる黒板消しを浮かして右手で取り、足元にある糸などの罫を潰した。

潰した後、教壇の横にあるゴミ箱に罫の塊を捨てた。

「えーと、今日からここの担任になりましたネギ・スプリンググーフ
イールドといまして

担当科目は英語です。趣味は生命ごろ……じゃなくて本を読む事、
年齢は10歳？です。よろしくお願いします」

僕は前回と違う自己紹介をした。

その横にしずな先生が来て説明する。

「ネギ先生は大学を卒業できるほどの頭が良く特別にこの学園に来てもらったの。皆さんも仲良くお願いね」

そう言うってから、僕の方を見て笑みを浮かべていた。

しずな先生？ 僕に仲良くってどういう意味ですか？

そんな疑問を考えていたが、いきなり生徒さんが

「「「かわいい〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！」」」

大声で歓迎の声をあげていた。

歓迎でいいんだよね？

生徒達が僕の方に来て揉みくちやにしていた。

胸、いやマシユマロが襲って来たような感じだ。

全員の名前は知ってるんだけど、今は知らないので生徒でいいよね？

「助けて……」

しずな先生に目を向けて助けを求めようとするが、いきなりガツと襟を掴んで僕を持ち上げた。

こんな事するのは明日菜さんしかない……

「ちょっとあんた、黒板消しに何かしなかった？」

「してませんよ」

ちょっと黒板消しを浮かして取っただけなんだけど、それを不思議がるとはさすがというべきか。

まあ、明日菜さんは目もいいから。

「嘘つけ！明らかに浮いてたわよ！」

突っかかってくる明日菜さんの手を強引に外して離れた。

「相変わらず猿みたいですよわね」

おおっ！明日菜さんに何か言った。

あやか……いえ、委員長さんだ。確かシヨタと呼ばれてるんだね。

そう言えば、明日菜さんと委員長さんは仲が良い。
ケンカするほど仲が良いって所が良いけど、争う内容が毎回くだらないことだったりする。

「何ですって！」

委員長さんが僕の片方の手を両手で包み込むように握ってきた。
暖かい……こうして見ると変な趣味以外は完璧なお嬢様だっけ
そう思い出していると、明日菜さんが一枚の紙を丸めて委員長さん
の頭に投げる。当たった委員長さんが僕から離れて明日菜さんとお
つぺたをぐにゅっと伸ばしたりしていた。
その光景を目当たりして呆れた。

「何すんのよ！このシヨタコン！」

「あなたこそ！ファザコンでしょうが！」

「委員長に200円かけるわ！」

「じゃあ、私は明日菜に300円かける！」

「あたしもー！」

トトカルチョを始めている者もいた。

相変わらずだなく、このクラスは……。

とアホらしく見て呆れていると、殺気が端っこ当たりから出ていた。
殺気の視線を見てみるとエヴァンジェリンがこっちを見るから、僕
もそちらへ見ると視線を逸らされた。

逸らすなんてひどいな、親父いえ、父さんが封印解除に来ないか
ら、僕に来るんだ！会ったら速攻で次代魔法おみまいしてやる。

僕はそう心の中に刻み込んだ。

「まだ争っているんですか、もういい加減にしてください！」

と言った所で止めようがないだろうから、時計を見ると、もう時間が無かった。

「これじゃあ、もうどうにもできないかも……」

とか思っていた所でチャイムが鳴った。

この音を聞くと。なぜか嫌な気分になる。

とりあえず、この場から離れることにした。

これ以上、揉みくちやにされたいと思っていけないから、とまた鋭い視線が1人向けてきてるんだよね。

僕は教室から逃げるように出て行った。

（教員室）

しずな先生がいた。

あれ？先に教室に出たはずなのになぜいる。

僕よりも早いと言うのか？

それでも僕は風が得意だったんだ。

過去形なのは今は違うだけの事だからね。

「僕の席は……」

「ここよ」

前回と同じではなかった。一番左の端だった。位置が違うのは何でだろう。

僕はそこに座って机や中の物を整理した。

整理した後、前回と違う出来事に手間取った。

そんなこんなで、放課後になり、僕の仕事が終わった。

世界樹前にあるベンチに座ってこれからの事を考える。

「これからどうするか、ん？」

20冊ほどの本を重ねて持ち運んでいる女の子を見つけた。

あれって……のどかさん？

確か踏み外して落ちるんだっけと考えた後、念を入れて魔法陣を落ちてくる予想の場所に貼って走った。

のどかと呼ばれる女の子が踏み外して地面に到達する瞬間、ネギは女の子を抱きしめた。

「ふう……危なかった」

立ち上がって女の子を地面に下ろすと視線を感じた。

この視線って明日菜さんだよね。

あ、こっちに向かってきた。

「明日菜さん、こんにちわ」

「こんにちわ……じゃない！！あんだ、今何かしなかった？」

「助けたかな」

言い訳に聞こえるが、事実なんだよ。

僕だってまさか、前回どおりなんて思いもしなかった。

女の子というよりものどかさんに言いかえるけどピクツと反応した。
え？ 起きそうになってる。

明日菜さんが僕の体を持って人気がない場所まで引っ張る。

そこで明日菜さんが僕にこう言った。

「あんた、何？ 超能力？ 未来人？ 魔法使い？ 神様？ 宇宙人？ 変人？ どれ！！」

超能力って魔法しか使わないって未来人に変人って項目はなかったぞ！

それに神様って何じゃそれ！！

しかも、どれって言われても、それを答えると思ってるの？

「僕は普通です」

「じゃあ、あの魔法陣は？」

「あれはあそこの模様だと思います」

「滅茶苦茶な言い訳で誤魔化せると思ってるの？」

明日菜さんの言う通り、滅茶苦茶な事を言ってるよ、僕。

この後、どうなるかわかってるからどうしようもない。
記憶を消す選択はないよ。

僕の目的は暇つぶしとハーレムがいいかも。

「ちょっと聞ってるの？」

「仕方がないです。知ってしまったからには記憶を1年から10年ぐらい放心状態になりますけど」

後ろに背負った杖を明日菜さんに向けて嘘の呪文を唱える。
唱えていると明日菜さんが反論する。

「待って！ 私は10年も忘れたくもないわよ！」

「大丈夫ですよ、運が良ければ1年間だけですから」

「運が良ければでしょ！」

「大丈夫。運が悪くてもたった10年ですし」

僕はテンションよく明日菜さんに杖を持っていない手でピースを向ける。

もちろん、こんな事はただのからかいに過ぎないんだよ。

そう言うと、明日菜さんは慌てながら僕に罵倒を浴びせてきた。

「何が大丈夫なのよ！それでも教師か！！」

「はい！」

僕は完全に肯定する。

明日菜さんが青ざめたり慌てたりしているので面白かったが、もう飽きたので呪文を止めて杖をポイっとその辺に捨てて面白かったお礼を言う。

父親から貰った杖の扱いが悪すぎるネギ。

「面白かったですよ。おかげで暇つぶしにはなりました」

「私をか、からかって……」

怒りで震えている明日菜さんの表情がかなり歪んでいた。それを見た僕は丁寧に危険な忠告をする。

「記憶を消すのは本当の処置ですよ？　ただ、オコジョにもなる可能性があるから記憶程度にさせたいんです」

「オコジョ！？」

明日菜さんは怒りで赤くなっていた表情から驚愕の表情になった。とりあえず、明日菜さんに魔法の事を教えてあげた。

簡単にだよ？　さすがに全部教えるわけにもいかないし、目的に反する事は今はしたくない。

魔法の掟などを聞いた明日菜さんはうーんと唸って考えているような素振りをして僕にこう言った。

「わかったわよ……内緒にしてあげる」

「ありがとうございます」

僕は笑顔でお礼を言うと、明日菜さんが何かを思い出したのかどこかへ行ってしまった。

1分ぐらいして、明日菜さんが両手に袋を持って戻ってきた。

袋の中には飲み物が入っている。

ああ、歓迎会かと思いついた。

「えと、どう呼べばいいの？」

「ネギ先生かネギくんかネギ……どれでもいいけど」

「ネギって呼ばせてもらうわ。皆で歓迎会しようって話があつてね」

「そうですか。じゃあ、行きましょうか」

「わ、わかったわよ」

頬が赤い明日菜さんが返事をしてからその場所まで案内するように先行して行った。

赤くなってるのは何でだろう。

容姿は子供でも中身は1000歳のおじいちゃんって感じだからな。

つまり、明日菜さんはおじいちゃんでもって事？

ネギはとんでもないような勘違いをしていた。

自分から開放しているオーラは明らかに普通じゃない事に。

寮の広場で『ネギ先生、2－A歓迎会』と旗があつた。

旗とはシュールってどこまで前回と違うんだよ……。

歓迎会は皆に揉みくちにされてタカミチと話したり金髪の少女に睨まれていたりと大変だったとき。

そのあと、学園長室に向かう。

そこで話した事は僕に住む場所がないため、木乃香さんと明日菜さんの部屋に住む事だった。

そこで明日菜さんが断ると思ったが、何も反論すらせず頷いていた。木乃香さんは天然なのか即答した。

学園長が木乃香の婿にならんか？とか聞いてきたが、子供じゃあ無理と反対する。

そうかそうか……大人になったらOKなんじゃないかと言ってくる。

木乃香さんが照れて金槌で箒頭にぶつけた。

その後、明日菜さんと木乃香さんの部屋に向かった。

next 2話へ

第2話『魔法バレがあまりの速さ』

く学園女子寮・明日菜木乃香の部屋（今後はネギの部屋に省略します）

明日菜さんと木乃香さんの部屋に着きました。

まったく同じ状況だったから安心した。

明日菜さんの性格が変わってたらどうしようかと、

「ところで僕の寝所はどうするんですか？」

どう見ても、厄介者としてここに来たのだからしょーがない。

最初はもう魔法で部屋を作りそこに住む予定だった。

ところが、前と同じ展開だったから戸惑った。

せっかくしたい事も出来なくなる。

「僕がいては迷惑じゃないんですか？」

「別に迷惑じゃないわよ」

「ネギくん」

「はい？」

いきなり呼んできた木乃香さんが抱きついてきた。

何で抱きついてくるの？ そりゃあ10才なんだから問題ないかもしれない。

僕も中学生の子をどうする気も起きないけど、これは……。

悶々と考える僕を明日菜が荷物をもう一つ上の場所に投げた。

それに気づいた時には荷物の中身が粉碎されているような気がして梯子をよじ登って調べる。

「うゝん、え？」

僕は荷物の中身を探って調べてたら無い物が多すぎた。

コレクション系が全て無い事だ。

これが無いとエヴァンジェリン戦が再現できないじゃないか！

いや、待てよ……今の僕は闇の魔法やら色々できるからいらんんじゃない？

当然、弟子フラグもって待って！ それだと……

「意味があるのかなあ、いや、ないかも」

「何をぶつぶつ言ってるの？」

明日菜さんが上に登ってきて僕の所まで来た。

魔法関連が無いから木乃香さんにバレる事もないんだろうけど、僕としては面白くも何ともなかった。

「いえ、なんでもありません。ただ、荷物がここに来た時減ってるなゝっと思いました」

「それって窃盗に遭ったんじゃないあ……」

気楽に答える僕の発言を明日菜さんが普通に返してくれた。

窃盗か……僕がここに来る前の僕は一体何をしてたの！ っと思鳴りたいけど、

何か無駄だから荷物の入ったリュックを隅っこにやった。

「ねえ、木乃香」

「何？ 明日菜」

「ネギの分の茶碗とか買わないと駄目ね」

え？明日菜さんが僕の食器を買ってくれる？

前に無かった事が次々に起きるのは何故だろう。

木乃香さんも頷いている所を見ると買ってくれるらしい。

明日菜さんが下に降りた。僕も下に降りて木乃香さんにこう言った。

「夕飯作るの手伝いしましょうか？」

「別に手伝わなくてもええんよ。今日は初めてなんやし」

「ネギは後でね」

「夕飯作るからちよつと待ってな」

と言ってから、木乃香さんが台所までパタパタと足音をやって行ってしまう。

明日菜さんと2人になったけど、明日菜さんは僕の事をじーつと見ていた。

なぜ見ているのか聞いてみるか。

「明日菜さん、さっきから僕を見ますが、顔に何か付いてますか？」

その言葉に反応した明日菜さんが僕から目を逸らして

「別に見てないわよ！　ちよつとアレについて聞きたいだけ」

「アレって？」

アレってのはもちろん魔法ってのはわかってる。

知っててわからない振りをする。

明日菜さんがなぜか怒った表情になり叫んだ。

「わかってるでしょ！　魔法の事よ！」

台所にも聞こえるような音量だった。

ここで木乃香さんが聞こえても別にかまわなかった。

その分、木乃香さんの親友だった刹那さんもと考えながら明日菜に返答する。

「ああ、忘れてた。魔法の何が聞きたいの？ オコジョになりたいとかだったら大歓迎」

「違うわよ！！」

笑顔のまま、親指を立てて準備はできてるよ！と意思表示したが、僕の頭に新聞紙で作ったハリセンで突っ込まれてパシン！と良い音が鳴った。

「魔法使いが現実にいるってことは別の魔法使いもいるってことでしょ？」

「うん、いますよ。この学園に」

「ネギ以外にいるの！？」

驚きの声を上げた明日菜さんのせいで戻ってきた木乃香さんが僕に

「ネギくんって魔法使いなん？」

単刀直入に言った。

まだ魔法使う所を見たわけじゃないから誤魔化せるね。
だから、木乃香さんにこう誤魔化す。

「ゲームの話ですよ。ですよ？ 明日菜さん」

僕が明日菜さんに念話で話を合わせてください。と送ったら頷いて

くれた明日菜さんが、

僕の言った事を同意するように頷いて言い訳のような雰囲気と言う。

「そうよ!! 木乃香、ゲームの話よ」

「へえ、そうなんやあ……って誤魔化せってるん?」

「ばれたあああああ……!!」

ばれたらって普通言うのか?

それより、明日菜さんがバレ宣言したせいでどうするか考える。

僕の頭の中には選択肢があった。

1、仲間に入れる。

2、記憶を消す。

2つの選択しかない事に気付いた。

木乃香さんって人に内緒にできる方だっけ?

記憶を思い出そうと記憶の中を探ったけど該当なしと出た。

「木乃香さん、僕は寝ますね」

とにかく話を逸らして眠るに限る。

僕はその場で寝ようとするが、木乃香さんが乗っかって来た。

上が木乃香さんで下が僕なんだけど、これはまずい。

「ネギ君は魔法使いなん?」

「はい、そうです!!」

あっさり認めることにした。

認めた後、その場から瞬動である程度離れた。

木乃香さんは何が起こったのかさっぱりだと首を傾げていたし、明日菜さんも早すぎて見えなかったみたい。

そういえば、今調理中だろう。何か妙な匂いがするから、

僕は台所に人差し指を指して木乃香さんに警告する。

「いいんですか？ 夕食」

「そうやった！！」

思い出し、急いで台所に向かった。

置いてあったソファ―に座り込み、明日菜さんを見る。

明日菜さんがこちらを見て両手を合わせて謝った。

「ゴメン」

「構いませんよ。おかげで魔法をこの部屋で使う事が出来ます」

悪魔と表現してもいいほどの笑顔を明日菜さんに捧げる。

明日菜さんは苦笑いしていた。

笑顔をやめて下に俯き真剣に考える。

何を考えるか？そんなの決まっている魔法の事。

「ねえ、ネギ」

「何ですか？」

「何の魔法を使えるの？」

そうそれだ。現在でどんな魔法を使うかが問題。

未来で作った魔法はほぼ封印でいいだろうと普通なら考える。

だが、僕にはどうでもよく、普通に使おう。

明日菜さんに指を向けて返事をする。

「まず一つ、魔法の矢ですね。2つ、雷の暴風」

「雷の暴風？」

「はい。ここで使えば、学園は軽く消し飛ぶのは間違いないです」

「……はい？」

「それすごいやん」

明日菜さんが間抜けの声を上げて木乃香さんが3人分の料理を持ってきて褒めてくれた。

褒めてくれるのは良いんですが……木乃香さん、学園が消し飛ぶって事はあなたもですよ？

明日菜さんも青ざめてますし、木乃香さんは天然だから考えてても仕方がない。

赤いソファーと青いソファーの間にテーブルがあるから、そこに食事が置かれた。

「明日菜、ネギくん、食べよ？」

「わかったわ」

「はい」

木乃香さんと向かい合わせになり、

明日菜さんが斜め横にいた。

やっぱり魔法の事なんだろうけど仕方がないか。

「ネギくん、魔法の事教えて」

「いいですよ。まず、木乃香さんのおじいちゃんも魔法使いです」

明日菜さんが「え？」と呟き、木乃香さんの反応がかなり違い大声で

「ええええええええ！？おじいちゃんって魔法使いなん！？」

と叫び驚いていた。

それは驚くし、あの箒頭も納得する。

腕を組んで考えていた明日菜さんが疑問を呟く。

「この学園ってもしかして、魔法でできた学園って事？」

やっぱりそこを突きますか……でも、明日菜さんはバカレッドでしょ？

心の中で真面目に本気でそう思った。

とりあえず、木乃香さんにある部分だけ伏せて魔法の事を教えた。話した後、木乃香さんが意外な事を言い出した。

「ネギくん、そのパートナーってどうやってたらできるん？」

「パクティオーっていうお試し契約があってその契約をするとかードが入手できる。」

そのカードは本人の適性された能力を元に構成される。

そのアイテムの事をアーティファクトって言います」

「ウチもほしい！」

「木乃香、巻き込まれるのよ？ いいの？」

明日菜さんが木乃香さんを心配して止めようとしている。

これはまずい。ここで教えて拒否されたら僕の夢が！ じゃなくて未来の影響が悪くなる。

明日菜さんに切り札を出す。

「明日菜さん、タカミチも魔法関係者ですよ？」

今の明日菜さんには有効の手段だ。

タカミチに好意している以上、僕の言うことに納得するはず。あくどい事を考えているネギだった。

明日菜さんが僕の言葉に悩んだ結果、

「わかったわ。私もパクティオーする」

断念した。でも、断念した理由はタカミチの事ではなかったみたい。だって、明日菜さんは木乃香さんを見て溜息を漏らしている。あれ？ 明日菜さんってタカミチの事……え？ まあいっか。それでいいのか？ ネギよ。

「じゃあ、魔法陣を生成しますね」

「どこに作るん？」

「70センチ範囲あれば十分です」

「そうなんや」

明日菜さんも興味があるのか生成する所を見ている。僕は左手を地面に翳して唱える。

「仮契約フィールド展開」

緑色の魔法陣が地面に映る。

ネギの仮契約というか契約魔法陣は緑色。

これから出てくるかも知れない下等生物の補助が無くてもできる。

僕は魔法陣の中に明日菜さんと木乃香さんに入ってくるように手招きする。

明日菜さんと木乃香さんは普通に魔法陣へ入る。

「これでどうするの？」

「キスするだけですけど？」

「え？」

それを聞いて明日菜さんはなぜか頬を赤く染めていた。

木乃香さんは僕の両肩に手を置き、唇にキスをした。

その後、魔法陣が光った。光が収まった後、木乃香さんが離れるとカードが発生した。

僕はちゃんと発生した事に安堵の息を吐く。

「ネギくん、カード出たんやけど、これどうするん？」

「明日菜さん」

「あ、うん」

明日菜さんは呼ばれた事に肩が飛び跳ねるように反応した。

魔法陣の中だからスカートがヒラヒラ上がっているが、

短くないと見えないのでネギも興味を失せていた。

やっぱり、カモの事を思い出す。

「じゃあ、いくわよ」

「はい」

明日菜さんが唾を飲み込み、明日菜さんの唇と僕の唇が重なった。先ほどと同じ現象が起こる。恥ずかしそうに離れた明日菜さんが浮いているカードを取ってソファーに座る。

僕は明日菜さんと木乃香さんを同じソファーに座らせ、僕は2人の向かい側でカードを出す。

「カードの使い方はアデアットで展開、アベアットで閉じる。

後は僕が召喚できるのとカードを頭に添えて念話するぐらいです」

「へえ」

「それはすごいと思うんだけど念話より携帯電話使った方が良くない？」

「明日菜！それは邪道やで！」

「あ、でも……通話代かからないし圏外にもならないわね」

木乃香さんはカードをポケットの中にしまい、明日菜さんは胸ポケ

ツトの中にしまう。

これでもいいが変わったかな？エヴァンジェリンの時、かなり有効になる事は間違いない。

今後の事を思うと楽しみで仕方がない。

「お風呂入らな…」

さすが女の子は一日でも入らない訳にはいかない。
その辺は同意している。

「そうねってネギはどうするの？」

「ネギ君も一緒に入らへん？」

「木乃香、ここは女子寮よ？どうやって……」

「今の時間は誰もおらへんやろ？ その隙に」

まずい……嬉しい状況だけど、ここは断っておこう。

明日の朝、学園長にこの話を持ち込んでみるか。

そう考えた僕は2人に断りを入れる。

「すみません、遠慮します。明日からちょっとどうにかします」

子供だからと言って気楽に女の子を入れる訳がない。

それに僕は中身が1000年だぞ？

それはもう駄目に決まっている。

「どうにかってどうするのよ」

「おじいちゃんに言うん？」

「それしかないじゃないですか」

2人の答えとして苦笑いながら答える。

答えた後、木乃香さんが明日菜さんに耳打ちしている。それに頷く明日菜さん。

何に頷いたのかよくわからないけども優しい。

「僕はもう寝ます」

あまりに眠くて堪らない状態で布団状のフワフワした何かを魔法で作りに出し、横になり目を瞑る。

もう疲れた……ここに帰ってきた初日にアスナのドジで2人になった。

これからはある程度違うと予想した方がいいかもしれない。

「お休み」

そう呟くと、僕は深い眠りに落ちた。

next 第2話へ

第3話『真祖の吸血鬼と接触』

（ネギの部屋）

誰よりも早く眠ってしまった僕は目が覚めた。

明日菜さんがいなかった。

どうしたものかと思えると思いついた。

「新聞配達やってるんだっけ、行ってみるか」

僕は窓から飛び出した。

木乃香さんは寝ているため、注意の欠片すらなかった。

下を見ながら明日菜さんを探していた。
人が少ないのはまだ4時ぐらいの時刻

「なるほど、かなり違ってきてるかも、ん？」

新聞紙を配っている明日菜さんを発見。
走っている斜め上からの視線で声をかけた。

「明日菜さん、おはようございます」

浮いてる僕を見て驚いたが昨日の事を思い出したらしく空笑いしていた。

呆れられてるのか。

地面に降りて明日菜さんの持つてる新聞紙の配る量を見る。

「多いですね。大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。このくらい楽勝楽勝」

「こんな朝早くにアルバイトは大変ですよ？」

僕の言葉に明日菜さんは目を丸くしたが、笑みを浮かべる。

「私って体力があるでしょ？ それと、学園長のお世話にいつまでもなる訳にもいかないし」

「両親とかはどうしたんですか？」

本来は昨日で聞いとかないといけなかった事を今、聞く事にしよう。さすがに後で聞くんていう事が絶対にならないから。

「いないわ……私が小さい頃に亡くなってらしいのよね。」

その時、高畑先生に会ってこの学園に来たの」

明日菜さんは悲しそうにそう語った。

何か前と違うけど、同じ部分はあるし、覚えていない部分も含めて一致はするだろう。

「手伝いましょうか？」

「別にいいわ。これくらいの量なんて毎日やってるし」

新聞紙の量が100件分は入っていると思われる。

そう予測した僕だが、今後の事が面倒だから、ある人物に会っておくかな？

「明日菜さん、僕は行きますね」

「じゃあね、ネギ」

明日菜が嬉しそうに駆けだして行った。

何で明日菜さんは嬉しそうに……

それはどうでもいいか、あの人物の所へレッツゴー！

「??? の家前」

道は同じだった。

当り前だよ、自分の過去に来たんだからって事は、コレクション失くしたのは僕のせいか……

扉の前に立ち、トントンとドアをノックした。

こちらに駆けてくる足音がした。

扉が、ドアが開いたので見ると茶々丸さんだった。

「!?!? ……ネギ先生、何か御用ですか？」

「エヴァンジェリンさんにお話があるんですが……」

これからの事を思うと楽しく思い笑みを浮かべた。

茶々丸さんが頷くと、自分の主を起こしに行ったみたいだ。

さて、ここから始まるんだ。

まずは、呪いをどうにかしないと話にならない。

別に対抗できない敵がいるとかじゃない。

ただの気分の問題と僕の目的に反するからね。

ん? 来たみたいだ。

今の僕と同じくらい小さいエヴァンジェリン、いえマスターが来た。

こちらを睨みつけて何か言ってきた。

「何しに来たんだ？ ネギ先生」

「もうぼうやでいいよ。闇の福音さん」

「良いだろう。なら、ぼうや、何しに来た。」

私を倒しに来たのか？封印状態でも倒せるぞ」

自信満々で言われてしまった。さすがマスター

僕の魔力を感知できないほど脆くなってるんだね。

あまりにもマスターの魔力感知の弱さに涙が出る。

「何を泣いてるんだ？」

「いえ、僕の魔力を感知できないほど弱くなっちゃったんだね」

「何を言ってるんだ？ ふん、ぼうやごとき今すぐにでも」

茶々丸さんはマスターを止めていた。

「何をする！茶々丸」

「マスター、私の感知にはネギ先生の魔力が強大に膨れています。
今のマスターだと100%勝てません」

「ほう？」

興味がありそうな笑みを浮かべていた。

こんな時、嫌な予感しまくりなんだけど気にしない。

僕はマスターの後ろに回り込み、背中に魔力の塊をぶつけた。

マスターは僕が瞬動を使った事に驚いたが、魔力の塊の質量に驚愕していた。

痛みはないはずんだけど数日は絶対にかかるよ、これ……普通の魔法使いなら。

その後、魔力の塊がマスターの中に入り込むと、僕は居た場所に瞬

動した。

「何をした？」

マスターが睨んできた。

正直にその疑問をこう言った。

「呪いが掛かってるのは知ってますけど、それを解いておきました」
「何だと！？ 嘘を付け！」

「だって、24時間経過したら結界消滅するようにしただけだし」

ひそかに拗ねるような声色でマスターを責める。

マスターが申し訳なさそうに呟く。

「それはすまん……」

申し訳なさそうにしているエヴァを見て満足満足。

やっぱり24時間設定にしてよかったよ。

でも、やっぱり僕の計画には居るね。

と考えているとマスターがいきなり怒鳴りかけてきた。

「そんなわけがあるか！」

スパークが走っている魔法の矢10ぐらい飛んできた。

強力な矢にマスターは驚いている。

うんうん、ちょっとは戻ってきてるみたいだね。この魔法でよかっただね。

感心した後、飛んでくる矢を右から左へ勢いよく振ると魔法の矢が消滅した。

「いきなり何をするんですか？ エヴァンジェリンさん」

「何をやった？」

「だから、登校地獄などの呪いを莫大な魔力で消す呪い無効化ですね。

この魔法苦勞したんですから、小さい頃、父さんから聞いて禁断に入るレベルの魔法を教えてもらったんですから」

平気に嘘をつくネギ。

でも、信じられないよね、まさか僕が未来から来た逆行者の上、魔法を超越した超魔法戦士だって事は信じられないかも。

おまけに魔法超越者とも言うね。後者は魔法を超越したって意味ではない。

それは結構、後で分かる。

「今、何て言った？」

「ん？」

何のこと？

僕、また何かミスした？

自分のミスが無いかなまでの発言を思い出してみる。

そういえば……

「小さい頃、ナギに聞いただと？」

マスターから答えを聞いて、こう思った。

あ、しまった、うっかりしてた。

そう言えば、この頃のマスターはまだ生きている事を知らなかったんだっけ？

話を逸らすってのは無理だね。

僕は適当に誤魔化そうとした。

「あのですね？ エヴァンジェリンさん、父さんはえと……」

「まあいい、呪いが解けるんだ。あの馬鹿ナギを追うぞ」

「この学園から抜けるなら封印解除止めますが」

「な、なな……」

マスターは硬直しながら、こちらを見ていた。

やっぱり、怒ってるな。

これはこれで面白そうな展開になりそうだけど、

僕の計画ではあの世界に行く時も一緒に来てもらわないと戦力が足りないよ。

「それに今、この学園から出ても捕まるよ？ 一瞬にして」

「なぜだ？」

マスターが睨みつけてきた。

それで人を殺せるほどの睨みだ。

こんなの普通の子供とか見たら失神するに違いない。

幸い、僕は普通の子供でもなかった。

だから、明るく返答をする。

「僕が封印解除を止めたらいんです」

「何だと！？ どういう意味だ！……まさか、このやり方は」

マスターも気づいたみたいです。

僕が封印解除としてかけたのは制御。

つまり、僕の気分で封印を解除と開始が始まるのです。

その人にとっては、かなりの迷惑でしかない最悪な呪文。

「当たりですよ？ 僕の気分で変えられるんです。つまりですね…

…そういう事です」

「わ、わかった。……完全に戻ったら覚えておけ」

最後の部分は何を言っているのかわからなかったけど、まあいつか。これで、ほぼ目的はクリアしたも当然。後は、僕の事について聞いておくかな？

「そういえば、僕の実力とか調べないの？」

「あ、ああ……全力出せる日は、茶々丸」

マスターが茶々丸さんに聞いていた。

ほとんど茶々丸さん任せは変わらないんだね。マスターって一人だと何もできない子なの？

勝手な事を思考して可哀相な目でマスターをチラッと見て逸らす。考えていると、茶々丸さんがその日を答える。

「停電の日です」

「停電の日……3年になってからか」

「停電の日って何ですか？」

僕もこれにはよくわからないんだよ。

前に誰かに聞いたような気がしたけど、誰だっけ？

過去の事は覚えている自信はあるように思った。

どうでもいい事が全然覚えていないんだね。

つまり、ネギにとっては、

封印解除のエヴァと初戦闘がどうでもいい事と認識している事になる。

「1年に2回だけ行われる大規模の停電です。これはメンテナンスが理由とされています」

茶々丸さんが大筋だけ教えてくれた。

詳しく説明されても困るのでどうしようかと思った。

というよりも年に2回あったっけ？

並行世界やら異世界に行ってたので忘れてしまった。

「その時だけだったんですね。でも、僕が来なければ永遠にここにいたんですよね？」

「その時はじじいを……」

うわ、危ない事を言ってます。さすがマスター。

僕も気にはなっていた。

もし、僕が10歳で卒業しなければ、どうなっていたのか？

想像はできるけど、僕は潜在能力と頭が良いから木乃香さんを除くと、

トップクラスらしいのでありえない。

その考えをどうでもよく捨てて話を進める。

「3年のその時まで何もないって思ってもいいんですね」

「私が誰も血を吸わなかったらな」

ああ、まき絵さんがマスターに血を吸われた時の事。

あの後、のどかさんが襲われ、

裸になっている所を木乃香さんが僕の事を吸血鬼と呼ぶアレか……。それはないだろう。すでに木乃香さんは僕のパートナーだし、只のだけど。

「その場合も解除をやめますよ？ せっかく、解除するんですから血は必要がないでしょ？」

「わ、わかった」

僕は悪魔の笑みでマスターを見ると、青ざめたマスターがコクコクと縦に頷いた。

僕ってそんなに怖かったのかな？

違うか、解除できなくなるのが嫌なんだ。

完全に解くのは対決後だから、それまではフフフ……。

エヴァでどうやって遊ぶか楽しみで想像していたが、

「ネギ先生？」

茶々丸さんの声で我に返る。

そういえば、茶々丸さんと仮契約したのっていつだったけ？

現在から、かなり歪んでるからあるのかな。

「ごめんなさい。そういえば、今は何時ですか？」

「今は7時ぐらいです」

「そんなに時間が経ってたんですね。僕はこれで失礼します」

僕は木乃香さんの朝食を食べるためにマスターが、よく使ってた影のゲートを広げて潜る。

マスターが驚きながらも「おいこら！」とか叫んでいたが、この場から去った。

next 第4話へ

第4話『ネギの暗躍と変異』

「ネギの部屋」

エヴァンジェリンさん……マスターの家から転移した。

木乃香さんが朝食を調理している。

目玉焼きにシヤケ、味噌汁が準備されていた。

そういえば、ちゃんとした食事は何年ぶりかな。

なんたって、誰もいなかったし、魔法世界は消滅していた。

どれぐらいの核を発射したのかわからないほどぶつけたらしい。

勝利したのは誰だろうか？　僕は傍観していたから興味すらないし、アスナ達が寿命でこの世を去ってから始まった戦争だから助ける気もなかった。

「ネギくん、明日菜、出来たで」

木乃香さんの声に反応して明日菜さんがベットから降りてくる。

明日菜さんのベットは木乃香さんと2段ベットになってる。

上が明日菜さん、下が木乃香さんって感じかな？

「おはようございます。明日菜さん」

「おはよって今朝、会ったじゃない」

「改めてです」

「でも、何処に行ってたの？」

「内緒です」

明日菜さんは僕の居場所を聞いてきた。
さりげなく伏せた。

木乃香さんがテーブルの上に料理を持ってくる。
僕は青いソファに座り、料理の匂いを嗅いでいた。

「ネギくん、おじいちゃんの所、寄るんやろ？」

「はい。お風呂の事と後、例の件について」

「例の件？」

「向こうで話す内容ですから、それは伏せます」

マスターの事を言って置かないといけない。

僕が狙われるのは別に構わない。

どうせ、マスター級レベル以上じゃないと大したダメージにもならない。

「ウチも行くから」

「木乃香、やっぱり提案するの？」

「だって、ネギ君のパートナーやん」

この会話、うん。絶対に何かあるぞ？

まさか、魔法の事？

そう推測した僕は木乃香さんに聞いてみる。

「何を提案するんですか？」

「魔法知ってる事をおじいちゃんに言うんよ？」

木乃香さんが嬉しそうにそう言った。

ええ？ いきなりですか……

仕方がない。僕が教えた方が早そうだ。

「木乃香さん、僕が教えましょうか？」

「いいん？」

「構いませんよ」

知ったら知ったで、後が面倒なんだ。

明日菜さんは味噌汁を飲んで会話を聞いていた。

話に入ってこないんだ……明日菜さん。と思われたが、

明日菜さんから話しかけられた。

「ねえ、ネギ」

「何ですか？」

「私も魔法習得できない？」

「え？」

明日菜さんは才能があります。

魔法無効化がある上、魔力と気の同化も使えるようになってた。

今でも使えるんじゃないの？

小さい頃に使ってたって未来の明日菜さんが言ってたし。

結論を出そうか、今から習わしたら面白そう。

「別に構いませんが、誰にも内密にしてもらえますか？」

「魔法って秘匿やもんな」

「そうね。関わるんなら、それなりの覚悟がなきゃ」

……え？明日菜さんの言葉に何か違和感を感じる。

まるで、これからの事を知ってるかのようにってまさかね。

明日菜さんがそんな訳ないよね。

「ウチの魔力ってどれぐらい何？」

「潜在能力は明日菜さんよりも上ですよ。

運動が得意な分、明日菜さんの方が強いかと」

あの身体能力って明日菜さんの体力みたい。

耳も良くて目も良いぐらいだから、上級どころじゃないかも。

木乃香さんの魔力は父さんより高いからなく。

僕は味噌汁を飲み干して手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまでした」

木乃香さんが笑顔になって言ってくれた。

笑顔で言った後、台所に向かった。

明日菜さんもごちそうさま。と立ち上がる。

「明日菜さん、行くんですか？」

「一応、着替えなきゃね」

明日菜さんの服装が私服だった。

やっぱり違うや。

新聞配達の時、制服で配達をしていた。

明日菜さんが服を脱ごうとしたから、僕は慌てて明日菜さんを止める。

「ちょっと待ってください！」

「別に良いわよ……」

どうでも良い様に呟き、着替えを始めた。

僕がいる事を気にしないって僕は10歳のガキか。

それを思い出した僕は木乃香さんの手伝いをすることにした。

「木乃香さん、手伝いましょうか？」

僕は食器を洗っている木乃香さんに話しかける。

「んゝ、じゃあ、洗った後の食器を拭いて直してくれる？」

「わかりました」

作業中に木乃香さんとこんな会話をしていた。

「ネギくん」

「何ですか？」

「ウチが魔法を使えるようになったら、ネギ君の助けになれるかなゝ」

「どうして僕のか？」

「ネギくん、まだ子供やん」

ああ、そういう意味か。

無理もないなゝ。

今の僕は10歳だから木乃香さんの母性本能が働いてるのか。

「そうですね……」

「別に拗ねんでもええやん」

「拗ねてません。ただ」

「ただ……？」

「それだけで魔法に関わると痛い目を見ますよ？」

「ウチな、親友がおんねん」

刹那さんの事か…

「せっちゃんがなあ、ウチが話しかけても避けられてるんよ。ウチ、嫌われるような事したんかなゝって」

「それで？」

「だから、せっちゃんは今を護ってくれてる事を偶然知ったんや」
「そうなんですか……」

うわあ、全然違う展開になってる。

刹那さんが護衛という役目のせいで仲がおかしくなってる。
それに、あの事は知ってるのかなあ。

「木乃香さん、そのせっちゃんって人が隠している事に関係があるんじゃないですか？」

「……翼」

「え？」

「せっちゃんの背中に白い翼がある夢見たんや。大きな化け物がいて、

変な女性に攫われて、せっちゃんがウチを助けようとする。

捕われたウチは、ただ気持ち良くなってるだけや……」

気持ち良くの部分で赤くなった木乃香さんを見て、ちょっとだけ分かった事がある。

大きな化け物、変な女性に攫われる。これは……

どうしてそんな夢を見るの？

まさか、明日菜さんもそんな似たような夢を……見・て・い・た？
確信はないけど、多分、そう言う事だと思う。

「大丈夫ですよ。あと数カ月で修学旅行があるじゃないですか。
その時、仲直りになるチャンスです。僕も協力しますから」
「ネギくん……ありがとう」

木乃香さんは全ての食器を洗い終わって拭いていく。

「そのせっちゃんのためにも強くなりたいたいんですね」

「そうや……」

「友達思いなんですね」

「せっちゃんだけやない。明日菜だってクラスメートの皆も、もちろん、ネギくんも」

最後だけ頬を染めて言ってくれた。

木乃香さんの言葉に僕も赤くなってしまった。

さすがに、まっすぐ言われると照れる。

「とりあえず、魔法の訓練はこの部屋でしましょうか」

「ここでできるん？ せまいよ？」

「マジックアイテムを今日、入手しておきますから、それで」

「もしかして、ここを広くするアイテムなん？」

「いえ、水晶の中にある場所に入れるアイテムです」

マスターでも使っていた別荘だ。

あの別荘のコピーを作って全く別の修行場にしようと思う。

マジックアイテムの複製なんて簡単だからお金何てってあれ？

僕ってお金持ってたっけ？

ここに来る前は人がいないから我慢してた。

木乃香さんが僕の手を両手で持って呼んでいた。

「ネギくん」

「何ですか？」

「ウチ、補助魔法と後方からの魔法もほしい。前はウチじゃ無理やし」

「その辺は明日菜さんの方が良いですね」

「体力馬鹿やもんな〜」

悪気が無い笑顔で僕の手をぎゅっと握る。
どうして握るの？ さすがに色々困るんだけど……。
すると、何処から聞こえていたのか、
こちらに来て木乃香さんへ反論する。

「誰が体力馬鹿よ！」

「明日菜、ウチがローラースケートで走っても、追いつけるやん」
「反論できないわ……」

地面に両手を付いて落ち込む明日菜さん。
木乃香さんが明日菜さんの頭を撫でていた。
この2人はすごく仲が良い。
こうして見ると、女の子同士でも通じって駄目じゃん！
僕の計画でそういう事は駄目すぎる。

「そろそろ、学園に行こう！」

落ち込んでいた明日菜さんが立ち上がり、僕と木乃香さんに言い放つ。

そう言えば、木乃香さんは、聞いてみるか。

「木乃香さん」

「どうかしたん？ ネギ君」

エプロンを脱いで折りたたむ木乃香さん。
こうして見ると、木乃香さんって主婦がすごく似合う。

「学園長に何か用事があるんじゃないあ」

「その事はもうええよ？」

「さっきのあれだけ？」

「そうやけど……」

僕の言葉に軽く頷いた。

本当にそれだけみたいだから、とりあえず安心する。

木乃香さんは鞆を持って準備完了とVサインする。

何時の間に準備をしていたんだか。

明日菜さんも既に完了済みのため、後は僕なんだけど

「僕が準備できてませんので、ちょっと待ってくださいますか？」

「早くして」

「別に急がんでも……」

下から木乃香さん、明日菜さん、僕という順で発言する。

とにかく、僕は右手を上げてクイツと人差し指を曲げる。

何もない空間から歪みが入り、鞆が出てきた。

その鞆が僕の方に向かってくる。

直線で向かってくる鞆を僕はキャッチする。

玄関にいる2人の方へ歩いて笑顔で2人に言う。

「いきましようか」

木乃香さんは「これが魔法なんや」と目がキラキラと輝かせていた。

明日菜さんの反応は少し違っていたが、気にせずこの部屋から出た。

ああ、非常識な現象に手間取っているんだね。

僕もその気持ちができるよ、多分……。

そんなこんなで、寮から走って電車に乗り、目的の駅に着いた。相変わらず、人が多い。

まだ8時だよ？ってああ、それが普通なのか。

僕は魔力を体に覆わせながら明日菜さんと木乃香さんに先に行くと伝える。

「先に行きますね」

「え？」

「ネギ君？」

僕は2人の言葉を見殺しして超光速のスピードで学園長室へ走った。あまりのスピードに反応できる人間はいなかった。

1秒も経たないうちに学園長室の前に着いた。

それでもスピードは抑えているんだよ。

抑えていないと、走っている時の衝撃波で周りに被害が出る。

被害どころじゃなくて学園そのものが壊れてなるからね。

僕は学園長室の部屋に入った。

（学園長室）

僕が入ると、マスターと学園長がいた。

何でいるの？と視線をマスターに向ける。

マスターはニヤツと嫌らしい笑みを浮かべていた。

こういう時のマスターは絶対に問題なんだよ！

今はどうでもいいか、学園長に例の件を話す。

「学園長、お風呂の事なんだけど、どうすればいいの？ 思いつきし女子寮だけだよ！」

「ネギ君は子供じゃから見放題じゃぞ？」

「……あのですね、僕も一人になりたい時があるんですが？」

顔をヒクヒクと痙攣させながら問い詰める。

学園長はうむと何か悩んでいるが、僕は魔力を1部開放する。

魔力が部屋全体に充満していく。

そのあまりの出力にマスターと学園長が慌てる。

「ちょっと待て！ ぼうや」

「そうじゃ、落ち着くんじゃ！」

「無詠唱の行使による魔法の矢8をぶつけましょうか？ 命の保証は全然ありませんが」

脅しかけるような態度で迫る僕を見て、

学園長がオロオロしながらも別案を立てる。

「ネギ君、そうじゃ！ マジックアイテムでお風呂を作ってみたらどうじゃ？」

学園長いや、こんなのは妖怪長でいいや。

その妖怪長の言葉に魔法の矢を消してアイテムの内容を聞く。

「そんなアイテムがあるんですか？ それってどんなのです？」

「……それはいいとして、うむ、エヴァよ、

あの水晶をネギ君に譲ってもらえんかのう？」

って無いんかい！

僕は妖怪長の言葉に呆れていた。

マスターは怒りの表情で学園長の机にバン！と叩いて否定する。

「誰がやるか！！」

「エヴァンジェリンさん、見せてくれますか？」

「ん？ 見せるだけなら……」

悩みに悩んで表情が歪んでいた。

あまりにも面倒くさそうなので、ここで提案する。

「僕がその水晶を持ってきましようか？」

マスターの返事を待たずに実力行使することにした。
話が一向に進まないからね。

僕はマスターの頭に手を置くと、マスターが騒いだ。

「何をする！」

しかし、僕の力に勝てずバタバタと抵抗するだけ。
まるで駄々っ子のようなだ。

そんなマスターを苦笑した後、こう呟く。

「エヴァンジェリンさんの家、水晶、持ち主転移」

そう呟くと、マスターの前に水晶が転移してきた。

僕はその水晶に魔法陣を貼り複製を開始した。

同じ構想をさせるためには1分はかかる。

別に時間をかけなくても完成できるが、使い捨てになるのが問題。
ずーっと使いたいなら1分は待たなくてはならないのが魔法複製の
欠点。

マスターの頭に置いている手を離し、右腕を真横に動かすと水晶が
生まれた。

「複製完了っと、お風呂に関してはネギ先生入浴中のお札を作って、

僕の休憩を邪魔したら、じゃない乱入してきたら罰を与えるなどいいですね」

「それはいいんじやが、どうやって複製したんじや？」

「魔法使いの見習いができるレベルじゃないぞ!!」

もうマスターも妖怪長もうるさいな。

複製なんて未来の魔法使いなら簡単なのに……。

そんな事を思いながら返事をする。

「まあ、色々と苦勞をしまして……それよりも、お風呂の件は任せましたよ？」

一応、魔法の罫を貼りますけど」

「うむう、了解じや」

「ぼうや」

「あ、それともう一つ、エヴァンジェリンさんの呪い解除しときました」

堂々と明るく問題なし!という表情で妖怪長に伝える。

その言葉に驚いて立ち上がった学園長がこう言った。

「なんじゃと!？」

「ぼうや!! いきなり何を」

「大丈夫ですよ、ほかの先生にはバレない方法を取ってますので一応、責任者だけには伝えておかないと駄目かと思ひまして」

僕は水晶を懷の中にしまい、魔法陣を空中に刻み込んだ。

魔法陣の面積が広くなり、とうとう見えなくなった。

これで、マスターの魔力が何時も弱い状態に誤認完了つと。

ネギが使った魔法陣は、特定の人物能力を誤認させる。

この魔法陣って効果切れるまで1年かかるんだけど大丈夫だよね。

「これでエヴァンジェリンさんの魔力は誤認させましたので安心して解放できますよ?」

「……」

「……」

2人とも沈黙している。

うーん、僕がやった事に呆れているのかな?

「ネギくん、ワシは見なかった事にするぞ?」

「別にかまいませんよ?」

「ぼうや、私の封印は何時解けるんだ?」

「え? 僕の気分ですが?」

すでに解ける状態であり、僕の気分により操作可能。
マスターが僕が来ているカッターシャツの襟を持ち、ぐらぐら揺らす。

「ふざけるな〜!! 私で遊ぶ気か!」

「はい!」

僕の明るい即答により、マスターが撃沈した。

ふう、こうやって遊んでいられるのも今のうちだから遊ぶんだ。

未来の出来事を考えて、エヴァを弄る計画を考えている。

明日菜さんたちの事も考えなきゃいけないし、大変だ。

「じゃあ、僕は授業の準備がありますので、これで失礼します」

「うむ、もう行ってよいぞ」

徹底的に聞かなかった事にしようとする妖怪長いや、学園長だった。

まあ、いいんだけどね……僕も知らない振りしてくれたら嬉しい。
僕はマスターに一つだけ聞きたい事を聞く。

「エヴァンジェリンさんは弟子が欲しいと思いませんか？」

「私は悪い魔法使いだぞ？　ありえん!!」

そんなに強く否定しなくてもいいのに……

ツンデレ度が高すぎるけど、本当は継承者がほしいんじゃないかな
。

勝手な考えを思いついた僕はマスターに申し出をする。

「数ヵ月後にある人を弟子にしてもらいたいですけどいいですか
？」

弟子という言葉聞いたマスターは嫌そうな表情になったが、
呪いの件もあって唸り悩んだ後、返答が来た。

「いいだろう。私は教室に行くぞ」

僕と学園長から背を向けてドアから出て行った。

これで、敵からしたら嫌な展開になればいいけど……。

相手からしたら迷惑な事を考えながら僕も授業の準備があるため、
ドアから学園長室を出て行く。

＼2－A教室＼

僕は英語の授業を皆に教えている最中だった。

そういえば、ここで明日菜さんの事が馬鹿にされるから指定するのはやめよう。

嫌われるのは嫌だからね。

「えーと、誰かに朗読してもらいましょうか」

そう言うと、皆が目を逸らし始めた。

委員長さんを見ると熱い視線を向けてくるため、見なかった事にした。

別の人、ああ……駄目だこりゃ。

「いないようなので、僕が言いますね」

僕の言葉に皆の雰囲気が柔らかくなった。

現金な子達だなあ。

そう思いながら読んでいくと、チャイムが鳴った。

キンコンカンコンって音なんだろう。

まあ、どうでもいいことは気にする事はない。

「今日の授業はおしまいです。ちゃんと予習してきてくださいね」

「「「はい」」」

皆が元気良く返事してきた。

これだと幼稚園だよ。

幼稚園でも通じる子もいるけど、例えば、双子とか。

そう考えながら、出ようとするが委員長がいつの間にか出口にいた。

「ネギ先生、私の別荘に来ませんか？」

「え？」

「私、ネギ先生と内密な関係になりたいんですの」

「それは困りますが、行くのはいいですよ？」

「本当ですか？ 今度の休日にもおいでになってください」
「わかりました」

了承したら、委員長さんが出口を開けてくれた。

了承しなかったら、どうなっていたやら……。

別に内密の関係になってもいいけど、この体では無理かも。
何が無理だというのだろうか。

僕は教室から出て行き、職員室へ向かう。

そして……

放課後になり、帰る途中で明日菜さんと木乃香さんに会った。

だるそうにしている明日菜さんと

そんな明日菜の様子に笑みを浮かべている木乃香さんを見て聞く。

「何かあったんですか？」

「別になんでもないわ」

「明日菜がな」

「待って、言わなくてもいいわよ！」

赤くなりながら、木乃香さんの口を慌てて塞ぐ明日菜さん。
やっぱり何か変だ。

今朝の話といい、明日菜さんの態度といい、
僕は明日菜さんに当てずっぽで言う。

「生理ですか？」

「違う！」

「授業中に恥ずかしい事をした？」

「それも違う！」

だんだん赤くなっている明日菜さんが否定していく。
だったら何だというの？

さらに思考を巡らせながら考える。

笑顔の木乃香さんが明日菜さんの手をどけて

「明日菜が夢を見たんやって」

「夢？」

「木乃香く！？」

「続きは部屋で話そうか」

木乃香さんが途中でやめた。

滅茶苦茶気になるじゃないですか。

部屋に戻れば話してくれるか……。

そう思ってあきらめた。

「じゃあ、行こ！」

木乃香さんが僕の手を握ってきて走った。

僕もつられるように走っていく。

「ちょっと待って、木乃香！！」

置いて行かれそうになる明日菜さんは慌てて僕達を追いかける。

帰り道、寄り道せずに寮の部屋まで戻った。

明日菜さんの夢話をさっそく聞くとしますか。

n
e
x
t

第5話へ

第5話『魔法の危険性』

（ネギの部屋）

明日菜さんの夢話を聞くためにワクワクしていた。

もし、僕の思った事が合っているなら、間違いなく的中する。
違うなら別にいい。

「ネギが出てきた夢よ」

「僕の？」

「ネギ君の？」

木乃香さんの言葉に頷く明日菜さん。

僕の夢？ もしかして、木乃香さんと同じような事なのかな？

推測に考えていたら、明日菜さんはちょっとだけ頬を赤く染めて言う。

「この夢って私が攫われて変なおじさんに恥ずかしい服を着せられるのよ」

「それってどんなおじさんなんですか？」

「確か……最初にへって言ってたわ」

「……そうですか」

やっぱり、おじさんってヘルマンかも知れない。
そんな状況になったのはそれしか覚えていない。

「ネギ？」

「ネギ君？」

2人にどうしたのかというような不安な表情で僕を呼ぶ。

僕は考えていた事を頭の奥にしまい、明日菜さんに話を続けさせる。

「いえ、続きをどうぞ」

「わかったわ。着せられると言っても気絶させられてるからしょーがないんだけど、

木乃香達も攫われ、何か水みたいな液体の中に閉じ込められてるの。

私は両手首と両足首に拘束するような道具で縛られてた。

その後、いきなり話が飛んでネギに……キスされるの」

最後の言葉に顔が赤くなる明日菜さんを見た後、考える。

ヘルマンの時の状況そのものだけど、小太郎いや、狼小僧がいないし、

助けた後は明日菜さんに近づいてもキスなんてしてない。

うーん、ますますわからなくなったぞ？

「それって只の夢やないん？」

「それはそうなんだけど、気になってね」

「どうしてですか？」

明日菜さんの言葉に気になった僕は問いかけてみた。

難しく表情を硬くした明日菜さんが答える。

「ネギが来る前も似たような夢を見たのよ」

「似たような？」

「その辺は覚えていないけど、髪型がネギに似てるぐらいしか覚えてない」

髪型が僕に？ 父さんがいるときの夢？

僕が来る前にその夢か……。意味はあるんだろうけど、

「そうですか、お話ありがとうございます」

「何か意味があるんやろうか？」

「あまり気にする必要はないですよ？ 夢ですから」

「そうね」

「そうやな！」

そう返事をした二人が明るくなっている。

そんな2人を見て、僕もその問題をどうでもいいランクにしておこう。

本当にそれでいいのか？ ネギ。と言われても気にしない。

今の僕は僕の目的に動くだけだ。

「そういえば、魔法を教えてくださいませんか？」

「それで、どこでするん？ アイテムがあるって」

「ああ、それはですね、これです」

懐のポケットから水晶を取り出した。

中には建物があり、森や砂漠や氷河があった。

それしか確認ができない。

「この水晶の中に入ってもらいます」

「どうやって入るの？」

「入り口用の常時展開したいんですけど、どこかないですか？」

マスターも地下にずーっと貼っていた。

何のために貼っているか聞いたなら「その方が便利だから」と答えて

くれた。

別にずっと貼らなくても良いけど、後が面倒とか。
木乃香さんはうーんと唸った後、何か閃いたのか僕に

「ネギくん、テーブルとかすん手伝ってくれへん？」

「いいですけど……えい！」

僕は木乃香さんの言われたテーブルを魔力の風だけで2Mぐらい浮かせた。

でも、こんなところに貼るのは無理な気が。

そう思っていると、木乃香さんが地面を10回ほど擦るとボタンが出てきた。

「これを押すと不思議な事に地下があるんや」

「ええええええええ！？」

「って何で、明日菜さんが驚いてるんですか？」

「私も知らなかったのよ!!」

明日菜さんだけが知らなかったのか。

地下の部屋ってどうやって作ってるんだ？

明らかに面積が違うだろうけど。

「どうやって地下なんて作れたのよ」

「魔法やろ？」

「あ、そういえば、そうとしか考えられないわね」

「それにこの部屋は元からウチが住む事になってたからおじいちゃんやろうな」

ああ、やっぱり、あの箒頭、妖怪長の仕業か。

前は無かったのになぜ？

自分の過去なのは確かなんだけど……。
自分の知らない裏事情などを知って戸惑っているネギだった。

「とりあえず、スイッチ押してみいへん？」

「駄目よ！」

楽しそうに言う木乃香さんを止めようとする明日菜さん。
どうせ、わかってるのに止める明日菜さんは心配性だなく。

「スイッチ押しますね」

ポチっとな！

すると、魔法陣とは違う模様がスイッチを中心に展開する。
そこから奥へ続く階段があった。
奥を見るとちゃんと部屋並みの領域があると把握できる。

「これなら大丈夫でしょうけど、どうせなら踏まないようにテーブルがほしいですね」

「いつでも入れるようにするんやろ？ それならいるもんなく」

「テーブルなんてもうないわよ？」

「僕が盗……買ってきますよ？」

「今、さりげなく聞いてはいけないような単語を聞いたような」

「気のせいですって！」

「じゃあ、今度の休みに買物行こ」

今度の休み？

委員長の別荘に行く約束がある。
だぶってしまふからまずい。

「あの、木乃香さん、今度の休みに委員長さんの所に行く予定なの

で」

「ああ！　そうや、委員長に貰えばいいんや！」

「それ、いいわね！」

どうやら、木乃香さんも明日菜さんも行く気満々のようだ。
それもテーブルを貰うだけの用事ってどこまで歪んでるんですか？

「とりあえず、今はこの状態でやるしかないですね」

僕は地面に水晶を置き、魔法陣を描く。

魔法陣の色が緑に輝いた。

明日菜さんが魔法陣をじーっと眺める。

「こうして見ると、魔法って便利よね」

「回復もできるんやろ？　どうして皆に教えへんのかな」

明日菜さんと木乃香さんの疑問もわかる。

しかし、それを知ったから戦争が起こったと思う。

魔法は確かに便利だけど悪用する連中も世の中にいるから教えないんだと思う。

「魔法は便利ですが、犯罪に使われる恐れもあります」

「だからか」

「そういう規制がある影響って訳ね」

木乃香さんと明日菜さんが僕の言葉に頷いた。

それはそうと、水晶の調節をする。

調整中、水晶が光りだして中身が変わっていく。

その中身を覗く木乃香さんが僕に質問する。

「そういえば、この中って時間感覚とかどうなん？」

「確かに気になるわ。この中に入るって事は小さくなるって事ですよ？」

時間？ マスターのは1時間1日だけ……。

かなりうる覚えだから全然覚えていない。

再構成設定は完了しているから、後は時間だけ。

どれぐらいにしようか？

「どれぐらいがいいですか？ この元は24時間で外の時間が1時間程度です」

明日菜さんと木乃香さんが首を傾げる。

できるなら2倍にはしたい。

ネギ自身、今まで鍛えた修行時間が明らかに今の年齢を余裕で超えている。

それほど苦勞して強くなる必要があった。

ピースしてくる木乃香さんがこう言った。

「1時間に2日ぐらいでいいと思うんやけど」

「ああ、外の時間を忘れてしまうからそんなもんでしょ」

木乃香さんの言葉に賛同する明日菜さん。

外の時間の事を考える事を忘れていた。

でも、最初に考えていた時間と同じだったから

僕は木乃香さんの提案を実行する。

「外部60内部4800気象操作フリーダム設定、許可OK……」

魔法陣が赤く変わる。

綺麗やなく。と木乃香さんと優しい表情でそれを見ている明日菜さんがいた。

この設定魔法がえらく面倒過ぎる。

対象の効果を書き換える事もできるけど、時間がかかるから実戦向きとは言えない。

とか言いつつ、魔法陣の色が緑に戻り、魔法陣の中心に「end」と刻まれていた。

「よし、できました。入りましょうか」

「もう入れるん？」

「ええ」

「じゃあ、ネギくん！」

癖になつてゐるのか木乃香さんが僕の右手を握り、魔法陣を踏む。

魔法陣が発動し、その場にいる3人が水晶の中へ消えた。

（ネギの改変型時間の別荘（今後、ネギの別荘に省略））

僕と木乃香さんと明日菜さんがいた場所は木で出来ている家の前。あれ？ 転移場所ミスったか？

そんな事を思っていると、木乃香さんが周りを見回していた。

「すごい自然や」

「確かにすごいわ……」

圧倒されながらも眺めている明日菜さんだった。中の範囲も広くしたから、強い呪文でも大丈夫。

僕の魔法は、なぜか広範囲へ巻き込んでいくんだよ。それより、そろそろ魔法を教えなきゃいけない。

「明日菜さん、木乃香さん、魔法を教えますので見ててくださいね」

僕は杖を取りだそうとしたが、

あれ？ 無い、どこに……って思い出した。

明日菜さんの記憶を消そうとした場所に置きっぱなしだった。

「ちょっと待ってくださいね」

2人の反応を見ずに左腕を上に向けて「杖よ」と呟いた。杖がどこからやってきたのか飛んで僕の左腕の前に来た。

本当にどこから来たんだろうって前は不思議に思ってたけど今になってね。

「その杖ってネギ君が背負ってた杖やろ？」

「そうですよ」

「どっからやってきたん？」

やっぱり、気になっていたのか。

この杖、僕と相性が良すぎるんだ。

木乃香さんにこの杖の事を説明をする。

「僕とこの杖はリンクしてますから、何処にあらうと関係なく呼べば、

持ち主である僕の所に来るって所です」

「リンク？」

「そのままの意味です。この杖に僕の魔力を同調させてます」

その件について、おかしい事がある。

僕はこの杖に、同調させる行為すらやってもいない。

逆行してきた時に向こうにあった杖も一緒に流れてきたのか？

僕の魔力も一緒に流れるからその影響か？

そんな疑問を考えていると、木乃香さんが僕に迫った。

「ネギくん、魔法を教えて〜」

「わかりました」

未知の能力を身に付けられるのが嬉しいとはしゃぐ木乃香さんを見る。

もう習いたいという思いが伝わってきたのでそんな考えは無視する事にした。

「まずはお2人に杖を渡しますね」

30センチぐらいの杖を2人に渡す。

受け取った木乃香さんが杖を持って何か構えたりしていた。

一方、明日菜さんは恥ずかしそうに木乃香さんのマネをする。

明日菜さんの恥ずかしそうな所を見れるなんて思いもしなかった。

「簡単な呪文からやりますね」

と明日菜さんと木乃香さんは僕の話真剣に聞いていた。

その後、僕の説明に出た呪文を唱えて練習した。

「なかなか成功しないわね」

「明日菜、ウチはできるようになったで〜」

木乃香さんの言葉に明日菜さんが木乃香さんへ振り向くと、
木乃香さんの杖から火が出ているのを見た。
それを悔しくなり、やけくそで呪文を唱えると、火が噴出した。

「ええ!？　　って危ない」

明日菜さん、すごいな。

初級の呪文で火が1M以上噴いてた。まさに噴出だ。

その光景を見ていた木乃香さんも何回も繰り返して呪文を唱えた。

……色々省略して、別荘から一度出る事にした。

くネギの部屋く

現実時間でまだ2時間経過しかしていなかった。

地下から階段を上って元の部屋に着いた。

「これ、どうすんのよ……木乃香」

「スイッチを長押しすると閉じるんや」

「そうなんだ……」

疲れていた明日菜さんがスイッチを長く押し続けると、
地下への階段が閉じていき、そこには初めから何もなかった状態に
戻る。

ああ、こういう仕掛けだから誰にも気づかれないのか。
ネギは隠し地下の事をそう理解した。

明日菜さんと木乃香さんはあまりの疲れにソファ―に寝転んだ。
なぜそんなに疲れているのか？

寝ていないからに決まっている。

2時間〓4日間ずーっと修行していたからだ。

トイレやお風呂、食事、休憩時間以外は勉強や実践だった。

そのおかげで、今の明日菜さんや木乃香さんの実力がかなり上がった。

明日菜さんは気と魔力の同化を限界まで繰り返すと素振りなど。

木乃香さんは回復呪文を限界まで繰り返すと基本運動など。

繰り返しが多すぎて体に負担が大きいが、実力もかなり上がる。
これで、マスター戦や小太……狼小僧戦は楽になる。

フェイトは実力を知られたくないため、それは後で考える。

とにかく、今後の出来事を狂わせることができるのは確定された。

「明日菜さん、木乃香さん、大丈夫ですか？」

「何が大丈夫ですか、よ！ 問答無用にした張本人が言わないで」

「ネギくん、こんなに苦労せなあかんの？」

ぐったりモードになって、やる気が見えない2人を見る。

ふーん、あれでも軽めだよ？

マスター何かもつとひどかったくらいだしな。

よし、ここは、っと僕は2人に忠告してやる。

「じゃあ、やめますか？ やめるなら記憶を破壊しますが」

もちろん、そんな事をやる気はない。

記憶を破壊なんてだれが得すると言うのか？

「ウチは止めへん！」

「私もよ！ あの夢も現実になったら嫌よ！」

「僕とキスする事ですか？」

半分冗談、半分悪戯のつもりで聞いてみる。

明日菜さんの反応が違った。

「ち、違うわよ！ 別にキスはってそうじゃなくて、

あのおっさんに教わるのが嫌なの！」

「そうですか」

「明日菜、キスに関しては否定もせえへんな」

明日菜さんの方に近づいて問いかける木乃香さん。

問いかけられた明日菜さんが顔真っ赤にしながら言い訳をする。

「キ、キスなんて挨拶みたいなもんでしょ！

それに、木乃香だって攫われてるじゃない！」

「水牢の中にやろ？ 明日菜は変な服を着せられて恥ずかしいポーズやもん」

「はあ……」

明日菜さんと木乃香さんが言い争っている所を見て溜息を吐いた。

こんな調子で大丈夫なのか？ マスターの弟子にするのはどうしようかな。

これからの事を企むネギだった。

n
e
x
t

第6話へ
…。

第6話『学園長いやいや、妖怪長からの試練』（前書き）

原作で言うところと2巻当たりになります。

時間軸が明らかにおかしいのはネギの干渉という事に。

この話が短いのは申し訳ないですが、読んでくだされば光栄に思います。

第6話『学園長いやいや、妖怪長からの試練』

（ネギの部屋）

あれから、色々あったが眠りについて朝になった。
布団を畳んで下に降りた僕は赤いソファに座る。

「何か忘れているような気がするんだよ。何だっけ？」

ドッジボールはあまりどうでもいいかな？

あれから、会った事無いから別に無くて良いよ。
上級生を完全否定するネギ、あまりに酷いが。

「ふう……そういえば、今日は学園が休み」

後ろからいきなり抱きついてきた。

誰だ！と思い、後ろを向くと木乃香さんだった。
というか凄く抱きついてくる回数が多い。

前は、そんなに抱きついてくる事が無かったぞ？

「木乃香さん、いきなり何を……」

「ネギ君って抱き心地がすごく良いねんも」

ギュッと抱きしめる力が強くなる。

別に苦しくないんだけど、背中に当たってる。

「木乃香さん、当たってますって！」

「何が？……ネギ君、おませさんやな」

さらに、背中にマシユマロみたいな物が当たる。
みたいな物の中身は決して言っではいけないのだろうか？
アホらしくそう思っているネギは思考を巡らせていた。

「ネギ君、ウチとこういう事するん嫌？」

わざわざ上目遣いの体制になって聞いてきた。

やばいやばいやばい！！ 子供の体にはなってるけど中身は変わってないぞ！

このままだと……理性がってまだ中学生だぞ！

「木乃香さん、別に嫌じゃないですがもう少し変えてくれたら」

「抱き方？ こっちの方が抱き心地が気持ちいいやん」

変更を要求するが無駄に終わった。

先ほどの体制から前に切り替えて抱きしめる木乃香さん。

「仕方が無い……」

木乃香さんの抱擁から逃れる為に瞬動を利用するか。

残像する程度のスピードで抱擁を外して青いソファーに移る。
本当にヤバかった。特に理性が。

「もう、ネギ君のいけずやな」

「木乃香さんは僕の事で遊んでるんでしょ？」

「別に遊んだりしてるつもりはないんやけど？」

それでも一応、男の子として見てるぞ！って表情されても説得力が

無い。

いや、あつてたまるか！

明日菜さんの様子を見ようと上のベットを見ると布団だけだった。もぬけの殻だ。とか表示されるような雰囲気。

「明日菜さんがいないんですが」

「明日菜？ 明日菜ならネギ君が起きる前に出て行ったけど？」

「朝食は？」

「何かな、用事あるんやって。制服着て行つとるからな」
「え？」

でも、今日って休日なのに……。

木乃香さんも用事だけという事だけしか知らない。
何処に行ったんだろう。別に心配って訳でも無い。

「今日は休日やろ？ 何で制服着て行つたんやろう」
「そうですね」

明日菜さん、ドジった？

優雅に木乃香さんのお茶を飲んで和んでいたら、
足音がドタドタとさせながらこの部屋に入ってきて

「聞いて！ 木乃香、ネギ」

嬉しそうにしながら、こちらに来る明日菜さん
何だろう、この嫌な予感。

「何と！ 図書館の中に魔法の本があるんだって！」

やっぱり、って事はあの条件が来るのは今日なのか？

あの条件とは、2－Aのテスト合計順位をビリから上位にさせる試験。

「とりあえず、僕は行く所があるから行ってきますね」

「ええ！ ネギは気にならないの？」

よくそんな呑気になってアレは僕だけか……

前の状況を思い出したネギはテンションが最低になった。

明日菜さんが何か言ってるけど、スルーして転移魔法を使った。

〈学園長室〉

面倒くさいけどドアから入った。

ある意味、普通の事なんだけど僕の居た環境は人がいなかったし。

学園長は僕を見てニヤニヤと企んでそうな表情をしていた。

その企んでいそうな学園長が僕にこう言ってきた。

「ネギ君もそろそろ学園に慣れたじゃろ？ それで一つの試験をやるう」

「はい！？」

いらん！ 何で慣れたら試験を受けなきゃいけない！

突っ込み所が満載過ぎる。つい、間拔けな声が出た。

まず、入ってきた瞬間、言われた言葉がこれだぞ？

前と全然違うじゃないか、誰だ？ こんなに狂わしたのは……。

自分のせいなのに八つ当たりするネギ。

学園長がネギの態度を見ないフリしつつ、説明を続ける。

「実はのう、2－Aのクラスのテスト順位がビリなんじゃよ。そこで、ネギ君の出番じゃ！　ネギ君の力でビリから離脱させてほしい」

「この前の仕返しですか？」

マスターの件でどうしようもない出来事を僕がやったせい？　学園長はネギの言葉にビクンと反応して僕から目を逸らす。

「気のせいじゃ、それにもし、この試練をクリアすれば3－Aの担任はネギ君が担当できる！」

人差し指をこちらに向けて、どうじゃ。という表情されても……。ようするに、前とは違い仕返しになったただけなのか、ほう？　なら、こっちにも考えがある。

僕は魔女でもビビる様な笑顔になり、

「この事を、木乃香さんにOKなんですネ？」

ちよっただけ笑いを込めて言った。
すると、学園長の反応が変わり

「ちよっと待つんじゃ！　これは元からネギ君への条件じゃぞ？　決して。仕返しとかじゃないぞ？」

滅茶苦茶な事を言ってるけど、本音をボロっと出てるな……。これだと話が進まないから了承する事にするか。
僕は図書館島の事を思い浮かべた。

「わかりました。次、こう言う事したらわかりますね？」

魔力をこの部屋だけ感知できないように開放する。
スパークが走っていないだけありがたいと思いなさい。
完全に魔王化へチェンジするネギが笑みを浮かべた。

「わかった……。とりあえず、これを渡しておこう」

学園長が紙にペンで書いて僕に渡してきた。

僕はそれを受け取った。

そこに書かれていた事とは何か？

『ネギ君の正式教師の採用試験

担任クラスである2－Aのテスト順位をビリから離脱せよ！

順位がビリじゃなければ、正式な教師にしちゃうぞ！

ビリなら即クビじゃ 学園長より』

「何だ、これ……」

僕はそれを読み、小声で感想を述べる。

書き方が変わってないか？ 僕の気のせいだったりしないよね？

いちいち考えてると意味が無いから、それをポケットの中にしまった。

「用はそれだけですネ？」

「そうじゃ。ネギ君は何か用かのう？」

「別にありません。では……」

結局、学園長の思惑になったけど、逆に図書館島に入れる第1段階の手間が省けた。

図書館島に何かやるか、の考えを頭の中にしまい、
もう見られている影のゲートを使って、この場から去った。

くネギの部屋く

影のゲートを使って戻ってきたのはいいんだが、
木乃香さんの影を利用してしまったから、木乃香さんの前に出てきてしまった。

驚いて目を見開いていた木乃香さんだが、いきなりおなじみの行動をされた。

真正面だから近くにマッシュじゃなくて！ 顔も近いし……。

「こ、木乃香さん！？」

「ネギ君からきたやん」

「いや、これは影のゲートを使ったからで！」

言い訳をするも無駄な行動に過ぎなかった。

すると、いつの間にか帰ってきていた明日菜さんが僕と木乃香さんを見て

「あんたら！ 何やってんのよ！」

って魔力と気の同化なんて使うな！

木乃香さんも退く気配がしない。

木乃香さんが明日菜さんに水を注ぐ。

「ヤキモチ焼くくらいなら、明日菜もやればええやん」

「な、何を言ってるのよ！って何か落ちてる」

いきなり同化をやめて下を見る明日菜さん。

何だろうと思い、明日菜さんの視線を辿ると、

学園長からの試練が書いている紙だった。
それを明日菜さんが拾って紙の中身を読んだ。

「なんて書いてあるの？ ネギ君の正式教師の採用試験
担任クラスである2-Aのテスト順位をビリから離脱せよ！
順位がビリじゃなければ、正式な教師にしちゃうぞ！
ビリなら即クビじゃ 学園長よりって何よ、これ！！」

大声で叫んでいた明日菜さんだが、木乃香さんの反応はというと、

「ふーん、おじいちゃんがこんな事をネギ君にさせるんや……」

明日菜さんと違って静かなんだが、表情が笑顔なのが怖い！

あー、もう面倒の雰囲気になったな！

僕は明日菜さんと木乃香さんにこう言った。

「今から図書館島に行きましょう。成績が悪い人を集めてきてくれ
ませんか？」

「何で図書館島なん？」

「ネギ……」

木乃香さんが疑問に思い、明日菜さんが心配そうな表情になっていた。

図書館島で勉強すれば、同じ結果に出るだろうと甘い考えを出す。
僕の真剣な表情に、明日菜さんと木乃香さんが頷いた。

「わかったわ。とりあえず、集まったら連絡するわ」
「ウチもハルナとのどかと呼んでこな」

明日菜さんと木乃香さんがこの部屋から出て行った。

出て言った後のドアを見つめる。

「これで、ある程度の事が出来るはず……」

図書館島のあの地下には利用できる魔法の本があったはず」

あの地下とは、ゴーレムから叩き落とされ、落とされた場所の事。
水で濡れているはずの本が濡れていない魔法と明らかにわかるあの場所。

以前、あそこで見つけた魔法の本の中に計画に必要な本があった。

「これでまた一つ、僕の計画が進んでいる訳か」

ニヤッと笑みを浮かべた僕は様子を見にこの部屋から出た。

n e x t 第7話へ

第6話『学園長いやいや、妖怪長からの試練』（後書き）

次は展開通りだと図書館島です。

ネギの計画は順調？に遂行中。中身は全く何が何だかわからないけど。

第7話『図書館島・上』（前書き）

上下と別れています。

今回、オリジナル魔法があります。

かなり省略してるので話の展開がわかりづらいかも……。

第7話『図書館島・上』

くコンビニく

様子を見る前にコンビニに寄る。

「えくと、おにぎりだけでいいか」

100円おにぎりを50個ぐらいかごに入れる。

これでも少ない方だからまだいるかな？

さらに、20個追加した。

「こんなものかな？ やっぱり部屋に戻らないといけないか」

僕は70個のおにぎり分の金額をレジで支払った。

「ありがとうございました」

コンビニから出て、寮の部屋に戻る。

くネギの部屋く

僕はおにぎりが入っている袋ごと圧縮させる。

袋が圧縮していき、最後には手のひらサイズのボール状になる。

「これでよし」

一応、未来の魔法なので誰にも見られる訳にはいかない。

人でも圧縮できるので危ない。
ボール状になった袋をポケットの中に入れて図書館の前まで向かう
事にした。

（図書館前）

僕がここに着いた時、木乃香さんやのどかさん達がいた。
のどかさんとかは歓迎会の時に話した。（話してる所は省略だけど）
惚れ薬の事件も起きなかったしね。

「ネギ、これで全員そろったわ」

「ネギ先生」

夕映さんが僕の方に話しかけてきた。

「今から私たちは図書館の未知の領域に行きます」

「そこで魔法の本を手に入れるのです」

僕の目的と一致しているけど、
あの本は手に入れる意味が無い。

「行ってもいいですが、魔法の本ってあるんですか？」

「情報自体が怪しいやん」

そう聞いた夕映さんの目が光った。
凄くキャラが変わっている所を見ると、夕映さんじゃない。

「実際に見た人がいるのです。その人から聞いたから確実です」

「信頼できる人なの？」

明日菜さんの言う通り、信頼できて情報が確定できる人物でなきゃわからない。

実際に見たって……あの罫をどうやって潜り抜けたのかも聞きたい。ゴーレムも多分、動いていない。まったく、いくら図書館でもセキュリティが薄すぎる。

「連絡係と直行する係を決めよう」

ハルナさんがそう言っていた。

ああ、確かのだかさんと木乃香さんとハルナさんがそうだった？
ゴーレム対策としてちょっとだけ悪戯するか。
考えた僕は木乃香さんを見て提案をする。

「6人で行きましょう」

「ウチも？」

「はい」

（修行の成果をね……）

（あ、そうなんや）

念話で会話をする木乃香さんと僕。

そんな様子に気づいた明日菜さんが「なるほど…」と呟いた。

（念話で話してたの？）

乱入してきた明日菜さんに笑みを浮かべる。

木乃香さんも同様に笑っていた。

（そうや）

（木乃香も行くって事は何かあるの？）

（それは後のお楽しみで）

（（わかりました））

二人が同調したように答えて念話を切断した。

「図書館島で誰も気づかないなんて能天気すぎますね」

「何の事よ」

「明日菜さんは気付かないんですか？　どうして学園にこんなものがあるのか」

疑問になっていた。

こんなに不自然すぎる図書館なんて普通じゃない。

明らかに怪しすぎる。

魔法を隠す気があるのか？　と思った。

「うわ……踏み場が本棚ってきついわ」

「そうやな……」

「とにかく行くでござるよ」

「魔法の本を探しに」

「レッツゴーです」

というわけで、中に入ったわけだが。

最初、僕も驚いた。

本棚で道が繋がっている事に。

下を見ると落ちたらヤバイ様な深さがあった。

「底なし沼の様ですね」

「落ちたら一巻の終わりです」

「死人出るような図書館は初めてです」

「ネギ君ってば怖がり？」

まき絵さんに言われてしまった。

別に僕はそういう意味で言ってるわけじゃないのに。
魔法も使えるからビビる事が無い。

本棚の上をあるいて行き、次のフロアに着いた。
そこで休憩している。

「ほう？」

「すごいな」

木乃香さん、あなたは知ってるはずじゃないんですか？
別の事で驚いているみたいだ。
木乃香さんの読んでいる本を横から覗く。

「これって？」

「魔法の本ですね。まあ、僕の探してる物とは違いますが」
「ネギくんの探してる本って何なん？」

あ……うっかり口が滑った。

別に知られてもいいけど後が問題だ。

どうせ、学園長は僕たちの事を見てるはず、声までは知らんだろう？

「明日菜さん」

「何？」

「僕は別ルートに行きます」

「別ルートって？」

「あるじゃないですか、普通の人ではできないルートが」

僕の笑みにビクンと反応した明日菜が声を上げる。

まさか……と呟く明日菜さんの言葉の続きを想像して笑みを浮かべる。

「飛び降りる気？」

「はい。面倒くさいじゃないですか」

「魔法は極秘なんじゃなかったの？」

明日菜さんの言葉を無視して先ほどのフロアに行こうとすると、いきなり夕映さんに止められた。

「何処へ行くのですか？ ネギ先生」

「ちょっと忘れ物を……」

「忘れ物？」

「はい」

夕映さんの隙を狙って瞬動を使い、この場から離れた。

その際、明日菜さんのポケットの中に居場所が分かるパーツを入れていた。

僕は先ほどのフロアに戻り、底が見えない空間に飛び込んだ。

飛び込んだ勢いで加速して行く。

「どこまで落ちるの？」

数秒落ちていくと、最深部まで落ちて行った。

地面に衝突する寸前に空中に浮いた。

あの場所からここまで繋がっているとはね。

僕は懐かしい光景に目を奪われていた。

「懐かしいけど……目的の本を探さなきゃ」

僕は明日菜さん達が来る前に本を回収しなきゃいけなかった。前に調べた本棚の前に立ち、目的の本を探す。

「確か、これか？」

本の題名にはこう記されていた。

『アヴァロン』と。

その本を持ちだして座れる場所に待機していた。

「明日菜さん達はまだ来ないかな」

アヴァロンと記されたタイトルのページを開く。

そのページにはこう書かれていた。

『大切な人を守りたい者よ、ここに記された全ての道具を集め、呪文を唱えると良き事が起こる』

何かが起こるってことは知ってるけど、その出来事があり得ない事になってしまった。

その出来事を語る気はないというかいまいち覚えが無い。

僕はこの本のページをパラパラと捲って最後まで行くと首を傾げた。疑問になったが、見落としているかもしれないと思い、

再度、全ページを見るが、何もなかった。

「呪文って何？ 道具って言うか武器だよ」

そこに書かれている道具の種類が異常なものだった。

聖なる剣、聖なる槍、聖なる盾、聖なる鞘、聖なる鎖、聖なる魔力。

「でも、聖なる魔力って何？ 光属性の魔法なの？」

書いてある事がいまいち過ぎて、よくわからなかった。

これを再現したのは知ってるし見たことがあるけど内容は全然覚えてない。

アスナ達が生きている時に起こった事だから当り前か…。

「すると、5つの聖属性の武器があればいいのか」

そう考えるのが妥当だろう。

これがあると、あの巨大な化け物も簡単に消せる。

それほどの効果だと本に記されている。

「聖属性の魔法は一部の人間しかこの時代ではできない。

未来ならいっぱいいるんだけど、どうしようもないか」

未来と言っても今から150年後の話なのであまり意味が無い。

アスナ達が生きているという事は、一部の人間は存在する事になる。その人物さえ忘れているのだから意味が無い。

予定が滅茶苦茶になっていくネギだった。

「結局は振り出しに戻るんだね」

ネギは結論を出して本を圧縮。圧縮した本をポケットの中に入れる。パジャマ姿でも無いから今回は楽すぎる。

呑気な事を考えていると、上から悲鳴が聞こえた。

悲鳴……？ まさか。

僕は立ち上がり、杖を前に出して魔法陣を大きく展開させた。
上から落ちてきた。

落ちてきた明日菜さん達を魔法陣で衝撃を和らげた。
和らげてても気絶はするみたい。だから全員が気絶した。

「ゴーレムの反応があるが、挨拶に行ってみようか」

ゴーレムが前と違って下に降りてきていない。

僕は気絶している明日菜さんを放置して、落ちてきた場所から飛ぶ。

「魔法の本部屋」

簡単に言えば、そういう部屋だ。

向かい合っている石像があり、真ん中の場所にあるのが、目的の本
だった。

それが目的なのは僕じゃないけどね。

クスッと笑う僕はいつの間にか後ろにいたゴーレムの前に浮く。

「学園長、何をしてるんですか？」

「ふお？　ワシは学園長じゃないぞい？」

惚ける学園長にニヤツと攻撃的な表情になる。

じゃあ、問答無用でいいよね？

そう考えた僕は魔法の矢10をゴーレムに撃つ。

「ふお！？」

急に驚いてかわそうとしている。
僕の気分が優れるまで行きますかとテンションを上げる。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 土より作られし全ての物質よ、

元の土へと戻らん。 原子崩壊」

「ちょっと待つんじゃ！」

何かほざいているが、僕は容赦なく実行しようとする。

ネギの杖先からレーザー砲みたいな音を出して発射した。

くくく、久しぶりなんだから憂さ晴らしにぶっ飛ばす！

ネギという人物の欠片すらないようなセリフを吐く。

どちらかと言うとナギに近い感じだが……。

「逃げるのじゃ！」

負けセリフを吐くゴーレムが後ろに背を向けて逃げ出すが、

ネギの撃った原子崩壊が直撃する。

直撃したゴーレムに異変が起こり、さらさらと下半身から砂の様に消えていった。

逃げるのじゃって思わず笑いかけたよ。

「何だ……もう終わりなの？ まあいつか、明日菜さん達が目覚める頃だから戻ろう」

僕は飛んできた所へ飛び降りた。

飛び降りて到着した最深部の地面に寝転がり全員の目覚めを待つことにした。

「ストレス解消にもならなかったな……」

あまりにも解消できなかった不満を後でどうにかしようと考えた後、眠った。

明日菜達はネギが眠った後の2時間後に目覚める事になる。

n e x t 第8話へ

第7話『図書館島・上』(後書き)

評価などお願いします。

原子崩壊はネギの言う未来の魔法です。

第8話『図書館島・下』（前書き）

とりあえず、公開します。日曜日公開していいので。
抜けている部分もあると思いますので、もしあれば修正します。
なければ、このままと言う事です。

第8話『図書館島・下』

〽図書館島・最深部〽

眠っている僕は体を揺らされた。

何だよ、僕を起こすなんて自殺行為だな……。魔力を高めているが、僕を起こす者が慌てた。

「ちょっと待って！」

この声は……明日菜さんかな？

僕は目を開いた。

開いた先には明日菜さんの顔がドアップだ。

「あ、明日菜さん」

「い、いきなり目を覚まさないで！」

「起きろって言ったの明日菜さんじゃないですか」

明日菜さんは僕の言葉に反論できずに落ち込む。

何で落ち込むんだ？

それはそれとして、ほかの人はどこへ？

「明日菜さん、ほかの人は？」

「木乃香達ならあそこ」

明日菜さんが指を差した場所に教室みたいな環境がってたか。何であるんだ？ 学園長が仕組んだ可能性が高いな。教科書もあるけど……どうでもいいか。

「そういえば、汚れてますよ？」
「ええ!？」

僕が指摘した事で明日菜さんが服やスカートなどを見る。
ちよつと待て、スカートの中まで見る事ないって。

スカートの中身はピンクだった。
その言葉を思わず口にする。

「ピンク色ですか」
「な、な！」

僕の目の前と気付かずに見られていた明日菜さんが赤くなり、
スカートでピンク色の下着を慌てて隠す。
本当に何やってんだか……。

「とりあえず、勉強はしておかないと駄目ですよ？」
「うん」

僕と明日菜さんは木乃香さん達がいる所へ向かった。

木乃香さん達は寛いでいた。

「皆、何をしてるんですか？ 明日はテストですから勉強でもしま
しょうか」

「ネギ君、それはひどいんじゃないかな」

「ワタシもやる気が出ないアル」

「拙者もでござる」

「あははは……」

バカレンジャーの態度にむかつと来た。
あはは、仕方が無い。

「点数が悪い人には春休みを全て補習にしましょう」

「「「「ええ!？」」「」」」」

「そんなのひどいよ! って担任先生がそんなことできる訳が」

「大丈夫ですよ。学園長には拷いえ、よく言っておきますから」

残酷な事を言いそうになった僕は言い直して皆に聞かせる。

木乃香さんはため息を吐いているが、念話で話す。

(木乃香さんですよ? メニューを倍に)

(それはやめてほしいんやけど……)

木乃香さんを見ると顔が青ざめていた。

皆、良い反応だね。よし、先生っぽくなってきたぞ!

黒板があつたから、そこまで歩いた。

「授業をしましょうか」

「その前に食料探しをする必要がありますよ?」

夕映さんの言う通りかも知れないが、よし!

「そんな事もあるのかと、おにぎりを持ってきてるんです」

僕は左ポケットの中から小さな丸い袋を出す。

その袋を地面に落とすと、70個のおにぎりがあった。

その現象を見てまき絵さんが変な事を言った。

「これってポイポイカプム……」
「その続きはあかん！」

途中で木乃香さんが口を塞ぐ。

口を塞いだ理由って何？と夕映さんに目を向けると、

「漫画にあるネタですよ」

何にも言っていないのに説明をしてくれた。

「すごいあるな」

「さすがネギ先生でござる」

「そうですか？」

明日菜さんが僕の腕を掴んで皆から少し距離を置く。

「大丈夫なの？」

「何がですか？」

「これって魔法でしょ？」

「そうですね、大丈夫ですよ？」

その気になれば記憶を改竄するくらい訳がありません」

だから、心配しないでください。

そう言う事を含めての表情で表わす。

明日菜さんが何か呆れていた。

もう慣れたのかな……。とか言いながら、ネギも慣れている。

「それよりも気付いてますか？ ゴーレムがこの辺にいますよ？」
「何ですって!？」

「ある時間になればすぐにわかると思います」
「ある時間って？」

ポカンとしてる明日菜さんにゴーレムの正体を一部だけ明かした。
それを聞いた明日菜さんが呆れて手を頭に添える。

「木乃香が聞いたら怒りそうね」

「今は駄目ですよ？　僕が木乃香さんに魔法を教えていることがばれちゃいます」

「どうしてばれちゃいけないの？」

その気持ちはよくわかります。

親の方針ってどんなんだよ、その影響で刹那さんとの仲がおかしくなる。

これはネギの見方だが、大筋は合っている。多分……

「いろいろ事情があるから」

「そういうことね」

今の明日菜さんは木乃香さんの実家を知ってるのか？
知ってるような表情している。

どこまでこの世界は歪んでいるんだ？

そんな事は隅っこに置いという皆の所に戻る。

戻ったら、おにぎりした後15個ぐらいしかなかった。
55個もないってどんなんだ？

「僕たちの分も残してくださいよ」

「ごめんね、お腹空かしてたから、どうしても」

「一番食べたのってクーちゃんだよ？」

「へえ」

食った犯人を僕は制裁するために魔力を開放する。
人前？ 何それ……食い物の恨みは晴らす。

「クーフエイさん、反省してくださいね」

魔法の矢を作ろうとしたその時、後ろから木乃香さんが抱きついてきた。

後ろからなので、背中に密着しているこの感触が……。

駄目だ、完全に怒りが消えていく。

木乃香さんが僕の耳元でこう言った。

「ネギ君、駄目」

「でも、僕のおにぎりが」

「しゃくなく、テストが終わったら二人でデートせえへん？」

ここですか！？ 確か、明日菜さんの誕生日で誘われるはずのアレが
だが、時期が全然違うし、どうなって……
抱き付く木乃香さんがさらに言葉を続ける。

「聞きたい事とやりたい事があるから」

と言って、木乃香さんが離れた。

その言葉が気になるけど、今を考えよう。
冷静になったネギは全員にこう告げる。

「今から勉強してビリから抜けましょう！
そうすれば、僕も3-Aの担任になれます。僕は皆さんと数カ月だ
けなんて嫌です」

ネギの真剣な言葉を聞いた全員のテンションが上がる。
でも、この言葉はネギのために頑張れって言う事を誰も気づいていない。

全員の様子を見る僕は密かに笑みを浮かべていた。

「たまには真面目に勉強しますか。のどかに悪いですし」

「ネギくんがここから出て行くのは見たくないよ!」

「ネギ先生の言葉には感動したでござる」

「皆、がんばろ〜!」

「「「「「おおおおお!!」」「」「」「」」

皆の心が一つになった。

さすがの僕も感動しているぞ。

なら、僕が出来る限り皆の助けに今回は、協力します。

「授業を始めましょう!」

木箱ではなく机と椅子があった。

それを見た僕は素直な感想を口にする。

「何であるの? ここって地下なはずなんだけど」

まあいいか、机と椅子を並べる。

明日菜さん達も全員の協力で全部並べきれた。
以前は本当に木箱だったよ。

僕が授業を始めて120分経過した所だった。

「では、この問題はわかりますか?」

黒板に書かれている問題を誰かわかるか聞く。
すると、木乃香さんが手を挙げた。

「はい！」

「じゃあ、木乃香さん」

「いつ、ここから出られるん？」

当てられた木乃香さんが答えと違う事を呟く。
ある意味正しい事にこの場が凍る。
空気ぐらい読んでください、木乃香さん…。

「でも、ここって誰も入ったら出た事無い場所なんでしょ？」

「一生、このままアルか？」

「それは嫌ですね」

「地上に帰りたいよ」

全員が弱気になった。

誰が見ても、木乃香さんのせいだ。

うん、修行の時はきつくしてあげよう。

そう誓ったが、なんか音がした。

「ん？」

僕は教科書を放り捨てて水の中に沈めた後、耳をすませる。
これは、ゴーレムか。と言う事は学園長か。
その事を明日菜さん達に言う。

「みなさん、あのゴーレムがここにいるようです」
「もう来たの？」

「同時に落っこちたのかな」

違う、僕が原子崩壊で消したはず。

スペアぐらいあるけど、そこまではしないだろう。と思ったが、そうでもなかったみたいだ、あの妖怪爺め。

呼び名が段々と変化させてるネギ。

「本当にいたあゝ!？」

「うおおおおおお!!」

巨大になって帰って来たゴーレムさんだった。

学園長いや、妖怪爺、後で覚えておいてくださいね。と口パクする。ゴーレムに恐れて皆が逃げ出す。

「明日菜さん、木乃香さんも逃げましょう」

「でも、余裕で足止めできるけど」

「そうやで」

「ここにはまき絵さんとかいるんですよ？」

「「あ……」」

2人揃ってドジっこになるんじゃないか?って一瞬だけ思った。とりあえず、2人を連れて逃げる。

「あっちに階段があるでござる！」

楓さんが見つけたみたいだ。

小さくだが、エレベーター直通階段と書かれている。

皆はそんな文字を気にしないで登っていく。

「ゴーレムも追って来てるみたいなのです」

「「「ええ?」」」

「待つんだ!」

「ノリノリね……」

「そうですね」

明日菜さんと僕は正体を知ってるから笑うしかないが、
木乃香さん達は慌てていた。
その時、行き止まりだった。

「何なのですか?これは……」

「問題アルよ」

答える意味もないから、僕はバレない様に光速版魔法の射矢1を打ち込む。

当然、射矢の力が強すぎて先にある問題がある門も碎けた。
そんな事とつい知らず、楓さんがうんうんと頷いた。

「これはラッキーでござる」

「そう、そうですね」

夕映さんが僕の方をチラッと視線を向けたが元の方角に戻した。
バレないように撃ったはず……。

考えているとゴーレムが襲いかかってきていた。

それを見た明日菜さんが僕に大声を出してこちらに来る。

「ネギ!!」

「ウオオオオオオオオオオ!」

襲いかかってくるゴーレムを明日菜さんが魔力と気の同化使って下に落とす。

落とされたゴーレムは悲鳴を叫んで落ちていった。

「明日菜さん」

「ネギ、行こ！」

明日菜さんが嬉しそうに僕の手を握ってエレベータへ目指す。

明日菜さん、すごいですね。

ネギにとっては誤算だった。

本来上、あそこで思いっきり原子崩壊を打ち込み、

消滅させてやろうと考えていたのにそれを明日菜さんが……、

じーっと明日菜さんを目を細めて見る。

視線を感じた明日菜さんがゴメンと小声でつぶやく。

「まあいつか……」

目的の本は回収したから、もう用はない。

明日菜さんの手をギュッと握りしめる。

その事に気付いた明日菜さんが僕を見て目を丸くした。

「ネギ……皆に追いつくわよ！」

その答えとして僕は頷く。

僕と明日菜さんが先行にいる楓さんとクーフエイさんの所まで追いついた。

そろそろ直通エレベーターか、と気分よく走る。

ようやくエレベーターを見つけた。

「やったー、エレベーターだ！」

「これで帰宅できます」

「やっと休めるアル」

「拙者は足りないでござるが」

「ようやくね」

「ウチも疲れたわ」

エレベーターの扉が開き全員が入ると

重量オーバーの警報が鳴った。

ああ、木乃香さんがいるからか、理由はなんとなくわかった。

「どうすれば……」

皆を戻すのが先ですね。

そう決めた僕はエレベーターから出た。

警報音が消えた。やっぱりか……

「皆さんは先に行ってください」

まるで遺言の様に言い聞かせる。

あのゴーレムに用があるだけだ。ククク……

笑みを浮かべて皆に見せる。

「わ、わかったわ……ネギも気をつけて」

「ネギ君、気を付けてな」

僕の真意に気付いた明日菜さんと木乃香さんから激励をくれた。

まき絵さん達が何か言う前に扉が閉じてエレベーターが上に動いた。

完全に上へ行った後、安堵を漏らす。

「良かった。さてと、覚悟はいいですか？」

誰もいなくなり、遠慮が無くなった。

目の前にいるゴーレムに死刑申告を言う。

もちろん、拒否権はない。

ネギ自身には年寄りにやさしくって言葉が存在しなくなった。

「魔法の射手50、発射！」

無詠唱による魔法の射手・無属性を放った。

一本一本の射手が早すぎて、相手は抵抗すらできないまま、粉砕された。

おじいちゃん（学園長）の悲鳴とか聞こえたが無視して、下へ降りてきたエレベーターに乗り、上に向かった。

〈図書館島・地上〉

エレベーターで上に着いたら、皆がいた。

「ネギ君、無事だったんだね」

「ええ、破か……逃げてきました」

「今、何か妙な事を聞いた気が」

「気のせいですよ、夕映さん」

夕映さんに笑顔で見る。

僕から視線を逸らした。何故？

「そろそろ、戻らないと時間が無いのです！」

夕映さんは僕から背を向けて歩いていった。
そして、木乃香さんと明日菜さん以外はこの場から姿を消した。

「疲れた……」

「そりゃ、疲れるやろ」

「あのゴーレムって木乃香さんのおじいちゃんですよ？」

それを聞いた木乃香さんの態度が急に変わる。

目を細めて黒いオーラの様な幻覚を見る。

いや、そんなもの見えない！ 見えちゃいけない！

「ふーん、そうなんや……」

「木乃香さんが怖く見えるのは気のせいですか？」

「幻覚じゃないわ、私もよ」

明日菜さんも同じように感じているのか。

あはは、木乃香さんが黒くなるのはちよつといや、大分嫌だな。

「木乃香さん」

「はいな！」

明るく返事をする木乃香さん。

「そろそろ、戻りましょうか」

「そうやな、後でおじいちゃんには言っとかないと」

「それは駄目ですよ」

僕は木乃香さんの説教を反対する。

これだと、木乃香さんが魔法を知ってる事が！

今はまだ駄目、マスターにも筒抜けになる。

「どうしてなん？」

首を傾げている木乃香さんに事情を話した。

不満そうな表情をしていたが、なんとかわかってくれた。

「わかったえ」

「良かった。戻りましょうか」

僕達は部屋に戻っていった。

その後、僕の別荘で明日菜さんの勉強に付き合った。

木乃香さんが途中で入ってきて修行もした。

ついに、その日がやってきた。

期末テストで順位がビリなら3-Aの担任になれない！

一体、どうなる？

もし、ビリになっても、その後のネギがやる事は予想がつくだろう。

next 第9話へ

第8話『図書館島・下』（後書き）

もう少しで2年生編が終了します。

第9話 『本人複製魔法と期末テスト発表』 (前書き)

時間軸が違うのはこのSSのデフォです。

第9話『本人複製魔法と期末テスト発表』

（ネギの部屋）

別荘から出た僕と明日菜さんと木乃香さんは急いで準備をしていた。準備していたのは明日菜さんと木乃香さんだけだけど。

「明日菜さん、木乃香さんもがんばってくださいね」

「わかってるわ！」

「了解」

2人が返事をした後、急いで学園に向かった。

僕は1人っきりになった。

ここで一部の準備に取り掛かるか。

アヴァロンの本を圧縮から元の大きさに戻す。

「ふう、武器探しをするだけ何だけど、分身に任せますか」

わざわざ、自分で探す必要性がどこにある？

分身を生成して自分の代わりに探した方が早い。

そう判断した僕は、複製魔法を唱える。

「我が目的のため、偽りの自分を作られし、我そのものへ創造せよ
！」

マスターの魔力以上を開放させる。もちろん、結界貼り済み。

ネギの前に魔法陣が展開し、そこからネギの姿が出てきた。

僕そのものだから魔力もほぼ同じだし、身長も同じ。

違う部分があるとすれば、10歳じゃなくこの時間に来る前の20歳並みの姿。

こっちの方が都合が良いから。

「私の分身よ、聖なるパーツを集めてこい！　それが私の望みだ」

この口調がめんどくさい。

なぜかこれしか言う事を聞いてくれないのはひどいと思う。
だが、予想外の答えが返ってきた。

「嫌だ、なぜ俺が行かなきゃいけない」

「何？　……何も聞こえなかった。何て言ったの？」

気のせいだよ？　分身が僕にあははは。

幻聴と思った僕はもう一度その言葉を聞く。

「なぜ俺が行かなきゃいけない、自分で行け！」

うん、気のせいじゃなかったみたいだ。じゃあ、ぶっ潰す。

ネギはその分身を拳で殴る。

殴った衝撃で、窓から飛んでいき、森の方まで飛ばされる。

衝撃波の影響で周りが被害あるけど人気が無いから問題なしだね。

「さて、試験の発表までに間に合うか疑問だよ」

明日菜さん達の事が気になった僕だけど、

一つ目の問題を片づけに分身の所まで転移した。

く学園内・森く

森まで吹き飛ばされた分身ネギがダメージを受けていた。かなり苦しそうだった。

「くっ、冗談が通じないのか？」

治癒魔法で自分を回復させた。

このネギはどうやら魔法に関しては強い。

どうやら冗談だったらしいし、元から断る権限すらない。

冗談も通じないネギの方が大人げないけど。

「ほう？　じゃあ、探してくれませんか？」

ここに来た僕は声を森に響かせながら、相手に聞かせる。

ネギは森の自然を利用して同調魔法を使い、居場所を突き止めた。

僕は相手に見つかる前に背後へ回り込み、捕縛魔法を展開。

分身ネギの地面から魔法陣が浮かび上がり、

中心から魔力の糸が分身ネギの全身を縛る。

「捕縛したから外れないよ？」

「さすが俺を創造しただけの事はある」

「とりあえず、転移魔法もついでにしたからもう無理だよ？」

対策を既に取りっていた僕は笑みを浮かべた。

それを見た分身ネギがネギと同じように笑みを浮かべてこう言った。

「何のために聖なる武器を集めるんだ？」

「それはね、アスナ達を守るためかな……だって、楽勝で勝ちたい

から」

前半は普通だったが、後半で全てが無駄になる言葉だった。目の前の僕もどきが、アホか、と呟き溜息を吐く。

呆れて溜息なんて僕らしいか。

そう思った瞬間、僕もどきに貼った魔法陣が起動した。

「最低でも修学旅行前までにね」

「無茶苦茶言うな！」

「大丈夫、僕もどきでも世界なんて跡形も」

「……もういい、何も言うな」

その言葉を最後に転移魔法が発動して消え去った。

周りがシーンとなったから何か空しいよ。

貼っていた結界を解除して、この場から影のゲートに潜った。

〈2-Aの前〉

影のゲートを潜り着いた場所が教室の目の前だった。

あ、危ない危ない、別にバレてもいいけど後が面倒だ。

説明が面倒だからね。

僕は窓から皆の様子を探った。

「ふむ、明日菜さん達も十分やる気を出しているみたいでよかった」

別荘で木乃香さんと僕で一生懸命教えたのが良かったのかな？

ネギの言う一生懸命とは罰が魔法の矢1ぶつける事だった。

誰かが嫌に決まっている。

「明日菜さんは元から頭が良いんだから理解すればすごいよ」

小さい頃の記憶を思い出した後、学校に戻った時の成績が無駄に良かった。

アスナを知ってる人に聞いたら凄く魔法に関しても覚えやすいとか。さすがあの人の娘さんだと僕は思った。

明日菜さんだけじゃなくマスターも真剣ってあれ？

「もう終わったの？ ああ、15年もやってたら嫌でもわかるか」

結局、封印解除になったのはかなり後だったような……。

それを現在は僕の気分で解除できるからね。

もういいや。と僕はここから別の所へ歩いて行った。

そして……翌日

期末テストの順位発表会だった。

僕や明日菜さん達は外に出て巨大モニターを見ていた。

「とうとう来たわね」

「皆、がんばったもんな」

「この発表で僕がどうなるかですね」

僕が呟くと、皆が心配そうな表情をしていた。

明日菜さんが僕の肩をポンと置き

「大丈夫よ、きっと！ ……あんなだけ勉強したから」

最後だけ僕だけに聞こえるように囁く明日菜さん。
そうなんだけど、まあ、前は遅刻してたから分けられたけど今回は違う。

学園長のミスはないから、速攻で決まる。

「ビリだけにはなりませんように」

一生懸命にまき絵さんが祈っていた。

なんか嬉しいな。

とりあえず些細な事だけど、見る場所も違ってる。

ああ、どうでもいいか。

モニターから順位の発表が始まった。

『第1位は……なんとあのビリだった2-A!!』

それを聞いた明日菜さんが僕を抱きしめた。

「良かった〜！」

「やったね！」

「ネギくんのおかげだね！」

いやいや、僕は今回何もしないって！

あの本、触れた人に頭の回転を働かす潜在能力でも眠っているのかな？

皆に胴上げされながら分析した。

「っていつの間に！」

明日菜さん達が僕を胴上げしていた。
分析の途中でやるなんてひどいや。

「ネギ君、やったね！」

「ネギ先生……」

ハルナさんも夕映さんも何を普通に言ってるんですか？

僕が夕映さんをじーっと見たら、目を逸らした。

僕の感は気付いた。あの時の魔法、見られてる。

例え、速度が早くても真後ろからなので振り向かれれば見える。
魔力の塊を作っている時が……ね。

それから、いろんな人に胴上げされていた。

2－A ほぼ全員と話していたりしていたため、夜になった。

（ネギの部屋）

僕は明日菜さんと木乃香さんに最深部の事を話した。

最深部と言ってもそこで夕映さんが……という事。

「夕映っちゃんが……」

「バレたって事？」

「そうですね」

唸っていた木乃香さんが何かを思いついた。

一瞬を見ただけだから警戒する気はないが、何か聞いてみようか。

「木乃香さん？」

「ネギ君、夕映っちにばらしたらええやん」

「え？」

「木乃香、本気なの？」

僕と明日菜さんは木乃香さんの提案に一時固まった後、聞いてみた。木乃香さんは冗談ではなく本気で頷く。

「夕映っちも、ついでに本屋ちゃんも」

2人の名前を聞いた明日菜さんが木乃香さんに問いかける。

「まさか、あの夢の事？」

「そうや」

あの夢って明日菜さんが見た夢か。

それを参考にしてバラすってのは何？

木乃香さんもなんか嬉しそうに頷いているし……

「木乃香さん、今はやめときましょう」

「ええ？」

ええ？ じゃないって、これ以上僕の計画をズレてたまるか！

僕の計画では3年になってからだよ？

どうやら、木乃香の言ってる2人は3年までバラす気が無いらしい。

「とりあえず、明日は休日ですよね」

「そうね、って事は委員長の所に行くの？」

「はい」

「テーブルを貰いに行くんやな！」

それを聞いた僕はコケかけた。
何でそうなるの？

僕はただ約束を果たすただけにだな。
それを木乃香さんに言うが、

「結局はテーブルも貰うんやろ？」

「まあ……否定はできません」

「委員長の事だから、ネギ先生のためならテーブルの一つや二つい
え、

いくらでも差し上げますわ！って言うわよ」

明日菜さんが委員長さんのマネをしていた。
全然似ていないけど、まあいつか。

それを見た木乃香さんがウンウンと縦に振る。

「結局、夕映っちの事はどうするん？」

「様子見ですね」

「残念やなあ……」

何が残念だったんだろう。

僕には何が無やら良く分からない。

「とにかく委員長に電話するわ」

明日菜さんが委員長さんに電話をかけた。

「もしもし、委員長。明日、ネギと行くからよろしく。

……え？駄目よ、ネギは私と木乃香が連れてくるから……わかった
わ」

短い通話が終わった明日菜さんが携帯電話の電源を落とし、テーブルに置く。

「明日、OKだそうよ」

「良かったなく、これでテーブルゲットや」

木乃香さんがノリノリで親指を上にした。

ゲットって本気でそのためだけに行くの？

本当にそんな事を思ったが、目覚まし時計が鳴った。

「ネギ君、そろそろ」

「ああ、今日もやるの？」

「当り前じゃないですか、最低でも今の魔法だけは極めてもらわないと」

では、別荘に行きましようか」

僕の言葉に仕方が無いと呟く明日菜さんと木乃香さんが頷き、例の地下部屋に向かって別荘の中に入った。

next 第10話『テーブルを貰いに委員長の家へ』

第9話『本人複製魔法と期末テスト発表』（後書き）

中途半端な途切れですみません。

世界樹は既に知ってますしネットアイドルはもろスルーだったりします。

一応、既に歪んでいるので、ちうの出番は後（3ーA）になります。

第10話 『委員長の別荘と明日菜の自覚?』 (前書き)

※明日菜がネギに〇〇する話でもある。

自覚してきてるような雰囲気があり、そういう話になっています。
ちよっと変な展開、矛盾している部分があるかも……。

第10話『委員長の別荘と明日菜の自覚?』

くネギの部屋く

「もう朝か……」

目が覚めた僕は起き上がり下に降りた。

「あれ? 終了式はどこ?」

「ネギ君、おじいちゃんが終了式を寮のモニターとか紙でするんや
って!」

「え?」

どんな学園になったんだ?

もしかして、木乃香さんと僕のアレのためと考える。

木乃香さんが頬を赤く染めて話す。

「おじいちゃんがウチとネギ君のためとか言い出して」

「え、ええ!?!」

「どうしたの……ネギ」

アルバイトから帰って来て二度寝をしていた明日菜さんがベットから下りてきた。

僕は明日菜さんに話してた事を聞かせた。

「はあ? 学園長はなんて理由でこんな事を」

「ウチもわからへんけど」

「この学園ってフリーダムすぎますね」

「ネギ君を修行の理由で教師にさせるぐらいやもんなあ」
「学園自体が魔法で守ってるようなものよね」

実際に結界はあるし、侵入者を倒す魔法使いなど色々いる。
結界と言っても侵入しまくれるし何のための結界何だか。

「とりあえず、委員長の家に行きましようか」

「ネギ君、いこ」

腕を絡ませてきた。

何か木乃香さんが凄く可愛く見える。

気のせいじゃない……。

（委員長の別荘前）

魔法を使ってここまで来たので疲れている訳が無い。

玄関前に来た僕たちは周りを見た。

相変わらず広いけど、色が変わってる？ 何で金色の屋根があるの……。

一番大きい屋根には金色でキラキラと輝いていた。

「まるでお城の一部みたいな感じかな？」

「ネギ君、お城とか見た事あるん？」

「ええ、前に」

この時間に来る前に嫌なほど見たことがある。

特に、魔法世界にあったあのお城とか。

あの時は夕映さんの記憶が無くなっていたんだよね。

懐かしく浸っていると、なぜかドレス姿の委員長さんが出迎えてく

れた。

「ようこそいらっしやいましたわ。ネギ先生」

目をキラキラと輝かせながら僕を見る。

明日菜さんと木乃香さんはその様子に溜息を吐いていた。いつの間にかメイドさんもいるし。

「何でドレスなのよ」

「気になさらないでくださいな」

「まさか、ネギをどうにかしようってんじゃあ」

さっそくケンガ腰になって警戒する明日菜さん。どうにかしようって何の事だろうと最初思った。

「そんなことはしませんわ」

「ふくん、シヨタコンだから信じられないわね」

「明日菜さんこそおかしな趣味をしますわ……」

だんだんケンカ腰になっていく2人を僕は注意する。

「明日菜さんも委員長さんもやめてください」

「ガーン」

なぜか委員長さんが落ち込んだ。なぜに？

「あやかとお呼びになって、ネギ先生」

「え？ あ、はい。じゃあ、あやかさん」

「はい。もう悔いありませんわ」

あの世へ行こうとしてるあやかさんを明日菜さんがハリセンで叩く。
ハリセンで叩かれたあやかさんが明日菜さんに聞く。

「何をするんですの!？」

「それぐらいであの世に行ってどうすんのよ……」

「……では、中に案内いたしますわ」

コホンと咳ばらいで誤魔化したあやかさんは別荘へ歩いて行く。
僕達もあやかさんの後を付いて行った。

「別荘・あやかの部屋」

「ここが私の個室ですわ」

綺麗に整頓されていて置いてある物が高級品ばかりだった。
さすがお金持ちなだけある。

僕は高そうな椅子に座った。

明日菜さんや木乃香さんも適当な席に座る。

執事さんの人がテーブルにお菓子と紅茶を置いてくれた。

「これってハーブティーですか？」

「そうですわ。ネギ先生は紅茶系がお好きなんですよね？」

自己紹介にそんな事言っていないんだけどな。
もしかして、調べたのかな？ 僕の情報を。

「ネギ」

「何ですか？」

「一つ目の用件言ったら？」

さっさと帰りたいという表情が見える。

そんなに嫌なのかな？ 別に僕はいてもいいのに。

用件を早めにして靴禄と決めた僕は明日菜さんに呟く。

「ああ、アレですか」

明日菜さんと僕の会話を聞いていたあやかさんが聞いてくる。

「何ですか？ ネギ先生」

「このテーブルぐらいのサイズを1つ貰いたいんですが」

「構いませんわ。ネギ先生のためならばテーブルの1つだけじゃなく何でも」

ハイテンションすぎるあやかさんに僕も苦笑いした。

こんな雰囲気も久しぶりだからね。

紅茶の入ったティーカップに口を付けた。

「おいしいですね」

「高級品ですもの」

「別に高級品の意味では言ってませんよ？ 僕自身が好きなだけです」

「確かにそうね」

「テーブルは何時頃準備するん？」

「今すぐできますわ」

「ありがとうございます」

感謝の気持ちとして、僕はあやかさんの手を両手で握る。

すると、あやかさんが僕の手を握ってきて返事をしてくれた。

「どういたしまして」

「じゃあ、帰るわよ」

「え？」

「そうやな」

握っている途中で明日菜さんと木乃香さんが僕を連れ出そうとする。
何か変な様子だよ、2人とも。

「要件ってそれだけですの？」

「それ以外はないわよ」

「それだけやもん」

2人とも最初っからそのつもりだったみたいだ。
というか親友じゃなかったの？明日菜さん

「もう少しゆっくりとするのはないんですの？ 私とネギ先生の優

雅な」

「そんなものないって」

明日菜さんがあやかさんの言葉を遮った。

いや、勝手に決めないでと僕は明日菜さんに呟く。

「僕は何も言っていないんですが」

「何言ってるのよ」

「ネギ君」

何か怒っているような態度になっている明日菜さんと
目を細めてムツとする木乃香さんが僕を見ていた。

(……もしかして、ヤキモチ?)

僕は念話で言ってみようと実行してみた。

ネギの念話にビクンとなった2人は顔が赤くなった。

けど、明日菜はネギの言葉にむかっと来て文句を言う。

「なら、勝手にすれば!」

と出て行ってしまった。

「今のはネギ君が悪いで……」

そう言った木乃香さんが悲しそうな表情で僕を見た。

「うち、明日菜の所に行くから」

(ゴメンなあ、ネギ君)

念話を残して木乃香さんは明日菜さんの後を追った。

あれ? 明日菜さん……

何か悔しい様な色んな感情が渦巻いていた。

出て行った方向を真剣な表情で見ていたあやかさんが僕を呼ぶ。

「ネギ先生……」

「何ですか? あやかさん」

「明日菜さんの方へ行っても宜しんですよ?」

「でも……」

「じゃあ、こうしましょう」

と言って、いきなり、あやかさんが近づいて僕の唇を奪った。

僕、キスされてる？

10秒ほどそのままの状態だったが、あやかさんが離れて礼を言う。

「ネギ先生、今日はありがとうございました」

「……あやかさん」

「テーブルは夜にお届けしますから安心してください」

「わかりました」

僕はあやかさんに言われた後、急いでこの別荘から出た。

一人になったあやかは外にいる明日菜さんや木乃香さんを見て決心した。

「あの明日菜さんが……はあ、頑張らないといけませんわね」

この言葉の意味は一体何なのか、当然ネギは知る由もない。
前の世界よりフラグは立っているようだ。

（別荘前）

僕は部屋に戻ろうと急いで向かおうとしたが、門前で明日菜さんと木乃香さんが待っていた。

「ネギ……」

「テーブルは今日の夜に来るそうです。行きましょう」

明日菜がネギに何か言おうとしたが、ネギによって遮られて俯きながら答える。

木乃香もそんな2人に何もできなかった。

「え？ ええ」

「ネギ君……」

僕は影のゲートを使い、明日菜さんと木乃香さんの手を握って移動した。

（ネギの部屋）

戻ってきた僕は赤いソファ―に座り、本を読んでいた。
この本は木乃香さんが貸してくれた漫画。

コメディがありシリアスもある魔法バトル系だった。
それを読んでいると、明日菜さんが隣に座ってきた。

「ネギ、その……」

「何ですか？」

一体何の用なんだろう？
それに何か様子が変だった。

「さっきは……その、ゴメン」

「どうして謝るんですか？」

「だって……」

「僕は気にしてません。悪いのは僕なんです、ごめんなさい」

あんな事を言っただけで明日菜さんが怒った。
明日菜さんがそれを聞いて笑みを浮かべた。

「あ、そっか……はあ」

何か悟った様な表情になった。

そして、僕にいきなりこんな事を言い出した。

「ねえ、委員長とキスしたの？」

「ええ？」

「だって、委員長の付けてる香水が密かにあるし」

香水でバレるものなの！？

確かに香水の匂いはしていたけど。

「ふうん、したんだ……」

「あ、はい」

何を正直に答えてるんだ？

否定しろよ！ 僕

そんな事を考えていると明日菜さんが僕の肩を掴んだ所で

「明日菜、何をしとるん？」

木乃香さんが明日菜さんとは違う僕の横に座った。

僕が中心だからやばい……

「え？ 別に何もしてないわよ！」

「ネギ君」

「何ですか？」

「委員長とキスでもしたん？」

あなたもですか！！

香水ってそこまで読めるものなんですか？
誰か教えてください。それが僕の望みです。
まるで遺言な事を心の中で呟く。

二人の突き刺さるような視線に耐えられない。
だから、限界になった僕は呪文を唱える。

「ラス・テル マ・スキル マギステル……」

詠唱キーを呟いた瞬間、明日菜さんが止めようと叫ぶ。

「ちょっと待って！」

「ウチもその気やないんやって！」

木乃香さんも何か言っていたが気にしない。
僕のこの気持ちを解消するために詠唱する。

「光速詠唱短縮 セット 雷の暴風！」

「嘘やん!？」

「ここで!？」

僕は結界を張り、2人に雷の暴風を撃った。

当然、部屋は全壊していた。

他所の被害は一切無いのはネギの結界。
服がボロボロになっている明日菜さんと木乃香さんはダメージを受けて倒れていた。

「うう……」

「聞いただけやん……」

2人が何かを呻いていた。

「明日菜さんの魔法無効化は既に僕の魔法を無効化できませんからね」

それも無効化を消す事が出来るようになった。

だてに千年も生きてはいない。

とりあえず、僕の膨れ上がった感じが消えたのでこの部屋を戻した。

「部屋がボロボロだ。復元魔法、えい！」

杖を呼び出し、持って横に振ると、壊れた部分が全て修復されていた。

ああ、久しぶりに復元魔法使ったから眠たくなっちゃった。

もう駄目、この魔法を使うと朝まで起きない……かも。

僕は復元した赤いソファに体を寝かせて目を瞑った。

その後……、

あやかさんの執事さんが来てテーブルを明日菜さんと木乃香さんが受け取り、地下に置いた。

2人は僕を起こしても起きなかったらしい。と翌朝に聞く事になる。
(その部分はないが)

next 第11話へ

第10話 『委員長の別荘と明日菜の自覚?』 (後書き)

次回から3—A編からになり、ここからネギの活動が変わってきます。

第11話『始まり』（前書き）

感想・評価待ってます。

今回から3年生編に入りますが、省略されている出来事がいくつか存在します。

第11話『始まり』

）? ? ? ? ?

復元魔法を使って眠りに入ったネギは不思議な夢を見ていた。
その夢の中でボーっと座っている。

「夢見るのは良いんだけど何で何もないの?」

暗い、暗すぎる。何も見えず何もない世界。
世界と言うか夢だから気にしていない。

「……暴れてみるか?」

僕は立ち上がり魔力を全開にする。

魔力を全開にした影響でこの空間が揺れまくる。
揺れていると感じた僕は空中に浮く。

「効果あり? 広範囲魔法いってみるか?」

僕は詠唱もせず魔力をさらに開放する。

あの呪文を使うためには全魔力を利用しなきゃいけない。
フフフ……準備完了。

「ラスト……ディメン——」

続きが言えない! 最後まで言わせろ!!
せっかくほとんど使う事が無さそうな魔法使おうと思ったのに!

と願っても続きの言葉や行動が何もできなくなった所で現実に戻された。

くネギの部屋く

僕は目が覚めると赤いソファでいつの間にか寝ていたようだ。
今日は始業式だから終了式みたいな事は絶対ない。

「何なんだ？ あの時」

暗闇のある夢は初めてだ。

魔力を全開にした所、何にもなかった。
僕が魔力を全開にすれば世界のバランスが崩れるから現実にはやらない。

「起きたんや」

木乃香さんが朝食を持ってきた。
今日は普通に和食だった。

「はい。今日から3年生ですね」

「夕映っちにバラすん？」

「向こうから言ってきたら」

「夕映がネギに言うかしら？」

明日菜さんが隣に座ってきた。
何かやけに積極的な気がする。

まあ、修行以外や2人きりになったら態度変わるし。

「明日菜も変わったなあ」

「あの夢のせいね」

「そうなんですか……」

「別にそういう意味じゃないって！」

「何かウチだけ置いてけぼりな気がするんやけど？」

ジト目で見る木乃香さんに明日菜さんが慌てて

「木乃香を除け者なんてする訳ないじゃない！」

「木乃香さん」

「何」

構ってくれるの？と僕の方へ見ていた。

刹那さんの事を聞いておかないといけない。

「刹那さんの事どうするんですか？」

「……せっちゃん、ウチはせっちゃんと仲良くなりたい！」

「木乃香さんは僕の事を気にせず考えてください」

「いいん？」

「僕としては親友だった人と仲違いは嫌ですから」

「わかったえ」

僕の言った言葉に木乃香さんが頷いた。

これでいいんだけど、可能性が低い。

今は木乃香さんの事は置いておこう。

「そろそろ出ますか」

僕は朝食を済ませてから、この部屋から転移魔法で消えた。
残った木乃香と明日菜はネギが転移した後、こんな話をしていた。

「明日菜、休み期間、ネギ君と修行したん？」

「この時間なら100時間ぐらい」

「ウチは120時間や」

「多いわね」

「ネギ君って何であんなに強いんやろ？」

「そうね、気になるの？」

「そりゃ当たり前やん」

「でも、聞いたじゃない」

「ウェールズの魔法学校の事やろ？」

「うん」

「ま、私たちも強くなればネギが楽になるでしょ？」

「ら、楽になるん？ ネギ君って問答無用で攻撃するえ」

「私や木乃香がいても変わらない気がする」

「そろそろ学校にいか？」

「そうね」

明日菜と木乃香は鞆を持って部屋から出て行った。

く学園長室く

学園長室に来た僕は驚いた。

マスターと桜咲利那さんがいたからだ。

「あ、エヴァンジェリンさんに桜咲さん、おはようございます」

僕は丁寧に挨拶をする。

マスターは顔を引きつり、刹那さんはペコリと礼をする。

「学園長、桜咲さんはいいとして、どうしてエヴァンジェリンがい
らっしゃるのですか？」

「ワシに言われてもな」

「おいじじい！ 嘘をつくな！ 侵入者が入ってきたからここに呼
んだんだろ？」

「ああ、僕も参加してもいいですか？」

学園長にお願いをする。

僕の言葉に悩んでいたから、右手に魔力の剣状を作り学園長に向け
た。

「ネギ君！？ 何をする気なんじゃ？」

「えーと、筆みたいな髪の毛ごと頭部を切るだけです」

平然とした態度で言う僕にマスターがいきなり止めてきた。

「ちょっと待て！」

「どうしたんですか？」

「私と桜咲刹那に頼んできたのは生徒だからだ。初日に休むのはま
ずいんじゃないのか？」

学園長に助けの船を出すマスター

何のために助けてるの？

その理由が一番知りたかったが、そういう理由に剣を消す。

「うう……仕方が無いですねえ、次は呼んでくださいね！」

「わかった」

「絶対ですよ？　そうじゃないと学園長の髪の毛を全部切り落とす」

危険な目を光らせて笑みを浮かべる僕を見て学園長が慌てて頷いた。
何か関係が逆になってる気がするがまあいいか。

「じゃあ、僕はこれで」

呑気な事を考えてから、

僕は教室に行く事にして出口に向かう途中で呆然としていた刹那さんにこう言い残す。

「木乃香さんと仲良くしてくださいね」

「え？」

刹那さんは目を見開いて僕の方を見る。

それに反応するように笑みを浮かべた後、ここから出て行った。
これで向こうからの行動が起こるだろうと半分期待した。

＼3－Aの教室＼

僕は新しくなった教室に入った。

別にメンバーも変わってる訳でもない。
刹那さんとマスター以外は全員がいた。

「一応、正式に言います。今日から3年A組の担任になりましたネギ・スプリングフィールドです。1年間よろしくお願いします」

自己紹介をした僕を見ていたクラス全員が驚きの声上がる。

「おおおおおお！」

やっぱり、何かテンションが違う。

「ネギ先生！」

「何ですか？ 柿崎さん」

「こんな噂知ってますか？」

「噂？」

何だろう？

この時期に噂って言ったらアレしかないな。
吸血鬼ぐらいしか思いつかない。

「満月の夜になると寮の桜並木の所に吸血鬼が現れて血を吸われる
んだって」

「そんな噂を信じる方がおかしいわよ」

「噂じゃないの？」

神埼さんの言った噂に疑問を呟く明日菜さんとハルナさん
うん、あのガキ吸血鬼……約束破りやがったのか？

顔を引きつらせて無理矢理な笑みを浮かべる。

「今日は身体測定ですので、今すぐ脱いで準備してくださいね」

話を逸らして今日の行事を全員に伝える。

その後、僕は教室から出て廊下で待つ。

待っている間、僕は考えをまとめていた。

おまけにしずな先生がいないし……。
そんな事を気にせずベットで寝ているまき絵さんを見る。

「えーと、明らかに吸血鬼かな？」

「ネギ君、吸血鬼って居るん？」

「いますよ、エヴァンジェリンさんがそうです」

「ええ！？ そうなんやー」

「エヴァちゃんって吸血鬼だったんだ」

明日菜さんと木乃香さんの反応薄ッ！

あまり驚かない2人を見て呆れていた。

まき絵さんの首筋を見ると噛まれた跡が残っていた。

「フッフ……僕に喧嘩売ってるのか？ 封印を解いて叩くしかないか」

そんな怪しく笑うネギに対し、この場にいる2人は青ざめて逃げ腰になる。

「ネ、ネギ？ もしかして」

「ネギ君？」

完全に嫌な予感がした2人はここから出ようとするが、透明な壁で出口を塞がれた。

僕は意味もなく透明の壁を叩く2人に聞く。

「協力してくれませんか？」

こんな事をする不良生徒エヴァンジェリンさんをいじ……いえ更生させるためにも」

「今、いじめやらいじるやら聞こえたような」

「明日菜、余計な事を言うたらあかんって!」

もう逃げようとしてもしない明日菜さんと木乃香さんに今後の事を説明した。

説明中、明日菜さんと木乃香さんが嫌そうな表情で否定していたが、修行メニュー2倍にしますよ? って言ったらあっさり肯定に変わった。

身体測定が終わり、帰る時間になった。

マスターも刹那さんも途中で参加していました。

それほど雑魚だったのだろうけどやってみたかった……。

〵桜並木通り〵

僕と明日菜さんとその他が道を歩いていた。

周りには桜の木があってもとても綺麗だ。

暗くなった影響で満月がよく見える雲も全くない快調な夜。

これはマスターにとっては都合が良い。

「明日菜さん、木乃香さん、行きましようか」

「本屋ちゃんが襲われるん?」

木乃香さんがのどかさんをチラッと視線を向けて呟く。

聞かれた僕は

「ハルナ、夕映は先に行ってて」

「それは別に良いけど」

「ハルナ、行きましよう」

「え? 夕映」

夕映さんは僕を見た後、口パクしてハルナさんを連れて立ち去った。口パクの内容を読んだ僕は驚いた。

驚いて硬直していたが、明日菜さんが僕に心配の声を呟く。

「どうしたの？ ネギ」

「ネギ君、のどかが行ってしまうで？」

「夕映さんが僕にのどかをよろしくですって口パクしました」

よろしくですってある意味癒されるのは僕だけ？

そんな事を思っていると木乃香さんが確信したように人差し指を立てて断言した。

「やっぱりバレてるんやろ？」

「バレてるんだとしたらどうする気？」

うう、僕の計画だと停電後には思ったけど仕方がないか。ってその時、のどかさんの悲鳴が聞こえた。

「しまった！ 誰ものどかさんを見ていない」

僕は慌ててのどかさんの方へ走った。

そう言ったネギが走ったのを見た木乃香と明日菜がネギを追いかける。

倒れているのどかさんを見かけた僕は様子を見る。

今回は服が破けなかった。

向こうが攻撃しない事もあるが。

「噛まれてる……ふう」

「嘘、のどかが襲われたの？」

「エヴァちゃん、どういうつもりなんやろうか？」

「とりあえず、魔法の射手1」

のどかさんが寮に戻ろうとしている先に魔法を放った。

マスターの影響か知らないが先が見えない場所に貫通するとようやく景色が見えた。

黒いマントを纏った金髪の少女がその場にいた。

やっぱりマスターか。

「あんたはエヴァちゃん！」

「誰がエヴァちゃんじゃ！　　というか何で近衛木乃香と神楽坂明日菜がいる」

「ウチはエヴァちゃんが吸血やってしってんねんで！」

木乃香さんがさっそくばらした。

駄目だ、僕の計画がってのどかさんが起きようとしている。

「エヴァンジェリンさん、何でこんな事してるんですか？」

もしかして、そんなに封印を解いてほしかったんですか？」

「当たり前だ！　こんな馬鹿げた封印が無ければこんな事をする必要もない！」

「へえ、ところで封印って何なの？」

「そのバカ先生の父親が私に登校地獄という呪いをかけたんだ」

「僕の父さんに惚れて付きまとったストーカーでもあります」

「誰がストーカーだ！」

ネギの言葉にエヴァが違うと否定して怒鳴る。

はあ、もう素直じゃないな。

ニヤツとあくどい事を思いついた僕は真・魔法の矢エイトを展開。

「とりあえず、今日の所は引いてくださいね」

「何を言って……!?!」

真・魔法の矢8発分を誰もが見えないほどの速度でエヴァの横を沿って背後が爆発した。

「ネギ、大丈夫なの?」

「何がですか?」

「あそこ、木が数本消えてるんだけど」

「あ、ホントや。木が8本ほど消えてる」

木乃香さんの言葉に反応したマスターは後ろを見て青ざめる。
後ろの状況は地面に100Mのクレーターが出来ていて木と通り道ごと抉れていた。

「ちょっと魔力を抑えすぎたかな?」

頭をかきながら失敗したと溜息を吐く。
我ながら制御を間違えるから大変だ。

「あれで抑えてるだど?」

「ネギ君が言うには雷の暴風でこの学園が消えるやって」

「あの水晶に入って見せてくれた時、全滅したわね」

明日菜さんが言ってるのは初めて入って普通の魔法呪文を教える時の事。

その時、見本として雷の暴風を見せた。

出力も十分抑えていたが、全範囲を巻き込んで爆発した。寿命が伸びた影響の副作用なのか、そういう効果が付属されていた。それを明日菜さんと木乃香さんが説明した所、マスターが大声で叫ぶ。

「絶対にありえんじゃないか！ 雷の暴風ごときでそんな事出来るか！」

「気持ちにはわかるけど、実際見たんだからしょうがないじゃない……」

「あの時は死にかけたんやけどな……」

その状況を思い出した2人が顔を引きたらせながらマスターに呟く。マスターはむくと唸って何かを考えていた。考えがまとまったのか僕を誘ってきた。

「ぼうや、私の別荘に来ないか？」

「はい？」

「うう……」

間拔けな返事をした瞬間、寝ているのだかさんが目を覚ました。あゝあ、目が覚めてしまった。

「こ、ここは……」

「大丈夫ですか？」

「ネ、ネギ先生！？」

すぐに起き上がるのだかさんを見る。

「これは一体……」

「あれはね、ネギの魔法で出来た残骸かな？」

「明日菜、それを言うなら残骸やのうて被害や」

「魔法!？」

「アホか」

まったくであります。

明日菜さんと木乃香さんの言葉で認識しちゃったじゃないか。

うん、絶対にわざとだね、あはは……。

とまでは思ったが、のどかさんが僕の前に立ち

「ネギ先生って魔法使い何ですか？」

それを聞いた僕は木乃香さんと明日菜さんをじーっと見つめる。

見つめていると2人の顔がちょっと赤いつてそういう意味で見つめてないっての！

愚痴りたかったが目の前にいるのどかさんに決めさせましようか。

「のどかさん、僕は見ての通りの魔法使いです。

そこにいるエヴァンジェリンさんはのどかさんを襲った百合的な吸血鬼です」

「ちょっと待て！ 誰が百合だ！ 私は同性に興味がなく正真正銘のノーマルだ!!」

テンションが高くなって叫ぶマスターだった。

自覚しながら頭を抱えて叫んでたらグッと何だが。

意味のわからない事を思うネギ。

そんなことより現状を優先する。

「一応、魔法は秘匿扱いらしいので一般の方は記憶を消さなきゃいけないんです」

「一般の人じゃなかったらいいんですよね？」

はい？　今回、のどかさんとそんなに接点がないぞ？
一纏めに考えていた僕を木乃香さんがのどかさんの手を両手で包みこみ

「仮契約したら関係やで」

「仮契約？」

「ネギ君とキスするんや」

「ええええ！？」

驚いて赤くなるのどかさん。

何を言ってるの？　この天然娘は。

口調がだんだん20歳以上の頃に返っていくがさすがに表までは出せない。

僕達を傍観しているマスターを見ると楽しそうに笑みを浮かべていた。

助けの神はいないのか？

そう願うがいる訳もなく、のどかさんから離れて僕の前に立つ。

「ネギ君、のどかもしたいんやって！」

「何時の間に聞いたんですか？」

「ネギ君がボーっとしてるあたりから」

「さいですか……」

僕の計画がちよっとずれていく。

これくらいで崩れる計画は立てていない。

本当はもっとすごい事も考えている。

それは学園祭まで内緒だけだね。

現実逃避のつもりで木乃香さんの言葉を見無視するが、こんな言葉が耳に入った。

「のどか、こうやってな」

と言ったとたん、いきなり木乃香さんが僕と唇を重ねる。それを見ていたのどかさんは赤くなりつつ見ている。

明日菜さんは木乃香さんの行動に溜息を吐いた。

数秒後、木乃香さんが僕から離れてのどかさんを見る。

「とにかくここを直しますね」

僕は杖を呼び出す。

呼び出した杖が上から降ってきた。

いろんなパターンがあるなく、まだ2つ目なんだけど。

今の僕では復元魔法の副作用が出るため、明日菜さんに頼んだ。

「復元させたら僕は眠ってしまうので後の事はお願いします」

「眠るって？」

「長く使ってなかった影響で起こる迷惑的な副作用です。」

のどかさん、すみませんがこの話は後でお願いします」

「わ、わかりました」

のどかさんの返事を聞いた僕は杖を被害に遭った部分へ向ける。

今回は記憶を元に思考しながらなので朝まで何が起ころうと目が覚めない。

だから、明日菜さんに頼んだ訳。

「何で明日菜なん？ ネギ君」

「……なんとなくです。エヴァンジェリンさんも停電までおとなしくしてもらえますか？」

「わかった」

「しないと父さんの呪いをさらに強くして赤ちゃんまで姿を変えま
すからね」

「わかったからそれだけはやめてくれ」

表情を青ざめるマスターが了承した。

これで手間が省ける。

了承してくれた感謝の気持ちとしてマスターに一部を教える。

「病気になる事がない様にしておきますね」

復元魔法の魔力を集中させながら

マスターの耐性能力を指を鳴らして解除した。

すると、マスターの魔力が少しだけ膨れ上がり以前よりも強くなっ
ていた。

「ぼうや……」

「約束ですよ？ では行きます。 復元魔法・第2修正」

ネギの持っている杖先が光った瞬間、クレーターになっていた部分
が修正されていた。

修正と言ってもフィルムのように時間が巻き戻っている現象と言った
方が良い。

修正されている光景を見てのどかさんが「すごい……」とその光景
を見つめていた。

「これ本当に魔法なのか？」

「エヴァちゃん、どういう意味なの？」

「魔力が全く感じない」

さすがマスターは魔力が感じない事に気付いたか。
この魔法は自然を元に使ってるので分かる訳もない。

「明日菜さん……」

「ネギ!」

「ネギ君!」

「ネギ先生!」

僕は副作用により意識が薄れていく中、明日菜さん達の声が聞こえたが眠った。

倒れそうになった所で木乃香と明日菜が支える。

その後、エヴァはネギの言う通りにして家に帰り、明日菜達は寮に戻ってネギのベットに寝かした。

n e x t 第12話へ

第11話『始まり』（後書き）

復元魔法第2修正は自然を元にネギが操る魔法。

ネギがやった事は風邪と見舞いフラグを潰したぐらい

次回、あの妖精がやってくる！ 大して意味はないが…

第12話 『ネットアイドルと妖精』 (前書き)

ここでネットアイドルと妖精が出ます。

ちうの口調がちよつと違うかもしれないがその辺は……

後、今回はgdgdかも……

第12話『ネットアイドルと妖精』

また副作用か……。

目が覚めて体を起こした僕は何か暖かい感じが両方から伝わっていた。

両方を見ると明日菜さんが右側、木乃香さんが左側で寝ていた。何でなのさ……と天井を見る。

「起きてください。明日菜さん、木乃香さん」

落ち着かないと思った僕は2人の肩を揺らすと、普通に目が覚めた。

「良かったあ、魔法で起こそうと思う所でした」

「……それはやめてほしい」

「そうやな……」

目を擦って背伸びをする木乃香さんに聞いてみるか。

「どうして僕のベットに入って来てるんですか？」

「だって……」

「べ、別に木乃香がそうしてみろっていうから！」

それだけ!?

明日菜さん、木乃香さんに言われたからってそれは。そんな様子を見て僕は苦笑していた。

その時、お腹の音が鳴った。

「えと、それよりもお腹が空いたんですけど」

「今、作ってくる。ネギ君と明日菜は和食と洋食どれがええ？」

「洋食」

「和食」

明日菜さんが答えて僕が後に答える。

2つの返答に考えるそぶりもしないで返答が来る。

「じゃあ、和食な」

「私が言う意味ないじゃない！」

木乃香の判断に気付いた明日菜がそう言葉にする。

そういえば、今日って何かあるのかな。

マスターは既に風邪を引かないようにさせたし、

「あ」

「どうしたの？ ネギ」

ベットから下に降りていた明日菜さんが僕の言葉に反応する。

「いえ、エヴァンジェリンさんのパートナーと会っていないなって」

「いるの？」

「契約方法はキスだけじゃないですから」

その方法は色々あるが、一番の成功法と言うか人気と言うか。

昔は血の契約とか色々あったらしいと明日菜さんに教えた。

「へえ、そうなんだ。でも、確かに血ってのは嫌ね」

「とりあえず、準備しないといけませんね」

「あ、今日学校だっけ」

明日菜さんの言葉に頷いて、魔法で2階分へ空間を広くしていた。

ベットから赤いソファアームまでダイブする。

「ふう……」

「そういえば、お風呂の時に罨貼ってるってどんなの？」

「見にくい糸とかの基本トラップですよ。後、レーザーとか色々」

「レーザー!？」

別に驚く事はないと思う。

どっかの旅館にもそういうのがあったし、漫画などでも必ず付いた。

ネギは基本的に漫画とか好きになってしまっている。

そういう罨の部分だけという迷惑極まりないが。

「ええ、出力はそんなに強くありませんが、

行きたくないと拒絶させる属性を含ませてます」

「えーと、そうなんだ……はあ、行かなくて正解だわ」

今、最後だけ小声で言っで、よく聞き取れなかった。

さすがに僕の安息は一人でいる時だけだから。

世間話や色々な話題を明日菜さんと話していると

「ネギ君、はい」

エプロン姿の木乃香さんが朝食を運んできた。

運び方が既に魔法を使っているみたい。

「木乃香さん、誰かに見られたらどうする気なんですか？」

「大丈夫や、その辺は任しといて」

「木乃香が言うのと逆に不安なのは気のせい？」

「それ、どういう意味なん？」

「まあまあ、早くしないと遅刻しますよ？」

木乃香さんと明日菜さんが僕を見て溜息を吐いた後、朝食にした。朝食後、僕は2人に「先に行って」と言われたので部屋から飛び出した。

く通り道く

魔法も使わず走らずに歩いていた。

でも、人の気配がないのはおかしいが
駅まで歩いていると、結界に入ったみたいだった。

「え？　ここってこんな結界あったわけ？」

まったく心当たりがないと思ったけど

この結界の貼り方に見覚えがあった。

僕の目の前に人が転移してきた。

「集めてきたぞ」

転移してきた人物が僕もどきだった。

こんなバカでかい魔法で作った結界を貼るな！と思う。

「いくつぐらい？」

「とりあえず、2つだ」

剣と槍を渡してきた。

さすがに聖なるというから光に満ちている。

それを両手で持った僕は試しに僕もどきに攻め込む。

「ちょっと待て！」

慌ててバックステップで回避し、杖を持つ。

何時の間に持っていたんだという疑問は僕にはない。

槍を圧縮させ、ズボンのポケットに入れてから攻め込む。

「仕方がない！ 風精霊の射手12」

僕の攻撃をかわした後、無詠唱版を散らばりながらこちらに向かってくる。

来たか、武器の威力を解くと味わってもらいましょうか。

「本当にこれって鍵なのか？ まいっか」

右手で持っている聖なる剣をゆっくりと下から振り上げる。

すると、こちらに来る魔法の矢12が消滅した。

こんなものか……と僕は聖なる剣も圧縮させてからポケットの中に入れた。

「いきなり来るな、さすがの俺も焦る」

「残りもお願いしますね」

「わかった」

「これで後は鞘と盾と鎖か、聖なる魔力は聖霊魔法で代用するか」

魔法陣が現れ、僕もどきがその中に入ったら魔法陣ごと消えた。

フェイトの仲間が使ってたアレと似てるな。

僕は結界を解除した後、結局、学園に光速で向かった。

もちろん、電車なんて無視。

（3－Aの教室）

誰も休みがいなかった。

マスターも風邪を引かずに登校している。

僕の中で頷いた後、授業をしている最中に長谷川千雨さんの様子が変だった。

何かよくある動作だったが。

チャイムが鳴った後、ようやく思い出した。

きっとこれが無いと関わる事が消えるんだろうな〜と思い、千雨さんの後を密かに付いて行った。

この時、ネギの後ろから1つの影が付いて来てる事に誰も知らなかった。

後を付けて時間を空けてから、千雨さんの部屋の前に立った。

だが、僕は千雨さんの部屋の扉が開いてる事に気付いた。

扉が開いているなんて前回と同じだね。

入ってみるとこんな声が聞こえた。

「今日もちうちうは綺麗だぴょん」

千雨さんいえ、ちうさんがパソコンの前に座りキーボードに指を走らせていた。

相変わらず、こういう事に関してはすごい。

ある意味、才能を感じるよ。

僕は邪魔にならないように観察していた。

「今日はちょっと嫌な事があったの。ウチの担任がちうの全身を嫌らしい目で見えてきたんだぴょん」

「言ってますんよ!」

「って誰だ!」

「こんばんわ」

つい、突っ込んでしまった。

いや、普通突っ込んでしまうと思わない?

目の前にいるちうさんの表情が優れなかった。

「どうかしたんですか?」

「おわった……」

この世の終わりみたいな表情になっていた。

僕は知ってるからどうでもいいけど。

「何がですか?」

「先生は軽蔑しますよね? 私がこんな事してるの」

「いえ、別に良いんじゃないですか? それにとってもお綺麗ですよ?」

前と同じ良い訳で解決させるのが一番だ。

ちうさんがそれを聞いて僕に近づいた。

「なっ!」

「ホームページはしっかり見てましたので最初から知ってましたよ?」

「つまり……最初から私がちうだと知ってて」

「もちろんです。ネットアイドルも大変ですよね?」

「フフフ……」

ずっと見ていたのはファンだったという理由を思い出した。
僕って覚えている部分少ないな。

自分に呆れた様な表情になる僕を見て、笑顔の千雨さんがいた。
あ、眼鏡を外している時の千雨さんって可愛いですよ。

「人前だと駄目になる癖も直した方が良いですよ」

「何を言ってるんだ？ それより10歳で教師なんておかしいと思う」

「それは色々な事情があるんです。この学園は別に意味で怪しいです」

「それは認める。ロボやら明らかに中学生には見えない奴もいる」
「茶々丸さんの事ですか？ うーん」

僕は考える。

ここで僕の正体を知ってもらうのいいのかな？

ネットアイドルの事と魔法の事を取引すれば引き込めるかもしれない。

それを閃いた僕は千雨さんにこう言った。

「実はですね。僕は魔法使いなんです」

「はあ？」

「直球ね」

玄関から入ってきた明日菜さんがって何でここにいるの？

この部屋に入った後、誰かが付いて来てるってのは知ってたけど。
じーっと目を細めて説明を求めると明日菜を睨む。

その視線に怯んだ明日菜がネギに状況を説明した。

「木乃香が何か妙な生き物を見つけたって」

「え？ ああ、オコジョですか」

「知ってるの？」

「とりあえず、千雨さん……ん？」

僕は途中で言葉を止めて嫌な予感を感じる。

明日菜さんに指示を出す。

「明日菜さん、ドアを閉めて！」

「え？ わかったわ」

「何を……!？」

明日菜がドアを閉めた後、PCのモニターから変な動物が実体化した。

動物の姿がライオンに変わり、大きさが2メートルもある。

「な、何だこれ！」

「ですから、魔法で召喚されたものでしょうね」

でも、誰が仕掛けたんだろう。それに子の魔力感じたことがあるぞ？
心当たりを思い出そうとするが、獣が襲ってくる。

こちらに突進してくる獣に対抗するため、僕は魔法の矢1を撃った。
獣に魔法の矢が直撃するが吸収される。

「何？ 僕の魔法を吸収しただと？」

「今のが魔法なのか？」

「そうよ、千雨ちゃん」

明日菜さんが千雨さんを守るように立ち、僕に聞いてきた。

「ネギ、手伝おうか？」

「今からちよつとした強力な魔法使うからいらない」

「そ、そう」

「詠唱なんて面倒だから無しでいいよね……雷の斧！」

ちよつと威力を絞った雷の斧を獣に解き放つ。

無詠唱だから威力は従来より弱い。

獣がそれを吸収しようと抵抗している時、

「魔法の矢10！」

ここで追加として魔法の矢10を獣に発射。

レーザーって言った方が良いのか？

そんな速度の攻撃が獣に直撃する。

「ぐおおおお！」

苦しみながら碎け散った。

声あつたんだ……何でモニターから出てきたのか。
とりあえず、この部屋を精霊魔法で浄化させた。

「こんなものでしょうか？」

「これで終わりよね」

「千雨さん、もう何もないです」

「……夢か？」

「永眠させましょうか？」

氷の塊を掌から作り出しそれをぶつけようとする。

千雨さんが横に振り慌てて訂正を求めてきた。

「冗談だから！」

「そうですか……」

残念そうに僕は氷の塊を蒸発させた。
それを見て安堵を息を漏らしていた。

「明日菜さん」

「何？」

「魔法の事、バレちゃいました」

「……自分で言ってるじゃん」

「そうですね」

あっさりバラしたのは先ほどの様な事が起きると予想だけしていた。
あくまで予想だけだったが、まさか本気で起きるとは…

千雨さんの表情が硬くなっていたが僕の前に近づいた。

「私が黙ってればいいんだろ？」

「そうですね。今のところは黙ってくれればいいです。

明日菜さん、行きましょう」

「え？ いいの？」

「大丈夫ですって」

千雨さんは絶対に行ったりしませんよ、

この頃、まだ非常識嫌いですし巻き込まれるのはゴメンとか言ってた。

前の事を思い出しながら僕は不安そうに千雨さんを見ている明日菜さんの手を引いて

千雨さんの部屋から出て行った。

これで、とりあえず、魔法の事を認識させる目的はクリアしたネギでした。

くネギの部屋く

明日菜さんと僕が部屋に戻ると木乃香さんがオコジヨを捕縛魔法陣で縛っていた。

はあ？ カモ、何をしたんだ？

木乃香さんを見ると溜息を吐いた。

「あ、兄貴！ 助けてくれ」

「カモ君、久しぶり」

捕縛されている状況を無視して挨拶する。

そんな僕を見て目を丸くした木乃香さんが僕に尋ねてくる。

「ネギ君、知ってるん？」

「まあ、ええ。ところで何しに來たの？」

「何か困ってるんじゃないかと思ってな！」

「別に困ってはないかな？ あるとすれば仮契約か」

「「え？」」

2人は驚きの声を上げる。

何で驚いているの？ ああ、オコジヨだからか。

「その事に関しては任しとけ！ で？ 仮契約してるパートナーっていののか？」

カモの言葉が何か違う、まあ気にする意味はないか。

「ここにいる2人だけ」

「じゃあ、何でオレっちがいるんスカ？」

「僕の仮契約の魔法陣だとスカートがめくりあがらないんだよ」
「ほう？ 兄貴も面白い趣味すんじゃねーか」

それを言った瞬間、木乃香さんがカモの言葉に乗っかってくる。

「ネギ君、そんなに下着が見たいん？」

「違いますよ……」

横に逸らす。

あはは……カモ、後で雑巾の刑にしてやる。

自分の招いた事をカモに押し付けるネギであった。

とりあえず、木乃香さんに誤解を解いてから次の話に入る。

「そういえば、この寮でペットって大丈夫なんですか？」

この時の僕はまだそんな事を知らない。

一応、同じように進ませなきゃ僕の計画も遂行できない。
既に例外の出来事が起きているが

「大丈夫や、今からウチが許可貰いに」

そう言って嬉しそうに許可を貰いに行った木乃香さん。

カモにかかっている捕縛魔法陣を解除する。

「カモ君、勝手に行動しちゃ駄目だよ？」

「わかってますぜ、兄貴。それよりも、兄貴の運命的なパートナー
がいるんすよ」

「へえ、それは誰なの？」

何か滅茶苦茶な圧力が襲ってきた。
後ろに振り向くと、なぜか笑顔の明日菜さんがいた。
何気に影がある様な怖い雰囲気だ。気にしちゃ駄目だ！

「兄貴、写真とかないんすか？」

「えーと、出席のやつにありましたよ」

それをカモに見せると、しっぽをビンビンと立たせてその写真に指？を差す。

明日菜さんがじーっと僕を見てきたが、僕が何をしたって言うんですか？

「この子っすよ！ この嬢ちゃんにオレっちは反応したんす」

「本屋ちゃんか、やっぱ仮契約した方がええんとちゃうの？」

何時の間に帰ってきていた木乃香さんが僕の横から呟いた。

気配が感じなかったぞ？と思ってるネギだが、

実は明日菜の視線で気配を感じている状況ではなかったただけだ。

「早かったですね」

「誰にも会わなかったからな」

誰にも会わなかったのか。

どこまで前と状況が違うんだ？

本当にこの世界は僕の過去か？と言いたいぐらい疑問を持った。

「ネギってある意味、問題児よ」

「どういう意味ですか？」

「ああ、そういう意味なら問題児やな」

「え？　どういう事ですか？」

僕の言葉に2人が溜息を吐いた。

呆れた表情にもなっているがよくわからん。

ポカンとしてしているとタンスの上にある目覚まし時計が鳴った。

「修行の時間ですね」

「今日は何するん？」

「え？　ほぼ実践ですが」

すると、明日菜さんと木乃香さんが青ざめていた。

カモは僕達の言う意味に理解できず問いかけてきた。

「兄貴、修行って？」

「2人に魔法を教えているんですが、そろそろ僕も限界なんですよ」

「限界？」

「師匠を僕じゃなくて別の人にしましょうって事」

「「ええ!？」」

「何でなん？」

「僕は基本形しか教えないんです。回復系重視の木乃香さん、接近戦重視の明日菜さんと僕の限界があるんです。

明日菜さんの場合は剣術を学んでる人の方が早いです」

「剣術って誰なんですかい？」

僕は木乃香さんをチラッと見た後、言葉にする。

「桜咲刹那さんです。でも、今はまだ無理ですね」

「せっちゃんか？」

疑問になっている木乃香さんに出席のやつを広げて刹那さんの所に小さく書いている文字を見せる。

出席のやつつてのは正式に読むのがめんどくさいからそう読む。

「神鳴流って書いてるわ」

「これって剣術なん？」

「はい」

本当は獲物を手段としない何だっけ………忘れた。
忘れてしまった事は隅っこに置いておく。

「木乃香さんはエヴァンジェリンさんをお願いしますようと思います。
もちろん、明日菜さんもね。明日菜さんの場合は刹那さんとエヴァンジェリンさん両方からですよ」

「「ええ!?!」」

全体的女子寮まで2人の驚きの声が聞こえたという、嘘だけど。

ちなみに、この話の結論は……

n e x t 第13話へ

第12話『ネットアイドルと妖精』（後書き）

次は停電の日です。ネギVSエヴァの回だけなので短いかもしれません。

第13話『ネギVSエヴァンジェリンの対決?』(前書き)

PV10万ユニーク1万突破ありがとうございます。

これからもよろしく願います。

オリジナル魔法が出てきますが、今回は実力の問題で少なくて短いです。

第13話 『ネギVSエヴァンジェリンの対決?』

色々な事で時間が経過した後の事。

放課後になり、学園からの帰り道に設置しているベンチに座り込み、今の事を考えていた。

いつの間にかこんな日になって日が進むのが早いと改めて思った。1000年も生きているせいで時間感覚が早いのかな? そう思いながら外を眺めていると、

『今日は停電の日です。停電中は十分にご注意ください』

放送が学園を中心とした全ての区域に流れた。

「今日って停電なんですね」

僕に近づいてきたのどかさんが話しかけてきた。その横に夕映さんがいる。

「ネギ先生は停電の対策は取っていますか?」

「大丈夫ですよ?」

「そうですか」

明日菜さんと木乃香さんとマスターがこちらに来た。珍しい面子だと思った。

「ぼうや、今日はわかっているな」

「ええ」

「ぼうやの実力、見せてもらおう」

「いいですよ。ですが、絶対に後悔しないでくださいね」

「ふん！ 上等だ」

強く言ったマスターがどこかへ行ってしまった。

前にクレーター作った事とか忘れているのかな？

僕はマスターの呪いをリアルタイムに設定した。

設定時間は停電と同時に解除する仕掛け。

「ネギ、勝てるのよね」

「大丈夫ですよ、でも明日菜さん」

「あ、夕映……」

「のどこから聞いたです。やはりネギ先生は魔法使いなんですね」

のどかさんを見ると申し訳なさそうな表情をしていた。

聞いたんじゃないかって問い詰められたんだと推測した。

夕映さんの言葉の答えとして頷く。

「夕映、すごいな」

「図書館島の時、あの光はネギ先生の何かだとわかってたです」

「やっぱり見られてましたか」

「それでエヴァンジェリンさんが吸血鬼だという事も」

問い詰めた部分は魔法使いだけじゃなく

あの時、僕が説明した全てを知ってるみたいだ。

ってかここは一般の人も通るんだけど大丈夫かな？

こういう話題を話していると魔法先生や生徒に怪しまれる。

後先が面倒のため、明日菜さんに場所を変えるように要求する。

「明日菜さん、この話題は部屋に戻りましょう」
「そうね」

周りを見回した木乃香さんも頷く。

魔法はあくまで秘匿するもの。

秘匿する理由がわからないがその辺はどうでもいい。

夕映さんやのどかさんにも説明するために部屋へ戻った。

説明した後、停電時間になる前に部屋に帰ってもらった。

そして……

とうとう、停電が起こった。

僕は寮の屋上に杖を持って移動した。

「さて、どうするかな？」

杖を背中に装備し、寮の屋上から景色を見回した。
こんなに暗いと外に出ていたら迷うだろうな。

「動くか」

屋上から飛び降りて杖に跨り、低飛行で移動する。
移動していると、マスターがいたが大人になっている。

「エヴァンジェリンさん、どこにいますか？」

見た事ある展開に呆れながらも、人芝居としてわざとらしく周りを見る。

すると、メイド姿の茶々丸さんがマスターの横に立ち、

「ネギ先生、こちらです」

マスターの方向へ手に向ける。

茶々丸さんも大変ですね〜と合掌する。

「私が闇の福音であるエヴァンジェリン・A・K・マグタウエルだ」

いやいや、マントを広げながら露出のある姿で言われても困る。

それを口に出すと何かを失くすと思って心の中に留める。

「同時に百合吸血鬼な訳ね」

「違う！ それより、何で近衛木乃香と神楽坂明日菜と宮崎のどかと綾瀬夕映がいるんだ！」

マスターが幻術が解いて、僕とは違う方向に視線を向けて突っ込んでいた。

僕はマスターの視線を辿ると顔を引きつらせていた。

観客気分な態度の明日菜さんと木乃香さんがのどかさんと夕映さんを連れて来てるからだ。

こんな停電中に行動できるのはこの2人しかない。

「私が呼んだのよ」

「明日菜さん、連れて来たんですか」

「ネギ先生、がんばってください！」

「なるほど……」

夕映さんがマスターをじーっと直視して頷いた。
何に頷いたのか僕にも分らなかったが、ちよつとイラつときた。

「ふん！ ネギ・スプリングフィールド、私を生徒とは思わずかかってくるがいい」

「遠慮なく行きます。魔法の矢150」

イラつと来た感情として速攻、数が多い魔法をマスターに叩き込む。

「何！？ 魔法の射手 連弾・氷の200矢」

魔法の矢と魔法の射手が次々にぶつかり合い消失した。

なるほど、マスターは本気じゃないか。

本気を出させるために強めの呪文に変更する。

「真の風の精霊450人よ 集い来たりて 魔法の射手 真・雷の450矢」

威力が見た目より高い魔法を使う僕。

これにどう対抗する？

僕はマスターの反撃を楽しむにする。

「くっ！ 闇の精霊500柱 魔法の射手 連弾・闇の500矢」

僕より50多く撃つマスター。

450の矢と500の矢が衝突し合うが、
カスって別の所に当たったりして粉碎している場所もあった。

カスっていない矢が見事に消失して同威力の結果に興味が出た。
だから……僕は笑みを浮かべて次の行動予定を変えた。

「光速詠唱短縮化、雷の暴風 掌握」

螺旋状の魔力の塊をネギの体内にぶち込む。

すると、ネギが黒くなり闇のオーラが包み込む。

黒くなっている僕を初めて見る木乃香さん達は驚愕していた。

制御が数分しか持たない状態で闇の魔法を発動させたため、ちよつとヤバめだったりする。

本来上、こんな予定はなかったが、仕方がない。

「闇の魔法だど!?!」

「雷の神槍」

エヴァが驚いている間に攻撃手段として一番弱い部類に入る闇の魔法を発動。

僕は雷属性の槍を作り出しマスターに向けて勢いよく投げる。
ブン!と轟音が周りに響かせながら飛んでいく。

「くっ! 闇を従え 吹雪け 常夜の氷雪 闇の吹雪!」

それに対抗しようと闇の吹雪を撃つマスター

だが、闇の吹雪では貫通される。

ぶつかり合った瞬間に起きた衝撃波はこの際、スルーされている。
そんな事を気にしないマスターは仕方がないと呟き、広範囲魔法を使う。

「契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ とこしえのやみ えい
えんのひょうが

遅くしかできないのか！　なら、全ての命ある者に等しき死を　其は　安らぎ也　おわるせかい」

ほぼ絶対零度の氷に進みが遅くなる程度だったが、それに焦ったマスターが強引にやっと終わる世界で槍が消滅していた。

僕は槍が消えた事に溜息を吐き、低出力だから仕方がないとマスターを見る。

マスターもニヤツと余裕そうな表情だった。

「人に使う魔法じゃないですよ？」

「闇の魔法もそうだろうって言うか何で知ってる！？」

知っていると強調された言葉にビクツと反応する僕。

バラす気はさらさらないんだけど知りたそうな表情のマスター。仕方がないから、条件を出して話を進ませよう。

「僕に勝てたら教えてあげますが、僕が勝ったら一つだけ拒否権なしで言う事を聞いてもらいます」

「いいだろう。私は悪の魔法使いだから約束は守る」

「ありがとうございます」

よし、これでマスターと仮契約にできるかな？

ネギは前の仮契約カードを全て無くなっている。

なので、多重アーティファクトが使えない。

こんな様子に外野にいる木乃香さんの声が聞こえた。

「エヴァちゃんって悪なん？」

「さあ……」

「そうは見えませんが」

「きつと駄々っ子なだけよ」

明日菜さんの言葉にマスターが騒ぐ。

まったくその通りと思うのは僕だけじゃなかったんだ。

「外野、うるさいわ！」

「だって、ねえ」

「エヴァちゃん、説得力がないんやもん」

「あいつら……後で殺す」

明日菜さんと木乃香さんが同意するように頷いていると、マスターが断罪の剣だっけ？ それを作って突進しそうなマスターにいい事を教えた。

「まあ、弟子の件はあの2人だからご自由に」

「ほう、なら条件を受けよう」

「ちよつと！」

明日菜さんの声を見無視して僕とマスターは約束をした。

口約束だけなので疑問を持つが、明日菜さんの言葉にストレスを感じるんだろう。

「勝負はどうなったのですか？」

「それよりも周りが滅茶苦茶です」

周りには破損した窓ガラスや粉碎された建物が存在した。

停電のため、幸い人がいなかった。

戦う場所も何で街内なのか僕にはよくわかりません。

「私のせいじゃないぞ」

「僕のせいでもないですね」

「ネギじゃない！」

明日菜さんが僕の方を指を差して言うが、
マスターもちょっと破壊してる。

僕がやった行動を思い出して口にする。

「もしかして、雷の神槍のせいですか？ あれの衝撃波は周りを吹き飛ばすだけ何ですが」

「それだと思います」

僕の言った効果を聞いたマスターは呆れた後、柱時計を見て、

「ぼうや、停電が終わりそうだが」

「もう魔力封印はしませんよ」

「そうか……ありがとう」

「何て言ったの？」

「何でもないわ!!」

そうか……の後にあまり小さくて聞こえなかった。

聞いてみるとマスターは頬を赤くして拗ねるようにプイッと横に向く。

「それより、これどうすんのよ」

「マスター、さすがにこれは言い訳ができませんが」

「ぼうや」

「副作用はもうありませんから使いますか。 復元魔法・第2修正」

懐から子供用の杖を取り出して上に向ける。

被害になっていた建物や自然がフィルムのように時間巻き戻し現象が起こる。

元通りになった後、僕は子供用の杖を懐にしまった。

「これで完了です」

「そうや。今からエヴァちゃんの所行こ！」

「何で私の家なんだ!？」

「だって、弟子に入るんなら知っとかなアカンし」

「木乃香の言う通りよ」

あ、そういえば、この勝負の結果はどうなるんだろう。

まあ、後で追求しますか。

とりあえず、話の流れに身を任せる事にした。

「出来れば私は……魔法使いになってみたいかも」

「わ、私も」

のどかさんと夕映さんも付いてくる気満々なようだ。

ここで教える気はなかったんだけどなく。計画の修正が必要かな？
どんどん計画が歪んでいく事に顔を引きつるネギだった。

「仕方がないから付いてこい」

「茶々丸さん、先ほどからしゃべっていないですね」

「いえ、私はマスターの反応でお腹がいっぱいです」

「おい！」

「どうかされましたか？」

首を傾げている茶々丸さんにマスターが両手で頭を抑えていた。

茶々丸さん、何か違いますせん？

違和感を持った僕はマスターに同情のつもりで肩にポンと置いてあ

げた。

その後、僕たちはマスターの家に招待された。正確にはさせた、が正しい。

こうして、僕とマスターの戦いは終わった。

戦いなんか全然ないじゃないか！という事はタブーですよ。

n e x t 第14話へ

第13話『ネギVSエヴァンジェリンの対決?』(後書き)

のどかと夕映が魔法の存在を知る話でもあります。

次回はエヴァの家から：修学旅行は15か16話からです。

闇の魔法で出てきた雷の神槍はオリジナルです。

第14話『魔法の教えと約束』（前書き）

ネギのうろ覚えとオリジナルの解釈があります。
今回は会話ばかりなので地が少ないです。

第14話『魔法の教えと約束』

くエヴァの家く

僕たちはマスターの家へ来て座れる場所に座った。

何で別荘じゃないの？と疑問はあったがマスターの表情を見て言うのをやめた。

疲れた表情が見えたから思ったネギ。

「別荘は面倒だからここで十分だ」

「別荘ちゃうんや……」

「ここでも十分ですよ。今までの話をまとめましょうか」
「そうだな」

茶々丸さんがジュースを持ってきてくれた。

のどかさん、夕映さん、木乃香さん、明日菜さんと回ってきて僕。配り終わった茶々丸さんはペコリと頭を下げて後ろに下がった。

何でマスターの分が無いんでしょうか？気にしてないようだから気にしません。

「エヴァンジェリンさんがここにいるのは父さんの呪いの影響でここにいます。僕の血を吸う事で封印を解こうとしていたみたいですね」

「それで解けるん？」

「解けませんよ？　だって、僕の血は父さんより母親より何ですか

ら」

「何だと!?!」

やっぱり、この頃は知らないんですね。

色々可笑しい事に気付いたのは魔法世界。

「僕から血を吸っても呪いなんて解けません」

「でも、今は解けてるんでしょ?」

「僕が解いたからです。後はエヴァンジェリンさんの自由でどうぞ」
「いいの?」

「制御は既にエヴァンジェリンさんに権限を移行させてますから」

確かにもう僕に権限はないが、再度発動させる事が出来る。

「ほう、ここから出られる訳だ」

「まあ、学園から出て行けるのは学校行事ぐらいでしょうね」

「……確かにそういう約束だったな」

約束なんてしたっけ?

「エヴァちゃん、私と木乃香に魔法を」

「近衛木乃香はわかるが、なぜおまえが?」

「私はネギのパートナーとして強くなりたいの」

「情が移ったのか?」

それを言われた明日菜さんが頬を赤く染めて僕を見る。

助けを求める様な視線だったため、僕がマスターのある部分を責めた。

「良いじゃないですか。あの時に了解したじゃないですか。」

それに、エヴァンジェリンさんも暇だと僕は思います」

「誰も拒否などしていない。聞いたただけだ」

そうなのか、聞いたただけなんだ。

「のどかさんと夕映さんをどうしましょうか」

「私とのどかを？」

「僕が教えますか。初歩的な事なら教えられますので」

教えるという単語で木乃香さんと明日菜さんの表情が青くなった。

「アレが初歩なん？」

「どう見ても鬼そのものだと思ったけど」

「水晶の中で2日間寝ないで鍛えたぐらいかな？」

「やりすぎだ」

マスターはこう言うけど、僕の時はずっと通して魔法の練習をしてました。

この時間に帰る前は暇だったから時間を忘れて修行したら20年以上経ってた。

それを聞いていたのどかさんと夕映さんが青ざめていた。

「大丈夫ですよ、木乃香さんと明日菜さんの時はエヴァンジェリンさんに鍛えてもらうための前提の修行メニューしてましたから」

「前提やったん！？」

「道理でキツイ筈だわ」

「それより、ネギ君、前に言った事覚えてる？」

「前？」

「ほら……デートの事や」

木乃香さん、いきなりですか。

そんな約束したかな……と記憶を探っていると

「「え？」」

のどかさんと夕映さんが驚きの声を上げる。

「覚えてますけど本気だったんですか？」

「キスまでしてんの……」

わざとらしく頬を染めて体をくねらせる。

木乃香さんはこの状況を楽しんでいるように見えた。

「あの、ネギ先生？」

「何ですか？」

夕映さんが僕を視線で殺せるような視線で見てきた。

おかしくないですか？ 何で夕映さんの気配がこんなにある？

「木乃香さんとキスしたんですか？」

「パ、パクティオーですよ」

「ああ！」

「それですか……」

のどかさんと夕映さんが考える素振りを見せた後、頷いていた。
だが、木乃香の言葉で

「仮契約外でもキスしとるよ？」

この場が凍った。

「ほう？ やるじゃないか、ぼうや。さすがナギの息子なだけある」

皮肉を言いながらこの状況を楽しみながら笑みを浮かべるマスター。
茶々丸さんも何か観察する様な目を向けてきた。

「私もされたわね」

「ウチらが寝てる間、ネギ君にキスされたもんな」
「そうね」

記憶にないって！

もしかして、寝ぼけてる時か？
そもそも、いつしたんですか

「あの時の？」

あの時とは両側に明日菜さんと木乃香さんが寝ていた時の事。
それを思い出した僕は天井を見る。

「記憶にないんですが……」

「寝ぼけてたから覚えてる訳ないわ」

「ウチの胸を触ってた」

「木乃香、嘘を吐かないの！」

ちょっと怖い表情で明日菜さんが木乃香さんにハリセンで叩く。
どこから出したのか謎のハリセンに叩かれた木乃香さんが笑って誤魔化する。

「あはは……」

「あははじゃない！」

状況に飽きてきたマスターが呆れた表情で2人に伝える。
かなりしんどくなってきた声色だからわかる。

「弟子に関してだが修学旅行後でいいだろ」

「そんなに遅いん？」

「今からだと思っていたのか？ 準備もあるだろ」

下準備か、というかマスターは修学旅行の準備をしたいだけなんじゃ？

僕はマスターの事を理解していた。

学園の外に行けなかったからわかるけど。

「別にウチらはないんやけど？」

「うんうん」

「私だ！ これだから天然とバカレッドは」

「エヴァちゃん」

「誰がバカレッドだああ！！」

ムツとなる木乃香さんが俯き、魔力と気と同化を使う明日菜さんが吠えた。

吠えると言うより叫ぶが正解。

それを感じたマスターが顔を顰めて直視する。

「咸卦法？」

「違うわよ、これはその咸卦法より負担がかかりにくい初心用だつて」

「そんなものがあつたか？」

魔力と気の同化は誰でもできる後の魔法です。
後でも未来に該当するから未来の魔法と言った方が良いでしょう。

「ありますよ」

「咸卦法より実はこっちの方がいいんです」

「気と魔力の同化、魔力と気の同化と呼び方はどっちでもいいです」
「効果は一緒だからな」

「それってめんどくさくないですか？ 言い方が」

夕映さんが溜息を吐いていた。

言い方が紛らわしいと使いにくい魔法もありますね。

「統一すればいいと思います」

正当な回答をのどかさんが言う。

前もその回答を聞いた気がしたけど、面倒だから2つの言い方で良いじゃん。

と言う事で2つの言い方が世間に知れ渡った。

今からで言う未来だから知れ渡る事になる。が正しいかも。

「のどかさんの言う通りですね。では、どっちにします？」

「咸卦法は気と魔力の合一と言うが」

「では、魔力と気の同化でいいと思います」

「魔力と気の同化ね」

「別名はないのか？ ぼうや」

「咸卦法ジュニアとか軽量型咸卦法、ミニアルテマアーマーですね。
他にもありますが多いです」

他も色々あったが、ほとんどがどうでもよく没ばっかだ。それほどつまらない名前が世界に広まっていた。

その世界は数年で滅んだけどね。

明日菜さんが頬を掻きながら呟く。

「言いにくい名前ばっかねえ」

「あれ？ 明日菜の使う魔力と気の同化って咸卦法より弱いん？」

「使い手によるかも知れません」

ちなみに、僕が咸卦法を半分ぐらいの出力で使うと周りが迷惑になる。

反発し合って爆発を起こすからやりたくない。

ネギの魔力と気は6；4だからそうなるだけらしい。

「咸卦法を習わすか」

「魔力と気の同化じゃ駄目なの？」

「明日菜、咸卦法の方が強いんやで」

「だって……」

切なそうな表情の明日菜さんが僕を見る。
なぜ？

「なるほどな、だが坊やの言った通り、魔力と気の同化はミニアル
テーマー。

咸卦法は究極技法だぞ」

魔力と気の同化は究極技法を負担を低くした長期戦用に変えている。
僕の知っている知識では、咸卦法は長時間不可能と言われている。
それを僕は明日菜さんに説明してあげたら、さらに悩む。

「長期戦の方が良いと思うけど、咸卦法は時間が短いけど強くなれるって事か」

「バカレッドにしては理解が良いのです」

「夕映……ネギ君の修行で魔法に関してだけは良くなってるだけや」

「滅茶苦茶失礼ね、木乃香」

失礼な事を言われた明日菜さんが顔を引きつっていた。

確かに学校の事じゃなく魔法の事だけ上昇した。

「魔法の射手の説明に入りますか」

「私も気になったわ」

「教えてくれへんかったな」

「魔法の射手とは？」

「サギタ・マギカは基本的な魔法攻撃」

「数が多いほど相手をボコボコにできる矢かな？」

「上級には効かないぞ」

「効いてるじゃないですか」

僕は目を細めて効いた人物をじーっと見た。

その人物でもあるマスターがちよっと悔しそうに顔をヒクヒクさせていた。

「だから矢なのですか」

「ぼうや、魔法の矢とか言ってたがあれは……」

「じゃあ、説明しますね。」

これはあくまで僕の解釈ですから実際は違いかもしれませんがいいですか？」

「ふん、聞いてやろう」

「お願いします」

「ぜひ」

全員が頷いた。

未来知識じゃなく初歩的だけならいいよね？

一応、僕の魔法は未来の知識を含んでいるから。

一部の知識を除外して説明を始める。

「魔法の矢は魔法の射手より弱い段階のものです。

ぶっちゃけ、僕が編み出した呪文でもありますから、ほとんどの人は知りません」

威力が弱いから普通の人では扱いにくい説明だ。

「気になったんだけど光速詠唱短縮って何？」

「そのままの意味です。光速で詠唱を短縮するだけです。それをする事により短縮されます。

無詠唱じゃないから詠唱した時と同じ効力ですね」

「そんな簡単に無詠唱ってできるん？」

「普通はできない」

「技量が無いとできません」

「技量あってもできるか！」

当然、マスターの突っ込みが入る。

予想通りの突っ込みをしてくれたお礼として見せよう。

「じゃあ、僕が証拠見せてあげます。雷の暴風で」

「ネギ、止めて！」

「エヴァちゃんの家ぶっ壊す気なん？」

「何だと！？ それほどの威力なのか？」

「エヴァちゃんも聞いたやん」

「詠唱時の雷の暴風じゃないのか!？」

「無詠唱で学園消し飛ぶって言ってませんでしたっけ？
言ってなくてもわかると思ったのですが」

「そんなもん、わかるか!!」

大声で狼のように吠えるマスターがいた。

「1発撃ちましようか!」

魔力をバカみたいな出力を掌に集まっていく。

「ネギ!」

明日菜さんの手が僕の溜めた魔力の塊に触れると消滅した。
消滅させた本人はポカーンとしていた。

「何が起った!」

「エヴァンジェリンさんはご存知が無いんですか? 明日菜さんは

……」

「ん?」

「魔法無効化能力者ですよ?」

疑問の答えをマスターの耳元で小さく呟く。

「はあ?」

「何、どうしたの?」

「本人は自覚してるのか?」

「全然してませんが」

「はあ……あのじじい、黙ってたのか」

「どうかしたん？ エヴァちゃん」

「ん、待てよ？」

「どうしました？」

「どうやって鍛えるんだ？」

まず、そう思うよね。

僕も最初は迷ったけど別荘で鍛えてる時、

マスターが明日菜さんを氷漬けにさせてたっけ？

無効化できる魔法と出来ない魔法が存在する事を知った。

「魔法無効化を無効化させるアイテムがありますから、アイテム經由で通せば」

「なるほど……」

ヘルマンの持っていたアレもそうなんだよ。

僕はあれから調べてたら作れるって知ったから作った。

幸い、そのアイテムはなぜかポケットの中に入っていたというオチが。

「あの……」

「夕映さん？」

「説明は一体どこに？」

「そうでしたね、魔法の矢は魔法の射手より弱いが負担が無いため多く撃てる。

エヴァンジェリンさんに撃った真・魔法の矢は魔法の矢の強力版です」

魔法の矢は属性ではなく純粋な魔力の矢で属性も可能。

真・魔法の矢は属性を入れる事が可能だが、基本的に純粋な魔力。効率が良いのはどちらにしろ、魔法の矢だ。

「魔法の射手より明らかに強かったわね」

「桜並木の所でクレーター作れるくらいやもん」

「使用者によっては魔法の射手より強力になります。

後、精霊の射手と言う者がありますが、これは物質より生命に効果がありますね」

破壊力と言うよりも相手の命を奪う方に有利な魔法。

破壊にも使えるが、魔力が低いと使い物にならない上級向き。

「魔法の射手 真・雷の矢は精霊の射手と同等の能力があって生命と物質両方適正がありますね」

「適正じゃなくて適応だと思うが？」

「適正や適応よりもっといい言い方があるえ」

「何ですか、それは？」

「対応や」

普通の答えに僕はため息を吐く。

まともな答えなんてこんな話題で出されると困るが。

「なるほど……」

「ややこしいな」

夕映さんとマスターが頷いた。

まあ、この魔法は未来の知識のだから当然だよ。

むしろ、真・雷の矢は破壊目的の魔法ですよ。

僕は本当の効果を教えなかった。

のどかさんと夕映さんに初心魔法を説明した。

「よくわかりました」

「魔法使いの道って遠いですね」

説明された二人が感想を述べる。

遠いのは認めるけど、初心レベルから上級になった人もいる。

そういえば、木乃香さんに借りた漫画の本にもあった。

その内容は語ったらイケない気がするからしない。

「今日の所は、これでお開きにしませんか？」

「そうだな。私も準備しなきゃいかんし」

「ウチも……な！」

僕の方にウィンクしてくる木乃香さん。

やっぱりデートする気なんですか……

デートで何の出来事があるか前の状況を思い出した。

そこでフツと思い出した事を言葉にする。

「そういえば、明日菜さんの誕生日ですよ？ 明日」

「ええ！？ そ、そうよ」

何か一瞬だけ慌てていた。

誕生日をこの時まですっかり忘れていた。

明日菜さんの誕生日という言葉に反応した木乃香さんが提案してきた。

「ネギ君、今から明日菜の誕生日プレゼント選びに行かへん？」

「構いませんよ」

「それじゃあ、ウチ、一度寮に戻るからネギ君は駅前で待っていてく

れへん？」

「いいですよ」

木乃香さんが嬉しそうにマスターの家を飛び出した。

ああ、まだ修学旅行の通知が来ないのは何故？

そう思っていたが、今は木乃香さんと約束した場所へ影のゲートを展開。

「では、明日菜さん、夕映さん、のどかさん、気を付けて帰ってくださいね。」

エヴァンジェリンさんもあまり行動は控えてくださいね」

「わかったから、早く行け」

「ネギ」

明日菜さんは僕を呼んだ。

何の用だろう。

僕はまっすぐ見ているが、明日菜さんが頭を横に振って

「何でもないわ。いってらっしゃい」

笑顔で言ってくれたので、僕も返す。

「いってきます」

明日菜さんにそう返した後、僕はのどかさんと夕映さんに手を振った。

のどかさんが小さく手を振ってくれて、夕映さんは頷いただけだった。

この差って何だろうとどうでもいい事を考えていたが、影のゲートに入り込んだ。

n
e
x
t

第15話へ

第14話『魔法の教えと約束』（後書き）

木乃香とデートを入れる予定でしたが分けました。
修学旅行の通知が来ていないのは色々な理由が……次に。

第15話 『ズレていった時間軸と修正』 (前書き)

時間軸がややこしくなっています。

後、その会話が分かりにくいかもしれません。

もし、そうなら申し訳ないです。一応、後の出来事の必須な事なので。

今回もこちらの技量不足により地が少ないです。

第15話 『ズレていった時間軸と修正』

（駅前）

マスターの家から直行でここに来た。

まだ来てないみたいです。

なら、やる事は一つと笑みを浮かべて魔法陣を展開しようとした時、景色が灰色に変わった。全ての人が止まっている。

「ふう……」

僕もどきが帰ってきた。

何かすごく重そうな表情だ。

「ほらよ」

盾と鞘を渡してきた。

僕は盾を圧縮させてポケットの中に入れる。

ポケットの中から圧縮していた剣を取り出し解除した。

「えーと、こうやってやると」

試しに剣を鞘に収めるが、何もなかった。

周りがシーンと静かになる。

静かと言っても景色が灰色で人が止まっているのだから当たり前。

「何も起きないな」

「おい、微かだけど光ってるぞ」

僕もどきが気付いて僕にそう言ってきた。
僕は言われた通りに見ると鞘が光っていた。

「ん？」

光っている鞘から剣を引き抜き、真っ直ぐ天に向ける。
向けた瞬間、強大な魔力が周りに広がる。

「滅茶苦茶な魔力があるな」

「僕もどきでもわかるんですね。推定でも星の一つや二つが消せる
ね」

「そんな危険な物を集めさせたのか!？」

「アヴァロンに書いてある武器は全部危険レベルだけど」

アヴァロンに記載していたのは世界を切り裂くとか色々な表現で書かれていた。

どれぐらい前の書なのか僕には知らないが、昔の魔法は強かったらしい。

顎に手を添えて何か唸っていた僕に僕もどきが別の武器について聞いてくる。

「盾はどんな効果があるんだ」

「全ての概念を反射及び吸収するけど、僕でも数分は無防備になる」

「じゃあ、意味がないな」

「そこで明日菜さんと木乃香さんとマスターの順番です」

隙だらけになるから絶対に仲間が必要だ。

ネギでもこの盾だけはどうしようもないレベル。

例えば、ラカンさんの全力攻撃をこれで防ぐとする。

反射は無防備がないけど、吸収は反動による無防備になる可能性がある。

「面倒な反動だな」

「鎖は？」

「あれは地球上にはないぞ」

「魔法世界って事？」

「鎖だけはやめた方が良くかもしれない」

嫌な予感がしたからだと言葉を続けていた。

地球上に無いって事は魔法世界まで意味がないって事か？

それとも、僕が手に入れるのが駄目なのか？

それは例え、僕の複製だからと言ってもわからない。

とりあえず、現状の状況を僕もどきにも伝える。

「明日菜さんと木乃香さんをマスターの弟子にさせるのは成功しました」

「計画は順調なんだな」

「うん」

確かに計画は順調だ。

例え、のどかさんと夕映さんにバレても誤差が無い。

計画の奥が深いと言うほどだ。

目の前の人物が、僕もどきが真剣な表情で聞いてきた。

「最後に一つだけ聞きたい事がある」

「僕もどきが……何？」

「お前、弱くなってないか？」

その言葉に目を見開いた。

僕もどきにさえ、気付かれてる。

そう、今の僕はここに来る前の魔力と今の魔力を今更気付いた。完全に気付いたのは闇の魔法を使った事を僕は正直に話す。

「やっぱな……お前の闇の魔法は周辺にあるエネルギーを全て掌握させてしまうという世界災害クラスの危険能力だ。

それなのに、それが起こらないどころか制御が危険状態か」

そう言うってから、僕の全てを把握したと頷く。

僕もどきも僕だから当然か……と負けた気分になる。

「闇の魔法いや、マジアエレベアは使わない方が良いのかなあ」

「何も対策を取らずに使ったら、学園どころか日本の電力・生命力などのエネルギーが全て消えるぞ。俺はお前だから理解できる」

そう僕に忠告した後、僕もどきが転移魔法でこの場から消えた。

それと同時に景色が戻る。

景色に色が戻ると、人や電車などが動き出した。

「……」

「ネギ君！」

沈黙していると、私服姿の木乃香さんがようやく来た。

景色が灰色の時、時間すら停止しているからそんなに待っていない。

木乃香さんが僕の顔をじーっと見ていたが、

「それじゃあ、明日菜のプレゼント選びにいか」

「はい」

木乃香さんが僕の手を握り歩いて行った。

でも、これって見た目が姉と弟が手を繋いでいるという雰囲気だった。

（街）

街に着くと、人混みが多かった。
歩きながら話していた。

「何処から行くんですか？」

「どこか行きたい所はないん？」

「ないですね」

「そうなんや……じゃあ、服見にいかへん？」

「はい」

木乃香さんが僕を引っ張っていった。

「この服なんてどうや？」

何か女の子らしい服を見せてきた。

服の詳細は省略しますが、とにかく木乃香さんにはお似合いです。

「似合いますね」

「ありがと……ってウチを褒めても仕方ないやん。嬉しいけど」

「じゃあ、これなんて」

次は微妙な物を出してきた。

木乃香さん、それは服じゃなくて着ぐるみっていうんですよ？
その着ぐるみはウサギだった。

「うゝん、似合いますけど別の意味でいらないです」

「えゝ、ウチは明日菜にこれ着させてみたいんやけど」

それだけなのか……

「じゃあ、これは？」

木乃香さんが持ってきたのはメイド服だった。
何でメイド服？

「これ！」

不思議に思っていると、次々に持ってきたのがレストランとかに行くと見る服だった。

ウェイトレスって明日菜さんが着る訳……

「何のために着るんですか？」

「明日菜なら似合うやろ？」

「普通の服にしません？」

「仕方ないなく、これはどうなん？」

スカートが短めのメイド服だった。

木乃香さんにとってそれが普通なんですか？

ボケてなのかわからないが、ちょっとだけでもよくなりこう言
って釘を刺した。

「真面目に選ぶ気あるんですか？ 無いのなら僕は帰りますが」

「っ！ 冗談やから！」

「でも、服はやめておきましょうか。できるならアクセサリーなど

に」

「明日菜なら喜ぶやろうな」

最初からそうすればいいものを……と突っ込み所があったが気にしない。

僕たちはアクセサリーが売ってる店に向かった。

「指輪まであるやん」

「イヤリングに腕輪、首輪ってくびわ!？」

「首輪ってこれ、なんやろな？」

宝石の様なものが付いてるだけのシンプルな首輪だった。何の目的であるか僕にはよくわからなかった。もちろん、意味は知ってるが僕にはそんな趣味もない。

「指輪にしますか」

「いいな」

「僕は最初から決めてましたよ？　もちろん、普通の指輪ではありませんが」

「ウチはそれでもほしいわ」

「とりあえず、木乃香さんは買っとかないと」

「そうやな」

とりあえず、木乃香さんは明日菜さんへの誕生日プレゼントを購入しました。

その後、昼食のため、バーガーショップで食事をしていた。

「ずいぶんってあれ？」

「どうかしたんですか？」

「何か時間があやふやなんやけど」

「副作用ですよ」

「副作用？」

「たまに時間も戻ったり進んだりする副作用が起こったと思います」
「街を直した時に使ったアレ？」

「はい」

復元魔法の副作用がそう言う事が起こる。

その影響で時間の感覚が全て停電後の翌日が停電日になる。

でも、既に停電が起こった場合はもう起きない。

全ての人がそう認識しているから。

これに気付く者はほぼ存在しないから修正もする必要がない。

「じゃあ、本来上は明日菜さんの誕生日が今日なんや」

「エヴァンジェリンさんの家で1日経過してるんですよ」

「良くわからへんな」

「じゃあ、説明しますね」

停電日が1とします。その後、エヴァンジェリンの家に行って話している間に2になる。

エヴァンジェリンの家から出た時に副作用で1になり、明日菜の誕生日が2になる。

1になっても普通の人全て2になってるから1の出来事は起こらなくなる。

こんなふうに説明をしたら、木乃香さんはわかったように頷いた。

「停電の日に戻ったって事は日付自体も変わってるんやろ？」

「その辺は修正力がかかるからどうとでもなっているみたいです」

復元魔法の第2修正は世界を元に使ってるから副作用も世界クラスで起こる。

副作用が起こった場合、無理矢理元通りにしようとしてるから感覚がおかしくなる。

感覚がややこしくなっているのは基本的に使用者であるネギ一人だ。

「僕でもこの原理は理解できないんですけどね」

例え、1000年生きていても世界の事なんてわかっていない。

分かっているとすれば、並行世界や異世界に飛ぶ魔法解析ぐらい。

この時間に戻る前、ネギは並行世界や異世界に飛んでしまっている。繰り返すごとに少しずつ理解して今に至る。

「魔法の領域を超えてるんやな」

「そうですね。……それより、これからどうします?」

「ネギ君は明日菜のプレゼントを作るんやろ?」

「ええ、その前にエヴァンジェリンさんの家に行く必要がありますが」

「何でなん?」

首を傾げてから、わからないと表情に出ている木乃香さん
どうしてエヴァンジェリンなのか普通なら疑問になる。

ここで忘れてはいけない。

エヴァンジェリンはマジックアイテムを大量に持っている事を。

「材料を持ってるのはエヴァンジェリンさんだけです。マジックアイテムを少し貰おうと思ひまして」

「なるほど」

「僕は食べ終わったら行きます」

「ウチも付いてく」

僕と木乃香さんは食事を終えてから、マスターの家に向かった。

くエヴァンジェリンの家（今後も同じ）く

マスターの家に入ったら、いきなりマスターが僕を持ち上げてこう言ってきた。

「一体これはどうなってるんだ!？」

「マスター、落ち着いてください」

「落ち着けるか!!」

茶々丸さんが手伝ってくれたおかげで、僕はマスターの捕縛から解かれた。

「復元魔法の副作用です。アレは世界を、自然を元に戻しますから時間が」

僕は木乃香さんにした説明をマスターに同じように説明した。マスターは一旦、頭を抱えたが呆れたような表情になる。

明日菜とのどかと夕映は既にないと茶々丸さんから聞いた後、邪魔だ!という視線で僕を見る。

「それより、何しに来た」

「エヴァンジェリンさんにマジックアイテムを貰おうと思ひまして」「どんなのがほしいんだ?」

「指輪に付けられる宝石など」

それを聞いたマスターは手を広げて顎に添える。

「ああ、防壁が発動する守りの宝石がどっかにあったな」

「それをくれませんか？」

「タダでか？」

「じゃあ、見せてください」

「タダでか？」

「見せるぐらいならいいじゃないですか」

「複製するつもりだろ？」

水晶の時、見られてるんだっけ？

その事を思い出した僕はだるい気分になった。

見せるぐらいいいじゃないか。

仕方がない。マスターは一体どうやってら見せてくれるか探そう。

「何が希望なんですか？」

「ぼうやの血だ」

「ネギ君の血！？」

それを聞いた木乃香さんが僕を守るようにギューっと抱きしめる。

何か柔らかい物が当たっている。

男としての理性が警報を鳴らしていた。

10歳の体に慣れたせいで1000歳の頃の体組織が働き始めている。

そのせいか、欲が強くなっている。

それと闘いながらもマスターに言う。

「別に……構いませんよ……でも、木乃香さん離してもらえませんか？」

「あ、ゴメンなく、ネギ君」

そう言って離れた木乃香さんはマスターを警戒する様な表情で見て

いた。

そんなに警戒しなくてもいいのに。と僕が言っても無駄だろう。

「そういえば、こんなのがあったな」

1枚の紙を僕に渡してきた。

何だろうと思い受け取って顔をヒクヒクと痙攣した。

「修学旅行通知？ 場所は京都、明後日！？」

「修学旅行って明後日なん？」

「ここに書いてある日で言うそうですね」

「明日、準備の買い物かな！」

「僕はもういいですよ……とりあえず、エヴァンジェリンさん、血を」

「ああ」

血を提供したら、マスターが奥の部屋に行き30分後、戻ってきて僕にその宝石を投げた。

宝石を受け取った僕はマスターにお礼を言って木乃香さんと寮の部屋に戻った。

戻ったと言っても正確にはネギと木乃香が影のゲートで部屋に戻った、だ。

next 第16話へ

第15話『ズレていった時間軸と修正』（後書き）

次から修学旅行編に入ります。

展開がややこしくなってすみません。

そろそろ第15話までの基本設定を公開した方が良くもしません。

第16話『修学旅行編1』（前書き）

修学旅行編に入ります。

何話、修学旅行に費やすのかも既に決まっています。

明日菜と木乃香のネギに対する感情が原作より真っ直ぐになってる。
木乃香は真っ直ぐ過ぎるかも。

第16話『修学旅行編1』

（ネギの部屋）

ようやく、この日が来た。

全ての始まりでもある僕の出発点。

僕とフェイトが初めて戦った出来事。

そう思いながら下へ降りて、赤いソファに座る。

「今日から修学旅行か、何か忘れているような？」

「そうね、私にプレゼントしてくれるって言いながら渡してくれてないのよね」

黒いオーラを出しながら僕の隣に座る明日菜さん
しまった！ 渡すの忘れていた。

昨日、僕は明日菜さんにプレゼントを渡すと言ったから
それを期待して待っていた明日菜さんを忘れて眠ってしまった。
機嫌が悪そうな雰囲気、オーラを出している。

「うう、今渡せばいいんでしょ？」

と言って、昨日完成していた指輪を明日菜さんに渡す。

指輪に付属している宝石が薄く光っている。

自分の能力を増幅させる効果を持つ。

受け取った明日菜さんは顔を赤くして

「え？ あ、ありがとう……」

とお礼を眩き、指輪を丁重に薬指にはめる。
薬指に付けた明日菜さんは指輪の宝石を撫でていた。
そこまで喜んでくれるとこちらも嬉しくなる。
マスターに頼んだ甲斐があった。

「明日菜、満足そうやな」

「木乃香!？」

「木乃香さん、おはようございます」

「ネギ君、ウチにもほしいわ」

最初っから聞いていたのかと聞こうとした時、木乃香さんが僕に抱きついてくる。

抱き付いてくる木乃香さんの表情は拗ねている態度だった。
僕が感じたのはそれと親友の嬉しそうな表情とで複雑な感情が見えた。

「何がほしいんですか？ マジックアイテムとしてなら」

「心に残るもんがええな」

「心に残る？」

「こ、木乃香、まさか……」

赤くなりながら、木乃香に指を差していた。

何で赤くなっているのか僕には分った。

だって、僕も同じことを考えている。

僕を見てクスッと笑い、木乃香さんはニヤツとからかう様な笑みを浮かべた。

「明日菜、今どんな想像したん？」

「ええ？」

また赤くなる明日菜さん。

僕も想像してしまった事を木乃香さんに悟られてはいけない。

「木乃香さんのは後にして 修学旅行の準備をしますか」

「そうやな、昨日はそれ用を買いに行ったんやから」

「木乃香がネギの服を選んで時間が過ぎたり、

ネギが絡まれてる女の子をバレない様に魔法使ったりしてでしょ？」

「ネギ君の魔法でやられた人達の所に救急車が来てたりは気のせいやな」

買い物の途中、変な男ども、雑魚役が女の子を強引に付き合えという展開があった。

それを見たネギは片っ端から一番弱い魔法で男どもを大怪我ぐらいの重症に合わせた。

その後、サイレンが鳴ってタンカで運ばれていたという。

状況を眺めていたネギは明日菜と木乃香に笑みを浮かべたまま

「では、行きましょうか」

とまるでそんな事が無かったような雰囲気漂わせていた。

その表情に苦笑いするしかかった明日菜と木乃香だった。

その時、ポケットの中に入れている所から音がした。

何事かと探っていると、携帯電話が震えている。

振動機能も付いているので分かりやすい。

僕は電話に出た。

「もしもし」

『ネギ君』

「妖怪爺じゃない、学園長」

『今、妙な事を言わなかったかのう？』

「気のせいです、何の用ですか？」

『実は渡したい物があるんじゃない』

前回と同じなら親書かな？

親書を盗んでくる連中が居たっけ？

月詠さんとフェイトと……後は誰だっけ、忘れた。

「渡したい物ですか？」

『来てほしいんじゃないが……』

「分かりました。では」

ぶちっと電源を切り元の場所に直す。

明日菜さんと木乃香さんに早く出る事を言う事にした。

「明日菜さん、木乃香さん、僕はこれから用事が出来ましたので出ますね」

「ほな、ウチらもいこか？」

「そうね」

と、明日菜さんがそのまま出て行こうとする。

いや、待て！ そのまま出られると指輪が……

明日菜にあげた指輪の裏にネギの名前が刻み込まれている。
それがバレたらまずすぎる。

「明日菜さん！」

「何？」

「その指輪はポケットの中にでもしまってください！」

「え？ どうして？」

「指輪の裏に僕の名前が刻み込んでいます。もちろん、それは影響を与えるための契約です」

僕の言葉に明日菜さんが葉指から指輪を外し、指輪の裏面を見た。そこには確かに、ネギ・スプリングフィールドと書かれている。

名前を見た明日菜さんがみると赤く染まり、素早くポケットの中に入れた。

「委員長辺りが見たらまずいわね」

「そうやなく」

「では、僕は行きますね」

行こうとした所で木乃香さんに止められた。

止められたと思ったら、ほっぺにキスされ、耳元で囁く。

「いってらっしゃい」

「いってきます」

「ちょ……!？」

もう行かなきゃいけない。

僕は明日菜さんの驚く表情を無視、玄関とは違う方向の窓から飛び出した。

飛んでいく中、僕はちょっと考えていた。

「並行世界や異世界に行った事もあるけど、他世界の魔法を使った駄目なのかな？」

とんでもない事を考えていたが、飛行速度が早いせいで学園の上に着いた。

「駄目だ、考える時間もない」

学園寮からここまで来る最速がフィルム1コマも経たない。でも、そんな速度出したら普通は衝撃波の影響で周りが消し飛ぶ。それを防ぐためのバリアを習得済みだ。

超光速以上の速度を目指して魔力や気を覆わずに体を鍛えていた。まったく、無駄な事ばかりして、結局は超光速辺りまでしか出ないネギであった。

学園長の部屋へ直接向かった。そのままの速度で

（学園長室）

壁が粉々に吹き飛ばしたネギが入ってきた。

「何か御用ですか？」

「ネギくん、普通に入ってくれんか？」

「別に良いじゃないですか。復元魔法・第1修正」

景色が見える壁に手を向ける。

掌が魔力で集まっていき、光り出すと壁が修正されていた。

「すごいもう」

「誰でもできるじゃないですか」

「いや、魔法学校卒業程度でできるわけなからう？」

「それより、用件をお願いします」

「では、これを西の長に渡してもらいたいんじゃないか」

「西の長？」

「そこから説明しなければいけないかの？ 関西呪術協会という組織が存在する。」

関東呪術協会も存在してワシがその長じゃ」

「それが何の関係があるんですか？」

一応、知ってるけど聞いておかなきゃいけない。

警戒されてもこちらが困る。

そんな状況になったら横の時間に逃げるけど……。

無責任な事を考えるネギは学園長の話聞く事にした。

「関東と関西の呪術協会は仲が宜しくないんじゃ。ワシは仲良くしたいと思うて、ネギ・スプリングフィールドとエヴァンジェリンに任せようと思うてな」

「エヴァンジェリンさんも行く気満々でしたし、今更やめても仕方がないです」

「この件に関しては魔法先生や生徒の連中には黙っておくから安心せい」

「面倒になった瞬間、魔法で黙らせますか」

やる気満々の意志として魔力を放出させる。

もちろん、部屋限定の結界を貼っている。

「ネギ君、お主はマギステル・マギを目指しておるんじゃないかかったかのう？」

「はい」

僕の言葉に困ったように唸っていた。

本当は目指す気もないけどね。僕自身は目指す理由がもうない。
なぜ魔法世界の裏まで知っててあの未来を知ってる僕がやらないと
駄目なの？

その感情を隠して唸るおじいちゃんに要求する。

「手紙で伝えるなら渡してもらいたいのですが」
「親書じゃろ？ ほれ」

手紙の入った封筒を僕は受け取る。

「色々と妨害があるかもしれんから注意……するまでもないじゃろ
な」

「はい。大丈夫ですよ？ エヴァンジェリンさんの本気と互角に戦
えます」

本当は世界のひと……ってどうでもいいか。

受け取った親書を懐に入れた僕は学園長に行く事を伝えた後、影の
ゲートに潜る。

潜る瞬間に見た学園長の表情がまたそれか……とかそう言っていた
気がする。

（集合駅）

ここは大宮駅。

集合場所がここになっている理由は新幹線で行くらしい。

新幹線と僕はどっちが早いんだろうとかどうでもいい事を考えなが
ら歩く。

集合場所に着いたら明日菜さん達がいた。

「ネギく〜ん！」

「やっほ！」

僕に手を振っているまき絵さんと亜子さん

何かこうして見ると皆が若すぎて僕が年をとり過ぎているのか。

元気に走ってこちらに向かってくるまき絵さん達を見る。

「ねえねえ、ネギ君、京都楽しみだね！」

「はい」

僕の事を見ていた夕映さんとのどかさんが意味ありげな視線を向けた。

魔法の事を知っているのは明日菜さんと木乃香さんを除いたら2人か。

「ネギ先生、貴重な経験をしたいです」

「私たちも楽しみです」

「貴重な体験ねえ〜」

ハルナさんが夕映さんの言葉に怪しそうに笑みを浮かべていた。

ビクンと反応した2人に対し、僕がハルナさんにちょっとだけ忠告した。

「ハルナさん、あまりそう言う事を勘ぐったらだめですよ？」

「ネギ君、夕映とのどかの事、好きなの？」

「ハルナ、何を言ってるのですか！？」

「そうだよ、ハルナ」

「ネギ君、そうなの？」

「そ、そうなの？」

裏目に出たか……武道会で分かっただけの事はある。

ハルナさんのせいでのかさんと夕映さんが赤くなっているし、それを聞いていたまき絵さんとアキラさんが聞いてきた。

何で同じ言葉ばっか聞くんだ？と首を傾げて考えていると、

「そろそろ出発の時間ですので、決められた新幹線に向かいます」

源しずな先生がこの場にいる生徒達へ叫ぶ。

その声に全員動き出した。

皆が新幹線に乗り込んで席に座る。

僕は全員を確認して注意をした後、職員用の席に座った。

職員用といっても皆が座っている場所より前の方なだけ。

眠ってしまおうかと無責任な事を考えた。

「眠い……眠すぎる、無駄に年をとると疲れるのう」

似合わない言葉を吐き、目を瞑り眠った。

（????？）

ネギが眠っている中の夢。

あの世界は滅びる運命だ！

違う！ この世界もあの世界も全て滅んではいけない！！

あの世界が滅ばなければこの世界が滅びる事になる。

知るか！ お前らの勝手に俺の仲間も被害が出た！

あの世界のお姫様はこの世界に住むべきではない。

お前は真実を知らない、あの世界の本当の存在理由を。

君……ネギ君……

暗い空間で響いた声が薄れていき、僕を呼ぶような女の子の声があった。

く新幹線く

「ネギ君！」

その声で僕は目が覚める。

覚めた後、声の人物を見ると木乃香さんだった。

僕は目を覚まして立ち上がり、皆の方を見ると

「カエル？」

首を傾げて状況を把握しようとした。

お菓子の中などからカエルが出てきたりしている。

「これって何なん？」

「多分、妨害でしょうね」

「妨害！？」

「きっと、兄貴を妨害するための罠ですぜ！」

僕の鞆からカモが現れた。

何時の間に鞆に入っていたんだ？

まあ、別に良いけど……とカモをじっと見た後、カエルに向けて

「光速詠唱短縮 原子崩壊」

呟いたら、カエルが苦しくもがきながら消えていった。

誰にも悟られないように消したから大丈夫だと思う。

油断していたせいで、いきなり鳥がこちらに飛んできて懷の中にある親書をパクって行った。

「あ……」

「ネギ君、アレ何なん？」

「親書です」

「親書！？ 大事な物やん」

木乃香さんがその鳥を追いかけて行った。

ちよっと待て、そっちに行くとし那さんがいる。

まあいっかと今後の展開に溜息を吐いた後、木乃香さんの後を追う。

新幹線の出入り口前に人がいた。

刀を荷物に持つ少女、桜咲刹那だった。

封筒を口に咥えた鳥が通り過ぎたのを見た刹那が刀を抜いて一振り

する。

鳥は紙のように真っ二つになり消滅した。
消滅した際、封筒を拾ったら

「親書」

走ってきた木乃香に驚く刹那がどこかに逃げようとした瞬間、
木乃香が刹那の事に気づいて近づいて呟く。

「せっちゃん」

その後にネギが木乃香さんに追いついた。

「木乃香さん、刹那さん」

2人の重い雰囲気は僕が崩そうといきなりこう言った。

「刹那さん、木乃香さんは刹那さんと仲良くしたいと思いますよ？」

「……せっちゃん」

「私はお嬢様を守るだけで……」

「嫌や！」

「!？」

頭を横に振る木乃香さんの否定にビクンと反応する刹那さん

木乃香さん、思いを伝えたらいいと思います。

この状況を優しく見守る僕。

「ウチはせっちゃんの悩みも任務も分からへんし、どう思われてんのかウチもワカラへん……でも、せっちゃんはウチの親友やろ？ 任務とか護衛とかそんななんどうでもええやん！ それだけでウチを避

けるん？」

「お嬢様……」

「それにせっちゃんが隠してる事も知っとるえ！　それが一体何なん！　ウチはただ、せっちゃんと仲良くしたいだけやのに……」

「隠してる事……？」

「刹那さん、翼の事ですよ」

「！？」

眼から涙を出している木乃香さんを見て驚愕する刹那さん
表情が青くなっていくが、だんだん泣きそうな表情になる。

そう、木乃香さんは知っているという思いが刹那さんに伝わった。
刹那さんはどうしようか手が震えている。
だから、僕は刹那さんにこう言った。

「木乃香さんが僕に打ち明けてくれたんです。ほぼ初日から数日後ですが、その時の木乃香さんの様子が切なかったです。だから、ここで打ち明けたんですから今度は刹那さんが本当の気持ちを打ち明けてください」

と伝えた僕は2人の邪魔にならないようにこの場から去った。
元の席に戻ろうとした時、明日菜さんがいた。

「どう？」

「多分、大丈夫だと思いますよ？」

明日菜さんも見ていた。

木乃香さんが刹那さんと鉢合わせになるのを。

これで仲直りになればいい。そうすれば、信頼が生まれる。
そう、かつての様に……。

ネギからすると未来の2人の姿を思い出していた。

出入り口のドアの向こうにいる2人を微笑んでいた。

「明日菜さん、席に戻っていきませんか」

「わかったわ」

向こうを見ていた明日菜さんが僕に頷き、元の席へ戻っていった。てっきり、2人の所に行くかと心の中で思っていました。そんな気分でしたが今後の対策を考えるため、腕を組む。何か忘れているような……と考えていると思いついた。

「あ、親書返してもらってない」

とその発言が空しく響いていた。

そして……

京都に着いた。

n e x t

第17話へ

第16話『修学旅行編1』（後書き）

あまりいらぬ部分は省略してあります。

設定を次に公開して第17話目はその後に。

設定に関しては現時点までの話にします。では、

第17話『修学旅行編2』（前書き）

この話と設定を更新。

物語の運命の始まり。

第17話 『修学旅行編2』

〽清水寺〽

京都に着いた僕達は名物巡りをしていた。

明日菜さんと木乃香さん、夕映さんにまあ、その他人物かな。飛び降りて有名な場所にいた。

「これが噂の清水寺か」

「誰か飛び降りろ！」

「では、拙者が」

「明日菜さん」

「嫌よ」

僕が明日菜さんに視線を向けるとそっぽを向いた。
何で分かったんだ？

「まだ何も言っていないじゃないですか」

「表情で分かるの！」

表情に出ているらしい。

僕自身は表情を隠す自信があ、ないや。
今、思い出した事に顔を顰めた。
とりあえずという後付けにこう言った。

「体力ばかりで誤魔化せます」

「無理よって何であたしがやらないと駄目なのよ！」

「決まってるじゃないですか」

「「そっちの方が面白いから（だろ）」」

マスターの声と同調した。

びっくり仰天した明日菜さんがマスターに指を差す。

「何でエヴァちゃんがいるのよ！」

「いたらいけないのか？」

「マスターは今朝から準備してました」

「今朝じゃなくて前日の夜からだったり」

「さすがネギ先生です」

「……ふん！」

マスター、相変わらずのツンデレぶりです。

そっぽを向いているマスターの様子を眺めている茶々丸さんがいた。こんな茶々丸さんは並行世界になかないかも知れない。

「ネギ、とりあえずやる事があるんでしょ？ 親書の事とか」

「知ってたんですか？」

「木乃香から聞いたの」

今回は僕一人で行動したかったんですが仕方がない。

付いてきそうな明日菜さんがいるから予定を変更しよう。

片っ端から原子崩壊無双出来ると思ったのに！とか思っていないぞ。

「そうそう、ここから先にある恋占いでは有名な地主神社があるそうです」

少し距離が離れた所から夕映さんがそう言った途端、委員長さんとまき絵さんが来た。

言う事がほぼ同じなんだろうな。

「ネギ君、行かない？」

「ネギ先生、私と縁結びに行きませんか？」

「……」

両腕に胸、マシュマロが当たってる。

でも、片方はちよつと足りない？

感触を味わってると3つぐらいの殺気を感じた。

殺気の気配を感じるのは明日菜さんとマスターにとって何でマスター
！？

「あの、エヴァンジェリンさん？」

「ふん」

何で機嫌が悪くなってるの？

不貞腐れてどこかへ行ってしまったが、問題がまだ残っていた。

「ネギ君……？」

3つの殺気どころじゃなかった。

特に一人の強い殺気が僕に近づく。

強い殺気に僕が振り向くと木乃香さんが笑顔らしき表情で見っていた。
本当にその表情はやめてほしい。マジで怖い。

「木乃香さん？」

「何なん？ ネ・ギ・君」

「とりあえず、行きませんか？」

「誤魔化された気分やけど、修学旅行やもんな」

最初からそう言ってくればいいんです。

木乃香の表情がある意味怖かったネギであった。

「そうですわね」

笑みを浮かべた後、委員長さんが景色を見ている明日菜さんを見る。

何だろう……明日菜さんを見ている委員長さんの目が真剣だ。依然と違う関係にでも進展したのかな？

「眼を瞑って岩の所まで行けば恋が実ると言われています」

「では、私から行かせてもらいます」

「私も！」

ん？　こっつて確か妨害があるアホな場所だっけ。

思い出したネギは木乃香さんの手を握る。

まずい、木乃香さんまで巻き込みたくない。

木乃香も出ようとしたがネギに止められた。

「やめてください」

「どうしてなん？」

「直ぐにわかります」

僕の言葉に首を傾げていたが、それが出来事として発生する。

委員長さんとまき絵が岩前の寸前で落とし穴にはまって落ちた。

落ちた2人を救出しようと別の人が助けていた。

そんな状況をよそに木乃香さんが怪しいと眼を細めて聞いてくる。

「……ネギ君、知ってたん？」

「まあ……」

「そうなんや。でも、ネギ君」

「何ですか？」

不満な態度で唸っている木乃香さん

「ウチに、んくん、ウチらに隠してる事無いん？」

「何を言ってるんですか？　ある訳ないじゃないですか」

動揺しながらも答える僕。

そんな僕をじーっと疑いのある目で見ていた木乃香だったが、

「隠してないですよ。それより、刹那さんとはどうなんですか？」

2人きりにして進展があればいい。

あれからの事を僕は聞いてみた。

「考えさせてだって」

「いいんですか？　木乃香さん」

「気持ちの整理だけやって、でも、せっちゃんに隠してる事あるからウチも人の事は言えんやん」

確かに、木乃香さんは魔法を知っていて修行も積んでいる。

刹那さんも隠していたのだから同等に見える。

人の過去の重さは違うから、その人によって違うんだろう。

「ねえねえ、ネギ君！　このお水おいしいよ」

ヨロヨロになりながら近づいてきたまき絵さんから何か違う匂いがした。

アルコールの様な何かだ。

「お酒!？」

「何でお酒なんか」

「あれでしょ？」

明日菜さんが指をさしたのは上にある樽を指していた。
そういえば、そんな事もあったのか。

「はあ……いいや、エヴァンジェリンさん、手伝ってください」

観客として建物を見ていたマスターは嫌な表情になった。

「何で私が」

「魔法の矢3」

魔法の矢3を的としてマスターに向ける。

これは手伝えと僕の意志が伝わるようにした。

「おい！」

「マスター、私はマスターを守……静観してます」

「ちょっと待て！ それでも私の従者か！」

「そうですけど何か？」

何を言ってるんだ？ 的な表情で首を傾げていた。

何の影響か知らない茶々丸にそれはもう無駄な努力。

「明日菜さんも手伝ってください！ このままでは修学旅行を中止
になってしまいます」

「わかったわ！」

「ちっ！ 不本意じゃないが仕方がない。茶々丸、手伝うぞ」
「わかりました」

酒を飲んでいない人たちと一緒にホテルまで直行させた。
ちなみに、まき絵さんの後に飲んだ人が多くて先生にバレかけた。
バレかけた瞬間、僕が眠りの霧を使って寝かせたため問題がない。
それを見ていた明日菜さんや木乃香さん達が苦笑いしていたという。

く嵐山く

ホテルの1階で休憩する僕と明日菜さん
木乃香さんは別行動。
そこで何故あんな事が起こるのか説明をする。

「実はですね、関西の変な魔法団体に狙われてるんです」
「また魔法がらみか、多いわね」
「多くてもいいんですがストレスがたまるんですよね」
「電車の時のカエルとか落とし穴とか子供のいたずらレベルね」
「子供でもお酒はありえないんですが」

「これからどうするんすか？」

ニョコつと僕の懷から出てきた。
何か違和感があると思ったらカモが原因みたいだ。

「いたの？」
「カモ君、いたんだ」

「オレツチってそんなに薄いんすか？」

存在感がないと落ち込むカモ。

付いて来てるどころか存在感すらなかった。

「否定できない」

「小さなミジンコ並みの存在でしょ？」

「オレツチはマスコットキャラッスよ！」

誰が決めたの？

しゃべるオコジョで男の顔にした時はかなり気持ち悪かった。

それに気づいたのは今から数年後だ。

「これからどうするの？ 親書を届けるのよね」

「ええ、さっさとあの筆頭爺さんの役目を終わらすしかないです」

「これって学園長のせいでしょ？ 何でネギにやらせるわけ？」

「それは簡単ですよ、これが僕の試練として役に立つからです」

元からそう考えている。

大体、そんな役目は大人の人がやるべきなんだ。

例え、英雄の子とか言われていても関係がないと明日菜さんに愚痴った。

明日菜さんは納得しながらも心配な表情で僕に聞く。

「ネギ一人で大丈夫なの？」

「うーん、十分に大丈夫ですけど抑止力として来てください」

「抑止力……つまり、止め役ね」

抑止力という言葉に納得して頷く明日菜さんに溜息を吐いた。
それで納得されても困るんですが……。

実際、水晶の中で何もかも破壊しまくってるからなのか。

「ちょっとでも戦闘モードに入ると京都が消し飛ぶかもしれません」
「……わかったわ。行く」

賛成するしかなかった明日菜さん

「お風呂入りに行きますか、明日菜さんも一緒に入りますか？」
「は、入る訳ないでしょうが！」

明日菜さんが赤くなりながら否定する。

僕は露天風呂に向かった。

残った明日菜はネギがいなくなった後

「ま、まあ……2人きりなら別に……」

恥ずかしそうに小声で呟いていた。

露天風呂

僕は体をきちんと洗った後、湯に浸かる。

「大変な事になったな」。僕の計画が狂ってるし

バレる段階が早いし、行き当たりばったりすぎる。
もっと狂う気がする。例えば、僕の知らない秘密がチラチラと存在

する。

「ふう……」

やっと休憩ができる。

最近はいきなり！という出来事が多すぎる。

誰かが入ってくる音と気配がした。

その気配が桜咲刹那さんだった。

肌がとてもとても綺麗でした。

一体どこを見ているんだ？ このネギは。

「ネギ先生にも困ったものです。もう少ししっかりしてもらわないと」

刹那さんが頼りにさせてくださいた的な雰囲気を出す。

僕って頼りなし？

「別の意味でしっかりしてますけど、アレでは……」

湯に浸って気持ち良さそうにしていた。

何かほとんど違う印象になったな。

「木乃香お嬢様……」

夜の月を眺めながら何か考えているみたい。

僕は刹那さんの方へ真剣に見る。

真剣に何を見ているのかは想像で。

「ん？ 誰かいるのか！」

ヤバ……気づかれた。
さすがにマシユマロとか綺麗な部分を見ていたのがいけなかったのか？

「出てこい！」

出てこいと言って出てくる者は存在しないんだと思う。
仕方がない。

「出てこないなら切る！」

刹那さんが僕の方へ突っ込んでくる。

僕からは刹那さんを見る事が出来るが、

刹那さんは湯気で僕の事が見えないみたい。
とか考えている内に岩が切れた。

「魔法の矢1」

仕方がなく攻撃する。

それを弾こうと刀を抜いて振る。

すると、衝撃波が発生して後方へ下がったが、瞬動を使ったのか
僕の前に来て、素早く右手で首と左手で下半身の急所を掴んだ。

首を掴む力は喋れる程度だったが、下半身の急所を掴む力は優しかったりする。

これはちよつとヤバい！と別の意味を考えているネギ、一体何を考
えている事やら……

「刹那……さん」

「え？　ネギ先生」

「ぼ、ぼ、僕の急所、離して、くれませんか」

ヤバい欲望を抑えながら離してもらおうと苦しげに言う。

刹那さんがようやく気付き、僕の首と下半身の急所から手を離してから距離を取った。

「す、すみません」

「いえいえ、それより、何でいきなり」

「敵かと思ひまして」

「殺気を出した覚えはないんですが」

「う……」

「木乃香さんの事ですか？」

「はい」

「木乃香さんは刹那さんの翼の事を知ってますよ？

悲しそうにしてたのは本当なんですから」

「私は裏切り者ですから」

「京都の神鳴流ですか？」

「そうです。でも、私はこのちゃんといたい。いいんでしょうか」

「それはわかってると思いますが、木乃香さんは刹那さんの全てを否定しません。刹那さんも自分の気持ちを素直になっってみたらどうですか？

素直にならなければ、永遠に失う事もありますよ……」

昔の事を思い出した僕は悔みながら刹那さんに伝える。

今更、自分の過去なんてどうでもいいはずなのに……

「ネギ先生はあるのですか？ 失った事が」

「……あります」

「そうですか」

悲しい表情をしている刹那は俯くネギをじーっと見ていた。
が、ここで僕は気づいた。

ここは風呂場、刹那さんの状態、僕の状態とここまで言えば、もう
お分かりだろう。

だから僕は刹那さんに忠告した。

「刹那さん、見えてますよ？」

「え？」

何が見えているのか確認する刹那さん
自分の状態を見て真っ赤に染まり隠す。

「ひゃあああああゝっ！」

木乃香さんの悲鳴が聞こえた。
結構なボリュームなので大きく響き渡る。

「木乃香さんが襲われてる、いや攫われてる」
「このちゃんが！」

必死になって刹那さんが急いで走っていった。
やっぱり、攫われるのか。
魔法知ってる知らないでは何も影響がない。

「影響が何もないか、それがわかったただけでも良しとしますか。さ
て」

考えをまとめた僕は刹那さんの後を追った。

走る速度はあまり当時と変わらないが。

着替え場に小さいサルが木乃香さんと明日菜さんの服を脱がせている。

ほうほうって感心していると、

そんな僕を見て赤く震えていた明日菜さんが咸卦法を使ってサルを消した。

あのサル、可愛い悲鳴で消えていった。一瞬で消えるとは強くなっている。

「木乃香、大丈夫?」

「大丈夫やけど……あ、せっちゃん」

「このちゃん!」

必死な表情の刹那さんが裸でいる木乃香さんを抱いた。

刹那さんも裸なのは本人も忘れている。

「せっちゃん……」

「あの、いい所でゴメンなんだけど裸で抱き合うのは見てて辛いわ」

明日菜さんが頬を恥ずかしく染めてから、二人とも裸なの忘れているのか?

「「え?」」

「ネ、ネギ先生!」

「ネギ君!」

刹那さんと木乃香さんは僕がいる事に驚いていた。

正確には、まだいる事になんだろう。

「木乃香さんと刹那さんは百合な関係だったんですね。わかりました、よくわかりました」

勝手にそう決断した僕はこの場から去ろうと出口へ目指す。

「ちょ、違うんやってネギ君！」

「ネギ先生、誤解ですよ！」

慌てた2人が立ち去ろうとする僕に誤解を解こうとしているが見えぬふりをする。

誤解も何もない。2人がキスするぐらいだし、仕方がないよ。それより、服を着てほしいよ。

「お邪魔しました」

行こうとしたが、変なおばさんが来た。

「木乃香お嬢様、ウチと来てくれへん？」

関西弁みたいだ。

ああ、思い出したぞ？

確か、えーとと考えて言うと状況が進んでいた。

「このちゃんに指一本触れさせんぞ！」

「そうよ、木乃香を攫おうなんて許せないわ！」

「ほな、行きなはれ！ 猿鬼」

変なおばさんが札を投げて巨大なサルを出してきた。

まるで、前に、今で言う未来で見たアニメ。

そこからピカって出てくるアレを思い出した。

「くっ！」

さすがにここで戦われるのは面倒だ。

ある程度、距離を離れた場所に移動するのが一番。

「高位転移魔法・極移」

透明の魔法陣が着替え場を中心に展開。

展開した後、いきなり場所が変わった。

着替え場から階段がある外に出ていたのだから。

「なんやの！？ いきなり場所が」

驚いているおばさんだった。

おばさんだけじゃなく、この場にいる全員が驚いていた。

木乃香達の服もいつの間にか着せられているから、それほど高度の転移魔法。

まさか、いきなりあの場から場所が変わるなど誰も思わない。

「あんな所で暴れられると困るから転移させてもらっただけです。さて、始めましょうか」

僕は敵に魔法の矢1を放った。

魔法の矢がおばさんに当たる寸前、乱入者の刀で防がれた。

本気じゃないとはいえ、僕の矢を防ぐとは。

「さすがですやん、月詠はん」

月詠さん……刹那さんの後輩で実力が刹那さん以上。
向こうに付かれると殺さなきゃいけないが、それに僕はこの子と……。

その後の言葉を口にせず、月詠さんを懐かしく見る。
言葉の続きは想像にお任せします。

「申し訳ありませんでしたわ。もしかして、こんな所とは分かり
ませんでしたから」

僕が転移させたから当たり前の話。
しかし、問題はどうか。

ネギ側に入れる方法は簡単、刹那ではなく、ネギに興味を見出せば
いい。

なら、やる事は一つ。

行動を決めたが最後、完了まで徹底させてもらう。

「刹那さん、この人は僕が引き受けますので、あのおばさんをお願い
します」

「しかし、神鳴流の使い手ですよ？」

「ネギなら平気よ」

「そうやで、せっちゃん」

「このちゃん……わかりました」

2人の説得に折れた刹那さんがおばさんの方へ行った。

「さて、始めましょうか」

両手に断罪の剣を使って構える。

全力が出せないが、油断はできない。

剣術のレベルが刹那さん以上なのだから仕方がない。

「先輩と闘えないのは不満やわ」

「僕を侮るとひどい結果になりますよ？」

僕はやる気がない月詠さんに挑発する。

どこまで僕をバカにする。

ネギの姿自身、見た目が子供だから仕方がない。

「小さい子供やのに神鳴流の使い手に喧嘩売るんはやめとき」

「仕方がない……僕も」

子供子供うるさい相手にむかっと来た僕は右手の剣を上から下へ振り落とす。

振り落とした時の衝撃波で階段に亀裂が入る。

「なっ!？」

「本当に侮ってると一瞬で終わるぞ。小娘」

10歳には見えない声色で月詠さんにそう言った。

僕の全身からスパークが走ってるのは魔力と気の反発しているせいだ。

魔力だけならもっとスパークが周りを破壊する。

「……そのようやなく、楽しみですわ」

笑顔で余裕そうにしている月詠を余所に僕は考えていた。

月詠さんを引き込む事が可能かどうか。

なら、気絶させて旅館に連れ込めばいい。

考えが決まった僕は月詠さんに勝負の合図としてこう叫ぶ事にした。

「行くぞ！」

「お願いしますわ」

テンションがガクッと落ちてしまった。

そういうしゃべり方なのは分かっているけど気が抜ける。

抜けている間に相手がこっちに突っ込んできた。

もうどうでもいいや。と僕も断罪の剣を前に出し突っ込んだ。

僕と月詠さんの戦いが今、始まる。

next 第18話へ

第17話『修学旅行編2』（後書き）

次は設定ですので、18話目の更新は設定の後です。

設定【第16話まで】（前書き）

見たい方のみどうぞ。

設定【第16話まで】

ネギ・スプリングフィールド

年齢・1000歳

現在の姿・10歳（9歳だけど同じなため1歳上に）

魔法・魔法道具・魔法薬など使用した影響で寿命が長くなった。
寿命は不明。説明が無いため。

第8話のネギが『世界を跡形』と出ているのでかなりの実力。
アヴァロンの中にある道具が必要な理由は楽にできるという事だが、
実際は明日菜達を助けるためらしい。聖なる武器の詳細は不明。

ネギ自身の身体能力は気・魔力など使わなくても光速に近い速度可能。

全身の耐久度は不明。

作中では光速・超光速で移動可能。反応不明。

エヴァの利用していた水晶でずっと修行していたから実年齢が全く分からない。

外の時間で言ってるので本当の年齢が不明。

闇の魔法

エヴァ、正確にはラカンから習った術。

自分や相手などの魔力を掌握、充填、体内に打ち込む。

・雷の神槍 エヴァのえいえんのひょうがでやっど遅くなる程度。
おわるせかいで消滅。

ラスト・デイメン……

詳細不明・威力不明・名前が途切れる。

ネギが魔力を全開にした状態の発動なのは間違いない。

次代魔法

言葉しか出てきてないから詳細・威力不明。

雷の暴風

ネギの得意呪文。

軽く学園が消し飛ぶらしい。

魔法の射手

魔法の矢・精霊の射手などネギ自身が編み出した魔法。

ネギだからこそできる事。

詳しい詳細はまだ後。

原子崩壊

詠唱が必要な未来で作った魔法
対象を原子分解させる。多数も対応しており負担が軽い。

仮契約魔法陣

緑色の魔法陣で仮契約ができる。

ただ、風が弱いのでスカートの中が見えない。

今後の出番予定のオコジョのは見える。

複製魔法

エヴァの水晶（正式名称省略）を複製したり、自分自身を創造する。
魔力も全て複製するため、変わらない。最大人数不明
道具の場合は1分かかる。一度使用だけなら一瞬でもOK。

復元魔法

あらゆる存在を復元させる魔法領域を超えた未来の魔法。
魔力を利用してはではなく自然、世界を元に発動可能。
負担が大きく副作用にはネギでも少ししか抗えない。

第1修正は壁などを復元させた。

第2修正はエヴァとの戦いで破壊された町などを復元させた。

段階が存在している。現在は第2修正までしか出ていない。

1、副作用

しばらく使用していないと使用者は眠ってしまう。ネギの場合は朝まで眠った。

2、最悪な副作用

世界の認識が変わり元の時間に修正しようと時間が一定に戻ったり進んだりする。

認識できるのは基本的にネギのみだが、第13話でその場にいた全員がその認識がある。

現在、仮契約している者（3年でかなり増える？）

明日菜、木乃香。

神楽坂明日菜

本名…アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア

ネギのパートナー第2の少女。

一応、咸卦法を使えるが、咸卦法の低負担版である魔力と気の同化が使える。

魔法無効化を持つが、ネギには一切通用しないらしい。
攻撃魔法など使えるかどうか不明。

近衛木乃香

ナギ・スプリングフィールドより強大な魔力を持ち、ネギのパートナー第1の少女。

治癒魔法を覚えているが、見せた事がないため不明。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

600年も生きた吸血鬼の真祖。

ネギの父親であるナギ（サウザンドマスター）をストーカー？していた少女。

登校地獄と学園結界のせいで、従来の魔力が無かったが、ネギのせいで解かれた。

一応、修学旅行が終われば、明日菜と木乃香の師匠になる予定。

宮崎のどか、綾瀬夕映

魔法を知ってるだけの2人の少女。

まだ仮契約もしていない。魔法使いにはなりたっている。

カモ

下等生物のオコジョ。

仮契約魔法陣を張るだけの空気マスコットキャラ。

長谷川千雨

ネットアイドルの『ちう』をやっている少女。

ある出来事によりネギから魔法を知る。

今は関わる事がない。

設定【第16話まで】（後書き）

第18話は明日か明後日公開予定。

第18話『修学旅行編3』（前書き）

進行ペースが遅くなっています。

戦闘シーンがありますが、上手にできてませんね。

第18話『修学旅行編3』

ネギと月詠の戦いが始まる。

僕の断罪の剣と月詠さんの二刀が重なり合う。

月詠さんが笑顔のまま保っている。

「魔法使いやのに対抗できるなんてすごいですわ」

「くっ！ 魔法の矢10」

この体制から有効に運ぼうと魔法を近距離で使う。

僕の言葉と共に後ろに離れた月詠さんが魔法の矢10を弾こうとする。

両手にある刀で弾く？ させるものか。

左手にある断罪の剣を投げ、月詠さんの左の刀を弾き飛ばした。

「ウチの刀あ」

「雷の暴風」

油断はできないと得意技である無詠唱版の魔法を解き放った。

月詠さんの横を逸れて、おばさんの後方にある建物が消し飛んだ。建物にぶつかった音がかなりうるさかった。

僕の撃った雷の暴風は減速せずに空の彼方へ消えてしまった。

「斜め上というよりもほぼ前だとかうなるのか」

「な……なんやの、今の」

通り過ぎていった雷の暴風を見て眩くおぼさん

「ネギ、あんたね……」

「ネギ君、やり過ぎや」

「ネギ先生って強いんですね」

「当たったらやられるわ」

「大丈夫ですよ、僕の目的は……」

月詠さんがこちらを見ていた。

よし、とりあえず驚かそうか。

断罪の剣を消した後、ポケットの中から圧縮させている剣を出す。

「圧縮解除」

聖なる剣を出し構える僕。

剣に自信なんてある訳がないが、この剣に技なんて必要がない。
力と早さ前提で作られたらしいから技なんて無意味な剣だ。

速攻でそれを振り落とす。

剣から魔力の刃が月詠さんを襲う。

刃に反応できない月詠さんへ直撃する。

直撃したのは……

「いややわ、服が破けたわ」

服が破けて下着ぐらいしか見に付けていなかった。

あれ？ この程度の剣でもそうなるのか。

月詠さんの下着の色が派手な色をしている。

自分の元属性を忘れているネギ。

「さて、本気で行かせていただきますようか」
「っ!？」

月詠さんが片方だけの刀を構えていた。
外野から声がした。

「ネギ、やめて！」

「本気でやったら京都消し飛ぶやん！」

「え!？」

観客気分の木乃香さんの発言に、おばさんと対する刹那さんが驚いた。

初めて聞くなり当り前のように驚くと思う。

誰がこんな子供ごときにそんな力を持つと想像できるというのか。

「大丈夫ですよ。この剣は京都どころか世界を破壊できますよ、てやあ！」

上から振り落とすと、クラッカーの音が鳴り剣から旗が出てきた。
やっぱりこういう道具はクラッカーが一番だ。

月詠さんは呆けていたし、明日菜さん達やおばさんもちちらを見て
啞然としていた。

「なんちゃってする訳ないじゃないですか」

舐められたもんや!と僕を睨みつけてくるおばさんだった。

そんなにしわを寄せると老けますよ?と言ってあげる。

返事が余計なお世話や!と突っ込まれた。

苛々していたおばさんの視線が月詠さんに変わり、悔しそうに叫ぶ。

「撤退するで！ 月詠はん」

「了解や」

「覚えときや！ 特にその餓鬼ちょ！」

「ほなな」

負けセリフを吐いて逃げるおばさん。

ちよっと赤くなっていた月詠さんが僕に手を振りどこかへ撤退していった。

聖なる剣なんて出す訳ないじゃないか

アメリカンジョークの剣を作ってよかった。

月詠さんの下着の色とか良く見てなかったけど、と不満になるが、剣の成果に満足した僕は剣を圧縮させてからポケットの中に入れた。

「ネギ！」

「明日菜さん、木乃香さん、刹那さんはご無事ですか？」

僕は木乃香さん達に近づいて治癒魔法をかける必要があるか見る。

別になさそうだ。

良く考えてみれば、戦っていたのは刹那さんだけだ。

戦ってる場面は分かんなかったけど。

「大丈夫や」

「ほとんど見てただけだし」

「本当ですね」

これでしばらくはないと思いたい。

相手もそう安々とこっちに来て返り討ちに会いたくもない。

もし、フェイトが来たら、この辺の地域を犠牲してでも消す。

10歳にしてありえない事を考えているネギに刹那が尋ねる。

「ネギ先生ってどうしてそんなに強いんですか？」

「鍛えたからに決まってるじゃないですか」

「なるほど……」

うんうんと何か納得していた刹那さんがいた。

1000年も生きてるんだから嫌でも強くなるのは当然。
撤退して言った方向を見ていた明日菜さんが呟く。

「あいつら、何で木乃香を狙ってきたの？」

目的はリョウメンスクナを召喚して復讐をするんだっけ？
あの人は復讐なんてした後、喪失感だけしか残らない事を知らないのか？

経験があつた僕にとってはくだらない事だと考えている。

「このちゃんの魔力を利用して何かを企んでいるぐらいでしょうか」

「やっぱそれしかないわね」

「ウチの魔力を利用してその関西なんたらは権力を乗っ取るん？」

なんたらって木乃香さんに教えてもいなかった。

一部は明日菜さんから聞いていると思うが、なんたらはあんまりだ。

「一つだけはっきりするのは相手の目的が木乃香さんを攫う事だけです。」

木乃香さんに手を出すなんて後悔させてあげましょうか？ フッフ

「兄貴、ものすごく怖いはずぜ」

僕の肩に乗っている生き物が怖がる。

何を怖がっているんだ？

生き物を無視して、手を出した罰をそのまま口にする。

「雷の暴風か千の雷、いやもっと過激な魔法でいいでしょうか？
千の雷を10回分補充した魔法波でもいいですね」

僕はとんでもない事を呟く。

そもそも、魔法波というのは呪文詠唱完了した魔法を手のひらサイ
ズまで圧縮させる。

圧縮させた魔力を相手に向けて撃ち放つ技だ。この技は魔法と該当
されないらしい。

魔法障壁などが通用しないため、撃ち返すか避ける以外はない。

「ネ、ネギ？」

「雷の暴風は知ってるんやけど、千の雷って何なん？ 思いつきり
危険な魔法の名前やな」

僕の言葉を聞こえていた明日菜さんと木乃香さんが顔を引きつらせ
て聞いてくる。

「雷の暴風より何倍も強いですよ？ 巨大の岩を蒸発させる事が出
来るんですから」

それを聞いた3人とオコジョ1匹が震えた。

何を怖がってるのか僕には理解できなかったよ。

別に明日菜さん達に向けて撃つつもりなんてないし

ネギの言葉で一気に寒い雰囲気が漂った。

「ネギ、そろそろ帰らない？」

「そういえば、着替え場から転移してきたんですね」

「お風呂入る途中で変な人が来たから」

「わかりました。極移」

景色が一瞬にして旅館のお風呂場前に戻っていた。

「では、僕はこれで失礼しますね」

僕は着替え場から出た。

〈旅館・ネギの部屋〉

職員用の部屋だから誰と同じ部屋という事がない。

一応、先生なのだから生徒と同じというのは駄目な事。そんな事よりこれからの事を考える。

「ふう、月詠さんをどうにかしないときついかな？」

「なあ、兄貴」

おお、カモ君いたんだ。

何時の間にそこへ存在していたんだ？

先ほどからいた事すら忘れていた。

「何？ カモ君」

「何で月詠って女に目を付けてるんスか？」

「かなりの実力者だから」

「兄貴の方が全然強いはずぜ！」

カモの言う通りだと思う。

1000年も生きてる僕だからこそそうかもしれないが、前だったら完全に負けてるんだよ？

あの頃の僕はただのガキ当然、何も知らないで正義を振り回していたよ。

月詠さんと闘った時、圧倒されてたし。僕は思い出しながらカモに呟く。

「月詠さんは刹那さんより強いよ？」

「あの嬢ちゃんよりも？」

「かなりと言っているいい、それに気になる事がある」

「気になる事ですかい？」

さっきから覗いているマスターがいたりする。

普通は見えないが魔力の気配を読みとれば場所なんて分かる。いる場所がドアの前とは……。

「エヴァンジェリンさん、入ってきたらどうですか？」

念話でマスターを呼び掛けるとドアから入ってきた。

この旅館の着物姿だったけど、茶々丸さんはいない。

「邪魔するぞ」

「何しに来たんですか？」

僕の横に座るマスター。

マスターから石鹼の匂いがした。

すると、僕に用件を言ってくる。

「ぼうや、侵入者がいたみたいだな」

「分かってたんですか？　なら、助けに来てくださいよ」

「ふん、あんな奴ら簡単にどうとでもできるだろ？」

「全員じゃありませんから」

全員という単語に反応してこっちを見る。
私の出番はないのかとか小声で呟いている。

「あと一人いるんですよ。明日菜さん達では太刀打ちできないほどのヤバイ奴が」

「なるほど。なら、私がどうかしてやろう」

「それは嬉しいですね。そんな事より僕の事をぼうやよりネギって呼んでほしいです」

嫌そうな表情をするのを予想して言葉にした。

マスターの反応を見ると難しい表情になった後、僕と目が合うと赤くなっていた。

なぜに？

「の、呪いを解いてもらった事もあるからそう呼んでやるから感謝しろ。……ネ、ネギ」

赤くなっている顔を見せたくないと思っ横に向けた。

マスターはどんな世代でもツンデレだと僕は改めて知ってしまった。
何で名前で呼ぶようにしたか？ 今から言う未来でマスターと、かな。

つい懐かしくマスターの頭を撫でてしまった。

「な、何をする！」

撫でていた手を払いのけられた。

僕の名前を呼ぶぐらいだからいいと思ったが、まだ無理みたい。
横に向いていたマスターが真剣な表情で僕を見る。

「これから何が起こるのか知ってるのか？」

「知りませんよ？　ただ、危険な事が起こるのは確かですね」

「まるで未来を知ってるかのような言い草だな、ネギ」

「何でそう思うんですか？」

「……いや、いい。単なる私の推測だ。そもそもありえん」

推測……もしかしてマスターは気づいているのかな？

僕の中にはマスターのアレがある。

アレに触れた瞬間、分かってしまうかも知れない。

僕は笑みを浮かべて聞いてみた。

「エヴァンジェリンさんの推測はどんな事なんですか？」

「はっ、私でも信じられない事だ。だが、嫌でもない」

「嫌でもない？」

マスターの声色から我慢してとか無理やりな感じがしなかった。

隣に座ってくるのは違和感がある。

「私と同じ感じがするだけだ」

「そうですか……」

アレを感じていると言う事はどうなんだろう。

僕はそれを確認しようと立ち上がり、向かい合わせになるように座る。

「もう、話してしまおうかな」

その言葉にマスターが目を見開く。

もう隠しきれないかも知れない。

マスターを、エヴァをこれ以上アレに苦しめられないようにしなきゃ。

僕はマスターを真っ直ぐ直視してこう言った。

「エヴァンジェリンさん、今から信じられない事を話します。

偽りのない話ですが、胡散臭いと思うなら聞き流してください」

「ちょっと待て！」

「何ですか？」

「今は、今だけは話すな」

止められた僕は驚愕する。

話すなって何？　どういう事なの？

「どうして、ですか？」

「盗み聞きする奴らがいるからだ」

「はい？」

マスターが扉の方を差す。

扉の方を見ると、申し訳なさそうな表情をした明日菜さん達がいた。
呆れた僕は明日菜さん達に声をかける。

「何をしてるんですか？」

「えっと」

「明日菜がネギ君の部屋行こっというから」

「木乃香が言い出した事でしょ！」

なるほどって事はちょっと待て。

先ほどまでの会話を全部聞こえてたの？

その事を明日菜さんに尋ねてみる。

「いつから聞いてたんですか？」

「エヴァちゃんが入った所から」

「最初からですか」

マスターが僕に呆れた表情を見た後、溜息をしていた。せつかく僕の事を話そうとしたのに邪魔をするなんてこの段階ではらす予定であつたけど後にする。

問題が一つだけ残っていた。

それは木乃香さんが僕の肩に手を置いて笑顔で呼んでいた。

「ネギ君、エヴァちゃんに話そうとした事の内容って何なん？」

「えーと、エヴァンジェリンさん、この事は後の方でいいですか？」

「別にかまわないが」

「エヴァちゃんはええの？」

「推測だけだ」

「推測だけでも言う気ないん？」

マスターに迫っていく木乃香さん。

好奇心というよりもあれは自分より知ってる事に嫉妬するって感じ。

「ネギ」

「何ですか？」

「今度って事は私達にも教えてくれるんでしょうね？」

明日菜さんが笑顔で迫ってくるのが無駄に怖い。

僕達の光景を見ていた刹那さんはボーっとしていた。

普段の木乃香さんと違う所に放心している。

「今度といっても結構、後の方ですけどね」

僕の答えを聞いた明日菜さんが怖い雰囲気ではなく普通の雰囲気になる。

「分かったわ。でも」

いきなり明日菜さんは僕を抱きしめてくる。

今の明日菜さんは浴衣だからそのむ、マシヨマロが正面に当たっている。

温かい気持ちにさせてくれる。

気持ち良くその気分を味わっていると魔法の矢が飛んできた。

僕は魔法の矢を弾こうとするが、明日菜さんが左手だけで叩き落とす。

「明日菜さん、気づいていたんですか？」

「まあね、それより何すんのよ！ エヴァちゃん」

魔法の矢を撃ってきたのはマスターだった。

こちらを見ているマスターが明日菜さんに指を差す。

「やかましい！ 人の前でいちやつくな！」

「それに関しては同意やな」

なぜに木乃香さんまでマスター側なんですか？

駄目だ、止めようがない。

一つだけ方法があった。

僕は放心してる刹那さんの肩を揺らす。

「ネ、ネギ先生……」

「この状況を止めてください」

我に戻った刹那は木乃香とエヴァと明日菜を見ると難しい表情になる。

結論を考えた結果

「無理です」

「そうですか……」

結局は爆発オチがいいんですね。

そう考えた僕は刹那さんにだけ対魔法防御を貼り、3人に両手を向けてから、静かに呟く。

「範囲、この部屋のみ、目標敵対3人に向け……雷の暴風充填！」

ネギの魔力を感じた3人がネギを止めようと説得しようとする。

「「ちょっと待って！」」

「おい！」

そんなもん、無視するに決まっているとニヤツと口を歪めた。

もう魔力は発射準備完了、この3人に裁きを。

もはや別人であるネギは雷の暴風を発射した。

「嘘ッ！！」

3人が同じ言葉を叫んだ瞬間、この部屋から轟音がした。

この部屋のみだから誰にも聞こえなかった。

黒くなった3人を放置。

部屋を修正した後、刹那さんに3人の事をお願いした。

その時の刹那さんが必死にブンブンと縦に振っていたのは何故？

とりあえず、これでゆっくりと眠れると布団に寝転がり目を瞑った。

「バラすのは当分止めよう。今は……せん……」

言葉が続けようにも眠気に耐えきれず夢の中へ。

n e x t 第19話へ

第18話『修学旅行編3』（後書き）

おばさん、名前すら語ってもらっていない天ヶ崎千草
次は2日目になります。

第19話『修学旅行編4』（前書き）

ここからネギのエヴァへの呼び方がマスター↓エヴァになります。

強引な展開があり、地の文が少ない。

第19話『修学旅行編4』

鳥の鳴き声がしていた。

起きてみると誰もいないし、一人だから当たり前。

僕は朝になっている天気を見て状況を確認。

「魔力、体調は正常っと、昨日何をしてたっけ？……ああ、エヴァのアレか」

アレとは人間に戻す時、真祖の力を全てネギが引き受けた。

簡単に言えば、真祖の塊だ。

人間として生きてみたいと言ったから僕が真祖の力を吸収した、今の僕はそれを持っている。

「まあ、アレを打ち込むと同時にエヴァと僕の関係がわかる」

人間になった瞬間、魔法使いとして覚醒を始めているし、なぜか吸血鬼としての能力もあったが不老不死はない。

「どうなる事やら」

昨日の浴衣から教師専用装備。

今日は何処回るんだっけ？

全然覚えてないけど、確か小太郎と会うんだっけ？

どうだっけ？と悩みながらも次の行動する事にした。

魔法陣を空中に展開した後、中心から杖が生き物のような動きで出てきた。

「この杖、何のために役に立つんだろうか、役に立った事ってあっ

たっけ？」

杖の存在理由を考えていたが、外が騒がしかった。
ドタドタと足音がして、どんどん音が激しくなった後、戸が開いた。
ハルナさんとのどかさんがいきなり入ってきてこんな事を言い出した。

「ネギ先生！ のどかが先生とデー！」

「わあああゝッ！ ハルナ、何を言ってるの！」

慌ててのどかさんがハルナさんの口を塞ぐ。

用件はわかってるよ。

誘いに来たんだろう。と想像した。

魔法バレの段階で分かり切っていると心の中で頷く。

「ネギ先生、のどかはネギ先生と回りたいんです」

「ちよっと！ 夕映まで」

夕映さんがのどかさんの隣に立っていた。

いつ来たんだ？

魔法の事を知っている2人、

仮契約をした方がいいかな？なら、都合が良い。

「いいですよ」

「ほら、のどか！」

「良かったですね、のどか」

「ううゝ……」

涙目になってるのどかさんを連れて部屋から出た。

何も起こらなければいいけどって運命とはそんなに甘くない。

後に起こる出来事を知っている僕はガクンと俯いた。

〈旅館・食事〉

クラス全員が座り食事をしていた。

酒騒動で記憶がない人もいるみたい。

僕が慣れない年でお酒を飲んだ時、僕を中心とした100m範囲が消し飛んでた。

何が起こったのか今も知らない。

空しい気分が漂っていると木乃香さんが僕の隣に来た。

「ネギ君、今日はどこか回るん？」

「本来上の目的を果たそうと思ひまして」

「親書の事でしょ？ 明日にしたら……」

「明日菜さんはいいんですか？ 明日にしたとしても思い出作りなんて」

「何言ってるのよ、一人で任せる訳ないでしょ！」

「確かにそうやな」

「わかりました、明日にします。刹那さんはどうしたんですか？」

名前に反応した木乃香がキョロキョロと見回してキラーンと目が光った。

木乃香さんには刹那さん発見センサーでもあるんですか？

本気でそう疑いたくなった。

「せつちゃん！ 一緒に食事せえへん？」

「いえ、まだ慣れませんので」

遠慮しておくと思えるように刹那さんが別の場所へ移動した。仲良くなってるのはお互いが親友だからかな。絆が繋がってる感じがする。

「せっちゃん……」

「大丈夫よ、木乃香」

「まだ慣れてないだけかもしれませんよ」

「そういえば、ハルナから聞いたけど一緒に回るんだって？」

何時聞いたの？あれって僕が聞いたのは先ほど。

僕が知らないうちに聞いているなら何も言わない方が良いか。

夕映さんとのどかさんの今後を考えてから呟く。

「実はそこでアレをしようと思ひまして」

「アレね」

「仮契約やな」

人差し指を出し、笑顔で言う木乃香さん

どっちにしろ、必然な出来事だと僕は頷いた。

そんな話をしながら食事が終わらして、旅館から移動を開始した。

（奈良公園）

奈良公園と言ったら大仏殿がある。

二度目だし、見なくてもいいけど仕方がなくだ。
明日菜さんが僕の肩にポンと叩く。

「ハルナは任せて」

優しい声色で答えてくれた。

何かこんな明日菜さんは初めて聞くかもしれない。

僕はのどかさんと夕映さん呼び出した。

「ネギ先生」

「一般人が魔法を知っていて秘匿状態にさせるのは困難なので仮契約をしたいと思います」

「か、仮契約！」

「あわわわ」

赤くなる2人。

キスぐらいで赤くなるのは困るんだけど。

「さっさと仮契約を済ませてしましましょうか。他の先生とかにばれたら問題ですから」

一般人を巻き込む訳にはいかない？

夕映さんと木乃香さんは才能があるから別にOKだ。

できるかぎり、以前より強化しておきたい。

そう言ったネギは魔法陣を地面に展開。

緑色に光り輝いている。

「魔法陣の中に入ってください」

「はい」

「なるほど、これが魔法陣ですね」

興味が出てきて中に入る夕映さんとのどかさん。

この魔法陣はカモのようにスカートが捲れないんだって！

「今のうちに決心だけ聞いときますが魔法はあくまで裏の世界、とても危険で下手したら命さえ失ってしまう可能性があります。それでも宜しいですか？」

二人の返事を待つ。

人生に関係する事だから悩むのは当然なはずだったんだが、

「覚悟はできてます！」

「私もです」

「……わかりました」

緑色の魔法陣が強くなった。

言葉を聞いた僕はのどかさん、夕映さんに仮契約の儀式をした。

光が走り、治まった後、仮契約カードを渡す。

「これがアーティファクトです。アダットで発動、アベアットで閉じるぐらいです」

「そうなんですか」

「なるほど」

「ちなみに、のどかさんのはあまり悪用はしないでくださいね」
「え？」

疑問の声を呟くのどかさんに説明をする。

のどかさんのアーティファクトは相手の心を読む。
心を読むより人にも見えるアイテムは反則だ。

「後、僕の心は覗かないでくださいね。大変な事が起きますから」
「わかりました」

これで大丈夫だろう。

僕の心なんて読まれたらかなりまずいしね。

相手が精神崩壊する可能性がある。

理由は後で明らかになる。

「後の事は修学旅行終わってから説明しますね」
「はい」

返事をしてくれたのはのどかささんだけ。
夕映さんはじーっとカードを見ていた。
そんなに嬉しかったみたいだ。それはそれで結構。

「明日菜さん達の所に戻りましょうか」
「そうですね」
「はい」

のどかささんの表情が自信に満ちていた。
僕達は明日菜さん達の所へ戻った。

「のどか、ネギ先生とお話しできた？」
「え、うん」
「私もいたので緊張が薄れてました」
「へえ、で？ 何を話したの？」
「秘密です」
「ま、いいわ」

俯いて答える夕映さんにふくとじーつと見つめた後、笑顔で答え

た。

勘ぐられてるかもしれない。

バレるのも時間の問題だけじゃないや。

横を見ると明日菜さんがいた。

明日菜さんが僕と目が合った後、話しかけてきた。

「ネギ、アレしたの？」

「しました」

「そう」

僕の答えを聞いた明日菜さんが胸に手を置いて安心していった。
それだけの会話で終わった。

夕映さんの仮契約に関しては早すぎる気がします。
修学旅行後だから、あまり変わらない。

「これからどうするの？」

「これからですか？　今日はやめておきましょう」

「どうして？」

「明日菜さんはハルナさんがいる前で行けますか？」

知ったら周りの人にも知れ渡るほどの口の軽さで今は行動したくない。
い。

そう念話を送ったら明日菜さんが呆れて答えを出す。

「無理ね」

「3日目じゃないと行動もつらいと思います」

「今日は何か私もそんな気分だしね」

明日菜さんの言葉を聞いた瞬間、いきなり強大な魔力を感じた。
この魔力はまさかと思い、明日菜さんに伝える。

「大仏殿に行ってきます」

「見ても面白くない気が」

「折角ですから」

「そう、私は木乃香の方を見に行ってくるわ」

刹那さんの事かと思い、僕は頷く。

「わかりました」

僕は明日菜さんとは違う道を歩いた。

く大仏殿く

大仏殿、そういえばのどかさんと一緒に来たんだっけ？

今は一人だから何気に寂しい気がする。

大仏を眺めているとそんな感じがした。

眺めていると、景色が白くなった。

この大仏殿じゃなく全てが白くなっている。

こんな事が出来るのは僕もどきか。

背後からいきなり現れた。

「聖なる鎖を見つけた」

手に持っている物を見ると、確かに鎖だ。

どうみても鉄の塊でしかない。

「どうみてもその辺にある様な鎖にしか見えない」

「俺も思った。けど、これがそうなんだ」
「そうなんだ」

僕もどきから鎖を受け取った。
すぐに鎖を圧縮させてポケットの中に入れる。

「これで全部そろった訳だ」
「うん」

「俺の役目も終わった事だしお前の中に戻るとしよう」
「……一つだけ聞いていい？」

聞きたい事が一つだけあった。

「何だ？」

「僕の魔力が弱いのは僕もどきのせいなの？」

「違う、お前の体が10歳の頃のままだからだ。元の姿に戻れば全開になるだろう」

「どうやって戻るの？」

「……さあな」

僕もどきは魔力の塊に戻り僕の中に入ってきた。

複製した魔力だから戻っても加算される訳がない。

白い空間が元の景色に戻った。

「ネギ！」

明日菜さんの声がした。

声がした方向へ見ると明日菜さんと木乃香さんと刹那さんがいた。
刹那さんは木乃香さんにべったりとくっ付いている。

「どうかしたんですか？」

「そろそろ戻ろうって話が出て」

「もうそんな時間ですか」

大した出来事がないから、平和だからみたい。
それはいいんだけど木乃香さんの方へ見ると、

「こ、このちゃん!？」

「せっちゃくん！」

「はあ……」

木乃香さんと刹那さんが百合関係に見えるのが困る。
だって、抱きついてお互いが顔を赤くしてるし。
大仏殿から出て、ベンチに座っているハルナさん達の方へ歩く。

「戻ります」

「退屈だもんね」

「私は興味深いと思いますが」

「興味ね、興味がなければ意味ないわ」

それは言ったら駄目ですよ、ハルナさん……。
はつきりと言い切ったハルナさんを見て苦笑した。

「旅館に戻りましょうか」

「そうね」

「ネギ君」

「何ですか？」

「戻るんは早いと思わへん？」

木乃香さんの言う事も分かるが、ここは退屈なんです！

それを意気込みながらも皆に納得するような言葉を言う事にした。

「ここは何もありませんし、それに別の意味で色々ありましたから」

僕の言葉にハルナさん以外は納得の表情になる。

魔法の事なのは確かなんです。

「考えたい事もありますから」

「わかったえ」

そうして、僕達は旅館に戻った。

（旅館の屋根上）

今は夕方だ。

ここだと誰も来ないからいい。

屋根上に来た僕は座り込んで考える。

「これでパーツは揃ったけど、使うのは当分後だからどうしようか」

いくらポケットに入ると言っても

何時までも中に入れる訳にはいかない。

盗まれてもしたら大変な事になる。

危険な状態にならない様にどうしようか考えていると一つだけあった。

「カード化にすればいいんじゃない」

アーティファクト扱いとして使用出来れば便利だと答えが出た。

「よし、帰ったら速攻で作るか」

屋根上から下に降り、旅館に入った。

〽旅館〽

入口付近にあるベンチに座る。

「ふう、あれ？ 杖どこにやったっけ？」

気が付くといつの間にか杖がない。

「まあいっか。どうせ要らないし」

父親の形見である杖の扱いが悪かった。
ナギ、哀れ。

しばらく、座っているとあやかさん達がいた。

じーっと見ていると、あやかさんが嬉しそうな表情になった。

他の人もあやかさんの表情でこっちに気付いたみたい。

「ネギ先生」

「ネギく〜ん！」

僕に近づいてきて抱きしめてきた。

だから何で抱きしめてくる。
僕はぬいぐるみか何かだと思われてるのか？

「あやかさん、まき絵さん」

「今日はどこへ回ったの？」

「奈良公園です」

「ネギ先生以外はいませんか？」

「どこにいるかまではわかりませんよ」

「告白とかされた事は？」

ああ、のどかさんの事ですか。

魔法の事が先に来たから後になるかな。

あやかさんが裕奈さんに何か言ってる状況を見ながら考えていた。

「裕奈さん、何を言ってますの！？ 私以外に告白なんてする人が

……いませんわ！！」

「まあ、仕方がないんじゃない。ネギ君って人気高いし」

裕奈さんだけじゃなく何で桜子さんまでいるんですか？

人気って何の話ですか！？

ネギは知らないだろうが、女子の中で話題になっている。

当然、ネギ自身には知りようがないため、首を傾げるしかない。

いつの間にか人数が増えてきてるってああ、夕方だから帰って来てるのか。

「どうしてそこで沈黙するかな」

「ネギ君は確にかわいいしね」

まき絵さんが僕の頭を撫でてそう言ってきた。

中身は1000歳ですが、

「頭もいいし」

うんうんと頷く桜子さん

英雄である親、父さんに憧れて勉強を必死にしましたから。

「最近はしっかりしてるし」

ドッジボールイベントが無くなってから評価が普通なんですわね。
わかります。

「ネーギ先生！」

「お姉ちゃん」

そう言えば、風香さんと史伽さんとは話した事がありませんでしたね。

「何ですか？」

「修学旅行が終わったら付き合ってくださいませんか？」

「何処までですか？」

「それは内緒です……」

史伽が赤くなって呟いた。

まさか、世界樹までとかだったらやっぱりっと思う。

史伽さんと風香さんがじーっと見つめてくるから観念して頷く。

「いいですよ」

「本当！ やったね」

「お姉ちゃん、待ってえ！」

史伽さんと風香さんは部屋へ走っていった。
走るのは良くないんですが、

「双子ちゃんに先越されちゃったね」

「か、構いませんわ」

「お、余裕だね」

裕奈さんもあやかさんを挑発しないでください。
全てが僕に行っちゃうんですから。

「ネギ」

「あ、明日菜さん」

背後に黒い何かが漂っていた。

何これ？ 新たなオーラっすか？

テンションがパニック状態に落ちる。

「ネギ君、ちょっとええ？」

「な、何ですか？」

木乃香さんが僕の腕を引っ張っていく。

あやかさん達は木乃香さんの雰囲気立ち止まっていた。

僕が連れられた場所はエヴァの部屋だ。

この場にいるメンバーは明日菜さん、刹那さん、木乃香さん、茶々丸さん、エヴァ

そして僕だった。

「何でここに」

「魔法関連やから」

「これを見ろ」

エヴァが一枚の紙を渡してきた。
受け取った僕は中身を見る。

「何ですか、これ」

「見ての通りだ」

それは分かってるんですが、書いてる事が滅茶苦茶です。
字も読める事は読めるんですが、ミミズみたいな字。
そもそも、エヴァはこれを何処で拾ったんだ？

「脅迫状みたいだわ」

「脅迫なんですか？」

ちなみに、こう書かれていた。

『明日、あんたら、もといガキンチョをギタンギタンに言わたる
さかい！』

木乃香お嬢様を攫い、封印されし伝説の魔物を復活させるで！』

この感じは誰か特定できた。

あのお婆さんか、まったく迷惑な話です。

でも、疑問が一つだけあった。

「伝説の魔物？」

「相手は簡単に教えない様にしてるんだろう」

「この辺で封印されてる魔物？はなんですか？」

魔物だっけ、違う気がする。

何だっけ？ 忘れてしまったからどうでもいい。
僕の言葉の答えに刹那さんがこう答えた。

「リョウメンスクナだと思います」

「知ってるん？」

「長が、このちゃんのお父様がそう言っていました」
「あいつか」

「木乃香さん、攫われる気ありますか？」

「「「は？」」「」」

木乃香さん達が僕の思いつきに疑問の声がした。

「ウチ？」

「僕は思ったんです。リョウメンスクナを完全消滅させれば、あの
おばさんを……ね」

薄く笑みを浮かべる。

強引に前回と同じ状態にしようと思った。

同じとは限らないし、ここで消滅させとかないと妙な事が起きそう
だ。

「リョウメンスクナって強いのか？」

「一般の魔法使いなら腹がたたんだろうな」

「僕も一般ですからね」

「「「嘘つけ！」」「」」

3人一斉に答えなくても。

知らない刹那さんと茶々丸さんはボーっとしている。

僕の魔法って手加減すれば普通の魔法なのに。

落ち込む僕の肩に茶々丸さんの手が置かれた。

「ネギ先生」

「何ですか？」

「それは危険だと思います」

「茶々丸さん、大丈夫ですよ。リョウメンスクナごと封印されし部分も消しますから」

「封印じゃなく完全消滅か、フフフ……私も協力してやるぞ！ ネギ」

エヴァもやる気満々なようだ。

ストレスがたまってるのか、封印状態だったからなのかわからない。どっちでもいいが、かなり強大な味方なのは確か。

「どっちみち、強力な相手だと攫われてしまいますけどね」

「まあね」

「相手が狙ってくるとしたらお風呂ですね」

「警戒はしないと」

「旅館でも平然と狙ってくるもんね」

「トイレもやけど」

「安全がないですね」

「攫われてしまえば、手間は無いんですが」

「木乃香を危険にさらせていうの？」

無防備で相手に攫わせる訳がない。

ちゃんと対策ぐらいいは取るさ。

「大丈夫ですよ。防御魔法で護ってれば」

「ネギ君、ウチを守ってくれるんやろ？」

こう言う時の木乃香さんって可愛い。

わざわざ両手で僕の手を包み込むように握ってくる。

「はい」

「ウチ、やる！」

強く答えた木乃香さんの目が燃えていた。
こんな状態の人を止めるのは無駄な事。

誰もが絶対に味わうであろう強大な意思。

「木乃香が言うなら」

「このちゃん」

俯く刹那さんに明日菜さんが明るい声で背中を叩く。

「大丈夫よ、エヴァちゃんやネギもいるんだから」

「そうだ、私がいるからな」

「中ボスですけどね」

「ネギ、決着をつけようか」

エヴァが殺意のある視線と爪を伸ばした。

決着は付けてもいいけど、朝倉さんの事を思い出す。

バレル状況も全く違うから前回と参考にもならん。

それなら合わせる為に外へ出るか。

「ちょっと外へ行ってきます」

一度、立ち止まりエヴァの表情を見るとやはりムツとしていた。
実行しようとカモを生贄にポイッとエヴァへ放り投げる。

「煮るなり焼くなり好きにしてください」

「ちょっと、兄貴!？」

「こいつを食ってもまずいだろうから何もせん」

「残念ですね……では」

本当に残念そうになるネギを見て、カモが石化した。

カモ君の事などどうでもいい僕は旅館の入り口前に向かう。

出口前に着た僕はこう呟いた。

「朝倉さん、隠れてないで出てきたらどうですか？」

すると、死角になっていた場所から朝倉さんがいた。

やっぱり、同じですか。

溜息を吐いた後、あはは。と笑う朝倉さんに

「どうして僕の後を付けてきたんですか？」

「気づいてたか……ネギ君の秘密が知りたくてね。」

だって、10歳の子供が先生なんて普通はあり得ないから」

まともな意見っぽい事を言うな。

僕だって好きで教師になった訳じゃない。

「なるほど、一つだけいいですか？」

「お？」

「これを知った場合、世界にばらまくんですか？」

「ネギ君の正体によるわ。そうね、魔法使いならそうしたいわ!」

前と変わらねえ、状況が違うから何かあると思ったら変わらない。

僕の知らない裏事情は明日菜さんの夢と木乃香さんの事だけなのか？

そういう事にしとくか。
仕方がない。釘を刺しておきますか

「世界にばらまいたとしても、あなたの身に危険が無いとは限りませんよ？」

最低でも記憶を消されます。事実上、僕は魔法使いですが、記憶かオコジョどっちかは確定になりますので、世界にばらまくのはやめてほしいですね」

「オコジョ!？」

「はい」

僕の言葉に朝倉さんの表情が青ざめた。

オコジョになるか記憶を消されるという処置は魔法界で当たり前になっている。

これは混乱を招かないためらしい。

時期が悪ければ戦争が起こってしまうのは僕が一番知っている。

朝倉さん、どうしますか？

「ネギ君の秘密、探すのは……」

「探すのは？」

「私個人のためだけにする!!」

「はい!？」

個人？ ネットにばらまく事も言いふらす事もしないって事？
そうなのかどうか朝倉さんに聞いたです。

「さすがにオコジョとか勘弁だわ」

「そうですか、わかりました」

僕は朝倉さんの言葉を信じて影のゲートへ潜った。

潜る途中、朝倉さんの表情が目を見開き驚いていた。

ゲートの中で僕はやっぱり考え直し、話をしようと朝倉さんの足を掴み引きずり込んだ。

「ネギ君、ちょっと!？ や、やめ」

抵抗するもネギの力に勝てる訳もなく、強制的に朝倉が影に飲み込まれて消えた。

幸い、誰もいなかった。

誰もいないからって魔法をポーンポーン使う当時より変わり過ぎるネギであった。

n e x t 第20話へ

第19話『修学旅行編4』（後書き）

次は原作で言うと5巻目になるのかな。

第20話『修学旅行5』（前書き）

地の文が少ない。修正する必要がありますが何時になるかわかりません。

こういう事はあとがきで書くべきなのでしょうがここで書きます。

21話以降の更新は遅くなったり普通ペースだったりします。

第20話『修学旅行5』

影のゲートから出てきた場所はエヴァの部屋だった。
適当につなげた影響だと思う。

「どっから現れる」

座ってお茶を飲んでいるエヴァに呆れられていた。
無理もないか。

影のゲートで現れたんだから

「ごめんなさい。って明日菜さんもいたんだ」

「いたんだってええ！？ 朝倉！！」

僕の横にいる朝倉さんに指を差して驚く明日菜さん
次の瞬間、明日菜さん達がじーっと僕を睨んでいる。
隣にいる朝倉さんが苦笑いしていた。

「実はばれちゃいました」

「ああ、ネギ君自身からバラしたんやろ？」

両手を合わせてはっきりと答えを言う木乃香さん
それに反応して朝倉さんが頷く。

「もしかして、ここにいる全員は知ってるの？」

「問題ない。私は吸血鬼だがな」

「百合的な意味の」

「ナギストーカーの吸血鬼です」

「勝手に名称を変えるな!」

変な名称に突っ込み様に叫んでいた。

からかいのあるエヴァだ。

座布団を敷き、勝手にお茶菓子をもらった。

朝倉さんはメモ帳にメモしていた。

「じゃあじゃあ、桜並木の吸血鬼、現るは」

「そうだ、私の事だ。私は吸血鬼の真祖だ」

どうだ!と体を張っていた。

そうやっているとか空しくなるぞ。とか突っ込んだら駄目だ。

「それ、威張る事?」

「威張ってるなんて大人げないですね。エヴァンジェリンさん」

「女の子の血を良く吸ってただけじゃない」

「木乃香、明日菜、ネギ! 私はそうじゃないと何度言えば!?!」

何度言っても分からないと2人は首を傾げる。

実際、女の子しか吸ってない事実は変わらない気がする。

憐れみな視線をエヴァに向ける。

「女の子しか吸ってないじゃない」

「女子高だから仕方がないだろ!! それにネギの血も吸ってるぞ」

「アイテムと引き換えの時だけです」

それ以外、僕の血を吸わせた記憶すらない。

封印が解けてるから血を吸う意味がないはず。

これからどうなっていくんだろうな、と別の意味で楽しみになった。

「……」

「マスター、ガンバです」

沈黙して俯くエヴァに茶々丸さんが親指を突き立てる。

凄い物を見た気がする。

こんな光景二度と見る事がない。

「朝倉、どうする気？」

「え？ 何が？」

本当に分からないと示している。

それだけだと分かりにくいよ、明日菜さん

「魔法を知ってどうするのって事！」

「裏世界みたいなものだから危険だぞ」

「ところでよ！」

存在感が空気の生き物が何かを言った。

「何？」

「仮契約やってしまおうぜ！」

誰にとってああ、分かりやすいね。

朝倉さんと仮契約しろっていうんでしょうね。

今はその時ではないからする必要がない。

興奮している生き物を黙らすために半分冗談でエヴァに聞く。

「エヴァンジェリンさん、下等生物を溶かすアイテムありませんか

？」

「ああ、確か有った様な無かった様な」

「兄貴！ オレッチを溶かす気なんスか！？」

震えながら青ざめているカモ君だった。

メモ書きしている朝倉さんに聞いてみる。

「……朝倉さん、どうしますか？ 内密にする程度なら構いませんが」

「修学旅行中は確実に危険よね」

「じゃあ、今後の事を決めよっか」

今後って何？

それよりも明日菜さんがまとめ役って似合わない。

「まず、カモ君を燃やして跡形もなく消す」

「それは今後じゃなくて決定事項なんじゃあ」

「オレッチ死ぬんスか！？」

白くなった。

遊び相手にはふさわしいと思うが、
ちよっと飽きたから本当の話に入る。

「とりあえず、データをまとめましょうか」

一枚の紙をどこことなく出してペンで書いていく。

「まずはあのおばさんね」

「札を使う陰陽師って所かしら？」

陰陽師だっけ？あのおばさん。

札で大文字の炎や魔物や後、スクナを呼び出すために木乃香さんのおでこに札を貼っていた。

それだけしか印象がないなあ……と思い出していた。

「もう一人は神鳴流を使います。二刀流を使う女、油断できないほどの実力です」

「ネギが戦ってた時は強そうに見えないんだけど」

「ほら、ネギ君やし」

「ですが、油断は禁物です」

そう言った刹那さんが要注意と態度で示していた。

実際、刹那さんの全力でもきつかった相手だ。

相手より力が上回ってるとそう見えるだけの錯覚が存在する。

人の目とは不思議だ。

「元と言えば関西と関東の仲が良くない原因ですし」

「あのじじいが原因か」

エヴァの言う通りだ。

失敗で並行世界に来た時も全部それだった。

仲が悪いのは必然なのか？

「仕方がないですよ、おじいちゃんですし」

「酷い言われようですね」

「話が進まないわ」

「じゃあ、魔法を知ってるメンバーを教えておきましょうか」

「ネギ、知ってるのか？」

「このクラスのだけ教えます」

「私と木乃香と刹那さんと茶々丸さんというと、後誰だっけ？」

「夕映にのどかぐらいやね」

ふんふん、あれ？

誰か一人いない気がする。

誰だっけと考えていると張本人が叫び出す。

「私はどこに行ったあゝ！！」

「忘れてたわ」

「帰ってきた時の修行で覚えさせてやる」

エヴァも病んでるな。

「もう寝ますね」

「疲れたわ」

「ここで寝る」

「邪魔だ！」

「僕もここで寝ます。明日起こしてくださいね」

「既に決定か！」

うるさい……。

「じゃあ、ウチも、せっちゃんも！」

「わわわ、このちゃん！」

木乃香さんが刹那さんをガバツと抱きしめて寝転ぶ。

それだから百合関係って思われるんだけど。

口にしない方が一番。

「まったく、茶々丸さん、ゴメンネ」

「いいですよ。マスターの困った顔を見られて満足です」

「うわ、茶々丸さんもネギに感染した様な気がする」

「ちっ！仕方がない」

「じゃあ、あたしはこれで」

「別に用はないから行っていいわ」

「……うん」

寂しそうにここから出ていく朝倉さんでした。

寝る状態がこうなっていた。

僕は中心で、刹那さんと木乃香さんが僕の斜め右、明日菜さんが僕の右、

エヴァは僕より距離を置いた所、茶々丸さんはエヴァの隣バラバラ過ぎる。

「夜遅いですし寝ます」

僕は別の意味で限界になり眠った。

そして……

朝になった。

エヴァの部屋に泊まったんだ。

目を開けると

「何ですか、これ」

何でエヴァと木乃香さんっていうか全員が僕に寄って来てる。
このカオス的な展開はどうすればこうなるの？

「とにかく、瞬動で」

動こうにも腕が絡み付いてどうにもできない。
誰か目を覚ましてください。それが僕の願いです。

「う、うーん……へっ？」

「明日菜……さん」

「ネギって何でエヴァちゃんまでネギの体に巻き付いてんのよ!」

「うん？ ああ、気づいたらこうなった」

「だったら巻き付くのはやめたら？」

「ふん!」

離してくれたのだが、木乃香さんとかが……ね。

「木乃香、刹那さん、茶々丸さん、起きて!」

「なかなか起きないな」

「エヴァちゃん、茶々丸さんを強引に起こして」

「仕方がない」

頭にあるネジを巻いた。

ビクンと反応する。

「マスター、お、おやめください」

「起きたな」

「あ、はい」

木乃香さんと刹那さんの前で眩く事にした。

「魔法の射手・光の1000矢」

「ちょっと待って!」

「ネ、ネギ先生!？」

その言葉と同時に起き上がり慌てていた。
冗談で言ったのに本気にしたのか。

「これでよし」

「本当に教師か？」

「僕は魔法使いです」

「マギステル・マギを指す者には見えない」

「目指してませんよ？」

「は？」

「建前だけです」

「3日目だから決着を付けに行きましようか」

「魔力を出しながら言うな!」

エヴァから突っ込みを入れられた。

（旅館）

僕達がベンチに座っているとのだかさんが来た。
私服姿も新鮮です。

明日菜さん達も私服なんです。
これから自由行動なのでそうなるだけです。

「のだかさん」

「ネギ先生、私と」

「やっほ！ のどか」

問答無用な邪魔が入る。

呆れた明日菜さんが木乃香の頭に手を置く。

「空気読みなさいよ、木乃香」

「空気以前にウチらのいる前で告白なんて意味ないやん」
「そうだけど……」

告白じゃないですよ？

どう見たら告白に見えるんですか？

それを聞いていたのだかさんの顔が真っ赤になっている。

「私も付いていくか」

「大丈夫ですよ、リョウメンスクナが現れたら来てください」

「何時現れるんだ？」

それを言おうとしたら、のだかさんが僕の肩をポンと軽く叩かれた。

「リョウメンスクナって何ですか？」

「伝説の怪物らしいです」

「そうなんですか……」

のどかさんが分かったような分からないような微妙な表情になっていた。

それだけだと誰も分かるはずがない。

危険があるのは確かという事実。

「エヴァンジェリンさん」

「何だ？」

「前の対決の事を覚えていますか？」

「ああ、あの時か」

「あの時の何でも言う事聞く条件はですね、仮契約です」

「え？」

「そうなん？」

「……ネギ先生」

「そうなのか」

「はい」

事実だ。

けど、僕が明日菜さん達のアーティファクトを使えるようになった時
何時頃だったかと首を傾げる。

それを余所に明日菜がエヴァに尋ねた。

「どうするの？」

「ネギ、私は……ああ、もう！ 決着がつくまで駄目だ！」
「ですよ〜」

赤くなりつつも考えていたエヴァが恥ずかしくなって横に振って否定した。

人の前では言いたくないらしい。

「エヴァちゃんってツンデレやな」

「誰がツンデレだ！」

「マスターはツンデレです」

「茶々丸、それは覚えなくでいい！」

「夕映っちの仮契約のアイテムって何なん？」

「知りません。のどかさんの心の日記らしいですが」

夕映さんはこの場にいないので言わないでおく。

アイテム名を聞いたのどかさんがカードを出した。

「これですか？ アデアット」

のどかさんの前に1冊の本が出てきた。

初めのページを見ると注意事項が書かれていた。

「それが本屋ちゃんのアイテムやな」

「いどのえにつきの注意事項がズラッと書いてある」

注意事項が15行ぐらい書かれている。

僕もその中身は見た事あるが相手の心を読めるのがすごい。

表層意識って書いてあるけど僕が使った時は相手の裏の事まで読めていた。

理由は今でも不明。

「ん？ 最後の項目に凄い事書いてあるわね」

何かを見つけた明日菜さんが眩く。

僕ものどかさんの横から覗くところ書かれていた。

「契約者であるネギ・スプリングフィールドの表層意識を読もうとすると精神が崩壊しますので、絶対に使用を禁ずる」

「何でなん？」

やっぱり注意事項に載ったのか。

僕の魔力は破壊を示すからそうなる。

戻ってくる前、相手が僕の心を読みとった瞬間、悲鳴を上げて眠る様に逝ってしまった。

「どうなのでしょうね」

惚ける事にした。

どうせ、後で分かる事だからね。と全員に視線を向けた。

僕の表情で理解した明日菜さんが溜息を漏らした。

「今からどうするの？」

「学園長から頼まれた事を果たしに行きましょうか」

「私達は？」

「どうしましょうか」

明日菜さんだけで十分な気がする。

咸卦法が使えるから強い。

「連れていくなら明日菜さんだけで十分ですよ。普通の敵だったら余裕ですし」

「私はシネマ村に行くぞ」

「マスター、行きたいのですか？」

「せっかく来たんだ。思い出としてだ」

シネマ村か、ロクな思い出がない。

矢を向けられたり矢を向けられたり。

木乃香さんも魔法を知ってるからどうにかなるかな。

「夕映さんは？」

「夕映ならハルナの所でしょ」

「おっ！　こんな所で何やってるの？」

ハルナさんと夕映さんが後ろに立っていた。

気配は今までなかったから聞かれていないよね。

「これから何処に行こうかって話よ」

「じゃあ、せっかく来たんだからゲーセンいこ！」

（なぜゲーセン？）

この場にいる全員がハルナの発言に疑問を持った。

「仕方がないですね」

旅館を出てゲームセンターへ向かった。

（ゲームセンター）

着いてみるとスツカラカンだった。
客は一人もないもぬけの殻。
平日だからなのかもしれない。

「カードゲームをやりに行こう！」

「これって……」

「新幹線の時にやってたカードゲーム」

「今はやりのアーケードでもカードゲームでもできる人気ゲーム」

1時間後、夢中になってるハルナさん達から離れて出口に向かう。
明日菜さんも付いてきた。

「これでやっと行動できるわ」

「ですね」

ゲームをプレイしてても小太郎が乱入しに来なかった。
どうして来ないの？
世界に除外された？

来なかったら来なかったらで別に構いはしない。

魔法世界以外、役に立った事もないし。

問答無用にそう考えた僕は明日菜さんを誘う。

「行きましようか」

「そうね」

ゲームセンターから出た僕と明日菜さんは関西呪術協会の本山まで
電車で移動する。

電車の中。

「しかし、大変っすねえ。任務があるから遊べないとか辛いっすよ？ 姐さん」

「いたんだ」

「いたの」

「酷いっす」

「冗談よ」

「僕は本気で思ってますが」

「兄貴はひどいっす！」

「窓の外へ放り投げますか」

僕は電車の窓を開けて生き物を投げようと勢いを込める。

「ちょっと!？」

「ネギ……」

「冗談だよ、もうカモ君もバカだな」

本気で投げてみたかったのは内緒だ。

投げない意志を見せるため、窓を閉めて明日菜さんの肩に乗せる。

「何で私に渡すのよ」

「いいじゃないですか、喋らなければ可愛いんですし」

「それはそうなんだけど、ネギのペット扱いよ」

「そうでしたっけ？　そもそも、許可なんて貰ってましたっけ？」
「不法侵入よね」

明日菜さんには学園に貼っている結界の事を話している。
だから、明日菜さんも分かっている。

「兄貴、オレツチ必要ないんスカ？」

「いるよ」

「兄貴……」

カモの頭を撫でる僕。

君がいなきゃ仮契約の時、アレが見れないじゃないか。
本気でカモ君の頭を撫でながら頭の中で考えていた。

「はいはい。そろそろ着くころじゃない」

「そうですね」

僕と明日菜さんは到着した駅に降りて走って向かった。

く古社く

前と違うのはちび刹那さんがいない。

僕自身も実力が違うから別にいいんだけど、予想できない事も起こる。

それが僕にとって苦手だ。

とにかく、走るか

「明日菜さん、一氣に行きましょう」
「OK」

僕と明日菜さんはここから一氣に到着を目標に走り出す。
緑が多い。

走っている途中、バシユン!とはじけた音がした。

目に魔力を通して周りを見ると紫色のバリアが円状に出来ていた。

「明日菜さん」

「どうしたの？」

僕と明日菜さんは立ち止まる。
やっぱりいたのか、油断した。

「閉じ込められました」

「え？」

「ループ式にされてますから360度何処の道へ行っても戻ってきます」

「そんな……」

「その通りや！」

巨大なクモの上に乗った男の子がいた。

そう、こいつが小太郎だ。

久しぶりに見るけどやっぱり小さいや。

「私達は急がないと駄目なのよ!　ここから出して」

「ここで戦ってもらおうか」

小太郎が構える。

バトルジャッキーはちよつと遠慮願いたい。

「ん？　そこのお前はネギ・スプリングフィールドやな。あの千草が言ってた通りやな」

「はい？」

「お前の父は英雄らしいな」

「そうですけど」

「俺と勝負や」

「ネギ」

「仕方がない……時間稼ぎが目的なんでしょ？　なら、付き合ってあげる」

小太郎と向かい合わせになる。

距離は15メートルって所か。

どうしようか……

あの生き物を瞬殺、次に小太郎を気絶させるでいいか

「僕の名前を知ってるようだけど君の名前は」

「しゃーないな、犬上小太郎や」

「犬太郎？」

ボケてみた。

「ちやうわ!!」

ちゃんと突っ込みが入った。

さすが関西人なだけある。

そう満足すると人差し指を相手に向ける。

「冗談だよ、小太郎君」

「へっ！　いくで！」

目の前にいる生き物が糸を吐いてきた。

こいつ、クモだったな。

うっとおしくなる前に排除開始。

「さっさと成仏してくれ、魔法の射手・光速の1矢」

僕の指先から光の矢が生み出される。

生み出された光の矢が光った瞬間、生き物の体を貫通し、後ろにある木や色んな物がぶっ飛んだ。

光の速度に合わせたから相手も反応できない。

「……」

「こんなものか」

ポカンとする小太郎だったが、威力に不満なネギであった。あれでもまだ威力を抑えているらしい。

「やるやないか！」

小太郎が戦闘モードの目つきになる。

雰囲気もさっきもちゃんと出ているのがわかる。

黒いオーラが出ている。

「明日菜さん、1分で済ますよ」

「えと、私がいる事を忘れないで」

「わかってますよ」

笑顔で明日菜さんに答える。

ネギの表情を見た明日菜は赤くして俯く。

何で俯くんのだ？

それはいい。目の前の敵をどういじろうかな。

「フフフ……」

「全力で行くで！！」

さあ来い！ いじってあげるから。

いじり対象であろう獣化した小太郎と怪しい雰囲気を漂わせる僕の戦いが始まる。

n e x t 第21話へ

第21話『修学旅行編6』（前書き）

今回は一部、謎を残しています。

後、ヒント的なオリジナルキャラも登場します。

第21話『修学旅行編6』

前に立ちはだかる獣化となった小太郎とネギが向かい合っていた。ネギと小太郎の間、緊張感溢れる雰囲気、明日菜が眼を鋭くさせた。

「お互い本気でやろうやないか！」

「それで獣になってるんだ。芸がないな」

「俺を舐めるんじゃないで！」

小太郎が気を開放させていた。

おおっ！ 気が前より強くなってる。

「いく……ちよっ!？」

「雷の25矢」

25本の雷属性の矢が小太郎の方へ向かっていく。

あんまり力も込めていないので軽く聞く程度のはずだ。

「へっ！ そんなへなちよこの矢なんて弾き返したる!!」

小太郎は両腕で矢を左右に弾き飛ばした。

だが、その選択は間違っていた。

弾き飛ばした矢が戻ってきた。

「嘘!？」

「やれやれ、追尾式を弾くなんてアホとしか言えないよ？」

最低限は消してくれないと」

僕は前と違い魔力を持ったため、更なる魔法の矢で相手を怯まそうと

実行する。

「今度のコレは追尾じゃないから注意してね。融合の射手・闇と光の矢」

闇と光の属性が合わさったネギ専用魔法の射手

ネギが使える呪文は父親の名称以上ある。

闇属性と光属性の効果を持った射手を小太郎に向けて放った。

「な、何やあ!?! はあああああああ!?!」

必死の表情の小太郎が僕の射手を弾こうと頑張っていました。

勢いが止まらない射手は小太郎の体を少しずつ後ろに押していく。

「何かその表情が良い……小太郎の表情が見れたからもういいや」

明日菜の手前まで後方に下がり、魔法の矢1を押し込まれている小太郎の方へ撃った。

融合の射手と魔法の矢が混ざった瞬間、爆発を起こす。

音が激しくなる。

爆発の衝撃で周りの柱や草木一本すら消えていた。

「ネギ、やりすぎじゃない?」

「僕も思いました。大丈夫ですよ?だって微かにですが、まだ生きてます。……残念ながら」

「ざ、残念!?!」

ネギの言葉に青ざめた明日菜だった。

前方では発生していた煙が消えていく。

完全に消えた後に残っていたのはボロボロになってぶっ倒れている

小太郎だけだ。

ほう、前と同じ強さなんだ。と憐れみを感じた。

「ちょっと、あの子大丈夫なの？」

「生きてますよ、ああ見えても人狼みたいな生き物ですから」

「人狼？ 確かにそう見えるわ」

倒れてる小太郎をじーっと観察している明日菜さん。

死んでないだけマシかな？

あ、親書届けなきゃいけないかな。

「明日菜さん、先に行きましょう」

「無限ループになってるんじゃないあ……」

「こんなヘッポコ結界軽くつぶせるよ？」

「だったら何で……」

できるんだっいたらしてよ。と睨んでくる明日菜さん。

確かにそうしたかったのは山々なんだけど理由が一つだけあった。
それは、

「今後のためです」

「今後？」

首を傾げる明日菜さん

未来の事を知らない明日菜さんに今後と言っても理解できる訳がない。

今後とはヘルマンの事ではなく魔法世界の事だ。

出来る限り、仲間が欲しい。

そのためにはこの接点がなければ意味がない。

僕はそう推測した。

「それよりも早く行きま……!?!」

「ネギ? え!?!」

明日菜は驚愕しているネギの視線を辿ってみると、

ボロボロになっていいる小太郎を背負っている黒ずくめの男がいた。顔が全く見えない。

それ以前に魔力も開放していないのにヒシヒシと伝わっている。

「ネギ、スプリングフィールド」

「あなたは何者ですか?」

本当に誰なんだ?

身長は183ぐらいあるだろう。それだけしかわからない。

全然記憶がないし、こんな黒ずくめな男に会ったことすらない。

悩んでいると黒ずくめの男が口を開いた。

「俺は白さ……いや、ここで名乗る気はない。また会う機会があるだろう」

僕から背後に振り向き歩いて行くが、僕は魔法の矢1を試しに放った。

一つの圧縮しすぎた影響でスパークが走っている矢が黒ずくめの男に直撃すると思いきや

「……領域」

黒ずくめの男の一声で僕の矢が消失した。

「なっ!?!」

驚いてる僕に向き直り、魔力を放出させた。
強大な魔力が周りを包み込んだら結界が消滅した。
消滅したと同時に強大な魔力も消えた。

「なんて魔力だ」

「そ、そうね」

「結界は破壊した。目的を果たしてくれ」

黒ずくめの男が僕と明日菜さんに言い残して消え去った。
転移魔法を使った痕跡すらない。
あれは一体何？

「ネギ」

「何ですか？」

「私、木乃香が気になるわ」

「……そうですね。行きましようか」

「うん！」

目的が決まった。

親書は後回しにして僕と明日菜さんは影のゲートに潜った。

くシネマ村く

僕と明日菜さんはシネマ村前に影のゲートで来た。
懐かしい。

ここで初めてフェイトと会ったわけ。

「何でここなの？」

「僕も分かりません」

「とりあえず、入ってみよう」

「はい」

入場料を払い、中に入った。

入場すると周りには人がたくさんいた。
見ろ！人がゴミのようだほどではない。

僕と明日菜さんは普通に私服だ。

ここで服を着替えると言うのは時間がないためしない。

「木乃香達を探せばいいのよね」

「ええ」

「じゃあ、私はあっちの方に行くわ」

明日菜さんが走っていった。

僕は夕映さんのカードを出して念話をする。

「夕映さん、夕映さん、聞こえますか？」

『聞こえます』

「今、どこにいるんですか？」

『シネマ村です。ネギ先生は今どこに？』

「シネマ村の中です」

『今、観客が多い場所に木乃香さんと刹那さんがいます』

「それって直ぐに分かりますか？」

『多分、一か所しかありません』

「ありがとうございます」

人が多い場所って橋のある所か。
念話を切った僕はカードをポケットの中に直して人混みが多い場所に走った。

橋の方では、

刹那と木乃香が月詠に会っていた。

「何でここにいる！」

新撰組の服装をした刹那が刀を月詠に向けた。

「先輩と戦ってみたいと思ひまして」

「くっ！」

周りは人がある。

ここでは派手な事が出来ない。

どうする、どうすれば回避できると思ったその時、

「木乃香！！」

「明日菜！？」

明日菜が来た。

でも、この状況は何も変動がない。

状況を見ていた夕映達は考えていた。

「ネギ先生はまだですか」

「そうだね」

「何でネギ先生なの？」

ハルナの言葉にビクンと反応する夕映とのどか。

言った本人は面白い物を見つけた様な表情になっていた。

「そ、それは……」

「あ、ネギ先生」

「え？」

月詠の方から出てきたネギがいた。

急いできた僕は月詠さんを目撃した。

背後から攻めるのは僕の趣味じゃない。

だから、僕は月詠さんの前にいる2人の前に瞬動で向かった。

「木乃香さん、刹那さん」

「ネギ君！」

「ネギ先生」

二人とも無事みたいだ。

分身でもないから自由に行動可能だ。

僕は木乃香さんの耳に小声で呟いた。

「木乃香さん、実家に向かいましょう」

「実家！？　そうやな」

木乃香さんが僕の意見に頷いて刹那さんに

「せっちゃん、ウチの実家に」

「わかりました」

「そうはいきまへんで！」

お婆さんの誕生だった。

誕生じゃなく登場であるが。

相変わらずぬいぐるみらしき存在と出てきた。

「隠す気があるんですか？」

「あるわけないやん、それよりも木乃香お嬢様を渡してもらおうか
！」

「なぜ木乃香さんをお婆さんに渡さなきゃいけないんですか？」

「そうよ！」

明日菜さんが僕の前に出る。

いたんですか。

出てくるまで気が付かなかった。

お婆さんが札を出してこう言った。

「この札はなく、ウチの最高傑作やからガキンチョごときがどうに
かできると思わへん方がええで」

「小太郎君といい、お婆さんといい……仕方がないですね」

ここで足止めさせてもらおう。

念のため、明日菜さん達に目的地まで向かってもらおう。

「明日菜さん、木乃香さん達と共に向かってください」

「え？」

「ネギ先生はどうするんですか？」

「僕は足止めします」

背中に手をやったがスカッと空振りする。

そういえば杖放置してきたんだ。

かっこ悪い。

薄気味悪い表情で僕の事を見るお婆さん

「フッフ、ウチをなめんやないで！」

「ヤラレ役が何を言うんですか？」

「このガキ……」

怒りで増えてる所申し訳ないけど、時間の無駄だから先手を取る。

いや、取ろうとしたが僕と敵の間に私服姿のエヴァと茶々丸が着地した。

飛んでくるなよっと突っ込みたいが、まあいい。

「エヴァンジェリンさん」

「こいつらか」

「ネギ先生の敵は……この方達ですね」

茶々丸さんが何かに目覚めてる。

ロボットだからわからないと言う事はない。

エヴァの反応を楽しむ事が出来るほど世界が歪んでいるんだ。

不思議でもない僕は思い込んだ。

「貴様、私の物に手を出すな」

エヴァが月詠さんを上から目線で呟く。

私の物っていつエヴァの物になったんだよ！

明日菜さんと木乃香さんの眼がメラメラと燃えてるし

「エヴァンジェリンさん」

「ネギ、ここは私に任せろ！ さっさと向かえ」

「遠慮なく向かいますね」

すると、エヴァがズルツとバナナに滑った様なコケ方をする。

「お前は私を……とかないのか！」

「エヴァンジェリンさんは最強なんですよ？ ですからがんばってください」

茶々丸さんとエヴァに任せる事にした僕は2人の前まで移動する。

そんな目で僕を見るのはやめてくれませんか？

2人の目が僕を突き刺す様な視線だった。

「急ぎましょう」

「そうやな」

「エヴァちゃんに任せれば大丈夫でしょ。なんたって最強なんだから」

明日菜さんが笑顔でエヴァにさよならと手を振り、僕の左手を握る。機嫌が良くなった木乃香さんも僕の右手を握りながら目的地に向かうべく走った。

走ってる途中でエヴァの「覚えてろよ！ 神楽坂明日菜、近衛木乃香

「!!」とか聞こえた。

うん、気のせいだ。

僕達はエヴァを残してシネマ村から抜けた。

エヴァンジェリンはネギがようやく行ったと判断すると殺気を前にいる女に話しかけた。

「私が相手になろう。あいつらを追いたければ私を倒すがいい」

札を持って変な笑い方をする女の横に白髪の少年が女にこう言った。

「千草、ここは引いた方がよい」

「何でや? 相手は一人やで」

「相手は闇の福音、吸血鬼の真祖だから」

「あんなちっこいガキが!?!」

大声で叫ぶ目の前の女にムカツと来たエヴァは言い返した。

「誰がちっこいだ!」

「マスター、落ち着いてください」

茶々丸がまあまあと暴れそうなエヴァを止めている。

まるで子供がわがままを突き通そうとしているような光景。

「千草」

「ちっ! わかったで……月詠はん、撤退や」

「はいな」

白髪の少年と共にシネマ村から撤退して行った。
撤退している方向がどう見てもネギ達が向かっている方向だった。
エヴァは相手の向かつてる方向を見て舌打ちする。

「茶々丸、私達も向かうぞ」

「シネマ村はいいのですか？」

「何時でも来れるだろ！」

茶々丸がエヴァの顔をじーっと見つめる。
見られてるエヴァは茶々丸から目を逸らす。
何かを悟った茶々丸が納得した様に頷き

「ネギ先生のためですね」

ネギという単語に赤らめたエヴァは茶々丸を睨んだ後、ネギの向かった方向へ飛んでいく。
茶々丸もエヴァの後を付いていった。

「ネギ先生……行っちゃいましたね」

「木乃香さんの実家に向かったそうです」

「そこに向かおう。夕映」

「ですね」

残っていた夕映やのどかは急いでネギの後を追う事になったのだが
……

会話を聞いていたハルナがのどかと夕映の肩をポンと叩いた後、

「のどか、夕映、その辺……詳しく聞こうか」

背後に黒いオーラを漂わせていた。

まるでどこぞの白い魔王の雰囲気だった。

「少し、聞かせてもらいましょうか」

「ハルナ……えと」

「うう……」

涙目になった2人は耐えきれず話すのだった。もちろん、魔法の部分は隠して

n e x t 第22話へ

第22話『修学旅行編7』（前書き）

アクセス30万ユニーク3万突破しました。

木乃香の実家に貼ってる結界がちよつと違う仕様になっています。
・評価、感想などお願いします。

第22話『修学旅行編7』

〽本山・木乃香の実家前〽

実家前と言っても家は上の方にある。
かなり登らないといけないからつらい。
僕は大丈夫でも他の人が……ね。

「へえ、ここが木乃香の実家なんだ」

「そうやで、驚いたやろ？」

「正確には門前」

「上に登らないと行けませんね」

「これって疲れない？」

現在、僕は混乱していた。

なぜかって？

そんなこと決まっている。何で、

「何でエヴァンジェリンさんがここにいるんですか？」

当然のようにエヴァが門の柱にもたれていた。

あなた、修学旅行を楽しむんじゃなかったんですか？

呪いの間に過ごした無駄な時間を忘れてもらおうとあまり関わらなかったのに。

「あいつらがお前の方に向かったから来たただけだ」

「本当は心配で来たんです。ネギ先生」

「何を言ってるんだ！」

茶々丸の言葉に反応して突っかかるエヴァ。

修学旅行に来て、ますます性格が変な方向に行ってる気がする。

「人数多くないか？」

「そうですか？」

「気のせいなのです」

「木乃香の領地ってすごいわね」

「上に登らないと家ないんやけど」

家は上に登らなければいけない。

そこまでの道がしんどいのだが、

あれ？

木乃香さんの家ってこんなでしたっけ？

疑問を抱く

ちなみに、今いるメンバーは明日菜、木乃香、茶々丸、エヴァ
夕映、のどか、ハルナだけだった。

「ちょっと！私を忘れて……」

「朝倉さんもいたんですね。誰のせいなんでしょうね」

「それより、何でパルが」

「夕映とのどかに聞いたのよ。ネギ先生の事も」

ニヤニヤしているハルナさんを見て確信した。

ああ……ばれたのかと溜息を吐いた。

「夕映さん、のどかさん、いっちゃったんですか」

「はい」

「言うつもりはありませんでしたが、威圧感に負けてしまっ

「それは仕方がないです」

「仕方がないの？」

明日菜さんが何か言いたげな表情。

念のため、圧力をかけておこう。

「ハルナさん、一つだけ言っておきますがみんなに広めないでください。」

じゃないと、オコジョか記憶を消さなきゃいけません」

「わ、わかったわ」

青ざめたハルナさんがコクコクと頷く。

広めた記憶がないから大丈夫と確信した。
でも、油断は禁物だ。

「ネギ、そろそろ行かない？」

「立ち止まっても仕方がないですね」

僕達は頂上へ登った。

（木乃香の実家（こういう名前で））

辿りつくと、巫女さんがいっぱいいた。
木乃香さんの実家は本当に久しぶりだ。
前と全然変わってない。

「ようこそいらっしやいました。ネギ先生」

詠春さんが出てきました。

ここで明日菜さんが渋いとか言うな。

「木乃香のお父さんって……」

「奥に入ってください。そこで用件を聞きましょう」

「わかりました」

詠春さんが奥へ招いてくれた。

ただ、詠春さんの表情がちょっとだけ驚いた表情になっていたが。

奥に入ると何かお城や最高責任者がいる様な状況の場にいた。

座布団が敷いてあり、詠春さんが座る場所には王様のな高級座布団があつた。

それはいいとして、何故、座布団？

和風だから仕方がないのかな。

「僕は真ん中に座りますか」

僕の発言で一斉に誰かが動き出した。

エヴァが僕の右腕をギュッと絡める。

「私はここで座らせてもらおう」

「エヴァちゃん、それはアカンって」

「エヴァンジェリン？」

詠春さん、何を驚いた表情になっているのですか？

「久しぶりだな、詠春」

「なぜ君がここに」

呪いをかけられているはずの人物がいると驚くのは当たり前だ。呪いが消えた事を詠春さんは知らなかったみたいだ。というか、今いる事を気づいたのか。

「行事の一環として呪いを操作してもらった」

「嘘付くんじゃないわよ！」

「本当の事を言うとなると問題になると思うが？」

僕は別に構わなかった。

エヴァを助けたのは今から言うとも未来の関係だ。

呪いを解いた僕を敵意持つならそれはそれでいい。

僕を狙うと言うなら容赦はしない。

問答無用で無になってもらう。

「あ、そうだ。詠春さんでしたっけ？」

「はい」

話した事があんまりないからどうすればいいのかわかりません。

タカミチ以上に存在自身忘れてましたよ。

最後に話したのは木乃香さんの事についてでしたね。

懐かしく思いながら懐にしまっていた親書を取り出し、詠春さんに渡そうとするが

「エヴァンジェリンさん、木乃香さん、邪魔なんですが？」

「そんなもの、私が渡してやる」

親書を僕から奪い取り、魔力を親書に包み込み投げた。
こんな使い方、今まで見た事もない。

詠春さんの所に親書が届く。

受け取った詠春さんが親書を読み上げた後、僕にこうやってきた。

「御苦労さまです。親書を確かに受け取りました」

「はい……明日菜さん、助けてください」

僕の助けを聞いた明日菜さんはハリセンでエヴァと木乃香さんを叩いた。

バシン！ バシン！とかシュールな音が鳴った。

「何をする！」

「何するん？ 明日菜あ」

「ネギから離れなさいっての！」

ここまで状況説明がなかったから言います。

僕の両腕に木乃香さんとエヴァが占領。

それを見ているのはのかかさんと夕映さん、茶々丸さん
状況を楽しんでいるのが朝倉さんとハルナさん

そんな状況に、刹那さんが詠春さんの前に出てしゃがみ込み、

「長、私は……」

「頭を上げてください」

「あ、はい」

詠春さんに言われた刹那さんが顔を上げる。

「木乃香の護衛、ご苦勞様でした。これからお願いします。」

それが木乃香のためにもなるんですから」

「はい！」

ネギがとんでもない事を言い出した。

「木乃香さんは既に魔法を知ってます」

「ちょっ!？」

明日菜さんが僕を止めようとしませんが無駄に終わる。

詠春さんは今までにない驚きをしていた。

「僕が来て当日か翌日にばれてしましまして、明日菜さんのせいで
「何で私のせいなのよ！」

「なるほど……明日菜さんは当日に知っていたのですね」

「ここで魔法とか言って大丈夫なん？」

「木乃香さん、大丈夫ですよ。ここに居る全員は魔法の存在知ってますから」

「そうか……木乃香、お前は魔法使いになりたいかい？」

詠春さんのいきなりの質問に木乃香さんは目を見開いた。

20秒ぐらい考えているように見えた後、僕を抱きしめて

「ネギ君のパートナーになるのは決定済みや！」

「木乃香、あんたねえ」

「キスだってしてるやん」

キスって挨拶みたいな事になってるよ。

それだけで言うのはどうなんでしょうか、

僕には乙女の頭の中は理解できません。

「もうその辺でいいです。木乃香、がんばりなさい」
「うん！ありがとな、お父さん」

木乃香さん、親公認って勝ち誇った表情してるの？

頑張りなさいって何を言っちゃってるんですか？

娘を応援する気持ちは分かりますが相手は10歳でしょ？

言おうとしたが、ここで言ってしまうと何かを失う気がした。

「頑張らなくていいぞ」

「エヴァちゃん、負けへんで」

「ほう？ ネギに鍛えられたときの力で私に勝てると思うなよ」

魔力を開放すると、天井にひびが入る。

エヴァ、木乃香さんの実家を破壊する気。

詠春さんはニコニコと微笑むのみだった。

止めるよ……。

仕方がないので茶々丸さんをお願いする。

「茶々丸さん、エヴァンジェリンさんを止めてください」

「えと、わかりました。……せっかく残念ですけど」

茶々丸さんが残念そうにしながらもエヴァを捕まえる。

「マスター、これ以上するのは危険です」

「止めるな！」

「ネギ先生から印象が悪くなってもですか？」

「……仕方がない」

茶々丸の言葉に悔みながら魔力を消す。

同時に木乃香さんの魔力も消えた。

「皆さん、お疲れの様ですから今日の所は泊まってください」
「いいの！」

「ハルナ、落ち着いて」

「でもどうするの？ 私達がいないとわかったら」

「それに関してはご心配しないでください」

複製魔法で明日菜さんを含めた存在を生み出し、本物と同じように行動させる。

今頃は旅館で普通の行動をとっている事だろう。

「本当に大丈夫なんでしょうか」

「それより、部屋で休みたい！」

ハルナさんはもう歩けないと言う事を態度だった。

「そうですね。では、案内人に従ってください」

詠春さんが僕達を見て苦笑した後、この人が部屋に案内してくれた。

部屋と言っても男女混合になってる。

広いけどこれはないだろう。

仮にも僕の見たい目は10歳だけど、精神は1000歳だ。
ハルナさん達が畳の上に寝転ぶ。

「疲れた〜」

「木乃香の家ってすごいわね」

「ウチやなくてお父さんのやけど」

「どっちにしてもすごいわ」

「さて、問題はここから何ですよね」

「何だ？」

僕の言葉、エヴァの言葉に明日菜さん達の表情が変わる。

「ここに貼られてる結界って大丈夫かどうかです」

「木乃香が狙われてるってのは聞いたけど、どうなの？」

「普通の魔法使いでは無理だ」

「影のゲートや水から来られる危険性があります」

「確かにな」

水や土などに結界は意味がない。

そこまで高性能な結界はあまり存在しない。

僕はその辺の危険性を説明した。

「ここも安全って言い切らない事か」

「どっかで見た事あるわ。アニメだっけ？」

バリアで覆われた基地に透ける装置がある機械が入って攻め込まれるシーンが」

アニメってまあ、そう思ってもいいかも知れない。

本山の結界でも透過する能力があれば入れるってのが判明してるもんね。

「一番は木乃香さんを攫うのが目的だから攫ってもらおうか」

「ネ、ネギ先生!？」

「せっちゃん、別にいいんよ? 元から決めてた事やし」

「このちゃん……」

心配そうに見つめる刹那さん

刹那さんの心配に気づいた木乃香さんは右手を上げて

「大丈夫や、もしもの事があつたら自力でどうにかできるし」

「どうやってですか!？ 神鳴流がいるんですよ?」

「これがあるから」

そう言つて右手に魔力の塊を作り杖を生み出す。

「木乃香、それってもしかして」

明日菜さんにも教えてるから知ってる。

腕を組んでいるエヴァが木乃香の杖を見て僕に尋ねる。

「何だあれは……」

「強制転移の杖です。ただし、1日に1回しか使えませんが」

「それがあつても無理なんじゃあ」

興味を持った朝倉さんが杖を見て呟く。

「強制転移の杖は危険と思つた瞬間、どんな能力があろうが強制的に転移させる」

「つまり、相手が強かろうが関係ないって事か」

「夕映さんとのどかさんだけ渡しておきましょう」

僕は2人に強制転移の杖を渡す。

「ネギ君！ 私は？」

ハルナさんが何かを言っていた。
それを無視する。

「でも、修行の時それを使ってもネギから逃げられなかったんだけど」

「あ、ウチも疑問に思った」

修行の時、何度かそういう修行をしている。
その時に使ったがネギの攻撃をともにヒットした。
一応、その辺の説明はしておこう。

「僕の場合は……スピードが速すぎて意味がないんです。あはは」
「あははって……」

「ネギのスピードってどれくらいだ？」

明日菜さんと木乃香さんの表情が青ざめた。
状況を思い出したようだ。

エヴァは2人の反応を見て首を傾げるのみ。

「マッハで言うと、かなり手加減してたから30000ぐらいだっけ？」

「嘘付け！」
「嘘じゃないですよ？ 本気を出せば横切る衝撃波だけで敵を倒せる自信があります」

へっへん！と鼻を伸ばして威張るネギを見たエヴァがその辺にある座布団を持ち突っ込んだ。

「物騒な事言うな！」

エヴァから突っ込みを貰った。

本当の事を言ったのに何がいけないんだ？

落ち着こうとテーブルにあるお菓子を一口で飲みこむ。

「うーん……」

「ハルナ、どうかしたのですか？」

「いやね、それもどっかで見た事あるのよね。」

喫茶の店長が疾風の何とかと呼ばれてて、通り過ぎただけで相手を倒すだけ？

その漫画の前半は安定してたけど後半からすごいのよ」

「ネギ先生、ハルナの言う感じですか？」

漫画の話をしてるハルナさん

僕にそう言ってきた夕映さんが一息とテーブルに置かれていたお菓子を一口食べる。

「似たような感じです」

「お風呂に入ってこないと……」

「あ、僕も……」

今日は別の意味で疲れました。

僕は立ち上がり行こうとしたその時、爆発音が鳴った。

爆発音にしては魔力が流れ込んできて結界が破壊されていた。

それとかなり魔力でその場を爆発させたような音だ。

爆発音と共にちよっと揺れた気がした。

「何事だ！」

「多分、あいつらだと思っています」

刹那さんが冷静な態度で呟く。

「そいつに会ってきますか」

魔力の気配がフェイトなのは既に分かっているけど、何で月詠さんの気配を感じるんだ？

エヴァを連れてる影響かどうか分からないがそういう事にした。

皆は状況に混乱していた。

詠春さんが危ないと僕は思い、フェイトの所に向かおうとするが止められた。

「待て、ネギ」

声の主はエヴァだった。

音がした方面を見ながらこう言った。

「私も行くぞ」

行く気満々になってるエヴァを見て、まずいと思った。

相手からバレてるけど、今は僕だけでフェイトと接触してみたい。

接触する事でどう変わるのか見てみたいからだ。

だから、僕は戦いの歌を使用して、

「来ないでください。エヴァンジェリンさんは夕映さん達をお願いします」

「まっ!？」

壁をぶち壊しながら爆発音のあった場所へ突っ込んでいった。
関係ない壁など粉砕してるけど気にしない。

過去まで来たんだ、後悔はしない。

n e x t 第23話へ

第22話『修学旅行編7』（後書き）

第23話目は2010年1月5日以降になります。

第23話『修学旅行編8』(前書き)

今年もよろしくお願いします。

第23話『修学旅行編8』

爆発音が聞こえた場所に向かうと詠春さんが石化していた。
やっぱり石化するんですか、空気キャラなだけあります。
僕は王座の上に立っているフェイトを見る。

「君がやったんだね」

「そうだよ。ネギ・スプリングフィールド」

僕に向かってニヤツと口を歪めてきた。

完全なる世界か……はつきり言っていてこいつら、空気レベルだからどうしよ。

月詠さんがフェイトの隣にいるって事は2対1か。

「ネギ君、君一人かい？」

「そうだよ。だからって勝てない訳じゃないけど」

挑発のつもりで魔法の射手1をフェイトに向かって撃つ。

手加減してるため後ろに弾いてくれたが、

ネギの撃った魔法の射手1が只の射手な訳がない。

「いいの？」

「何がだい？」

フェイトに向かって指を差すと、弾き飛ばされた魔法の射手が帰ってきた。

驚いた表情になった後、魔力を込めた拳で魔法の射手を消した。
あっさりと消された。

「フェイトはん」

「何？」

「私にやらせてもらえへんやろか」

月詠さんの言葉に僕の方を見て頷く。

「いいよ。僕はお嬢様を回収しに行きます」

フェイトが木乃香さんの方へ向かおうとする。

そんな行動、僕がやらせると思ってるの？

とか思っている、闇の吹雪らしき魔法が僕の横を逸れてフェイトの横を通り過ぎた。

闇の吹雪って事はエヴァか……。

後ろを見るとエヴァと木乃香さんがいた。

「ネギ、作戦実行だ」

「え？」

作戦なんて知らない。

「というわけで、木乃香」

「了解や！」

「はい？」

エヴァと木乃香さんのやり取りが理解できません。

混乱している僕を余所に影のゲートで消え去るエヴァ。

撤退するって何しに来たんですか。

隙が出来た事にチャンスと見たのか、木乃香さんの後ろからおばさんと使い魔3匹が出てきて、

「木乃香お嬢様はウチがいたたくで！ 残念やったな！」

拘束された木乃香さんと共に逃げ出した。

何なんだよ、これ。

訳が分からない展開に戸惑った。

逃げ出したのなら仕方がない。

気を取り直して前を見ると月詠さんだけ。

「フェイトはどこへ行った？」

「フェイトはんやったら千草はんの護衛や」

嬉しそうに語る言葉の内容を知った僕は断罪の剣を両手に作る。

木乃香さんをわざと攫われるってああ、本気で実行したの。

それなら気にすることはない。

「月詠さん、捕まってもらいます」

「タダで捕まる気ないわ」

「魔法の矢50」

問答無用な数で月詠さんに追い打ちを駆ける。

「ひどいわ」

1秒ほどで全てを弾いた。

この月詠さん、強い気がするけど僕の気のせいだね。
それを確認するためにちよつとだけ強力な魔法を撃つ。

「雷の射手……集束」

一つ一つの矢が集束。強力な矢になった。
集束し終わった射手を月詠さんにプレゼントした。
プレゼントにしては過激な気がする。

「これは、やばいかも、知れへんな」

とか言いつつ、二刀流の刀に気を込めて流そうとするが受け止めるという形になった。
受け流そうにも流せないみたいだ。

「月詠さん、おとなしく捕まってくれませんか？　ここから同じ魔法を撃てば詰みですよ？」

涼しい表情で最終確認を取る。

反対すれば倒してでも拘束すれば問題なし。

誰かが介入でもしない限り不可能な状況へ持ってきた僕は計画通りと笑みを浮かべた。

受け流そうにもあまりの魔力に弾くことすらできない月詠さんの表情が歪んでいる。

辛そうだった。

ここでやめれば良心があるんだろうが、僕にそんなものはない。
だから、

「ラス　テル　マ　スキル　マギステル　光の精霊11柱！　集い
来たりて　敵を射て

魔法の射手　連弾・光の11矢」

月詠さんに向けて解き放つ。

光の矢11が月詠の背後へ向かう。

向かってくる光を見た月詠さんは叫んだ。

「降参や！」

どうしようもない事に気付いたらしい。

無理もない。

瞬動を使っても光の矢は追尾式。

それに当たると拘束される効果もある。

全ての魔法に追加効果を付けるなど未来人にとって造作でもない。
とりあえず、全ての魔法を消す。

「付いて来てください」

「今や！」

「へっ？」

月詠さんが逃げだした。

なるほど、隙を取られた。

一息付いた後、石化した詠春さんをじーつと見てどうするか考える。

「元に戻すのはいいとして役に立つの？」

「ネギ！」

「ネギ先生！」

あゝあ、考えてる間に皆が来てしまった。

「ネギ、いくわよ！」

「どこへですか？」

「木乃香を助けに行くのよ！！！」

何を言ってるんだ？

木乃香さんなら自力で帰れるのに助けに行く意味がわからん。

「リョウメンスクナを消滅させるのではなかったのですか？」

そういえば、そんな話があったようななかったような。

月詠さんはこの後、現れなかったから次の機会が魔法世界行きゲートって長い。

前と何か違うから現れるかもしれない。

ネギが言ってる意味は、ネギの前に現れるかどうかの意味。

「向かいますか」

「そうよ！」

ハリセンを上に向ける明日菜さん。

剣になるのは修学旅行後だろうから今は気にしない方が良い。

「夕映さん達はここで待機してください」

「はい」

「ネギ、私も行くぞ」

「私もマスターの壊れっぷりを堪能してたいです」

茶々丸さんの性格が歪んでるのはもうどうしようもない事。

気にしたら負け、らしい。

「早く行かないと被害が出ます」

刹那さんの言う通りだと判断した僕達は木乃香さんの方へ向かった。

（決戦場）

木に包まれた森で緑ばっかだ。

走っているとうやく見つけた。

皆と同じペースで走ってるせいでちょっとだけ遅くなった。

「待ってください！」

木乃香さんを背負ってるおばさんが札を取り出してから、

捕まっている木乃香さんのおでこに貼り付けた。

ここで鬼どもが召喚されるって事か。

そう思っていたが違った。

「フッフ、ウチの最高傑作、ビッグONIや！ 100匹以上の鬼を融合させたんや。

これに勝てる術者は滅多におれへんで！！」

見た目は鬼、大きな鬼だった。

巨大と言っても30メートルしかない。

リョウメンスクナより強力じゃないが、

それに近いんだから、それで目的を果たせよ。

僕達はその一点だけ思った。

「ほなさいなら！」

捨て台詞を吐いておばさんは逃げだした。

「どうするのよ、ネギ」

「こんな切り札を持っていたとは」

「そうですね、どうでしょうか」

「兄貴！」

明日菜さんの服からニョキつと出てきた。

ってかいたのかよ……カモ。

突っ込む気もないよ。

明日菜さんから制裁されてるからどうでもいいけど。

「この鬼、どうしてくれよう」

「マスター、落ち着いてください」

「無詠唱の魔法で倒す？」

「あの、ゆっくりでいいんですか？」

刹那さんが申し訳なさそうに呟く。

リョウメンスクナが出ないと目的の意味がない。

「リョウメンスクナが出ないと暇なので時間つぶしになる」

「このちゃん……」

心配な表情になっておぼさんが向かった方面を見ていた。

「大丈夫ですよ。伊達に転移魔法の杖を渡してますし」

「そ、それならいいんですが」

「グオオオオオオオオオオオオオ！」

目の前にいる鬼が大声を挙げる。

「うるさいわね！」

「こいつ、どうするんだ？」

「エヴァンジェリンさん、こいつを捕縛する兵器とか無いんですか？」

「リョウメンスクナ用の捕縛しかない」

結界弾を持って来てるのかってどこにあるんだ？

今の茶々丸さんの全身を見る。

武器らしき物がない。

「後で捕縛する物は転移させる」

首を傾げている僕を見たエヴァが説明してくれた。

だから納得した。

ロボットだから内蔵されてるのかと思った。

「グオオオオ！」

何かうっとおしくなってきたな。

その時、鬼の口から魔力が混ざった玉を撃ってきた。

「明日菜さんミサイル！」

僕は明日菜さんを後ろから持ち、騒ぐ明日菜さんを無視して放り投げた。

「ちょっと！？」

魔力が混ざった玉が明日菜さんに当たったら消失。
魔法無効化って楽です。

投げられた明日菜さんは空中で体制を整えてから着地した。

「いきなり何すんのよ、ネギ！」

「いや、すみません。手が滑りました」

「投げる気満々だったでしょ！」

怒りながらこちらに向かってくる。

別に怒る事でもない気がする。

鬼は明日菜さんに気づき、左手に斧が出てきた。

「凄い鬼ですね」

「刹那さん、この鬼を退治するにはどれぐらいかかりますか？」

明日菜さんが騒ぎながら逃げてる状況で刹那さんに聞く。

「そうですね……多分、3日はかかると思います」

「エヴァンジェリンさん、片づけてください」

「いいのか？」

「いいですよ。僕は傍観してます」

エヴァより後ろに下がり観客気分で見ようとしたら、思ってもない
乱入者がいた。

「そうはいかへんで！」

黒髪に学生服、尻尾が付いてる小太郎だった。
学校行ってないのに何で学生服着てるんだ？

「何しに来たの？ 犬太郎」

「誰が犬太郎や！ 小太郎や」

ちゃんと僕にツツコミをくれた。さすが関西人。勝手に関西人にするネギ。

「くっ！　こうなったら」

向こうで明日菜さんが咸卦法を使い、こちらに帰ってきた。瞬動が使える事は既にわかっていたがここまで成長すると感心する。

「ネギ」

明日菜さんはジト目で睨んでくる。鬼が魔力を開放しながらこちらに向かってくる。ん？　……開放だ？

「リク　ラク　ラ　ラック　ライラック　来たれ氷精　闇の精　闇を従え吹けよ常夜の氷雪　闇の吹雪！」

闇の吹雪が鬼の上半身をもぎ取った。下半身しかなかった。

「下半身だけですか」

「神鳴流決戦奥義　真・雷光剣！！」

鬼に突っ込んだ刹那さんが技を使った。スパーク、電気エネルギーが走った剣を思いっきり上から振り落とす。

鬼周辺が爆発する。爆発した質量が多い影響で煙がモクモクと発生した。

「ゲホッ！ ゲホッ！」

小太郎が咳をしていた。
苦しそうにしていたから、僕は親切心と思い、背後に回り込み背中に向かって、

「えいっ！」

魔力を込めた掌で思いっきり叩いた。
背中の激痛により小太郎が気絶した。
加減をミスったかな？とかちよつとだけ反省した後、風で煙を消した。

「鬼が消滅しましたね」

刹那さんの場所にいたはずの鬼が消えていた。
ここで無駄だ、みたいに復元したら怖かったが、無いみたいで良かった。

「エヴァちゃんと刹那さん、すごいわね」

「いえ、私は……」

「当然だ」

褒めている明日菜さんに、褒められて遠慮気味の刹那さんと鼻で笑うエヴァ。

「そういえば、もう一人何かいたような」

「いませんよ」

「いるじゃない」

気絶してる小太郎を見て指を差す明日菜さんはあ……と息を吐く。

小太郎の体を浮かして本山の方にぶん投げた。投げた衝撃で数本の木が折れていた。

「ネギ、あんたね……」

この場にいる明日菜さん達は呆れた視線で僕を見る。

これで小太郎、小太郎君の出番はもうない。

計画通り、と小声を呟いた。

「リョウメンスクナが誕生するまでしりとりでもしましょうか」
「ここから魔法届くの？」

首を傾げて疑問を呟く。

「目の前の方が効果はいいと思うけど」

「そうですね」

「結界弾も射程がないですし」

「ここにいたら近衛木乃香を助けにくいしな」

上から明日菜さん、刹那さん、茶々丸さん、エヴァ。なんて少ないパーティなんだ。

「ここには役に立たない一匹がいるけど」

「それってオレッチっすか？」

「理解が早いな。下等生物」

「ひっ！」

エヴァの人睨みで明日菜さんの服の中に潜る。

「体力はまだ余ってますか？」

「私は大丈夫よ」

明日菜さんが平気平気と体を動かす。

エヴァも茶々丸さんも平気みたいだ。

奥義を放った刹那さんは、

「だ、大丈夫です。少し休めば」

疲れ気味だった。

無理もない。決戦奥義なんて放ったから疲れも出てくる。

「刹那さんが回復するまで待ちましょうか」

と言った途端、向こうの方で低い音が聞こえた。

「休んでる暇はないようだな」

「リョウメンスクナが召喚されたようです」

水色の大きい怪獣が現れた。

僕から見て、アレは怪獣だよ、と表現します。

胴体にはおばさんと横になっている木乃香さんがいた。

風呂場から攫われた訳じゃないから服を着てる状態。

「オッホッホッホッホッホ！！」

おばさんの声がこの場を支配してる存在に見えた。

まあ、森がそう言ってるだけ。

「うるさいですね。さっさと片付けますか」

「フェイトとか言うガキまでいるな」

「強力な相手が2人ですか……」

おぼさんには個人的に叩きのめしたいから、

エヴァがフェイトの相手にさせればオールOKだね。

自分の中でまとめた作戦を明日菜さん達に説明する。

「僕と茶々丸さんがリョウメンスクナに向かいます。

エヴァンジェリンさんと刹那さんと明日菜さんはフェイトの相手を
してください」

「ふん、いいだろう」

「分かりました」

「分かったわ」

僕の作戦に賛同した全員で実行する前に僕は刹那さんとエヴァにこ
う言った。

「石化が得意みたいなのでその時は明日菜さんをシールドに使っ
てください。

なんなら、僕みたいに明日菜さんミサイルを……」

「何言ってるのよ！ 私嫌よ！」

「えと、私も遠慮します」

「無くても余裕だ」

ここで肯定してくれたら面白かったのに。

そもそもこれって作戦じゃない。

僕は改めて向こうを見ると水色の怪獣が唸っていた。
さらに、

「生意気なガキんちよ、出てこんかい！　ウチをその辺のサブキヤラ扱いした事を後悔させたる！！」

愚痴を叫んでいた。

聞いていた明日菜さん達は苦笑していた。
あなたの出番はここで終わりなんだよ。

「さっさと片付けたら休みましょう」

「私は修学旅行を楽しむ」

「最終日しかないけどね」

「明日菜さん、それを言っでは駄目です」

明日菜さんの言葉でエヴァが悔しい表情になる。
水色の怪獣いや、リョウメンスクナがこちらを見る。
無表情だ。操られてるんだから仕方がないか。

「フエイトとか言うガキを始末するか」

「ちよっと待って！」

そう言っ、エヴァは猛スピードで走り去った。

明日菜さんと刹那さんが慌てて走り出す。

僕と茶々丸さんだけになった。

「茶々丸さんは上空から結界弾を撃ってください」
「わかりました」

茶々丸さんは頷いてから、上空へ向かった。

「雷の暴風より上の呪文で対抗するか」

雷の暴風は周りを巻き込むから使いたくもない。
気にしないけど、こんな事で目を付けられる訳にはいかない。
なら、周りを巻き込まない目標を狙う魔法を使おう。
使う呪文を決めた僕は宙に浮きリョウメンスクナの方へ飛んでいく。

n e x t 第24話へ

第23話『修学旅行編8』(後書き)

第24話『修学旅行編9・短すぎる決戦』（前書き）

今回は、技量不足により、おかしな描写があります。

第24話 『修学旅行編9・短すぎる決戦』

リヨウメンスクナの中におばさんと木乃香さんがいる。
操ってるのはあくまで木乃香さんの魔力

使う呪文はヘルマンに唱えたアレにしよう。

というわけで、現在、リヨウメンスクナ付近にいます。

「ガキンチョ、覚悟しいや！」

「嫌ですよ」

左腕を上空に向けて

「あれ？ 木乃香さんが巻き添えになるかも。……まいつか」

僕の言葉に反応したのか、木乃香さんが杖を取り出した。

強制転移の杖は願えば発動する。

僕が呪文を使った瞬間、発動すれば巻き添えにならない。

「一撃で葬り去るか。向こうは向こうでフェイトが苦戦してるし」

あちらを見るとエヴァがエクスキューションソードを振りまわし
刹那さんがエヴァの攻撃をかわした後の隙を狙い

明日菜さんが魔法類を無効化させながらハリセンを振りまわしていた。

必死に抗うフェイトを見て僕は笑う。

「ククク、向こうは安全みたいだから僕も実行しますか。 サンダー・チャージ」

空を見るとネギの言葉に反応し、雲が集まってきた。

この後、大雨が降るような雲が段々と集まり、白色が黄色に変わる。

「並行世界や異世界に行った時に思いついた雷の倍増かな？」

集まつてきた雲がスパークを放ちながらネギの右手に雷を降らす。雷を受け止めた僕は呪文を唱える事にした。

「ラス テル マ スキル マギステル」

「な、何をする気や！」

「ネ、ネギ君……」

嫌な予感したおばさんがリョウメンスクナの両腕で自分のいる場所を守る。

そんな質量程度の壁でこの魔法を防ぐことはできない。

木乃香さんの声が聞こえたが、詠唱に集中する。

「来れ、虚空の雷、薙ぎ払え……木乃香さん！ 雷の斧」

僕の声に反応した木乃香さんは杖を発動させて強制転移の杖で消え去った。

突然消えた事に驚いていたおばさんはキョロキョロ見回すが上空から降ってくる雷の斧がリョウメンスクナに直撃する。

「おばさんをどけなきや」

思いつきり手加減した雷の暴風でおばさんだけを追い出す。

「ひええええええ！」

どこかに飛ばされた。

これでおぼさんの出番は消えてなくなりました。

「さてと……茶々丸さん、結界弾」

「わかりました」

茶々丸さんが大型銃をセッティングした後、目標に向けて発射した。結界弾がリョウメンスクナにぶち当たり動けなくした。

「ネギ先生、この質量じゃ数秒しか持ちませんのでお早めに」

「分かりました」

茶々丸さんが持っていた銃が一瞬にして砂の様に消失した。

あれ？ 銃って一回きりの兵器だっけ？

リョウメンスクナの叫び声を聞いてハッと思いだした僕は

「木乃香さんがいないから遠慮なしで行くぞ」

ちょっとだけ力を出すことにした。

あまり力を出し過ぎるとこの地域どころか世界がお陀仏になるから手を抜かなくてはいけない。

だからって闇の魔法は使う気にもなれない。

使った瞬間、暴走でもしたら大変だ。

上空には黄色の雲が残ってるから有効活用しよう。

「雷の斧、雷の斧、雷の斧」

僕は雷の斧を3発分ぶつける事にした。

リョウメンスクナは雷の斧を弾こうと抗うが、上空から来るスピー

ドと雷の威力に耐えきれず、両腕が消し飛んだ。

「雷の斧じゃ無理っぽいな。……良い事考えた」

前から試しかった魔法があったんだ。

ここで実験するには効果的だろう。

そう考えた僕は実行しようとして決めて、左手を上空に向ける。

「ラス テル マ スキル マギステル 契約に従い、我に従え、
炎の霸王。来たれ、浄化の炎、
燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし
者を、死の塵に」

とりあえず、ここで言葉を止めて右手を同じく向けて同じく詠唱を
開始する。

「ラス テル マ スキル マギステル 来たれ雷精 風の精 雷
を纏いて吹きすさべ南洋の風」

左手には炎、右手には雷が包み込んでいる。

威力はいつもより少なくしている。

威力が高いとこの後の影響で滅茶苦茶になるから。

「燃える天空、雷の暴風！」

両手をリョウメンスクナの方に向けて解き放った。

雷と炎が重なり合い勢いが早くなり向かっていった。

「グオオオオオオ！！」

両腕が無いのに立ち向かおうとするリョウメンスクナ
雷と炎が重なった魔法はリョウメンスクナの全身を燃やし尽くした。
雷の暴風の勢いで斜め上に方向が変わりどこまでも飛んでいった。
リョウメンスクナの居た場所を見ると残り滓の欠片も残っていない。
完全に消えたことが分かった僕は背後に浮いている茶々丸さんに話
しかける。

「茶々丸さん、どうですか？」

「反応ありません」

「そうですか。では、エヴァンジェリンさんの所に向かいましょう
か」

僕は茶々丸さんの手を握り転移を行う。
転移先がフェイトとエヴァ達の間だった。

「終わりました」

その一言にフェイト以外が呆れた表情だった。
何でそんな表情されなきゃいけない。
明日菜さんが上空に人差し指を差した。

「ネギ、アレって何なの？」

「雷の属性を倍増させるものですが？」

「ありえんだろ」

「そうですか？」

フェイトに向けて雷の暴風を撃つ。

「何!？」

あまりに速い雷の暴風に抗う事も出来ず森の奥まで雷の暴風と一緒に引きずり込まれた。

明日菜さん達を見ると、あっさりと吹き飛んだフェイトの光景を見て顔を顰める。

「戻りましょうか。リョウメンスクナは消滅したみたいですし」

歩き出そうとすると、明日菜さんの後ろから吹き飛んで行ったはずのフェイトが現れた。

「石の槍」

と呟き、魔法陣から石の槍が一部分だけ出ていた。

まずい！

瞬時に明日菜さんの所へ向かい、横に退かした。

石の槍が僕の胸（心臓）部分を貫通させて背中から石の槍が出てきた。

「君に当たったか。まあいい……このまま死んでもらうよ」

死ぬ……？ 誰が死ぬって？

僕が、俺が体を貫通されたごときで死ぬとでも？

「ネギ！」

「ネギ！！」

「ネギ先生！」

エヴァ、明日菜さん、刹那さんが僕を見て驚愕した。

石の槍が突き刺さったネギは一瞬だけ意識を失いかけた。

だが、今のネギは魔力、精神を鍛えられてるため直ぐに覚醒した。

「ぐっ……原子崩壊」

バランスが崩れて倒れそうになった僕は刺さっている石の槍に呟く。
突き刺さっている石の槍が砂の様にサラサラと消えていった。

それより今、誰を刺そうとした？

明日菜さん、アスナ……を！！

刺された僕はフェイトに怒りを込めて殺気を放つ。

放たれた本人はケロッとしていた。

平然としてるフェイトに怒りを覚えた僕はフェイトの障壁ごと消せる程度の魔力を込める。

「対消滅の暴風」

ネギの周辺に光の粒子が集まってくる。

白い粒子と黒い粒子がぶつかり合って水色の粒子に変わっていく。

対消滅とは（白い）魔力の粒子と（黒い）魔力の反粒子を衝突させて他の粒子に変換される現象

完成していく水色の粒子からこの世のものとは思えないほどのエネルギーを感じる。

明日菜さん達が何か叫んでいたが知った事か。

「フェイト、この場から消えろ！」

雷から対消滅へ変えた暴風をフェイトに向けて開放した。

近距離でかわせずヒットしたフェイトが吹き飛んで行く途中、水状になり蒸発した。

対消滅の暴風はそのまま森を巻き込み、山を挟り込み、空を貫き、宇宙へと消え去った。

周りを見ると森が挟れて山が消し飛んだような光景になった。

「ネギく〜ん！」

強制転移の杖で離れてた木乃香さんが空を飛びながらこちらに降下してから僕に抱きついてきた。

風呂場で攫われなくてよかった。

もしも、風呂場で攫われてたら一枚、下手したら裸だぞ。

この時だけはおばさん、フェイトに感謝しよう。

「木乃香さん、どこにいたんですか？」

「ウチ？ 隠れてた」

「それより、ネギ」

「何ですか？」

エヴァが真剣な視線で僕を睨む。

明日菜さん達も僕を見る。

「さっきの魔法は何？」

「燃える天空と雷の暴風ですか？」

「違う！」

エヴァが言ってるのは対消滅の暴風か。

アレは原子崩壊が出来た後に考えた魔法？ かな。

「魔力を強引に変換させた現象と言えば納得してくれますか？」

「納得できるか！」

「確かに納得できないわね」

「ネギ先生は本当に10歳ですか？」

何でこんなに問い詰められるの？

普通に雷の暴風を使った方が早い。

「それよりも屋敷に戻りましょうか」

「まあいい。修学旅行が終わったら聞かせてもらおうぞ」

「……わ、わかりました」

仕方なく返事をするネギ。

「転移魔法で戻らない？」

「賛成やな」

ニコニコと笑みを浮かべている木乃香さんの視線がぶつかる。
視線の意味がなんとなくわかる。極移使えって事か。

「じゃあ行きますよ」

言った瞬間、明日菜さんと木乃香さんとエヴァの視線がぶつかる。
視線のぶつかり合いになった。

こんな状況じゃあ転移しづらいため、数メートルほど離れて状況を見守る。

何をしてるか観察していると状況が変わってきて、エヴァが騒いだりしていた。

言葉の途切れからすると僕を独占やらそんな話だ。

明日菜さんは2人を止めようとまあまあ、と落ち着かせていたけど効果が無い。

あはは……こいつら、置いていくか。

僕は空笑いした後、明日菜さん達を無視して刹那さんと茶々丸さんに話しかけた。

「明日菜さん達をよろしくお願いします」

「はい」

「ネギ先生、何処に行くんですか？」

「石化を直さない」と

刹那さんは僕の答えに納得して頷いた。

これでよし。

自分の影から潜り込もうとしたら

「何処へ行く気！」

逃げようとしたけど、明日菜さんの声がした。

いつの間にか言い合いがよくわからんカオスな状況が消えていた。
溜息を吐いた僕は影のゲートを閉じ、苦笑いする。

「あはは」

「あははじゃない！ エヴァちゃん、木乃香！ 木乃香の実家に戻ろう」

「……いいだろう。先ほどの話は後で付けよう」

「ウチも賛成や！」

一体何の話をしてたんだ？

ネギは明日菜達の話を聞いていないため、理解すらできなかった。

その後、僕達は状況を放置して実家に戻った。

きつと、この事をネギに聞いたら「どうでもいいですよ」という性格だった。

n
e
x
t
第25話へ

第24話『修学旅行編9・短すぎる決戦』（後書き）

フェイトとリョウメンスクナの戦いのはずが短い。

強いネギがいたらこんなもの？それよりもっと短いかな。
次で修学旅行編最後です。

第25話 『修学旅行編10(完)』 (前書き)

修学旅行編の最終話です。

省略、捏造してる部分があります。

技量不足により描写が足りない部分あります。

第25話『修学旅行編10（完）』

（本山）

あれから歩いていたが、
実はまだ実家に到着してなかったりする。
その理由が、

「せっちゃん、ネギ君と仮契約せえへんの？」
「ええ！？」

僕と刹那さんの仮契約の事だった。
そんな事もあったっけ？と状況を傍観する。

「こ、木乃香！？」
「近衛木乃香、貴様何をほざいているんだ！」

エヴァが笑顔の木乃香さんに文句を叫んだのだが、

「せっちゃんもネギ君の事好きやろ？」
「そ、そそそんな事あり……」

あっさりと無視されたエヴァは爪を立てて震えていた。
赤くなりながら否定する刹那さん。
説得力が全然ないの言うまでもない。
僕は何をしてるかって？

「刹那さんと仮契約してなかった事、すっかり忘れてた」

前と違う事に今、気づいた。
フェイトの事、リョウメンスクナの事で記憶から消えてた。
今後の事どうしよう。

「うゝん」

大きな岩の上に座り込み、明日菜さん達の方に何気なく魔法の射手1を発射。

追尾属性を含んだ射手だから只の射手な訳がない。

「ってちよっと、いきなり!？」

明日菜さんは叫びつつハリセンを射手に目掛けて振る。

「明日菜さんも随分と慣れてますね」

「刹那さん、私はネギにしごかれて」

「刹那さん、明日菜さんに稽古付けてくれませんか？」

僕は刹那さんの前に立ち、お願いをする。

「ネ、ネギ!？」

「剣術の基本を教えてあげたら大分楽になるかもしれませんから」

「まあ、今の神楽坂明日菜は弱いからな」

「魔法は効かないわよ!」

射手とか単純な魔法は効かないけど、被害で飛んでくる瓦礫とか無効化できないよ。

その辺は理解できないだろうな。

「ふん！」

「さっきも言ったけど、ネギ君と仮契約せえへんの？」

「ネギはどうする気だ？」

エヴァの視線が怖い。

何で嫉妬したような視線が感じるのかわからん。

「いいですよ」

「ネ、ネギ先生!？」

「せっちゃんもほら！」

木乃香さんが刹那さんを僕の方へ引き付けた。

カモが兄貴の仮契約だあ、ってはりきって魔法陣を生成する。

刹那さんのスカートが捲り上がってチラッとだけ中身が見えた。

「水色か……」

「え!？」

中身を見てつい感想を漏らしてしまった。

「ブチュッとやっちまおうぜ！」

口を突き立てるカモ

はっきり言って気味が悪い。

「刹那さん……」

「ネギ先生……」

じーっと見つめる僕と刹那さん。

外野である明日菜さんが頭を抱えながら

「さっさとやりなさいよ！」

「私も同感だ。これ以上長引かせるとうっかりえいえんのひょうがを使ってしまいそうだ」

エヴァ、それはどう見てもうっかりではなく確信犯そのものだよ。

「刹那さん、いいですか？」

「は、はい」

緊張で硬直する刹那さんの肩に手を置き背伸びしてキスをする。

「仮契約！」

魔法陣が大げさに光り出した。

何で仮契約魔法陣って無駄に光るの？

光が収まると、仮契約カードが浮いていたから
僕が2枚のうち1枚を刹那さんに渡した。

「ありがとうございます」

頬に赤く染まりながらも受け取ってくれた。
僕も恥ずかしいよ。思いつきり人前だし。

「じゃあ、戻ろうか」

「そやね！」

「転移しないの？」

「えー、ネギ君と一緒にいたいだけやもん」

「それだけ!？」

「それだけやけど？」

木乃香さんのそんなん当り前や！みたいな態度に溜息を吐く明日菜さん

こうして、木乃香さんの実家へ向かいました。

く木乃香さんの実家く

救出部隊みたいな人がやってきて石化を直していた。

夕映さん達は僕の休んでた部屋に移動してたらしいです。

石化になった人ってこの人達だけだった事を今になって思い出した。

「ネギ君、エヴァンジェリン、ありがとうございます」

「ふん！」

「どういたしまして」

「お礼としてナギの使っていた別荘に案内しましょう」

お礼！？

そのお礼が父さんの別荘の案内って最悪だ。

フェイトの話はどこへ行った？ どうでもいいけど。

そんな事を考えていた僕は遠慮気味で断ると、詠春さんが笑顔でこんな事を言ってきた。

「そうはいきません。一応、恩人ですし。それに彼も喜ぶでしょう」

「そうですか。では、案内してくれますか？」

「こちらは準備があるので少々お待ちください」

詠春さんが奥へ引っ込んだ。

僕を案内するという事をここにいる人達に言うのだろう。
とりあえず、ここにいる全員に

「これから僕の父さんの別荘に行くんですが付いてくる人います？」

聞いてみる事にした。

あ、その前に一つだけ潰した出来事がある。

それは刹那さんが正体ばれた時の別れもどき。

電車の時など話合ったのが影響で消失したみたいだ。
合っても無くても別れる気なんてさらさらないけど。

「行くわ」

「私も行きます」

「ネギ先生の父親……」

「魔法関連がごろりとあるのね」

ハルナさん、じゅるりって聞こえたんですが気のせいですか？
人の料理を横取りしようとする表情になってる。

明日菜さん達を見ると付いてくる気満々みたいだ。

「朝倉さんはどうしますか？」

「私も行くわ。写真撮らないといけないし」

思い出写真か、僕にはそんな物いらない。

記憶の中にあればいい。

どうせ、僕より早く居なくなるから……。

ネギは未来の事を思い出していた。

「ネギ、何辛そうな表情になってるのよ」

「え？ なってましたか？」

「なってたわよ……」

僕って表情に出ていたのか。

明日菜さんの言葉からすると本当に心配してくれる気持ちが伝わってくる。

「ネーギ君！」

「こ、木乃香さん！？」

僕に向かってくる木乃香さんだったが、魔力の糸が引いてあって足に絡み付きコケた。

「いきなり何するん！？」

エヴァの方へ目を向ける木乃香さん。
良く分かったものだ。

「よく私だと気付いたな」

「エヴァちゃん、笑ってたやん」

「口に出してないが？」

「口がにニヤけてた！！」

「そうだったのか、悪い悪い」

2人共、楽しそうだなあ。

魔法の射手の打ち合いを始める。

無詠唱だから周りに被害は出ない。

横から僕の肩をポンポンと優しく叩く夕映さん

「ネギ先生、いいのですか？」

「大丈夫だと思いますよ？ 普通のじゃれあいですし」

「そ、そうですか」

顔を引きつつている夕映さんを見て懐かしく思う。

普通のじゃれあいですよ。

「前、僕の親友とじゃれあった時、周りの物を破壊しまくってましたし」

「ネギ先生にもそういう性格があったんですか」

「のどか、魔法使いなら普通らしいです」

「木乃香さんとエヴァンジェリンさんが互角です」

じゃれ合ってる2人を見ると同じ数の射手で

ぶつかっては消失、ぶつかっては消失つと同じ事を繰り返していた。

「詠春さん、早く来ませんか」

「来たら来たで止まるのですか？」

「……」

「……仕方がないですね」

傍観していた明日菜さんの背後から持ち上げる。

持ち上げられた明日菜さんの表情が青くなったり赤くなったりして面白い。

「ネギ！？ まさか、また！？」

「あの2人を止めるには明日菜さんしかいないんです」

「ネギで求められるでしょ！！」

投げられたくないという思いを強さに変え、

僕から離れようとするも固定されていて不可能だった。

「明日菜さんはそういう要員ですし」

「要員って何のよ!」

「小ネタとか色んな意味の……では、明日菜さんミサイル!!」

「ちよっ!?!」

魔法の射手を撃ち合ってる中心へ投げた。

悲鳴と共に飛んでいく明日菜さんの前に17ぐらいの射手が両側から来ていた。

突然の光景に木乃香さんとエヴァの手が止まった。

「明日菜?」

「ん?」

明日菜には2人の声なんて気にしてる場合ではなかった。

何とか抗おうと咸卦法の弱版を使って、目の前の射手を無効化した。だが、着地の事をすっかり忘れていた明日菜は壁に激突した。

「あ、明日菜さんは大丈夫なんですか」

「大丈夫ですよ、強化させてましたから」

咸卦法の弱版はある程度強度がなければ痛みすら感じない。

状況を見守っていると詠春さんが奥から出てきた。

詠春さんは周りの状況を見て首を傾げる。

「これは、何かあったのですか?」

僕に聞いてきた。

状況を知りたいらしかったので教える事にした。

「明日菜さんが自ら壁にぶつかったんです」

「ネギが投げたんでしょ!!」

壁に激突していた明日菜さんが僕の前に移動してきてハリセンで叩かれた。

魔法無効化を無効にする障壁を貼ってあるため痛くない。

僕と明日菜さんに向かって苦笑いする詠春さん

「なるほど。ネギ君、女性には優しくしなきゃいけませんよ？」

「分かってますけど、明日菜さんのこういう要員は譲れません」

「どんな要員よ！」

「明日菜、エンドレスになってんで？」

「わかってるわよ……ネギ」

涙目になってる明日菜さんを見て胸がちよっとだけ苦しくなった。色んな過去が一瞬だけ思い出してしまった。だから、

「わかりました。これからは一回程度に控えます」

「ずっとやらないで」

「……詠春さん、僕の父さんの別荘に案内してください」

「って無視すんな！」

明日菜さんの言葉をスルーして詠春さんに案内してもらおうと奨める。

こう言う事は3度までって言うし、止めときますか。

「では、付いて来てください」

詠春さんが先頭になり出発した。

くナギの別荘く

使っていないにも関わらず綺麗になってる。
誰かが定期的に掃除をしているらしい。

「あの本って何？」

「ラテン語みたいですネ」

さっそく夕映さん達が本棚に向かっていた。
僕も本棚に向かい並んでいるタイトルを見る。

「『レイジング・・・』……何で異世界の魔導具名が、偶然だよネ」

異世界に行った時の事を思い出したが偶然と割り切った。
見なかった事にして本棚を見る。

「『聖なる光の魔法書』……こんな所に、これは運命だ」

誰も見ていないか両側を見た後、密かに圧縮させてポケットの中に入れた。

父さんの物は僕のものだからいいよね。
普通はいけない事を考えるネギだった。

「それはそれとして、剣とか使わなかったなあ……イレギュラーか
学園祭か魔法世界で使ってやろう」

本来上、リョウメンスクナには聖なる剣とか使う予定だったが、おぼさんのテンション、状況で使うということすら忘れてしまった。計画が斜め上にずれていくネギだった。

「ネギ先生」

決断しながらも頭を抱えていたら、後ろから声をかけられた。声の方へ向くと詠春さんだったが、手には例の地図を持っていた。内容を知ってる僕にとっては何も意味がないゲームで言うとな無価値な重要アイテムだ。

「それは何ですか？」

「これは地図です。学園に着いたら見てください。ここで見てもあまり意味がありませんので」

渡してきた地図を僕は受け取り、

「ありがとうございます」

お礼を言ってから圧縮させてポケットの中にしまった。本を回収したら用済みのため、ここを出ようと思ったが上から爆発が起こった。

木乃香達の気配を察知した僕は溜息を吐く。

爆発音が聞こえた瞬間、エヴァの魔力を感じたからだ。

「何事ですか!？」

「多分、上にある魔導書で誰か唱えたんだと思います」

「ああ、エヴァンジェリンならありますね」

こんな感じに話していると上からドタバタという音が聞こえた。

何が起こったのか分からなかった僕は上の階に向かった。

2階へ上ると周りが滅茶苦茶になって原型さえない部屋だった。

魔力でテーブルや本などがなかった。

写真も燃えているんだろう。

まあいっか、大戦がなんちゃらと聞かされる羽目が消えたからOK
としよう。

入ってくる僕に気付いた明日菜さんがこっちに来て

「どうしたの？」

「どうしたのっていきなり爆発音が聞こえたから何事かと」

「エヴァちゃんがその辺の魔導書を読んで呪文を発動させたんよ」

「私のせいかな？ あの魔導書に書いてあった黒き呪炎がどんなもの
か威力を抑えて唱えたただけだ」

「……黒き呪炎って朝倉さん、何を写真撮ってるんですか？」

朝倉さんがカメラを黒こげになってる部屋に向けてシャッター音を
鳴らしていた。

「いやあ、記念になるかなって」

「何の記念なのですか？」

いきなり入口付近から聞こえた。

夕映さんとハルナさんのどかさんが立っていた。

「うわあ、見事に黒コゲになってるわね」

「とりあえず、写真でも撮りましょうか」

「写真って既に撮ってるんじゃないか」

「何言ってるのよ、私の仕事は修学旅行中の皆を撮る事だよ」

「修学旅行、そんなものがあつたなあ」

「そういえば、茶々丸さんは？」

エヴァが腕を組み遠い目で語る。

「役目を果たした茶々丸はホテルに戻った」

「そうですか」

「ホテルに戻った理由は何ですか？」

刹那さんがエヴァに聞く。

エヴァの言葉で思い出したけどダミーって確か。

「ネギや明日菜達のダミーは有っても茶々丸のダミーがないからだ」

「なるほど、茶々丸さんはロボットでしたっけ」

「それじゃあ、これからホテルに戻る訳ね」

今の茶々丸さんの雰囲気壊れる為、作る気が無かった。

僕の知ってる茶々丸さんは生身の人と何にも変わらない様になる。

今から言うとうと未来の生身になった茶々丸さんの印象が大きすぎて作ってもそうなるため、やめた。

「最終日で何をしろと言うのだ？」

「行ける所まで行きましょう」

「仕方が無い。行くぞ！！」

「ちょっと待ってください」

エヴァは急ぐように言うがもう時間なんてほぼ皆無だった。

新幹線の時間もだんだん迫ってきている。

「ネギ？」

「ネギ君？」

明日菜さんと木乃香さんがなぜか心配してそうな表情だった。前と比べての印象が違いため笑みを浮かべてから呟いた。

「下に行きませんか？」

「そうね」

明日菜さんの返事に周りの皆が賛同し、下へ降りる事にした。

下へ降りると詠春さんが入口に立っていた。

入口に立っていた詠春さんが声をかけてきた。

「ネギ先生、鍵はテーブルの上にありますのでどうぞ。私は緊急が入ったので本山に戻ります」

「わかりました」

緊急？ 詠春さんのその単語に引っかけた。
その辺のソファーに座り込み、鍵を回収する。

「黒き呪炎、エヴァンジェリンさんは詠唱覚えてますか？」

なぜか右隣に座っていたエヴァに聞く。

ひつつかれていたらカオスな状況になる事が分かりきっている。

隣と言ってもちよっとだけ離れてるから安心だ。

「覚えてない」

「エヴァちゃんの属性って闇と氷やろ？」

「ネギ先生の属性は何ですか？」

「僕は全てです」

「はっ!？」

夕映さんの質問から僕の答えにエヴァが驚く。

麻帆良学園の僕の資料では風と記載されている。

学園長に聞くと、エヴァは僕の資料を見せてもらっていたらしい。

「苦勞して鍛えただけです」

「普通は無理だと思うが、まあ……ナギの息子ならそれも可能?だが」

ぶつくさと呟くエヴァを放置した。

「魔法かぁ、そういえば、魔法ってどんな事が出来るの?」

ハルナさんが妙な事を言い出した。

表情というか目がキラキラと輝いてる。

どこからそんな光を発生できるのか謎だ。

「じゃあ、僕が教えましょう」

「やめて!」

必死の表情の明日菜さんと木乃香さんが僕を止める。

「どうしてですか?」

「この辺を消す気?」

「水晶の中の距離考えたら本山も消えるやん!」

木乃香さんも明日菜さんも酷い事を言う。

そんな気が僕にあるとでも思っているのだろうか?

それだったら失礼すぎる。だから、僕は2人にこう言った。

「大丈夫ですよ。小さな範囲だけですから」

「雷の暴風と燃える天空を禁止にすればいい」

「じゃあ、雷の斧と千の雷はOKって事ですね」

千の雷は巨大の岩を溶かすほどだが、ネギが使うソレは巨大の岩を消滅させる。

溶かすと消滅は全然威力が違う。

「ネギ、明らかに消す気満々でしょ？」

「じゃあ、初心魔法でいいですか？」

小さな杖を取り出し

「プラクテ ビギ ナル 火よ灯れ」

唱えると、先っぽから火が出た。

「すごいすごい！」

ハルナさんがこの現象を見て拍手した。

「でも、これよりライター付けた方が早いですね」

「初心の魔法ですよ。魔法を使う時は精神力と魔力です」

「そうですか」

夕映さんは僕の杖をじーっと見ていた。

難しい表情で何かを考えているように見える。

突如、ピピピッと音がした。

「あ、もう時間みたい」

「時間、ですか」

あれ？　こんな展開だっけ？

腕を組んで考えていると右腕に何かが絡み付いた。

絡み付いたのは木乃香さんの腕だった。

その瞬間にどこからか怖い視線が突き刺さってくる。

今は無視しよう。と無かった事にした。

「ネギ君、時間やって！」

「極移で戻った方が早いわね」

どうやら、僕の転移で帰ろうという訳だ。

この転移は魔力消費が存在しないから別に良いけど、

「今から展開する魔法陣の中に入ってください。入って無かったら
問答無用で置いていきます」

置いて来ても本山からホテルまで、そんなにかからない筈だし別に
良いと判断する。

魔法陣を展開すると皆が慌てて魔法陣の中に入る。

「こ、木乃香さん」

「ん？」

「さっきからエヴァンジェリンさんの睨みが怖いんですが」

こっちを見るエヴァの表情が不気味だ。

僕に突き刺さってる訳でもないのに鋭い視線を感じる。

これこそ長く生きた影響の生命反応か！？

馬鹿な事を考えていると左からエヴァが絡めてきた。

「何時の間に移動したんですか？」

「瞬動を使えば一瞬だろ？」

当たり前な事を聞くな！という態度で言われた。

ハルナさんは面白そうな状況とニヤニヤするし

朝倉さんは記念とか言って今の状況をパシャパシャと写真を撮る。

「朝倉さん、撮らないでください！」

「だって、こんな面白い場面もう見れないかもしれないしね」

「……極移」

どうでもいい理由を聞いた僕は状況を見捨てて実行した。

魔法陣の色が白になると、いきなり景色が旅館ホテルの裏側になった。

到着した瞬間、両腕に絡んでいるモノを魔力を利用した気合いで弾き飛ばした。

「え！？」

「ちよっ！？」

「僕はダミーを排除してきますので、これで」

誰かに何か言われる前に、表へ回り込み旅館に入った。

残された明日菜達はネギと同じ行動を取った。

ダミーを消した後、帰る途中に人数確認をして新幹線で京都を後にした。

これにて、修学旅行が終了した。

n e x t 第26話へ

第25話『修学旅行編10(完)』(後書き)

次は弟子入り、ヘルマン編に移行します。

誤字などは後ほど(何時になるか分かりませんが)修正します。

第26話『権限の鍵』（前書き）

このSSのネギはあくまで、原作のオリジナル最終話以降より逆行してきたため、

原作以上のラスボスが存在しています。後、この話を出さないと後の展開が破綻します。

第26話『権限の鍵』

修学旅行が無事に終わり、数日が経過していた。

エヴァの弟子入りがすることが無いので数日経過したに過ぎない。

こんな事で後の展開が違う方向になるとか正直言ってもいい。

まあ、それはそれとして、後は夏休みを除外してヘルマンと学園祭だけ。

今、僕がいる場所はエヴァの別荘で木乃香さんと明日菜さんを鍛えてもらっていた。

「ところでエヴァンジェリンさん」

「何だ？」

「木乃香さんは治療魔法重視で鍛えてもらえますか？」

「今も石化になってる連中を治すためか？」

学園長にでも聞いたのだろうか？

僕が話したという記憶すらない。

その話を知ってるなら父、ナギが生きてる事を知ってるはずなのに、それを知らない？

学園長すら知らないみたいだから無理もないか。

「神楽坂明日菜は刹那の稽古と私の指導をさせれば問題ないだろう」

「そうですね、僕も修行しますか」

「ネギに修行する必要があるのか？」

エヴァの言う通りなのだが、しばらく体を動かせてないと鈍る。
異世界に行き戦い、僕の別荘に帰還し、のんびりと寝ていたら鈍っていた。

寝ていた時間が長かった原因かもしれない。

「前に2日間寝ていたら体力が落ちてまして、それで」

「そうか……」

本当は2日じゃなく20年だったりする。

異世界に行った時、仮眠程度の時間しか取っていない。

残りはほとんど戦闘時間だったからだ。

2年以上戦い続けたら疲れるに決まっている、と懐かしく思い出していたネギ。

「ネギ、刹那さんが来てないんだけど…」

「そういえば、呼んでませんでしたね。どうしましょうか」

「私も剣術は知らないな。断罪の剣があるからって剣の基本程度だしな」

それでも強かった記憶がある。エヴァも伊達に、無駄に600年も生きてない。

明日菜さんがハリセンで素振りをしていた。

ブン、ブン、と音が鳴っている。

「ハリセンで素振りとはシユールだな」

「アーティファクトだから別に良いんじゃないですか？」

「ウチは何をすればええん？」

「!？」

木乃香さんの声が大きく響いた。

後ろから、耳元に近かったからそう聞こえたようだ。

それになぜ僕に聞くんのだ？まあいいか、と思考を捨てた。

「木乃香、どうするか：ネギの父親サウザンドマスターの魔力を凌ぐお前なら最高の白魔法使いになるだろうな」

「白魔法使い？ エヴァンジェリンさん、ゲームに影響されたんですか？」

「人気になってる魔法を使ってるゲームを買っただけだ」

エヴァがゲームに興味を持つなんて早すぎる。

最低でも魔法世界から帰ってからなのにな。

素振りを終えた明日菜さんがこちらに近づいてきた。

「エヴァちゃん、素振り終わったわよ」

「あ、ああ」

エヴァが目を見開いて愕然としている。

理由が分からない。

「素振り何回にしたんですか？」

「1000回にしては早くないか？」

「ネギの修行時の素振りって魔法の矢が飛んでくるのよね、それで早く振るの慣れてしまった」

「魔法の矢だらけやったな」

僕が明日菜さんを鍛えていた時、魔法の矢を無数にプレゼントしていた。

最初は苦勞してたが慣れたみたいだから、速度を倍にすると直撃ばっかだった。

木乃香さんも明日菜さんの光景を見て青ざめていた。

やっぱり、この光景を失うのは嫌だな。

未来で起こる悲劇ほどではないが危険な状況を思い出し、アレを召喚しようと決めた。

僕は数歩ほど歩き、立ち止まり、ある武器を召喚させるために呟く。

「……最後、終焉、絶望、創生、世界創造を生み出しキーよ、我的手元に降臨せよ」

明日菜さん達は黙って僕の方へ見ていた。

エヴァは今から僕がやる行動に警戒する。

警戒するのも無理はない。

莫大な魔力が漏れてるし、エヴァ並みの魔力で何かを召喚させようとしている。

僕自身、忘れていた事があった。

今日まで忘れてしまっていた。

それは創造主の持っていた最後のカギ以上が存在していた事。

そのカギは世界を自由に創造、消滅ができる事だった。

それが今、ここに降臨する。

光の粒子がネギの目の前に集まっていき、鍵の形になっていく。

鍵のサイズがネギの持っている杖と同じだった。

「ネギ、何それ？」

「カギの形してるやん」

ようやく粒子が集まり終わったようだ。

鍵の形となり、光が消えた。

明日菜達から見れば、鍵の表面が綺麗に思えた。

色が虹色で見える場所によってはオーロラにも見えるほど綺麗だから。

「ネギ、それは何だ、というか何を召喚した!？」

「綺麗やな」

「カギって事は特殊の扉を開くためのカギなの？」

エヴァはこの鍵の本質を知りたそうだ。

明日菜さんはRPG的な事を言っていた。

だから、僕は答える。

「このカギの名称はデウス・クレアートル・マスター・キーと言います」

「デウス・クレアートル：創造神と言う意味か」

「それって武器なん？」

「何言ってるのよ、木乃香。鍵なんかで戦える訳ないでしょ？」

「れっきとした武器ですよ」

（創られたと言われる魔法世界だけでなく、全てを自由自在に：ね）

明日菜さんの言葉を否定し、心の中で呟いた。

完全なる世界、創造主以上の者が偶然掘り出したと言われるオーバーテクノロジー

前に持ってた者がこの世界に干渉し、最後のカギもろとも完全なる世界の連中を滅ぼした。

僕の返事に驚く明日菜さんが空中に浮いてるカギに触りながら、

「これが武器ねえ、そうは見えない」

「創造神と意味が付いていながら何の力すら感じない」

「すごく心地ええな」

いつの間にか明日菜さんとエヴァもカギに触っていた。
ネギ以外に触る事が出来ない訳じゃない。

この鍵はネギ以外に反応しない。
もしも、反応する者がいたとすれば掘り出した者のみ。

「エヴァンジェリンさん、修行はどうしたんですか？」

「ああ、バカレッド、木乃香、再開するぞ」

「再開するぞ、ってウチ何もしてない気がするねんけど？」

「魔力を最大まで高め、時間を長くさせろ」

「言ってる意味がわからへん」

エヴァはこう言っている。

魔力を常に開放し慣れさせておけば

消費も負担も無駄に掛けなくて済むと言う。

「どっかの漫画で見た事あるで」

「確かDr「確かに魔力でもできる事は出来ますが大丈夫なんですか？」……」

「気ができるんだ。魔力でできないという道理はない！」

拳を握りテンションを上げるエヴァ。

こんなエヴァ、見た事が無い。

「夕映ちゃんや本屋ちゃんも呼んどかなきゃ」

「とりあえず、ハルナは無視な」

「邪魔なだけよ」

「そやな」

「お前ら、酷い言いようだな」

ハルナさん、ひどい扱いですね。

エヴァまで憐れみな表情をしているから、僕も今回だけは同情します。

ハルナさんの今後が思い浮かびつつ、天に向けて合掌する。

「刹那も連れてこないと木乃香の修行をしてる時、誰が相手をするんだ？」

「ん？　せっちゃん呼べるんやないん？」

「パクティオカードッスね」

僕の右肩に変な生き物、カモがいた。

何時の間にいたんだか、と呆れてました。

「パクティオカード……呼んでみますか」

胸ポケットから刹那さんのカードを取り出し

「召喚、桜咲刹那」

前方に赤い魔法陣が浮かび上がり召喚させると、何と！

「せっちゃん……」

「は、は、裸！？」

「アッハッハッハッハ」

「えっ、えっ！？」

全裸で現れた刹那さんが慌てて胸と股の部分を隠す。表情が赤くなっていた。

その光景にエヴァは笑っていると言う妙な光景。

「その格好だとネギに悪影響を及ぼすな」

「そやなく、せっちゃんも魅力あるし」

「エヴァちゃん、どうするのよ!？」

真面目な表情で考えてるみたいなエヴァは後方に振りかえり

「茶々丸、適当なゴスロリ服を持って来い」

「わかりました」

エヴァの背後から茶々丸さんが忍者の様に現れ、同じように消えた。
茶々丸さん、性格と能力変わってません?
一瞬だけ硬直してたが別の事を考える。

「刹那さんのゴスロリ服か……見てみたいな」

「ネ、ネ、ネギ先生!？」

刹那さんが顔を真っ赤にして僕を呼ぶ。

木乃香さんと明日菜さんが面白くない、と雰囲気を漂わせて僕に視線を向ける。

ここで、エヴァが助け船を出してくれた。

「お前達も着れば良いだろう? 私は着るぞ」

「し、仕方無いわね」

「ウチも着る! それにしても、明日菜もノってきたな」

楽しそうにはしゃぐ木乃香さん。

コツコツと距離がある右の建物の入り口から足音が聞こえた。

エヴァの別荘ってかなり前と違う。

前に無い物がチラホラとある。

入口の方へ視線を向けると服を持った茶々丸さんがこちらに向かってくる。

いい加減恥ずかしくなったのか茶々丸さんから服をひったくり森の中へ入っていった。

「せっちゃん、よっぽど恥ずかしかったんやな」

「当り前でしょ！あれで恥ずかしくないとかあり得ないわ」

「戻ってきた」

森から出てきた刹那の服装は白と黒の色で合わさったゴスロリメイドだった。

スカートも見える様で見えない仕様になっている。

「そういえば、下着は履いてるんですよね？」

「あ、当り前です！！」

僕の言葉に刹那さんが慌てて答える。

服だけしか持ってきてないような感じだったのに。

「服の中に隠してただけです」

茶々丸さんが理由を言ってくれた。

なるほど、道理で見えない訳だ。

そんな事を考えてる場合じゃない。

そろそろ本題に入ろうか。

「刹那さん、明日菜さんと付き合ってくださいませんか？」

「剣、ですね。いいですよ」

「じゃあ、刹那さん、あっちに行きましょうか」

カードからハリセンに姿を現し2人は森の奥へ消えて行った。
これで戦力が上がると良いけど。

「エヴァンジェリンさん、木乃香さん、あの2人も呼びますから魔法を教えてあげてくれませんか？　僕はちよつとこの鍵を完成させなければいけませんから」

何時の間に消したのか謎のカギがもう一度姿を現す。
エヴァは完成という言葉に引っかかり目を細めたが、

「ん？　いいだろう。木乃香も手伝え」

「基本的な魔法だけで良いんやろ？」

「ええ、とりあえずは魔力を扱える程度で」

魔力を扱える程度じゃなきゃあの修行法も意味が無い。
それにこの鍵、良く見ると今の僕では使いこなせない。
暴走なんてしたらどうなるか想像したくない。
夕映さんとのどかさん呼びますか。

「寝てたりしたらどうするん？」

「起こすに決まってるだろ」

「魔法の事を知ったんですから習得させて仲間に引き込んだ方が早いです」

木乃香さんにそう言うってから、スペースのある場所に魔法陣を展開させる。

位置はエヴァの右隣に茶々丸さん、木乃香さんという順だ。

「現在いる座標は……そこか。召喚、綾瀬夕映、宮崎のどか」

魔法陣の色が赤、青、緑と永遠に繰り返し輝き始める。
準備が完了した場合図として白に変わった瞬間、2人がこの場に召喚

された。

「こ、ここは？」

「アレ？ ネギ先生」

夕映さんとのどかさんがキョロキョロと見回し、僕に気付いた。
そういえば、今、何時なんだっけ？

現実時間の存在をすっかり忘れていた。

2人の様子だと夜という可能性を捨てた。

「あの、ここはどこなんですか？」

「ここはエヴァンジェリンさんの別荘です。用件はお2人に魔法を
教えようと思ひまして」

「ま、魔法ですか!？」

興奮したように僕の右手を握る夕映さん。

「私達が……魔法」

「魔法使いになる時が来……ん？」

夕映さんが空中にある鍵を見る。

「あれは何ですか？」

「カギ？」

「アレは鍵です。普通のカギではありませんが」

夕映さんとのどかさんがじーっと虹色の鍵を見つめていた。

木乃香さんが僕の方を見て、

「何か、ウチら空気やな」

「そんな事ありませんよ」

「おい！ 鍵を何時まで見ている！ 魔法を知りたいのだろう？ さっさと私の後へ着いてこい」

「あ、はい！」

「フフフ……」

エヴァは2人にそう言って大きな城の方へ歩いて行った。
2人はエヴァの後を追っていく。

木乃香さんだけが残っていた。

「木乃香さんも行ってください」

「ネギ君、聞いてもええ？」

木乃香さんの雰囲気が変わった。

誤魔化すことは誤魔化すが、話を聞こう。

木乃香さんは深呼吸をし、決心したのか頷いて、こう言ってきた。

「ネギ君って明日菜やエヴァちゃん、せっちゃんみたいな子が好きなん？」

「はいっ!？」

つい横にズルッとコケそうになった。

予想と違う事を言われて思考が停止してしまった。

「ウチも明日菜ほどスタイルは良くないんは自覚してるけど……」

指を絡ませながら僕を見る。

木乃香さんも魅力があると思う。

思った事をそのまま木乃香さんに伝えると、

「そうやな！　ウチも今後に成長があるんやな！」

嬉しそうにはしゃぐ木乃香さんはよしっと何かを意気込み、

「エヴァちゃんの所行ってくるわ」

先ほどの雰囲気が消えて笑顔に変わった木乃香さんが城の方へ飛んでいった。

浮遊術を習得させたから飛ぶのは当たり前。

ちなみに、明日菜さんには習得させていない。

理由は、戦闘力を強化する事だけだったから。

木乃香さん達の性格を前と比較し、

「ふう、何か僕の知ってる歴史と違う方向に行ってる気がする」

僕は悩んでも仕方が無いと溜息を吐いた。

今まで空気だった鍵を持つ部分に魔力を送り込んだ。

鍵に魔力を送る理由はある。

この時間に戻る前のネギに設定されてたため、今の僕には使用できない事。

僕の魔力を同期させる事で再設定が可能である事。

以上の2つが理由。

「ふう、ヘルマンで試そうかな？」

エヴァの悪魔的な笑みに似た表情になる。

でもいいのか？　と一瞬考えたが、横に首を振る事で否定し、

ヘルマンを実験台にする事に対し、何が悪い。と口を歪ませる。

それはそれとして、僕は刹那さんと明日菜さんの所へ様子見に行こうと決めた。

「決して刹那さんのゴスロリメイド姿を見に行く訳ではないです」
誰もいないのに、そう言い残し、この場から無詠唱による転移を実
行した。

第27話『次への前兆』（前書き）

更新ペースが1月に1回になってますが、できる限り更新したいと思います。

第27話『次への前兆』

くエヴァの別荘・森く

無詠唱による転移で明日菜達の所に来た僕は2人に話しかける。

「明日菜さん、刹那さん」

「ネギ」

「ネギ先生」

僕の声に気付いた2人が修行を止めて僕の方を見る。
何で止めちゃうのかな？

「ところで、明日菜さん」

「何？」

「刹那さんの下、いえ稽古付けてもらってどうですか？」

「うーん、刹那さんの動きは見えるんだけど回避しきれないわ」

予想通りか、刹那さんは明日菜さん以上の瞬動使えるから反応出来ないか。

今後、改良の余地ありって段階にしておこう。

「実戦形式でやってくれませんか？」

「わかりました」

「わかったわ」

ネギに賛同した2人は互いに距離を取る。
ハリセン？ 剣にしてもいいぐらいだ。

「明日菜さん、アーティファクトに魔力を送り込んでくれますか？」
「え？」

明日菜さんが疑問を浮かべて首を傾げる。

「そうです。そうすると本領発揮できるんです」
「そうなんだ」

明日菜さんは魔力を開放し、アーティファクトに送り込む。
すると、ハリセンが黒い大剣に変わる。
変化した時、明日菜さんと刹那さんが驚愕していた。

「さてと」

これならどうにかなる！と明日菜さんは意気込む。
刹那さんも明日菜さんの気配を感じ取り、刀に氣を送り込む。
お互い準備も出来たね。

「明日菜さんからどうぞ」
「行くわよ！」
「はい！」

明日菜さんが地面を蹴り前へ走り出し、刹那さんの前に一瞬で着く。

「っ！？」
「はああああっ！」

大剣を上から思いっきり振り落とす。
振り落とす音がここまで聞こえた。
音が鳴るほどの大剣を刀で受け止める。

受け止めた反動が激しいのか、斜めに威力を流す。

「咸卦法」

明日菜さんがそう呟いた。

魔力と気の同化を使い、斜めに流された大剣をカードに戻し後方へ下がる。

刹那さんも同時に後方へ下がった。

中身が見えそうで見えないや。

もう少し短ければ見えたのに、酷いじゃないか！

男の純情をとアホな事を思っているネギだった。

「やりますね」

「この状態だとすごく調子が良いみたい」

「確かに何か違います」

「私、力が湧いてくるわ！」

2人は楽しそうに修行をしていた。

刹那さんと明日菜さんは相性がいい。

前も仲が良かった。でも、力が湧いてくる効果なんてあったっけ？

色々と記憶を探るが当てはまらない。

と、その時、刹那さんが左足を上げ、明日菜さんを蹴り飛ばす。

「くっ!？」

数メートルほど吹き飛ばされている明日菜さんは大剣を地面に突き刺す。

その行動で速度が落ち、ダメージを失くした。

「よし、鍵を利用して闇の魔法使ってみるか」

2人が刀と大剣の打ち合いをしてる中、ネギは鍵を自分の中に入れる。

この感触、何か気味が悪い。

得体の知れないエネルギーが流れてくる。

鍵の内部には謎のエネルギーが存在する。

多分、このエネルギーが僕の中を同化していくのだろう。

それは置いておこう、今はやるべきの事をやっておかないと。

「使えるのか？ 制御できるかどうかやってみるか」

手を前に突き出し、周りを見る。

草木など緑いっぱい光景だった。

「掌握」

周辺に立つ草木が枯れていく。

ネギの闇の魔法は魔力だけでなくエネルギー源となる全てが対象。つまり、人間なら気、魔力など。

どんどんと草や木が枯れ果てた瞬間、前で戦っていた2人もバタンと倒れた。

2人が倒れたと感じたネギは掌握を止め

「うーん、これはこれですごいな。暴走しない」

さっきと違う光景を見て満足そうに頷く。

本来より遅い速度だけどこれで十分だな。

「1秒、約10メートルの範囲か……成功したから元に戻すか」

掌に集まったエネルギーを全て解放した。
周りの自然が回復していく。

僕は2人に近づいて声をかける。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないわよ……力が入らない、わ」

「それはそうですね、僕の魔法ですから」

僕の魔法と言ったら明日菜さんと刹那さんがガクッと落ち込んだ。
落ち込むと言うよりも呆れて声に出せない状況かも。

「やっぱりネギのせいなのね」

明日菜さんが遺言の様に残して永遠に眠る様に逝ってしまった。
逝ってしまった明日菜さんに向かって手を合わせお祈りをしてあげた。

「勝手に殺すなっ!？」

「おおっ!？ 勝手に人の心読まないでください」

「これは……」

疲れ切った表情をしてる刹那さんがわからないと首を捻った。
そういえば、闇の魔法の掌握は初めてだったね。

「ネギの魔法で私たちの力を吸収したのよ」

「そ、それってすごくないですか？」

驚いた刹那さんが感心していた。
でも、この魔法って欠点だらけなんですよ。

弱点を心の中で呟く。

明日菜さんが僕を横眼でじーっと見つめて

「刹那さん、やる気が無くなったからエヴァちゃんの所いこ？」

「はい。そうですね」

「修行する気あるんですか？」

「ネギのせいよっ！」

耐えきれなくなったのか？

明日菜さんが僕の頭に突っ込みのハリセンを入れてきた。
入れてきた角度が45度とはさすがだ。

「じゃあ、行きましようか」

「待ってください」

「え？」

僕は刹那さんの真正面に立ち、こう言った。

「おかえりなさい。ご主人様かご奉仕します。ご主人様って言うて
みてください」

「ネギ!？」

「ええ!？」

僕の突然の爆弾発言に明日菜さんが驚き、刹那さんは顔を真っ赤に
してうろたえる。

「え、えーと、そ、そのー」

「ご主人様じゃあ抵抗があるならネギ様でもいいですよ」

「自分の生徒に何を言ってるのよ! このエロネギ!」

エロネギ……懐かしい言葉を聞いた。

いいじゃないか、刹那さんのメイド姿は滅多に見れないんです！
前見たのは和服タイプだったし、ゴスロリタイプなんて見た
ことすらない！

いつそのこと、写真に収めたいぐらいです」

「ネギ、声に出てるわよ」

「え？」

「あうう……」

明日菜さんが顔を引きつらせながら僕に指摘してきた。

「どっからですか？」

「いっそのことから」

「そ、そうですか」

何だ、そこからか、なら大事な部分は聞かれてないな。
前は刹那さんのゴスロリ姿を見た事ありませんでした。
どちらかと言うと和服製？　　どういうか知りませんけど。

「どうでもいいから、行きましょ」

「明日菜さん、体力あるんですか？　　ここから500メートルはあり
ますが」

「そんなにあるの！？　　体力持たないわ」

ネギの掌握の影響で明日菜と刹那の体力はゼロに等しかった。
魔力も気も全て範囲に入っているためである。
さすがの刹那さんも表情が少し悪い。

「仕方が無いですね、僕の魔力を」

「というか、転移した方が早いんじゃない？」

「私もそう思います」

「……わかりました。極移」

僕は魔法陣を地面に展開。

範囲2メートルぐらいにし、このまま発動させた。

景色がいきなりエヴァの建物に切り替わる。

「疲れたあってああ！？ 木乃香、何でメイド姿になってんのよ！」

休もうとしてた明日菜さんが一歩進んだ途端、立ち止まって指を右に差し出す。

僕もその方角を見てみると、

「ネギくん、どうや？」

メイド姿の木乃香さんが嬉しそうにクルリと一回転した。

スカートが風に乗ってフワッと捲れるがまたしても中身が見えなかった。

「似合います！」

「ありがとうございます。せっちゃん！」

そう言うと、木乃香さんが嬉しそうに喜んでくれた。

まあ、その後は刹那さんの方に行ってしまったが。

「ちくしょう……」

「何がちくしょうなんだ？ ネギ」

「スカートの中が全然見えないと思って、刹那さんも木乃香さんも人が悪いです」

「なるほどな……」

「ってエヴァンジェリンさん、いつの間に？」

「ちくしょう……と悔しがってる表情を見てからだ」

うわ、全部見て聞いてたのかよ。

嫌な予感がしてエヴァを見るとその表情はニヤニヤとしていた。

「ネギ先生」

「こちらに来てたのですか」

向こうの建物から出てきたのどかさんと夕映さんが僕に話しかけてきた。

2人を見ると魔力を感じたがとても小さい。

弱レベルの『雷の暴風』は撃てるだろう。

「明日菜さん、回復しました？」

「する訳ないでしょ！」

「え？ 漫画だと1コマで無傷になってるのが」

「それはギャグマンガでしょ!？」

うーん、明日菜さんはてっきりそのジャンルの人間だと思った。欠伸をした明日菜はベンチに寝転んで目を閉じた。

「明日菜、寝ちゃったなあ」

「掌握使ったからね」

1秒に10Mって弱くなってるのは事実。

0コンマ1で100KMが通常のはずなんだ。

小さくなってる影響で全能力まで弱体化してしまってる。

世界の修正力か宇宙意志かどうかもわからん。

「エヴァンジェリンさん、向こうの森は枯れてしまいました」

さきほどいた森の方角を差す。

そこには黒色になった森の果てがあった。

黒くなってる範囲が約10M

エネルギーを返しても黒くなってる部分は変わらなかった。

顔を顰めたエヴァは頭を抱えて唸った後、溜息を吐く。

「一旦、ここを出ないとできないな」

「じゃあ、出ますか？」

「出れるかッ！」

「出られるようになる残り時間は？」

「後1時間だ」

「そんなに……とりあえず、やる事はやっておきましょうか。のどかさん、夕映さん」

ある事を実行しよう。

この鍵が存在するって事は魔法世界で何かがあるという事か？

なら、夕映さんやのどかさんを鍛える必要がある。

強くさせるのにも時間が無さ過ぎる。

裏技というか反則技を使うしかない。

「はい」

「何ですか？ ネギ先生」

「2人揃って横へ並んでくれますか？」

「え？ あ、はい」

のどかさんが返事をして、のどかさん、夕映さんと順番に並んでくれた。

二人とも何かするのか、とドキドキしてるようだ。

「では、始めます。潜在能力強制開放」

僕は自分の中にある鍵を元に2人の潜在能力を引き出す。すると、2人の体が青いオーラに包み込まれる。

あっちの方で遊んでいる木乃香さんと刹那さんがこちらに気付く。

「ん？ 魔力が大きくなってる。そうか、これは」

エヴァは2人の現象を見て理解した。

そう、これは潜在能力を引き出し魔力に変換する行為だ。

行為といっても術式が存在している訳ではない。

魔法でもないから仮名として行為と称してるだけ。

エヴァが気づいたのは魔力が増えて何か小さくなってると感じただけ。

「己の力を信じ、全ての力よ、今こそ解き放て」

2人に纏ってあったオーラの色が赤色に変わり膨れ上がる。

膨れ上がったオーラは馴染んだのか、小さくなり2人の体の中に吸い込まれた。

「終わりましたよ。これで多少の助けにはなると思います」

この行為、はつきり言って精神的に疲れる。

生命、機械なら極限まで能力を引き出すことができる。

但し、自分には使用できないのが欠点の一つ。

「何が変わったのでしょうか？」

「呪文使ってみてください」

「え？」

「そうですねえ、魔法の矢10と呟いてみてください」

「わ、わかりました」

のどかさんは距離を少し置いてから声を上げる。

「魔法の矢10」

体が声に反応し、青いオーラが噴き出してから魔法の矢10発分が発射された。

魔法の矢は無意味に立ってるそこら中の柱にぶちあたり粉々に碎けた。

「魔法が使えました……」

「のどか、ネギ先生」

「ん？」

「私も使えるのですか？」

「使えるけど、基本的な魔法訓練はしてくれないと中級魔法もきついですよ？」

「そうですか」

夕映さんが自信満々な表情になっていた。

この行為を元にどんな影響があるんだろう。

でも、一つだけ聞く必要があるな。

それは……、

「夕映さん、のどかさん、メイド服着ないんですか？」

「え？」

「ええ!？」

「ネギ君、メイド好きなん？」

2人が赤くなっていた。

木乃香さんはジト目で僕を見る。

まるで下心満載と思われているのか？

僕は只の子供だぞ、と心の中で叫ぶ。

「違いますよ」

狼狽しながらも真面目な表情で返事を返す。

しばらく僕を見ていた木乃香さんはコホンとわざとらしく咳をして、そっと両手を合わせ

「おかえりなさいませ、ご主人様。こんな感じ？」

照れ笑いしながら僕に聞いてきた。

まさか木乃香さんがやってくれるなんて思わなかった。

「エロネギ」

僕の頭をポカンと軽く小突く。

この感じは明日菜さんしかない。

「起きたんですか」

「こんだけ騒げばね」

明日菜さんがのどかさんと夕映さんを見る。

「ねえ、ネギ」

「何ですか？」

「いい加減、回復したいんだけど」
「返しますよ。えい」

自分の魔力もプラスして明日菜さんの体内へエネルギーを送り込んだ。

ヘルマン対策ぐらいは取っておかないとね。
そろそろのはずだ。これで攫われたら笑うしかない。

「ふう、刹那さんには？」
「忘れてました」

木乃香さんの隣にやってきた刹那さんが僕を涙目でみていた。

「ネギ先生、忘れないでくれますか？」
「ごめんなさい。木乃香さんと百合関係になってると思ひまして」
「ネギ君、ウチは百合興味無いって！」
「私もです！ このちゃんとは親友なだけです」

木乃香さんと刹那さんが大きく声を上げて否定する。
それはいいが刹那さん、だけを強調しすぎです。

「マスター」

遠くから声がした。

声がした場所を見ると茶々丸さんがエヴァの近くまで歩いてきた。
茶々丸さんは見慣れてるからなあ。

今はロボだっけ？ 生命化させるのはまだまだ先の話だけど近い内に実行すべきか。

でも、実行すべき時期は超さんがいなくなってからだね、と心の中に置いた。

「何だ？」

「そろそろ時間になりますか」

「ああ、ネギとその他ども！　もう外に出られるぞ」

「はい」

「ネギ、行きましょ」

「そうですね」

僕達はここから出て行った。

最後に気になる事があった。それは……

出る前、エヴァが茶々丸さんに何か言った後、茶々丸さんは出口へ向かっていった。

その頃、展開は動いていた。

学ランを着て尻尾をはやした少年が嬉しそうにしていた。

その少年は学園結界接触する寸前、懐から出した札を当てる。すると、結界が少年を認識できなくなった。

侵入に成功した少年は建物を飛び越えて、走り出す。
学園内で一番大きな建物の上に乗る、

「ネギ、決着に来てやったで」

と小声で呟いた。

この少年の名前は犬上小太郎。

修学旅行でネギに負け、謎の男に運ばれたという情けない過去を持つ。

そして、もう一人いた。

景色と同化するように動くから誰も気づかない。

普通の人も何の違和感もなく行動していた。

橋の上にニルニルするスライムみたいな生き物が出現して、喋り始めた。

「ヘルマン様の言ったメンバーを攫う」

「それが私たちの存在意義ね」

「ネギⅡスプリングフィールド、君の可能性を見せてもらおうね」

どうやら3匹と言ったところだろうか。

しかし、こいつらの言ってる可能性とは一体何の話なのか。

「では、神楽坂明日菜は私が攫う」

赤いスライムが言った。

青いスライムと緑のスライムは頷き、次の行動を言う。

「私は危険人物を封じる。緑はヘルマン様の所へ」
「了解」

ポチャンと水の音を立たせ、高速で行動を開始した。
赤、青、緑と呼ぶらしい。

いつの間にか黒いコートを着た人物が同じ所に立っていた。
髭を生やして老け顔ってどう見てもおっさんにしか見えない。

「あの夢通りなら君の力を見れるのだろうか。フッフ……」

暑苦しいコートを着た変なおっさんが嬉しく呟いた後、どんだけ境界が脆いんだよ、と思うほど簡単に侵入した。

第28話へ

第28話『再会への道』（前書き）

w e b 拍手を設置しました。

宜しければそちらもよろしくお願いします。

※【更新情報】は役に立たないので削除。

第28話『再会への道』

エヴァの別荘から出て寮に戻る事にした。

学校は思いつきスルーだったり、今日はもうどうでもいい。

エヴァの家から出て行く時、茶々丸さんから袋を貰ってみたいんだけど何だ？

「明日菜さん、何を貰ったんですか？」

「え？　これは何でも無いわよ」

明日菜さんが赤くなって紙袋を後ろに隠す。
滅茶苦茶怪しいんだけど。

「ネギ君、帰ってからの楽しみや」

「帰ってからの……わかりました」

帰ってからじゃないと駄目な物って言ったら食べ物？

こう言う時はお茶菓子とかが一般だね。

木乃香さんがそう言うなら追求することはない。

「ネギ先生」

木乃香さんの後ろにいた夕映さんが斜め前にいる僕に話しかけてきた。

「魔法の練習って具体的には何をすればいいんでしょうか？」

「簡単ですよ。とりあえず、呪文を唱える練習や体力づくりかな？
それを何回も何回もやっていけばなれます」

「そ、それは苦勞しそうですね」

「ネギ先生、私、がんばります」

のどかさんが握りこぶしを作って笑顔で言うが、僕は裏を突く。

「運動大丈夫ですか？」

「うっ！ それを言われたらつらいです」

運動神経が無いに等しくて落ち込むのどかさん。
夕映さんもほぼ無いですよ、この時の状態は。

「のどかさんも夕映さんもがんばってください。
明日菜さん、木乃香さんってあれ？ 刹那さん、どうしてそんな所で影を薄くしてるんですか？」

景色と同化しそうな雰囲気になっていた刹那さんがいた。
そう言えば、かなり空気になっていました。

「木乃香さん、刹那さんの事」

「せっちゃん？ わかったえ。明日菜、せっちゃんとどこか行こ？」

「いいわよ。ネギはどうするんの？」

「これからちょっと用事ありますから」

刹那さんが前より影が薄いけど、今だけだよ？ と心の中だけで思った。

僕は明日菜さん達と別れ、世界樹の所まで走った。

く世界樹く

誰もいなかった。

世界樹がまるで僕を照らすかのような存在に見えた。
今になって何でそう見えるのか僕にはわからない。

「まあいつか。それよりもデウス・クレアートル・マスター・キー……デウス・キーと省略する」

名称が長いし、言い方が前から決まっていなかった。
問題は……、

「創造神の鍵、いや権限の鍵、省略名デウス・キー……この鍵は何のために？」

手を上に掲げると、1Mの鍵を形成する。
本当、何のために存在してるんだ？

「結局、権限の鍵が本当の名前らしいけど、効果はどうみても創造神並みだな」

悪い例として、世界を支配したり創世できる。

ああ、ガノードの魔力は僕より上だった。

ガノードとは前世界のラスボス的存在だった。

フェイトや創造主などより相手にしたくないナンバーワン。

性格が冷酷すぎるし、暴走すると駄々っ子になるシールの持ち主。

「そう言えば、ガノードは宇宙に惑星を生み出して地球に発射させたんだ。って事はよし！」

今、やってみるか。

一番危険な事を子供のようにはしゃぐネギ。
気づいていないようだが、そんなことしたら地球が消える事をネギは知らない。

ガノードが使って地球が消えなかったのはネギが抵抗したからだ。

「ではさっそく」

「いや待てよ」

やる気十分の僕の中から、僕もどきが出てきた。

「あ、僕もどきだ」

「権限の鍵でそれをやるな！」

「……世界消えるから？」

「それもあるが、人の気配がするからだ」

「何、だと……ってああ、小太郎か」

僕は小太郎の気配を感知し、建物の屋上に飛び乗る。

50M先に学生服の少年が腕を組み、立っていた

「うーん、それより何で透き通ってるの？」

「お前経由で出てきた訳じゃない」

「そうだったね、まだ残ってたんだ。……よし、瞬動」

どうでもいいと放置して、いきなり反撃はゴメンなので小太郎の背後に回り込む。

その後、魔力を溜めながら挨拶をする。

「久しぶりだね」

「ネギスプリングフィールド！ 勝負や」

「ええ。しょうがないなあ。あっさりと倒してあげる」

「ふざけんなや！ 今度の俺はちっと違うで！」

「どんくらい違うの？」

「これや！」

黒い塊を集束していき、大きな黒い玉になった。
結構な力が集束しているね。

「それを僕に当てても大したことない気が……」

「何を勘違いしとるんや？ 俺に、ワイに同化させるんや！」

小太郎は自分の腹の中に打ち込んだ。
すると、倍以上の気が解放。

「これは……」

「そうや。難しい事はよくわからへんけどなあ、

自然のエネルギーを吸収して自分のエネルギーにできるんや」

「……へえ」

小太郎がそんなことできるようになるなんて……

使えるようになった理由がわか、ってまさか、あの黒服の？

「まあいいや。今は勘弁してもらえないかな？」

「どうしてや？」

「あの2日、いや1日待ってくれない？ それに夜の時間ならOKだよ」

「体調でも悪いんか？ なら、しゃーないな」

「うん」

本当は違う。

ヘルマンが攻めてくるとしたらそれぐらいの時期だ。

小太郎がここにいると言う事は千鶴さんと夏美さんにも会ってない。

「うーん、だいぶ違う経由になった」

「何を言うてるんや？」

「何でも無い。そう言う事だから僕はこれで」

小太郎があつ、と呟いたのを聞こえたが無視して自分の部屋へ戻った。

今、戦うとヘルマン達の来る時期ずれる恐れがある。

くネギの部屋く

夕御飯の時間だから帰ってみたのは良いが、ここで凄い感動を見た。まさか、まさか、ここで拝める日が来るとは思わなかった。

「えと、何か反応してくれないとさすがに恥ずかしいんだけど？」

恥ずかしそうに指をもじもじさせながら言う明日菜さん。

服装は何とメイド服だ！ バカレッドを強調した赤色のだ。

なるほど、あの袋の中身はメイド服だった訳だ。

その隣にいる木乃香さんもメイド服。

「ネギ君、嬉しい？」

「最高っすよ！」

テーブルの上に生き物が親指をグツと立てていた。というか、この下等生物まだいたんだ……。

木乃香さんが溜息を吐いた。

「カモ君に聞いたんやないんやけど？」

「兄貴もそう思わないっすか!？」

「木乃香さんも明日菜さんもお似合いです。それはそうとお腹が空いたんですが」

「あ、そやった。準備してくるで！ ほら、明日菜も！」

「え？ ……わかったわよ」

木乃香さんと明日菜さんは奥の方へ向かった。
夕御飯まで待つか。

「メイド姿のままにいるつもり？」

脱ぐ気配が全くしない。

夕御飯もそのままでするつもりなのか？と僕は思った。

……1時間後

テーブルには料理が並んでいた。

僕は箸を持って

「いただきます」

と言って、食べようと料理に手を出そうとしたら、木乃香さんが頬を赤らめてこんな事を言いだした。

「ネギ君、いえご主人様、ご奉仕しましょうか？」

「はいっ!？」

「ちょ、ちょっと!」

「何か問題でもあるん？」

木乃香さんが変な事を言い出したので僕は間抜けな声を出し、明日菜さんも慌てる。

そして、帰ってきた言葉がこれだ。

問題あり過ぎだろ？　僕は嬉しいけどさすがに10歳の状態じゃあ、なあゝ。

「いや、普通はしないでしょ？」

「明日菜はしたくないん？」

「私もした……じゃなくて!　恥ずかしいからやめなさいって言うのよ!」

「……じゃあ、着替えるで」

「そうね、誰か来たら困るしね」

いや、来ないから着替えるのは止めて、とは言えないよね。

明日菜さんと木乃香さんは洋服を掴み、木乃香さんが「入れ替え」と呟く。

すると、一瞬にして洋服に変わった。

「この魔法って便利ね」

「エヴァちゃんから教えてもらうた呪文やけどね」

「へえゝ」

そんな呪文があるなら、なぜ前は使わなかったんだ？
また違いを見つけて考えたが、見つかる訳もなく断念して食事を取る事にした。

く ロンドンく

占い師の仕事をやっていた少女は部屋で手紙を読んでいた。
帰ってきた少女は机の上に置いてある手紙の中身を見た。

「何よこれ」

そこに書かれた事はこうだった。

『アンナ・ユーリエウナ・ココロウアに条件変更を命ずる。

麻帆良学園の生徒となり、ネギスプリングフィールドの補佐として
勤めよ。』

ウェールズの学校から来た手紙に書かれていた。

何度も見たが未間違いではなく本当にそう書かれていた。

実はこれ、ウェールズの学園長とネカネがアーニャのために、とい
う事を後で知る事になる。

「どうして私が日本に行かなきゃいけないのよ！

まあ、ネギに会えるんならって何で嬉しそうに言うのよ、私は！！」

これじゃあ、私がネギの事好きみたいな言い方じゃないのよ！と
暴れたが、疲れてベットに横になって考える。

「まあ、考えても仕方が無いか」

ベットから立ち上がった。

アーニャの目はなぜか燃えていた。

「ネギ……よし、行くわよ」

そう自分に言い聞かせて決心したアーニャはバックを持って日本へと旅立った。

これがどのような結果に変わるんだろうか。

第29話へ続く。

第28話『再会への道』（後書き）

アーニヤに関してだいぶ変わってますが、性格というか本質は変わりません。

第29話『いきなりの発見』（前書き）

PV80万、ユニ8万突破してたんですね。

感想などお待ちしております。特に感想を。

第29話『いきなりの発見』

夕食を取った僕は自分の部屋から出ようとしたが、明日菜さんに呼び止められた。

僕は明日菜さんの方へ向く。

明日菜さんの右手に封筒があった。

「ちょっと」

「どうしたんですか？」

「これ、ネギへ手紙が」

一枚の国際封筒を渡してきた。

明日菜さんから受け取った僕は宛先を見て顔を顰めた。

何でこんな時期に送ってくるんだ？ お姉ちゃん

封筒を開け、手紙を開けてみる。

「『ネギ、久しぶりね。修行の調子はどうかしら？

お姉ちゃん、とても心配で堪りません』と言ってる場合じゃないか。実はね、学園長がアーニヤの修行内容を変えてしまって、

どこって？ 聞きたい？ それはね、ネギの補佐に変更って事よ。

そっちの方だと明日の夜に来るんじゃないかしら。じゃあ、元気でね』……うわ、アーニヤがここに来るのか？」

「ネギ、アーニヤって誰？」

「アーニヤちゃんって誰なん？」

2人が黒いオーラを覆いながら僕を責めてきた。黒いオーラを軽く無視してさらっと答える。

「幼馴染かな？ 年は1つ離れてるだけ」

「そうなんや。幼馴染……すごい武器やな」

「そうね」

2人は真剣な表情になって何を言ってるんだ？

別にアーニャとは何の関係もないんだよね。

意識し出したのなんて魔法世界で助けた時だし、
どうしてって？ 助け出した時、かわいかった。

「ネギ、その子はいつ来るの？」

「明日の夜だってさ」

「明日の夜かり、ここに来るって事はここの生徒になるって事やろ
？」

僕の補佐って言うてるけど、

僕の推理が正しければネカネお姉ちゃんが学園長に無理やり変更させた。

そう思うしかないじゃないか。

「教師ではなく3-A生徒になるかも知れません」

「11歳でしょ？」

「僕は10歳ですよ？」

「あ……」

「すっかり忘れてたわ。ネギってそんな年齢に見えないのよね」

何処が見えないっていうんだ？

馬鹿な、性格なんてちょっとしか変えていないというのに。

昔から女性はそういう所を見抜くのが上手いというがそうなのか？
ネギの目的が斜め上に向かってるため、ネギ自身にはそれが表に出

てる事を知らない。

「私、風呂入ってくるわ。バイトあるし」

「ウチも入ってくるえ……ネギ君も一緒に入らへん？」

「ええ！？ 僕は遠慮します」

「そう言わんと」

木乃香さんは僕の手を掴んでお風呂場へ連れて行こうとするが、力を入れてこの場にとどまる。

つつか、明日菜さんも頬を染めてないで止めてください。

念話を明日菜さんに送信したが、帰ってきた言葉は

『まあいいんじゃない？ もし誰か居れば出れば良いんだし』

どう思うよ、僕の知ってるこの頃の明日菜さんと全然違う。

もっと教育的に悪いなど私はショタコンじゃない！とかで拒否してくるんだが。

明日菜さんも止める気しないって事は味方がいない？

「オレッチも入っていいっすか？」

「カモは邪魔よ！」

「酷いっす」

「あはは……」

カモ君、同情するよ。

明日菜さんからは昔の僕もそんな感じだったし
今だけはカモ君と呼んであげる。

味方がいないって事は逃げるが勝ちってことね。じゃあ、

「はあ、逃げるか」

「ネギ君!？」

「極移」

木乃香さんが逃げる僕を見て叫び、明日菜さんが僕を掴もうとするが、

それも間に合わず、部屋だった景色が0コンマ1の時間で世界樹の前に移動した。

く世界樹く

魔力消費ゼロの極移で来た僕の目の前に巨大な木が立っていた。この前書きは良いか、それよりも、よく僕はここに来るな。

「ネギ先生く」

「お姉ちゃん、本当にするの？」

あれは……風香ちゃんと史伽ちゃんだね。、
本当にするのって何の事だ？
パタパタとこちらに走ってくる。

「ネギ先生、約束覚えていませんか？」

「約束……」

約束、修学旅行後になってアレの事か。
このイベントがここに来るって事なの？

「その約束ってココですよね」

「はい」

「はいです」

双子だから背もほぼ同じ。

「ネギ先生、この世界樹には伝説があるんですよ？」

「確か、世界樹前で告白して結ばれると永遠に離れる事が無いというアレですか？」

「ええ！？ そんな伝説があったんですか？」

「史伽、知らなかったの？」

「じゃあ、今からそれをやるの？」

今から起こる事は前と同じなんだろうけど、それを伏せておこうか。

後で明日菜さん達の耳に届いたら、別の意味で怖い。

黒いオーラとか黒いオーラとかね！ 特に木乃香さんのが！

「よじ登ろうよ」

「よじ登る……だと？ 危ないですからここでいいんじゃないですか？」

「先生は登りたくない？」

「面倒……じゃない危ないじゃないですか」

「仕方が無いな。一応、前だからいっか。史伽」

「うゝ……わかったよ。お姉ちゃん」

風香ちゃんと史伽ちゃんが僕の両腕に絡み付いて僕のほっぺに口づけをした。

「ええ！？」

用が終わったと離れた2人の表情は赤くなっていた。

「ネギ先生、好きです」

「私もネギ先生の事が好きです」

素直で真剣な表情をした2人の顔が輝いていた。
2人に魔法バレルのは、少なくとも魔法世界後までバレル事が無かったんだよね。

「……お2人の気持ちは嬉しいんですが、今の僕にそんな余裕はないんです」

「別に今じゃなくてもいいよ」

「先生やってるんだから仕方ないよ」

「僕は部屋に戻りますね」

2人と別れた僕はこの場から離れる事にした。

夜といってもこの時間だから大丈夫だよね。

寮の外出時間というか管理人が前より優しめになってるから心配はない。

〈学園・大橋〉

前、僕はエヴァと闘った場所にいた。

結界を前から貼り付けてエヴァを範囲内まで来させ、捕縛魔法を発動。

でも、茶々丸さんの解除で無意味だったけど懐かしい。

「学園結界はここまで……ん？　こ、れ、は……」

見た事のあるぬるっとした感触のある水を見つけた。

この時間は誰もいない。

ここは学園都市みたいなものだからな。

「このぬるっとした水は」

地面にある水たまりを触ってみる。

これは、あの時のスライムか？

って事はもう？ この学園に潜入済みって事になるのか？

「まずいな。早い、早すぎるぞ。小太郎はどこかに身を寄せてるくらいいいとして

ヘルマン達も身を寄せてるのか？」

前は封印の瓶を目当てに初めは千鶴さんの所へ行っていた。

でも、小太郎が瓶持ってなさそうだったからどう行動するのかわからん。

明日菜さんは僕の魔力をすでに完了済み。

木乃香さんはって、ポケットの中に杖があった。

「あれ？ 強制転移の杖あるな……今の木乃香さんなら関係ないか」

大事な点を思い浮かべ、どうにでもなるさ。

そう考えを完結した僕は火の1矢を気持ち悪い水たまりにぶつけて蒸発させた。

「突きとめることはできるが、止めておこう」

むやみに歴史を変える気はない。

僕は何もせずに、橋から離れた。

（ネギの部屋）

ヘルマンがこの地域にいるのか、と溜息を吐きドアを開けた瞬間、
機嫌が悪そうな明日菜さんが出席簿を持って騒いだ。

「何よこれ！」

「え？」

何か怒ってるが、木乃香さんがいない？

木乃香さんの事は後にしよう。

明日菜さんから受け取った出席簿を開けてみると内容を見て叫んだ。

「なっ！？　こんなの書いた覚えねえよ！！」

全員の写真の上に妙な事が書かれていた。
書いてある内容とはこうだ。

『ネギ先生、選び放題だね。できるなら私を選んでくれると嬉しい
なハート。by鉄火面』

突っ込み所あるが、鉄火面って何だよ……

表に地が出るほど言葉が戻り、頭を抱えていた僕は明日菜さんに聞
く。

「これ、どこにあったんですか？」

「え？　さっきまき絵ちゃんが届けてくれたの」

まき絵ちゃんって何でこれを持ってるんだ？

これ、どうでもいいから僕の机の中に閉まったはずだよ？

職員室にある物がどうして……

「それで、まき絵さんはどうしてこれを？」

「中見てねって言ってたわ」

「じゃあ、これを書いたのは……まき絵さんかな？」

「へえ〜？ でもこれって消せないわね」

油性マジックで書かれている。

消せない事もないが、消す意味もない気がする。

「消す必要ってあるんですか？」

「誰かに見られたらまずいわよ」

「どうまずいんですか？」

「……これ以上、ライバルを増やす気？」

「これからもっと増えるんじゃないですか？」

小声で呟いていたが、聞こえたので僕はそう答えた。

それを聞いた明日菜はムツとしながら

「ネギって本当に10歳に見えないわね」

嫌見のつもりで言ってるんだろうけど、僕には通じない。
だから僕は満点な笑顔で返す。

「そういえば木乃香さんは？」

「木乃香？ 木乃香ならエヴァちゃんの所へ行っただわよ」

「どうして？」

「修行だってさ。私はバイトがあるから勘弁」

明日菜さんは面倒そうにしてた。

今の能力でもヘルマンに勝てはしないだろう。

小太郎を見るとヘルマンも力が上がってるかも知れない。

「明日菜さんも行ってきたらどうですか？」

「いや、私はバイト」

「別荘があるじゃないですか」

エヴァの別荘があれば鍛えることぐらいできる。

でも、ヘルマンが攻めてくるのが明日の夜としたら遅いか。

出席簿を僕の領域の机の中へ転送させた。

「それなら仕方が無いですね」

「へっ？」

「どうかしたんですか？」

「……だって、木乃香が行ってるなら私もって指摘されるかと」

「考えてましたが、今日はもういいですよ」

「明日の夕方行くわ」

明日菜さんが青ざめながら呟く。

エヴァの修行って鬼だからしょーがないけど、効果はちゃんとある。

明日菜さんと木乃香さんがどう鍛えられているか僕は知らない。

聞いてみようか。

「明日菜さん、エヴァンジェリンさんの修行ってどんな感じですか？」

「基本運動、高温度、低温度での訓練、咸卦法の継続時間、組手ぐらい」

「僕の修行と比べてどうですか？」

「ネギの方が鬼よ！」

必死に否定する明日菜さん。

僕はそこまで鬼だったか？

たかがミスしたら精霊の射手1とか無詠唱の呪文とか、

全部回避せよ！と言って光の1000矢を時間差で攻撃程度じゃないか。

それから眠る時間まで色々と話した。

ウェールズで過ごした頃の事。最近の事。

僕が話した後、明日菜さんもととても楽しそうに話してくれた。

「じゃあ、私寝るわね」

「はい」

明日菜さんは微笑んでベットの方へ向かい、体を寝かせた。

しばらくして、明日菜さんが寝たと感じた僕はソファで横になり、

「明日は大変な事になりそうだ……」

だんだんと眠気が襲って来て限界になった僕は眠りに落ちた。

この言葉が明日、現実になる事をネギは知らなかった。

第30話へ

第29話『いきなりの発見』（後書き）

次話はヘルマン登場。

4月15か16日予定です。

第30話『ヘルマン、参上!』(前書き)

今回(毎回な気がします)、イベントがありませんので時間経過が早いです。

第30話『ヘルマン、参上!』

「?????」

魔法で作られた結界の様な場所だった。

周辺には無数の札が貼られており、学園側から感知できないらしい。そんな札を一体どこから持ってきたのか謎である。

「今日の夜。以下メンバーを攫いだし、ネギスプリングフィールドを呼び寄せる」

「このメンバーを、か?」

「そうだ」

「しかし、ヘルマン様、神鳴流剣士を攫うのはきついのでは?」

「どうという事はない。人間は誰にでも弱点がある」

黒いコートを纏った白髭の男がそう言った。

透明になって透けている5歳ぐらいの子供3人が頭を抱える。

「何、神楽坂明日菜を私が攫う。他は頼む」

「危険人物はいないのでですか?」

ピンク色のスライムが質問してきた。

「うむ、闇の福音には悟られるな。言っておくが夜だぞ。夜までは自由行動とする」

「おっさん、遠足なノリかましてんな」

青いスライムが笑いながら言った。

「私はネギ少年の成長を見てみたいのだ。あの夢通りなら可能性を秘めていると、ね」

可能性とは何の話だろうか？

それを理解するのに今はパーツが足りない。

赤いスライムが人型になり

「それでいいぜ、ダンナ！」

ハイテンションになりながら親指を立てた。

ヘルマンと呼ばれる男はフフフ……と口を歪ませて手を前に突き出し

「夜になれば行動開始だ。それまで各自、自由行動ではなく監視を怠るな」

「「はっ！」」

スライム3匹がいなくなった。

いなくなった事を確認したヘルマンは手で白髭を触りながらこんな事を言いだした。

「ネギ君、もうすぐ君に会える。見せてくれ、迸る君の剣を」

ハアハアと繰り返すような荒い呼吸が周りに響く。
妙な意味を連想される言葉を残してここから離れた。
ヘルマンは一体、何を見せてくれ、と言うのか不明だ。特に『逆る君の剣』という言葉。

（ネギの部屋）

朝になり、目が覚めたら味噌汁の匂いが漂っていた。
味噌汁って事は木乃香さんが帰って来てるみたいだ。

「こ、木乃香さん？」

「ネギ君、おはよ」

制服を着てエプロンをした木乃香さんが料理をテーブルの上に並べていた。

シャケ、のり、漬物、目玉焼きが見えた。

味噌汁の中には豆腐とわかめ、うす揚げが入っている。

僕の好きなメニューだったのでちよつと感動。

「そういえば明日菜さんはいずこ？」

「明日菜はどっか行ったで」

「行ってないわよ！ さっきから無視しないで」

トイレから出てきた明日菜さんが僕と向かい側のソファに座る。
トイレとは存在感があまりなかったから気づきもなかった。

洗面所って事は、うむ。

「トイレ長かったですね」

「馬鹿っ！ 顔洗ったり歯磨きしてただけよ！」

「そうだったんですか……最近、水に入った事ありません」

「ネギ……それは」

「魔法でどうとでもできます」

そういう魔法は治癒魔法の部類に入る。

未来の世界で水不足な地域では治癒魔法を良く使われる。
汚れや匂いなどお風呂に入った以上の効果を持っている。
未来うんぬんを省いて、その話をしてあげた。

「魔法って便利やな」

「魔法使わない人にとっては違和感があるわよ？」

「現代人は仕方ないですよ。あ、僕はこのまま向かいます」

「何かあるの？」

明日菜さんが首を傾げて聞いてくる。

「色々あるんですよ。とりあえず、僕は急ぎますから」

「朝ご飯は食べなあかんで」

「……急いで食べますか」

急ごうと思って立ち上がろうとしてた僕は箸を持って一気に食べる。
あらゆる食べ物を口に含み、味噌汁をご飯にぶっかけ一気に口に入
れ込む。

魔法で口の容量を倍以上に増幅させてから胃の中へ。

「ごちそうさまでした」

明日菜さんと木乃香さんが唾然としていたが気にしてる場合ではない。

魔力で増幅していた口の容量を元に戻し、教師用の服に着替える。着替えシーンは当然、見られているが慣れてるから無視。

行く準備ができた僕は2人にこう言った。

「行ってきます。ではまた」

2人は手を振ってくれたからそれを同じように返し、さっそく外出した。

アレの動きが気になって昨日の場所へ行くと、ヘルマンの気配を辿れなくなった。

気配が途絶えた疑問に僕は顎に手を当て考えた。

「攻めてくるとしたら今日しかないか。アーニャも今日の夜って最悪だな。

下手したら起こってる途中で乱入しかねないな」

それはそれで良しとしよう。

アーニャは戦闘経験がない。

でも、逆を考えてみよう。

僕の戦い、強くなった姿を見せておき好感度を上げておくべきだろう。

ネギとは思えないほどの妙な事を考えていた。

「小太郎の事もあるんだ」

「ネギ」

制服姿のエヴァが僕の前にいた。

何でこんな所にいるんだ？

「この学園に侵入者の気配がしたから」

「ん？ 学園長は知らない筈だけど」

「何、私の独自の感知結界を貼っておいた」

「……ああ、僕がエヴァンジェリンさんの魔力を誤認させてるから動きやすいんだね」

うむ、すっかり忘れてた。

学園長室で呪いを解いたといった後、誤認魔法陣を学園全体に展開させた。

それを実行する事により、他の魔法先生、生徒達に感知されないようにする。

でも、そろそろ考えた方が良くかもしれない。

嫌でもバレるだろうな。学園祭の時にほぼ確率で。

文句言ってくるのがうるさく感じるな、特に黒肌や黒肌や黒肌！！

「さらに魔力が完全に戻ったから動きやすいし、侵入者も倒しやすい」

「うんうん。ところで昨日の事なんですけど」

「木乃香の事か？」

「はい」

「喜べ、木乃香が自力で光の魔法を作り出したぞ」

光の魔法？ 光の矢とか当り前にある。

作り出したって何？ 自分だけの魔法って事？

笑みを浮かべたエヴァは首を横に振り

「思ってる事が違う。木乃香オリジナルの光魔法だ。名前は決まってる無いがな」

「どんなんですか？」

「内緒にしてくれ。と言われたから内緒だ」

「しょーがないですね。僕は学校に行きますね」

「私も行くぞ」

いきなりエヴァが恥ずかしそうに僕の右腕に絡みついた。

絡みつかれる感触が暖かい。

木乃香さんや明日菜さんとは違う別の懐かしい感じがした。

「……極っ!？」

転移魔法を使おうとしたが。エヴァが僕の口を手で防いだ。
突然の事で驚き、使う事を忘れてしまった。

「歩いていくぞ」

「皆に見られるのが嫌なんですけど」

「私は気にせんぞ」

僕のオドオドした態度にニヤニヤしだすエヴァ
僕が気にするよ！

「仕方が無いですねって茶々丸さん、何録画してるんですか!？」

いつの間にか5メートル横でビデオカメラをこちらに向けていた。
正確にはデジカメなのだが。

「私の事は気にせずどうぞ。この記録は明日菜さんと木乃香さんに
頼まれたものです」

「何だと!？ 茶々丸、お前」

「マスター、私は決して嫉妬とか頼まれてとかではありません」

否定しているが答えもある気がする。

この場合、どう反応すればいいんだ？

顔を引きつらせたエヴァが茶々丸さんの持つてるデジカメを糸でぶち壊した。

バラバラになったデジカメの残骸を見た茶々丸は僕の前まで来て

「ネギ先生、私はこれで」

残念そうなオーラをまき散らしながら学園の方へ行ってしまった。

つか、この世界の茶々丸さんは一体どうなってるんだいしょうか。

どなたか教えてください、と心の中でお祈りした。

目を瞑ってお祈りしてる途中、エヴァが僕にこう言っ

「ネギ、私はあの2人を問い詰めに行く」

不機嫌そうに影のゲートを使って去りました。

取り残された僕は目を開き、空を見て溜息を吐く。

「はぁ、極移」

〈学園長室〉

とりあえず、手紙の件もあり学園長に聞いてみる事にした。
嘘ではなく確定なんだろうけど、一応確認はした方が良い。

「学園長、ウェールズから手紙が来たんですが」

「おお！ そうじゃったな。アーニャ君が君のクラスに編入するんじゃない」

「編入？　アーニヤはアカデミー卒業してますよ？」

「そういう形でやれば納得するじやろう」

納得も何も11歳で中学生なんて普通にねえよ！

ここの生徒になる事自体、僕の知らない展開。

筆頭、妖怪爺は妙な事を言いだした。

「ネギ君の補佐、さらにはネギ君と木乃香の道しるべもやってもらうつもりじゃ」

「ちよ、ちよっと待ってください！　アーニヤは僕の事……」

「それはネカネ君も言うとしたなあ。ライバルがいれば燃えるじやろうて」

つまり、アーニヤは僕の幼馴染にして木乃香のライバルとして登場。

木乃香が僕に積極的になるよう仕向けるって事？

ネカネお姉ちゃんが考えた似たような発想だな。

それを考える2人も2人だけど、そもそもネカネお姉ちゃんも僕を、ゲフンゲフン。

僕も口では、その後の事、言えないほどだ。

「……もういいです。編入されるのは明日で、今日の夜到着って事ですか？」

「そうじゃ」

この爺、はっきりと頷きやがった。

「そろそろ授業ですから行きますね」

「そうじゃったな。がんばれ、ネギ君」

「はい」

一体、何に関して頑張れなんだ？
大体想像が付いた僕は頬を痙攣させながらも返事をして、この部屋から出て行く。

〈教室〉

僕が教室へ到着すると、皆が席に付いていた。
当り前の光景なんだけど、普通に落ち着く。
僕の背後にある黒板にチョークで書いていく。

「今日は自習としますので、自由に勉強してください。
一応、僕はここにいます。質問があれば聞いてきてください」

そう言った僕は教壇の上に座り、題名『アヴァロン』と書かれた本を読む。

教壇の上に座るって普通の先生がする事じゃない気がする。
背が小さいから仕方が無いと見逃してくれるかな。
うんうんと頷いた僕は読書に入った。

この本の価値は魔法に関する事がいっぱい書いてあった。
最初見た時はほとんど意味の無い内容だったが、時間が経つ事に内容が増えていた。
恐らく僕の魔力を吸って禁忌ページを解除して行くんだと推測。
その予想は当たっていた。

パラリとページを捲っていくと『光熱魔法』と記された香ばしい名

称があった。

光熱魔法。

ネギの使えるのは炎魔法と煉獄熱魔法で相手を蒸発、消滅させる目的の呪文。

気になったのは炎の力で治癒させたりできる呪文があった。

「へえ、こんなのがねえ、古代魔法って現代魔法より強かったんだ」

実はアヴァロンの中に書いてある魔法は全て古代魔法と書かれてた。その時の人が古代と名前を付けるのはどういう意味を示す？

古代魔法、昔存在した魔法の事。

現代魔法とは現代の魔法、そのままの意味。

ネギの煉獄熱魔法とは熱を利用した地獄のような魔法の意味。それよりも、アヴァロンの武器と一緒に使ったら面白そう。

誰も質問に来なかった。

空しい気分になっていると、チャイムが鳴った。

「では、これで授業を終わります」

「授業してないよ？」

まき絵さんから突っ込みを入れられた。

「あはは」

微笑いした僕は出て行こうとすると、委員長いえ、あやかさんが立っていた。

「ネギ先生」

「はい」

「今日の放課後にどうですか？」

「え？　どのような用事ですか？」

「もちろん、私の部屋に、ですわ」

髪をサラリとさせ、風に乗っていた。

誘ってくれてるのは分かる。

今ここで誘われていいのか？　……よし、やってみよう。

考えをまとめた僕はあやかさんの誘いに乗る返事を返した。

「いいですよ」

「……やりましたわ」

小声で呟くのは良いんですが、聞こえてますよ？

指摘しても無駄だ。あやかさんは意識だけ天の世界へ行ってしまった。

と思っていたら、怒鳴ってくる声があった。

「ちょっと待ちなさい！」

「何ですか？」

止めたのは明日菜さんだった。

目の前の人を無視して僕を見て呟く。

「……ネギ」

「明日菜さん、テーブルを頂いたんですから、その返しとして行くだけですよ」

「ふう、まあ別にいいんだけど、早く帰ってきなさいよ」

「はい」

僕の返事を聞いて納得しないような微妙な表情をしたまま、とりあえず頷いていた。

「ちょ！ 委員長、ずるい！」

「まき絵さん、これは早い者勝ちですわ」

「さすが委員長！」

「ネギ君、とうとう食われる！？」

「何ですの、食われるって！？」

他の子達があやかさんに文句を言ったりしていた。

食われることは一切ないんだが。

ここには用が無いから立ち去った。

※時間が放課後まで飛びます。

放課後になった。

あやかさんの騒ぎは昼休みまで保ったが、放課後になると自然消滅していた。

皆、飽きるのが早い事で。

実際、飽きたんじゃないやなくて教師達に注意されたから止めたなどネギの耳に入る事はなかった。

その事を知らないネギは教師の仕事を終えて、学園から出て行く。

「疲れた。あやかさんの部屋に行ってみよう」

寮まで普通に歩いていき、寮に到着し、あやかさんの部屋の前に立つ僕はチャイムを鳴らした。

ピンポン

音に反応するかのようにドタドタと小さく音が響く。

音が近づいたと思ったら、ガチャッと音がしてドアが開いた。

「ネギ先生、いらっしゃい」

「千鶴さん、こんばんわ」

「誰か来たの？ってネギ先生！？」

夏美さんがこちらを見た。なぜ驚く？

それはいい。あやかさんがいない？

「あやかさんは？」

「とりあえず中に入って」

「はい」

千鶴さんがおいでおいでと手招きしていた。

僕も誘いに乗るように遠慮せずに中に入った。

「あやか、千鶴、夏美の部屋（今後、あやかの部屋になります）」

中に入ったら、頭が痛くなりそうだった。

ポスター、テーブル、座布団などあったが、何で全部が

「僕が写ってるの？」

「それはあやかがネギ先生を呪うために」

「違いますわ！！」

必死に否定しようと慌てて出てきた私服のあやかさん。
千鶴さんも怖い事言わないでください。

「ネギ先生、そちらに座ってください」

あやかさんがそこに座ってくださいという場所に座る。
全然落ち着かない。

僕が何人も何人も書かれてるから。

「何か落ち着かないんですが」

「ネギ先生、慣れたらどうってことないです」

「幸いにも2次元、漫画やアニメ風に書かれてるからまだマシだよ」
「そうですね」

もしも、2次元ではなく3次元の自分の姿があったら、壊してるぐらいだ。

あやかさんが僕の前に紅茶の入ったカップとクッキーを置いてくれた。

聞いた話によると、クッキーの中にはチョコが入っているらしい。
クッキーを一口食べる。

「どうですか？」

「おいしいです」

「それはよかったです」

「よかったわね。あやか」

「ええ」

僕の感想に笑顔になるあやかさん。

千鶴さんと夏美さんは様子を見てうんうんと頷いていた。

どういう意味で頷いてるのかなんとなくわかったが、考えないようにしよう。

その後、僕達4人は世間話をした。

あやかさんと明日菜さんの関係。

千鶴さんが子供の事を話してくれたり、夏美さんは劇の事を話してくれた。

ちよつと高めの壁に配置してある時計を見た。

「6時30分か」

「あら？ もうそんな時間ですか？」

「色々話してるうちに時間が過ぎたのでしょうか」

「ちづ姉の話が長かったからな」

夏美さんの言い分はわかってる。

それで、あやかさんの話時間の倍はあった。

「僕はそろそろ戻りますね」

「夕御飯、食べて行きませんか？」

「えと……」

千鶴さんから夕食を誘われた。

時間も時間だし戻らないと明日菜さん達が怒るからなあ。

せっかく前より良好な関係なのにそれに亀裂を入れるのは感心しない。

考えた結果、答えを伝える。

「明日菜さん達に悪いですから。すみません」

僕は立ち上がる。

あやかさんは僕の返事に寂しそうな表情だったが、首を横に振って

「別に構いませんわ」

優しく包み込むような返事をしてくれた。

僕もそれに対抗するように笑顔で返事を返し、ここから出て行こうとした瞬間、

ヘルマンの気配と小太郎の気配が一斉に感知した。

一斉というか同時というか、とにかく同時に現れた。

「これは……」

「ネギ先生？」

あやかさんが僕を心配していた。

大丈夫です、と言ってから、3人に礼を言い、即座に自分の部屋へ戻る。

自分の部屋前のドアを開けた瞬間、誰かがいた。
黒いコートの男、うんヘルマンだった。

やっぱり行動してきたか。
僕は目の前のヘルマンを見る。

「誰だ？」

「ほう、君がネギスプリングフィールドかね？」

「違う。ネギルスプリングフィールドだ」

「フフフ……すまない」

誰もいないって事は既に攫い済みか。

あっけなく攫われたもんだ。今の明日菜さんや木乃香さんなら攫われるはず無いんだけど

舌を鳴らして顔を歪める。

ヘルマンは僕の表情を見てフツと苦笑する。

「君の仲間は私が預かっている。君の仲間を返してほしければ、噴水広場まで来たまえ」

「僕が一人で来るとでも？」

「その場合は君の仲間を塵一つ残らず消えると思え。伝えずに来る事をおすすめする」

あくどい事を考えてくれる。

この世界のヘルマン、こっちの知ってるヘルマンと違うぞ。

どう違うかって？ 魔力が全然違う。まるで完全体のようだ。

意図的に召喚されたんじゃない、自力でここに来たかのようなだ。

「いいだろう。ただし、後悔するなよ。僕の大切な人達に手を出した事、後悔させてやる」

残酷な目に合わせてやる。

悪魔だろうが、化け物だろうが関係ないほどのやり方だな。

「では、待っているぞ」

僕は目を鋭くさせて睨むが、ヘルマンは一言残し、転移魔法で消え去った。

この場から完全に気配が消えた後、圧縮させた聖なる剣以外の4つを自分の机の中に入れる。

「前は自分の甘さで生かしたけど、今度は容赦しない」

あの時以上の暴走しそうな魔力を解放しながら部屋の窓から飛び出し、噴水広場まで向かった。

こうなった以上。もう誰もネギを止められない。

その頃、一人の少女がこの地に近い地域まで来ていた。

「はあ、もうすぐで麻帆良学園に到着ね。ネギ、驚くでしょうね」

少女、アーニヤはネギに会う事を楽しみにしていた。

第31話へ

第30話『ヘルマン、参上!』（後書き）

見ての通り、このSSのヘルマンはおかしい方向に改変されています。
次回、ヘルマンと直接対決。

第31話『ネギ対雑魚犬、ヘルマン前編』（前書き）

小太郎がヘンテコな役になっています。
ネギVSヘルマン編の前編です。

web拍手かなろうの感想に感想を書いてくれると嬉しいです。

第31話『ネギ対雑魚犬、ヘルマン前編』

「こら！　これを解きなさい！」

200センチの四角形状になってるフィールドが貼られていた。その中に明日菜が捕まっている。

「そのフィールドは君の力では解けない。
フィールドのエネルギー源は電力だからね」

「うるさい！　こんな格好させてこの変態っ！？」

明日菜の格好はなんとチアガールのようだ。
麻帆良学園のチアガールが着る服そのものだ。
どこから、どうやって仕入れたのだ？

「うむ、夢の様なキャミソールの方が良かったかね？」

「夢？　どう言う事？」

「フフフ……君も見ているのだろう？　神楽坂明日菜君
「！？」」

「じゃあ、木乃香達も攫うのもやっぱり」

「そう、ネギ君をおびき寄せるだけの餌に過ぎない」

「木乃香！！」

ちょっと離れた所では液体で出来た3メートルほどのフィールドがある。

私服姿の木乃香が明日菜の声に反応する。

「あの液体牢には声を遮断する効果がある。だから、君の知り合い達の声も聞こえない」

「そう言う事……」

「ヘルマン様、敵が来ました」

「ほう……」

「噴水広場」

僕は噴水広場に来了。

明日菜さん達の捕まってる状況を見て、目を細めた。

「……何だ？ あのフィールドは前に無かったぞ」

「あれが嬢ちゃんを捕縛してるツスよ」

僕の服から出てきたカモくん。

つか、何時の間に潜入してたんだか……と呆れていたが、隣の方を見ると

「やっぱり攫われてるし、スライムすら強くなってるとは思わなかった。

前の僕なら瞬殺で終わり、か」

カモ君にすら聞こえない小声でつぶやいた後、メンツを見る。

木乃香さん、夕映さん、ハルナさん、のどかさん、刹那さん、朝倉さん、

ってあれ？ クーフェイさんがいないってああ、関わって無いから

当然か。

刹那さんは起きたままだけど抜けだせないほど頑丈な結界のようだ。

「カモ君、今から僕の言う事を木乃香さん達に伝えてくれないかな」
「オレツチしかできないんスカ？」

「うん。この圧縮されたアイテム2つを木乃香さんと刹那さんに渡してきてほしい」

ポケットの中から聖なる剣と強制転移の杖の圧縮された赤い球を渡す。

受け取ったカモはぐーっと親指らしき指で立てた。

「けど、どうやって圧縮を解くんスカ？」

「圧縮解除って言いながら魔力及び気を解放で」

「わかったぜ！ 兄貴」

頷いたカモ君はピョンと地面に飛び降り、木乃香さん達が捕まってる結界へ走った。

走り速度はまあ、気にしない方が良い。

これで大丈夫だろう。どうせ、捕まるし。

捕まる前提で考えたから何も問題ない。

問題はヘルマン只一人。

「ヘルマン、あんたを倒す」

「いいだろう。来たまえ！」

「またんかい！」

「誰だ！？」

ヘルマンが驚きの声を上げるってノリが良いなあ、このヘルマンは。

声の主なんて、凄く分かりやすい声だ。
小太郎以外の何物でもない。

「ネギ！ 勝負や！」

僕とヘルマンの間に割り込んできた。

ヘルマンって小太郎も敵扱いなのにその相手の前に立つのは自殺行為な気がする。

「……はあ、小太郎君。後ろを気にした方が良いよ？」

「ハッ！ あんなオッサン、雑魚やろ？」

「ほう……？」

ヘルマンの表情を見たら、少しだけ寒気がした。
だって、怒りの表情になってたからだ。

「君は邪魔だ。悪魔パンチ！！」

「こんなもん！」

ヘルマンは小太郎に向けてパンチを放つ。

小太郎はヘン！と鼻笑いして受け止めようとするが、
受け止める場所とは見当違いの場所に当たり、僕の後ろの建物？の
壁までぶっ飛んだ。

「アホだ……」

小太郎がアホの様にぶっ飛んでた光景を見て思った。
ヘルマンの攻撃速度が2倍以上あるぞ。
世界が歪んでいるにも程がある。

「無駄な邪魔が入ったが気にしない。さあ、勝負だ。ネギ君」

小太郎を雑魚扱いにしたヘルマン。
当然だわな。油断してぶっ飛ばされるなんて哀れにしか思えない。

「そ、そうだね」

僕は久しぶりに戦いの歌を使った。
ヘルマンへ走る。

「ふん！」

「魔法の射手 光の17矢」

直線的な攻撃を放つ。

「はあっ！」

ヘルマンは僕の魔法を右腕でなぎ払った。

ああ、明日菜さんの魔法無効化ねえ。

「フッフ……私に魔法は効かんよ」

「魔法が効かない？ 人の能力を利用して他人任せの魔族さん」

「だからどうしたのかね？」

「……雷の暴風3」

3連続の雷の暴風を解き放つ。

さすがのヘルマンもそれをまともにせず、右回避する。

あれ？ かわされたって事はまずいな。空に方向を変えないと。

僕は3連続の魔法を人差し指を上に向ける事で上空へ飛んでいった。

「無効化利用すればいいのに」

「そうもいかんよ。今のはヤバかったのだ」

こいつ、さっきの魔法に無効化が効かないと察したのか？

前より遥かに強くなってるな。

ヘルマンの強さを考えていると、後ろからバカの声が聞こえた。

「いてて……邪魔しよって」

ドジな小太郎が僕の前に移動してきた。

ちっ、寝てなかったのか。

「おい！ 俺が優先やろうが！ 俺の邪魔すんな！」

「ネギ君の仲間は愉快だね」

「仲間じゃねえ！」

「そういえば、仲間じゃないよね」

さらに、前よりも関係が悪くなってる気がする。

「いくで！ ネギ」

「って僕かよ！」

小太郎が爪をはやしてこちらに突っ込んでくる。

攻撃をかわしていくが、ヘルマンが僕の背後にいて

「これもまた一興か」

「ちよっと待って！ 何で2人が協力してんの？」

一興の一言で向かってくるな！

なぜか2人が協力的になっていた。

どうでもいいけど、カモはどうなってるんだ？

見てみると、スライムからポイっと液体牢の中に……。

「ってか何で水牢ではなく液体牢なんだ？ まあいっか、明日菜さんを助けなきゃ」

そう思っていると、小太郎の狼爪とヘルマンの悪魔パンチを連射してくる。

バランス良く体を捻らせて回避する。

「ああもう、鬱陶しい！」

僕はあまりにも鬱陶しい2人に向けて魔力解放。

解放した瞬間、衝撃波が発生し、吹き飛ばす。

一定距離以上離れた今がチャンス。

「さて、明日菜さんを」

明日菜さんの前まで来てフィールドの強度を調べる。

魔法が効かない要素がチラホラと含んでいるのが分かった。

「……明日菜さん、すぐ助けますね」

「これ、魔法じゃあどうにもできないってあのスケベ爺が」

「大丈夫です」

一歩後ろに下がる。

「こんなもの、精霊の射手」

魔法の射手以上の威力がある魔法でぶつけた。

フィールドは歪み始めたが、吸収されてしまった。

「ネギでも無理なの？」

「……」

やっぱりこの程度では無理か。
その時、後ろから

「残念だったね。ネギ君」

嬉しそうな声色でヘルマンが言った。
残念ってこれから出力を上げて破壊しようと思ったのに……。

「ネギ、勝負や」

お前はそれしかないのか！？
仕方ない。ヘルマンに片付けてもらおう。

「小太郎君、こいつを片づけければ勝負できるぞ」

「ホンマか？ うっしゃあゝ！」

小太郎はヘルマンに不意打ちをした。
だが、ヘルマンは左腕だけで小太郎の攻撃を軽く防いだ。

「この程度かね？」

「ふざけるな！」

小太郎は舐められたと思い怒りの連続パンチをぶっ放した。

「なるほど、君の力はもう分かった。休んでいたまえ」

ヘルマンの拳が小太郎のわき腹を挟み込み吹き飛ばした。

明日菜さんの背後にある10メートルぐらいの木にぶつかった。

ゴキッと音が聞こえたけど気のせいかな？

骨が折れたのはわき腹の骨か？

「ふう……明日菜さん、木乃香さん達優先にさせてもらえませんか？」

「え？ わ、わかったわ」

明日菜さんの返事を確認した後、液体牢を見ると水がはじける音がした。

刹那さんが聖なる剣を天に向けていた。

「ネギ先生！」

「朝倉さん、ハルナさん、夕映さん、のどかさんはそこから動かないでください」

「でもスライムが」

「ウチに任せて。 雷の暴風」

木乃香さんが呪文を使って近づいてくるスライム1匹を蒸発させた。
蒸発！？ 木乃香さんの魔法技術上がり過ぎかも……。

驚いていると、木乃香さんは自分の杖を残りのスライムに向けて。

「光の粒子よ、我に仇名す存在に、罰を与えん 星光破壊」

光の粒子が集まっていく。

何これ、ラテン語の呪文じゃなくて自作日本語の呪文？

それにこの呪文、嫌な予感がする。

「マジック・アンチ・フィールド拡大展開」

学園全体に魔法陣を貼る。

これで、多少の被害はない筈。

「発射！」

木乃香さんの合図と共に杖の先から発射した。

集まった魔力が昔の僕（20）の時以上あるぞ？

スライム2匹は何かの札を前に投げる。

しかし、木乃香さんの魔法は札に接触した瞬間防ぐ役目すらなく燃え貫通して

光がスライム2匹ごと飲み込んで大爆発が起こる。

爆発の余波で危ないと感知しただろうヘルマンも魔法障壁を貼る。

僕も一般の防御結界を貼ったが貫通してきやがった。

「魔法無効化、障壁等の貫通って……どっかの魔法少女ですか」

ガードしていたヘルマンも傷だらけになっていた。

魔法無効化能力すら意味を成さない光の魔法を編み出した木乃香さん
ありえないんですけど……。

「ネギ君、スライムは倒したで」

撃った本人はケロッと明るくこちらに手を振っていた。

「そうですか……刹那さん、剣返してもらえますか？ 木乃香さんは杖を使って

ハルナさん達4人を一定距離、取ってください」

「はい」

「いくで！」

頷いた刹那さんはこちらに来て、僕に聖なる剣を渡してくれた。

木乃香さんが杖に魔力をぶつけた瞬間、ハルナさん達を噴水広場から離れた場所へ転移した。

これで被害なし。

後は、

「明日菜さんを救うだけか」

「フフフ……ネギ君、君は本気では戦っていないのではないのかね？」

「私も見てみたいがな」

「え、エヴァちゃん！？」

驚いた表情の明日菜さんが僕の背後に指を差していた。

あれ？ 鎖で縛られてる訳じゃないから自由なのか。

それはいいとして、後ろを見ると茶々丸さんとエヴァが腕を組んで立っていた。

「いつからいたんですか？」

「初めからだ。初めは木の上から見ていた」

「見ていたんなら助けてください」

エヴァは観察していたのだろう。

最初から気配あったけどやっぱりいたのか。

「マスターはネギ先生を乙女の眼差しで見っていたので、それどころではありませんでした」

「何を言ってるか！！ このポンコツが！」

「闇の福音、エヴァンジェリンか」

「よく私を知ってるな。そうだ！ 私は」

「それはいいんで。下がっててくれませんか？」

僕に言われたエヴァは機嫌悪い雰囲気になったが、フンと横に背け

「ネギ、こんな雑魚に負けてくれるなよ」

「わかりました」

僕は満面な笑顔でエヴァに返した。

赤くなったエヴァは唸りながらも茶々丸さんと共に後方へ下がった。

周辺には、僕とヘルマンしかない。

木乃香さんも刹那さんもってちよっと待て！

「明日菜さんを解放してください」

「よからう！」

良いのかよ！

即答したヘルマンは明日菜さんの結界に向けて指を鳴らす。

結界、フィールドが鏡の割れた音と共に消滅した。

解放された明日菜さんはボーっと僕を見ていたが、ハッと気づいて木乃香さんの方へ移動した。

これで、周辺にいるのが2人だけになった。

何か、全然思ってた事と違う気がする。

だって、大きな木の所には小太郎が気絶してるし、

スライムはあっさりと一言もなく消滅してるからどうしようもないな。

すると、急に空気の流れが変わった。

僕の目の前にいるヘルマンが数メートルほど離れて

「うおおおおおおおおおおおおおっ!!」

筋肉がボコツと膨れ上がり、魔力がどんどん上がっていく。

お前は超人にでもなったつもりか!?

しばらく待っていると、もう膨れ上がらない……って事は完成か。

「ネギ君、君の村をさらったのは私だ。この顔を見た記憶はないかね?」

「さらったってどういう意味ですか?」

「コホン、間違えたから言い直そう。襲ったのは私だ。どうだ?」

ダンディだった顔が捲れて長い角が2本付いている化け物に変わった。

眼が2つと口があるだけの悪魔だ。おまけに黒い翼が2枚ある。

それより、僕の思い出したくない記憶を引き出すなんて気に食わない。

「……あるな。そうか、そういうことするんだ。人がせっかく忘れてた所を思い出させるのがそんなに楽しいか」

本当に消してしまおうか。

心の奥底から思った僕は体内にある権限の鍵を発動。

世界を破壊しない程度の最大出力で魔力を解放させる。

噴水広場にある噴水等は僕の魔力に接触した瞬間、崩れる音と一緒に崩れた。

「こ、これは……」

ヘルマンが驚愕の表情に染まっていた。

準備完了した僕が攻撃開始と思ったその時、学園側の方角から声と共にやってきた。

「何よこれ！　ってあ、ネギ……」

箒に跨ってこちらにきた小さい女の子。

ポニーテールをして学園の制服を着ている。

それにしても、髪型といい、姿といい、どっかで見た事あるな。ってああ！

「まさか、アーニヤ？」

「そうよ！　久しぶりね。元気にしてた？」

思い出した。制服だったからちょっとわかんなかった。

アーニヤは周りの事を気にせず、僕に言葉を交わす。

周りの空気が読めないのか？　この子は……と呆れた表情でヘルマンに指を差す。

「何？　その指は……っ！？　化け物！」

ようやく気付いたようだ。

気が動転して杖を反対側でヘルマンに向けるアーニヤはこう宣言した。

「ちょっとあんた！　ネギに何かしようとしたら許さないわよ！」

アーニヤの怒鳴る声が周りに響いた。

「状況の空気を読んでよ、アーニヤ」

呆れて呟いたネギはアーニヤの登場でテンションが下がり、頭をガクツと下に俯いた。

続く。

第32話『後編』へ

第31話 『ネギ対雑魚犬、ヘルマン前編』 (後書き)

後編に続きます。明日予定。

第32話 『ネギ対雑魚犬、ヘルマン後編』 (前書き)

ヘルマン編の戦闘はこれで終了です。
後編はサブタイトル合っていないです。

今回、強引部分や描写不足な部分がありますが、作者の技量不足です。

第32話 『ネギ対雑魚犬、ヘルマン後編』

僕の前にテンション高めのアーニヤが立っていた。

「ネギ君、君の周りは本当に面白い人たちがいるものだ」

「それは同感です。アーニヤ、下がった方が良い。こいつ、強い」

本来のヘルマンより能力が高いのは間違いない。

「ネギだけでどうにかできるの？」

「できるよ」

「2人まとめてかかってきたまえ」

ヘルマンが僕を挑発するかのように入差し指をクイツと2回ほど繰り返す。

本当にこいつ、変わってるな。

アーニヤじゃあどうやっても勝てない事を知ってる僕はアーニヤに注意する。

「アーニヤ、危険だから下がってくれ。ウェールズを襲った魔族なんだ」

「っ!？ まさか……私のママとパパを石にさせたのも」

「そうだ。私だ」

「ゆ、許せない……」

まずいな。両親の事で心に火が付いたか。

怒りで震えていたアーニヤは攻撃するため、杖を前に構えて呪文を唱え始めた。

「私の全力で仇を取るわ！ 炎の精霊48柱 集い来たりて 魔法の射手 連弾・火の48矢」

アーニヤの放った炎の矢がヘルマンのほうへ集中砲火していく。それだけじゃあヘルマンを倒すなんて夢のまた夢だな。と思っていると

「さらに、火精召喚 槍の火蜥蜴17柱」

連続で炎の精霊を放ち、ってアーニヤは何時の間に詠唱キー無視できたんだ？

ロンドンに行ってる間に何かしたのかな？
そう思っていると、アーニヤの声がさらに大きくなって叫んだ。

「これで最後よ！ フォルティス ラ・ティウス リリス・リリオス

契約に従い、我に従え、炎の覇王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。

ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を、死の塵に燃える天空っ！！」

アーニヤが燃える天空をヘルマンに向けて放った。

何ッ！？ 燃える天空なんて撃てるのか……

けど、詠唱キー無視は普通の呪文だけなのね。

ヘルマンに直撃して、周りをも炎に包まれた。

「あんなんじゃないあ、倒せないだろうから僕も支援」

僕は燃えてる中心部分に向けて魔法の射手 雷の100矢を発射。
僕の援護に驚いたアーニヤが僕を見る。

「ネ、ネギ!？」

「……アーニヤ、燃える天空を何時の間に覚えたの？」

「え? ロンドンで修行してたらいつの間にか、ね」

修行してたらってどうやってたらそんなにできるの?

まだ1年もたってないよ?

アーニヤは炎属性だから使えるのは当り前なんだけど、
現在でそこまでの技量は無かったはずなんだ。

だが、目の前で燃えている場所から衝撃波が発生して炎が消えていく。

どうやらヘルマンが空中に飛んだ影響のようだ。

燃える天空すら効かないのなら、前みたいに雷の斧なんて撃つても
無傷に違いない。

なら、強力な魔法をやるしかないから、アーニヤに離れた方が良い
と言うとしよう。

「アーニヤも明日菜さん達の方へ行ってくれる? ここは僕一人で」

「無理に決まってるじゃない!」

僕だけにさせないため、粘るアーニヤを見ていたエヴァアがアーニヤ
の前に出てきて

「ネギに任せろ」

「あんたは誰よ!」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル 通称闇の福音など呼
ばれてる吸血鬼」

「ひっ!? わ、わかったわよ」

闇の福音という言葉に青ざめたアーニヤが安全な所まで避難しようと僕から離れた瞬間、

上からアーニヤに向けて魔力を発射。

抵抗しようにも先ほどの魔法で魔力がないアーニヤは相手の攻撃に直撃し、倒れた。

「……っ!? アーニヤ!」

僕は必死にアーニヤの所まで走り、倒れているアーニヤを見る。気絶してるだけのようだが、背中から血が出ている。

僕は詠唱なしの治癒魔法で背中中の怪我を治し、

「……木乃香さん」

「は、はい!!」

冷たい声に反応した木乃香が慌てて返事をする。

僕はアーニヤを木乃香さんの前まで転移させ

「アーニヤを頼みます」

「わかったえ」

今の僕を見て悟ったのか了承してくれた。

アーニヤを木乃香さんに任せた後、僕は浮いているヘルマンを見て視線を鋭くさせる。

「マギア・エレベア、掌握」

この場にある植物などあらゆるものから強引にエネルギーを吸収する。

植物は生気を失い、枯れていき、電気が付いていた建物もいきなり

切れる。

流れ込んでくるエネルギーに気付いたヘルマンは地面に降り

「ククク……いくぞ」

言葉を発しながらものすごいスピードで突進してくる。

妨害しようとするのだろうか、もう完成していた。

だから、僕は一言呟く。

「充填」

僕の姿が黒く染まり、髪の色が変わる。

闇の魔法の完成だ。決して、術式兵装を使う訳じゃない。

結果もなしに使った瞬間、この世界がどうなるのかわかったものじゃない。

「雷の神槍・七連」

七つの雷の神槍が僕の前に出てきて、槍がヘルマンの方へ直進する。ヘルマンは右に回避するが、追尾式であるから着いて来てる。

その事に気付いたヘルマンが受け止めようと立ち止まり前に手を出す。

そんなヘルマンに笑みを浮かべてこう言った。

「その槍が素直に直線で来ると思ってるの？」

「何？……これは」

僕の優しい言葉に反応したヘルマンだったがもう遅い。

右手を確認して人差し指をクイツと上に曲げ、パーにした後、ギュッとグーに変える。

すると、七つの槍がヘルマンを囲むように別れた後、光を発しながらの速度でヘルマンに発射。

七方向からの槍の速度を見切れず、ヘルマンの体を貫通する。刺されたというのに血は出てこなかった。

「ぐほっ！」

ヘルマンは口から血を吐いた。
どうやら体の状態がおかしいようだ。

僕は苦しんでいるヘルマンをチャンスと思い、権限の鍵を右手に装備。

ヘルマンの前まで走った僕は鍵をヘルマンの腹に突き刺すと、ヘルマンが両手で僕をどけようとする。

今の僕は権限の鍵と魔力の影響でヘルマンの力なんて蟻レベルではない。

「アーニヤを傷つけた分は重い。アーニヤの得意とする属性で魂ごと消してやる」

権限の鍵に魔力を送った後、僕の左手で小さな光を作り、ヘルマンの背後に光を浮かせる。

小さな光は野球ボール並みになっていく。
そして、僕は無表情になり、こう言った。

「原子のチリとなれ。極光陽」

ヘルマンの背後で浮いている光が輝いていく。
いきなりヘルマンはジタバタと暴れて苦しみ始めた。

当り前だ。ヘルマンの背中が熱によって赤色になっているから。塵に変えてやる。

そう意気込んだ僕は最後の言葉を呟いた。

「始動」

すると、光は一瞬で広範囲を包み込んだ。

包み込んでいる間にジューっという音がしている。

光が10メートルほどで停止し、役目が終えたかのように消失した。

「え、ええええええええええ!？」

明日菜さんが驚きの声を挙げた。

他の人たちも眼を見開いて驚愕していた。

僕の周辺には熱で蒸発したようなクレーターができていたから。

目の前にいたヘルマンは跡形もなく消えていた。

「あんな熱程度で消えるとは……」

極光陽とは、小さな光を生み出し、敵の周辺に設置させ発動させる。発動時、かなりの熱が出ているため周りが蒸発していく。

ちなみに、先ほどの極光陽の温度はコロナ程度だ。

権限の鍵を使用しての効果だから、自分の力だけだと10000度程度しか出ない。

僕は明日菜さんの所まで移動して心配そうに声をかける。

「大丈夫でしたか？ 一応、結界を貼ってあったので大丈夫なはずですが」

「え？ 大丈夫よ。でも、何で蒸発したようになってる訳？」

「確かにそうだな」

「あの敵が一瞬にして消えてたです」

これはどうもおかしいと夕映さんが言ってるわけで。
クレーターが出来ていて焦げた匂いがするのは普通じゃない。

「簡単ですよ。今の魔法で完全消滅しただけですし」

「ネギ」

「何ですか？」

「相当の熱のようだが」

「まさかヘルマンが100万度程度で蒸発するとは思いませんでした」

まったく、あの程度の温度で消滅するとは大したことない。

権限の鍵の能力を全力出せば、核以上の温度は余裕で出せるはずなんだ。

尤も、今の僕では太陽の核までしか出せないのが欠点。

心中で思いながらも呟いた僕の言葉に、全員がはぁ？状態。

夕映さんが僕の体を見回して

「ネギ先生、ご自分が言った事理解してますか？」

「100万度なんて耐えられる訳ないで」

木乃香さんの言う事も尤もなのですが。

皆が混乱しているようだから偽りの事を言うしかあるまい。

「冗談ですよ。魔力でやったんです」

「そうやろうと思った」

「ネギ先生も冗談を言うんだから！」

僕の背後にいるハルナさんが、パンパンと背中を軽く叩いた。

冗談と受け取ったみたいだ。
ヘルマンが消えた事により、安心した僕は皆に言う。

「これで一件落着ですね」

「一件落着じゃないわよ」

「え？」

「これ、どうすんのよ。クレーターが出来てて噴水広場って言わないわよ」

真ん中に底なしのクレーターがあって元の噴水の欠片もない。
明日菜さんはそれを言いたいのか。

「しかし、よく学園側とか気づきませんね」

「せっちゃん、ウチらを攫った人達はどうか来たんや？」

「あ、そうですね……」

小太郎が侵入できたのも不思議な札が原因だし、この事を学園長に知らせる必要がある。

今回の事も学園長は、学園側は知らないだろう。

「私、そろそろ帰りたいんだけど」

思いつきり無関係そうな朝倉さんが気まずそうにしていた。

当然といえば当然だろうけど、茶々丸さんが向こう側の木の方に指を差し、

「ネギ先生」

「何ですか？」

「あの少年がまもなく目を覚まします」

あの少年？ ああ、自分のドジで吹き飛ばされた哀れな小太郎か。そういえば、小太郎は放置してたな。

ずいぶんとまあ長い気絶だことって言いたいね。

悪戯気分で僕は木にめり込み、今も気絶している小太郎の前に立つ。

「さてと……」

僕は左手で相手の口を塞ぎ、右手で相手の鼻を摘む。

その様子を見ていた明日菜さんが顔を引きつらせながら呟く。

「ネ、ネギ、それはえげつない」

「……ん！ んんんんん！！」

小太郎がようやく気付いた後、ジタバタしながら僕を黒い狗神で攻撃させた。

対して効かないけど7歩分ぐらい小太郎から離れた。

息を止められたせいで苦しかった小太郎は背後の木を黒い気みtainなもので消滅させる。

「はあはあ……殺す気かい！！」

「起こそうと思って」

「普通に起こせっつーの！」

「……それはいいとして、これからどうするつもり？」

「もちろん、勝負やで！」

「やダ、今から学園長に侵入者の事を報告しなきゃいけない」

本当は面倒くさいけど、無断で侵入してきた小太郎の事もあるし

「……」

「学園長室まで来てもらおうか？ 侵入者さん」

僕は楽しそうに小太郎に向けて満面な笑顔をプレゼント。
僕の笑みを見て悔む小太郎はギュッと拳を握る。

「わかったで。ならさっさと連行してもらおうやないか！」
「わかったよ。あ、そうだ。アーニャ！」

明日菜さんにおんぶされて寝てるアーニャを起こす。
起こされたアーニャは僕を見て

「ネギ……はっ！ あいつは！？」

明日菜さんから瞬間移動したかのような早さで離れて周りを見る。
警戒しながら探しているアーニャに向かって言っただげた。

「ヘルマンなら僕が倒しましたよ」
「ええ！？ 嘘」

「本当よ。だからこんな状況になってるんでしょうが」
「……これ、どうなってんのよ」

「アーニャちゃん、ネギ君って滅茶苦茶強いやん」

木乃香さんの僕を褒める言葉を聞いたアーニャは首を傾げて疑問を
持つ。

ま、まずいな。このままでは何で僕が強いのか問いただされる。
ある事情で魔法世界まで明かす気なんてないってのに。
なら簡単だ。こうするしかない。

「小太郎君、学園長室まで行くよ」

「いつでもええで！」

「戦いに行く訳じゃないんだけど」

あくまで小太郎の事を決めなきゃいけない訳で。
前と違うのは京都から脱獄したってのがないの。
さらに、瓶も存在してないようだからヘルマンの件も知らない。
本当、疑問になってきた事がある。

「ここって本当に僕の過去なの？ でも間違いなく僕の過去なんだ。
じゃあ、この世界に誰かが干渉してるって事？」

十分にあり得る事だけど、考えられるのはあの黒い男？
駄目だ。断定するのもまだ難しすぎるし、材料が無さ過ぎる。
それにまだ、敵が強いやら結界の強度が違うなど小さな事しかない。

「何一人でブツブツ言うてんねん」

頭の中で考えていると小太郎が怪訝そうな表情で僕を見てくる。
どう思われようが関係ないんだけど、ブツブツって事は聞かれてない
っぽいね。

当然、明日菜さん達にも聞かれてない訳です。
安堵した僕は小太郎に返事をする。

「……うん、何でも無いよ。行こうか」

「ネギ、私達も」

明日菜さんが僕に付いてきてくれるみたいだが、どうする？
別に影響ないからいいか。

「別に良いですよ」

「ネギ先生、ここどうするんですか？」

「えと、直しますか」

「どうやって直すのよ。こんなの無理に決まってるわよ」

アーニャが破壊された光景を見て

「ネギ君がこの前、クレーターになってた桜並木通りを直してたから」

「……復元魔法 第2修正、解放」

とりあえず、こんな場所を残しておくわけにはいかない。

僕は権限の鍵を右手で破壊された場所へ向ける。

すると、クレーターになっていたり破壊された場所がフィルムの様に修正されていく。

明日菜さん達は見慣れているが、まだ知らない人たちにとっては驚愕していた。

修正が完了すると、権限の鍵を僕の中へビシユンと音が鳴ると共に消える。

「これで大丈夫ですよね」

「何時見ても不思議な現象です」

「夕映、冷静すぎ」

「のどかこそ」

「私ははじめてみるわ。ネギ先生すごいわね」

ハルナさんが僕を褒めてくれた。

夕映さんとのどかさんは初めてじゃないんだっけ？

初めてなのは、朝倉さんとハルナさんにアーニャぐらい？

え？ 小太郎って野郎の事なんて知らん。

「な、な、な……」

「どうしたん？ アーニャちゃん」

「って何で私の名前を!？」

木乃香が自分の事を知ってる事に驚くアーニャ。

「知ってるも何も、ネギ君に聞いたんやけど?」

「ああ、それもそっかってそうじゃなくて!　ネギ、何よあの魔法は!」

「ん?　復元魔法だけど?」

「いつそんな呪文できるようになったのよ」

ゲッ!　もしかしてヤバいと思ったが、
刹那さんやエヴァ達がこう言った。

「ネギ先生ですし」

「ネギ君やし」

「ネギだからな」

「マスターもネギ先生の事を」

「違うって言うてるだろうが!　何度言えば分かるんだ!」

エヴァが茶々丸さんの頭にあるアレをくるくる回していた。
悶絶しながらも茶々丸さんが

「ツン……デレ、ですね」

遺言の様な声色で呟いていた。

エヴァは誰がツンデレだ!　とか言ってたけど、どうみてもツンデレです。

「二人とも、その辺にしたらどうですか?」

「ふん!　仕方が無い」

「……助かりました。ネギ先生 人間ペースになったらお礼します」
「人間ベースって？」

明日菜さんが頭の上に？マークを浮かせながら首を傾げていた。
わかつてはいるんだけど、今は聞きたくないな。
でも、ネギの思いは次の言葉で消え去った。

「人と同じ性能になれます。つまり、ネギ先生に……」

僕にって言った後、なぜか茶々丸さんの頬が赤く染まっていく。
続きは恥ずかしすぎて言えないようだった。

恥ずかしい事を聞いた僕は嫌な予感がして溜息を吐いた。

「そんな話してないで、さっさと学園長室へ行くわよ！ ネギ」
「そ、そうですね」

アレ？ 嫌な予感がしたのに誰も突っ込んでこない。

それはそれでいいか。手間が省けるし。

そう頭の中で完結させたが、バカの声が僕に。

「まったく、ネギは情けないで！」

「小太郎にも分かる日が来るよ。こんな状況になったらそうなるって」

言い返してやると、小太郎は冗談だろ？という表情でないない、とか言いながら首を横に振る。

僕の過去では、小太郎は確か2人以上に……だったかな？

あんまり他人の恋愛関係なんて覚える気ない。

どうでもいい考えを水に流して、全員にこう言う事にした。

「僕は今から小太郎と学園長室へ行きますが、こんな時間ですので他は寮に帰ってくださいね」

そもそも今、夜だし。すっかり忘れていたよ。
寮の管理人は前より優しい人になってるから、かなり遅くならない限り怒らない。

「あ、そういえば門限過ぎてるんだった！ ヤバいわよ。夕映、のどか」

「そ、そうですね」

「じゃあ、ネギ先生、私達はこれで」

「ネギ先生、また明日」

「さよなら」

朝倉さん達4人は寮へ向けて歩いていった。
ヤバいとか言いながらも普通に歩いて行くなって……まあいいか。
残ったのは刹那さんなど。

「エヴァンジェリンさん達はどうしますか？」

「私も行くに決まってるだろ？ だが、この学園の結界も大したことないな！」

まったくその通りだ。

エヴァが学園結界の脆さに笑っているではないか。

木乃香さん達もなぜかうんうんと首を縦に振る。

「ねえ、ネギ」

「何ですか？」

「服着替えたいんだけど、さすがに恥ずかしい」

頬が赤い明日菜さんがスカートの部分をなぜか抑えている。

そういえば、今の明日菜さんの姿ってチアガールだっけ？

ヘルマンって妙な趣味をしている。

まあ、そのおかげで明日菜さんのチアガールを見れた訳だけど。

今後、見ることはないと思うけど仕方が無いな。

「ええ、明日菜の良く似合うやん！」

「こ、木乃香！？」

「うーん、そ、それもそうやな……えい！」

木乃香さんがスカートのポケットから小さな杖を出し、明日菜さんに向かって振った。

すると、なぜか制服姿になった。

「何で、制服なのか？は聞かないわ。とにかくありがとう。木乃香」

「親友やん」

明日菜さんは信頼できるような笑みで木乃香さんに感謝していた。
本当にこの2人は親友なんだなあ。

「じゃあ、そろそろ行きますか」

「やっとかいな」

小太郎は待っている間、欠伸をしつつも空を見ながら待っていた。
本当に疲れてるっぽいから10メートル範囲の魔法陣を地面に貼って

「極移」

場所を想像しながら小さな声を出した。

ネギ達は噴水広場から姿を消した。

この場には誰もいなくなった……と思われたが、今まで忘れ去られてた生き物がいた。

その生き物は小さくマスコットキャラ的存在。

「兄貴、酷過ぎるッス。オレッチが活躍したのにも関わらず……兄貴の所へダッシュ！」

小さな生き物は叫びながら、急いでネギ達の後を追った。

第33話へ続く。

第32話 『ネギ対雑魚犬、ヘルマン後編』 (後書き)

次は学園長室から始まります。

web拍手、感想などお待ちしております。

第33話『小太郎とヘルマンの事故処理とアーニャ』（前書き）

話が進んでいないと見えますが、そう見えるだけで話自体は進行しています。

重要な間違いがありました。

誤；アーニャ・ココロウ↓正：アンナ・ユーリエウナ・ココロウア
です。

第33話『小太郎とヘルマンの事故処理とアーニャ』

ヘルマンを倒した後、小太郎を含む侵入してきた件を伝える為、学園長室へ向かう事になった。

〈学園長室〉

僕は学園長室の扉を破壊して入った。

学園長は何事かと僕達を見ている。

破壊したのは僕だけど

「学園長、夜分遅くにすみません。実はですね。

今日の夜に一人の魔族が侵入しまして、明日菜さん達を攫って僕を引き寄せてきたんです」

「何じゃと!？ それは本当かのう?」

「嘘は言わんさ。まあ、ネギが倒したからいいが、学園の結界が弱すぎるんじゃないか？ 京都の本山といい、この学園といい侵入されるのは問題だぞ、爺」

エヴァが言いたい放題で学園長に言い放った。

確かにそうだ。

京都の時だって、結界がちゃんとしてれば木乃香さんが攫われることはなかったというのにな。

「うむう、それは後ほど検討しようかのう。そこの少年は?」

学園長が小太郎を指さす。

「犬神小太郎をこの学園で居させてほしいんです。彼、お金が無いせいで住む場所もなく両親がいなくて一人ぼっちなんです。」

寂しくて寂しくてもう生きていくのがやっとらしいので……」

「それは可愛そうじゃのう」

「ちょっと待てや！ ネギ」

僕の嘘話を信じてくれた学園長は涙を流していた。

小太郎が僕の作った話に突っ込んできた。

僕は小太郎の耳に小声でつぶやく。

「いいじゃない。成功すればここにいれるし、いつでも僕と勝負もできる。」

そして、さらには衣住食が与えられるんだから」

「本当か？」

「誰も嘘は言わない」

「わ、わかったで。今回は我慢したる」

「そうじゃのう。小太郎君には学校生活を主に警備員をやってもらいたいんじゃないが」

「警備員？」

僕は首を傾げている小太郎に指摘する。

「ここを護るための兵みたいなものだよ」

「つまり、侵入者がいたらぶちのめせって事かいな？」

「侵入者というよりもこの学園を狙う魔物じゃな」

「召喚してくる魔物かあ、いいで！」

「では、男子寮に手続きをしに行ってくれんかのう？」

学園長が机の引き出しから数枚の書類を出し筆ペンで書き込んだ。僕は書類の中に何が書かれているのかを見た。そこには『転入手続き』と書かれていた。

「おじいちゃん、それって偽造やろ？」

「仕方なからう。家の無いご両親もいないんじゃないやあどうしようもない」

「それはそうやけど」

「木乃香、仕方ないわよ」

「私もそう思います。このちゃん」

明日菜さんと刹那さんが木乃香さんを。

確かにそうなんだけど、今は仕方が無いんだ。

小太郎の両親は既に亡くなっているらしいし。

僕の記憶では、だけどね。

「書けたぞ。小太郎君よ」

小太郎へと書類を渡す。

それを受け取った小太郎は入口の方へ向かおうとしたが立ち止まる。

「そういえば男子寮ってどこや？」

「女子寮の一つ駅先じゃ」

あれ、そうだったけ？

今住んでる部屋に地下があるなど色々とおかしいから場所が変わっていても不思議ではないか。

それはもうどうでもいいよ。

場所を聞いた小太郎は子供の様に走っていった。

「学園長、いいんですか？」

「何がじゃ？」

「小太郎はここへ侵入してたんですよ？　しかも学園側が感知できない方法で」

それを聞いた学園長が唸っている。

今さらな気がするし、学園側の反応が遅いと妙なイレギュラーが起こりかねない。

「そういえばアーニヤの件は？」

「うむ。そこにいるのがアンナ・ユーリエウナ・ココロウアじゃない？」

僕の背後にいたアーニヤが前に出てきて

「は、初めまして、アンナ・ユーリエウナ・ココロウアです」

緊張した声で挨拶をする。

学園長はうんうんと何か頷いていた。

そのうんうんの意味がわかってるのは恐らく僕だけであろう。

「ネギ君の幼馴染と聞いたが」

「はい！」

「……木乃香のライバルに匹敵じゃな」

学園長の発言に驚く木乃香さんとエヴァが慌てて、

「こら、糞爺！　何を言ってるんだ！」

「何を言うとするん！？」

「ライバルって」

僕と学園長以外が混乱する。

明日菜さんはアーニャを見て、憐れみな視線を送っていた。

憐れみって体格の事ですか？ 明日菜さん

それにしてもライバルねえ……ハーレムを目指す僕には関係ないんだけど。

「あ、あ、あの！ 私はべ、別に」

「アーニャちゃん、赤くなってる時点で説得力無いわよ」

明日菜さんの言う通り、今のアーニャは赤いから説得力が何もない。あれ？ 明日菜さんってアーニャにも呼び捨てだったような……気のせいかな。

それはそれとして気になる事が一つだけあるんだ。

今、学園長に挨拶したんだよな。

「アーニャ」

「な、何？」

「どうして制服姿な訳？」

それが聞きたかった。

何でアーニャは麻帆良学園の制服を持ってたの？

アーニャから帰ってきた答えは普通だった。

「手紙と共にあったのよ。それでだけど？」

「一度着てみたってわけか」

「うん」

手紙と一緒に来ていた、ねえ。

頷いたアーニヤを見て同時に思った。子供だなあっと。そういえばこんなかんじだっけ、とアーニヤの性格を思い出していた。

「皆が呼んでいるアーニヤと呼ばせてもらうが、アーニヤ君の件じやが、

明日、木乃香のクラスに編入じゃ」

「もうクラス決めてたんですか？」

「ネギ君の補佐じゃからのう」

「どうして僕の補佐なんですか？　僕がミスを犯した事ありましたっけ？」

学園ではちゃんと教師として仕事をしているはず。サボった事なんて全然ないし、休んだ事もない。

何が原因で補佐なんてあるんだ？

「実はのう、ある人物が強引にネギ君の補佐をとってやったらしいんじゃない」

「強引!？」

「誰なんだ？　そんな事した奴は」

「向こうに聞いても明かしてくれんのじゃ」

こんなやり方、あの人しかいない気がするんだけど。

しかもアーニヤ、でしょ？　確実にネカネお姉ちゃんだね。

頭の中で思っていると、外側は話を進行していく。

「そいつが原因でネギの幼馴染を送り出したのか。やるな」

「マスター、一番の不利です。体の成長的に」

「だ、黙れ!？」

「ああ、ダ、駄目です。ゼンマイを巻いては……」

茶々丸さんの指摘に怒るエヴァは茶々丸さんのゼンマイを巻く。
巻かれた事で悶絶となっていく茶々丸さん。

まあ、この状況は無視しようか。

「なんとなく犯人は分かりました」

「誰なの？」

「誰なん？」

明日菜さんと木乃香さんが僕に詰め寄ってきた。

僕の姉だって言ったら、うるさくなりそうだ。

だから僕は誰もが嫌がる様な事を宣告した。

「それは言えません。詰め寄った瞬間、うっかり詠唱版の雷の暴風
をやってしまいますよ？」

「うっ、それは嫌やな」

「魔法無効化を無視する魔法は受けたくもないわね」

「むっ!？」

経験ありまくりの2人は青ざめながら横に首を振る。

学園長が明日菜さんの発言に驚愕して目を向けた。

「どうかしたんですか？」

「何でも無いんじゃないが、明日菜くん」

「はい」

「君の、自分の能力を知っとるんじゃない？」

「魔法を無効化するという事だけです」

「そうか、なら……エヴァに鍛えてもらいなさい」

学園長の優しい口調に明日菜さんが驚く。

無理もないか。明日菜さんはあの人の娘さんみたいな感じだしね。襲われる可能性もあるから、強くなる必要がある。

「わかりました」

「本当はその能力を知らない方がワシらにとっては良かったんじやが」

「だが、ネギに付いて行く時点でその道はもうない」

仕方が無いと溜息を吐いた学園長は別の引き出しから書類を出し、アーニヤに渡す。

タイトルには『麻帆良学園案内書』とあった。

「これは何ですか？」

「ん？ 新人生に渡してる学園案内じゃ。見ての通りこの学園は広いからのう」

「ありがとうございます」

受け取ったアーニヤは礼をした。

その光景に学園長はうんうんと首を縦に振っていた。

「そういえば、アーニヤ」

「何？」

「鞆とかは？」

「駅のコインロッカーだけど？」

そんな所に魔法関連を打ち込むなよ。
取られることはないから良いけど。

「そういえばネギってどこに住んでるの？」

アーニヤの爆弾発言にこの場が凍った。

カチーンと固まった音が響く。

学園長と僕達の顔色が変わる。エヴァはニヤニヤしていたが。

「それはどうでもいいんじゃないかな？」

「どうでもよくないわ。ネギの部屋知っておかないと遊びにも行けないわ」

「……ネギ、正直に白状した方が良いわよ？」

「アーニヤ、僕は明日菜さんと木乃香さんの部屋に住んでいます」

その後、ブーイングが飛んでくると思つて魔法障壁を貼る。

だが、予想が違った。

アーニヤが頬を赤くしてこんな事を言いだした。

「わ、わ、私もそっちに一緒にすむわ」

「ええええええええええ！？」

僕は意外な反応に頭を抱えた。

「まったく、いつも僕の予想を斜め方向に遮りやがって。」

あの部屋に4人はきつい……あれ、そうだったけ？

「アーニヤちゃん、ホンマに来るん？」

「行くわよ」

「場所ないわよ」

「自分でどうにかするわ」

「……ネギ君」

なぜ、明日菜さんと木乃香さんがジト目で見てくる？

良く考えれば、これってアーニヤの強化できる方法もできるんだよね。

なら、アーニヤにも強くなってもらおうか。魔法世界みたいな事が起こらない様に。

「アーニヤ、そのかわり僕と修行してもらおうよ?」

「ええ、いいわよ」

「ネギクンノ修行!」?

「アーニヤちゃん、本当にネギの修行に付き合うの?」

「何言ってるのよ! ネギなんて余裕よ」

ヘルマンの結果を知ってるはずのアーニヤがそう言っていた。
アーニヤ自身、ネギの倒したシーンを見ていないため分かる訳もない。

「明日菜さん達も付き合ってもらいますよ?」

「え?」

「それはやめてほしいんやけど?」

「攫われたじゃないですか。もっと強くなる必要があります」

「「うっ!」」

実際にそうなった2人は言い訳もできない。

今後の事は部屋に行ってから考えましょうか。

「そろそろ部屋へ戻りたいんですが、お腹も空きましたし」

「そういえば」

「気づくの遅っ!」

「行きましょうか。……エヴァンジェリンさん。では」

僕は周辺に魔法陣を展開。

明日菜さん達も範囲に入れて発動させる。

「極移」

ネギ達の姿が部屋から消え去った。
エヴァと茶々丸と学園長のみになった。

「さて、私達も行くぞ。茶々丸」
「はい」

エヴァと茶々丸はそう言って、ネギが破壊した扉から出て行った。

「うむう……扉を直してくれんのか。仕方が無い。明日誰かに修理させるかのう」

学園長はネギに破壊された扉の跡を見て空しい気持ちになった。
まったく、誰に似たんだと溜息を吐いていましたとき。

くネギの部屋く

極移で一瞬にして転移した僕達はソファアに座り、話す事になった。

「ネギ、あんたどれぐらい強くなってるのよ。
卒業した時までは私よりちょっとだけ強い程度だったじゃない」
「え？ そうなん？」

アーニヤは僕に詰め寄ってきて、木乃香さんがわからないと首を傾げる。

確かに今の僕とウェールズの僕は違うけど、過去に帰ってきたから

同時に僕でもある訳で。

未来から〜とか今は禁句なので、ここはごまかすでしょう。

「……眠りの霧」

ごまかすとしてやった行動が『アーニヤを眠らす』だった。
人でなし、とか言われたって知った事か！

アーニヤを眠らせた後、そのまま体を寝かせた。

「ネギ君？」

「僕が強い理由は今、言う訳にはいかないんです。
修学旅行の時、ばらそうと思いましたが、やっぱり止めた。
止めた理由は……それすらも話せません」

「ネギ……」

「前も言ったけど、後で教えてくれるのよね？」

「はい」

エヴァに話そうと思ったのは僕の中にあるアレを。と思ったわけだ。
でも、邪魔された。その影響により後になった。

イレギュラーな現象で今は止めた方が良いから、もう夏休み以降じやないと駄目だと判断した。

僕の返事を聞いた明日菜さんはすっきりしたのか笑顔になり、

「だったらいいわ。でも、早く話してね。木乃香もそれでいいでしょ？」

「ちょっと不満やけど……明日菜がそう言うならウチもええよ！」

木乃香さんが優しい言葉を掛けてくれた。

昔の僕ならこんな状況を看破するなんて無理に決まってる。

長く生きてるせいかもしれない。
それよりも考えなきゃいけない事が一つだけあった。

「アーニヤの寝場所、どうするの？」

「それもやけど、食器とか増やさなあかな」

「寝場所なら作ることはできるけど、さすがにそれ以外は自分で決めてもらわないと」

ベットは複製魔法でどうとでもできる。

愛着が無いから、まだマシといえる。

でも、茶碗や歯ブラシなどは買わなきゃいけない。

さすがに他人のを複製してもしょーがないし。

「今日の所はもう諦めるしかあらへんやろ？」

「でしょうね。明日の放課後に誘おうか」

「僕も予定は有りませんよ」

「決まりやな」

アーニヤがここに住む問題は決まった。

眠らしてるから明日覚えてたらうるさいだろうな。

頭の中で思考していると、グーっとな僕の腹から音が鳴る。

僕の空腹の音を聞いた2人は笑い。

「おなか減ってるんやな。ネギ君、ちょっと待ってな」

そう言って、木乃香さんはキッチンの方へ向かった。

しばらくした後、料理をこっちに持ってくる木乃香さん。

並び終わった料理に手を合わせて

「いただきます」

おかずとバランスよく食べていると、向こうから音がした。
玄関の方からコンコンと小さな子が叩くような音がした。

「ん？」

「誰やる？」

木乃香さんは玄関まで歩いていき、ドアを開ける。
小さな生き物がニョキツと入ってきて、テーブルの上まで来た。
机の上にいる生物が涙を流しながら、こう申した。

「酷いっすよ。兄貴」

「あ、カモ君」

「カモ君、すっかり忘れとったわ」

「酷いっす！」

木乃香さんにすら忘れられてるカモ。

確かに酷いかもしれない。

前より存在感が全くないし、カモを放置してあの場から去ったのだから。

仕方がなく、可哀相なカモに慰めの言葉をあげる。

「活躍したんだから良いじゃない」

「姉さんが良くてもオレツチは良くないっす」

カモが涙を流しながら落ち込む。

「どうしようか。じゃあカモ君」

「何っすか？」

「魔法ネットで数個だけ好きに注文してもいいよ」

そういえば、カモは魔法ネットが好きだったな。

なら、それを餌として釣ればいいんだ。

どっちにしろ、カモは役に立つ。スカーじゃなくて仮契約として。

「さっそくネットつなげるッス」

カモは嬉しそうに僕の領域に入り、パソコンを付けた。

下等動物がパソコンを触っているというシュールな状況を見ながら夕食を終えた。

食べ終わった僕は自分の領域に入り、カモが夢中になっている画面を見る。

何事かと画面を見るとこう書かれていた。

「『絶対服従の香水』……カモ君、これ買うの？」

「な、何でも無いっす！ 嬢ちゃん達を服従させてナニをやるうならんて考えてない！！」

別に僕は欲しいの？ って聞いたんだけど？

そこまで正確に話してくれるとはね。

ふむ、ちよつと買ってみるか。

「カモ君、それを5つぐらい注文してくれる？」

「いいんすか？」

「カモ君の分で合計6つだね」

「1つ10万円っすよ？」

画面上を見ると、確かにそう書かれていた。

僕の持っている金額から減っても大した事ない。

これを何に使うかって？ それは来てからのお楽しみ。

「じゃあ、注文するよ」

「おう！」

同意を得た僕は手続きを済ませてパソコンの電源を切った。

発送日が学園祭前日か。

この葉って本当に効くなら、面倒なアレに付き合わなくても済む。

「カモ君、僕はもう寝るから」

「了解」

今日は妙な出来事が多すぎだ。

アーニヤが来た事で僕の知ってる出来事から変わる……わけないか。確実に学園祭の出来事は永遠に変わらんよ。

だって、超さんは絶対に魔法の事を世界へバラす気満々だもん。

まったく変わりようの無い出来事に溜息を吐いた僕はベットに倒れこんで眠った。

第34話へ

第33話『小太郎とヘルマンの事故処理とアーニャ』(後書き)

学園祭編まで あと1話

第34話『アスナと明日菜とアーニャの歓迎』（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。

忙しかつたのでSSを書いている余裕がなかったです。

どれだけ時間が経とうと完結までやっていききたいと思います。

第34話 『アスナと明日菜とアーニャの歓迎』

ネギは、僕は不思議な夢を見ている。

この時間に戻ってくる前の麻帆良学園の屋上にいた。
景色が紫色になってておかしい。

「これって夢、だよな」

「そうね」

「え？」

後ろから、聞き覚えのある声がした。

有り得ないと思いつつも振り返ると、明日菜いや、アスナが制服姿でいた。

アスナとわかったのは簡単だ。髪を下ろしていたからだ。

「久しぶりね」

「いや、僕にとっては久しぶりも何もないよ？」

「そうね。並行世界や異世界に移動してるネギにとっては久しぶりじゃないのはわかるけど、私にとってはそうなの！」

ぷくうと子供の様に頬を膨らまして拗ねた声色で僕に言う。

目の前にいるアスナこそが僕の愛した女性の一人。

移動してるといっても、並行世界の明日菜が別の人といたり、性格が違ったり色んな明日菜を見た。

もちろん、そういう木乃香達も見ただけど、ね。

それはいいとして、そんな彼女がどうしてここにいるというか、何でそんな事を知っている？

「これって夢だからじゃない？ それにね、ネギの知らない部分が

あるでしょ？」

僕の知らない部分？ 夢やら違う出来事の事？

「アスナは何か知ってるの？ この世界の、僕の過去の異変を」

「一部だけね」

「アスナはその一部を知ってるの？」

「この世界の私が夢を見たって言ってたでしょ？」

「あったね」

明日菜がそう言ってたのは知ってる。

今の明日菜は性格が違うけど、本質も違う気がした。

あくまでも、僕の主観だけど。

だが、アスナの次の言葉で驚愕する事になる。

「私ね。実は明日菜の中にいるのよ。ネギへの思いはそれの影響かも知れないわね。後、その影響でズレてるんだと思う」

「アスナがいる影響か、ん？ それじゃあ……アスナは」

アスナがいるだけで影響ってするのか？もしかしたら別の理由もあるぞ。

一瞬、修学旅行の時の男を想像したが、それより大事な事があった。アスナが過去の明日菜の中で存在している？

人は亡くなってからもどこかで潜んでいる可能性が稀にあるらしい。その稀がアスナという事だ。

なら、どうにかすれば……と思いかけたが、アスナの言葉で僕の思考が止まる。

「無理よ」

「え？」

「私はきつと明日菜の中で一つになると思う。もうあまり力もないし」

悲しそうな目で自らの手を見るアスナ。

そんなもの、権限の鍵でどうにでもなる。

だから、僕はアスナにそれを伝えようとしたが、先にこう言われた。

「駄目よ。私は明日菜の中で一つになればいいの。この世界の明日菜も私だしね。」

ネギへの思いも同じぐらいだと思うわ」

あまりの恥ずかしさに赤くなるアスナ
言われた僕も恥ずかしいけど、今は寂しさで一杯だ。

「そ、そうですか……」

「ネギ、明日菜の事あ……し……てね」

アスナは満面な笑顔でそう言った後、役目が終わったかのように消えていった。

取り残された僕はアスナの言葉の意味を考える。

「そうなんだよな。アスナは明日菜であり、明日菜はアスナなんだよな。ククク、僕らしくないな」

僕は気晴らしに魔力を解放し、右手を前に差し出す。

「ウェニアント スピリトウス アエリアーリス フルグリエン
テース クム フルグラティオーニ フレット テンペスタース ア
ウストリーナ ヨウイス テンペスタース フルグリエンス」

昔、親父がやっていた呪文を唱える。

ネギの腕に巻き付き、集束されていく雷の暴風
普通はここで解き放つのだが、僕はそうしない。

「闇の魔法、完全圧縮、掌握」

そう呟いてから空いてる左手を天に向ける。

すると、周辺にある建物やら黒色になっている世界樹すらもネギの左手の方へ圧縮されていく。

圧縮されながらも周辺にある自然のエネルギーなど全てを吸収していく。

完全圧縮は今の説明で言うと、自分よりも大きい物質すらも圧縮し手のひらサイズにできる。

右腕に巻き付いている雷の暴風に圧縮された小さい球体を含ませると、激しいスパークが走る。

修学旅行で走っていたスパークとはケタが違うが、夢だからというものもある。

「完全圧縮版、雷の暴風、発射っ!!」

右腕を思いっきり後ろに動かした後、勢いよく前に突き出す。

突き出し方は古菲から教えてもらった突きだ。

僕の右腕から雷の暴風が激しい轟音を唸りながら直進する。

真っ直ぐ向かっていくと思いきや方向がいきなり下へ変わる。

地面に打ち込まれたら、ぶつかった影響の衝撃波が発生する。

周辺の物が消し飛び、雲が消えていき、空の空間が割れていく。

空間が割れてる所で気づく。コントロールしてなかったなあ、と思
いながら僕は目を瞑った。

「ネギの部屋」

僕は無意識に体を起こしていた。

明日菜さんの中にアスナがいる？　じゃあ木乃香さんとかは？

一瞬だけ思考を巡らせていたが、それは後で考える事にする。

起きた状況は、と周りを見てみると、アーニヤがソファで座っていて、木乃香さんが朝食を並べていた。

朝食？

「つてもうそんな時間なんですか？」

梯子を使わず飛び降りて赤いソファに座る。

ちなみに、アーニヤは青いソファ、つまり向かい側だ。

「相変わらずネボスケね」

「アーニヤ、失礼だよ。僕だって夢さえ見なきゃ起きれたんだよ？」

「その言い訳は何度目よ」

昔、僕にとっては990年以上昔の事。

ウェールズにいた頃のアーニヤに起こされる時、言い訳をした事がある。

父さんの夢が見たい！とか可愛い夢だった。

そんな夢を見たら、直接次元魔法でぶっ飛ばすんだが。

「そういえば今日からだよね」

「うん。でも年上の人ばっかだから浮くのかな」

「大丈夫や」

エプロンを外した木乃香さんが僕の右隣に座る。

食事する場所も変わってるのはもう言うまい。
気にしてたら馬鹿馬鹿しくなってくる。

「お腹減ったあ……」

疲れた表情をした明日菜さんはアーニヤの隣に座る。

木乃香さんが僕の隣に来て、気にもしていないみたいだ。

「うーん」

「どうしたの？」

「食パンはないの？」

「外国ではパンが多いもんね」

「ご飯自体がないわ」

どっちも僕にとっては懐かしいんだけど？

ここに戻ってくる前にいた場所なんて不幸すぎる。

麻帆良学園の土地が残っていて、他は消し飛んでる。

簡単に言えば、この地域以外に原型を留めてもない。他は無くな
っていて宇宙空間という事。

なぜそんな状態で存在できるのか？

僕がその地域を権限の鍵を使って一つの世界に作り替えたから。

ただし、食事なんてできるわけもなくってそんな話はどうでもいい
か。

今はアーニヤの事が最優先事項だ。

「ところでアーニヤちゃんとネギ君って幼馴染なんやろ？」

「ええ」

「そうよ。小さいころからね」

「今も小さいじゃない」

明日菜さんが空気を読まない事を言いました。
確かに年齢はあまり変わらないけど、それを言ったら駄目ですよ。

「何ですって!?!」

「まあまあ、明日菜も大人げないで」

「わかったわよ」

木乃香さんに言われた明日菜さんは黙々と食事を取る事にした。
ただ、耳は傾けている様子

「ネギ君の小さい頃の話聞かせてほしいんやけど」

「ネギの?」

「小さい頃のネギ君、可愛かったんやろなあ」

「優等生みたいな感じだったわね」

「アーニヤ、嘘はつかなくて良いよ」

優等生ね、関係者以外禁止な場所に無断で侵入したり色々した僕が?

「簡単に言うと、今のネギ自体と変わんないわ」

「それじゃあわからへん……」

「確かにそうね。600年も生きるエヴァちゃんに余裕で勝てるのか、ね」

「はあっ!?!」

驚いた勢いでソファーから立ちあがるアーニヤ。

「ネギ、何時の間にそんなに強くなったの? 雷の暴風が精一杯だったじゃない」

「密かに特訓してたんだよ」

「雷の暴風以上の呪文も使いまくりやな」

明日菜さんが木乃香さんの言葉に同意していた。
一応、木乃香さんと明日菜さんには魔導書を見せているからわかる。
魔導書の中には雷の暴風以上の出力を持った呪文がチラホラと存在する。

「密かにしても時間が無さ過ぎよ」

「アーニヤだって燃える天空を撃ってるじゃない」

強くなった事を指摘してやると、アーニヤは溜息を吐いた。
なぜ溜息を吐いた？

「私が使えるのはアレが限界よ。問題の魔力が少ないから」

「じゃあ仮契約でもする？」

「は？」

「はい？」

「そやなく」

「良いっすねえ。魔法陣ひくっすか？」

驚きの声を上げるアーニヤと明日菜さん、木乃香さんは増える事を喜んでいるみたいだ。

ここで仮契約でもしないと魔法世界に行った時にアーニヤの居場所がわかりにくい。

明日菜さんと一緒に攫われたから分かったものを。

「仮契約!？」

アーニヤの顔がみるみると赤くなっていく。

何か初々しいな、と様子を見ながら考えていると、カモがピョンと広い場所に魔法陣を展開。

実行するの早いなあ、まだするとも決まってるのに。
カモ、そんなにお金が好きか？　と呆れる。

「ってネギとキス!？」

「ちなみにネギと仮契約してる人数、結構いるわよ」

「まだ数人やん」

「あんた達はネギとしてるって事？」

「ま、まあね」

「これやろ？」

ちよっと恥ずかしそうにしてる明日菜さんと笑顔の木乃香さんが仮契約カードを見せる。

アーニヤは全身が震えあがったと思った瞬間、僕の手を掴んで大胆な事を言いだした。

「ネギ！　私にもしなさい！」

「あ、うん」

「二人とも魔法陣の上に立ってくだせえ！」

今まで存在感なかったカモ君はささっと僕に奨める。
こんな時しか出番があまり無いカモであった。

アーニヤが魔法陣の中に入ると、スカートがふわっと浮かびあがる。
スカートが浮かび上がり、下着が見えそうになる所でアーニヤの両手で塞がれた。

「……もう少しだったのに」

「何がもう少しなの？　……っ!？」

僕の言葉で疑問になったアーニヤだが、意味がわかったのか顔を赤

くした。

怒って赤くなったかなんて僕にわかるわけもない。

「……そんなに見たいんなら二人っきりの時にでもいくらでも」

「はい？」

小声で帰ってきた答えに僕は間抜けの声を出した。

予想外の言葉に戸惑った。

「あ、アーニヤちゃん、早くやったら？」

「そ、そうやで！」

2人もアーニヤの言葉が聞こえたようだ。

声が引き攣ってるような、そんな感じがした。

「そうですね。アーニヤ」

「う、うん」

早くした方が良いな、と判断した僕はアーニヤの肩を掴んで唇を重ねた。

唇を重ねたと同時にアーニヤが僕の肩を掴んできた。

数秒間、そんな状況になっていると

「お二人さん、もういいですぜ」

カモが仮契約カードを持っていた。

絵柄は青い杖を持ち、魔法服を着たアーニヤが写っている。

魔法服の露出が……と考えているその時、魔力の塊が飛んできた。それに気付いたアーニヤが僕から離れて火の矢10で相砕した。

「いきなり何すんのよ！」

撃ってきた張本人に視線を向ける。

その張本人が明日菜さんだったわけだ。

「あ、当り前よ！　いつまでしてんのよ！」

「だからって魔力の塊を撃ってくるんじゃないわよ！」

「それは気分で」

「気分でされたら堪えないわ」

僕を巻き添えさせる気満々だったのが気に入らない。

僕はアーニャと明日菜さんの間に入り込んで忠告する。

「明日菜さん、今の魔力を僕にぶつけてどうしたかったんですか？」

魔力を部屋全体に撒き散らしながら笑みを浮かべる。

僕の笑みに気付いた明日菜さんが青ざめて

「え、えとね。アーニャちゃんだけにやろうと思って」

「僕に当たったらどうするんですか？」

「あははは……」

「学校は行かんでええの？」

「「「え？」」」

申し訳なさそうに言う木乃香さんの言葉に僕は腕時計を見る。

デジタルだから簡単にわかる。

こう記されていた「8:00」と。

「この話はもうどうでもいいので、僕は急ぎますね」

解放していた魔力を自分の中に戻す。
皆に行ってきます、と伝えてから、極移で学園長室を思い浮かべて
転移した。

〈学園長室〉

極移で来た僕は学園長室にいた。
この移動って早すぎるんだよね。時間が経つ瞬間に到着してるのが
すごい。

「ネギ君、うむ。木乃香とは仲が進んでいるようじゃな」
「うん！」

返事をしたのは木乃香さんの声だった。

左腕に絡まれている暖かい感触がするから左に視線を向けると、木
乃香さんがいた。

「……何でいるんですか？」
「ネギ君が移動する時、とっさに掴んどいたんや」

先手必勝と右目でウインクする木乃香さん
後で明日菜さんとアーニヤが……って考えると頭が痛くなる。

「ちなみにどれぐらいじゃ？」
「まだキスやけど？」
「それ以上進める訳ないじゃないですか」

10歳相手にどう進めと？

まあ逆行しただけだから、その部分は関係ないが。
だが、爺は僕の予想外の事を言ってきた。

「年齢詐称の飴玉があるじゃろ？ それを飲み込むんじゃ。そうすれば年齢の問題も解決じゃ」

「そんなんあるんや」

「おい……」

この爺はなんて事を言い出すんだ？

あの飴玉で成長させてって方法に呆れる。

大きくなった体は必ずしも将来そうなるって想定されていないし関係ない。

でもそれを普通、娘に提供するか？

「その飴玉ってどこにあるん？」

木乃香さんが目をキラキラさせて爺に聞いていた。
使う気満々かよ。

「魔法世界の通販じゃ」

「よしって高いんやろ？ それ、魔法薬やし」

「わしが払つといてやろうぞ！ ふおふおふお」

駄目だこの爺、いきなり成長した木乃香さんを皆が見たらどう思うんだ？

前試した時なんかもバレだった気が

未来での話だから関係ないかもしれないけど、この状況をどうにかするのが先決だ。

「年齢詐称の飴玉はどうでもいいとして、今日はアーニャがこの学

園に通う日」

「うむ。もう一度言っておくが、アーニヤ君は君のクラスじゃ」
「それは知ってる」

木乃香さんもうんうんと頷く。

あんなだけアーニヤとじゃれ合ってたんだからわかるでしょ。

絶対ネカネいや、ネカネお姉ちゃんが仕組んだ事だ。

「アーニヤ君の出席番号は32番じゃ」

「あれ？ アーニヤはア行ですよね？」

「面倒になって最後にしたんじゃ」

いやいや、面倒ってどうみてもア行に追加して後をずらせばいいだけでは？と指摘してやるとなんて返答が来たと思う？

「こう見えても忙しいんじゃ」

「そうですか」

どうでもいいという平然な態度で関係ない言い訳が返ってきた。
……忙しい……だと！？ どうみても書類とか見当たらないのですか？

学園長の机の上には言葉とは裏腹にスッカラカン状態だった。

「おじいちゃんも一応、学園長やもんな」

「そうじゃろそうじゃろ」

「あはは……」

爺いえ、学園長……自分の孫娘から一応とか言われてますよ？

木乃香さんの言葉はどうみても褒め言葉ではないんだけど。

孫娘の言葉なら何でもいいのか？

苦笑していると学園長は机の引き出しから出席簿を取り出して、僕に渡してきた。

「これは？」

「アーニャ君を含んだ最新の出席簿じゃ」

「はぁ……どうも」

とりあえず確認っと。

適当にページを開けてみるとアーニャの出席チェック欄が追加されていた。

最後のページを見ると、32番の写真が追加されているのを確認。

確認した僕は出席簿を閉じて、学園長室から出る。

同時に木乃香さんも僕の後に付いてくる。

学園長室を出た後、木乃香さんは教室へ走っていった。

＼3－A教室＼

廊下でアーニャと会い、扉の前で待ってもらう。

何気に深呼吸をした僕は教室に入り、今日の重要な件を皆に伝える。

「今日から転入生が来ます」

皆がざわざわと騒ぎだす。

「先生、その子ってどんな性格してますか？」

「自分でどうぞ」

「先生の好きな子ですか？」

「それ、僕とどう関係するんですか？」

「ライバルが増えるかなあって！」

まき絵さんが別の意味で正解を当ててくる。

ライバルってまあ、当たってるね。

凶星なのはさておき、話を進めないで。

「では、入ってきてください」

言われたアーニヤが入ってくる。

邪魔にならない様、僕はアーニヤから少し横にずれる。

教壇の前に着いたアーニャは一礼してから自己紹介を始める。

「初めまして。アンナ・ユーリエウナ・ココロウアです。宜しければアーニヤと呼んで頂けると光栄です」

「へえ、アーニヤちゃんかあ」

「ってあれ？ 何か幼くない？」

「アーニヤは11歳ですよ？」

「11歳!？」

「コホン、言い忘れてましたけど、私とネギは幼馴染です。」

それと部屋はネギと同じ所です。そこの所を宜しくお願いします」

「ええええええええええええ！？」

「」
「」
「」
「」

アーニヤの発言にあやかさんを筆頭に叫んだ。

アーニヤの事を知る明日菜さん達は頭を抱える。

それはどうでもいいが、その所ってどういう意味だ？

どうみても挑発です、ありがとうございました的な雰囲気を漂わすアーニャ。

「また面倒なのが来た」

うむ、千雨さんの言葉が聞こえた。

様子を見ていると頭を抱えているようだ。

千雨さんとはそろそろ仮契約をしておいた方が良い。

あのイベントが起こるなら時間短縮したい。

「アーニャちゃん、私はまき絵って言うの。よろしくね」

「うん。まき絵」

「私は雪広あやかですわ。あやかと呼んでください」

「委員長ね」

そう言われたあやかさんが白く固まった。

アーニャ、もう知ってたんだ。

僕の幼馴染というから皆がアーニャの方に詰め寄ってる。表情が少し青いアーニャは皆の質問に答えていく。

「ふう」

「どうした？」

話しかけてきたのはエヴァだ。

僕の従者になってもらうかな？ 今日中に。

仮契約するのは千雨さん、エヴァぐらいか。

「アーニャの自業自得だなんて」

「確かに……それよりも授業つぶれるけどいいのか？」

「今日は授業なしでもいいですよ」

今日はHRが終われば、一時間目僕の授業だ。
アーニヤが転入してきたから授業潰してもいいだろう、と考えただけ。

「なら私は寝るぞ」

そう言って、エヴァは自分の席に戻った。

それから、アーニヤは半数の、主にあやかさんとまき絵さんの質問に答え終わった所でチャイムが鳴った。

チャイムが鳴った後、僕は大声で伝える。

「チャイムが鳴りましたので僕はこれで失礼します」

大声で言いきった僕は巻き込まれない様に逃げた。

アーニヤとの関係とか面倒すぎる。

逃げていく姿を他の人が僕の事に気付いたが極移を発動させた。
そのため、誰にも追いかけられる事は無かった。

放課後、僕や明日菜さん達はエヴァの別荘の中に来ていた。

「何で私までいるんだ!!」

千雨さんが何か騒いでいた。

無理もない。強引に僕が連れて来たのだから。

どうやって連れてきたかって？

簡単な事、誰もいない道で千雨さんが歩いて行く場所に極移用の魔法陣を貼ってこの場所へ転移させただけ。

「ネギ、今日は何をするんだ？」

エヴァがこの中の代表として聞いてきた。

いきなり強制転移させられたから無理もない。

木乃香さんは首を傾げつつキョロキョロと周りを見回していた。

「ネギ君、せっちゃんは？」

「……忘れてました」

「……せっちゃんが聞いたら絶対落ち込むえ」

「せ、せっちゃんって？」

訳も分からない状態なのに混乱もせず僕に聞いてくるアーニヤ。内心は驚いているようだが、声もちょっと震えてるし。一部いない人もいるが気にしない。

「アーニヤ、木乃香さんの親友の桜咲刹那さんの事ですよ」

「そうなんだ」

僕の答えを聞いたアーニヤは木乃香を見て頷いていた。どういう意味で納得したんだ？ この子は。今は気にしない方が良いのかな？

「ネギ先生」

「ハルナがいない……」

木乃香さんの背後から出てきた夕映さんとのどかさ。こちらもしきなりの事で状況についていけない事だ。

そろそろ教えるでしょう。

「千雨さん、エヴァンジェリンさん、僕の従者になっていただけませんか？」

[illegible]

「ネギ、本気か？」

「徙者？」

明日菜さん達は驚き、エヴァが顔を赤くして、千雨さんは従者という言葉に首を傾げていた。

6人だから驚きの声が周りに響く。

首を傾げている千雨さんに僕はこう説明した。

「千雨さん、仮契約をしてもらっただけですから」

「そうなのか？ 仮契約ってのは？」

冷静になっている千雨さんに木乃香さんが人差し指を立てて説明してくれた。

「仮契約ってその人とキスするんやで？」

「はあああああつ！？」

キスという単語で赤くなって叫ぶ千雨さんでした。

一体、頭の中でどんな想像をしたのやら

木乃香さんの説明は仮契約の内容じゃなくて仕方の説明だった。

千雨さんの顔が紅潮している所、僕は真剣な表情で伝える事にした。

「千雨さん、手伝っていただけませんか？　魔法を知ってしまったなら、それはもう運命でしかありません」

何のだよ、とアーニャ達が僕の方を睨んでいた。特にアーニャの視線が。

そんな黒い視線を無視して、僕は千雨さんの右手を両手で包み込むように掴み。

「お願いします。千雨さん。仮契約さえしてしまえば、もし魔法がバレても弁解が可能になるだけじゃない。

千雨さんがオコジョになる事もないんです」

「言ってる事は正しいんやけど……」

「うん。それって千雨さんとキスしたいだけじゃないの？」

「ネ、ネギィ」

木乃香さんも明日菜さんも縁起でもない事言わないで。

僕の名前を呼びながら黒いオーラを出しているアーニャがいました。すると、千雨さんが空いていた左手で僕の両手の上にそっと置き、口を開いた。

「ネギ先生、一つだけ聞きたい」

「何ですか？」

「もし危険な状況に陥った時、わわ、私を守ってくれるのか？」

「はい」

千雨さんの質問に笑顔と共に返した。

その返事を聞いた千雨さんは恥ずかしさのあまり俯いてしまった。恥ずかしそうに俯いてる千雨さんがかなり可愛く見える。

でも、この様子だと仮契約はエヴァからやった方がよさそうかな。

「わかりました。……します」

「じゃあ魔法陣を引きますか」

最後が小声で聞こえにくかったけど聞き取れた。

うむ、これで目標が一つだけ減った。

後はエヴァと仮契約だけだけど、前みたいに条件があるかもしれないな。

前の状況を思い出しながら溜息を吐いた。

「あ、カモがないや」

僕はこの場で一番重要な存在を忘れていた。

僕の仮契約魔法陣だと千雨さんのスカートの中覗けないや、とちよつと残念な気持ちになった。

まったく、前の時とはえらい違いすぎるネギであった。

第35話『千雨、エヴァと仮契約』へ。

第34話『アスナと明日菜とアーニャの歓迎』（後書き）

未来のアスナが逆行先の明日菜の中にいるという点が重要になってきます。

第35話『エヴァと千雨いえ、ちうちうの仮契約』（前書き）

今回、グダグダ過ぎかも。アーティファクトをちょっとオリジナル化。

気づいてる人もいると思いますが、感想を受け付ける（制限なし）にしています。

6月16日、ほとんどの話にあるアペアット↓アベアットに修正。web拍手で指摘してくださった方ありがとうございます。

第35話 『エヴァと千雨いえ、ちうちうの仮契約』

「あ、カモがないや。まあいつか」

スペースがある所に魔法陣展開。

この2人だからカモの魔法陣は不要だね。

「完成。エヴァンジェリンさんはどうするの？」

「マスター、心拍数が上昇しています」

「やかましいっていつか何時からいた!!」

「マスターが赤くなってる所を録画してましたが」

平然とした態度で答える茶々丸さん

録画って何に使うの？

「な、ななな」

「あははは、茶々丸さんも変わったわね」

「茶々丸さん、その服は？」

「え、えとこれは……」

「可愛いですよ」

「あ、ありがとうございます……」

僕が満面な笑顔で言うと、茶々丸さんが顔を赤くしていた。

茶々丸さんの服装が明日菜さんの着ていたメイド服そのものだ。
機械時代だから赤くなってるって分からない訳でもない。

「準備は出来ましたよ」

「うーん、仮契約すると何かあるのか？」

「こういうのが手に入るんや。アダアット」

「なっ!?!」

木乃香さんは千雨さんに見せる為、アーティファクトを解放。制服から巫女さんになった。

いきなり変化したのだから驚くのは普通だろう。

「カードから何かに変わると言う訳か。私の場合は何だ?」

「千雨ちゃんは興味を持ってる何かあるん?」

「わ、私は……」

「千雨さんは多分、パソコン系でしょう」

「ばそこん?」

正確には電子精霊だっけ? 忘れたけどそんな感じだったりする。電脳世界とかいうアレになんちゃらって僕自身覚えてない。

「だって千雨さんはネットア「わああああ!!」って言いませんよ」
「もろバラす気だっただろ!?!」

ちっ! ばれてたのか。

どうせ分かる事だからばらした方が身のためなんだけどね。まあいっか、後でばれた方が面白いとも言っし。

「ネギ先生、何か企んでませんか?」

「いえ、それよりも本題をやってしまいましうか」

「それならオレッチに任せとけ!」

どっから沸いてきたのか、カモの登場だ。

何時来たんだろうねえ、この生物は。

嬉しそうに魔法陣を展開して妙な事を呟く。

「さすがアニキっすよ。あの闇の福音を従者にさせてしまうなんてオレッチ誇れるッスよ!」

「ネギ、この下等生物、細切れにしていいいか?」

言葉と共に殺気を放つエヴァ

エヴァの恐怖を味わうカモは小さな体を震わせていた。

「駄目ですよ。カモは細切れにするんじゃないくて食べた方が美味しいんですから」

「ヒドイッス!」

「それよりも早くしたら? 待つのがめんどくさい」

腕組みしながら指をトントンとさせてるって事はイライラしてるな。夕映さんやのどかさんはなぜか黙ってるし。

「仕方がない。ネ、ネギ先生」

「ええ」

僕は千雨さんの前に立つ。

これ、結構恥ずかしい。

魔法陣の中に入り、いつも通りの展開なので以下略。そして、キスをする。

空中に仮契約カードが浮かぶ。

「これがカード?」

「そうですよ。アダアットで展開。アベアットで展開OFFね」

「言い方が変わってるんですけど」

「夕映さん、同じ説明飽きてこないですか?」

「確かに」

まあいいや、これで仮契約カードが増えた。
多重アーティファクトまでの近道か。
でもあれって、作ろうと思えば作れるよね。
とりあえず、今が大事だ。

「千雨さん、協力お願いしますね」

「嫌だって言っても無駄なんだろう？」

「無駄だな。魔法の事を知れば意味がない」

「のどかちゃんとか巻き込んでるから別にどうでもいいわ」

だんだんと変わってきてるね。明日菜さん

「こんなに集めて何か組織でも作る気なん？」

「組織って何ですか？」

「組織って言うよりもパーティっすよ」

前よりも強化されてるメンバーだね。

だけど、リライトとかうざったい事があるからね。
造物主の掟は僕に効く事は一切ないが……。

「ネギ、私とするんじゃないのか？」

恥ずかしくもじもじさせながら呟くエヴァ
かわいいなあ、思わず頭を撫でてしまうな。

「ってネギ！ 何をしてるのよ！」

「ネギ君」

アーニヤと木乃香さんが怒ってる様な表情で僕を見てきた。

気づけば僕はエヴァの頭を撫でていた。
相手も拒否してこないしそのままでもいいな。

「あはは……」

「ネギ、いつするんだ？」

「うーん」

「エヴァちゃんも何で撫でられっ放しなの？」

ハリセンを持った明日菜さんがエヴァに迫っていたが、横に避難していた。

ん、避難？ その理由はというと。

「……星光破壊」

「はい！？」

「っ……」

木乃香さんが防御完全無視、空間破壊できる魔法を撃ってきてました。

しかも、前より小さいので威力も速度も遅いのだが、効果は変わらないな。

だって空間にヒビ入ってるし、それを見たエヴァが顔を引きつらせながらも僕から離れた。

わかるよ。真祖の障壁でも関係なく無視できるもんね。

反則的な効果を持つ星光破壊が僕の方に迫ってきた。

「はあ、掌握」

こちらに向かってくる星光破壊を僕の魔力に変換、吸収した。
反則って言われても知った事じゃない。

遊びで星光破壊なんて撃つな、この別荘が消える。

「あっさり防がれると落ち込むんやけど」

「木乃香！？ 何をするんだ」

「ええ、だって」

「だってじゃない！」

話が進まない。

状況が混沌化してるから仕方がない。

「アーニヤとの買い物もあるんだから急いでくれませんか？」

「何ってああ、転入したばかりか」

「カモ」

「はいっさ！」

カモ君が魔法陣をもう一度展開させる。

契約魔法陣でってエヴァの姿はゴスロリだけど、パンツ意味ないし見慣れてるせいやらエヴァが恥ずかしがらないという理由が主にある。

「よし！」

以下略な事をしてから、エヴァと僕はキスをした。

「兄貴、これがカードっす」

空中にあったカードをパクっていたカモから受け取る。

「何だ？ ……これってやばいなあ」

絵柄が前と全く違っていた。

しかもこれは、20歳ぐらいの姿だった。

真祖から人間になった時の状態か、この話はエヴァに聞かせるかはわかんないよ。

それはともかく、僕が完成させた闇の魔法で作った2メートルの白い槍。

「あはは、はくおう白王の槍……」

誰にも聞こえないほどの小声でつぶやく。

白王の槍は僕が作った槍で、使うときは多分、あるかも知れないから許容範囲内には入れておいた方がよい。

事象の地平面に追放させる相手がいればの話だが。

ガノードをぶっ倒した後にできるようになった事だから、なぜできるのか、は僕自身が説明できない。

「これがエヴァちゃん？ 何かイメージとちゃうやん」

「確かに違うわね」

それを言っちゃいけないよ。明日菜さん、木乃香さん
夕映さんとのどかさんも頷かない。

「お前らな……」

「千雨さんとエヴァちゃんのアーティファクトってどんななの？」

「……アデアット」

千雨さんが言うのと、服装が変わり身長も小さくなっていた。

「って何だこれえ！？」

千雨さんは叫んでいた。

この姿はビブリオルーランルージュじゃん。
数センチの差程度だから気にする必要はないと思う。
でもこれって……コスプレ大会の時の姿だけ？

「小さくなつてると言ってもちよつとだけ、ね」

「数センチ縮んだだけやん」

「カード見るとき、妙な格好をした千雨ちゃんだよね」

「うん。そうやな」

千雨さんのカードに描かれていたのはビブリオルーランルージュの姿だった。

小さくなったと言っても年齢詐称薬で小さくさせたほどじゃないが……。

縮んだとか言いだすから千雨さんの表情がブルーになつてる。

「これ、元に戻るのか？」

「アベアットって言ってみたら？」

呆れ表情のアーニヤが千雨さんにタメ口してる。

「……アベアット」

光が全身を包み込み、光が消えると元の姿に戻った。

千雨さんはホッと安堵の息を吐いた。

「元に戻らなかったらどうしようかと思った」

「エヴァちゃんみたいな身長になるのが嫌やったんやな」

「木乃香、ケンカ売ってるのか？」

星光破壊撃った時もあったけど、木乃香さんはエヴァと何かあった

のか？

前と関係が全く違うからわかりにくい。

「エヴァちゃんのアーティファクトどうなの？」

「あ、ああ」

エヴァがカードをアーティファクトに変えた。
すると、白い槍に変わる。

本人は槍の先をじっと見つめていた。

「何でしょうか。この槍」

「私も知らん」

「夕映のアーティファクトでわからへん？」

木乃香さんが夕映さんに聞く。

「ああ！　なるほど」

さっそく実行するため、夕映さんはポケットの中からカードを取り出す。

アデアットと呟いた夕映さんの姿が変わった。

夕映さんの姿を見たアーニヤが妙な事を言いだした。

「ネギと仮契約したって事よね、これってネギの趣味？」

「アーティファクトはその人のアレだから、僕は関係ないよ？」

「そうやで、だったらウチのも違うやん」

木乃香さんがアーニヤにカードを見せる。

姿が京都の巫女服だった。

実家に居た時の影響かも知れんが、僕のせいじゃないぞ？

「へえ、何かいいなあ」

「夏だと暑いよね、巫女服」

「それよりも私の槍は？」

「わかりました。ちょっとしらべてみます」

夕映さんが本を宙に浮かし、検索していた。
うむ、非常識な辞典だな。

「名前は何て言うのですか？」

「ん？ 天の槍アマノヤリと書かれてるが？」

良かった。どうやら違うようだ。

でも天の槍って何？

槍の名称を聞いて頷く夕映さんが調べていたが、目を見開いて僕を見た。

説明してもいいのかわからない状態だった。

僕は夕映さんの隣で詳細を見してみる。

「……広範囲破壊の槍みたいです。魔力を上乗せする毎に威力も上がっていくらしいです」

「破壊の槍、ですね」

「私の考えていた完成版の闇の魔法を応用すれば誰でも勝てそうだ」
「考えてただけやろ？」

「確かにそうだが、ネギの強さが予想外だからな。私も闇の魔法を覚えようと思ってる」

エヴァはフツと口を歪ませた。やる気のようにだ。
もしかして、僕って妙なフラグ立てた？

覚えるのは良いんだけど、僕の闇の魔法完全版はエヴァの言う完成

版とまったく違うからね。

何処が違うのか、は後ほど見る機会があるよ……多分。

「それって一つだけなんですか？」

「アーティファクトだから無限に出せるんじゃないの？」

「でも明日菜、アレは某鍵みたいなタイプやないん？」

「某鍵って何ですか？」

のどかさん、それを聞いたらいけませんよ。

とか言いつつ、僕も良く知らなかったりする。

木乃香さんは知ってるみたいだ。

「某鍵ってのはな、キングんんんって何するんっ!？」

言おうとした木乃香さんの口を夕映さんの右手が塞ぐ。

「言っちゃ駄目です。問題が起きます」

「何の問題なん？」

「……えと、エヴァンジェリンさん、何本でも出せるのですか？」

聞いている方の疑問を無視してエヴァに問いかける夕映さん。

無視された張本人は夕映に無視された、とか嘆いていた。

それも無視するって夕映さんも変わってる。

反応したエヴァは横に首を振り否定する。

「いや無理だ。一本しか出ないな」

「投げて？」

「アホか、もし本当なら別荘が崩壊するぞ」

表情に青筋を立てて、槍からカードに戻した。

エヴァのアーティファクトも分かった事だし
そろそろアーニヤの方に行くとするか。

「アーニヤ、買い物行こうか」

「え、いいの？」

「気にしないでいいよ。急がないと後が面倒だから」

「ネギ、アーニヤちゃんの買い物行くの？　だったら私も付き合うわ」

明日菜さんとその横で頷いてる木乃香さんが付いてくる気満々だった。

うーん、4人が限界かな？

あんまり人数を増やしても邪魔なだけで効率も悪い。

頭の中で考えていた僕は答えを見出した。

「いいですよ。それじゃあ、アーニヤと僕と明日菜さんと木乃香さんでいいですね」

「ええよ」

「わかったわ」

「ちよっと待て！」

「あ、マスターが……」

いつの間にかエヴァの背後に茶々丸さんがいた。
本当にこの茶々丸さんは気配もなくいきなり現れる。
居なくなったりするからね、わかんなくなる。

「何ですか？」

「私も連れて行け！」

「エヴァちゃんには関係ないんじゃない」

「アーニヤちゃんはどう思うの？」

いきなり話を振られたアーニャは「え？」と困惑したが、僕を見てハッとなった瞬間、エヴァにビシッと指を差す。

「駄目！ 私の買い物なんだから付いて来ても何にもないわよ」

確かにそうだ。

アーニャの日常品を買いに行くだけなのにエヴァが付いて来ても何もない。

本当にそれだけだと思う。

「ふん！ わかった」

「マスターが諦めました」

「茶々丸、何が言いたい？」

「何でもありません」

プイっと横に背けて拗ねるエヴァとそれを見て、見守る様な笑みを浮かべている茶々丸さんがいました。

この時の茶々丸さんの表情を極めるのってかなり難易度が高いよ。

「夕映さんとのどかさんと千雨さんはどうしますか？」

3人の事を聞かなければいけない。

強引に連れて来たのだから魔法で送り届けなければ。

うん？ 人に見られたらどうするのかって？ そんな事は知らん。

「ネギ先生はアーニャさんの買い物に付き合うんですね」

「そうですよ」

「のどか、私達は例のアレをしないと駄目では？」

「ああ！ ネギ先生、部屋までお願いします」

例のアレって何だろうか。

のどかさんと夕映さんが何か考えてる？

だとしたら、木乃香さんみたいな星光破壊タイプかなってありえんな。

この2人に木乃香さんの考え方面に行く訳がない。

そんな事はまあいいや、千雨さんはどうするんだ？

「私か、私も部屋に戻してもらえればいいです」

「極移」

「おいっ！いきなり……っ!？」

千雨さんの足元に魔法陣を貼って自分の部屋に帰らせた。
強引かもしれないがお帰りになってもらった。

その後、夕映さんとのどかさんと別れて、一旦部屋に帰る事になった。

（ネギの部屋）

エヴァの別荘から帰ってきた僕達は買い物に行く準備をする。
難しい表情をした木乃香さんがこんな事を言ってきた。

「エヴァちゃんの別荘って1日経たな出られへんねやろ?」

「ああ、そういえばそんなルールが存在してましたね」

「ネギ君ってそのルール無視してるやろ? どうやってるん?」

言いたい事はわかった。

極移は元から次元だろうと無視できるから関係ない。
その転移法を教えるとアーニヤが噛み付いてきた。

「そんな転移魔法、習ってないわよ！」

「これは僕が編み出した転移だから」

「ネギの魔法って非常識よね」

「対消滅とかSFチックな単語もある訳やし」

対消滅は異世界に行った時、その光景を見て真似ただけ。
あの極移も高等技術的な科学世界の転移を真似ただけ。
それだけで真似る事が出来る僕も僕だが。

「どうやって編み出したのよ！」

「……それより早く買い物行かない？」

「アーニヤちゃん、そんな話は後にして、ね！」

アーニヤは軽くウインクする明日菜さんをジト目で睨み、相手の表情を見て溜息を漏らす。

「そうね、ネギにおごってもらいましょうか」

「何で？」

「給料入ってるでしょ？」

「……別に良いよ。使う事あんまりないし」

僕自身、教師としての給料は一切使った事がない。

今の残金7桁はあるんじゃないかな？

過去に戻る前のお金？ 無いよ、あの未来の学園から外は宇宙だも
ん。

宇宙で飛び回っても人が住んでる惑星なんて無い。
だから、お金は学園だけになった時、湖の中に沈めた。

「そういえば、カモは？」

「いなくても困らないんじゃない？」

「ウチもちょっと忘れる」

「それって酷いんじゃない？」

アーニヤが庇う様な事を言うが、とうとう2人にまで存在否定されるカモ、哀れ。

「そういえば、何で部屋に戻ったわけ？」

「何か用事があったような？」

「私の買い物でしょ！？」

声を張り上げるアーニヤ

そんなに買い物に行きたいのかい？

「忘れてたよ」

「ネギ君から言い出した事やろ？」

「と・に・か・く、行くわよ！」

この子はどうしても行きたいようだ。

顔に青筋を立てていたがまあ、気にしないでおう。

アーニヤを筆頭に僕達は街の方へ向かった。

※簡易な出来事ですので省略しています。

街で歩いていると、アーニヤが疑問を漏らす。

「食器、服とかどうするの？」

「アーニヤ、金を持ってるの？」

「持ってるわ。ネカネさんに貰ったから」

「いくら？」

「10万円ぐらいかしら？」

「ネギはどれぐらい持ってるの？」

「財布の中には15万ぐらい？」

「子供が10万も持ってるなんてね」

「ネギ君は別にええやん」

「何だよ」

「ネギ君は大人っぽいやん」

「……どこがよ！」

「そう言いながらネギと仮契約してるじゃん」

「それより買い物」

「レッツゴー」

別の場所。

「千雨ちゃんのアートファクトって結局何なの？」

「ああ、本人が言わない限り出てこない式ですよ」

「そうなんや」

「今度、能力は見れると思いますよ」

「あの姿って何なの？」

「それは触れてあげないでください」

「何、ネギは知ってるの？」

「知ってますよ」

「教えてえな」

「……インターネットで『ちう』という言葉を検索すれば分かります」

すよ」

「帰ったら調べてみよう」

あ、教えてしまったよ。

よし、こうなったら今度、千雨さんの部屋に突撃だ！

僕はそれだけを心の中で決心した。何の決心かは学園祭の時に分かる。

「そういえばネギ君の好みって誰なん？」

「え？」

「木乃香、聞くのやめたら？」

「明日菜も気になるんやろ？」

「うっ、気にはなるけど」

「明日菜も木乃香もアホな事言わなくていいから、買い物!!」

「仕方がないな」

「そうね、さっさと終わらせたら休憩したいわ」

「アーニャ、面倒だけど、本当に面倒になってきてるけど終わらせようか」

「ガーン、そこまで私の事」

「いや、まあ行こうか」

「ああ！ 話し逸らした！」

そんなやり取りがあったとき。

その後、色々あったが、無事買い物が終わりました。

※省略出来事、終了。

くネギの部屋く

部屋に戻った僕達を迎えたのは、なぜかボロボロになっているカモだった。

何があった？

「アニキ、オレツチ酷い目にあったッス」

「酷い目って？」

「水道管に流されたり、拳銃を持った女に乱れ撃ちされたり、お嬢様と寂しく呟いてた女の愚痴を聞いたり」

「悲惨な目にあったんやな」

木乃香さん、そんなこと言いますけど、最後の言葉はどうみても刹那さんにしか見えないと思う。

ってか、刹那さんはカモに愚痴を言うほど寂しかったんですね。

うむ、やはり木乃香さんと刹那さんの関係って変わり過ぎてるな。誰のせいだろう。

「水道管って……カモ、体洗ってきなさいよ」

「へいへい」

薄汚れてるカモは明日菜さんの言う通り、この部屋から出て行った。どうやって扉を開けたかなんて聞かないでほしいな。

「それにしても疲れたわねえ」

アーニヤは赤いソファアに体を寝かせる。

よっぽど疲れたんだろう。無理もない。

「ところで、水着も買った意味は何？」

買い物してる途中で、水着も買おうって話が出ていた。

買うために立ち寄った店、女性用服屋の中に、夏用の水着があった。明日菜さん達が購入してたから疑問に思った。

「決まってるじゃない。委員長に誘ってもらうのよ。ネギのためならOKするでしょ？」

「あやかもネギの事狙ってるの？」

「委員長はシヨタコンやからなく」

「それを言ったら木乃香もシヨタじゃない？」

「うっ、でもネギ君は別や」

「そ、そうね」

照れながらも微妙な反応をする明日菜さん
何をどう言えばいいのか、分からないみたいだ。

「仮契約した子がまた増えたわね」

「何で！ ネギがこんなにモテるのよ」

「知らないよ」

本当に知らない。

僕自身、自分がそんなにモテる訳がないと思ってた。

だって、僕は10歳の子供だから。

エヴァが言うには父親が原因だと言ってた。

こんな所まで遺伝しなくてもいいのになって思ったけど多い方が良かったら。

「話は変わるけど、そろそろ学園祭よね」

「学園祭？」

「何それ？」

「二人とも初めてやったな」

いえ、僕は初めてじゃないよ？

でも懐かしいな。何百年ぶりだ？ 学園祭という言葉聞くのは

「年に1度だけやられる学園最大のイベントや」

「巨大な祭りみたいなものよ」

「この学園自体が大きいからね」

学園祭か、武道会、超さんと別れる出来事。

のどかさんの告白とかあったなあ。

僕とアーニャに詳しく説明してくれた。

でも、この説明ってアーニャだけだと絶対してくれないな。
教えてくれてる2人の視線が僕に集中してた。

「楽しみだわ」

「今年はどんな出し物があるかしらね」

「そうやなあ。ウチはネギ君とデートしたい」

「ちよっとっ!!」

「木乃香、抜け駆けっ!？」

アーニャも明日菜さんも素直になり過ぎ。

うむ、タカミチの事がないから歴史の流れが変化するのか？

そこはどうなんだ？ もし変化するなら学園祭中だけは変わってほしくない。

「今はそんなこと考えても仕方ないか」

学園祭で面倒事の予感がした僕は不安な溜息を吐く。

とりあえず、目の前の3人に夕食を伝えた。

だが、ネギの言う面倒事が現実になる事を、このときのネギは思いもしなかった。

第36話『学園祭編1』へ

第35話 『エヴァと千雨いえ、ちうちうの仮契約』（後書き）

正式にはまだ学園祭編ではありませんが、学園祭前日まで数十日前って所です。

一応、この話で原作8巻終了ですので、そう言う事に。

千雨のアーティファクト能力は後ほど詳しく(?)出てきます。
アクセス数見たらアク100万ユニアク10万突破してますね。
時間があれば、異世界編（ネギが別の世界へ）を公開したいと思います。

何処の世界が良いんでしょうか、感想などに頂ければ光栄です。
感想などお待ちしております。

第36話『学園祭編1・後20日』（前書き）

学園祭編とか言いながら関係の無いイベントですが、学園祭や魔法世界、今後の展開の鍵を集めているような話です。

第36話『学園祭編1・後20日』

朝になった。

昨日はアーニヤの買い物に付き合っていた。
その疲れのせいか、いつもより早く眠った。

「ふわあ」

僕は目が覚めてしまった。

時計を見ると、6時と表示が出てる。

いつもより早く起きてしまったようだ。

2段ベットの方を見ると明日菜さんが制服姿で寝ていた。
新聞配達に行き、戻ってきた時、面倒だから制服に着替えたって所か。

「木乃香さんも寝てるんだ。まあいつか」

自分の所から赤いソファーに飛び込んだ。

ソファーに体を預けてポケットの中からカードを取り出す。
今まで契約してきた人の分だ。

「そういえばアーニヤはどこで……ってそこか」

2段ベットの隣に1人分のベットが追加されていた。

ベットの空間は僕が広げたので問題はない。

そっちはどうでもいいや、とカードをテーブルに置く。

「前と全然違うな」

仮契約したメンバーは明日菜、木乃香、刹那、夕映、のどか、千雨、エヴァ、アーニャ

ハルナさんと朝倉さんは保留の形だ。そうだけ？

「まあいいや、とりあえずは8人、そういえば学園祭まで何日だ？」

日付を調べると、あと20日だった。

てっきりあと数日だと思ってたよ。

過去なんだから日付が同じなんて事、今更思う気にもなれない。

この部屋に地下の事といい、もう訳が分からん。

そんな事を考えていると、僕の肩に優しい感触がした。

「おはよう、ネギ」

「明日菜さん、おはようございます。寝ていたんじゃないんですか？」

「そうなんだけどね、時間も時間だし」

「でも、木乃香さんがまだ」

「ウチがどうかしたん？」

「え？」

「ええ？」

いつの間にか僕の隣に木乃香さんがいた。

心配が感じなかったのはきっと起きたばかりだからだろう。

この部屋では安全と分かってるから気を抜いてるだけ。

パジャマ姿だったから今起きたのかな？

「こ、木乃香、いつから」

「ネギ君と明日菜の声がしたから目が覚めたんやけど？」

「アーニャちゃんを起こす？」

「ほっというてあげましょう」

「いや、起こした方がええやん？」

「仕方がないですねえ」

僕は仕方がなく、仕方がなくアーニヤの寝てるベットの前まで移動する。

寝息を立てて、なんか嬉しそうな表情をしてる。

良い夢でも見ているのかも知れん。

なら、夢の中を悪化させてあげよう。

邪魔をしてやろうと決めた。

僕の全身と同化している権限の鍵を起動させる。

アーニヤの額に手を置く。

「悪夢を見て起きろ」

呟いた瞬間、アーニヤの眼がぱつと開くと同時に涙が出ていた。

何でそんなに泣きそうなのか理由を聞いてみよう。

「どうしたの？ アーニヤ」

「な、何でもないわよ！」

「いいじゃないか、僕がアーニヤの夢を弄ったんだから」

「アレってネギのせいなの！？」

「そうだけどどんな夢を見たの？」

そう言うと、アーニヤがベットから出て、青いソファアーに座り

「そんなのどうでもいいでしょ？ 今はまだ6時じゃない！」

時計を見るなり、損した様な気分になっていた。

無理やり起こされたら誰でもそうなるな。

僕だって無理やり起こされた時、魔法波でぶっ飛ばしたし。ちなみに、その時の損害は見た目20歳のネギで雷の暴風2発分を充填させた程度なので3、4つの国が消滅した。

「そういえば、学園祭準備期間はそろそろや」

「準備期間中はその時しか食べられない物もあるしね」

もうそんな時期か、分かっていたけど超さんとの対面も早いな。

「学園祭があっても修行はさばらないでくださいね」

「わ、わかってるわよ」

「う、うん」

「木乃香と明日菜ってネギと修行してるの？」

ボーっとしていたアーニヤが顎に手を当て質問してきた。

「エヴァちゃんの弟子やし」

「あ、でもネギの弟子でもある訳だし、そうね」

「最近エヴァちゃんのばっかやけど」

「ふーん」

他人事のように理解してるアーニヤ。

けどね、アーニヤも他人事じゃないよ？

「アーニヤも受けるんだよ？」

「ええ!？」

「夕映とか受け取るしな」

「アーニヤは夕映さん達よりちょっと強いだけだよ？ 強くならな
いと置いて行かれるよ？」

「あ、ああ……」

アーニャは置いて行かれるという言葉に固まった。
おそらく僕から見限られると思っっているのか？
そんな事をする訳がない。

「ネギ君から置いて行かれるんは嫌やな」

「でもどうして強くならないと駄目なの？」

「明日菜さんはマジックキャンセラーだし、木乃香さんは修学旅行の時の理由だし、ね」

時に明日菜さんとアーニャはまずい。

だって、魔法世界に行った時、一番に目を付けられるからな。

あの時は助けるので必死だったが、

今となってはだるい、めんどい、自分で脱出してくれ、と思っ
てしまふ。

「魔法無効化は魔法使いの天敵だけど、明日菜が持ってるなんて」

「だから、明日菜さんミサイルができるんじゃないか」

「あれは二度とやめてほしいわ」

「もうやりませんよ。飽きましたし」

「飽きてなかったらやるんやな」

「当然です」

「ううゝ」

ネギの答えに頭を抱える明日菜さん。

しばらく時間が経過する。

僕は久しぶりに走って学園に向かってます。
もちろんスピードは滅茶苦茶落としてる。

木乃香さんが急に立ち止まった。釣られる様に僕達も立ち止まる。

「これって作りもんやろ？」

「恐竜、作りものにしてはすごいですね」

目の前には数メートル以上の恐竜みたいな物体があった。
あれ？ 20日前なのにこんなものがあるのはどうして？
うーん、多少のズレはあるのか。

だが、恐竜の作り物がこちらに倒れてきた。

「ちょっと!？」

「どうするん？」

恐竜なる物を倒れてくる前に軽く回し蹴りを放つ。
ぐらっと勢いよく揺れて元の位置に戻った。
その光景を周りの生徒達が見ていた。

「すげえ！」

「子供先生がでかいものを蹴ったぞ」
「キャー!!!」

周りがざわめく。

それはそうだろう、子供が軽く巨大な物を蹴り飛ばしたのだから。

「面倒ですね」

「急ごう！」

騒ぎが始まる前に僕達はこの場から立ち去った。

「ここまであれば大丈夫ね」

「僕は向こうですので」

「ネギ君、またな」

木乃香さん達に手を振ってから職員室の方へ急いだ。

職員室に着いた僕は自分の席に座り、深く考え込む。

多少のズレは問題ない。

この頃に宇宙のどこかでガノードが権限の鍵を探していたらしい。

反応があるはずの存在もないみたいだからガノードはありえない。

それが無いとすると、未来は別ルートに向かつてるようだ。

別にガノードなんて居なくて良いけどね。

あいつ、全魔力放出で3つぐらいの惑星消せるんだもん。

戦った時、光化しなかったら終わってた。

ええと、光化っていうのはだな、雷化もできたんだから雷より最強だろう光になる修行をしていた。

すると、偶然出来てしまったのだ。常時雷化とは全く違う能力になったが…

それはともかく、僕の体験した未来と違うってのは楽しそうだ。

「まいつか、今考えていても仕方がない。……学園祭の資料を」

僕は机の上に置いてある学園祭の書類を見ていた。

今回もお化け屋敷か何かなんだろう。
バラバラに散らばってる書類を整理して、机の引き出しの中に入れた。

「ネギ先生」

「どうかしたんですか？」

声をかけてきたのはしずな先生だった。

「学園長が呼びですよ？」

「わかりました」

一体何の様なんだ？ あの時爺は。

そんな疑問を抱きつつ、学園長室へ向かった。

「学園長室」

いつも通り一人しかいなかった。

だいたいここはそんなに来る所じゃない。

この時期に呼ばれた記憶はほぼ無いんだけど……。

「何ですか？」

「よく来てくれた。ネギ君」

「はあ」

年の割には元気のいいおじいちゃんだ。

今度は何を企んでいるんだ？

そのおじいちゃんが髭を触りながら

「実はのう、これを渡しておこうと思っのう」

「渡しておこう？」

「これじゃ」

ほおほおと薄気味悪く笑いながら手のひらサイズ並みの瓶を渡してきた。

瓶に書いてあるタイトルを見たら年齢詐ってちよつと待て！

「何でこんなのを持ってるんですか！？」

「木乃香のために問い合わせて速達でゲットしたんじゃ」

「でもこの薬ってどれぐらいの効果なんですか？」

ちよつと可能性だけ考えてみた。

もし、この薬1粒で20歳までなれるんだとしたらこの薬は重要性を持つ。

20歳の姿になれば100%の力を出す事が出来る。

考えていると、学園長が可能性を潰してくれた。

「一粒で大体8歳じゃな。ネギ君に飲ませれば18歳じゃから問題ないぞ」

「二粒飲むとどうなんですか？」

「効果が上乘せされるタイプじゃないからのう。そちらのは時間がかかるし」

「さ、さいですか」

18歳、か。

それでも60パーセントの力と闇の魔法コントロールはできるからいっか。

頷いて決断した僕は学園長から瓶を受け取りポケットの中に入れた。

僕は年齢詐称薬・8歳版を手に入れた！　ってそうじゃない。

「別の用件は？」

「うむ、それだけじゃ」

「はあ……わかりました。それでは失礼します」

学園長に背を向け、ここから出る。

これを渡すためだけの用件とは思いつかなかった。

この世界、完全に歪み過ぎてるんじゃないのか？

歪んでるせいで、妙な存在が修正しなければいけません、とか言つて戦うのは勘弁な。

溜息を吐いて、ノコノコと自分の持ち場へ帰った。

〈教室〉

あれから時間が経過しました。

担任としてのホームルームを終わらせた。

大した出来事もなく、妙な騒ぎもなく終えた今日は刹那さん達を連れてっと考えていると

「ネギ先生！」

「あやかさん……」

いつの間にか僕の左手をあやかさんの両手で包み込まれていた。暖かい。

「明日の放課後、私の別荘に行きませんか？」

「別荘？」

「ええ、せっかくだすから夏の思い出を」

ああ、あれってアスナと喧嘩してた時の海か。

「委員長、私も誘って」

「あ、私も！」

「委員長、抜け駆け！」

どうやら、前の様にクラスの半分以上が付いてきそうだ。

あやかさんが顔を引き攣らせてまき絵さん達を見て溜息を吐く。

「仕方ありませんねえ、明日菜さん達はどうするんですの？」

「え？ 私は……」

いきなり声を掛けられた明日菜さんはエヴァをチラツと見る。

修行の事か

だが、エヴァが明日菜さんの前に出てこう言った。

「私も参加するぞ」

「じゃあ私も」

「ウチも参加すんで」

これでいつものメンバーが来る事が決定。

でもあれ？ アーニヤが黙ってる

「アーニヤどうしたの？」

椅子に座ってるアーニヤに話しかける。

表情を見ると難しそうに考えていた。

「……いいの？」

「え？」

「あゝ、だから！」

アーニヤが僕の腕を引っ張って小声でつぶやく。

「修行は？」

「明日菜さんも行くみたいだから」

僕の返答に呆れ表情のアーニヤは委員長に指を差し

「私も行くわ！ その別荘広いんでしょうね！」

「当然ですわ！ 雪広家の別荘ですもの」

「じゃあいいわ」

よし、アーニヤも行くんだな。以前より一人多いだけだ。

時期がズレまくりなんだけどどうなってるんだ？

それはいい。

後の事を考えれば、巻き込まれるのは勘弁だ。

「僕はこれで失礼しますね」

誰にも気づかれず、この場から逃げた。

く男子寮く

教師としての仕事を終わらせた僕は小太郎の住む男子寮に来た。

あいつ、今何をしてるんだろう、とほんのちよつとだけ気になり、
今この場にいる。

「ここか、小太郎は」

中に入ると、小太郎の気配を感知できた。
なぜここまで来ないと感知できないんだ？

妙な術でも身に付けたのか、と楽しみになってきた。

僕は影の中に入り込み、小太郎の所まで移動した。

影の中から僕はさっそく小太郎と対面するのだが……。

「……白くなってる」

目の前の小太郎がまるで某ボクシングの格好で燃え尽きていた。

これだと気配が探りにくいにも無理だな。

とりあえず、僕は魔法で水を生み出し、小太郎の頭からドバツとかけてあげた。

すると小太郎の色が正常に戻り

「つめてええええええええええ！？」

と地面にゴロゴロと転がっていく。

「そんなに冷たかったかなあ。たかが2、3度程度の水だよ？」

氷やマイナスを行く物体よりマシでしょうが。

僕が耐えられる温度はマイナスはさあ？
だし、プラスも太陽以上は試した事ないから限界知らない。

だからって実験して『ネギ先生は（以下略）でお亡くなりになりました』ってオチはしたくない。

「いきなり何すんねん！」

「あ、やっと気づいたんだ」

「水ぶっかけんな！」

「いやあ、どうして白くなってたのか知りたくてね」

まるでこの世の終わりだ！と絶望してる姿だったからつい、ね。
それを聞いた小太郎はうつ、と青ざめていた。
何に対してそうなったのか答えを待つ。

「勉強について行けへん」

「何……だと!？」

ここの小太郎はアホなのか？
まあ、小太郎自体は馬鹿だしドジだしアホだけど勉強はギリギリで
きてた気もする。

「くそっ！ 真剣に勉強もしとけばよかったな」

「なら僕が教えようか？」

「ホントか！」

助けてくれ、という眼差しで僕を見てくる。
絶望的な表情にゾクゾクッと来た僕は頷き、

「いいよ。そのかわり、この後付き合ってもらおうよ」

「俺、そんな趣味は無いで！」

「違うって……修行だよ、修行！ 小太郎も強くなりたいでしょ？」

修行という言葉に反応した小太郎は腕を組んで考える。
何を考えているのか大体の事は予想できる。

それぐらいしてくれないと木乃香達にすら負けそうだ。

木乃香さんは例外で良い気がする。星光破壊とかいう非常識の塊を生み出したのだから。

僕が使用すれば、世界の1つや2つ軽くってそんな話はどうでもいいな。

とにかく、小太郎のレベルも上げとかなないと魔法世界でさよなら状態だ。

答えが決まったのか、小太郎は口を開く。

「いいで！」

「じゃあ勉強しようか」

「ああ」

テーブルの上に勉強一式を置き、小太郎の向かい合わせて勉強を教える事になった。

途中、わからないとか寝言をほざいたから魔法の矢でお仕置きしておいた。

……数時間後

窓から見える空は真っ暗だった。

よく考えてみると当然だ。放課後は既に3、4時過ぎになっていた。小太郎の勉強に付き合っていると夜になるのは当たり前。

空の光景を見てエヴァの別荘に行っていない僕はエヴァ達の現状を想像して青ざめた。

「明日菜さん達、怒ってるだろうなあ」

「ネギ、お前本当に教師やったんやな！」

「失礼だな」

「普段のネギを見てると有りえへん！」

全くその通りです。

これでも外時間で言うとなんて1000歳なんだから

僕の時間別荘や異世界分も含むと何歳か知らんが。

「もう夜や」

修行時間が無くて嘆いているようだ。

小太郎のせいなんだけど仕方がない。

奥の手を使うため、僕と同化してる権限の鍵を起動させる。
起動させるというよりもそういう機能を起動させる意味ね。

「世界の修正力削除、時間逆行3時間前指定、場所、現在地。記憶
継承ネギの関係者のみ始動」

0コマ1すら経過せずに言い終わった瞬間、権限の鍵が発動し時
間が巻き戻る。

窓の景色が暗いから夕焼けになった。

いきなりの現象に小太郎が驚く。

「どうなってんねん！」

「さあ……」

説明が面倒だから、しらばっくれる事にした。

この時間逆行って今の僕だと権限の鍵使用じゃないとできない。

僕は権限の鍵を常時警戒モードに切り替え、小太郎に聞く。

「小太郎、修行しに行く？」

「ええで、何か知らんけどラッキーや」

嬉しそうな表情で拳を突き出す。
じゃあエヴァの別荘に行こうか。

「行くよ」

「あの転移やな？」

小太郎の口ぶりからすると、知ってるみたいだな。
興奮してる小太郎を見て苦笑いした僕は魔法陣を地面に敷き、一言
だけ呟く。

「極移」

僕と小太郎は魔法陣と共にこの場から消え去った。
残されたのはその反動でエンピツが転がる音だけだった。

第37話『学園祭編2・後19日、修行とうゝみ』へ

第36話『学園祭編1・後20日』（後書き）

次の話は題名通りで、学園祭編や今後の魔法世界編の（かなり小さい欠片程度の）フラグが存在します。

原作の年齢詐称薬は別に出ています。

後、永遠の力を持った現実憑依者（なのはSS、ユーノ憑依）の方もよろしく願います。

第37話『学園祭編・その2 後19日 千雨の修行』(前書き)

このSSは明日菜、木乃香だけでなく千雨も原作以上に調整
それは恋愛感情も含みます。

予定していた別荘での海イベントは次話。

第37話『学園祭編・その2 後19日 千雨の修行』

権限の鍵を持つ者は選ばれし存在にならなければいけない。

選ばれし存在になった者は権限の鍵を自由自在にできる。

だが、権限の鍵の本能は隠された裏■■だ。

もし、権限の鍵の■■を使いたければ、■■者に選ばれなければいけない。

■■者は■■なる■■、それは■■■■そのもの

元の■■を止め、■■■■という■■■■になるだろう。権限の鍵を生み出した■■■■より。

くエヴァの別荘く

僕と小太郎はエヴァの家に入る。

エヴァ達は別荘の方に行ってるから誰もいない。

「おい、人の家に侵入したら」

「何を言ってるの？　ここはエヴァの家だからどうでもいいの」
「へえ」

訳も分からず表情を引き攣らせた。

そんなアホを無視して、地下の方へもぐり込む。

奥の方へ行くと、別荘の入り口があった。

「この中に入れ」

「魔法陣を踏めばええんやな？」

「いいからさっさと逝け」

「おい！」

後ろから小太郎を前に蹴り落とす。

反動で前にこけそうになったが魔法陣が発光し転移していった。

「さて僕も行きますか」

魔法陣に踏まず、極移で明日菜さん達の所へ向かう。

最初っからそうしろって言われても小太郎にはここを知ってもらわないとな。

そういう考えを持っていただけ。

くエヴァの別荘く

転移してきた僕と小太郎君はさっそく移動しようとするが、小太郎が震えていた。
どうした？

「どうかしたの？」

「広いなあ！」

興奮して尻尾を振ってる子犬の様だ。

「どうでもいいからエヴァの所にいくよ」

「ちょっと待て！！」

興奮してる犬を持ち上げ、人の気配がある場所までぶんなげた。一応、力は大分制限かけてる。それでもマッハは余裕で突破する。僕から見て歓喜の声を叫びながらエヴァの方へ到着したっぽい。地面か柱か木にぶつかった様な轟音が聞こえたが気にしない。この程度でお亡くなりになるぐらいなら放置するだけだ。

「そんな事言ってる場合じゃない。行かないと」

明日菜さん達がいるであろう場所に向かった。

「エヴァちゃん、私、雷の暴風って撃てないの？」

「なぜだ？」

「だってネギと……」

最後の方は小さい声のためよく聞こえない。僕が到着したらこんな話が展開されていた。ちなみに、小太郎の事は放置されている。

「うわ、誰も小太郎の事触れようもしない」

「あ、ネギ君！」

「部屋に戻らなくて良いんですか？」

「ネギ君に追いつかなあかん」

木乃香さんがやる気になっている。

明日菜さんはエヴァに叩き込まれてるみたい。

見てみると、ハリセンで叩き込もうと振り落とすが、直線的な攻撃ばっかで防がれたり、横に移動したりして回避する。

単純な攻撃は読みやすいともいうし。

「あ、当たらない」

「当たり前だ。相手が読めないぐらい早くないと回避されるだけだぞ」
「だったらこれならどう？」

明日菜さんが咸卦法を全力で使う。

今の咸卦法で大丈夫か？

前より強くなってると言ってもエヴァは封印なんて無い。

「あ、明日菜諦め悪いなあ」

「また回避されてるし」

同じような光景だった。

一つだけ違うのは先ほどと速度が違うだけ。

同じ事を何度も繰り返していると明日菜さんが息を荒くしていた。

「エヴァちゃん、当たってもいいじゃない!!」

「アホか！ 真祖の障壁すら無視する奴の攻撃なんて当たったら死ぬわ！」

「吸血鬼なんだから死なない気が」

「そういえばアーニヤは何そんな所で寝てるの？」

エヴァが明日菜さんを鍛えてる逆方向にアーニヤが倒れていた。

まるで屍の様だ。

「エヴァちゃんと一戦やっただけや」

「ふん」

倒れているアーニャを見ていると悪戯したくなった。
でも背後から視線を感じた。

「何で千雨さんがここにいるの？」

制服姿の千雨さんがいた。

その表情はなぜか怒ってるかのようなのだ。

「もうちょつと説明聞かせろ。後、仮契約というのをしてるんだから関係者だろ？」

「千雨ちゃんもネギ君に惹かれとるん？」

「ち、違うわ！！」

木乃香の勝手な言葉で赤くなって否定する。

「連れてきた趣旨は？」

「決まってるだろ？ あのコスで魔法使えるようにさせるんだ」

「ああ、それは面白、じゃないアーティファクトだけじゃなく中身も強くさせる方が良くいかも」

千雨さんを鍛える事か、もう少し後で鍛えたかったんだがまあいいか。

早めに鍛えて強くさせる方が得だ。

「千雨ちゃんに習わせる魔法は何するん？」

「雷、火、水、風属性の魔法かなあ」

「魔法少女ならそれぐらいが普通だな」

「マスターは日本の魔法アニメを見てます」

初めて聞いたよ、エヴァがそんな趣味を持つなんて。

魔法少女ビブリオンを見てたのか？

だが、ネギの考えが当たっていると分かる。

「魔法少女ビブリオンの技を」

「ちょっと待て！ 知ってるのか？」

「当然です。マスターは設定集も購入してます」

「余計な事言うな！！」

茶々丸さんに八つ当たりするエヴァ。

向こうは向こうでやってくれ。

とりあえずはだな。千雨さんの修行プログラムを考えなきゃな。

「千雨さん、アーティファクト展開してください」

「あ、ああ。アデアット」

呟いた千雨さんの姿がビブリオールランルージュに変えた。

何度見ても露出が多いですね。

「よし」

「え？」

僕は魔法の1矢を千雨さんに撃った。

反射神経で体を庇うが、魔法陣が浮かび魔法の1矢を飲み込んだ。

「あれ？」

「どういう事なん？」

「そういう事か」

「どういう意味？」

「あれは自動で展開してくれる魔法防壁だな。今の見てると飲み込むという事はかなり優秀な防御を持つな」

明日菜さんと木乃香さんと千雨さんがエヴァの説明に頷く。

飲み込むは防壁なんだろうか？

突っ込んだ方が負けな気がするから何も言わない。

「でもええなあ。ウチのはないし」

「私もないわよ。ハリセンだし」

「大剣になるから武器としては強い」

「それでもよ」

「じゃあ、明日菜さんは僕と闘って」

「それは嫌！」

はつきりと、返事も早く言われた。

顔も青ざめてるし、何が原因なんだ？

「どうしてですか？」

「ネギ君って魔法の射手を大量に問答無用で撃ってくるやん」

ふわふわと空中に浮いてる木乃香さんの言葉に頷く明日菜さん。

「えー、そうでしたっけ？ たかが1000ずつですよ？」

「ネギって1000も撃てるわけ？」

その辺にゴミの様に倒れていたはずのアーニヤが驚く。

何時起きたんだよ、この子は。

「そうだよ。エヴァンジェリンさんだってその気になれば撃てるでしょ？」

「闇の福音と呼ばれてるんだもんね。まあ、修行の時は氷ばっかだけど」

「たまに闇の吹雪やけど」

「得意な属性がそれなんだから仕方ないだろう」

確かにエヴァの属性はそうだろうね。

それは未来でも並行世界でも何も変わらない。

じゃあ、僕の得意な属性は何か聞いてみようか？

「僕の得意な属性は何だと思います？」

「ネギは風でしょ？」

「ウチもそう思うで」

「あ、私も。だって雷の暴風をよく使ってるし」

「というか私はどうすれば？」

アーニャ達は僕の魔法を見てそう答える。

いきなりの話に混乱して、というか置いてけぼりの千雨さんは首を傾げる。

メガネ姿ではないので、そういう仕草がかわいかったりするが。

「その正解は後で答えますね。千雨さん、魔法を使ってみてください」

「どうやって使えば……」

そのキャラのステッキを別の方向から見たり振り回したりしていた。あれ？ 電子妖精が出てこないなあ。

「千雨ちゃん、そのキャラクターの呪文を言うんやないん？」

「……マジで？」

「多分そうだろう。よし、やってみろ！」

「マスター……」

呪文という言葉聞いたエヴァは目をキラキラさせていた。

子供のようにはしゃぐ自分のマスターを見つめる茶々丸さん

呪文を言え、と言われた本人は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

「本当にやるのか？」

「普通に修行しましょうか」

「……ネギ、こいつを習わせろ」

どっから持ってきたのか設定集を数冊ほど僕に渡す。

受け取った僕はパラパラとページを見たが、笑顔で否定する。

「うん、無理！」

エヴァに返却した。

「いや、お前ならできる！」

「魔力の種類も違うし、呪文形式も理解でき……る方法はあるけどぶっちゃけ面倒くさいです」

権限の鍵を使えば、千雨さんの構造を改変させて使用することはできる。

魔力だって馬鹿みたいに改造できるけどそれは最後の切り札として置いておきたい。

また今度にしましょう、とエヴァに言ったら、素直にわかったと言

って設定集を茶々丸さんに預けた。

「夕映さんのどこかにしたようにしましょうか」

「ユエやのどこかにしたのって？」

状況が飲み込めないアーニヤは僕に聞いてくる。

明日菜さん達はああ。とわかったように頷いた。

「潜在能力を引き出すだけです」

「へえ。何か胡散臭い」

「実物を見れば驚くわよ？」

「そう」

疑うような視線で僕を見る。

「じゃあやりましょうか」

前みたいに詠唱するのは面倒だから、権限の鍵を右手に出現させた。その右手に持ったモノを千雨さんのお腹部分に入れた。すると、千雨さんの表情がピクツとなった。

「こ、これ……刺さってる？　すごくヤバい感じるんだけど」

「大丈夫ですよ。実際は魔力に刺してるだけです。ちよつとだけ妙な気分になりますが我慢してください」

「あ、はい」

素直に頷いてくれた。

妙な気分、我慢と言うが実際は快感だから我慢も糞もないんだが。それはともかく、僕は目を閉じて権限の鍵を起動させる。

「潜在魔力解放」

その言葉と共に鍵を深く入れる。

「あ、ああ！　くっ！」

声を上げる千雨さんの頬が赤くなっていた。

全身に電撃でも入ってくるかのような感覚だろう。

え、どうしてわかるかって？

権限の鍵発動させてるのは僕の魔力、生命力だよ？

それを千雨さんに入れてるって事は同化してるようなモノ。

だから、向こうの感覚が伝わってくるだけの事。但し、向こうがこちらの一切わからない。

「ネ、ネギ先生、ま、まだですか？」

「これで終わりです。　魔力の能力解放完了、権限の鍵停止」

目を開けると同時に権限の鍵は僕の中へ消えた。

やっと終わった、と息を荒くさせながらその辺のベンチに座る。

権限の鍵を数秒も入れたのだ。つらいのは当然だと思う。

「何か力が湧いて来てる感じがする」

「それが魔力ですよ」

「なるほど、ネギ先生はこの力を……」

「学園外では先生なんて付けなくてもいいですよ？」

「あ、ああ。ネギ」

千雨さんは名前を呼んだ後、俯いた。

なぜに？　と明日菜さんの方へ向くと、溜息を吐いていた。

いや、わかんないよ。

いきなり背後から抱きしめられた。

「ネギ君、アレどうするん？」

「え？ 小太郎、木にめり込んだままだったのか」

「やっぱネギがやったわけね」

木乃香さんの人差し指の方向を見たら、小太郎が木にめり込んでいた。

生きてはいるらしいが気絶してるみたい。

「起こしましょうか」

「どっかで見たなあ。この状況」

「ふう、魔法の射手 光の1矢」

木にめり込んでる小太郎の下半身に矢を刺した。

突然、小太郎が覚醒し「痛ええ！」と叫びながら動き回っていた。

「ネギ君、アレはあかんって」

「痛そうね」

「小太郎はそういう趣味だからあまりの快感で暴れてるだけだとも」

「違うワイ！ いきなり何すんねん！」

僕の頭に突っ込みのチョップをかましてきた。

千雨さんとは別の、逆の荒い息をしていた。

「男が荒くさせながらだと変質者みたい」

「お前のせいやろうが！」

「大した怪我してないし、大した事じゃないでしょ？」

「最後のが一番効いたわい！！ 何処の世界に魔法をケツに、ケツ

の穴に打ち込む奴がおんねん」

別の意味でヤバイ発言してる小太郎。

女の子がいる前でよく言うよ。

それに我を忘れてるのかどうか知らんがワイって何？

「魔法は手から出るのではない。尻から出るのだとも言っし」

「言わねえよ！」

「ああ違った、ただし魔法は尻から出る！だった」

「それも違うちゅーねん！！」

「ナイスツツコミ！」

怒り狂っている小太郎にグーッと親指を立ててみせる。

突然、怒っていた人物がガクッと落ち込んだ。

僕の右肩に手を置いた明日菜さんが息を吐いて僕に言った。

「どうすんの？ ネギ」

「そうだ。小太郎を鍛える約束が」

「そうや、そしてネギ！ 再び勝負や」

「別に良いよ。軽く捻るだけだし」

小太郎は僕の暇つぶしとして勤めてもらおう。

じゃないと、建物や学園の森、別荘を破壊してしまいそうだ。

「仲がいいんやなあ」

「こうしてみると男同士ってのも」

「ええ、ウチはネギ君と」

「マスター、ネギ先生に構ってもらえなくなりますよ？」

「……ネギ、そいつは誰が鍛えるんだ？」

エヴァ、茶々丸さんから目を逸らした。
ここで怒っても相手の思うツボだね。

「僕がやってた修行を小太郎にやらせるだけです」

「ほう？ ネギにできるんやったら俺にもできるで！」

「重量800キロを両足に付けて走ってもらおうか。距離はここを100周程度」

「できるかッ！！ それに死ぬわッ！」

必死な表情で速攻、拒否された。

全身に重力魔法をかける方法なのにそれでも駄目とは。

「ネ、ネギ、さすがにそれは」

「800キロのって無理に決まってる」

「僕はやってましたよ？ そのおかげで反応速度とかがりました」

「足を鍛えると反応速度が上がるんやな」

目で見えても体が遅ければ意味を成さない。

だから、前の僕は重りを付けて鍛えた。

徐々に重量を上げていき、最終的には有限なら余裕になってしまった。

「あ、あの……」

「何ですか？」

「私にもそれを？」

「千雨さんは普通に修行しますよ？」

「そ、そうですか」

なぜに敬語、と首を傾げた。

小太郎の事はこれで決まりだ。後は千雨さんの魔法を鍛えればOK

だな。

学園祭までには間に合わせるといふ目標を教えた。

「無理じゃないか？」

「いや、いけると思うえ。ウチらがそうなんやから」

「そ、そうね」

確かにそうだね。

木乃香さんは早くもコツを掴んだし、明日菜さんは咸卦法と相性が良いから成長が早かった。

さすがあの人の娘さんだ、と感心していた。

「エヴァンジェリンさん、千雨さんに習わせる魔法は魔法の射手で良いと思う」

「確かにそうだな」

「その方針でいこう」

修行内容を決めた僕は服の懷から小さな杖を取り出し、千雨さんに渡す。

受け取った千雨さんが杖を見て顔を顰めた。

見た目はおもちゃにも該当するほどの作りになっている。

「私にはこれが……」

「いえ、常にアーティファクトを使用するわけにはいきませんし」

「そ、そうか」

自分の状態を見て理解したみたい。

今の千雨さんでは普通の人と何も変わらない。

だから、鍛える必要があるのだ。

「潜在能力を解放してるから詠唱で発動はできるはず」

「呪文なんて知らないぞ？」

「教えますね。風の精霊17人。集い来たりて 魔法の射手・連弾・雷の17矢」

「詠唱キーは？」

空気を読まないアーニャに溜息を吐く明日菜さん達。

詠唱キーなんてもう必要ないと思う。

そもそもアーニャも簡単な魔法なら詠唱キー使わないだろ？

「千雨さん、僕に向けて撃ってみてください」

「いいのか？ 危ないぞ」

僕を気遣うのは嬉しいが、今の千雨さんは初級魔法使いを凌ぐ程度しかない。

あくまで、魔力だけだ。

僕は相手の返事も聞かず、距離を取る。

「どうぞ」

「ふう、風の精霊17人。集い来たりて 魔法の射手・連弾・雷の17矢」

とりあえず、僕があげた杖をスカートのポケットに直す千雨さん。

ビブリオルーランルージュのステッキを前に差し出すと、魔法の射手が飛んできた。

こちらに向かってくる魔法の射手は早かったが威力は足りないと感じた。

「てい！」

僕は簡単に目の前の魔法の射手を吸収した。

吸収される光景を見て、撃った本人が肩をガクツと落としていた。

「初めて発動した魔法をあっさり防がれるのは落ち込むんだけど」

「千雨さんの魔力は全て貰っています。木乃香さんの魔力を頂いたように」

「ウチの星光破壊を吸収したアレやな？」

「どうやったら魔法を吸収できるの？」

「アーニヤ、闇の魔法を習ってみたいか？」

「いえ、結構です！」

アーニヤはエヴァアの脅す様な冷たい声に震え、思いつきり首を横に振る。

こんな光景、後どれぐらい見れるんだろうなあ。

既に僕の未来に繋がらないため、平和が続くかもわからない。

一瞬、切なそうな気持ちになったが、くだらないと考えを捨てた。

それよりも限界が知りたかった。

「千雨さん、魔力を使い果すまで限界まで呪文を使ってくれませんか？」

「あ、わかった」

よく見るとステッキが薄く光っていた。

あの光って電子妖精が、あの能力が発現していく前兆か……。

でも、あのステッキは前と違う何かを感じたが、しばらく保留にする。

そして、ステッキを握る千雨さんが魔法の射手を合計900ぐらい撃ちこんできた。

権限の鍵で解放した潜在能力は相手の魔力を数倍以上膨れ上がる。

何もしないで放置していると潜在能力が低くなり脆くなる。
900も撃った事に驚いた木乃香が妙な事を言いだした。

「千雨ちゃん、星光破壊習得してみいへん？」

「星光破壊！？ どっかの魔砲少女みたいな魔法だな」

「気のせいやって、効果も全然ちゃうやん」

千雨さんと木乃香さんが言い合っている。

前では考えられない組み合わせだ。

効果も違うってどういう意味だろう。

「それにな、まだ未完成やもん」

「未完成？」

「まだウチ自身の魔力が足らへんから見せられへん」

「……習うに越したことは無いという事か」

真面目な表情で考えていた。

いやいや、星光破壊は別に要らないでしょ、と呟く明日菜さん。
一緒に居て知ってる明日菜さんの表情が青ざめる。

魔法無効化は意味無いもんな。

「木乃香、教えてくれ」

「よし！ さっそく術式を教えるからこっちで」

嬉しそうに笑顔になる木乃香さんは千雨さんの腕を引っ張り、奥へ向かった。

ああ、魔法少女が星光破壊、ね。

バランスブレイカーもほどほどにな。

僕の頭に浮かんだ光景はビブリオルージュ姿の千雨さんが
魔王的な笑みを浮かべ、

木乃香さんから習った星光破壊をぶっ飛ばす姿が思い浮かんだ。

「……千雨ちゃんが木乃香の計画に、あはは」

明日菜さんの言葉が空しく響いた。

だいたい計画って何？ 明日菜さんの言葉が僕の心に残った。
本当にどういう意味なのか、わからん。

それから、木乃香さんと共に戻ってきた千雨さんはボロボロになって帰ってきましたとさ。

何で？

だが、木乃香さんの計画で一騒動が起こる事を、このときの僕は知らなかった。

第38話『学園祭編・その3 後18日 あやか別荘』へ

第37話『学園祭編・その2 後19日 千雨の修行』(後書き)

感想、web拍手などお待ちしております。

今回の話は伏線です。次の話もそうですが……

千雨のアーティファクトは原作では力の王笏だったが、

このSSでは別にあり、力の王笏がついでに付いているという設定。

第38話『学園祭編その3 後18日 ハルナの仮契約と別荘での海』(前書き)

更新予定より遅れてしまいました。

南の島(海)では、魔法世界編のイレギュラー的フラグがあります。

★感想、web拍手お待ちしております。

第38話 『学園祭編その3 後18日 ハルナの仮契約と別荘での海』

くエヴァの別荘く

あれからかなりの時間が経つ。

別荘は何度か出て何度も利用している。

そのため、かなりレベルアップと言いたい所だったが千雨さんの修行で時間を費やした。

「千雨さん、星光破壊できるようになったんですね」

「木乃香よりまだ弱いが」

それも当然だが、数時間程度で習得してしまうほど強くなりつつある。

それだけ才能に恵まれているだろう。

「私も強くなったわよ！」

「アーニヤと小太郎は互角じゃないのかな？」

「えええええ！？ こんな狼と同じく！？」

「アホ拔かせ！ 瞬動も出来ん奴と同類なんてふざけんな！！」

実力的にはそうなんだけどさ、アーニヤとの攻撃力って同じなんだよ。

あくまで平均の攻撃力だけだけど。

遠距離ならアーニヤ、近距離なら小太郎、中距離なら互角。

「確かにそうだな」

「明日菜さんも剣の捌きが上手です」

当然のようにこの場に溶け込む刹那さん。

「いつからいたんですか？」

「ひどい！ 数時間前からです」

「この別荘時間と言ってくれんとわからへんよ？ せっちゃん」

「木乃香、外だと夜中12時だから……3か4日前じゃない？」

刹那さんが来たのは現実だと8時ぐらいだ。

明日菜さんを鍛えてもらえるように話した。

その際にちよつとした条件があったのだがそれは気にしてはいけ
ない。

「ところでネギ」

「何です？」

「結局、私の別荘に何をしたんだ？」

「あれは出なきゃいけない時間を強制的に記憶させただけです」

「マジックアイテムを改竄する力なんて知らないぞ」

エヴァの言うとおり、別送の出る時間を朝6時にセットしただけ。
その時間になると強制転移が発動し、僕たちは自分の部屋に戻ると
いう仕掛けをした。

このほうがどうみても楽だからね。いつやったかはどうでもいい。

「そういえば夕映ちゃんと本屋ちゃんはどうする気なの？」

明日菜さん、ハルナさんを忘れてますよ？

一応、ばれてるんですけどっと指摘すると。

「忘れてたなあ」

「そういえばバレてたんやなあ」

僕以外全員が考えるかのように首を傾げていた。
ハルナさんって魔法世界に行かないと影が薄いんだもん。
それはそれとして、今後どうするかを話そうか。

「さて、学園祭では何かが起こると思います」

「何かって？」

「そんな事より委員長のアレでしょ？」

「ああ、海か」

「別荘といっても南の島らしい」

そういえばそうだった。

プライベートビーチっていうんだっけ？

あやかさんはお金持ちだからか。こういうイベントもある。

「小太郎は行く？」

「当然や、そういうの滅多に行けんやん」

「うむ、あの3人呼んでおこうか」

「あの3人？」

「ハルナさん、夕映さん、のどかさん」

「何をする気だ？」

エヴァの視線が痛かった。

仮契約を果たしておかないとだめだ。

「そういえばハルナはまだやったな」

「言いふらされるのも問題ね」

「では呼びますか。 目標座標転移。 早乙女ハルナ、綾瀬夕映、宮崎のどか、召喚」

仮契約しているのは2人だけなので別の方法で呼ぶことにした。

座標転移は相手のことを知ってる状態じゃないと使い物にならない呪文。

どこに居ようが関係なく呼び出せるから便利。

3人がいきなりの出来事に呆然としていた。

「あれ？ ここは？」

「ネギ先生」

「もしかして、先生がまた……」

「あはは、実はね、ハルナに用があってね」

「じゃあどうして私達が」

「何かしてたの？」

「いえ、眠れなくて魔法の勉強をしてましたです」

どうやら現実では夜中らしかった。

こここの時間と現実時間は違いすぎる。

「それでハルナに何のようなのですか？」

「いろいろと面倒ごとを抱えるのが嫌なので仮契約をとって話になって」

「仮契約？ ネギ君とキス！」

ハルナさんのテンションが上がっていた。

そんなに興奮することかなあ。頬がちよっと赤いが。

「か、勘違いしないでよ。魔法のことを知ってるみたいだからこうでもない」と魔法界はうるさいの」

「オコジョにされるのはごめんです」

もしそうなくても僕にはエヴァ並の魔法以上じゃないと効果もなくそも無いが。

攻撃、防御、魔力制御は弱くなっても、抵抗力だけはそのままだから効果ないんじゃないかな？

「じゃあカモくん」

「合点だ！」

カモくんがピョンと飛び跳ね、地面に魔方陣を展開する。

ハルナさんがじーっと地面の魔方陣を見ていた。

「これが魔法陣」

「見てないでさっさとしたら？」

「そうやな」

「ネ、ネギ先生」

「あそうだ、刹那さん」

「何ですか？」

制服姿の刹那さんに自分のポケットの中から掌より少し大きい丸い赤玉を差し出す。

「これを渡しておきますね」

「何ですかこれ？」

刹那さんが不思議そうに眺めていた。

気にもなるだろう、赤玉、正確にはその玉の中から魔力がある。

「それはですね。明日菜さんが運動してる時に邪魔する魔法の射手10万発分です」

「10万ってネギ、そんなに私を」

「違いますよ、修行ですから魔法の速度にも反応できるようになつてください」

「わ、わかったわよ」

「ネギ先生、これ私もいいですか？」

「いいですよ。刹那さんも魔力耐性を持ってもらわないと戦力外ですし」

「あ、そうですね。ではさっそく明日菜さんとしますね」
「はい」

そう言って2人は森の中へ入っていった。

「あのー、ネギ君？」

「そうでしたね。カモくん、準備はいい？」

「OKですぜ」

ハルナさんから僕に迫ってきて唇同士が重なる。

そのとき、口の中に舌が、ハルナさんの舌が入り込んできて僕の舌を絡み会う。

止めるまでもなく、いつも通りに魔法陣が光りだす。

「ハルナ！ 何してるん！？」

「いつまでしてる気だ！」

木乃香さんとエヴァが魔法の射手を撃ってきた。
キスしていたハルナさんがカードを持ち

「アデアット」

カードから妙なペンと白い紙が出てきた。
白い紙に盾を書いて具現化させた。

向かってきてる魔法の射手が盾に当たった瞬間、何かが弾けた音がした。

音と共に魔法の射手が消えるって、あんたはどこぞの幻想ご、ゲフンゲフン

「成功したみたいね」

「嘘！」

「ほう、そういうアーティファクトか」

さすがエヴァだ。

でもどうしてハルナさんが即効使えたの？

確かにペンと紙があればってそういうえばハルナさんは何かを書いていたな。

きっとその趣味が反映したんだ。当時の僕は知らなかったが。

「ハルナのアーティファクトって前線いけるやん」

「書き貯めしておかないと使い物にならないですね」

「千雨ちゃんもそう思う？」

「それってどこまで現実に来るん？」

ペンの羽部分に取り扱い注意が書いてある。

それを指摘してやるとハルナさんが白い羽に触れる。

するとだ、前にモニター画面に発生した。

「へえ、何でもいけるみたいね。でも最後の注意書きが夕映のと同

じなのよね」

「あ、本当だ。でも、ちょっと違いますが」

「ねぎ君の事書かれてるだけやん」

「『契約主であるネギスプリングフィールド関係は許可されないと書いても消失する』だって」

「紙は無限に出せるみたいですね。それを複製することもできるようです」

夕映さんがハルナさんのアーティファクトを調べていた。

何度も？ しかも複製もできるって前よりも強くなってるな。でも気になったことがあった。

「ハルナさん、あの盾は」

「あれはね、マジックシールドっていう盾。ある程度の魔法を消失させられる効果を持つ。」

だから木乃香とエヴァちゃんのが消失しただけ」

「エヴァちゃんって明日菜と同じように呼ぶな！」

「いいじゃない。木乃香も言ってるんだし」

「いまさらですよ？ エヴァンジェリンさん」

「グッ……も面白い」

本当にどうでもよくなったんだな。

それにしてもハルナさんのアレは異常すぎるな。

前はそんな効果を持っていなかったしどうなってるのやら。

「千雨さん、べつのまほうも習ってみましようか」

「あ、はい」

.....

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

普段着の僕とビブリオルーランルージュ姿の千雨さんが距離を置いていた。

その意味はこれからわかる。

「風の精霊17人！！ 集い来たりて 魔法の射手 連弾・雷の17矢」

始動キーもなしで魔法の射手を行使していた。
どうやらあの姿だとキーはいらないようだと僕は推測する。

「魔法の矢で十分かな？ 雷の17矢」

千雨さんの魔法の射手と僕の魔法の矢が激突した。
僕の矢が7本消えたが、残り10本が向かっていく。
それがわかってたかのように千雨さんの詠唱が聞こえた。

「木乃香言ったとおりか、なら炎の精霊59柱！！ 集い来たりて 魔法の射手 連弾・火の59矢」

残り10本の矢を貫通して僕のほうに勢いよく飛んできた。
しかも千雨さんの魔法の射手が1本も消失していない。
これは、どっかで見たことある量だな。まあいっつか、

「久しぶりにアレを唱えてみますか」

本当に久しぶりだ。

千雨さんのこれからのためにちよい強めの魔法を使うことにした。
そうじゃないと成長も遅くなるだろう。

「千雨さん、防御魔法を使っておくほうがいいですよ？　じゃない
とどうなることやら」

「え？」

「思いつきり手加減しなきゃチタマとツキ含む空間ごと消えるんだ
よなあ。」

よし魔力はこんなものでいいかな？……契約により我に従え　高殿
の王　来れ巨神を滅ぼす

燃ゆる立つ雷霆　遠隔補助　魔法陣展開　第一から第十　目標捕捉
範囲固定　域内精霊圧力　臨界まで加圧3：2：臨界圧　拘束解
除　全雷精　全力解放　百重千重と　重なりて　走れよ　稲妻　千
の雷」

僕の中にある鍵を始動、千の雷を雷の暴風形式に変更し発射する。
当然威力も高いため魔法の射手が僕の魔法に喰われる。

千雨さんの真横を通過し、ここから1キロ離れている大きい建物が
消滅する。

衝撃波とか来る訳が無い。だって消滅だもん。

「ななな、何ですか今の？」

「千の雷……ネギの喰らうと生きてる自身が無いな、というかネギ
！」

「どうかしたんですか？」

「私の別荘を破壊するな！」

「マスター、破壊ではなく消滅です」

「同じだ！」

壊されて怒っている人を無視して、修正魔法で直すか。

建物は生き物のようにモゴモゴと生えてきた。
モゴモゴって何よ、とか言われても気にしない。
第3って生き物のように動きながら修復されるからキツイな。

「明日菜さん達を呼んできます」

「夕映、私も行く」

夕映さんとハルナさんが森の中へ消えた。

あっちなみに明日菜さんと刹那さんの居る場所は反対方向だから被害は無い。

「小太郎君も各自でやってるみたいだし、適当に時間までしますか」
「ウチも星光破壊を」

「あれで未完成って事は完成したらどうなるの？」

「ネギ君の隣に立てるやん」

「いやそうじゃなくて効果は？」

「ネギ君の魔法みたいに追尾できるようになればええんや」

ああ、今の星光破壊は追尾式ではない、か。

転移しても相手を追尾出来る魔法にするらしい。

どちらにしろ、木乃香さんの考えてる魔法は怖いですね。

そんなこんなで、夕映さんやのどかさんにも魔法を教えて、寝て、おきて、教えて、寝ての繰り返しをする。

その後、現実時間朝6時に設定していた強制転移が発動し、僕達は自分達の部屋へ転移した。

そして、放課後……。

HRが終わった瞬間、あやかさんが僕の手を握ってきた。

「ネギ先生、さっそく私の別荘へご案内しますわ」

「別荘じゃなくて正式には南の島よね」

「そうそう」

「あははは……あやかさんお願いします」

「はい、お任せください」

どこかに電話していたあやかさんがへりを呼んでいた。

へりというよりもジェット機？ うーんよく知らないが30人は入るレベルの飛ぶ乗り物だった。

それで移動した時間は10分程度だった。どんだけ早いんだ？

へり？ から降りた僕達は砂浜やきれいな海を見てはしゃいでいた。

「ようこそ、わたくしのって聞いてますの！？」

「ねえねえ委員長、自由にしてもいいのよね！」

「ええ、かまいませんわ」

「おっしゃー、泳ぐわよ！」

「待って！」

半分以上来ているから人数がすごい。

その約半分が水着になって海に突っ込んだ。

どうやら服の下に着用していた。

「ネギ先生は泳がないんですの？」

「今はまだ。それよりもこってあやかさんの？」

「そうですわ。ですから気にせずにどうぞ」

けど、反対側に妙な気配と違和感を持っていた。
フェイトに似たような感覚もするし何これ？
行ってみるしかないか。

「行ってきますか」

誰にも気づかれないようにそーっと動いた。
反対側の砂浜に到着すると、木乃香さん達がついてきていた。
しかも、その後ろには……。

「明日菜さん、あやかさんが後ろに居ますが」

「え？ 何で委員長がここにいるのよ！」

「ちょっと気になりまして、それとネギ先生の様子がおかしかった
もので」

あやかさんの視線を感じた。

視線というよりも表情でなんとなくだが違和感を持つ。
まあそれはそれとして

「あやかさん、ついてこないほうがいいですよ？」

「どうしてなんですの？」

「ネギ？」

「……止めても無駄か。あやかさん付いて来てもいいですが驚かな
いくださいね」

「え？」

「もしかしてネギ？」

明日菜さんの言葉に反応したかのように空が白くなった。木の色も地面も海の色も全て白色になった。それを見て驚愕の表情を浮かべるあやかさん

「これはな、何ですの!？」

「ネギ！」

「何なんこれ!？」

「見ろ、刹那達も白くなってるぞ。おまけに動かない」

刹那さんが座って真名さんに話しかけてるところで動いていない。海の流れる音も聞こえない。

「もしかして時間が止まってる!？」

「嘘！」

「あやかさんも明日菜さんたちも落ち着いてください」

「そ、そうね」

ようやく落ち着いたか。この現象を起こせるとしたら誰なんだ？僕もどきは単独拒否してるから無駄。

「ネ、ネギ先生……」

「どうするん？」

「ここは一つだけだが、張本人すら出てこないな。

だが、時間を止められるとしたらかなりの上級魔法使いか魔族だな」

エヴァの推測が正しい。

でもさ、この時間でまだそんな奴はいるはずもない。

頭の中で心当たりのある奴を思い出そうとしたが、あやかさんの大声が聞こえた。

「な、何ですの！ アレは」

人差し指を前に出していた。指の先を見てみると黒い犬が居た。正確には狼だけど。

「グルルルル……ここに、入り込む奴は、皆殺しだ」

黒い狼が魔力を開放しながら叫びだしていた。

相手の魔力の余波に当てられないようにあやかさんの前に出る。

「あやかさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですがアレはいつたい」

「……あやかさん、今から起こることを内緒にしてくださいね」

「え？」

フェイトに似てる感覚がした。

こいつ、生物じゃない？ 危険を感じた僕は明日菜さんに視線を向ける。

「もしかしてネギ、委員長に」

「そうしかありません。あいつは僕が倒しますからあやかさんを」

「わかったわ」

「了解や！」

「ふん！」

明日菜さんと木乃香さんとエヴァは了承した。

もう障害は無い。

僕も魔力を解放しながら大きな狼に問いかける。

「なぜこんなことをするの?」

「……」

何も答えないと思ったら今度は明日菜さん達が白くなって停止した。

「何だ? どうして明日菜さん達まで!!」

「ガ、ノード……」

「!? ガノード、そういうことか。ならいい」

明日菜さんたちには聞かせたくない話だ。

別に死んだわけでもないから停止ぐらいはどうでもいい。

「ガノード、復讐、ヒント、倒す」

相手の発する言葉は単語ばかりでわかりにくかったがなんとなくわかった。

ガノードを憎んでいるのだろう。

ヒントとはここに現れたからずっとここに留まっているのだろう。
けどあいつは、

「ガノードはいない。僕が倒した」

「なら、お前を、倒すのみだ」

「何で!?!」

「我の生き様、奪った。奪った奴、倒す」

フフフ……単純だ。

僕を倒してガノードを倒したことにする気か。

「わかったよ。ガノードのことは抜きとして戦おうか」
「我に勝てるか!!」

いきなりこの周辺だけが元に戻った。

って事は明日菜さん達も動いてる、と後ろを見る。
だが、相手はその隙を逃さず僕に火を噴いてきた。

「ネギ先生!」

「だめよ、委員長」

「で、でも!」

「ネギは魔法使いなのよ!」

「え?」

「明日菜、またやなあ」

「さすがバカレッドだ」

「ネギ先生が魔法、使い?」

「あ、しまった」

変な会話が聞こえた僕は呆れてため息を吐き、魔法結界を作り出して敵の攻撃をかき消した。

あやかさんは胸の前に手を置いて、浮いてる僕に話しかける。

「ネギ先生は、魔法使いなんですか?」

「そうです。その話は後でしますからちょっと待っててくださいね」

「あ、はい」

歯切れの悪い返事が来た。

それはそうか、魔法なんて知らない人からしたら異常な力だからな。
目の前に居る黒い狼野郎をどうにかしなきゃな。

「終わりにしようか。雷の暴風で!!」

出来る限りの魔力を開放するが、黒い狼の姿が薄くなる。

「我では、勝てない、魔法世界、決着」

「魔法世界!?!? こいつ、まさか」

目の前のいた狼は薄くなっていき、とうとう見えなくなった。
消えたことにより戦闘を回避したため息を吐く。

あいつは未来から来たのか? そうとしか思えない。

僕、あんな奴知らないぞ。

ああそうか、ガノード自身、元からこの宇宙の存在じゃない。

あいつの出身世界はガノードと同じかもしれない、と結論を出し考
えるのを止めた。

「では戻りましょうか」

「ネ、ネギ、今のは」

「知りません。けどこれでみんなは安全です」

「……何か納得できへんなあ」

「それよりもあやかさんに事情を話さない」と

「そうだな」

この事を消化できなくて難しい表情をするエヴァや木乃香。

明日菜さんも寂しそうにしていた。

僕はあやかさんの前に立つ。

「行きましようか」

手を差し出した。

あやかさんは少し戸惑ったが僕の手を両手で包み込むように握る。

それを確認した僕は過去と同じ覚えている部屋へ極移を使った。
もちろん明日菜さん達も含めて、だ。

第39話『学園祭編その4 残り18日↓16日 雪広あやかと魔法』へ

第38話『学園祭編その3 後18日 ハルナの仮契約と別荘での海』(後書き

ハルナのアーティファクトは原作よりも強くなっています。

どこが強くなってるかは後の方で。

ネギは話を進めることに尋常じゃない強さが見えてくる。でも、最終的には……………。

次の話では、海イベントの後編と日付がちょっと飛び、それからの展開ぐらいです。

第40話学園祭編その5でようやく15日(9巻と同じ)前になります。

学園祭編その5にしても話数は修学旅行編の半分で1巻すら進んでないです……………。

第39話『学園祭編その4 後18↓16日 南の島とクーフエイ』(前書き)

感想・web拍手などお待ちしております。

次の更新は40話＋設定(40話までの描写、情報)です。

第39話 『学園祭編その4 後18↓16日 南の島とクーフエイ』

「どこかの部屋」

部屋割りで決められた場所に到着した。

え？ いつ決めたんだって？

それは秘密さ。

極移で部屋に来たため、あやかさんがキョロキョロと見回していた。

「あやかさん、とりあえず事情を説明します」

「事情？ ネギ、まさか巻き込む気？」

「それはあやかさん次第です」

難しい表情をしていたのか、あやかさんがごくりと飲み込む。

巻き込むのはいいけどあやかさんの出番って当分後なんだよね

666

「……僕は魔法使いです。背中に背負ってたのは杖、

ウェールズの魔法学園を卒業して、試験としてここの教師をする事になりました」

「試験ってのはマギステルマギ、偉大なる魔法使いになるためらしいわ」

「偉大なる魔法使い？」

アーニャとエヴァがあやかさんにマギステルマギの意味を教えた。

「そうなんでしたの」

「でも僕はマギステルマギを目指す気はありません」

「なんとなく納得できるわ」

それって修行の時の事を示してるのかな？ 明日菜さん
こらこら、木乃香さんも頷かない。

「どうしてなの？」

「ネギの修行ってエヴァちゃんより鬼じゃない？」

「修行？」

「魔法よ、魔法」

テーブルを囲うように高級そうなソファが設置されていた。
そこに疲れた表情の明日菜さんが座る。

ほかの人もそれぞれの場所に座っていた。僕は立っているが。

「明日菜さん達は どうして」

「明日菜さんは魔法使いの天敵である魔法無効化能力者です。

木乃香さんは僕のクソ、ゲブンゲブン……父さんの魔力を超えてます。だから狙われるんです」

「木乃香自身が素人だとそれを利用しようとする奴が居る。修学旅行の時発生した」

「修学旅行って……」

僕は混乱してるあやかさんに修学旅行で起きた出来事を語った。

「そういうことでしたの。じゃああのカエルも全て」

「関西ナンチャラと関東なんちゃらがなんちゃらで」

「それじゃあ誰もわからへんって」

「いえ、なんとなくわかるです」

まあ、これが僕だったら意味不明、理解できないというのが脳内に表示されるが。

「エヴァンジェリンさん」

「何だ？」

「ここにクローフェイさんと楓さんを招いていいですか？」

「なぜだ？」

「クローフェイさんと楓さんは強いですから」

本当はあまり関わっていない為、今のうちに干渉しなければ、魔法世界で足らなくなる。

いくら明日菜さん達が強くなろうとも危険なのは変わらない。だって未来は既に未確定になっているのだから。

「そうですね。楓は忍者みたいですし」

「そういえばそんな感じがするわね」

「まあいいだろう。ここにきてもらっても困るな。このイベントが終わったあとにするか」

イベントって言うなよ、エヴァ。

この世界はゲームか何かか？

「今は楽しもうよ」

「そやな、じゃあネギくん!!」

「……皆さんで好きに遊んでください!!」

木乃香さんの抱擁をかわして転移魔法でこの場から消え去った。巻き込まれでもしたらクローフェイさんと会えないじゃないか。

（???）

僕は楓さんとクーフエイさんを探していた。

「いた。クーフエイさんだけだけどまあいいや」

皆が遊んでいる場所から離れた場所に、クーフエイさんが水着ではなくいつもの服装で体を動かしていた。

僕の気配に気づいた瞬間、僕の傍まで来て

「てい！」

いきなり攻撃してきた。

つい条件反射で左腕を掴んで海のほうへ投げ飛ばした。

投げとばされたクーフエイさんは崩れた体勢を元に戻して僕を直視するが、

「ネ、ネギ坊主、いきなり何するネ」

「いやこっちの台詞ですって」

「私もちよつと本気でやったけどあつさり投げ飛ばされた。ネギ坊主強いあるな。さすが魔法使い」

「知ってたんですか？」

「たまに真名と仕事するアルね」

ああ、そういえばそんな事ってあれ？
やっぱり何か違う？

この世界、かなり歪んでいる、ね。

「いまさらか、あの、お願いがあるんですが」

「何アルか？」

「いい修行場を知ってるんです。そこで僕と真剣勝負しませんか？」

「真剣勝負？」

クーフエイさんの表情が変わった。
僕の言葉に考える動作を取っている。

「OKあるよ」

「そうですか、ありがとうございます。場所はここに書いてありますので」

エヴァの家の中にある別荘の入り方まで記した紙を渡す。
それを受け取ったクーフエイはウンウンと頷いた。
後は、楓さんだけどこにいらっしゃるだろうか？

「あの、楓さんはどこにいるか知ってますか？」

「それだったら先ほど明日菜達が楓を」

「そうですか、じゃあいいです。僕はこの辺で失礼しますね」
「楽しみにしてるネ」

これでクーフエイさんをこちらに引き込める。
今回は弟子とかいらなからどうなるかわかんないけど。
満面の笑顔で返した僕は先ほど転移した部屋へ戻った。

戻ってみるとアーニヤ達があやかさんに魔法を教えていた。
あれ？ あやかさんには真実を話してそのままにしようかと思った
んだけど。

どうやらネギは委員長をしばらく放置する気だったらしい。
その予定を狂わしたアーニヤたちにため息を吐いて声をかける。

「何をしてるんですか？」

「見てわからない？」

「わかんないから聞いてるんだけど」

「初心の魔法を教えてるだけよ、委員長の魔力って高いのね」

確かに高いのは知ってる。

でも今は発現しないと思っていた。

ところがあやかさんを見ると持っている杖から炎が出ていた。

そこから感じる魔力は風の暴風を打てるほどだった。

「ネギ、委員長は魔法使いになれる素質を持つぞ」

満足そうな表情をしたエヴァは今度こそは、と目と同じ設定集を渡してくる。

その時の僕は呆れて顔を引き攣らせているだろう。

「あやかさん」

「はい！」

「あやかさんはこんな、魔法使いになりたいのですか？」

「え？」

あやかさんに設定集を渡すと、読み始めた。

最初はうんうんと頷いていたが、後になると赤くなっていた。

そのアニメって確か恥ずかしい格好多かった気がする。

それは些細な事として、あやかさんが読み終わった。

「こ、これを私に！？」

「委員長に似合ってると思うが、それでネギのハートを堕とせ」

「ネギ先生のハート？」

悪魔のささやきをはじめるエヴァ。

そんなに見てみたいの？

「やりますわ!!」

「ちょっと待ってえや」

「本気？」

「それはだめでしょ」

あやかさんの別の意味でのやる気に3人が突っ込んできた。
何をそんなに慌てているんだろうか？

「どうしてですか？」

「ねえ、エヴァちゃん、鍛えるの誰が」

「私とネギがやるに決まってるだろ？ 何を言ってるんだ？」

いや、僕もやるの？

権限の鍵で潜在能力開放状態にさせればいい、か。

「純粹に南の島を楽しみませんか？」

「夕映、それはどうでもええやん」

「え？ どうでもいいこと？」

「委員長が仲間になれば何時でも来れるやん」

木乃香さんの態度に夕映さん達が呆然とする。
無理も無いか。あやかさんの反応はというと。

「ネギ先生の事をわかってよかったですわ」

目をキラキラさせて背景が天使が降臨していた。
どんだけ嬉しいんだ？

「もう！ ネギもいちゃいちゃしてないでさっさと海を！」

「アーニヤちゃん……」

「それじゃ行こうか。アーニヤ」

「ちよつとネギ!？」

僕は慌てるアーニヤの手を引いて走った。

さつそく浜辺に着いた僕はアーニヤを海の方へ放り投げた。

ドッボーンという水が舞い上がる音がする。

するとアーニヤが海から出てきてさつそく文句が飛んできた。

「いきなり何するのよ!」

「ごめんなさい。ほぼわざと」

「思いつきわざとじゃない!」

「仕方ないなあ」

妙なことを思いついた僕はアーニヤと共に海の中に入り、空気を作り出す。

アーニヤはえ? え? と戸惑っている模様。

「ねえ、アーニヤ」

「な、何?」

「ごめんね」

「え?」

逃げられないようにアーニヤの左肩を持つ。

抵抗されようとする前に左手で権限の鍵をアーニヤの腹の中に入れる。

「ひゃっ!？」

驚きの声を上げるが気にせず続行する。
権限の鍵が白く輝き出す。

「これ、何!？ な、な」

「アーニヤの潜在能力も、ね」

「うっ……何か凄く」

と、その時。

「そこで何してるのよ!!」

明日菜さんが僕を狙うのではなくアーニヤの方へハリセンを投げてきた。

権限の鍵入れたまんまだぞ! クッ、仕方が無いか。

権限の鍵を消した後、アーニヤを極移で夕映さんの隣に転移する。

ハリセンは先ほど居た人物の地面に突き刺さった。

「あ……ヤバ」

「明日菜さん、せっかくアーニヤの潜在能力開放の邪魔をしてくれましたね」

「もしかして、怒ってる?」

「我が聖地より、偽りの世界を展開せよ 幻想世界・天蓋」

「そ、それって!？」

僕は幻想世界を構築しようとしたがシーンとなった。

明日菜さんもえ? と間抜けの声を出していた。

「あれ? 幻想世界ができない……」

どういうことだ？

幻想世界を作り出せないって事は魔力が、だろうな。

とにかく僕は明日菜さんの手を握りこちらに来る木乃香さん達のほうへ投げた。

バランスを調整して木乃香達の前で止まった。涙目で見てきたが。

「あ、ネギ君どうかしたん？」

「こ、木乃香さん」

「それよりどうするんだ？」

「「え！？」」

僕と木乃香さんが横に振り向くが、悪魔的な表情のエヴァが居ました。

イライラしているようです。

「純粹に楽しみたいです」

「あはは、そうね」

「そうですわよ。せっかく誘ったのですから」

「しょーがないなあ。ほなネギ君！」

「待て！ 木乃香」

その後、まき絵さん達が乱入してきて揉みくちにされていた。

どんな風に？ そんなの決まっている。口にしたくない。

うっかり雷の暴風で吹き飛ばしてしまおう！ と思ったことは無い。

まあ、そんなこんなで南の島も終わったとさ。

学園祭まで残り16日という日にエヴァの別荘に集まっていた。
楓さんは来なかったが、クーフエイさんがきてくれた。

え、昨日？ 昨日は適当に過ごしたよ。

「今何人居るんだ？」

「少ないんじゃない？ ほらクーフエイちゃんだけだし」

「明日菜とウチとネギ君と茶々丸はんとエヴァちゃんとクーフエイちゃんやね」

「うむ、少ないな。千雨は？」

「何か用事があるんだとか」

「そ、そうか」

何でそんなに落ち込むんだ？

まさか、アレをさっさとさせたいのか？

呆れた僕は頭を抑えた。

「千雨ちゃんの用事って？」

「色々あると思います」

「そうね」

明日菜さんも千雨さんの趣味を思い出して納得したような表情。
ネットアイドルも大変だなあ。

「ネギ坊主、さっさと勝負するネ」

「あ、はい」

お互い距離をとって構える。
こういうときは静かのほうがいいんだよね。

「いくあるよ」

「はい」

さて、いきますか。と僕は表情を変える。

その表情を見た明日菜さん達はビックつと震え上がった。これからする僕の行動を理解したのだろう。

「魔法の射手 雷の352矢 集束 雷の1矢」

「受け止めるネ」

クーフエイさんが無謀のように受け止めようとする。そこで突っ込みが入る。

「いや、受けたらやばいだろ」

迫ってきていた魔法の矢を受け止めたクーフエイさんだが。僕は罠に嵌ったと判断してさらに魔法を使う。

「少し強めの雷の暴風 てい！」

僕の腕に絡みついた雷の暴風を発射した。

発射したとたん、勢いが馬鹿みたいに早くなりクーフエイさんの真後ろに向かった。

それに気づいたクーフエイさんは今抑えている魔法の矢を真後ろにある雷の暴風に流した。

「どうあるか？」

「これで魔法の射手と雷の暴風が融合する」

「え？」

後ろを見ると魔法の射手と雷の暴風が集束していく。
さらなる魔法の射手に変わり、クーフェイさんに向かっていく。

「流すアル」

先ほどと同じように僕の方へ流そうとするが、あまりの質量を流すことが出来なかった。

しかし、クーフェイさんが後ろを向いてるため隙だらけ。

そんな状況を僕が見逃す筈も無い。

「これで終わりです。光速の1矢」

「ちょっ!？」

光状になった矢がクーフェイさんの背中にぶち当たりボタンと前に倒れた。

これで僕の勝ちだ、というよりも最初から負けなど存在しなかったが気にしない。

木乃香さんたちの方へ見ると、呆れたような表情だった。

明日菜さんがこちらに来て

「これって絶対負けるんじゃない？」

「明日菜さんなら魔法無効化で」

「ネギに魔法無効化能力働かないじゃない」

「それよりクーフェイちゃんは大丈夫なん？」

僕の光速の矢を直撃したから気絶中。
起きる気配も糞もない。

「木乃香さんが行って来てください」

「ウチが？ わ、わかったで」

溜息を漏らして仕方がなく行くんだ的な表情で向かう。

木乃香さんの手をクーフエイさんの頭に乗せ治癒魔法をかけていた。

「うう……アレ、ワタシ何を」

「ネギ君に負けたんやって」

「ネギ坊主、強いあるな」

そう言って立ち上がったクーフエイさんは準備運動で体の調子を見る。

ここは木乃香さんに任せよう。

「エヴァンジェリンさん」

「ん？」

「闇の魔法はどうですか？」

「あ、ああ……まだ完成していない。太陰道も後一步だな」

へえ、後一步なんだあゝって「も」って何？

それだけじゃないの？ そこの所を聞いてみたが、

「当然だ。新たな闇の魔法を思いついたのでな。完成すればナギ以上になる」

ヒントもない返答が返ってきた。

新たな闇の魔法、だと！？

それが完成すれば戦力が上がるんだな、と見てよさそうだったので聞かない。

それはともかく、クーフエイさんがこちらに来た。

「ネギ坊主、強いあるな」

「ま、まあ。かなり修行をしたもので」

「その年であんな力を持つなんて凄いアル」

っていうか、ガノードのせいでここまで強くなる必要があっただけなんだけど。

ガノードはフェイトより何億倍も上の領域だし。

権限の鍵を除いても異常な素質を持っていた。

闇の魔法であいつの力を吸収しようともできなかった。

原因は知らない。

ただ、あいつが言っていた『ドウシン』という能力が原因だろう。

あいつを倒した後の存在の欠片を解析した結果、ドウシンの能力がわかった。

ぶっちゃけ反則そのものだった。

「ドウシンという能力を持つ奴のほうが強いですよ」

「ドウシンって何なん？」

「どこからでもエネルギーを吸収し、自分のものにする最悪な能力です」

「どこが最悪なんだ？　闇の魔法でも相手の砲撃が」

「違いますよ。ドウシンは活動している全ての『モノ』から吸収するんです。

その上で相手から絶対に吸い取られることが無いという耐性を持ちます」

これ、ガノードの能力なんだがいいのかなあ。

僕には不要になった能力だけど、明日菜さんか木乃香さんならできる能力だね。

後、千雨さん達も含む。

詳しい話を説明した後、明日菜さん達の反応を伺う。

「私もできるって事？」

「うちもできるんやったらうちもほしい」

「そうしたらネギの隣に立てるわけね」

「おい、習うのはいいが、私の修行も忘れるなよ」

「わかってるわよ」

「はいな！」

学ぶ気満々らしい。

ドウシンは次元の狭間だろうが関係なくそこら辺にある空間もエネルギーに変換できる。

エネルギーとは気や魔力などの意味。

これは言っていないが別に教える必要も無い。

今後、そんな戦闘が起きるわけも無いし。

「ネギ君は使えへんの？」

「無理ですよ」

「どうして？」

「無理というより闇の魔法のほうが楽だからです」

へえーと感心してる明日菜さん達がいる。

クーフェイさんは向こうでさっそく修行をしてるわけで。
この別荘を気に入ってくれたっぽい。

「エヴァンジェリンさん」

「何だ？」

「明日菜さんと木乃香さんはどうですか？ 実力的に」

今は僕の弟子ではないから実力がわかりにくいんだよな。

僕相手に本気出してるかも微妙だし、そこはほら、乙女の何からしい。

でも本気出してくれないと計算できない。

エヴァは僕の心を読み取ったかのように頷いて答えた。

「明日菜は刹那と私の修行やってるから相当だな。木乃香か、アレはどういったものだろうか」

「どういう事？」

そういうと、苦い表情になった。

「星光破壊が徐々に強くなってる。私が吸血鬼じゃなかったら死んでるほどな」

「そこまでの実力になってたんですか」

「だが、純粹な戦力ではネギの半分もないがな、もちろん私よりもだいぶ下だが」

エヴァより下。僕より半分も無い。

それってエヴァより弱くてもエヴァには対抗できるほどって事なんじゃあ。

魔法無効化と星光破壊って魔法使いには最悪の組み合わせだしな。こちらには魔法が効かない上、向こうには障壁すら展開しても無駄って言うし。

「あれで未完成なんですよね」

「追尾式の魔導書を見ていたみたいだが」

「完成するんですかね」

「もう少しやで」

いきなり背後から声がした。

誰の声か非常にわかりやすいが、それどころか抱き疲れても居るかわかる。

「何しにきた。さっさと星光破壊を完成させたらどうだ？」

「そうしたいんやけどな……ん、ネギ君、星光破壊使ってみてくれへん」

「はい？」

木乃香さんが僕にお願いしてきた。

それが星光破壊を撃ってみてくれって言うことだ。

どうしてか聞いてみたら「ネギ君の見たら閃くかも知れへん」と真剣な表情をしていた。

ならば、それに答えるべきだろう。

「わかりました。詠唱教えてもらえませんか？」

「うん、えとな……」

木乃香さんから星光破壊の術式を教えてもらった後、一定の距離を取った。

僕の魔力で撃った場合、どうなるか予想済みだから魔力はまったく使わない事にする。

一人で修行してたっばい明日菜さんもいつの間にかこっちを見ていた。

「よし、光の粒子よ、我に仇名す存在に、罰を与えん 星光破壊」

魔力の塊を持つ右手を前に差し出した。

すると、それが発射され2キロぐらい向こうの森まで飛んでいく。それに気づいたところで大爆発を起こす。

振動と爆発音がここまで伝わり地面が揺れていた。

「ネ、ネギ君が使うと凄い」

「ああ、わ、私の別荘が……」

威力に納得している木乃香さんと頭を抱えるエヴァがいた。
エヴァの視線の先を見ると、向こう、あっち寄りの約10キロのクレーターができていた。

おまけに、底が見えないが、奥をよく見ると空間が割れてる。
ちなみにエヴァの別荘、森エリアはエヴァが言うには改良したから20キロぐらいあるみたい。

「マスター、あの程度なら一度出れば修復できます」

「確かにそうだが、この破壊は」

「外からならどんな破壊でも修正できるとおっしゃっていたじゃないですか」

「時間かかるから面倒だ」

「封印の解けたマスターならすぐです」

上からシュパ！と現れた茶々丸さんがエヴァを説得していた。

説得って言うのか？　なんていったらいいかわからないけど遊んでいるようにも見える。

というかな、茶々丸さんはいつから忍者になったの？

イレギュラー続きであるこの状況に僕の疑問など些細なことかもしれないな。

「木乃香さん、こんなものでいいですか？」

「う、うん。約10キロの空間が破壊されたんやなあ」

「さてと、クーフエイさん」

「何アルか？」

いつもの服を着たクーフエイさんが高速でこちらに来了。

「そろそろ時間っばいです」

「もうちょっとだけ修行したいアル」

「こちらにも事情があるみたいですし」

あ、ちなみにクーフエイさんが修行してた場所は正反対ですよ。そうじゃなかったら今頃亡くなってます。

ま、そうなのでも権限の鍵で蘇生させればいいけど。

「木乃香さん、明日菜さん、部屋に戻ろ？」

「うーん、刹那さんがいないと無理ね」

「せっちゃん、また忘れられとる」

「こ、木乃香……」

とか言いつつも、明日菜さんは哀れみな表情で合掌をする。

それから、クーフエイさんや僕達はエヴァの別荘から出て、各部屋に戻った。

戻る時、エヴァが『ゆ、夕食でも食べていけないか？』と誘ってきたので誘いに乗る。

夕食を一緒にする。と言った時のエヴァの表情が頬を赤くして嬉しそうな態度で可愛かった。

食事中、エヴァが間接キスを狙ってきたりして騒動になったのは些細な事だった。

何か疲れたような感覚になっていた僕はベットに寝転がり今日のことを考えた。

「何で幻想世界できなかったんだろう。まさか元の状態じゃないとできないのか？」

頭の中で浮かんだ可能性を考えてきたが、睡魔に襲われ、そのまま暗闇の世界へ旅立った。

第40話『学園祭編その5 15日前 サブタイトル未定』へ

第39話『学園祭編その4 後18↓16日 南の島とクーフエイ』(後書き)

次回の更新は色々な事情により、9月になるかも知れません。

第40話『学園祭編その5 学園祭前のイレギュラー的な出来事』(前書き)

設定が完成していないのでこの話だけの更新です。

あと何日、はもう付けません。学園祭編を突き進むのみ。

最初の言葉については何を意味してるのか、は話が進むごとにわかってくると思います。

今回、オリジナル展開であり、無駄に長いです。

ところで設定ってありますか？ 今頃ですけど…

感想・web拍手などお待ちしております。

第40話『学園祭編その5 学園祭前のイレギュラー的な出来事』

偽りの存在はただ偽りを作った存在の傀儡である。

人形は人形師に逆らえないと同じだ。

それは世界だって同じだ。

ある鍵の前では平行世界を含む全ての宇宙など、その鍵の傀儡ではないのだから。

だが、少年は気づかない。

その鍵の、本当の力が■■■である事を。

くネギの部屋く

夢なのかかわからないが、声が聞こえたと思ったら目が覚めてしまった。

「な、何なんだ今のは」

体を起こして周りを見る。

キョロキョロ見回そうとしたが、両側から暖かい感じがした。

「え？　って何で明日菜さんと木乃香さんが僕の両隣にっ!？」

左に明日菜さんが寝ていて、右には木乃香さんが僕の腕に絡み付いていた。

今居る場所はソファアーじゃん。おかしいな、確か僕は自分の領域で寝てたはずじゃあ。

「アーニヤはいつもどおり、か」

「何がいつもどおりなの？」

「え？」

瞬動でも使ったのか、背後に黒いオーラを纏ったアーニヤがいた。

「アーニヤ、いつの間に瞬動が使えるようになったの？」

「え？　なぜだろう。昨日ねって何でもないの!？」

ブンブンと首を左右に振っていた。

僕の寝てる間に3人が何かしていたのかな？

「それはどうでもいいからアーニヤてつだって」

「ふう、わかったわよ。こら、起きなさい！　木乃香」

「明日菜さん」

アーニヤと僕は明日菜さんと木乃香さんの体を揺らす。

「うーん、もう朝あ？」

「ふわああ。あ、ネギ君と一緒に寝てたんやったなあ」

そう言って、木乃香さんは僕にギュッと抱きしめてくる。暖かいぞ、それに気持ちいいし。特に胸のほうが。

その時、魔法の射手　火の3矢が飛んできた。
それを感じた木乃香さんは僕を抱き寄せて

「プラクテ・ビギ・ナル　来れ　虚空の雷」

「いや、何を撃とうとしてるんですか！」

モゴモゴ言ってるが口を押さえてるため大丈夫だ。

魔法の射手を空いてる手で吸収した。

「アーニヤ、何をするの？」

「うるさい！　だいたい木乃香も明日菜もあの約束はどこいったの
！？」

「まあまあ」

「まあまあじゃない！」

朝っぱらから元気だな。

背伸びをしていた明日菜さんに聞いてみよう。

「約束って何ですか？」

「え？」

「ネ、ネギ君、それはな？」

なぜか明日菜さんと木乃香さんの顔が赤く染まっていた。

アーニヤもなぜか黙ってるし。

「それはどうでもいいんでお腹がすきました」

「そ、そうやな！　ウチ作ってくるで。今日はどっちがええ？」

和食か洋食か？

「和食で」

「アーニャちゃんと明日菜は？」

「洋食」

「私も洋食でいいわ。そっちの方が楽だし」

「ほな、和食やな」

「木乃香、毎度思うんだけどネギの意見しか聞かないなら聞いてこないで」

あきれたように溜息を吐いた明日菜さんに木乃香さんがはっきりと

「ネギ君と同じかなあって気になるやん」

「それよりも作ってきたら、時間の余裕が無くなるし」

「そやったな」

木乃香さんは僕にウィンクした後、台所の方へ向かった。

食べ終わった後、

「ねえ、ネギ」

「何ですか？」

「あれだけじゃあ足りないと思わない？」

今日の朝食はいつもより少なかった。

ああそういえば今日はアレ、だったな。

思い出した僕は頷く。

「木乃香、あそこ寄ろう」

「ああ、アソコやな」

「アソコってどこよ」

「それは内緒や、着いたらわかるって」

そういう2人の後を付いて行くと、人が集まってくる屋台があった。そこにはクラスメイト数人いた。

「超包子ですか」

「そうや、この時しか食べられん料理もあるんや」
「なるほど」

「へえ、ウチのクラスってかなり変人ばっかよね」

まあ、確かにそうなんだけどね。

でもさ、アーニヤも変人に入ると思うよ？

そう思いつつ、テーブルを囲っている椅子に座る。すると、超さんが来た。

「これはネギ先生、明日菜達もよく来たネ」

「私達はいつもので」

「了解ネ」

注文を受けると屋台の方に引き籠もった。

警戒する視線が感じなかった、な。

あんだだけ暴れたんだから僕を監視してるんじゃないかと思った。

理由はエヴァのことや修学旅行、そしてヘルマンでだいぶ暴れた気がする。

警戒が無いのなら無いでちょっと寂しい気がした。

「そういえばアレはどこまでできるわけ？」

「私は瞬動まで」

「虚空は無理って事ね」

「アーニャちゃんは遠距離やろ？ だったら防御を強くさせなあかんやろ？」

妙な話をしているが、これは他人から見たらゲームの話と解釈するだろうね。

アーニャが虚空瞬動って不要だと思う。障壁を増やしたほうが早い、かな」

「ネギ君の言う通りやな」

「え？ 僕声に出してた？」

「出してたわよ。アーニャが虚空瞬動からね」

そうだったんだ。

「エヴァちゃんに頼んでみよか？」

「え？ 闇の福音に？」

「エヴァちゃんもライバルやねんけど？」

「嘘ッ!？」

アーニャの顔が青くなっていた。

この人たちは一体何を話しているんだ？

それより料理はまだ？

聞こえてくる会話を無視して来るのも待っていたら、超さんがここに来た。

どうやら料理が完成したようだ。

さあ、懐かしい肉まんが食えるぞ。

その後、僕達は超包子の料理を食べたら学校へ向かう。

学校へ向かう途中、小太郎を見つけた。
小太郎はボーッと突っ立って何かを見ていた。
僕は隣まで来て

「あの門、でかいですよね」

「そうやなってネギ!？」

「驚かないで。それより何を見てたの？」

「お前が言うたやん、門見てるだけや」

前には大きな門が立っていた。

これ、前も思ってたけど、いつ建てやがったんだ？
背後から明日菜さんがこう言った。

「学園祭の入場門よ。まあ年を重ねるごとに大きくなってるわ」

「へえ。学園祭かいな。楽しみやな」

「あらあら、小太郎くん」

「千鶴姉ちゃん」

後ろに居る明日菜さんの横から千鶴さんと夏美さんがきた。

あれ？ 前と違うのにどうやって？

「小太郎君」

僕の言いたい事がわかったのか、小太郎が嫌な顔をして

「千鶴姉ちゃんと会ったんわなあ」

事情を説明してくれた。

えと、ようは小太郎の馬鹿がお腹減りすぎて僕の所まで行った。寮に着いたのはいいけど限界でぶっ倒れたらしい。

その時、寮に帰ってきた千鶴さんと夏美さんに見つかった。

慌てた2人は部屋に連れてって、飯を食わせてもらって僕に会う事もなく帰ったらしい。

夏美さんフラグを立てて帰るなんてさすがだ。

「そういう事か、でもあれ？ あやかさんは賛成だったの？」

「反対してたわ。ネギ先生の方が100倍も！とか言っていました」

「委員長ならそう言うやろうなあ」

小太郎は千鶴さんや夏美さんと話していた。

その話の内容はちゃんとなんちゃらかだった。

あゝあ、千鶴さんに目を付けられるのか、フッフ……

小太郎は悪い意味でも良い意味でも不幸の道へ行くと確信した僕は手を合わせた。

僕は職員室、明日菜さん達は教室へ向かった。

職員室に着いたら、久々に見たかもしれない存在感の薄いタカミチに呼び出された。

本当、存在感がまったく無いよね。前よりも遥かにっという哀れみの視線で見る。

「何？」

「学園長がお呼びだ」

「何の用か知ってる？」

「僕は知らないが行って見たらわかるらしい」

答えを聞いた瞬間、役立たずと溜息を吐き、学園長室へ向かった。一体何のようなんだか、と思いながら、

〈学園長室〉

壊して入っても良かったのだが、中には小さき気配が2つあったのでやめました。
扉を開けて中に入ると、そこには

「あ、ネギ先生」

「あなたがネギスプリングフィールドですか」

なんと佐倉愛衣いや、愛衣さんと脱げゲフンゲフン、高音さんがいた。

これは意外なメンバーだった。

ま、それはいい。学園長に聞くことにしよう。

「何か御用ですか？」

「うむ、実はのう、世界樹の向こう側にある森があるじゃろ？」

「ああ、ほとんどの人に感知されない、存在感の欠片も無い空気の森ですか」

「そ、そうじゃ。そこに魔物が召喚されてくるんじゃ。それをどうにかしたいのじゃ」

ようは原因を突き止めて倒せて事か。

やっと、あの時の約束が今になってきた。

「ぶっちゃけどうでもいいんですがいいですよ？」

「引き受けてもらえるか！ ではコレを渡しておこう」

僕にイヤホンとマイクの着いた小型通信機を渡してきた。
そもそもこれを誰に作らせたんだ？

「これを受け取ってどうしろと？」

「もうひとつはコレじゃ」

何か音声も聞ける小さな発信機を15個ぐらい渡してきた。
だから、どうやってこんなもの作りやがった？
それを聞いてみると、あほな回答が来た。

「これを付ければ一石二鳥じゃろ？」

「何の話ですか？」

「……ようは召喚する犯人のどっかに付けろって話ですか？」

「そう言うことじゃ」

「倒してしまえば簡単だと思いますが」

「逃げたらどうするんじゃ？ 確実にしとめるのが一番じゃろうて」

この箒頭は召喚してくる存在に恨みがあるようだ。
どんな恨みがあるんだ？

「ところでこの2人は？」

この時はまだ初めてだから名前を呼べない。
うむ、と頷いた箒頭は2人に頷いた。

察しが着いた愛衣さんが僕の前に立ち

「初めまして佐倉愛衣です。よろしく願いします。あ、呼び方は愛衣でいいです！」

恥ずかしそうに頬を赤くしながらペコリと一礼した。

背後に居た高音さんが愛衣さんの横に移動し同じように一礼した。

「ネギ先生、初めまして…高音・D・グッドマンですわ。高音とお呼びください」

この二人を見てたら、明日菜さん達より礼儀あるなあと思ってしま
う。

でも仕方が無いよ、こっち側にはエヴァやエヴァやエヴァがいるん
だもん。

その光景をほおほおと奇妙に笑いながら見る学園長

「もしかして僕と愛衣さんと高音さんで行くんですか？」

「そうじゃ」

「いつ？」

「今からじゃ」

「授業は？」

「代わりの先生でいいじゃろ」

「わ、わかりました」

早い回答が返ってくる事に呆れた。

最初からこの件で1時間目をサボらせる気満々だったわけだ。

「では頼むぞ」

「はい」

「はぁ、はい」

僕と2人は学園長の言った森へ向かった。
何も起こらなきゃ良いけど、ね。

（空気の森）

ここは間違いなく空気の森だ。
場所は世界樹の向こう側にある森の中。
魔法を使ってもバレないらしい。

「着きましたね」

「どうしますか？」

探知魔法を展開しようとしたが、前方に白装束の男が立っていた。
男の背後には推定150ぐらいの魔物が居た。

「貴様ら、死ににきたのか」

「あなたですの？ この森から進入してくる人は」

「そうだ」

「お姉さま、話していても拉致がありません」

「そうですね、ネギ先生もいいですか？」

確認してくる。

確かに話し合いだけでは無駄だろうな。

相手の気配が、さっきがこちらに向いてるのを気づき、高音さんに

頷く。

「では行きますわよ」

高音さんはなんとかなんとかモードになった。

なんとかなんとかモードってのは僕が覚えていないだけの話。

愛衣さんも呪文を唱え始めた。

そういえばメイプル・ネイプル・アラモードっが始動キーだったけ。
え？ 僕はどうかかって？

決まっている。相手をからかうだけだ。

「3人だから10匹で十分か、ゆけ！ 我がアウルどもよ！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

白装束の男の言う通り、ワンちゃん型アウルらしきものが10匹もこちらに来た。

はあ、舐められたものだな。

僕をたったのこんな獣もどき10匹で倒せると思うなんてさ。

「ふざけてますわ」

「そうですね、日頃のストレスを解消するのに最適だな。融合の射手・雷と火の52矢」

「我が手に宿りて敵を喰らえ。紅き焰」

愛衣さんの呪文と僕の融合の射手が一斉射撃する。

紅き焰が1匹のアウルに当たるが、ハルナさんのマジックシールド
みたいにはじけた音と共に消えた。

僕の矢はアウルの頭部分から貫通して爆発を起こす。

ああこれはきつと、2人では倒せないね。

「え、えと、ネギ先生？」

「な、なんだと！？ この私のアウルが」

「アウルアウルっていうけど全然たいしたこと無いぞ？

もうちょつと本気でかかってきたらどうだ？ 白装束のヤラレ役さん」

雑魚を挑発してみる。

挑発を聞いた敵はプルプルと震えながら僕に指を刺し

「貴様、ならもう手加減なしだ。アウルよ、アウルゲルミルへ融合せよ」

「アウルゲルミル！？」

「ああ、確か北欧神話に出てくるアレか、てつきりブラックボックスと呼ばれ、触手も出してくるあいつかと思った」

「何だそれは、だがお前の言ったとおりそれを含めた化け物なのだ！」

なのだって口調がかわいいな。

ん？ 北欧神話を含めたって意味だろうな。後者は絶対にありえん。

「ネ、ネギ先生！？ アレ」

「え？」

高音さんが叫びながら化け物のほうへ見る。

化け物が、140匹の化け物が融合してる。

はじめは10メートル以上あった化け物だったが、小さくなっていき、最終的には2メートル。

推定魔力はエヴァに近いな。ってそんなにあるの！？

「どうだ！ もう少しすれば闇の福音も倒せるほどの魔力を持つの

だ」

「や、闇の福音ですって!?!」

「呼んだか?」

エヴァの声に気づくと、僕の影から出てきて腕に絡みついた。
エヴァ、人前で、知らない人の前で止めて。
ほら、高音さんと愛衣さんが驚いた表情だ。

「うぬう、闇の福音だと? 馬鹿な」

「フン! 私のネギを倒そうなんて馬鹿な奴だ」

「誰がエヴァちゃんのネギ君やって!?!」

浮遊術で飛んできた木乃香さんと明日菜さん、そして影の薄かった刹那さんだ。

僕のそばに降り立つ。

「っていうか、授業は?」

「そんなもんじゃないわよ? 学園祭の準備だもの、
それにネギが居ないと成り立たないから勝手にやってるわ」

ああ、だから学、箒頭は平気な表情していたのか。

「ネギ先生、早く倒してしまわないと時間の無駄です」

「そうやな」

「ちよつとあなた達!?!」

「何?」

「何だ?」

明日菜さんとエヴァがじーっと高音さんと愛衣さんの全体を見ていた。

何をそんなに見てるんだ？

2人を見て考えていたが、明日菜さんとエヴァが振り返って

「あの二人、かわいい子よね」

「そうだな。で？ ネギ、どうするんだ？」

「敵を倒してしまيشょうか」

「確かに敵ね」

いや、どっちの事を言ってるの？

刹那さんの妙な視線を感じた。

「どうしたんですか？ 刹那さん」

「あ、いえ、何でもありません」

僕から視線を外す。

木乃香さんはフーンとわかったかのような表情をする。

「せっちゃん焼き餅やいてるん？」

木乃香さんの一言で表情を赤くした刹那さんが言い訳をする。

「ち、違いますよ！ ネ、ネギ先生」

「ほら、口調も変やし、慌ててるし」

と、その時、大きな轟音が回りに響いた。
はっと気づいた全員が白装束の男を見る。

「貴様ら！ 俺を無視するんじゃない！ 俺様を無視した貴様ら
には死を持って償え」

「ほう？ 出来るものならしてみるがいい」

「アウルゲルミル、グングニル・スレイヴで崩壊させろ！」

エヴァの挑発に乗った男がアウルゲルミルに命令した。必死に命令して顔が真っ赤である。

マスターの要望に答えようと、アウルゲルミルが魔力を開放する。地面が揺れている。さらに抜け出せないように結界が張られた。状況に混乱する数人に僕が声を掛ける。

「高音さん、愛衣さん、大丈夫ですよ」

「大丈夫ってどう大丈夫なんですの!？」

「そうですよ！」

普通ならそうなんだけだね。

ある人物を見ながら安心の一言を。

「エヴァンジェリンさんがいるんですから」

「でも呪いが」

「それなら心配ない。解けてるからな」

「ええええええええええ！？」

衝撃の言葉に叫ぶ2人。

そんなこんなの話をしている間にアウルゲルミルの頭上に赤色の槍が出来ていた。

相当の魔力が込められている。

白装束の男の笑い声が響いた。

[illegible]

グングニル・スレイヴは不死殺し、神を殺す技でもあるのだ！

例え闇の福音でも触れれば永遠の死を喰らう」

「何だと!？」

「何ですって!？」

僕以外の全員が驚愕の表情を浮かべた。

この魔力で嫌な予感してたが、まさかエヴァの弱点プラス神を殺す技、ね。

あの技ほしいな。複製してしまおうか。と考えた僕は手を前に差し出す。

「ネギ先生、何をなさるつもりで？」

「黙ってみててください」

「わかりました」

「エヴァンジェリンさん、終わる世界やってくれませんか？」

言われたエヴァは頷き、先手必勝と言わんばかり早く唱える。

「リク ラク ラ ラック ライラック

契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ とこしえのやみ えいえんのひょうが」

アウルゲルミルがエヴァのえいえんのひょうがで凍った。

だが、グングニル・スレイヴが消える様子はない。

それに気にせず続きを唱えるエヴァ。

「全ての命ある者に等しき死を 其は 安らぎ也 おわるせかい」

最後まで唱えたエヴァが指を良い音で弾く。

凍っていたアウルゲルミルが割れると思いきや、覆っていた氷だけが割れた。

「意味ないわね」

「エヴァちゃん、むなしいなあ」

「う、うるさいわ！ 闇の魔法を使えば楽勝だ」

言い訳をするエヴァに何故かイヤラシイ笑みを浮かべる木乃香さん。さらに、馬鹿大きく笑い声が聞こえた。

「わっはっはっはっははははっ！！」

闇の福音も大した事はないな。さすが神殺しの銃神だけある」

「銃神？ 因果律の番いやありえないか、仕方ない。

……権限の鍵発動、魔法属性を存在消去の属性に変更」

小声で呟きながら自分の魔力を、魔法の射手を変換する。

自分の中の魔力が別のエネルギーに変わったと感じた僕は前に差し出していた手に集中し、

「これ、詠唱ないからなあ。 権限の射手・1の崩壊」

水色の矢がアウルゲルミルに発射する。

白装束の男は僕が放った矢を見て慌てながらも対応する。

「アウルゲルミル、グングニル・スレイヴ撃て！！」

アウルゲルミルが勢いよく、後ろに持っていく、思いっきり前に投げ

権限の射手とグングニル・スレイヴが衝突する。

これもあっさりとグングニル・スレイヴを崩壊させ、アウルゲルミルの右腕を貫通する。

貫通したと同時に右足も崩壊した。

不思議な現象に僕以外の全員が驚く。

「な、何だと!？」

「すごい……」

「今なら出来るか。幻想世界、天蓋!」

右腕を天に向けて叫ぶと、朝だった景色が赤く染まる。

範囲はココだけだからほかの人に感知できない。

「ネギ先生って何者なんですか？」

「もしかしてこれって私にしようとしたやつ？」

「これは」

後ろからそんな声が聞こえるが気にしない。

白装束の男は悔しそうに口を歪めるが、着用していた白装束の胸にはポケットがある。

そこに手を突っ込み、何かを取り出した。

「おのれ、アウルゲルミルよ! この札で完全回復しろ!」

どうやら回復の札らしきモノをアウルゲルミルに当てるが、何も変化がない。

「バ、バカな!」

幻想世界とは、相手の有利に動く力は通用しない。

だが、その幻想世界展開も時間がない。おそらく僕の魔力が全然足りないらしい。

時間は推定5分程度か、さっさとケリをつけるか。

「一斉攻撃で終わらせましょう。この空間では僕達の方が有利です」
「そやな」

「後で説明してもらわないと」

「わかってますよ」

「それじゃあ行きましようか」

全員が杖を持ったり剣を構えたりする。

白装束の男はひいっと怯えた声を叫ぶが、攻撃を開始する。

※短縮版にてお送りします。

「いっておしまいなさい！」

鞭の音が鳴り響く。ただそれだけ

「ウオオオオオオ!？」

効果は普通に効いた。

「紅き焰」

炎で敵を覆いつくした。

「ウオオオオオオオオ!？」

効果は普通に効いた。

「無極而太極斬」

巨大な剣を振り下げた。

「ウオ？」

前の攻撃で苦しみながらも今の攻撃に首を傾げた。
効果がまったくない。

「何で私のは大して効かないのよ!!」

「そりゃあ神殺しやからなあ」

「次は私の番だ！」

「ええ！？　ウチの番やないん？」

「このちゃんには申し訳ないですが、神鳴流決戦奥義、真・雷光剣」

神鳴流の奥義が直撃した。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!?」

効果は抜群だ！

「あ、せっちゃん！」

「今度こそわた」

「残念、僕がいただきます。雷の暴風!!」

大分弱めの雷の暴風を放った。

「グオオオオオオオオオオ!!」

権限の鍵を解除していないため、効果は抜群すぎる。左腕、足が崩壊した。

バランスを崩し地面に倒れる。
立ち上がろうと一生懸命動いている。

「こうなったらエヴァちゃん！」

「ちっ、仕方がない」

木乃香さんとエヴァが並んで立つ。

何の呪文をやるのやら。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 来たれ氷精 闇の精 闇
を従え 吹雪け 常夜の氷雪 闇の吹雪！」

「プラクテ ビギ・ナル 光の粒子よ、我に仇名す存在に、罰を与
えん 星光破壊！」

「木乃香ったら」

「ウオオオオオオおおお……ウウウ……」

アウルゲルミルの姿が完全に消滅した。

復活する様子もないと確認すると、幻想世界を解除した。

元の景色に戻り、権限の鍵を常時警戒モードに切り替える。

白装束の男は完全敗れたと悔しがるが、逃げることにした。

敵に背中を見せて逃げるなんておろか過ぎるな。

「発信機、てい！」

箒頭から頼まれた発信機を相手の背中に投げ付けた。

付けたと同時に転移して逃げた。

完全に気配が消えた。

「逃げたわね。いいの？」

「学園長に頼まれた発信機を付けましたから大丈夫だと思います」

「それにしても最悪の敵だったわね」

アウルゲルミル、神殺しなんているとは思わなかった。
前にそんな奴居なかったのに、ね。
やっぱりこの世界は何かがおかしい。

「とにかく学園長室へ戻ります」

「そ、そうですね」

「ネギ先生、すごいです」

愛衣さんに尊敬の目で見られていた。子供みたいに目をキラキラさせて。

木乃香さん達はどうするのかな？

「木乃香さん達は？」

「ウチは教室へ帰るわ」

「刹那さんの札の効果が無くなりそうだし」

「そうだな」

刹那さんのアレか。

「ネギ、極移頼む」

「影のゲートで行けばいいんじゃないあ」

「面倒だ！」

「ネギのアレのほうが早いわ」

「しょーがないですね」

「すみません。ネギ先生」

「じゃあ行きます。極移」

極移用の魔法陣を4人に展開し、呪文を発動させると4人の姿が消

えた。

ここには3人だけになったが、高音さんと愛衣さんがこちらを見ていた。

「ネギ先生、今は」

「今は極移といって次元を越えることが出来る上級転移魔法です」

「そ、そんな魔法聞いたことがあります」

「え？　そうなんですか？　古い魔導書に書いてありました」

嘘っぱちの事をさらっと言う。

これは異世界の転移を見て真似ただけの呪文だよ。

それを言っても変な目で見られるだけだから言わない。

僕の嘘に納得した2人は、特に愛衣さんが

「行きましようか。ネギ先生」

何か嬉しそうな笑顔で僕の手を握って歩く。

握られているせいで、僕も合わせるように歩くが、僕フラグ立てたっけ？

アホな事を考えながら学園長室に向かうネギ達だった。

〈学園長室〉

僕達は学園長室に設置してあるソファーに座る。

「よくやった」

「はあ……」

止めを刺したのは木乃香さんとエヴァだけど。

「ネギ君、どうだったかのウ」

「あの男は何者なんですか？ エヴァンジェリンさんの攻撃も効かなかったですよ？」

あの男の持つアウルゲルミルが、だけど。

「それほどか、というかエヴァも行ったのか！」

「学園祭の準備じゃないですか」

「確かにそうじゃが、ネギ君のクラスは何をするんじゃ？」

何をするってもう簡単な喫茶店でもいい気がする。
ぶっちゃけ面倒である。

「それは後で決めます。3時間目でいいですか？」

「2時間目はどうするんじゃ？」

「とりあえず僕、疲れたから休ませてほしいです」

「それは構わんが、おぬしらはどうするんじゃ？」

高音さんと愛衣さんに聞いている様だ。

あんなだけ大変だったんだ。

箸頭の目は「お主らも休憩が居るじゃろう」と聞いていた。
突然立ち上がった愛衣さんが意外なことを言い出した。

「あの、ネ、ネギ先生の膝枕になってもいいですか！！」

「はい？」

「え？」

「ほう……」

予想外のことを言うから変な声が出た。

ちなみに上から僕、高音さん、箒頭（学園長）だ。
というか、何がほう……なんだ？ この爺さんは！

「うむ、ではネギ君の介護を頼むかのう」

「あ、はい！」

「ちょっと愛衣！？」

「何ですかお姉さま？」

何か用ですか的な表情になる。

高音さんが僕の方をチラッと視線を合った後、すぐ逸らし

「私達には授業が」

「学園長が言った通り、学園祭の準備じゃないですか」

「そ、そうですね。でも」

愛衣さんがモゾモゾとしながら小声でブツブツ呟く高音さんを放置して

僕の隣に座り、優しく僕の体を寝かせ、頭が愛衣さんの膝に乗せた。

「ですからって聞いてますの！ 愛衣って何を！？」

「ネギ先生、柔らかいです」

まったく高音さんの話を聞かず、僕の頭を撫でている愛衣さん。
いいのか無視して、と視線を向けると、目が合った。

「お姉様、ちょっと」

「な、何ですか？」

高音さんが立ち上がり、愛衣さんに耳を傾ける。
僕に聞こえないようにしてるのか、愛衣さんが小声で何か伝えてい

た。

すると、高音さんの顔が真っ赤になり、こちらを見たらプイっとそっぽを向いた。

一体何を言っただろう。

「し、仕方ないですわね。とりあえず学園長、私はこれで失礼します」

「ごくろうであつた。またのう」

もう用がないといわんばかりに学園長室から出て行った。

「あ、あの愛衣さん？」

「何ですか？ ネギ先生」

「どうしてこんな事を？」

「そ、それはネギ先生の事が好、す、す」

「……」

あゝあ、この言葉の続きって絶対アレしかない。

ゴメン小太郎、愛衣さんフラグ消しちゃった。テヘッ！

「オッホン！」

「キャッ！ うゝ」

「木乃香にライバル登場か」

突然、変なことを言う箒頭、

つーか空気読めよ！ この爺

愛衣さんがライバルという発言にムツとする。

「えーと、膝枕はもういいですよ」

脱出するために瞬動で入り口前まで移動する。
ああ、危なかったあ。特に理性がやばかった。
下半身に血液が集まってくる所だったぞ。

一応、この状態でもアレは大人だから危険すぎる。

「もう少しさせてくれても」

「駄目です。そろそろ行かないといけないので」

「はあ……」

完全落ち込みモードに入った愛衣さん。

この世界の愛衣さん、どこか違ってませんか？

何というか明日菜さんみたいに。

仕方ない、完全にこちら側にするか、悪い小太郎君よ。

「じゃあ、今度会ったら……え〜と、仮契約してもいいですから」
「本当ですか!!」

滅茶苦茶元気になった愛衣さんが笑顔になる。

はあ、また面倒になるな。明日菜さん達によって
さっきから何もしゃべらなかった箒頭がこう言ってきた。

「若いのはええのう。じゃが木乃香も頑張らねば駄目じゃろう」

自分の娘の心配をしていた。

本当にどいつもこいつも歪んでやがる。

今後どうなるか考えてたら頭が痛くなった。

うん、考えるのは止めよう。

今後のことを考えてみた事を思い出さないように心の底に封印。

「僕はもう行きますよ」

「そうか、できればもう少し見たかったんじゃないが」

「木乃香さんが見つけたらどうなるかの修羅場の間違いじゃないんですか？」

「そうともいうかのう」

素で答えられた。

これ以上、ここにいたら別のフラグが立ちそうだ。

そう思った僕は場所を思い浮かべ、極移を使った。

そして、教室へ向かい、学園祭で何をするのかを揉めた。

メイド喫茶やノーパンなんちゃらとか妙な提案が出た。

いろんな意味でグダグダな状況だった。

結局、夏だからという理由で幽霊屋敷になりましたってあれ？ 今

夏だっけ？

く学園の廊下く

「あ、さよさんの事どうしよう」

教室を出て職員室へ向かう途中に思い出した。

本当なら今頃って訳だ。

「まあいっか。それは今度にしよう」と

そう決めた僕は職員室へ戻るのですた。

第41話 『学園祭編その6 相坂さよの存在』へ。

第41話『学園祭編その6 相坂さよの存在』（前書き）

タイトル変更申し訳ありません。

そこまでいこうと思ったんですが、相坂さよの話メインにしました。

感想、web拍手お願いします。

第41話『学園祭編その6 相坂さよの存在』

くネギの部屋く

学校が終わり、寮に帰った後、僕は3人にこんな事を言った。

「メイド喫茶じゃないんですね」

「な、何を突然!？」

「ネギ君はな、メイド好きやねん」

いや、違うつて!

ただ、好きな人のなら見たいじゃん。

「癒しメイドとか、アーニヤの場合はツンデレメイドだろう」

「ツンデレ?」

「え? 聞こえてたの?」

「うゝん、癒し系のメイドかあゝ」

木乃香さんが人差し指を顎に当てて考えていた。
一体何を考えてるんだ?

「そういえば、教室に幽霊が入るんですよ」

「ええ!？」

「そうなんや、全然気づかへんかった」

「修行のやり直し、かな?」

「ネ、ネギ?」

幽霊程度の気配も感じないとは2人の修行も強化しなきゃ。

エヴァの修行だけでは駄目なんだ。

「でもこれからどうすんの？」

「この部屋の地下別荘で修行を」

「ウチ、用事思い出したわ」

「あ、私も！」

いきなり二人が慌てて用事があるとか抜かしてきた。
そう来ると思った。

「出口を消しましょう」

指をパッチンと弾くとドアが、窓が消えた。
これでただの空間になった。

「これは、幻術魔法？」

「違いますよ。文字通り消したんです」

「ええ！？　うう、ネギ君から逃げられへんのはわかってたけど」

「魔法だったらドアの所に触れたら無効化できるけど出てこないわ」

明日菜さんが出口だった場所にベタベタと触っていた。
これ魔法じゃないから無効化働かないし。

「これであきらめましたね？　では修行しましょうか」

2人の腕を掴み、アーニヤにくっつく。
いきなりの行動でアーニヤが慌てる。

「ネ、ネギ！？」

「アーニヤも来なきゃ」

「え？」

極移を使って、この部屋の地下にある別荘の中へ転移した。

くネギの別荘く

転移した場所は海エリアの上だった。

「あ、間違えた」

「間違えたって！？　ネギ」

「アーニャちゃんだけ落ちるわね」

そう、アーニャには飛ぶ手段がないのだが、僕にへばりついていて、浮遊術も学んでいないし、杖持っていないから飛べない。

「ネギ！　地面のある場所まで移動して」

「わかってるよ、アーニャ」

魔力のオーラを包み込み、明日菜さんと木乃香さんの腕をもう一度持ち、森エリアまで飛んだ。

途中で悲鳴が聞こえたけど気にしない。

森エリアに着いた瞬間、3人を放り投げた。

投げられた3人は森の中にある池に突っ込んだ。

普通に着地した僕は池を見て

「大丈夫だよ。その池は水がきれいだから」

「あゝ！　服がびしょびしょ」

「ネギ、あんたねえ」

「とりあえず池からあがったら？」

3人の表情を見る。

言いたいことがあるのか、2名は僕を睨み、木乃香さんは冷たいせいで震えていた。

「さぶっ！」

「風邪引いたら洒落にならないわ」

「誰のせい何でしょうね」

「今夏に近いんでしょ？ 何であんなに冷たいのよ！」

「ここは永遠に秋みたいな感じですよ？ 海エリア含む全ての水は1度ぐらいです」

「ネギ、あんた絶対私達を風邪引かせたいわけ？」

「違うよ、アーニヤっていうか、魔法で乾かせばいいのに」

僕がそう指摘すると、3人は手をポンと合わせた。

本当に気づいていなかったらしい。

一応、木乃香さんもほぼ全属性魔法使えるはずなんだけど、ね。

「ああ、その手があったなあ」

「明日菜は火の魔法使えるの？」

「使えるわよ。でも風のほうが速い気がする」

どっちもどっちだよ。

確かに風のほうが速いけど、威力が高いと行方不明になる。

「ほな、風の魔法やな」

子供用杖を持った木乃香さんが風の魔法を使った。

そして、1時間後。

風の魔法で乾かした3人を見てそろそろいいだろうと僕は話をする、

「それじゃあ、修行を始めましょうか」

「はい」

「まずは、アーニャ」

「な、何？」

僕の雰囲気がいつもと違うことに戸惑う。

「うーん、潜在能力開放させようか。前は邪魔されましたし」

「うっ！」

邪魔したツインテールが呻く。

反省はしてるみたいだからいいけど。

「アーニャ、動かないでね」

「え？」

ぼけっとしている間に、権限の鍵を右手に持ってアーニャのお腹に入れた。

入った瞬間、アーニャの表情が変わった。

「くっ！ な、何これ……何か前より熱くて、大きい……」

「これだけ聞くとエロエロやなあ」

「こ、木乃香」

「潜在能力開放」

権限の鍵が輝きだすと、赤いオーラがアーニヤを覆う。
火を尊重しているみたいだ。

アーニヤの得意魔法は火。

「な、何これ」

「千雨さんほどきつくはなかったけど、これで強くなるはず」
「そうなんだ」

あまり実感が沸かないアーニヤは体を動かしていた。
夕映さんやのどかさんにかけたやつと違うからな。
アーニヤと千雨さんはこっちのほうが効果大きいし。
遠距離が強くなりやすい、という一点では。

「じゃあ、今のうちにアーニヤ？」

「な、何を!？」

アーニヤは瞬動で後ろへ下がった。
僕の断罪の剣を回避したところを見ると接近戦がちよっただけまし
になったかな？

「やろうか。明日菜さんも木乃香さんも参加してくださいね」

「え？」

「ウチも？」

「ええ」

満面の笑みを浮かべた僕は周囲に魔法の射手をばら撒く。
僕が何をするのか感じ取った2人は戦闘モードに入る。

「融合の射手 闇と光と雷の80矢 発射」

「嘘ッ!？」

「3属性の魔法の射手!？」

「何でそんなことまでできるのよ～～!!」

3人は対抗するかと思ったが後ろに背を向け、逃げて行った。その後を追うように融合の射手も追尾を開始した。

結局、逃げられなくて直撃しました。

ダメージが大きいかったため、中級クラスの治癒魔法をかけてあげた。

別荘の時間で言うと2日が経った。

「よし、燃える天空も5発なら撃てるようになったわ」

「ネ、ネギ……効果ありすぎじゃない？」

「こんなものですよ？ アーニヤ、せめて燃える天空10発分は無いと」

「無理よ!!」

普通なら無理だろうが、潜在能力開放の効果はまだ残ってる。今のうちに鍛えたら撃てるようになるな。

「撃てるようになるんはええけど、ぶっ倒れるんやないん？」

「体力的ね」

「アーニヤも瞬動できるんなら虚空瞬動も習おうよ。それで遠距離にして相手をぶっ飛ばす」

「……わ、わかったわ。やればいいんでしょ!!」

なぜか僕を悔しそうな表情で見て、勝手に何かを納得して大声で叫んだ。

虚空瞬動はちょっと難しいけど、まあアーニヤなら大丈夫か。

「虚空瞬動はエヴァンジェリンさんにでも教えてもらいましょうか」

「ええっ!？」

「アーニヤちゃん、どっちにしてもエヴァちゃんの所へ行くんでしょ?」

「……うん」

こうして、現実世界に戻った僕達は学校へ向かった。

く教室く

うーん、明日菜さん達を鍛えたけど、あまり上昇しなかった。

あまりといっても、僕にとつてのあまりなので普通の人から見たらパワーアップしてるんだろうね。

これからどう鍛えるかと考えていると、アキラさんが僕に声をかける。

「先生!」

「どうかしたんですか?」

「この新聞見てください!」

新聞を見てみると、幽霊というか相坂さよさんが写っていた。後にしようと思ったが早いよ。まあいっか、予定とは違うけど計画通りに進行させようか。

「えと、何々？ 幽霊現る？」

「実は昨日の夜、居残りしてて、誰も居ないはずなのに椅子が浮いてたり、机が浮いたりしてたの！」

「はぁ、見た人は？」

「居残りしてた人全員だよ」

クラスの半分が居残りしてたらしい。

僕はいなかったって？ 面倒だから頼んだ。

「ネギ先生がらみですか？」

夕映さんが小声で話してきました。

僕も同じく返事をする。

「違いますよ」

「でも何であんな現象が？」

「そういえばこのクラスに一人居なかったような」

「そいつは幽霊だからだろ？」

「相坂さよ、ですか」

「あたりだ」

「エヴァちゃんは知ってたの？」

「当然だろ？ 真祖を舐めるな」

「うーん、ウチも全然見えへんけど」

人間が見える現象と陣外が見える現象は違う。僕の場合は切り替え自由だから別に構わない。

今、オフ状態だからさよさんは見えないけど。

「現れるのは夜、ですね。それじゃあ夜に」
「そうね」

放課後を過ぎても、帰った人はいなかった。
その理由は幽霊という人の心をくすぐる様な話題だったからだ。

そして、夜になった。

んーん、確かに妙な気配はする。
おっとそろそろONにしとくか。
僕は目に魔力を通す。

「ネギ君、怖いよ」

「わわっ！」

「ちよっと、まき絵さん？」

「まあまあ委員長も」

裕奈さんが怖い視線を向けるあやかさんを止める。

「幽霊だよ！？」 ネギ君は幽霊って怖くないの？」

桜子さんが茶化すように聞いてくる。

「怖くないですよ？」

そう。僕は幽霊怖くない。

だって、ここにいるのはさよさんだし。

仮契約もしてたし、僕の……だったから怖いとかありえん。

「科学部から幽霊退治用の装備もらおう！」

「いやいや、そんな必要ないでしょ？」

明日菜さんが僕に知ってるんでしょ？という視線を向けてきた。

「そうですね。その幽霊さんはウチのクラスですよ？」

「「「え！？」」「」」

一部の人以上が唾然とする。

普通は幽霊がクラスメートなんてありえないからな。

証拠として皆に見えるように出席簿の最後のページを見せる。

「へえ、相坂さよっていうんだあ。隣の席だから話したいなあ」

わ、私も話したいです！

「え？」

「今、何か聞こえませんでしたか？」

皆がキョロキョロしてるが、さよさんは黒板のところにいる。

今の教室は不要なモノを後ろのほうに寄せている。

理由は簡単、お化け屋敷、幽霊屋敷どっちでもいいけどその準備。

「幽霊怖いよお!!」

「ひええ！
黒板になんか書いてある！」

「何々？
ごかいデスって怖いよ！」

「5回死ねって事!？」

「本当に幽霊がそんなネタ知ってるのか疑問に思いなさいよ」

明日菜さんの言葉は最もだ。

まき絵さん達が有り得ない現象にパニックを起こす。

あれじゃあ誤解されるのも無理ないな。というか何で魔法を知ってる明日菜さん達は平然としている。

「さてと」

溜息を吐いた僕はさよさんを見えるようにさせるため、入り

口のほうへ移動。

誰にも見えないよう、廊下に手を出す。

権限の鍵を実体化させ、

「相坂さよ、存在する魂、確認完了。認識を幽霊から人間に再構成。復元魔法第4修正、魂の新生」

すると、黒板の前に人型の光が浮かんだ。

光がさらに強くなり、教室全体を包み込んだ。

「キヤア！
何の光！？」

「わかんない！」

数秒後、光が止んだ。

「ええええええええええ！？」

皆の驚く声がした。

それも当然だ。居なかった人物がその場にいるのだから。もちろん、幽霊特有の魂は浮いてない。

「あ、あの〜」

「それよりあなたは誰ですか？」

「え、話しかけられた！？ わ、私は相坂さよと言います！」

頭を下げるさよさん。

本人は気づいていないようだが、空中に浮いていないし、足も存在する。

権限の鍵を利用して、魂を新しく再生させただけ。

「ネギ君の出席簿で見た子だ！」

裕奈さんが叫ぶ。

さあ、どうなるのやら。

「あれ？ わ、私……立ってる！？ それに、え？ 幽霊じゃない？」

まったくわからない状況に戸惑ってるさよさんに僕は近づく。

「相坂さよさん、でしたよね？」

「あ、はい！ ネギ先生」

僕はそんなさよさんに近づき、小声で呟く。

「相坂さよさん、後でお話があるので屋上まで来てもらえませんか

？」

「はい」

「それでよろしいです」

満面の笑顔を浮かべる僕。

用は終わったから明日菜さん達のところに行き、周りに聞こえないように呟く。

「明日菜さん達も後で屋上に来てもらえますか？」

「ねえねえ、ネギ君」

「あの子、幽霊だったんでしょ？ 何で」

「人間になってるな」

エヴァにはわかったか、というか他の人もわかるようにしてるし。

人間だと感知できるならOKだ。

でもな、超さんもいるんだよな。

警戒の視線を感じる、と思ったが

「おお！ 人間に戻ってるとは興味深いネ」

とか言って、科学でも実現できない現象に興味深く見ていた。

まあ、こんな現象は僕がやったとわかるはずもない。

「警戒されていないなら良しとしましょう」

さよさんのほうへ見ると、朝倉さん達が話しかけていた。

聞かれているさよさんもとても楽しそうだ。

その様子を見てみると、木乃香さんがここは教室なのにも関係なく腕に絡み付いて

「ネギ君、幽霊から人間になるって有り得るん？」

「私もそんな事出来るとは聞いた事ないです」

「ネ、ネギ、あんたただけ非常識になったの？ ナギさんを超えてる？」

「今はその話やめてもらえませんか？」

僕がやったなどバレたらこの学園から消えることになりますよ？」

「うっ……わかったえ」

「どうしてだ？」

エヴァや明日菜さん達は納得しない表情だった。

向こうに行ってたはずの夕映さんとのどかさんが僕に話しかけてきた。

「ネギ先生、裕奈さん達が歓迎会をやるうって話をしてましたが」

「これはまずいのでは？」

「学園長に聞かれてもしたら」

「関係ないだろ。この学園は非常識の塊でできている」

「どこが非常識なのよ」

明日菜さんが自分のことを言ってるのかとエヴァを鋭く睨む。

エヴァは明日菜さんの答えに首を横に振る。

「アホか？ 弱い結界、変な図書館島、小学生しか見えない双子とかおかしいだろ」

「エヴァちゃん、小学生ってエヴァちゃんもそう見えるんやけど？」

「けんか売ってるのか？ 木乃香」

「別に」

揉めているが、僕は全員に大声で叫ぶ。

「皆さん、学園祭の準備に戻ってくれますか？

幽霊事件も解決したでしょ？だからもう安心ですので」

「あ、そういうばそんなものがあつたつけ」

「あははは」

まき絵さん達は忘れていたのか、それよりもあやかさんに視線を向ける。

こちらの視線に気づいたのか、あやかさんが頷く。

「皆さん、ネギ先生の言う通りですわ。

ただでさえ遅れてますのに、これ以上遅らせたらネギ先生に申し訳ないですわ」

「そうだね！」

「そうよそうよ！」

「ようし！ 頑張ってみますか！！！」

皆さんが賛同してくれた。

やはり、今の僕では纏めきれないや。

おっ！ さっそく皆さんが協力して学園祭の準備を始める。

「あ、それ取って！」

「はいよ！」

「ああ、委員長！ これどうすれば」

「それはそちらでお願いしますわ。ああ！ あれはああして」

「これはどうするアルカ？」

「超さん、それはあそこにやって調整をお願いしますわ」

言葉だけだと訳が分からないね。

それより忙しそうだ。邪魔にならないよう、僕は教室から出た。

く屋上く

屋上に来た僕は夜空を眺めていた。

夜というのに明るいようにも見える。

星がキラキラと輝いていた。それはまるで僕を歓迎しているような光景だった。

「……」

綺麗な、懐かしい光景を眺めていたら背後から、屋上の入り口から数人の気配がした。

「ネギ先生」

「ふう、抜け出すの大変だったわ」

「そ、そうですか」

「ところでネギ、さよちゃんの事で聞きたいことがあるんだけど」

「答えますよ」

僕の答えに驚いたのか、見開いた目で見る。

「さよさんは間違いなく人間ですよ。幽霊ではなく、ね」

「どうやって人間にしたの？」

「魂を巻き戻して幽霊から生きていた時代に変えただけです。これは復元魔法第4修正です」

復元魔法という言葉を出した瞬間、明日菜さん達があきれた表情で溜息を吐いたが、

ほとんど見ないハルナさんが聞いてきた。

「復元魔法？」

「ハルナ、噴水の広場があるじゃないですか」

「あるわね。世界樹のところに」

「本来上なら破壊されていたのです」

「ええ！？」

驚くのも無理ないけど、僕が壊して直したから良いが。

「それをネギ先生が直したのです。復元魔法で」

「第2、第3かなんてどうでもいいですが、第4修正はそういう関連です」

「そうなんや」

第4修正は、生命や無機物というか動く何かを修復できる。

そうなった理由など僕にも分からないが、いつの間にか使える、ただそれだけだ。

「私のチャチャゼロにそれをやったらどうなる？」

「動くでしょうね。復元といってもそれを元にするモノは生み出してますし」

ちなみに、第5修正は星規模の再生。ただし、この第5修正は制限だらけ。

そうじゃなければ、この世界に来る前の地球を再生できたはずだ。試したけどできなかった。

どうやら存在できなくなった空間は修正できない事だった。まったくの制限だらけといっても過言ではない。

「動くのか」

僕の言葉で顎に手を当てて考えるエヴァ。

とんでもないことを考えているのだろうが、今は気にしない。

「さよさんは人間になったって事です。僕がした事は言わないでくださいね。言ったら」

「言ったら……?」

「言ったらどうなるですか?」

緊張した声で僕に聞く夕映さん。

僕がこんな事が出来ると知った時、周りはどういう反応を起こす? もし僕を魔法世界に強制連行等されたら明日菜さん達はどのような? その間にフェイト達に明日菜さんが攫われる? 木乃香さん達が傷つく?

そうになったら僕はようになる?

ああ、頭がぐちゃぐちゃになってきた。考えがおかしくなる。そういうイライラも纏いながらつい呟く。

「記憶を崩壊させる」

「」「」「ツ!?!?」「」「」

「僕の考えを否定するなら消してやる。」

俺の全てを否定するなら記憶も精神も存在も消滅させてやる!!」

10歳の子供とは思えないほどの殺気を込めて叫ぶ。

「ネ、ネギ、先生……」

「あ……」

震えながら僕を見るのどかさんを見てハッと我に返る。
正氣に戻った僕はぐちゃぐちゃに考えていた過程を心の奥に置く。

「っていうのは冗談ですよ？」

「え？」

「冗談だったら普通の人が死ぬような殺氣立てるの止めて。マジ怖いわ」

「そ、そやな」

「ごめんなさい。話が変わりますがさよさん」

「は、はい!？」

「僕と仮契約しませんか？」

「「「「ハア?」「」「」」」」

「ネネネ、ネギ!？」

皆が間抜けの声を出した。

そんなに驚くことかなあといいながら理由を説明する。

「だって魔法なんですから誤魔化し聞かないじゃないですか」

「それはそうですが、大丈夫なんですか？」

「刹那さん、幽霊が人間になったら悪霊になることはないんですよ？」

「そ、そうですね」

刹那さんは一瞬ためらったような表情を浮かべたが、納得してくれた。

「ここにいる皆さんに言いますが、この事を言ったら」

「わかったわ」

「ネギ先生、私も賛成です」

「はいはい」

ふう、これでいいか。

さよさんが足音を立てながら僕の前まで来る。

「仮契約ってどうするんですか？」

「それは僕に任せてください。仮契約魔法陣展開」

カモが居ないため、僕が仮契約魔法陣を作らなきゃいけない。

手を地面に向けると、魔法陣が描かれていった。

紫色の魔法陣が完成したと光りだす。

「中に入って」

「あ、はい」

オロオロしてるさよさんだったが、決心した表情になって中に入っ
た。

すると、制服のスカートがふわっと浮く。

その際、中身を見ようとしたが、やはり無理だった。

「……後はキスだけです」

「え、ええ！？ あ、でも」

キョロキョロと周りを見渡すが、

明日菜さんは溜息を吐き、木乃香さんはちよっと上目遣いで僕を見
てる。

夕映さんとのどかさんは興味深そうに僕とさよさんをじっと直視す
る。

エヴァは何か腕を組んで指をトントンとさせている。

アーニヤはというと後ろを向いていた。あまり見たくないのだろう。

「ネギ君の仲間になるんなら別にいいんよ？」

「とか言いながら焼き餅やいてる木乃香でした」

「明日菜だってスカートの裾をギュッと掴んでるで」

「そんな事より時間がないんだ。さっさとやれ」

今、頬を膨らましたエヴァの胃袋も限界だろう。

明日菜さん達も限界になったらたまったものじゃない。

だから僕はさよさんの肩を掴み、唇を合わせた。

「んっ！」

「……（さよさんの所にアレを入れておきますか）」

人間にしまったため、狙われるだろうと思った僕は対策を立てる。

僕の中にあるエヴァのアレをさよさんの中に入れる。

急に入れられた影響でさよさんの表情が変わるが、そのまま受け入れてくれた。

仮契約の魔法陣が輝いた後、当たり前のように仮契約カードが出現する。

確認した僕はさよさんから離れてカードを見る。

「これは」

「どうしたんですか？」

さよさんが僕の横からカードを見てくる。

うーん、確か胸77あるんだっけ？

うう、何かやばい！ あの時を思い出しそうだ、と思ったが、さよさんがいきなり離れて謝ってくる。

「うい、ごめんなさい！ 私つい」

「何がついなん？」

変なオーラを覆っていた木乃香さんがさよさんの手を握る。
何かする気なの？ 木乃香さん

「ネギ君の感触どやった？」

「え、ええっ!？」

両手を左右に振りながら慌てている。
友達感覚でからかってるんだ。

「これでさよ……ちゃんてええね？」

「はい。木乃香さん」

「さよちゃん、ウチが一番やからな？」

「誰が一番だ？ 木乃香」

なぜか木乃香さんとエヴァが睨み合っていた。
というか、魔力開放するのは良いが、ここは学園だぞ？

「ウチが1番や。エヴァちゃんは明日菜の次や」

「ほう？ ならばその1番の実力見せてもらおうか」

「ええで？」

だから魔力開放すんなって！

明日菜さんからも何か言ってくださいよ。と視線を向けると、

「ごめん無理！」

諦めていたのです。

フフフ……だったら仕方がない。

「木乃香さん、エヴァンジェリンさん？」

「ネギ君？」

「ネギ？」

僕に対して反応する2人に悪魔的な笑みを浮かべ、こう呟く。

「ここで暴れるなら、もうアレはしてあげませんよ？」

「「っ!？」」

2人の表情が青ざめ、開放していた魔力を体内に戻した。
夕映さんが首を傾げながら僕に聞いてきた。

「ネ、ネギ先生？」

「何ですか？」

「ア、アレとは？」

「アレはアレです。気にしないでください」

「いえ、気になるのですが」

気になるとか言われるが、僕はあっさり無視する。

今はそんなことをやってる場合じゃない。

それに権限の鍵を使ったから眠いのだ。

「アーニヤ、さよさんに適当な説明を頼むよ」

「え？ 適当でいいの？」

「はい。僕は眠いのでこれで」

居残りしてるあやかさん達がいるけど、ここは皆に任せよう。

僕は勝手な思いつきとあまりの眠たさで面倒になり、極移で部屋に戻った。

くネギの部屋く

極移で戻ってきた僕は赤いソファで横になる。

向こうの方で何か光ってるな、と思ったらカモがパソコンを操作していた。

「兄貴。借りてるッスよ」

「別に構わないよ」

「何か元気がないッスね」

「なんでもないよ。眠りたいから静かにね」

「わかりやした」

そう言うのと、カモがパソコンの画面に視線を戻す。

カモの気楽な態度に溜息を吐いた僕は自分の手を見てハッと気づいた。

魔力が限界魔力が膨れ上がっている。

なぜそんなことが分かるのって？ 権限の鍵で常に計算してるからだ。

「時期が近づくごとに僕の魔力が戻ってきてる気がする」

「なんじゃこりゃー!？」

カモの小さいくせに馬鹿でかい声で目が覚める。
一体どうしたというんだろう。

「どうしたの？」

「これッスよ」

「ん？ ……真・やてんのまどうしょって書いてあるね」
「こんな魔導書見たことないッスよ？」

画面には次のように記載されていた。

真・やてんのまどうしょ 1500オコジョ

ある遺跡から発見された古代魔導書

中身は我々の分からない文字で記されているため価値がない。
ただタイトルだけは分かった。

コレクターとしてなら必須アイテムだ。

「兄貴、どうするッスか？」

「ん？ ああ……」

分からない文字の魔導書というのなら欲しいかも。
どうするか？ 決まっている。

「いるに決まってるじゃないか。興味がある」

「そうッスか」

1500オコジョってやけに安いな。

なぜ買う気になったかって？

権限の鍵が求めているような気がした。

アレは助けになるから、と聞こえたような感じ。

アレの正体は届いたら意味が分かるでしょっというわけで僕はソフ
ァーで横になる。

「真・やてんのまどうしょ、前に無かったイレギュラーアイテム、
か」

そのまま目を瞑る。

眠る際、権限の鍵と同一ぐらいの■■■書がある。

それと■■■することにより、■■■者の■■■が■■■する。という言葉が聞こえた気がした。

それが何なんだ、と心の中で呟き、今度こそ眠りに着いた。

第42話『学園祭編その6・逃げる超とネギの接触』

第41話『学園祭編その6 相坂さよの存在』(後書き)

次の更新はく9月18日更新予定です。

第42話「学園祭編その7・少し早い世界樹の話と超とネギの接触」(前書き)

今回は無理矢理な展開があり、第41話終了から時間が経過しています。

第42話 「学園祭編その7・少し早い世界樹の話と超とネギの接触」

あれから数日後の朝。学園祭まであと少しの日付だった。

「何だこれ？」

僕が起きたら、何でエヴァと刹那さんが両隣で寝ている？

パジャマ姿の刹那さんと黒いネグリジェ姿のエヴァ、

思いつきり近距離だし、吐息はかかる。片方の胸はアレだし、もう片方は言うまでもないが…。

「う、うーん」

「ネ、ネギ……そこはダメ、だ」

「どんな夢を見てるんだ？ 嫌な予感しますね。極移」

面倒だから向い側の青いソファーに転移した。

ああ、理性消えるかと思った。

特に刹那さんがやばいんだよ。確か71ってああ、さよさんより小さかったんだ。

それでもやばかったよ。女性特有のってどうでもいいな。

そういえば、真やてんのまどうしよはいつ届くんだったけ？

「カモ」

「なんです？」

「あれはいつ届くの？」

「学園祭の前日ですね？ 前に頼んだのと一緒に来るらしいです」

絶対服従のアレか。

本当に効くとは思っていない。効くようにすれば問題ないが。

何のために必要かはイレギュラーにもよる。
だから購入したに過ぎないから、できれば女の子には使いたくない
なあ。

使ってナニナニしてみたいというのは本音だけど、そういう事で使
ったら嫌われるしね。

「届いたら早急に僕のところへ届けてほしい」

「兄貴のところへですかい？」

「特にまどうしょの方だね」

「イエッサー！！」

軍式で言われても困るのだが。
まあいい。

カモは別の意味で僕の大切な

「大切な食糧だからね」

「へっ！？」

「何でもないよ。そんなことより何でここにエヴァンジェリンさん
と刹那さんがいるの？」

さらに言うけど明日菜さんと木乃香さんがいないわけ？」

「学園祭の準備ですぜ？」

「ああ、なるほど」

刹那さんとエヴァってなぜサボってるんだ？

まったく理解できないのだが。

「どうでもいいけどおきてもらおうか」

僕は寝ているエヴァと刹那さんの肩を揺らす。

目も開けようとしてもしない、寝ているフリしてる気配もない。

「雷の暴風、15連」

そう呟いたら、いきなり2人が起きて僕の両手を防ぐ。
だが、その程度で僕の魔法は止まらない。

「起きたなら起きたでいいんですが、目を覚ますという意味で撃ちましょうか」

「いらん！」

「いりません！」

「どうか死ぬだろ！私が」

「私です」

明日菜さんの魔法無効化のことを言ってるのか？

「大丈夫ですよ。雷の暴風15発一斉射撃程度で死ぬわけではないじゃないですか」

「いや待て！ 15発分って千の雷1発分と半分の威力だろ？

さらにいえば、ネギの雷の暴風は学園が消し飛ぶだから……確実に私死ぬだろ！！」

「学園の広さってどれぐらいでしたっけ？」

知らんよ。そんなことはもはやどうでもいい。

どうでもいい話ができるということは既に目が覚めている証拠だね。

「撃ちませんよ」

「はぁ……助かった」

「助かりました」

安堵の息を吐いた2人だが、僕からすれば前と逆の立場なんだよ。

前はほら、僕も弱かったし。
懐かしいと浸っていると、刹那さんが声を掛けてきた。

「ネギ先生」

「なんですか？」

「朝食にしましょうか？」

「木乃香さんは？」

「このちゃんは夕方じゃないと戻ってこないらしいです」
「ええ！？　ってあれ？　料理はだれが作るの？」

エヴァのほうへ向くが、寂しそうに俯き

「私は作れん……」

「私が作りましょうか？」

頬を赤く染めた刹那さんがいました。

この時期の刹那さんは和食なら作れたっけ。

「では作ってみましょうか」

「刹那、ネギのポイントを稼ぐ気か？」

「そんなわけないでしょ？　このちゃんの料理食べてるネギ先生が
私程度の料理を」

「……ところで今日はどうするんですか？」

「準備だろ？　それは永遠に変わらんさ」
「ですね」

刹那さんも自由な態度になったなあ。

「お腹空いたので作ってきますね」

木乃香さんのエプロンを付けて奥へ行く刹那さんであった。

今、僕とエヴァ2人だけになった。

大した意味はないけど。

「ネギ」

「何？」

「料理出来る子のほうがいいのか？」

突然、いまでは絶対ありえないことを聞いてきた。

「いきなりどうしたんですか？」

「いいから答えろ！」

「そうですね。できるならその人の料理食べてみたいです」

「んー、そ、そうか」

一体、何が言いたかったんだ？

まあわかってるけど、この時期にこれはないでしょ？

「兄貴」

僕の領域から飛び跳ねてきた下等生物が僕の肩に乗る。

「どうしたの？」

「オコジョネットしてていいッスか？」

「別にいいよ」

「ありがとうっす！」

そして、元の場所へ戻るカモ。

それにしてもオコジョネットって前にあったっけ？
あまりにも印象がない。

「はぁ」

料理はまだか、と念じているとエプロン姿の刹那さんが来た。

「できたんですけど」

「ならもってこい」

「手伝ってほしいんですが」

「わかりました」

エヴァは全くやる気がなさそうだし僕が行くことにした。

刹那さんはなぜかニヤツと笑みを浮かべ、拳を作っていた。

全部運び終わった後、いただきます。と言ってから食事にする。

3人で食事を取った後、学園に向かった。

〈教室〉

お化け屋敷、幽霊屋敷どっちでもいいや。

前よりも早くできていた。

これも徹夜したせいかもしれない。

「ネ、ネギ」

「アーニャ、大丈夫？」

「生きてるわ。徹夜で寝てないわ」

「僕はじつくりと寝ましたが」

「ネギも手伝ってっていうとあやかがうるさいわ」

アーニヤは寝不足の上、色々とコキ使われているそうなの。皆も同じだから誰も反論もないが。

「ネギく〜ん」

木乃香さんが抱きついてきた。徹夜した割には元気である。

「ここ、教室よ？」

「そんなん知らんわ」

いや、知らんと言われてもな。

すると、木乃香さんの背後に表情はニコツとしても目が怖いあやかさんがいた。

「ちょっとお待ちなさい。このかさん」

「あやかさん落ち着いてくれますか？」

「はい！」

僕に呼ばれた瞬間、態度が180度反転した。

う〜ん、僕に呼ばれたことが嬉しいの？

まあ、未来ではそれ以上だったから言うまでもないか。それはいい、現状を聞こう。

「準備はどれぐらい進んだんですか？」

「後数日で完成ですわ」

「後数日って3、4日後しかないじゃん！」

「えー？ まだそんなにかかるの！？」

裕奈さんとまき絵さんがそれを聞いてだるい気分になっていた。聞いていた朝倉さんたちもしんどそうな表情に変わる。

「間に合うからどうでもいいけど、これはしんどいわ」

「ハルナは余裕そうね」

明日菜さんが眠そうに疑問を漏らす。

「ハルナは修羅場というなんちゃらんちゃらで慣れています」

「なんちゃらって何よ。でもそうね。慣れてるのはすごいわ」

「でしょ！」

ハルナさんに感心してる明日菜さんだが、ハルナさんは漫画を描いてるだけですよ？

それでもすごいけどね。

僕だって最初は1時間程度しか全力で戦えなかった。

何回もしているうちに慣れてしまい、何十年でも全力で戦えるようになった。

今はだいぶ力が落ちてるからたぶん、半年ぐらいだろう。

「皆さん、今日で終わらせますわよ！」

「はーい！」

「そして学園祭を楽しむんだ！」

「そうよ！」

「うん！」

一致団結になった。

滅茶苦茶違う動機の人が多数。

っていうか、別に明日が学園祭じゃないですよ？ 前はその通りだったけど。

「あわわ……すごい熱気です」

さよさんはこのクラスのテンションに。

僕と視線が合うと頬を赤くして横に逸らした。

何で？と疑問を持つと、ずーっとその辺に座っていたエヴァがこちらにきた。

「ネギ、相坂さよは幽霊に戻ることもあるのか？」

「ないですよ」

だからエヴァのアレを入れたんじゃないか。

力だけぶちこんだから元に戻る要素が来ても大丈夫だ。
記憶まで預ける必要はない。

「そうか」

「ネギ先生」

ノコギリらしき道具を抱える茶々丸さんに話しかけられた。
今持ってる刃物が大きいっていうか危ないです。

「な、何？」

「マスターにも聞きたいのですが」

「何だ？ 茶々丸」

恥ずかしそうにもじもじしていた。
言うのを躊躇う行動を取っていたが、もじもじを止めた。

「実は、短い時間でもいいので私を人間にできますか？」

ああ、そういうことか。

権限の鍵で変換すればできるかも知れない。

ただ、問題がひとつだけあった。

「あることはあります」

「茶々丸さんを人に出ることが出来るん？」

「問題があります」

「何でしょうか？」

「実行した場合、二度と元に戻れない可能性が高い」

「そ、そんなにですか？」

「というか、人にできること自体が有り得ないんだが？」

ここ、教室だからその後の説明は後にしよう。

「茶々丸さん、詳しい話はえと、今日の夜ぐらいで良いですか？」

「あ、わかりました」

茶々丸さんが僕の意図がわかり、頷く。

夜に指定したのには訳がある。

それは、だな。

その時、電話の着信音が鳴った。

「誰だろうって学園長？」

ポケットから携帯電話を取り出し、電話に出る。

「もしもし」

『ネギ君かね?』

「僕以外にこの電話に出るわけないじゃないですか」

『そうじゃったな』

「何の用ですか?」

『木乃香との進展はあったかのう?』

「ないですよ」

なんて事を聞いてきやがる!

10歳の姿の僕とこれ以上の進展なんて無いって。

『年齢詐称薬で一気に進展してくれても良いのじゃぞ?』

「それは別の意味で問題なんですが?」

『うーん、ライバルが増えた事で進むのも難しくなった訳じゃな?』

「意味が分かりません」

『これは大変じゃな。まあよい……木乃香には既成事実を作るとい
う事を教えよう』

聞こえてくるのは奇妙な笑いだった。

向こうの声があまりにも不気味だったので話を変える。

「それで何の用ですか? 無ければ切りますか?」

『今すぐ世界樹の前まで来てくれないかのう?』

「世界樹?」

『そうじゃ』

時期的に早くなってる。

一体どうなってることやら。

いやでも、別の話かもしれないと自分に言い聞かせる。

「わかりました。僕一人で?」

『できれば刹那君と一緒にじゃ』

「わかりました。刹那さんとその他と行きます」

『その他って』

もう意味はないと思い、電話を切った。

教室でかけてくるとは思いもしなかったな。

「今すぐ、か」

一応、イレギュラーのことも考え、実力のある組み合わせを考える。
木乃香さんはココの準備に参加してもらわないと。
のどかさんや夕映さん、あやかさんも同じく。

明日菜さんも体力あるから重い物に困ると思うからココに放置。

千雨さんやアーニャは問題外、と空いてるのはエヴァ、か。

「エヴァンジェリンさん、刹那さん、これから用事があるので着いてきてもらえませんか？」

「え？」

「何？」

僕は2人をお願いした。

僕の表情を見て、2人は溜息を吐いた。

なぜに？

戦力的にはちょっと不満だけど、さすがにそこまでのイレギュラーが来るとは思えないし。

「別にいいぞ」

「わかりました」

「場所は世界樹の方ですがエヴァンジェリンさんは僕の影に隠れて

てください」

そうじゃないと色々問題がある。

封印が解けてるのがバレるとかエヴァを悪と決め付けてる魔法使いの連中がうざい。

だから僕の影に隠れた方が都合いい。

「わかった」

「ではいきましょう」

僕と刹那さんとエヴァが教室を出た。

出る時に超さんがこちらを見てたけどスルーした。

明日菜さん達の視線もあったが、何かを察して何も言わなかった。

く世界樹前く

ココに来るのは何回目だ？

道中、仲の良さそうな友達みたいに話していた。

前より仲が良いみたいだから良かったと思う。

それはいい、そろそろ世界樹に到着だ。だから

「エヴァンジェリンさん、僕の影に」

「ああ」

「そうですね。封印が解けたなんてわかったら大変ですから」

エヴァは僕の唇を奪ってから影の中に潜った。

その光景を見た刹那さんが僕の影を見て悔しがっていた。

「せ、刹那さん」

「な、何ですか？」

「いきましようか」

「え、ちょ!？」

刹那さんの手を握って走る。

走っている途中、学ランを着た小太郎が僕の前に立っていた。
何でいるんだ?と疑問を持ちながらも話しかける。

「どうしてここに？」

「学園長から呼ばれたんや」

「何でこいつを呼ぶかなあ。そんなに人手足りないのか」

「何か文句でもあるんか？」

「ないよ。早く行こう」

「せやな」

「仲が良いですね」

刹那さんの空気を読まない発言に僕と小太郎が立ち止まる。

「ど、どうしました？」

「・・・・・・いえ、いきましようか。時間の無駄です」

「はい」

僕達はいつも行く方向ではなく人がいる方へ向かった。

到着してみると、見知った顔がチラホラ。
よく見ると制服が違う生徒までいる。

ってあ、愛衣さんが僕を見て目をキラキラ輝かせた。

「そういえば」

「どうかしましたか？」

「いえ」

そういえば、今度会ったら仮契約って話だったね。

いや、すっかり忘れていたけど、前に初めて出会った場所はココだったんだ。

学園長もこちらに気づいたのか、手を振っていた。

僕は学園長の方へ近づき周りのことを聞く。

「この人たちは？」

「この学園にいる魔法先生および生徒じゃよ」

「へえ、そうなんですか」

「そうじゃ」

威張ってるけど、その割には人が少ない。

「これだけじゃないぞ？ 他にもいるが時間の都合じゃ」

「そうですか」

建前だけでも聞かないとイレギュラーが来るかも。

面倒だけど前と同じ質問する。

「僕達をココに呼んだ訳を教えてください」

「うむよろう」

学園長は僕の質問に頷き、周りを見てちょっと考える素振りを見せる。

数秒後、真剣な表情で皆に言い始める。

「皆をここに集まってくれたのは他でもない。問題が起きる。解決するために協力してもらいたい」

あれ？ この話って前日じゃなかったの？

さよさんを人間にさせたあの日から数日経つけど、まだ2、3日ある。

「ネギ君、世界樹伝説を知ってるかの？」

「あ、はい」

これはもう確定。

うーん、すると後でもう一幕面倒ごとが起きるな。

「確か……学祭最終日に世界樹に願うと叶うっちゅーあれやろ？」

「私も聞いた事あります」

小太郎は噂やろ、と笑ってて刹那さんは世界樹を見つめていた。だが、小太郎の表情は次の言葉で崩れる。

「それが事実なんじゃ」

「「え？」」

「マジでかなってしまふんじゃよ。22年に一度だけ」

だいたい大筋を知ってる僕は頭の中で整理しておこうと思う。

まず一つ目、世界樹の願いを叶えるという概念を書き換えれば、超さんの願いはつぶせる。

でもそれが正しいのか？ って聞かれればそうでもない。

ガノードが干渉した結果で世界が滅茶苦茶になった。

魔法世界という異界を知った現実世界の人達はガノードの残していた技術を使い、魔法世界を襲う。

それと同時にたくさんの人が無くなった。

襲った理由は僕にも分からないが、おそらくガノードが認識させたに違いない。

証拠は存在しないがそう思うしかない。まあ、終わったことだからしょうがないが。

その影響で、後からいるはずの超さんが存在していない。

えと、技術は何かって？

ワームホールで核を送り出し、魔法世界に打ち込む技術や宇宙戦争用兵器など。

もしも、現実世界の人達が魔法を知ってたら、僕の未来のようにはならなかったかも知れない。

魔法世界も消えなかったかも知れない、と考えていた途中に僕の体が揺れた。

「ネギ先生！」

「め、愛衣さん？」

「はい！」

どうやら愛衣さんが僕の体を揺らしていたらしい。

刹那さんと高音さんとエヴァが話していたってエヴァ！？

「何でエヴァンジェリンさんが外にいるんですか！？」

「話は終わったぞ？」

「え？」

周りを見回すと、僕とエヴァと刹那さん、高音さんと愛衣さんだけ

だった。

あれ〜？ 誰もいないです……
つまり何か？

僕が考えに浸っている間、学園長の話が終わり解散したという事？

「ネギ先生、話し聞いてなかったんですね？」

「いや聞いてましたよ！？」 告白阻止ですよね！」

「そ、そうですね」

「皆さんが撤退した後、いきなりエヴァンジェリンさんが出てきて
びっくりですわ」

「そうですね」

愛衣さんは僕に笑みを浮かべ、高音さんの隣に立つ。
でもさ、違和感あるな。

「高音さん、愛衣さん、エヴァンジェリンさんが怖くないんですか
？」

「ネ、ネギ？」

「怖くありませんわ。こんなに話しやすい方とは思いませんでした。
闇の福音などの名称で怖かったのがアホらしいです」

「というわけなんです。ネギ先生」

腕を組んで頷く高音さんと笑顔で答える愛衣さん。

「エヴァンジェリンさんは悪と言う魔法使いですよ？」

「大丈夫です！」

「なぜ？」

首を傾げる僕にクスツと笑い、愛衣さんが僕とエヴァを交差に見て
お気楽に言ってきた。

「ネギ先生がいればエヴァンジェリンさんは何もしないんじゃないかなあって」

「だが、ネギを傷つけたりしたらそいつを八つ裂きにしてやる」
「そうですね！」

エヴァの言葉に刹那さんが同意する。
そうですね！ってあのね。

「木乃香さんも、ですよね？」
「え？　そ、そうですね」

そう言うのと、僕から目を逸らした。
どういう事か、は事情を知ってるっぽいエヴァに聞く。

「どういう事ですか？」

「木乃香が刹那と対決したら……」

「どうなったんですか？」

「接近式星光破壊を何発も食らい、距離を離れ瞬動で背後に回り込み、攻撃という所で

何かの杖を持って10メートル離れ、本場の星光破壊を食らったのだ」

「杖？」

接近式って木乃香さん、あなたは何を目指してるんですか？
前の木乃香さんとは全然違うなあ。

「修学旅行にあった杖を持っていた」

「ああ、一本足りないと思ってたら木乃香さんが持ってたんですか」
「何の杖なんですか？」

愛衣さんが話しに入ってきた。

「強制転移の杖、危険と判断した場合、強制転移で逃げる事が出来ます。」

制限外すと、自分の意思で位置、時間、場所を指定できます」

「「え？」」

「じ、時間!？」

「ええ!？」

上からエヴァと刹那さんと高音さん、愛衣さんが驚く。

時間は元から数分しか設定できないから驚く意味が分からない。本当の効果を聞いたエヴァたちの表情を見て笑ってしまったが、すぐに止めた。

「そういえば何時でしょうか」

「今はお昼ぐらいです」

愛衣さんが赤色の携帯電話を取り出し、僕に時間を伝えてくれた。

お昼、ね。

お腹も減ったし教室へ戻って誰かに分けてもらおう。というわけで二人に伝える。

「二人とも行きましょう」

「ああ」

「はい」

行こうとしたら愛衣さんが僕の手を握ってきた。

エヴァと刹那さんが睨んでるから止めてほしいな。

「ネギ先生、仮契約……」

「今は忙しいので後にしてもらえませんか？」

「……そ、そうですね」

「では失礼します」

2人がいなくなった事を確認すると、僕達も教室へ戻ることにした。

教室へ戻る道を辿っていると、黒ずくめの人とぶつかった。

慌てて走ってくるから、こういう目にあるんだ。

違うことを考えたが、どっかで見たことあるなあ、この展開。

「アウ」

後ろに倒れた反動で黒ずくめのフードが外れた。

その姿に驚く2人。僕はやっぱりか、と溜息を吐く。

「ネ、ネギ先生」

「助けてほしいアル」

「超、何があった」

「実は！？ 来たアル」

確かに数人の気配がこちらに向かってくる。

前は黒肌野郎になって事だったから二度はゴメンだ。

「仕方が無いですね。刹那さん、エヴァンジェリンさん、道遠回りでもいいですか？」

「そうですね。この気配は刀子先生のもありますし」

ええええ！？ 前の人と違うじゃん。

黒肌野郎じゃないの？ 名前は確かガンドルなんたらだ！

「ちっ！ なら私が」

「エヴァンジェリンさん！！」

刹那さんがエヴァに向かって叫ぶ。

どういう意味だ？と刹那さんに視線を向けるが、僕を見て察したみたい。

察したというか納得したというべきか、何に対して納得したのか僕には理解できなかった。

「ふう、極移」

これでもう何度目だ？と思いながらも場所を想像して転移する。

くエヴァの家前く

とりあえず、絶対に来ないであろう場所に指定した。
さすがにエヴァの家まで来ないでしょう。

超さんが僕の手を両手で包み込み、頭を下げた。

「ネギ先生、ありがとうアル。それにしてもすごいネ」

「いえ、あんなの普通です」

「普通じゃないです」

「普通じゃないな」

「ひどいです」

その様子を見て笑う超さん。

「助けてくれたお礼としてこれをあげるネ」

渡してきたのは時計だった。

時計といっても腕時計ではない。

懐中時計型航時機カシオペアだ。

まさか、今の時点で手に入るとは思いもしなかった。

「あ、ありがとうございます」

「コレぐらい安いね」

「ところでどうして追われていたのですか？　もしかして魔法？」

「ギク!？」

ビクンと体が動いた。

図星と考えた刹那さんは溜息を吐いた。

「超さん、どうして追われたか教えてもらえませんか？」

「私はある事情で魔法の存在を知ってるよ」

超さんは次々と事情を話していく。

今、研究している科学を魔法も利用して魔法科学という技術を作っているんだそう。

えーえ、そんなこと初めて知ったよ。

それで、世界樹の噂が本当かどうかスパイロボットで調べていると世界樹での学園長の話を聞く。

本当だと確定して戻ろうとした時、魔法先生に見つかり追われていたらしい。

前も同じことで2度警告を食らった。

今度で同じ行動した場合、記憶を消去するという事らしかった。

「……そうでしたか」

「別にどうでもいいが、教室に戻るぞ」

「珍しいね。エヴァンジェリンが自ら教室へ行くなんて」

「茶々丸を置いてきてるだけだ」

「なるほど、ね」

そう言って、僕達は教室へ向かった。

お化け屋敷か幽霊屋敷か知らんが、学園祭用の出し物を夜7時ぐら
いに完成させた。

完成した後、魔法を知らない人達は完全に寝込んだ。

理由は簡単だった。

準備をしてる全員に行動高速化の魔法を使いました。

高速化させた影響で体に負担が重くなり、眠ってしまったって事。

そして、茶々丸さんの用を果たすために。

準備で疲れた体を休ませるために、無関係者である小太郎も巻き込
みエヴァの別荘へ乗り込んだ。

第43話『学園祭編その8 数日前／学園祭前日でまたもやイレギ
ュラー！』へ

第42話「学園祭編その7・少し早い世界樹の話と超とネギの接触」（後書き）

次回は後半が前日ですが、話自体はオリジナルです。

感想・web拍手など待っています。

第43話『学園祭編その8 数日前／学園祭前日 真・やてんのまどうしよ』

今までの中で一番長い？話です。

この話は今後（ネギ個人）の重要要素を含んでいますが、全体的にgdgdかな。

第43話『学園祭編その8 数日前／学園祭前日 真・やてんのまぐろしよ』

／エヴァの別荘／

魔法を知ってる関係者ほぼ全員をココに導いた。

念のため、小太郎も連れてきた。

理由はアーニヤの成長だ。

「何で俺がココにおんねん」

存在理由を呟く小太郎。

いつの間にかその場にいたっていう状況不明な状態。

「僕が連れてきたから」

「ったく、嫌な奴や」

「あ、あなたはなんてことを言ってくるんですの!」

あやかさんが小太郎の態度にムカツときたらしい。

2人の口喧嘩が始まった。

まったく、これじゃあ進む気もしないから始めることにしよう。

「そろそろ本題に入りましょうか」

「本題？」

「茶々丸さんを人間にする計画を」

「ええ!？」

「人間になるん!？」

なりますよ。

別の意味で最強にしたいと思う。あくまで別の意味だが。

「さよさんを人間にしたのは僕ですよ？ その程度の事、造作もないです」

「そ、そうなんですか!？」

「普通は人間に戻すとかできないのですが」
「確かにそうね」

皆が感心したようなホメ言葉を言うが、小太郎が妙なことを言い出した。

「フン！ さすが俺のライバルや！」

「誰がライバルなの？」

「小太郎君、いつ僕のライバルになったの？」

「何やて!？」

否定されたことに頭が来た小太郎がほえた。

まるで犬のようだ。

だから、僕は親切に答えを返した。

「だって実力も天と地の差がある」

できる限り心に傷が付かないつもりで言ったのに、涙目になった小太郎は僕に指を刺し

「俺はな、もっと強くなるんや！ 見てろ！ もっと強くなってネギを見返したるわ!!！」

負け犬のような言い方をして地面に座り込む。

拗ねるなよ、と哀れな小太郎を慰めようとしたが、明日菜さんが僕

とエヴァを見て

「そういえばエヴァちゃんとネギ君ってどっちが強い？」

「ウチも気になったえ」

「エヴァンジェリンさんは吸血鬼の真祖です」

「ネギ先生は人間ですわよ？　どうやって」

あやかさんは心配してくれてるけど、僕も半分人間じゃないような気がする。

何せ、1000年以上生きてるもので。

エヴァは望んでこうなったわけではないが、魔法使いとしてトップレベル。

「私の方が上だろうな」

「マスターは本当にそう思っているのですか？」

「当然だ。生きてる年が違う。魔力が私を上回っていても無駄さ」

年相応の態度を示すエヴァ。

かっこよく決めたつもりだろうが、全然決めてないよ？
だって……

「エヴァちゃんが言っても説得力ないやん。小さいし」

「な、何だと!？」

この2人、何で仲が悪いんだろうか。

そう思考をめぐらせていると、あやかさんが割り込んで

「ネギ先生の前で止めてくださいませんか？」

「ふん！」

「そやな」

そっけない態度で喧嘩を止めた。

あやかさんが止めなかったらここは戦場化としていたかもしれない。

「どんどん話の方向ズレてるんだけど？」

「あ、そうだ」

「ハルナ、どうしたですか？」

「いいこと思いついちゃった」

「いいことだと!？」

「ここにいる全員で、もちろん戦える人のみのトーナメント戦を」

「「「トーナメント?」「」「」」

ハルナさんの提案で皆が驚く。

そういえば前の時も言ってたなあ。その時の優勝は誰と初めピ―、
だったかな？

「そ。優勝した人には何でも言うことを聞くって事で」

「な、何でも!？」

「それってネギ先生と一日デートでもよろしいのですの？」

「何でもだからね」

あゝあ、ハルナさんのペースに乗せられている。

トーナメントなんてやってる暇はないっての、

「フフフ……そんなことをやってる暇があったら修行してください
よ」

「わ、わかりました」

いい加減の態度に怒りを覚えた僕は無理やり笑みを浮かべ、注意すると慌てて頷いた。

明日菜さん達もなぜか震えていた。
まあ、それはどうでもいいっか。
座りながらも震えている夕映さんとのどかさんに尋ねる。

「ところでのどかさん、夕映さん」

「何でしょうか？」

「この前言ってた考えている魔法って何ですか？」

「あ、それですか。それは融合魔法です」

「ゆ、融合!？」

融合魔法って2人同時に打ち込むアレの事？

成功したら威力が10倍以上になり、失敗すれば2人分の威力しか
発揮できない。

夕映さんとのどかさんが、ねえ。

「完成しかけなのです」

「ただタイミングが合わないんです。呪文は同レベルで魔力も同じ
にしないといけなくて難しいです」

「のどか、白き雷同士の方が効率がいいのです」

「そうだね。夕映」

呪文を同じレベル、魔力も同じに調整か、難しいかもしれないが頑
張って。

お二人さんの努力はきつと実るよ、多分。

前は使った場面が一度もないから、さっぱりだ。

「エヴァンジェリンさん」

「何だ？」

「茶々丸さんの人間化はアレですよ？」

人間とガイノイドタイプのロボット切り替え可能にするつもりです」

「それなら超を誤魔化せるな」

「正確には超さんと制作者ですが」

エヴァが納得したような表情でなるほど、と頷く。

「そうならば、なぜ戻れないとか言うんだ？」

「あれですか？ あれは今すぐって話です。別に今すぐじゃなかったら今言ったことが出来ます」

短時間だと時間かかる。

権限の鍵を使えば早くできるかもしれないが、生命体の体を作る場合かなりきつい。

本来の姿でなら今すぐでも出来るが、今の僕の魔力は滅茶苦茶低い。

「茶々丸はどうしたいんだ？」

「わ、私は」

「茶々丸さんが人になったらネギ先生の感触が味わえます」

こらこら、変な事言わないで。

「ネ、ネギ先生の感触って何？」

「千雨ちゃんもしたやん」

「あ、ああ！ そ、そうかも」

千雨さんがあのときのことを思い出して赤くなっていた。それを羨ましそうに見る茶々丸さん。

「ネギ、茶々丸ちゃんの体はどれぐらいでできるの？」

「色々調整とかするから学園祭最終日の夜まで絶対かかります」

今気づいたけど明日菜さんって茶々丸さんを呼ぶ時、ちゃん付けで
したっけ？

何気に木乃香さんもちろん付けです。

「最終日の夜ですか」

「たったそれだけで作れる事の方が異常よね」

「ねえねえネギ」

「どうしたのアーニャ？」

「茶々丸さんのスリーサイズってどうするわけ？後、作るって事は
触りまくるんでしょ？」

アーニャが人を変態と思うような視線で見してきた。

僕はそんな事しないよ、と真剣な表情でアーニャを見る。

「茶々丸さんの姿そのままを人にするだけだからスリーサイズとか
変わらないよ。

さわりまくるって触らないって」

「どうやって感触とか確認するの？」

「それは茶々丸さん本人が、だよ」

「へ、へえ」

僕の意志が伝わったようだ。

本人が確認しなきゃ意味ないよ。

僕が触った所で感覚なんて分かるわけないし。

第一、権限の鍵を同化させたら人じゃなくなる。

「マスター」

「ん？」

「いいのですか？」

「何がだ？」

「私が人になっても」

「いいんじゃないか？ お前もネギの事アレだろ？」

「……はい」

「だったら気にする事はない」

「ありがとうございます。マスター」

おお、エヴァが素直だ、というか本当に性格変わりまくってるね。人間になった時のエヴァのようだ。

2人の状況を見て和んでいると、あやかさんが僕の肩に手を置いた。

「ネギ先生、私も強くなりたいですわ」

「あやかさんって運動神経大丈夫ですか？」

「何言ってるのよネギ、委員長は合気柔術とか色々学んでるわよ」

「明日菜さん、あやかさんの事ご存知ですよね」

「な、何言ってるのよ！ わ、私は別に……」

「明日菜さん……」

照れて目を背けた明日菜さんを優しい表情で見るあやかさん。やっぱり2人は親友のようだ。

「あやかさんはエヴァンジェリンさんに魔法を」

「なぜ私なんだ？」

「ネギ先生が教えてくださいませんか？」

つぶらな瞳で見つめてくる。

いや、僕だとアレだしなあ。

「エヴァンジェリンさんのほうが教えるのが上手ですから」

「フハハ、いいだろう。雪広あやか、私の弟子にしてやろう」

「ネギ先生に、2人きりで習いたかったですわ」

がっかりといった感じで肩を落とす。

教えてやりたいのは山々だけど、あやかさんの場合はちょっと色々問題が。

それに前のことを思い出してしまうから御免。

え、前のことって何か？ 勝手に想像しててください。

「それが本音やな」

「でも2人きりだからって雰囲気は怖かったけどね」

「魔法の射手ばっかで雰囲気も何もなかったんやけど」

言いたい放題だな。この2人は。

何が言いたいんだろうか、僕にはさっぱりだ。

「結局さ、私がここにいるのって何？」

「空気じゃないですか？」

「ゆえっちも厳しいねえ」

「それほどでも」

「褒めてないけど」

あ、そうだ。わざわざ魔法世界でする事はないよね。

ここで短縮できないかな、と空気化としていた朝倉さんに聞いてみた。

「朝倉さん」

「何？ ネギ先生」

「仮契約しますか？」

「「「「ええ！？」」「」「」」

明日菜さん達が驚きの声を上げる。

このパターンはもういいよ。
言われた本人は何でもないかのように言い出す。

「およ？ いいの？」

「別に良いですー」

「良くないわよ！」

「ネギなんてこと言い出すのよ！ このエロネギ！」

アーニヤが僕の頭を軽く小突く。

痛くはないけど、周りの雰囲気怖いな。

こんな状況じゃとてもできない？

「反対がいるんだけど？」

「はぁ、しばらく後でいいですか？」

「その方が良いね」

「ですね」

中止になった事で周りの雰囲気元に戻る。

先ほどの嘘のようだ。

どのみち、魔法世界でする事になるよ。

「そろそろ帰りましょうか。茶々丸さんのことも決定しましたし」

「そうね。帰って食事になりたい」

「ここばかりだと無駄に年を増やすだけやし」

「小太郎君はさっきから何をしてるの？」

見てみると、空気同士ゲフンゲフン、刹那さんと小太郎君が戦っていた。

剣相手の組み手みたいなもの。

小太郎君の、このアホの相手で剣なんて……いたな。

粘るだけの役だったあのラカンさん戦か。
ラカンさんの無数の剣が小太郎君に飛んできてたな。
防ぐ事も叶わず避けるだけ。

「すごいなあ、ねえちゃん。けどこれはかわせるか!!」
「どうぞ」

なにやら戦闘していた。

馬鹿でかい黒い獣が刹那さんを襲うが、

「神鳴流奥義 斬魔剣 弐の太刀」

あっさりと黒い獣が消滅した。

数秒しか持たなかったって弱いよ。

何であの2人が戦っているのかわからんが、放置しよう。

「せっちゃん、ウチら帰るから」

「え？ 待ってください！ このちゃん」

瞬動で小太郎君の手前まで来て、小太郎君の手首を持ち、思いつき
り海エリアへ投げ飛ばした。

うわああとか叫んでるが遠くまで飛び、聞こえなくなった。

「せっちゃん、何かひどいなあ」

「うっ、ですがこのちゃんが帰るというなら私も」

「違うやろ？ ネギ君が、やろ？」

刹那さんの気持ちがあったかのように笑みを浮かべる木乃香さん。
その台詞で赤くなった刹那さんは俯いた。

「あ、忘れてました。茶々丸さん」

「何でしょうか？」

「茶々丸さんのデータをくれませんか？」

「私のデータですか？」

「それがあれば、楽に出来ますから」

一応知ってるけど、うろ覚えだから一致してるかどうかかもしれない。

違っていたらやり直しになる。

そうなるも夏休みになってしまいうから、そこだけは避けなければいけない。

「データは携帯電話のアドレスに送信で良いです」

「ネギ先生のメールアドレス、知らないのですが」

「えーとですね、negisamamaピーピーです」

「negisamamaピーピーですね。登録しました」

「ピーピーピーって何ですか？」

夕映さんが突然聞いてきました。

ほら伏字って大事だと思いますって言おうとしたらアーニヤが愚痴を言い出す。

「それにしても相変わらず変なアドレスね」

「アーニヤのだって変」

「お互い似たもの同士じゃない？」

明日菜さんが呆れて言い切った。

一応、明日菜さんと木乃香さんはアーニヤのアドレス知ってるから。

「アーニヤちゃんのはArnyaPrincessにゃんにゃんや

ん」

「このちゃん、にゃんにゃんって？」

「気にしたら負けや」

「い、いえ言い方がかわいいです」

「あ、そ、そやな！」

恥ずかしそうに俯く木乃香さん。

自分で言った言葉を思い出して恥ずかしくなっただんですね。

木乃香さんと刹那さんの会話を聞いていたら、後ろから千雨さんが声をかけてくる。

「ネギ先生」

「千雨さん？」

「私にもアドレス教えてくださいませんか？」

千雨さんを見ると携帯電話を片手に持っていた。

「何して？」

「危険な状況になったときとか」

「カードで十分じゃないの？」

「メールじゃないとできないから」

「何をできないのかな？ ラブ臭が！」

ハルナさんが千雨さんの体をまさぐろうとしたが、無理やり押しのけられた。

確かに触られたら嫌だよなあ。

「いきなり何を！？」

「千雨ちゃんって案外……」

「胸の大きさ82cmは伊達じゃないわね」

「人のバスト大声で叫ぶな!!」

叫んだ後、僕の方をチラッと見るが、すぐ逸らした。別に知ってるから気にならなかったが。

「何かええな」

千雨さんの胸を見て羨ましがる木乃香さん

視線に反応した千雨さんは慌てて自分の胸を隠す。

それでもジーツと見つめる木乃香さん

胸の話になった瞬間、黒い雰囲気を漂うエヴァが呟く。

「さっさと帰るなら帰れ」

「そ、そやったな」

「エヴァンジェリンさん。小太郎君たちのことお願いします」

「ネギ先生？」

部屋が同じメンバーだけを囲んで、転移魔法を発動させた。

あやかさん達はエヴァに任せた。

部屋に戻り、適当にすごした。

あやかさん達はエヴァに鍛えられ続けました。

そして、学園祭前日になった。

明日菜さん達は先に学園へ行ったらしい。
起こしてくれても良いのにと悲しくなったが、僕の肩に変な生き物が乗った。

「兄貴！ 例のブツが来ましたぜ」

「何だカモか、ん？ とうとう着たのか」
「これですぜ」

50センチのダンボールがテーブルに置かれていた。
どうやって持ってきたんだ？ この生き物は。
気にする意味はないか。

僕はごくりとつばを飲み込み、ダンボールをあけた。

「これが真・やてんのまどうしょ、か」

「絶対服従もあるぜ！」

「うむ。それは後でね」

「イエッサー！」

カモは放って置く。

ダンボールから取り出した本は新品みたいに加工されていた。
表面の色が水色という目に優しい色だ。

「んゝどうせなら緑で良いのに……気分を変えようか。これがやてんのまどうしょか」

わくわくしながら最初のページを開くと、光を発した。
僕は慌てて本をテーブルに投げた。

徐々に開いたページから光があふれ出した。

すると、光がやんでいくと、銀色の髪をした女の子がいた。

身長は160センチぐらいかな？ 目が赤いけど中心は黒い。

胸も明日菜さん並みかな？ でも、

「どっかで見た事あるなあ……って何だこの魔力と威圧感は！」

いきなり目の前にいる女の子から圧倒的な魔力と威圧感が僕を襲う。バグキャラのラカンさんや異世界や平行世界で経験しているから、いつも通り気合で吹き飛ばした。

「元の僕の魔力ほどじゃないが、それに近いほどの魔力が襲ってきた」

その影響かどうか知らんが、カモはその辺で気絶中だ。

でも良かった。明日菜さん達が学園に行った後で。

目の前にいる銀色の少女が口を開く。

「私の魔力に耐えた？ ……私はグリモワール。全ての魔道書を知る存在」

「グリモワール、か」

「あなたが私を呼んだのですか？ ならば私の真実の名前を教えます」

「真実の名前？ グリモワールじゃないの？」

「はい。私の名前はリイン―」

名前を言い出す前に口を塞いだ。

モゴモゴと口を動かしてるが気にしない。

もういいだろうと判断し、手を離れた。

「いきなり何をするのですか？」

「だって妙な事言い出すし」

リイから続く言葉なんてあれしかないでしょうが。
それにしてもおかしいな。

「君に僕からの名前を付けよう」

「そ、そうですか？」

「君の名前はリイス」

「リイス……ですか？」

「そ。リイス、異世界で言い伝えられた女神の名前」

「そうですか。ありがとうございます。ではこれからリイスが名前です」

女神という言葉で嬉しそうに喜んでくれるが、実は適當。
それにしてもリイ■■オ■■スカ……。
でもグリモワールってアレだよな。

「ねえねえ」

「何でしょうか？」

「やてんのまどうしよから出てきたリイスって何？」

「創られたときに植えつけられた守護人格です」

「守護人格？」

「はい。このまどうしよは選ばれし者じゃなければ脳が逝かれて死にます」

「先ほどのアレ、か。でもどうして？」

「このまどうしよは普通のアレと違い、ある存在と同じ能力を持ちます。」

だから資格があるかどうか私の魔力を耐えた者に使う権限をっていう形です。」

「それって……」

普通のアレって特殊の魔導書っぽい意味らしい。
僕が知ってる同じ名称のアレの意味ではない。

「はい。これは別の経由で権限の鍵とほぼ同じ事が可能な魔導書なのです」

「権限の鍵、これか」

僕は権限の鍵を出現させると、リイスが驚いた表情になる。
なぜ驚くのだろう。

僕が持っていたのが意外だったのか？
そう思っていると、リイスの表情が笑顔に変わる。

「あなたが、選ばれし真格者の欠片なのですね」

「真格者の欠片？」

「はい。欠片というのはまだ真格者ではないという事です」
「そうですか」

真格者？

そういえばガノードも真格者という言葉を使っていたな。

『私は、俺は、我は全てを手に入れる！ 真の主となり、真格者となり—』

どういう意味なんだ？ 今の僕には理解できない。
理解しててもどうなるわけでもないが。

「僕が真格者とやらの候補？ですか」

「そのようなモノです。もしそうならあなたは……」

「え？」

「い、いえ何でもないです」

うーん、小さすぎて聞こえなかった。

なんでもないのならそれでも良いけど、ん？　　そういえばその名称ってアレか？

「リイスの能力って何なの？」

「わ、私のですか？　私の能力は全ての魔導書、術式に載せられた力を使うことが出来ます」

「全てってどういうこと？」

「こう言えば分かりますか？　全ての世界の、です」

「うーん短いけど、理解はした」

つまり、この世界だけでなくあらゆる平行世界や異世界の魔導書を知っている。

ネクロノミコン、ソロモン、ラジエルの書など知ってるのか。

ん？　　って事はネクロノミコン……

「じゃあ、DEMONも呼べるわけ？」

こっちの思ってることが正しければ、こいつも権限の鍵と変わらない。

だいたいそんなもんを呼び出したら世界に負担かかるし呼ばないよ。だが、本当に予想通りの答えが来た。

「可能です。呼びましょうか？　ただし大きさが太陽系銀河第5惑

星である木星の10倍ですが……」

「呼ばなくていい！！」

「そうですか。その判断は賢明だと私も思います」

ホッと安心しているリイスさん。

この娘は何に対して安心なんだろう。

安心なのは確かだろう、んなものと呼んだ瞬間、地球が無くなる。

「他はないの？」

「私と一時融合することでパワーアップします」

「一時融合？」

僕の言葉に一瞬戸惑っていたが頷く。

こうしてみるとリイスが高校生ぐらいの女の子と変わらないな。

「ご主人様はまだ違いますから一時だけしかできません」

「時間制限があるってこと？」

リイスは返事として頷いたが、ちょっと待て！
今、この子はなんて言ったの？ ご主人様！？

「何でご主人様なの？」

「私を起動させました。だからです」

「いや、それ止めてもらえませんか？」

「嫌です。ご主人様はご主人様です」

恥ずかしそうにしながらもはっきりと言葉にする。
それに嬉しそうだ。

「これが最後だけど、いつ作られたの？」

「私が作られたのは今から約130億年前です」
「ブッ！」

あまりの年数に嘖いてしまった。

130億年前からの魔導書つーことは何か？

アレとはまったく関係ないのかな？

「平行世界にあるアレとは関係あるの？」

すると、リースの眼が銀色に輝いた。

眼からは莫大な何かを感じたが、それも数秒もすれば消えた。その間の表情は無表情で怖かったよ。

「アレと私は別物ですが、私を作った人が未来を見て製作したものらしいです。

だからと言って守護者が後4人もいないですよ？ 間違わないでくださいね」

「アレをベースに作ったのか、ふうん……僕の疑問は解けました」「そうですか」

疑問は解けたけど、異常すぎるね。

だいたいDEMONが宇宙クラスって段階で狂ってる気がする。ああ、だから権限の鍵は求めたのか、リースの力を。

生まれた経由を詳しくじつくりと聞いた後、一息着こうとしたら玄関からドアが開く音がした。

「え？」

「ご主人様、誰かが侵入したようですが？」

「ここに住んでる同居人なんですが」

「そうですか」

いや待て、同居人って事は明日菜さん達が帰ってきたの？

帰ってくるのが早いよ、前はこんな早く帰った事ない。

並行世界だって同じだしどうなってるんだ！

この状況を解決させるためにはリイスをいなくさせればいい。

つまり、リイスを元の状態に戻せばOKというわけで、すぐに戻るようにと命令する。

「あの、すぐ本に戻ってくれる？」

「……もう遅いようです」

「え？」

玄関の方を見ると、木乃香さん達が呆然としていた。

アーニャは肩を震わせ、明日菜はリイスを誰だ！と睨むように直視してました。

いい雰囲気じゃない、手遅れだった。

「ねえ、その人は誰？」

「ど、どうして明日菜さん達がここに？ 学校はどうしたんですか？」

「そんなのとづくに終わったわよ」

「ネギ君、昨日のうちに終わらしたやん。今日は確認だけや」

「しかし、兄貴もスミにおけないツスねえ」

どこから湧き出したのか、木乃香さんの肩に乗る。

生き物に反応した木乃香さんはカモに何かをあげていた。

「オレツチ、気絶する振りして木乃香嬢ちゃんのカードで念話してねえツスよ？」

「というわけよ！ それに驚いた木乃香が私達に知らせて戻ってきたって訳」

カモのやつ、いつどこでどうやって連絡したんだ、と思いながら周りをみると

木乃香さんの仮契約カードはカモが気絶していた場所にあった。これはもう積みだな、おとなしく白状する。

「……わかりました。正直に話しますから明日菜さんもアーニヤも焼かないでください」

「や、やいてないわよ!？」

「別にそんなつもりじゃ……」

アーニヤは凶星で叫び、明日菜さんがもじもじしながら小さく呟く。ああ、この明日菜さん本当にかわいすぎる。悶々と考えていたが、ライスが僕の腕に絡みつ

「私はご主人様の物です」

「「「え?」」」

爆弾発言をしやりました。

皆の視線が全部、僕に来るわけで。

困った状況になり、リスを睨むが、その本人は見れば分かるほど顔が赤くなっていた。

赤くなるぐらいなら言わなきゃ良いのにと思ったが

「物ってどういう事なん?」

僕ではなくリスに切り替え、人差し指をリスに向けた。

「そのままの意味ですが?」

「物ってこいつはまだ10歳なのよ!」

「関係ありません。私はご主人様の――」

「リースは魔導書の精霊みたいなモノです」

嘘っぱちを吐く。

だって誰が信じると思う？

守護人格の存在する魔導書がこの世にあるなど。

だったら精霊が憑依してる方が不思議でも何でもない。

「精霊!？」

「そんな魔導書あったかな」

「証拠見せますよ。リース」

「わかりました」

リースは頷いて眼を閉じると、光がリースの体を包みこんだ瞬間、黒い本になった。

あれ？ 色変わってるじゃないですかリースさん

「ええ!？ 本当だ!」

「すごいなあ」

「わ、私は信じてたわよ!」

「絶対嘘や」

「明日菜の嘘はわかりやすいわ!」

「くっ……はあ」

はじめは驚いたものの、後からはもう驚かないでいた。

まったく、喜んでいいのやら呆れていいのやらさっぱりだ。

まあ、魔導書が人になるなんて普通有り得ないからね。

とりあえずこの魔導書の存在を明日菜さん達に話すと、溜息を吐いていた。

「ラ、ライバルができるやなんて」

「ライバルって本でしょ？」

「甘いで、アーニャちゃん。茶々丸ちゃんやさちゃんを思い出してみたい？」

木乃香さんの誘導的、計画的な言葉に考え込むアーニヤ。

答えが出たのか、アーニヤはこう呟いた。

「それもそうよね。ネギ」

「何？」

「……リースと仮契約とかするわけ？」

その言葉、いや仮契約という事場に反応した本が人の姿に変わる。

「したいです！」

「え？」

「だから仮契約したいです！」

「いや、リースは守護人格でしょ？」

「私の、初めてのご主人様ですから」

両方の人差し指を合わせ、頬を赤くしながら呟くりイス
今なんて言ったの？

初めてって事は今まで誰も使いこなした事はないという意味。

何となく木乃香さん達を見た瞬間、

「えええええええええええ！？」

部屋全体にかなりの大声が響きました。

僕は逆に疑問を持つ。

「初めてって今まで起動されたことないの？」

「ありません。私を起動させたとしても私の魔力で消えます」
「「「え？」」」

最初のアレで起動させた者は消えてしまいうらしい。
ああ良かった。ガノードみたいな化け物と戦つていて。
俯いて語るリイスの言葉で3人が驚愕の表情になる。

「そんなルールが存在したんだね。でもどうして僕は？」
「ご主人様は……言っていていいんですか？」

リイスは明日菜さん達をチラッと目を向けた後、僕を見つめる。
何が言いたいってまさか、

「もしかして僕の事知ってるの？」

「ごめんなさい。ページを開いた際、光りましたよね？」
あの光は記憶を見てしまうんです。対象の記憶を見たらって事です」

申し訳なさそうな表情だった。
なるほど、僕が未来から来たことも皆知ってるわけだ。そして目的も。

そう思うと物凄く恥ずかしくなった。
だが、僕とリイスの会話を聞いていた3人が会話に入ってくる。

「ネギ君の記憶って事はウチらの事どう思ってるんかわかるんやな」
「」

「いや木乃香、意味わかんないから」

「それはどうでもいいの。ネギ」

「何？ アーニャ」

「仮契約しないの？」

何でアーニャは僕とリースを仮契約させたいの？
いや違うか、アーニャを見ると「はつきりさせなさいよ！」という表情をしていた。

「どうして？」

「リースちゃんって魔力高いやん」

「兄貴、しちやいませうぜ！」

なぜか木乃香さんはリースの存在を受け入れてます。
さっきまで空気の存在だったカモが会話にログインしてきた。

「ご主人様……」

「まず呼び名を変えて。そうじゃないと仮契約はしない」

「ネギ君には夢ないん？」

「ないよ」

木乃香さんはつまらなさそうに溜息を吐く。

さすがに人前でご主人様とか呼ばれたくないです。

「それにしてもリース、木乃香が呼ぶようにリースちゃんって言うけど」

「何ですか？」

「変わった服装よね」

「私も思ったわ」

明日菜さん達が変わってる服装って言うけど確かにそうだな。
この世界から見ると、ね。

リースの服装は黒い半袖というか肩までしかなく、表裏には妙な紋章が描かれている。

下の方は黒い色のスカートで短い。

下着が見えるような見えないような男を焦らす長さだ。
でもさ、服装がまるっきりアレと同じなんだな。

「ネギ君」

「何ですか？」

「リースちゃんの服そそる？」

「こ、木乃香！？」

「い、いいえ」

僕は慌てて頭を横に振り誤魔化したが、甘えてこられたら理性が持つかどうか。

「仮契約は僕のことを名前で呼んでくれないとしませんよ？」

「っ！？ ……ネギ様、ネギさん、ネギ様、ネネネネ、ネギ」

「リースちゃんって背も高いから呼び捨てでも違和感ないやん」

自分のことのように嬉しそうにはにかむ木乃香さん。

褒め言葉を聞いたリースは赤くなって俯く。

「私も呼び捨てだしいんじゃない？」

「私、明日菜と同じってちょっとショックかも」

「何でよ！」

「馬鹿がうつったら嫌でしょ？」

「誰が馬鹿よ！」

ギャーギャーと騒ぎ出すアーニヤと明日菜の争いに巻き込まれないよう離れる。

言い合いだから別に損害はないが。

「リース」

「何ですか？　ご、ネギ」

「仮契約は明日にしましょうか」

「あ、はい」

「ええな」

羨ましそうにリイスを見る木乃香さん。

何をそんなに羨ましそうってああ、キスカ。

だからってどうしろというんだ？

「あ、ウチからすればいいんや。ネギくゝん」

「え？　んっ！」

「んんっ…んくっ…ん」

いきなり木乃香さんが僕のほっぺに手を添えて唇を合わせた。

目を瞑っていると、木乃香さんの舌が入ってきて僕の舌と絡み合う。
あー！って驚く声を聞いた途端、木乃香さんが離れた。

「久しぶりやからつい」

「ついじゃないわよ！　抜け駆けするなんて」

「ごめんごめん」

「自分が決めたアレも守れないなんて」

木乃香さんが決めたアレ？　まあ気にしない方が良いな。

こういう事を聞いたら変な事が起きるって相場が決まっている。

「まあまあアーニヤちゃん、悔しかったらすればいいじゃん」

「明日菜もね」

アーニヤと明日菜さんの仲が良すぎる。

これなら僕の試作魔法を教えることが出来るかも知れない。

今後の展開も考えようとしたが、僕のお腹から音が鳴った。

皆に聞かれた僕はお腹を撫でる。

「お腹減りました。昼食にしましょうか」

「そういえばそんな時間やな」

「私、和食が良いわ」

「日本に来たからそうね」

やっぱり仲良いな。隣同士でソファーに座ってる。

この2人がしゃべる所も多くなった気がする。

「ネギ君は何がええ？」

「洋食で」

「ほなネギ君とウチは洋食やから明日菜とアーニャちゃんのを先に済まそか」

エプロンを着た木乃香さんは台所へ向かった。

さっきから静かなリースは目を瞑っていた。

考え事でもあるのだろうから、そっとしておこう。

僕も考えようか。とりあえずまとめ。

やてんのまどうしょ、アレを元に作ったらしいが、権限の鍵と同質らしい。

守護人格、グリモワール。本当の名前がリイン■■■■。

なぜその名前なのか、は意味があるんだろうけど今は放置。

って考えることが全然ないな、と自分の世界から現実へ戻った。

昼食を取り、木乃香さん達に魔法の修行をさせました。

リースを紹介した時のエヴァの反応が凄かった。別の意味で。
のどかさん達も何故か落ち込んでいた。なぜ？

その後、エヴァがリースに挑んだり、リースの魔法で僕以外がボロボロだった。

「リースとか言ったな？ どれぐらい強いんだ？」

「少なくともあなたには余裕です」

「言ってくれるな。いいだろう勝負だ」

「いくぞ！ 闇の吹雪」

「では私も、呪文複製、詠唱短縮 闇の吹雪」

「ぐっ！ リク・ラク ラ・ラック ライラック 闇の精霊466

2柱 魔法の射手！！ 連弾・闇の4662矢」

「多いですね。契約者術式展開、星光破壊」

「木乃香の星光破壊だと！？」

いやいや待て。と突っ込みどころ満載の魔法を使いまくった。

契約者術式って契約者、つまり僕の魔法かよ！

それからのエヴァとの戦闘中、レムリアなど魔法系というか魔術？
を使っていたとさ。

本当に全ての世界の使えるんだね。

そして、とうとう学園祭の当日が始まることになる。

続く。

第44話 『学園祭編その9 学園祭当日』へ

第43話『学園祭編その8 数日前／学園祭前日 真・やてんのまどうしよ』

次回から原作10巻に入ります。

ただ、無くなっているイベントや内容は同じでも変わっているイベントが存在します。

リースの見た目は闇の書の意志のリインフォースと似ています。

似てるだけで身長（？）も性格が違うオリジナルキャラで、物語で重要な鍵を持つ（？）かも知れない。

リースの詳しい事は後ほど分かると思います。

次回の44話は一応、／25日予定ですが、／30日に遅れる可能性があります。

第44話『学園祭編その9 学園祭当日』（前書き）

ここで原作で言うところの10巻突入。

今回は普通の話です。何かのフラグは一部ありますが、どうぞ。

WEB拍手・感想をお待ちしております。

第44話『学園祭編その9 学園祭当日』

くネギの部屋く

自分のベットから起き上がった僕は赤いソファァーに移動して座る。
夜遅くまで魔法の修行に付き合った。
限界まで修行することにより、時間が短縮できる。

「明日菜さんは新聞配達か？」

二段ベットの2段目を見ると明日菜さんがいなかった。
木乃香さんは下で寝ている。
アーニャもパジャマで幸せそうに寝ていた。

「明日菜さんはどこへ行ったのでしょうか」

「明日菜さんは新聞配達です」

「うわあ！」

「キャ！」

いきなり声が聞こえたものだからつい声を出して背後を見る。
黒い服とスカートをはいたりイスが立っていた。

「いきなり気配もなしに後ろに立たれると驚くんだけど」

「すみません。ご主、ネギ」

「ご主人様って言いかけた事はどうでもいいけど気配を消すのはやめて」

「わかりました」

こうでも言わないとやってられない。
リースを手に入れて数日経つが……まだ二日目だけど。
まだリースの事、知らないからなあ。

「ネギ、おはよう」

「アーニヤたん、おきてたんだ」

「たんって呼ばないで。気持ち悪いわ」

「うわ、ひどいなあ」

「ネギくん」

いつもどおりの絡み合いが始まった。

木乃香さんが背後から抱きついてきた。

高確率で朝はこんな展開だから突っ込む気にもなれない。

「ちょっと木乃香！」

「アーニヤちゃんもやればええやん、安らぐえ」

「……ん？ この気配は明日菜が帰ってきたみたい」

アーニヤの言うとおり、明日菜さんが帰ってきた。
でも機嫌がいいみたいだ。

何かあったのだろうか？

嬉しそうな表情で僕の隣に来る。

「ねえ、ネギ！」

「な、何ですか？」

「今日、学園祭よね」

「そうやな」

「そうね」

「そうですね」

「あんた達には聞いてないわよ！」

3人が妙な感じになっていた。

妙な感じってのは僕がそう感じたのだが。

今日から三日間は学園祭、か。

前は刹那さんと行動してたっけ？

「明日菜、学園祭だからってネギ君をデートに誘う気じゃないわよね？」

「違うわ。私は初めてであろうネギを案内しようって」

「二人つきりやろ？」

「そ、そうね」

「デートやな」

「違うわよ！」

「どうみてもデートですね」

「何かせこいわね。ネギと行くならデートじゃない？」

僕が前の出来事を思い出していたら、そんな会話が聞こえてきた。リイスの言うとおりデート、だな。

「ところで兄貴」

「何？」

「時間がやばいぜ？」

「え？」

携帯電話の電源を入れて見る。

デジタル表示で8時になっていた。

うむ、明日菜さん達といると時間経過早いね。

「急ごうか」

その一言で嫌な予感がした僕は極移で学園に転移した。
景色が一瞬で変わり、学園祭用の門の上に転移完了。
下を見るとワイワイと騒ぐ人々がいる。

「時間軸ズレまくってるけど別にいつか。それに一人で行動するのもこれはこれで」

前は色々スケジュールやらで忙しかったが、今回は何もない。
という事は、僕の好きにして良い事。

「自由っていいね。……ここにいたら意味ない、か。下に降りよう」

誰にも気づかれないうように人気がない場所へ降下した。

木が一杯並んでいるのを見た僕はそこに、ある対策の結界を張る。

「使うに越したことはないけど」

「何をだ？」

「え？」

突然、声が下方方向を見ると、白色のゴスロリ姿のエヴァがいた。
あれ？ 茶々丸さんがいない。

「茶々丸さんは？」

「茶道部だ」

「ああ、なるほど」

そういえば、以前に誘われたのって茶道部の事か。
すっかり忘れてたよ、いや存在ごと忘れていたといってもいい。

「ネギ」

「何？」

「え、えっとだな」

「？」

エヴァを見ると何かもしもじとして悩んでいる素振りを見せる。

この場には僕とエヴァ以外いないわけで。

別にもじもじするような要素はないはずだが。

悩みを吹っ切ったのか、僕と向き合い

「ネギ、私とデートじゃない！ 私に付き添ってやっても良いぞ！」

「うーん、暇だから別に……」

「そ、そうか。ならいこうか」

嬉しそうにはしゃぐエヴァは僕の腕に絡み、人が集まる方に歩く。

でも誰かに見つかるとヤバイ気がしてならんよ、特に木乃香さんに見つかる、ね。

く学園祭く

人が多い。

一体、この場に人は何人いるんだろうか。

何十万は確定だよ。前の来場人数は何百万だっけ？

もう覚えてないよ、そんな昔の事。

「ネギ、これからどうする？」

「エヴァンジェリンさん、予定決まってなかったんですか？」

「何があるか把握はしてたが、よく考えれば私は初めてだから」

ああ、なるほど。

そういえば、こういう事ってこの時間のエヴァは初めてだっけ？

「ギャラクシーウォーっていうアトラクションに行きませんか？」

「ここにいるよりはいいな」

僕とエヴァはそこへ向かった。

向かった先に到着すると、刹那さんと明日菜さんがいました。こちらを目撃した2人は表情を変えて走ってきた。まずいと思った僕はエヴァから離れる。

「やっと見つけたわよ！」

「エヴァンジェリンさんと行動してたんですか」

「ちっ」

「あれ？ 木乃香さんはどこへ？」

「このちゃんは学園祭の出し物へ」

ああ、占い研究部とか言ってたアレか。

「それよりネギ先生」

「何ですか？」

「私と一緒に回りませんか？」

「「ちょっと待て！！」」

2人が刹那さんに突っ込む。

突っ込まれた本人は首をかしげて

「どうかしたんですか？」

「桜咲刹那」

「刹那さん」

「え？ え？」

2人の態度に混乱する刹那さん
そんな態度じゃあ何が言いたいのかわからん気がする。
でも、

「喧嘩するほど仲がいいってこの事か」

「確かにそうですね」

「ゆ、夕映さんいつの間に」

「今」

変なジュースの缶を右手に持った夕映さんが僕の背後にいた。
あれ？ のどかさんはどこだ？
周りを見回すが、見当たらなかった。

「のどかさんは？」

「ああ、のどかはどっかの場所にいます」

「そうですか」

のどかさんの居場所を答えた時、夕映さんの表情が歪んで見えたのは気のせい？
それを言ったら、後で妙なことが起きそうだ。突っ込まないでおこう。

「ネギ先生、あれは何をしてるのですか？」

指をさした方向には刹那さんと明日菜さんとエヴァンジェリンさんが言い争いをしていた。

人がいるのにも関わらず争うとは。

「さあ？」

「でもネギ先生の名前が聞こえます」

「……止めるか」

「その方が良いです」

騒いでる3人の前に立つ。

じゃじゃ馬どもが集まってきやがる。

これはまずいと思った僕は3人に冷たい視線と言葉をあげる。

「これ以上、喧嘩？ 問題を起こすなら……仮契約解除しますよ？」

「そ、それは止めて」

「そ、そうですよ！」

「わ、わかったから止めろ！」

大慌てで先ほどの空気が消え、僕に命乞いする。

僕もそんなに、多分鬼じゃない。

「仕方ないですね。次、人が多い所で今と同じだったら解除しますよ」

「」「はい」「」

僕の雰囲気飲まれた3人はあっさりと沈黙した。

明日菜さんや刹那さんならともかくエヴァが僕の言う事を聞くとは、ね。

「夕映じゃない」

「今頃気づいたのですか？」

「だって、ねえ」

「ネギ、ギャラクシーウォーに行くんじゃないかったのか？」

エヴァが会場の方へ指差す。

人が行列で1時間待ちとなっていた。

あれ？ すんなり入れると思ったのに。

建物も前の2倍はあるぞ。これはかなりのボリュームが味わえるのか。

「行列だけどうするの？」

「うーん……魔法の射手 雷の55矢」

僕は人目を気にせず、魔法を使った。

目撃者は明日菜さん達だけだから構わないよね？

雷の矢が全ての客にヒットし、倒れた。

「……ネ、ネギ？」

「どうかしたんですか？ 皆さん」

皆さんが呆然と僕を見ていた。

向こうの方では「おい！ 大丈夫か？」や「すぐに救急車へ」と大騒ぎ。

すると、緊急を対応する人がゾロゾロ来て、倒れた人達を運んでいた。

周りがうるさい。

「大騒ぎになってるです」

「静かな場所へ行きましょうか」

「騒がしくしたのはネギだが」

「人前で魔法を使っているのですか？」

「どうでもいいです」

「そですか……」

はっきりした態度で夕映さんに接すると、溜息を吐いてた。
なぜ？

こうして、僕達は静かな場所へ向かう事になった。

く観覧車く

目の前に見えるのは巨大な観覧車だった。
物凄く遅い速度で回っている。
あれだと45分ぐらいはかかる、か。

「ねえ、ネギ」

「何？」

「アレに乗るの？」

「狭い空間で何人乗れるんでしょうか。ここにいる全員は乗れないのは確定として」

ちなみに人数は5人程度だと思う。

目に魔力を通して観覧車の中を見ると、カップルばかりだった。
ああ、デートスポットの定番だったな。

「やめましょうか」

「そうですね」

「争いが起こるかもしれないですし」

「争い？」

首を傾げる明日菜さんだが、それはこのメンバーを見れば当然だ。学園祭を純粹に楽しむ……うーん、とあごに手を添えながら考えていると夕映さんが

「木乃香を呼ぶです」

「何で？」

「何でだ？」

エヴァと明日菜さんがすぐに否定した。
あんたら親友じゃなかったのか？

「だって木乃香よ？」

「ああ、あの木乃香だ」

「何か問題でも？」

「大いに問題あるわ！ だいたい明日菜、お前はタカミチが好きという設定じゃなかったか？」

「い、今は変わってるでしょうが！！」

エヴァ、設定という言葉はどうかと思うぞ？

明日菜さんの好みが変わるのはいい事だが、赤くなりながら言う所が可愛く見える。

こう考えてると僕自身、変わってるって実感できる。

「まあいい。とにかく木乃香はキャンセルだ。出し物に集中しておればいい」

「だれが集中しておればいいん？ エヴァちゃん」

「「「「え？」」」」

話題になっていた本人の声と共に空から浮遊術で飛んできた。

いきなり来たのだから驚く。

そんな気持ちも知らずに浮いていた体を降下する。

「こ、木乃香？ あんたアレは？」

「ああ、アレな！ おじいちゃんに頼んだらいいじやろう、木乃香ががんばるがよい、と言ってくれたんや」

嬉しそうにはにかむ木乃香さんを見た僕達はその光景を想像し、

「親馬鹿なのですか」

「あのじじい、親馬鹿すぎるだろ。しかも余計だ！」

「相変わらずね」

「あの人は……」

上から夕映さん、エヴァ、明日菜さん、刹那さんががっくりと肩を落とす。

その気持ち凄く分かる。

その気があれば、きっと法律も改正できるに違いない。

何の法律を改正って？

まあ、今は気にしないでおうか。現実で起こされたらシャレにならない。

今思い浮かんだ事は記憶の奥底に閉まった。

木乃香さんと合流？ してから、純粹に学園祭を楽しむ事にした。

「学園祭・？？？」

次に来た場所、いや偶然？ カップリング相性占い場に着いた。

本当の目的はその奥の場所なのだが。
木乃香さんが嬉しそうに指を差す。

「あそこ行こ？ ネギ君」

「カップリング相性占い？」

「ほお？ そういう占いがあるのか」

「それじゃあってあれ？ リイスさんは？」

夕映さんがキョロキョロとしていたが、明日菜さんの背後からいきなり出現して

「どうかされましたか？」

「うおっ！ いきなり現れるの止めてくれない？ リイスちゃん」

現れたリイスの服装が、明日菜さんたちと同じ服だったりする。
リイスの制服姿って似合ってるんだけど、別の意味で危ないな。
似合いすぎるが、とてもじゃないけど高校生が中学の制服を着ているかのようだ。

「ちっ！ また面倒な奴が」

まだあの事を根に持ってるのだろうか？ エヴァ

「じゃあじゃあ、ネギ君と順番交代で占いしてみいへん？ それで誰が一番相性が良いか勝負や」

「勝負という事は一番だったら何なんだ？」

「一番やったらネギ君と何でもできるってのはどや？」

「な、何でもってこのちゃん？」

「せっちゃん、つまりな……ゴニョゴニョ」

「っ！？」

木乃香さんが刹那さんの耳元で何かを呟いた。
いきなり、刹那さんの顔がボツと赤くなった。
それを見ていた全員も顔が赤い。

言ってる事を想像出来たのか。

フン、どうせ僕には理解できないし、蚊帳の外ですよ。

僕が一人でボーっとしてる間も勝手に話が進行していく。

「一番は誰が行くのよ」

「ジャンケンで決めようじゃないか」

「それしかないわね」

「魔法勝負だったら、私は負けます」

「それなら私の圧勝でしたのに残念です」

「リ、リースちゃん」

「夕映ちゃんが一番不利だしね」

「あ、ありがとうございます。明日菜さん」

「いえいえ」

だが、次の夕映さんの言葉で思考を停止する。

「のどか、のどかより上の関係になってみせます。そのまま遅れる
といいです」

な、何？ 夕映さんが、黒夕映さんが出てきた。

こんな状態は初めてなんだけど、どうすればいいのかな。

よく考えれば、夕映さんは既にのどかさんへ自分の気持ちを打ち明
けてるかも知れない。

変わった夕映さんを見ると、ジャンケンをしている5人の姿が
あった。

「よし勝ったああ!!」

「明日菜が一番でええんやな」

「一番最初は死亡フラグです」

演技でもないぞ、リイス

その言葉にポカーンとしていた明日菜さんが混乱しながらも皆に問いかける。

もちろん、当たり前のように僕は蚊帳の外だが。

「え？ 皆が一番を狙ってたんじゃあ」

「そんなわけがないだろう。狙うとしたら3番だったのだから」

「なぜに3番？」

「その方がいいって占いや定番の言葉やろ？」

「それならエース的な意味で4番が」

「ゆえっちが4番選んだのって」

「はい。その意味です」

「あの、順番的に意味ない気がします」

「「「……」」」

「え、えと私変な事言いました？」

「……はあ。ならまずは私と、ね」

明日菜さんが恥ずかしそうに僕の手を握る。

うわあ、明日菜さんが緊張してる。

木乃香さん達の妙な視線を感じるけど、気にしてはいけない。

「い、いくわよ。ネギ」

「訳が分かりませんがわかりました。逝きましょう」

こうして、どんな意味で始まったのか謎の『カップリング相性占い
で誰が一番か決定戦』が始まったらしい。

まったく、無い事ばかりのイベントが起こるなあ、と僕は思いました。

第44話『学園祭編その9 学園祭当日』(後書き)

このイベントに意味はちよつとだけあります。

後の展開でこのイベントの反映した何かが起こる！ ……かも知れない。

第45話『学園祭編その10 サブタイトルなし』(前書き)

今回のイベント、特に謎の声だけは重要？ かもしれません。

感想・web拍手などお待ちしております。

第45話『学園祭編その10 サブタイトルなし』

く占い屋く

アーケードゲームみたいな機械が設置されていた。
それを呆然と見る僕と明日菜さん
はあ…いつ素を出せるのやら。

機械オンチの明日菜さんがボタンを押した。

「おお！ えくと…どうやるんだろう」

「係りの人はいないんでしょうか」

「うーん、誰もいないわ。気配も感じないし変ね」

確かに生命反応がない。

するとって画面の上に説明が載ってあった。
とりあえず暗記しておいた。

「明日菜さん、ここに」

「ナニナニ？」

明日菜さんが説明を読んでいる間に僕はすばやくボタンを押す。
画面が起動した。

「あ、ネギはやり方わかってるんだ…じゃあさっさと済ませるわ
よ」

「明日菜さんが遅すぎるんです」

「うっ」

落ち込む明日菜さんを見無視して、お互いの名前を入れた。画面上にはしばらくお待ちください……と表示。しばらくすると結果が出てきた。

それを覗き見る明日菜さんが大声を叫ぶ。

「嘘でしょ！！ 相性最悪って何よ！ この機械ポンコツなんじゃないの！」

悔しそうに左足で機械に蹴りを入れていた。何発も何発もだ、って壊れるってば。

「明日菜さん、そろそろ」

「……ええ」

僕と明日菜さんは低いテンションでこの部屋から出た。でもあの機械、どこかで見たことあるな。どの世界だっけな。

古い屋から出た僕を見て木乃香さん達が来た。駄目な結果出た？と尋ねている様に見える。

「どやった？」

「相性最悪だって！ もう勝手にしたら」

拗ねてどこかへ行こうとする明日菜さん

でも疑問があるんだよね。

人気の無い所に無人らしき古い屋が存在する。
と考えると、木乃香さんが声をかけてきた。

「ネギ君、次はウチと」

「順番ってどうなってるんですか？」

「もう順番なんかどうでもええ気がする」

なんして？

「神楽坂明日菜がドベの段階で勝敗は決定したも当然だ」

「何かひどい言い様ね」

「夕映さんや私は無視ですか」

「……私は別に構いませんが、木乃香さんは先にどうぞ」

まったく、夕映さんの性格が変わってるし。

「それじゃあネギ君……」

「はあ……」

「あああああああ!？」

もうどうにでもしてって投げやりの気分で状況に流されようとしたが、木乃香さんの驚く声に遮られた。

何事かと前を見たら、あったはずの古い屋が消えていた。
まるで幻だったかのように。

「これ、どういう事？」

「学園祭の出し物じゃなかったのか？」

「そうやな。突然消えるなんてあるん？」

「わからん」

突如、声が聞こえた。

ネギスプリングフィールド

爺みたいな声が周りに響いた。

まるでどこぞのレプリカとオリジナル世界のアレみたいな声だ。

「何？ この声」

「この声は……」

「そんな事を言ってる場合じゃないです」

ネギスプリングフィールドよ

サウザンドマスターの息子、希望の存在、特異点の脅威をつぶした者

世界を救う英雄よ、汝らに我の力を授けよう。

何か頭に響く。

ってか、明日菜さん達の前で特異点の脅威とか言うなっての！
そもそもこいつ、何で知ってる！？

明日菜さん達も聞いているから素を出すわけにはいかない。

口を開こうとしたら、エヴァ達がしゃべりだす。

「な、何!？」

「ネギ君、何かずるい」

「世界を救う英雄って？」

「力を授けるって何の力ですか？ ネギ先生はもうチートの塊」

「チートやのうてバグキャラ扱いやろ？」

酷い言われようです。

チートどころかバグキャラって僕はラカンさんですか？

「ご主、ネギの魔力は木乃香さんの10倍以上はあります」

「10倍って滅茶苦茶だな。潜在魔力じゃないだろ？」

「そうですね。潜在魔力はもう数倍かければいいのです」

本当はそれ以上で言葉では表現できないほどの魔力を持っています。その潜在魔力は未だ半分も開放できてないが……もちろん元の姿でも。

受け取るがいい。拒否は許さんぞ、我がいや、選ばれし真格者よ。

謎の声が聞こえた瞬間、僕の体に何かが入ってきた。これだけは僕だけしか聞こえなかったようだ。

明日菜さん達が反則だのチートだの言ってるみたい。別にどうでもいい、か。

「で？ 勝負もあいまいになったけどどうする？」

「何がだ？ 負け犬」

「誰が負け犬よ！？」 エヴァちゃん達は何も受けてないじゃない」

受ける前に占い屋は無くなったから仕方が無い。

さっきからこの辺の空気が気持ち悪くなってきた。

そう感じてるのはおそらく僕だけだろう、明日菜さん達は普通だし。

「ここにも意味ないから別のところへ行きませんか？」

夕映さんが提案を出す。

確かにこんな所に居ても祭りは楽しめない。

それに、先ほどから人が来ない。

「ここに居ると嫌な予感するな」

「エヴァンジェリンさんが言うのですから間違いないです」

夕映さんがそう認識してるみたいだね。

さっきからリイスがこちらを観察する目で僕を見ていた。

気になった僕はリイスに目を向けると、あわわわと言って目を逸らした。

「気にはなるけど……皆さん、人の多いところまでいきましようか」
「で？ さっきのはどうなるんや？」

「明日菜さん以外でできなかったので無効ですね」

「まあいい。この勝負は保留だな」

保留ってまたするの？ さすがに勘弁なんですが……

「無駄だと思いますよ？ ネギ」

「リイス、人の願いを潰さないでくれる？」

「……そ、それじゃあ幽霊屋敷にいきませんか？」

「お化け屋敷じゃなかったか？」

「ウチのクラスにいくんやったらお化け屋敷やなかった？」

話を逸らされ、3-Aの出し物の方へ行くって待て！

「リイスもいくの？」

「もちろんです！」

ガッツポーズを取るリイスを見て溜息を吐いた。
行ってみたいという思いは伝わってきた。

「そういえば、リイスさんは初めてなのですね」

「はい」

夕映さんの言葉に頷くリースを見て、ようやくわかった。
130億年以上の魔導書って事、すっかり忘れてた。
もちろん、学園祭などの行事が楽しみだろう。
って今は学園祭中だけだ。

「リース、一緒にお化け屋敷行かない？」

「ちよっ!？」

「ネ、ネギ？」

「ご主、ネギ……」

「3-A前に転移しよう」

そう決めた僕は自分のクラスの周辺に座標を合わせる。
人が多いから計算しなければいけない。

「ネギ、見られる!？」

「興味ないです」

それはどうでも良かったが、一つだけ気になった。

謎の声による力だが、何かパワーアップって感じがしなかったんだ
けど、何だろう？

疑問を抱きながら、僕は極移の魔法陣を展開発動させて、この場か
ら消えた。

〈学園・廊下〉

転移した僕達は誰も居ない場所へ来た。

誰も居ないといっても数メートル範囲だけだから意味ないが。

「さっそくですが、行きましようか」

「そやな。エヴァちゃん、明日菜さん、リースちゃん、夕映ちゃん」

「あのー……さっきから私の事忘れてますよね？」

「せっちゃん、居たんや」

「こ、このちゃん」

今まで忘れられていた刹那さんが地面に両手を付いた。
ごめん、僕も存在自体忘れてた。

3-Aへ向かったのはいいが、行列だった。

長い、前も思ってたけど長いです。

廊下から下へ降りる側の階段まで並んでいた。

「ウチのクラス繁盛してるね」

「あ、あの！」

「アレに釣られてるだけだろ？」

「え？」

刹那さんの扱いがひどいな。僕も人の事は言えないが。

エヴァの言葉に人が並んで見えづらいが、入り口前に露出の多い
コスプレした裕奈さん達が居た。

これは前と同じだから別にいいでしょう。問題は、ね。

「な、何よアレ!？」

「その役目じゃなくて良かったわ」

「アーニャちゃんがメイド姿で接客してる」

「似合いですぎて怖いですね」

明日菜さん達が色々言っていました。
前に居なかったアーニヤがこうなった理由は僕が知ってるわけではない。
様子を見てみると、メイドらしき仕草で案内してる。ツンデレっぽくもない。

別に歴史どおりになぞる必要はないんだけど、ね。

「どうします?」

「別の場所へ行きましようか」

リースがアーニヤを鋭い視線を向け、ココに居ると危険だと呟いていた。

明日菜さんは「え?」とリースの視線を追うと、なるほどと納得した。

「よしネギ。別の場所に行こうか」

「そ、そうですね」

エヴァの言葉と他の人の威圧感でめんどくさくなった僕は頷き、次の場所を聞く。

「じゃあ、どこへ行くんですか?」

「適当に名物を食べればええやろ?」

「それでいくか」

結局、そういう路線なわけね。

さっそく外へ行こうとするが、教室からこちらに向かってくる気配と声が聞こえた。

「ネギ先生!」

「あ」

猫耳を着けて、黒い毛皮の下着？を着た裕奈さんに呼び止められた。知らない人の前なら別に魔法使おうが関係ないが、さすがにクラスメイトの前でつてのはちよつと、ね。なら抜け出す方法なんて存在しないな。

「裕奈さん」

「あのねネギ君。クラスの出し物みていかない？　ネギ君ならタダでいいよ」

「ちよつと裕奈、ネギは私達と」

「明日菜って変わったわね」

「え？」

当然のように首を傾げるが、木乃香さんが裕奈さんに近づき

「そりゃあ、おじさん趣味から変わったのは凄い進歩や」

「そもそもそっちの方がおかしいのです」

「お馬鹿からタダの馬鹿になっただけだな」

「エヴァンジェリンさんもひどいですね。確かに明日菜さんも変わりました」

「ふーん、まあいっか。ネギ君、どう？」

いや、どうと聞かれても仕方ないんだけど。

明日菜さん達がどう思ってるか知らない。

「クラスも出し物、ね」

「ちなみに2人つきりだと抱き付き放題だしね。私もネギ君と行きたいなあ」

裕奈さんがわざとらしい声色で言うと、僕の隣に居た夕映さんが僕の手を握ってきて

「裕奈さん、私とネギ先生を案内してください」

「「「ちよっ!?!」」」

夕映さんの行動にあっと驚く人達。

僕の方に体をくっ付けてるせいで体温が伝わってくる。

そんな僕の頭にカチューシャが前の方から飛んできた。

「痛い……アーニヤ何するんだよ」

「うるさい!」

「ほうほう」

「な、何?」

木乃香はアーニヤの全身を舐め回すように見ると何かを納得したのか頷き、人差し指を前に立てこう言った。

「アーニヤちゃん、もしかしてネギ君に見せたかったんやな?」

「は、はあ!?! な、なんでそうなるのよ!?!」

「ほうほう、だからアーニヤちゃんはメイド姿になったのね」

裕奈さんがようやく納得いったという表情でうんうんと頷く。

アーニヤのメイド姿を見るが、これってフェイトに攫われた時の服に似てるな。

色が似てるだけだ。

ついじーつとアーニヤのメイド姿を眺めていると、過去のことを思い出した。

あの時は興味なかったが、今になると勿体無い気分になった。何である時、写真に残さなかったんだ!?!

そんなことを思い出していると、コウモリ姿の桜子さんがこちらに来て誘ってきた。

「ネギ君、お化け屋敷体験してっよ。アーニャちゃんのメイド姿に見とれてないで」

「え？」

「わ、わかりました」

僕達は桜子さんに連れられていった。

僕の手を繋ぎながら向かっていったため、明日菜さん達は桜子さんをじーっと見ていました。

アーニャも一緒になって、微妙に怖かったです、と僕は後に語る。

くお化け屋敷の中く

入り口付近でアーニャは接客の都合で外れた。

桜子さんはどう見ても子供に過ぎない双子とプラスで接客に戻る。

「あら、ネギ先生」

「あー！ ネギ君だ！」

「……ネギ先生」

前と同じあやかさん、まき絵さん、アキラさんでした。

ここは何も変わらないんだね。

周りを見て不思議に思った。

前に考えられなかった事が一つわかった。

教室自体、空間が広がっている。それも数倍程度は広がっている。

後ろからリイスが小さな声で

「空間拡大、面積は約4倍から6倍ぐらい大きくなってます」
「……あの、これどうなってるんですか？」

知ってるが、確認のため聞いてみる。

一応イレギュラーが発生するか確認したいだけ。
アキラさんが返答する。

「超さんの最新技術らしいです」

「すごいよね！」

「不思議ですわ」

これでも何の疑問も抱かないんだ。

あやかさんが魔法の存在を知っても何もかわらないね。
予想通りの返答に安堵した僕だが、これ以上居ると迷惑だから選ぶ
としよう。

「うーん、やっぱり18推奨の部屋でしょう」

「そやな」

「よし」

「よしって何なん？」

「いえ別に」

「ふーん」

「時間が押してるため全員で入ってください」

そんな注意が飛んできた。

どうやら並んでいる人達からの苦情があったらしい。

それを聞いた明日菜さん達は肩を落とした。

諦めたというのが正しいのだろう。

「さつさとすまそうか」

「案内役はいらん」

エヴァがそう吐き捨てると、アキラさんが落ち込む。
それを無視して、18推奨の扉を開ける。

以下省略

何事もなくゴールから出た僕達はそれぞれ感想を呟く。

「あの爺は傑作だな。笑ってしまったぞ」

「その影響でお化け屋敷という事を忘れてしまったです」

「エヴァンジェリンさんのせいです」

「うーん、地面にアレを仕掛けるなんて良く考えたものだわ」

「それ以上の速度で走れば関係ないですよ」

お化け屋敷の感想言えよ……。

何で中身の構造の感想なの？

人のことは言えないか。僕も超さんの利用してる空間技術を暗記していたのだから。

あの空間技術を少し応用させて、超さんを騙すのも良い手かもしれない。

ん？ カシオペアに空間？ 良い事思いついた。

それは学園祭最終日までのお楽しみだ、と頭の中に留めておく。
いきなり妙な違和感と眠気が襲ってきた。この違和感って何だ？。
体がいきなり重くなった。この状態はって先ほどのアレか？

あまりの重さにどうでも良くなった。ああ、今すぐベットで寝たい。

「それより、これからどうするんですか？」

「僕、眠くなりました。保健室へ行こうと思ってます」

「そっか。じゃあ私も行くわ」

「ウチも」

「当然私もだ」

夕映さんだけ返事が返ってこない。

時計を見て、うーんと悩んでいる所だった。

数秒後、考えがまとまったらしい夕映さんが僕に言った。

「ネギ先生、私はここで外れます」

「夕映？」

「木乃香、私は少し用事がありますので」

僕に背中を向け、そのまま歩いていく。

「……ゆえ、のどかの事？」

「っ!？」

木乃香さんの一言でピクツと止まったが、そのままどこかへ行ってしまった。

のどかさんと何かあったんだろうか、と呟いたら明日菜さん達は呆れた表情で僕を見る。

まるで僕がアホの子だと言わんばかりだ。

哀れな視線に耐えられなくなった僕は保健室へ向かう。

途中で待って、という声が聞こえたが、あえて無視した。

（保健室）

この場に着いた僕は、邪魔されないように外から干渉できない結果

を張る。

魔法陣が誰にも分からないほどの速度で展開完了した。

僕はと言うが、一応明日菜さん達も居る事を言っておこう。先生がいないが気にしないでおこう。

「ネ、ネギ」

リースが僕を見ていた。明日菜さんたちも同様だ。

「隣にベットがあるはずですがってこ、木乃香さん!？」

いきなり木乃香さんが右の方から入ってきた。

おお! 木乃香さんの体が僕の右腕に当たってる。凄く……ってそうじゃなくて

「な、何を!？」

「一緒に寝るだけやん」

「なら私もだ、な」

何がなら私も、ですか? エヴァ

そんなことを気にせず僕の左から入ってきた。これで両腕が占領されました。

「エヴァちゃんも木乃香も何やってるのよ!」

「そうです! 誰かが入ってきたらどうするんですか!？」

「結界なら貼った。問題ない」

「さすがエヴァちゃん」

当たり前のように思うが、僕は試されているのか?

誰か教えてくれ、僕はどうすればいいんだ?

襲いたい衝動が膨れ上がって大変なんだ。

「刹那さん、神鳴流最終奥義でこの2人をどかして」

「ええ！？ でもこのちゃんが……いえ問題ないですね」

カチャッと刀をこちらに向けるって何をやろうとするんだ！？
刹那さんが早速といわんばかりに刀にスパークが走る。

「神鳴流決戦奥義」

「せっちゃん！？」

「おい！？」

2人は僕から慌てて逃げる。

その後はまあ、予想通りの展開になる。

「せっちゃん」

「このちゃん」

「刹那、お前」

「エヴァちゃんも木乃香も悪いわ」

つか、寝かせてくださいと思ったが、ちゃっかりリイスが僕の隣に
進入してきました。

リイスは理性的な意味でヤバイんですけど。特に誘ってくるような
全体の何かが！

「ご奉仕しますね、ご主いえ、ネギ」

「リイス！？」

「しー、聞こえますよ？」

「聞こえとるんやけど？」

「抜け駆けすぎるわ」

「リースいい度胸だな」

いい加減イライラしてきた僕は起き上がり、魔力を開放する。
ようやく僕の雰囲気気づいた皆が青ざめる。

「ネ、ネギ!？」

「ネギ先生!？」

「おい、どうしたんだ!？」

「フフフフ……そんなに僕の邪魔をするんですか？ いいですよ、眠って貰います」

「ちよっと!？ 何でそんなに魔力を開放するの？」

「逝け、凍る世界」

「「「「ええええええええ!？」」「」「」」」

永眠でもしとけ!というつもりで魔法を解き放った。
あまりのダメージで気絶した全員を見た僕は欠伸をして眠った。

この時、僕は気が付かなかった。
何時間ではなく、何日も眠ってしまった事を。

続く。

第46話「学園祭編その11」

第45話『学園祭編その10 サブタイトルなし』(後書き)

謎の声からネギが受け取った力は時間が経つごとにわかってきます。

次回更新日は……10月23日予定です。

第46話『学園祭編その11 3日後の世界』(前書き)

文章がおかしくなってる部分があるかもしれませんが。
その時は申し訳ありません。

第46話『学園祭編その11 3日後の世界』

「ネギ、ネギ起きて!!」

「うゝん」

誰かに体を揺すられていた。

誰だと思い確認するために目を開けると、明日菜さんがいた。でも表情がおかしい。どうしたんだ？

「どうかしたんですか？」

「私自身はなんともないわ。そうじゃなくてコレ見て！」

明日菜さんが焦った様な表情で新聞を見せ付けてきた。新聞に何か書いてあるのか、と記事の内容を見る。

え？ 日付が三日経過していた。

「え？ 学園祭が終わってる!!」

「何で」

「ネギ、何の結界を張ったんだ？」

「エヴァちゃんおかえり」

「え？ 結界って完全遮断結界というその部屋自体が存在しませんよ、という奴だけど？」

「それが原因っばいな」

エヴァが腕を組んで焦っていた。

それもそうだろう、時間がかかり経過していたのだから。あれ？ 時間高速化とかした記憶ないんだけどなあ。

まあいつか、それより現在だな。

「これからどうするんですか？」

「超さんからもらったカシオペアで戻りましょうか」

僕の場合はいくらでも方法があるから関係ない。
でも、明日菜さん達にはソレがない。

「カシオペア、か」

「えっと初日の夕方でもいいですね」

「そんなもんやろうな」

「え？ まだ3、4時ぐらいだった気が」

「どうせする事ないですよ？」

「まったくだ」

エヴァもリイスを受け入れている感じがするね。

僕はカシオペアを起動させようとするが、シーンと沈黙した。
発動する動きもない。

「何も起きませんね」

「何も起きないじゃない」

「故障なん？」

やっぱ学園祭中じゃないからかな？

権限の鍵を使えば簡単に出来るだろうが、めんどい。

うーん……3日後だとすれば、この時間は魔法がバレたという要素
が。

「ここから出ましようか」

「多分、外は騒がしいぞ」

「そういえばエヴァちゃん、外に出たんやろ？」

「いや、影のゲートで私の家に向かったただけだ」

周りの様子がおかしかった。

嫌な気配を感じたエヴァ達はあまりここから出る訳には行かなかった。

だが、エヴァは違う方法で出る事が可能なため、エヴァに任せたそうだ。

さすがにバレる前提で浮遊術を使うわけにはいかない。

「で？ 何で新聞だけ？」

「私が見たいと思ったただけだ」

「はつきり言うな」

「それだけ年を取ってるって訳ね」

「お前らなあ」

エヴァが突っ込むと、明日菜さんが笑っていた。

まったく、凄く仲が良くなってるし。

これも弟子にした影響か？

「外に出てみましょうか」

「行くの？」

「準備しようにもできませんし」

「準備って何をするんだ？」

「お腹すきましたし、学園の外に転移しますか」

「私の家に転移すればいい。あそこには茶々丸がいるはず」

そういえばそうだ。

この時間の茶々丸さんは何をしてるんだ？

「それじゃあそれでいいわ」

「結界解除、極移」

ここにいる全員をエヴァの家へ転移させた。

くエヴァの家く

外だとまずいから直接家の中へ転移させてもらった。
茶々丸さんが無表情でソファ―に座っていた。

「茶々丸」

「……マスター」

「どうした？」

「マスター、よく聞いてください。世界に魔法の存在がバレました」
「「「え？」」」

明日菜さん達が淡々としやべる茶々丸さんの思いがけない言葉に驚く。
やっぱり超さんの計画が発動してしまったのか。

「そうですか……」

「ちよっと待って！ いっぱれたのよ」

「昨日です。超が学園祭最終日の昼頃、世界樹を利用して世界に魔法を認識させる願いを叶えたのです」

「どうやってやったん？」

「全てをお話する権限が掛けられてますので、言えるのは六体の巨大なカメラを特定の位置に配置、

4000メートルの空で儀式という2つのヒントしか言えません」

「ふむ。超の科学と世界樹の力なら可能だな」

まさか、この話を今聞くことになるとは。
だいたい、タカミチじゃなくて茶々丸さんから聞くってのは斬新だな。

説明もかなり省略しすぎてるし。

エヴァがいきなり回りを見始める。

「どうかしたんですか？」

「誰かが来た。気配が5人だ」

「どうするの？」

「突撃しますか？」

刹那さんが戦闘モードに切り替わる。

でも、タカミチの気配はするが、他の4人は誰だ？

「私の家来るとはいいい度胸だ。蹴散らすぞ」

「ちょっと待って！ これってヤバイんじゃないか」

「大丈夫ですよ？ 本気で蹴散らしてもいいです。なんなら消してもいいですよ。」

過去に戻って未来を変えればなかったことになりますから」

「そうなんだ」

本当は無駄な分岐ができるだけなんだけどね。
パラレルワールド

ガノードがないいいせいで本当に知らない展開ばっかだな。

大きな出来事は半分ほど同じなくせに。

「外に出るぞ。茶々丸はここにいろ」

「そうですね。わかりました」

僕達は玄関のドア前に立つ。

向こうにいる5人の気配はまだ動きを見せない。
普通は忠告してくるはずなんだが……。
なら突っ込むか？

「……先手必勝といきますが大丈夫ですか？」

「ええで」

「大丈夫よ」

笑顔で返してくる明日菜さんだが、本当にそうだろうか？
まっいいか。どんな結果であれ、明日菜さん達を守るだけだ。

「もしもの時は」

「それはしたくない」

「やな」

「ネギ、動きを封じる程度で行きます」

「じゃあ消すのは無しって事か。……つまらない」

「「「……」」」

何で皆は沈黙するんだ？

最近、ストレスが溜まり過ぎて素が表に出そうだ。

「ではいくぞ」

エヴァの家から飛び出した。

飛び出した途端、魔法の射手がこちらに撃ってきたので、僕が吸収する。

相手は驚愕の表情だった。

「ネギ先生と生徒達。おとなしく来ていただけますか？」

「いい度胸だな。刀を持つ女、グラザン男」

名前で言ってあげなよ、エヴァ

「もうしわけありませんが、自力で通してもらいます」

「やれやれ聞き分けのない子ねえ。刹那」

「フン！ 私が居ることを忘れているのか？」

エヴァが魔力を開放すると、タカミチ達が驚愕する。

「そんな、封印が」

「救援を呼んだほうがいい」

「エヴァンジェリン、来てくれる気はないかい？」

「あるわけないだろ。過去に戻るんだからな」

エヴァはやる気満々でエクスキューションソードを展開する。

僕も準備しようとした瞬間、権限の鍵が世界樹を求めている。

何で？ ああ、そういう事か。

さっそく世界樹の方へ走るが、呼び止められた。

「ネギ、どこいくのよ」

「世界樹前」

「そこへいけばどうにかなるんやな」

「とういか極移で転移すればいいのでは？」

「どちらにしろ、こいつらが邪魔だ」

エヴァの言うとおりで。

ここにいる人物が、とても邪魔だ。

タカミチ達を敵とみなし動きを止める以外にはない。

「魔法の射手 連弾・雷の360矢 集束 雷の槍」

この中で強いタカミチに投げた。

タカミチは両手をポケットの中に入れ、居合い拳で弾こうとするが、僕は追加する。

「雷の暴風」

「星光破壊」

って木乃香さんがなぜに？と木乃香さんを見るとニコツと笑顔で返された。

さすがにタカミチだけじゃあきついと思った4人が防ごうとする。ってか2人は誰？

5人がこちらの魔法を止めていたが、苦しそうだ。

「高畑先生！」

「僕達も手伝います」

「助かるよ」

何とか弾き飛ばそうと一生懸命頑張っていた。

防げるのは木乃香さんの魔法が無詠唱だからなあ。僕の魔法も手加減してるからだろう。

「ネギ君の魔法とウチの魔法が」

「手加減しすぎたか。じゃあこれで」

僕が雷の暴風に魔力を送ると、威力が強くなり、魔法がタカミチたちを包み込む。

悲鳴を上げて遠くに飛ばされると爆発した。

10メートルは爆発の範囲に入っている。

「高畑先生が」

「タカミチがああの程度で死ぬわけない」

「それでも手加減したんですから死んではないですね。もう少し魔力を高めればお亡くなりになります」

「お前はどんだけだ」

「ネギは木乃香さんの10倍以上ですから」

「何か納得しました」

刹那さん、何か馴染んで来ましたね。

「動きを封じますか。大地の牢獄」

金色の魔法陣がタカミチたちを囲み、地中に飲み込まれていった。ボコボコボコボコと音を立てながら激しい勢いで飲み込んでいく。数秒で約1キロは地中に飲み込まれたはずだ。

「これで脅威は消え去りました」

「こんなことして大丈夫なの？」

「未来ですよ？ だから好き放題に」

「あははは」

「移動しますよ」

こんなことすると無駄な分岐世界ができるが、どうでもいい。こうして、僕達は目的地まで移動した。

（世界樹）

近くまで来たらよくわかったが、世界中の色が変わっている。枝部分が白く光っている。まるでこれは共鳴している？権限の鍵と、いや僕の魔力か！

「ネギ！ 何か部隊みたいな格好した人達が！」

「え？」

「あれは……魔法騎士団！？」

「こんな学園ごときで魔法世界の舞台が来るわけないだろ！？」

明日菜さんの言葉に振り向くと、どっかで見たような魔法騎士団が僕達を囲んだ。

ある程度の魔法を防ぐ鎧を着けた人数が100を越えている。

そんなことより、世界樹が薄らと光っている。明日菜さん達は気づいてないが。

「ネギ・スプリングフィールドとその他連中。大人しく投降するがいい。

今ならオコジヨの刑だけで済むぞ」

赤い鎧を来たリーダー的な男声の変な警告が来た。

誰かが操っているのか？と感知魔法を展開しても反応無し。

「僕達は何をしたというんだ！！」

「確かにそうだな」

「そうよ！ 私達は何をしたって！？」

「君達は、いやこの学園は私達の存在をばらした罪だ」

超さんの計画が発動し、魔法世界の存在を知られ、報告を聞いた魔法教会だっけ？

訳の分からん協会か組織が知らんが、そいつらがここについて事だろ

う。

さっきから超さんの気配を感じないし、どうなってるかわからんが。

「私達は何も―」

「もういいです。あなた達がたとえ魔法騎士団だろうが関係ありません」

僕は懷から学園長からもらった年齢詐称薬を取り出す。

これを飲めば元の時間に戻るなど造作もない。

なぜこの時間まで寝てしまったのか未だに分からん。

「リイス、世界樹の核部から魔力を吸い出して僕に送って」

「わかりました」

「ネギ先生、私達は何を？」

「ウチらも手伝うで！」

「大丈夫ですよ」

学園長から貰った魔法詐称薬を1粒取り出し、鍵で時間制限を改竄し、それを飲み込んだ。

魔法騎士団はこちらを警戒していたが、関係ない。

ボンとギャグ的な効果音が鳴り、僕の体が18歳の状態になる。

18歳の体になったことを確認した僕は魔力放出する。

「はああああああああああああっ!？」

スパークを走らせながら僕の周りに魔力を覆わせた。

本来なら周囲が突風で吹き飛ばされ、地震がなり、星が揺れるほどの出力のはずだが、

8割ぐらいは抑えている影響で何も起きないが、実質2割しか開放してない。

まるで、どこぞの○○ヤ○3状態のようだ。

魔法騎士団も明日菜さん達も驚愕の表情を浮かべていた。

「ふう、口調どうしようか。幻術だから僕でいいか。さて覚悟はいですか？」

手を出してきたのはあなた達の方ですからね。フッフ……」

「ネギ先生、物凄く怖いです」

「我々に反抗するなら実力行使もやむを得ないが、6対150に勝てるとても」

「フハハハハ！ 私は闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだと知っての事か！」

「闇の福音だと！？ だが、我々には勝てぬぞ。選ばれぬ弱者達よ」

その一言でムカツと来た僕は騎士団の方へ突っ込み、呪文を唱える。

「魔法の射手 連弾・雷の500矢 集束 プラズマブラスター」

雷の矢で集束していた塊を騎士団の方へ発射した。

相手は魔法障壁で防ごうとしたが、障壁を軽く突破。

相手の上半身を貫通し、次々と下半身だけを残して過ぎ去っていった。

50人ぐらいは上半身が消えている光景を見て怯える。

「ひい！？」

「お、おい！」

「嘘だろ！？ あんなガキごときに」

そいつらの横には下半身だけの物体だった。

完全に絶命している。

下半身だけの物体が前に倒れる。

つまり、ネギは明日菜達の前で人の命を奪ったのだ。

「君たちも下半身だけになりたい？」

「ひい!？」

「もうやってられるか! 逃げろ!」

「うああああああああ!？」

残りの騎士団が転移で逃げていった。

逃げていったのか、情けない。

明日菜さん達の方へ見ると、表情が青ざめていた。

エヴァは平気そうだが、顔を引き攣らせていた。

「ネギ、どうして」

「ああするしかないですよ？」

「でも!」

「納得いきませんか? だったら……僕は」

「っ!?! 何を」

僕は明日菜さんの前に立ち、おでこに手を当てる。

魔法無効化を一時停止させた後、おでこに魔法陣を展開した。

「ネギ、魔力を送り終えました」

リースの言葉で僕はおでこに当てた手を離し、カシオペアを前に突き出した。

「明日菜さん」

「な、何?」

「魔法の世界がどんなに危険か考えてください。自分がどんな残酷な世界に突っ込むうとしてるのかを」

「……わかった」

「ネギ君、そんな事言わんでも」

「リスや刹那さんとエヴァンジェリンさんは知ってるからいいですが、木乃香さんも人の事いえませんよ？」

「あ……そやったね。でもなウチ決めてるんよ？ 何があろうとウチはネギ君のそばにいるって！」

木乃香さんが真っ直ぐ過ぎる。

いくらなんでもこれはないって位に、ね。

「それより早くしないとさっきより多い気配がこっちに近づいてるぞ」

「嘘やん!？」

「おそらく私達を捕まえようとしてるのでは。ネギ先生、早くココから」

その通りだが、刹那さん？ 僕の腕に刹那さんの腕が絡みつく。

「おお！ せっちゃんも」

「いえ、これはただこのちゃんがやってたのでつい……」

「ふうん、じゃあウチも！」

「こんなことしてる場合じゃないでしょ!？」

何か遠慮気味な明日菜さんが言う。

勢いがいつもよりないのは僕のせいだろうか。

「僕の体に掴まって下さい」

「え、ええ」

「はい」

「うん」

「はい」

全員が触れているのを確認した僕はカシオペアに魔力を注ぎ込む。
まだ無反応だったが、目を閉じて術式を展開する。

「無限に連鎖する世界よ、無限に分岐する運命よ、平和の道へ導け。
運命の時空」

周囲の空間が歪んだが、しばらくすると閃光が走って時間が巻き戻るのを感じた。

運命の時空は別世界で時空を正すために使われた魔法らしい。

カシオペアにある針がクルクル回りだした。

起動はするんだな、と考えていたが、場所が保健室に戻り、当日の夕方に戻ったみたいだ。

時間はちよつと違うが。

目を瞑って僕の体を触る皆に報告する。

「もう着いたから離れていいよ」

「それは別や」

「おい！」

「ネギ、元の姿に戻ってるのね」

いつもの勢いがない明日菜さんが僕の状態に気づいた。

そう、元の日付に戻ると姿も戻るように設定した。

「あの時間に居る間だけ」

「そうなんだ」

そう答えると僕から逸らすかのように俯いた。

態度が明日菜さんらしくないってこんなにしたのは僕、か。

こんな表情にさせたくなかったのに、僕は何を考えて？

ああそうか、僕はただ明日菜さんを……。

なら本人の好きにさせようか。それでどうなるか知らないが、僕が護ればいいだけだ。

決心した僕は笑みを浮かべながら明日菜さんに声を掛ける。

「明日菜さん」

「な、何？」

「明日菜さんは明日菜さんの道を行けばいいと思います。それが例えば僕と反対の意見を持っても」

「ネギ……」

明日菜さんは今にも泣きそうな表情だったが、僕の言葉に目を瞑ってブツブツ言っていた。

色々と妙な単語とか聞こえたが、この際無視だ。

そんな様子を見ていた木乃香さんが明日菜さんの隣に行き、耳打ちしていた。

すると、明日菜さんの顔が赤くなった。

「木乃香！」

「だってウチはそうやもん。明日菜、ネギ君の言うとおり明日菜は明日菜の道を行けばええやん」

「……そうね。ありがとう！ 木乃香」

「親友やん」

「私も割り切ってますし」

「刹那さん」

早い立ち直りです、明日菜さん

この時点で人を下半身にした光景を見せて立ち直れるとは……。うーん、少し早いけどあの5つの武器を常にとっておく必要がある

かな？

「じゃあ僕はちょっと行きたい所があるから行きます」

「どこへ行くんだ？」

「それは内緒です」

「ウチもそろそろ行くな」

「夕方といってもまだ4時ぐらいだし？」

「なら私も行くとするか」

皆はそれぞれ保健室から出て行った。

といっても、リイスだけが残っていたが。

「リイス？ 何でここに居るの？」

「私はネギと」

「はあ。分かったけど邪魔だけはしないでね」

「わかってますが、どこへ行くんですか？」

「千雨さんの所です」

「なるほど。わかりました！」

笑顔で元気よく返事をするリイス。

思いつき邪魔をするぞっと言う気配が丸見えだよ。

邪魔したら邪魔したらで、後で考えよう。

そう決めた僕は次の目的地である裏でしか知らないイベント会場へ向かった。

n e x t

第47話『学園祭編その12 裏イベントの〇×〇×会場』へ

第46話 『学園祭編その11 3日後の世界』 (後書き)

次回は学園祭中の千雨と?のイベントです。

第47話『学園祭編その12』（前書き）

今回は文章が短め（5800文字ぐらい）です。

第47話『学園祭編その12』

明日菜さん達と別れた僕とリイスは人通りの多い道を歩いています。あるイベント会場まで歩いてる途中、いきなり後ろから声を掛けられた。

「ネギ君、どこ行くの？」

「あ、ネギ」

「まき絵さん、か」

まき絵さんはお化け屋敷の衣装そのままだった。その隣に居る人物は無視しても良からう。

「ちょっと!？」

「何？アーニャ」

「無視するな！」

お化け屋敷の接待してた姿なので、メイドだ。板についてるといとか何というか、何を言っているのかわからんが似合うな。

人前で来れる事自体に呆れる。

「はぁ……何？」

「これからどこ行くの」

「千雨さんの所です」

「千雨ちゃんのところ？」

まき絵さん、ちゃん付けですか。

「ネギ、早く行かないと肝心な部分が見れなくなりますよ？」
「ごめん、すぐ行くよ」

あやかさんがいないのはどういう事？

魔法知ってしまった影響と考えるのが正しいけど。

そういえば、もう一人いたような気がするけど誰だったっけ？

「ねえ」

「何ですか？」

「その人誰？」

まき絵さんがリースに指を差す。

リースが何か思いついたかのような仕草をして何か言いやがった。

「私はネギの、恋人です」

「ええええええええ！？」

「ちよっと待ちなさい！　リース。嘘つくんじゃないわよ！！」

「嘘なの？」

「当たり前じゃない」

そんな関係になった覚えもない。

権限の鍵と同等の能力を持つ魔導書の人格で僕が覚醒するまでサポートする役目らしい。

「リースです。よろしくお願いしますね。まき絵さん」

「はう！　いきなり名前で呼ばれたよ」

「別にいいんじゃない？」

「それもそっか、ライバルだもんね。よろしくねリースちゃん」

手を差し伸べるまき絵さんを見て、リイスはそれに答えた。
握手している間、火花が散ってるように見えるのは僕の気のせいに
しておこう。

「それはさておき、千雨さんの所へ行きます」

「わかりました。まき絵さん、また」

「私もついて行ってもいい？」

「あ、私も」

アーニヤも付いてくるのかよ。

あ、でもアーニヤのビプリオンも見たい気がする。
想像しながらアーニヤをジーツと見ているとアーニヤが

「何かネギが……」

「どうかしたの？ 口に出していつてみたら？」

「ば、馬鹿！」

アーニヤにそっぽを向かれた。

変な想像でもしたのか、顔から耳まで赤くなってる。

「アーニヤちゃんとネギ君の雰囲気怪しい」

「そうですね？」

笑みを浮かべながら僕を見るってリイス知ってるよね。

（未来のアーニヤさん達と付き合ってますからね）

（突然念話しないでくれる？）

（私も何か思い出がほしいです）

（わ、わかったよ。それは考えておくから）

（楽しみにしてますね。ご主人様）

……リイス、はあく仕方ないなあ。

武道会で優勝してその賞金で何か買ってあげようか。

リイスの何かを決めた僕はその事を忘れないように記憶しておく。

人通りを歩いてると、愛衣さんと高音さんが周辺を監視していた。そういえば世界樹の効果範囲の告白防止していた。

ちなみに僕は監視する予定はないというか、面倒だから絶対しない！

「あ、ネギ先生」

「ネギ先生、会いたかったです！」

愛衣さんが人前にも関わらず両手で僕の手を取り、包み込むように握る。

積極的になってるが、この世界は一体どうなってるんだ？

「ネギ君、知り合い？」

「ええ、まあ」

「ネギ先生、その人は？」

「え、私？ 私は佐々木まき絵っていうの。よろしくね」

「はあ……佐倉愛衣です」

「わたくしは高音・D・グッドマンですわ」

年上だぞ！ という威厳の態度を取る。

まき絵さんが微妙な笑みを浮かべ、一步後ろに下がった。

「うーん、制服が違うって事は上級生？」

「そうですね。麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校2年生」

「あ、うん」

アーニャが高音さんや愛衣さんを見て、顔を引き攣らせた。視線は顔とか背の高さではなく胸をみていたが。

「どうしたの？　アーニャ」

「何でネギの周りには無駄に胸が大きい人ばかりな訳！？」

「そんなの知らないよ」

「気にしないでいいんじゃないですか？　アーニャ」

「そういうリイスも胸大きいわね」

「私は……」

リイスが僕の方を見ていた。

リイスも一応、80はあるかも知れない。あくまで推測だけど。

「何？」

「いえ、それに気にすることはないと思いますよ？」

「そんな話どうでもいいわ」

「僕達は目的地の方へ行きます」

「目的地？」

千雨さんのコスプレ姿を見に行くんだ！　とか絶対に言えない。

「愛衣、行ってもいいですよ」

「お姉さま！？　……わかりました。お姉様一人だけで大丈夫ですか？」

「あなたはあなたのしたい事をすればいいですよ。ただし！」

「え？」

「1時間だけですわ。それ以上は誤魔化せない」

「わかりました」

「ネギ先生、私も同行します」

「ええ！？　後で後悔しても知らないわよ？」

「ネギ先生と一緒になら後悔なんて、それに仮契約も」

そういえば、そんな事言ってたっけなあ。

ぶっちゃけ忘れてたけど、まあいい。

「じゃあ向かいますか」

くなぞのイベント会場く

大きな看板があった。

そこにはコスプレの文字が淡々と書かれている。

コスプレコンテストとかいうタイトルだった気がするが、どうでもいい。

「こ、ここはどこなんですか？」

「気にしないでください。えくと……あ、いた！」

千雨さんの魔力を頼りに周辺を探っていると、ある程度の距離の向こうで目標の人物発見！

さっそく僕はその人の所まで掛けていく。

「千雨さん」

「な、なななな」

「千雨ちゃん、凄い格好だね」

「コスプレ会場、なるほどね。千雨そんな趣味あったのね」

前はあやかさんとまき絵さんだったからな。
今はリースと愛衣さんとまき絵さんだけ。

「何でネギ先生がここにいますか!？」

「千雨さんのHPを毎日見てるからです」

全然見てません。

パソコンはカモ君が占領済み、

僕は権限の鍵でネット世界を自由に見れるから別に、ね。

「どうして見てるんですか！」

「それよりリース、コスプレしてみない？ 思い出作りとして」

「無視しないでください!!」

「わ、私ですか!？」

赤くなってオロオロしだすリース。

初めての経験ってある程度やっておくべきだよ。

「私がコスプレなんてしてもいいんでしょうか」

「リースちゃんってスタイルいいから何でも似合いそう」

「羨ましいです」

ホメ言葉に赤くなりながら困惑していた。

その辺がかわいい所なんだろう。

ただ、一つだけ思った。

この姿を元にした世界の人は絶対にこんな恥じらいを持っていない
気がする。

「……じゃあ着てみます」

「千雨さん、リースを」

「はあ、何を言っても無駄みたいですね。わかりました」

「じゃあ私も！」

「あ、私もお願いします」

残りの2人が千雨さんに言っていた。

「わかったからさっさと来い！」

「待ってください！」

4人はコスプレ更衣室に入った。

その間はとても暇だ。

5分後、ドアの音がした。

「ネ、ネギ、似合いますか？」

もじもじしながらコスプレ姿を見せてきた。

リース、だんだんと可愛くなってる。

「うん。似合ってるよ」

「あ、ありがとうございます」

「ネギ君！ 私達はどう？」

「この格好、すごく恥ずかしいのですがどうですか？」

あやかさんがいないから、かわりにその役目が愛衣さんになってる
って感じ。

サイズは天と地の差あるかもしれんが似合うね。

「似合ってますよ。2人とも」

「はあ……そろそろ時間みたいだな」

「よし！ エントリーしてこようか！ 千雨ちゃん」

「いや、私は出ないぞ！」

「せっかくこんなに似合うのにもったいないよ！」

「そうですね」

リースとまき絵さんが千雨さんを引っ張っている。

ココに留まろうと踏ん張ってるが、リースの力が強すぎてズルズル引きずられていく。

あの恥じらいの表情をもう一度見る事になるのか。

客が一杯集まっていた。

その中には僕だけポツンという。

他の4人が参加者なので僕一人だ。

しばらく待っていると、司会者が出てきた。
登場した途端、会場の客が盛り上がった。

「さあさあ始まりました。さっそくですがはじめたいと思います！
エントリーナンバー1番からどうぞ！」

周りの人達はテンションが上がっていく。
盛り上がってるのはいいでしょう。

この学園内であの時貼った結界が感知した。

「……この感じは何？」

感じたことのない気配に戸惑った僕はどうしようか考えた。

リース達の出番までに間に合うか？
うん、すばしっこい奴なら時間かかるな。

「……どっかで感じたことのある気配だなあ。よし、後にしよう」

というわけで、僕は気配を感知しながらも無視した。

イベントはトラブルもなく順調に進んでいく。

15番、16番は愛衣さんとまき絵さんで同じような感じだった。
ただ、愛衣さんがノリノリでやっていたのが印象に残った。
権限の鍵で記録しておこう。

「エントリーナンバー17番 匿名希望さんです！」

司会者がそう叫んだ瞬間、リースが出てきて、どこから知ったのか
ビブリオンの台詞？を言い出した。

「世界の本の平和を守るため――」

初めは恥ずかしそうにしていたのに、リースはノリノリだった。

僕の言った言葉が原因だろうけど、これはこれで思い出にはなるね。
ここでは写真だけOKらしい。

あれ？ 前は録画もOKだった気がするが、それはともかく権限の
鍵で録画しておこう。

そして、ようやく出番が来た。

「エントリーナンバー18番 ちうちう キャラクターはビブリオ
ン敵幹部 ビブリオルーランルージュです！」

「ちうちうだつてよ！」

「おおおおおおおおお！」

会場に出てきた千雨さんは赤くなりながら名乗る。

「わ、私はビブリオルーランルージュ、です」

恥ずかしそうにポーズを取って限界が来たのか、地面にひざを着き、顔を隠した。

「あ、あの……わ、私は、えと……」

芝居がかかった様な演技のように見えるが、本当だからこそ可愛い。観客がシーンとなったが、訳の分からない盛り上がりが沸いて出た。それを聞いた千雨さんが顔を上げて目を見開いていた。

「ああ……ありがとうございます」

お礼を言うと、またもや観客が盛り上がる。

今度はかなりのボリュームが上昇した。

超音波でも出すのか、という勢いで周りが騒ぐ。

その後、結果発表が出た。

「優勝はエントリーナンバー18番　ちうちうで決定だぜ！　こんちくしょーう！！」

司会者も周りに感化されたのかテンションが狂っていた。

テンションでかすぎだよ。ここの人たちは。

「さてと、リース聞こえる？」

周りを気にせずリースに繋ぐ。

『何ですか？』

「ココを抜けた休憩所で待ってるから」

『わかりました。愛衣さん達に言っておきます』

「うん。ところでアーニヤはどこ？」

『入り口前で待ってます。無理って一言で抜けたようです』

「はぁ……アーニヤを拾ってから休憩所に向かうよ」

『はい、ではまた』

僕はリースの返事で接続を切り、出口へ向かった。

入り口前にアーニヤが腕を組んで待っていた。

そりゃあ何時間も待ってたら怒るよね。

「何時間待たせんのだよ！」

「参加すればよかったじゃないか」

「私は別にいいわよ！ 私も別の意味でコスプレだしね」

「メイド姿、まあね。じゃあ休憩所に行こうか」

「リースたちは放置してもいいの？」

「休憩所で待ち合わせだからいいの」

待ち合わせ先の方へ向かう。

（休憩所）

人はあまり居なかった。

スカスカで空しい空気を漂わせている。

歩きで10分のところにある休憩所のベンチに座り、アーニヤが隣に座る。

「はあ、疲れたわ」

「そうだね。さて今後の予定はどうするか」

「それじゃあ、私と一緒に――」

「ネギ先生！」

手を振りながらこちらに向かって走る愛衣さん。

邪魔をされたアーニヤは舌打ちして愛衣を睨む。

睨まれた愛衣さんは疑問で首を傾げた。

「そういえばまき絵さんと千雨さんは？」

「向こうに残るって言ってました」

あと一人忘れていようような気がするけど気のせいだね。

「ネギ先生、私と仮契約してください。約束ですから」

「……その前に結界晴らして」

「人払いですね」

「幻想世界・天蓋」

冷たく眩くと、周りが白くなる。

色が変わってるわけじゃない。

だって、これは白い空間を作り出しただけ。

「すごい」

「真っ白ね」

「それじゃあ今のうちに」

地面に契約魔法陣を展開する。

僕と愛衣さんが中に入り、いつも通りの手順で仮契約を発動させた。役目が終わった魔法陣が消え、幻想世界も解除し、元の空間に戻る。

「これが、私とネギ先生の」

「でもネギと行動できないわよ!」

嬉しそうに仮契約カードを見る愛衣さんをじーっと睨むアーニヤが挑発する。

そういわれた愛衣さんがムツと表情を変え

「どうしてですか？」

「クラス違うじゃない」

「まあまあ」

「ネギは黙ってて!」

「黙る気はない。愛衣さん」

「何ですか？」

「そのカードは使用しないでくださいね？」

「どうしてですか？」

「理由は内緒ですが、お願いします」

イレギュラーが来るかもしれない。

現にあやかさんに魔法バレした影響で妙な存在が出たな。

あいつは魔法世界まで現れる事はないだろうけど。

「わかりました」

「使ったら、仮契約解除しますね」

「……わ、わかりました」

嫌そうな表情で頷く愛衣さん。

実際、仮契約を解除する事は簡単に出来る。

「それより時間はいいの？」

「え？ 1時間とつくに過ぎてます！！」

「コスプレ会場の段階で2時間ぐらい」

「お姉様の所に行きます。ネギ先生、ありがとうございました」

僕に頭を下げた後、猛スピードで掛けていった。

高音さんって怒ると怖いって訳じゃないんだけど愛衣さんにとっては怖いのか。

僕とアーニャだけになった。

「どうする？」

「適当に行こうか、ネギ！」

何か嬉しそうな表情をしながら僕の手を掴んで走り出した。

あれ？ 何か忘れてるようなあゝ……気のせいかな。

人通りの多い街中に着いたら、さっき感じた気配が近づいてきた。

アーニャは先に行かせた方がいいかもしれない。

そう決断した僕は、アーニャに申し訳なく謝る。

「ごめん、アーニャ」

「え？」

「極移」

「ちょ——」

アーニヤの言葉は最後まで言う事が出来ずにどっかへ転移された。
無事に転移されたことを確認した僕は気配のある場所まで歩く。

気配の感じる場所は喫茶店だった。

喫茶店の中に入ると「いらっしやいませ」が聞こえるが、それを無視して奥へ行くと

銀色の髪をした制服姿で僕と同じぐらいの身長少年いや、

「っ!？ フェイト!!アーウェルンクス、何で君がここに!」

椅子に座ってコーヒーを飲んでいるフェイトがいた。

フェイトはコーヒークップをテーブルに置き、僕を見た。

「……久しぶりだね。ネギ君」

僕を見る視線は懐かしいと思わせるような目の色をしていた。
まるで僕の事を知り尽くしてるような感覚だった。

next 第48話『学園祭編その13』

第47話『学園祭編その12』（後書き）

感想やweb拍手などお待ちしております。

第48話『学園祭編その13』(前書き)

原作と違う部分があります。

第48話『学園祭編その13』

僕はありえない現状に頭を抱えていた。

その原因がここにいる。

喫茶店で当たり前のように溶け込んでコーヒーを飲むフェイトに声を掛ける。

「なぜ君がココに？」

「ここで話すのはちよつと気が引けるから別の場所へ行こう」

「わかった」

喫茶店を出た僕とフェイトは人気が無い場所まで移動した。

なぜかエヴァの家前だった。

どうやってここまで移動したのかなんて小さなことだ。

「何でココなの？」

「ここの方が人気が無い」

「そう」

僕は木に体を預ける。

フェイトも隣で自分の手を見ながらつぶやく。

「僕がここに居る理由だけど、わからないんだ」

「え？」

「いつの間にかここにいた、という認識しかない。ある男に消されたはずなのに、さ」

消された？ いつの話なの？

「それって修学旅行の後？」

「違う。魔法世界を滅ぼそうとしてる時だよ」

「はっ!？」

魔法世界って未来で起こるあの現象？

それとも、2番目と呼ばれた時の事？ どっちなの!？」

僕としては後者の方がいいかもだけど、その希望は砕け散った。

「君が魔法世界に来た時の事だ。なぜ僕は過去に戻ってるのか、ね」

「なんならどうしてここに居る？」

「言ったでしょ？ 僕はいつの間にか麻帆良の付近にいたと」

僕が展開した結界に反応したのがコスプレイベント時という事は。

「いつごろ？」

「さっきだよ。目が覚めたら驚いた。体が存在して、なぜかお金も持ってる状態だった。ただし仮契約したあの子達のは消えてるみたいだけどね」

「ガノードに消されたのは知ってたけど、過去に戻る現象なんて起こるものだろうか」

ありえない。

権限の鍵で消された存在は許可するまで再生も転生も憑依も何もかもできないはずだ。

腕を組んで、色々なパターンを解析していると、フェイトが僕に。

「君は、やはり僕の知ってるネギ君か？」

「そうだよ。僕は過去に転移したからね。ちなみに君を消した本人は僕が消滅させている」

「……そうか、君は強くなっているんだね」

うんうんと勝手に納得して頷くフェイト。
ちよっと気になる事があった僕はフェイトという存在を世界に搜索する。

すると、どこかの地域でフェイトを感知した。
つまり、この世界でフェイトが2人居る状態になった。

「……この世界に君が2人居ることになるが、これからどうするの？」

「僕にはもう役目が無いし、どうするか僕も分からない」

「ああ……うーん、それはこれから考えていけばいいよ。とにかく姿変えないと」

「そうだね。僕はイレギュラーみたいだ」

「そういう僕もだけど」

本当にその通りだった。

と、その時、何者かが魔力を覆わせながら突っ込んできた。

「ネギを狙う人は許しません！」

ビシッとフェイトを指差すリイスがいました。

「はい？」

「えっ？」

「ふえ？」

同時に固まった。

何をしてるんだ？ リイスは。

「リイス、空気読んでよ」

「え、ええ？ あ、そういうことですか」

状況を理解したリイスは赤くなりながら頭を下げた。

「すみませんでした」

「別にいいよ。リイス……フェイトの姿を」

「存在していると危険ですので、姿を変えるしかないですよ？」

「しなかったらどうなるの？」

「莫大な強制力が来て、世界があっという間にガラガラドカーンってなります」

幼稚な表現で言ってくれたリイスの言葉を何となく解釈して理解した。

面倒だなあ。

リイスがじーっとフェイトを見ていた。

「ネギ、この人の生命力少ないですよ？」

「え？」

フェイトの中から感じた魔力いや、生命力が人で言う数年しか残っていない。

魔法を使えば数ヶ月程度だろう。全力で使うと消えてしまう可能性があるが。

「今の僕には冥府の石柱10回分の魔力しか持たないから使うと消えるかもしれない」

「それほどピンチ、か。わかった。学園祭が終わるまで自由にしていよ。フェイト」

「わかった」

「あ、これ持っていって」

僕はフェイトにマジックアイテムを10個ぐらい渡す。
首を傾げるフェイトに話す。

「それは身分を誤魔化したりするアイテムも含んでるから」
「そうなんだ。じゃあ貰っていくよ」

受け取ったフェイトは背を向けて人通りの道へ歩んだ。
これでフェイトの事は一時的完了かな？
ああ、イレギュラーの出来事ばっかじゃんかよ！

「いいんですか？」
「何が？」

「未来のマジックアイテムを渡して。それに姿を変えなくて」
「未来じゃなくて異世界のだから、それに心配ないと思う。フェイトは学園祭に干渉してないから」

そう、前と同じならばフェイトがココに来るという事は無い。
ちなみに、僕が渡したのは身分偽造書、魔力復活の薬などこの世界では非常識の品物を渡したのだ。
あのフェイトとはもう友達だし、いいよね？

「はあ、そんなアイテムを持ってるなら姿を変える必要は……これからどうするんですか？」

「これから？ そうだね。時間も時間だし、明日菜さん達の所へ行ってから武道会へGOかな？」

「わかりました」

そういえば、アーニャを明日菜さん達の所に転移させてるから……

「あああああああああ!？」

「どうしたんですか？」

「アーニヤの奴、まさか明日菜さん達に愛衣さんと仮契約したって言ってないよね？」

「無駄だと思いますよ？」

「……はあ」

本当の事だから仕方ないが、うるさくなりそうだ。

とりあえずは多重アーティファクトを作る条件には達したので、それでいいか。

そう考えた僕は明日菜さん達を探しに向かった。

〳麻帆良学園・街〵

明日菜さん達を探しに街中をウロウロしていると、誰かとぶつかった。

その時、僕の持つ魔法障壁が割れた音をした。

「キャッ!？」

「いたっ!」

何とか倒れずにすんだが、ぶつかった本人は尻餅を付く。
誰かと思いきや

「どこ見て歩いてるのよってネギ!」

「明日菜さん」

制服姿の明日菜さんがいました。
なるほど、通りでぶつかった瞬間、一般の障壁が消えたわけだ。
立ち上がった明日菜さんは僕の肩を掴み

「ネギ、ちょっと来て！」

「え？」

「ネ、ネギ？ 明日菜さん？」

必死の表情で、そのまま何も言わず僕をどこかへ引っ張っていった。
本当に何がなんだかさっぱりだ。

（龍宮神社）

どこへ向かうのかと思えば龍宮神社に到着した。
ようやく明日菜さんが手を離して

「ごめんね。木乃香、連れてきたわよ」

すると、神社の入り口から木乃香さん達が来た。
ああ、何か前より複雑だなあ。

「ネギ君、武道会に参加せえへん？」

「私も参加するからネギも参加しろ」

エヴァが腕を組んで言ってきた。

「そうだなあ。リイスのために参加してみるか」
「え！？」

「ちょっと待って！」

突然、明日菜さんが僕の両肩を掴む。

木乃香さん達の視線も僕に行ってるわけで。

「何ですか？」

「何でリースちゃんのためなのよ！？」

「リースに何か買ってあげようと思ひまして。僕がやるまで外に出たことあまりなかったんですよ？」

「「あ……」」

2人はリースの事を知っていたため、申し訳なさそうな表情になる。でも、エヴァはリースの前に立ち

「それとこれとは別だ。私だって……ネギから……」

途中から小声で聞こえにくかったが、リースは目を見開いたが笑みを浮かべた。

「……木乃香さん」

「何？」

「賞金ってどれぐらいなんですか？」

「ちょっと待ってな？ えゝと1000万やって」

「ならエヴァさん達にも何か買ってあげたらどうですか？ ネギ」

「「「え？」」」

3人が驚いた声を上げる。

「リースはそれでいいの？」

「あ、あの……私の欲しい物はそんなに高くありませんので。あ、

別の意味では高価格かもです」

「リース、リースがそういうなら別にいいですけど」

「あの〜」

背後から声が聞こえたと思ったら、制服姿の刹那さんな訳です。
なぜか表情が優れていません。

「いつから」

「最初からですが、皆さんが私を避けてるって思うと」

「別に避けてませんよ」

「ほ、本当ですか!？」

だから何でほとんどの人は僕の手を両手で包み込むように握るわけ？
暖かいから、まあいいんだけどさ。

「それよりエントリーしに行きましょうか」

「じゃあ私も参加してみますか」

「明日菜さんも？」

「刹那さんも出ようよ」

「……わかりました。私も実力は上がったと思いますから」

刹那さんがいい笑顔で微笑む。

その時、周りが騒がしくなった。

何事かと騒がしい方向へ見ると、超さんが1段高い所に立っていた。

「凄い人数ネ。今から1時間後に開催予定の麻帆良武道会の変更点があるネ」

「変更点？」

「なんだそりゃ」

「まず賞金を従来より高くして2000万にしたネ」

「うおおおおおおおおおおおおお！」

「2000万って事はアレもコレも」

聞いてみると欲望だらけで笑ってしまう。

僕の知ってる展開だと数十人の雑魚が突っ込んでくる。

「この武道会には色々な使い手がいるネ。裏家業をやったり空手をやってたり、不思議な現象を起こす手品師達が揃って戦うネ。昔ある異国の少年がこの大会に参加して優勝したアル。その少年は10歳にも満たさなかったが。激しい戦いを繰り広げながらも優勝したネ。その少年の名前がナギⅡスプリングフィールド。この名前に心当たりがある人は参加してみるよろし。ではでは」

超さんはそれだけ言い、奥の方に戻っていった。

武道会でアル、いやクウネルと会うんだな。

え、何で呼び捨てかって？ 気にするな。

「ネギ、あの名前もしかして」

「そうだ。ネギの父親だ。ナギの奴、そういう所でも参加してたのか」

「エヴァちゃん、今でも遅くないからずっと追ってたナギさんに変更路線は？」

「無いに決まっているだろう。何を言ってるんだ？」

「そういえば、夕映さんとのどかさんも来てたんですね」

いつの間にか背後でなぜか落ち込んだ状態だった。

「刹那さんみたいな扱いされたのは屈辱です」

「ええ！？ 夕映さんは私みたいな扱いが嫌なんですか？」

「当然です。ネギ先生に忘れられるなんて絶えられないです」

「そうです!」

夕映さんとのどかさんのテンションが何気に違うな。
だんだんと性格が改変されていつてる気がする。
あ、でもハルナさんがいないのはなぜ?

「ハルナさんは?」

「ハルナは置いてきたです。どうせどこからでも現れると」

「うわあ。シャレにならへんなあ。ネギ君に大人のキスするし」

「木乃香だっけてしたじゃない」

「それはそうなんやけどなく。そう言われると照れるわあ」

この話題に入った瞬間、その状況を思い出して赤くなる僕が居ました。

そうだね。したのって数人はいるから……僕って周りから見たら最悪な人でなし?

どう思われようが知ったことじゃないし、興味も無い。

「エントリーしに行きましょうか」

「了解」

結局、参加するのは明日菜さんとエヴァと刹那さんんだけど。

エントリーが終わり、人が集まっていな所でしゃべっていると、

「ニンニン。ネギ坊主も参加するでござるか?」

「ネギ先生も参加するんだな」

えーと、ほぼ接触したこと無い龍宮さんと楓さんだった。
干渉した記憶が無いんだけど気のせいかな?

「参加しますよ」

「ネギ先生の噂は聞いてるよ？」

「どんな噂なん？」

「木乃香の婚約者とか子供教師最強とか色々だ」

「後半はいいとしても、前半はネタだ。本気にするな」

「エヴァちゃん、まだネタや言うてるん？」

あの爺さんも本気で言ってるから怖いんだよ。

冗談じゃなきゃ年齢詐称薬とか渡してこない。

「ネギ先生も大変だな」

「別の意味で、そういえば古菲さんは？」

「ん？ 古菲なら時間まで体を動かしてくるとか言ってる森の方へ行
ったぞ」

「クーちゃんも相変わらずね」

「ネギ先生、私もこれで」

「はい」

冷静に返事をする、フツと笑みを浮かべながら奥の方へ向かった。
まあ、ここは隊長の神社だから自由なわけで。

「アーニャフレイムキーク！」

僕の上から炎の塊が降って来た。

どうみてもアーニャなんだが、その、ね。

「炎！？ 星光破壊で！」

「いや、ここは闇の吹雪で撃退するべきだ」

「一応、人前なんですが？」

後、僕の方へ降ってきた炎はというと

「だりゃああああああ！」

明日菜さんが僕の上にジャンプしてカードからハリセンに変化。

ハリセンを思いっきり右から左へ降ると、炎が消滅してアーニヤが飛んでいった。

空まで飛ばされたアーニヤは星となって消えた。

「アーニヤ、永遠に忘れない」

「勝手に殺すなあ！」

明日菜さんに遠くに飛ばされたアーニヤが瞬動で帰ってきやがった。修行の成果は抜群のようだ。

「アーニヤちゃん、ネギに攻撃するのは駄目！」

「だってネギが……」

「それでもよ！」

「わかったわよ。で？ ココで何してるの？」

「今から武道会予選が始まるらしい」

今からといってもまだ30分はあるが。

アーニヤは参加する気なさそうだね。

「アーニヤちゃんは参加しないの？」

「ネギも出るんでしょ？ 無駄じゃない」

「アーニヤ、ちよつと」

「え？」

僕はアーニヤを引っ張って明日菜さん達には聞こえない距離を置く。

「アーニャ、言っていないよね？」

「佐倉愛衣って子と仮契約したこと？」

「うん」

「言っていないわよっと思い出した！ ネギ、どんな場所に転移させるのよ」

「え？　ちゃんと明日菜さんの場所に」

ちゃんと計算したはずだ。

明日菜さんがいたという気配の場所につてあれ？

「何で人ごみが多い街中なのよ！　おかげで神社まで走らなきゃいけないかったじゃないの」

「ああ、気配があった場所に飛ばしたから遠くなったのか」

「ったく」

腕を組んで拗ねるアーニャ。

こうなったら絶対許してくれないからなあ。
はあ、リースと同じようにするしかないか。

「アーニャ」

「何よ」

「あのさ、ゴニョゴニョゴニョ……」

「……んゝ、それ本当？」

上目遣いで僕を見つめる。

一瞬ドキッて来たじゃないか。

そんな心を隠しながらアーニャに笑顔で頷くと。

「そ、それでいいわ。絶対よ」

「ハイハイ」

言いたい事が終わったアーニャは明日菜さんの方へ戻った。
麻帆良学園にフェイトが存在する。

この事で僕の知ってる展開からどう変わってくるのかな？
もしかしたら、ありえないがデュナミスが攻めてきて「我が同胞になれ」や「アスナ姫を我が手に」とか言う展開だったら溜まったものじゃないが、どうだろうか？

「うゝん」

「ネギ」

「うわあ!？」

有りえそうな展開を考えていたら。横から声が聞こえた。

いきなりだったから驚いたよ。

声の主がリイスだった。

「何？」

「ネギ、そろそろ予選が始まるらしいから準備を、だそうです」

「なら、いきましようか」

そう意気込むと、リイスは嬉しそうに微笑む。

僕の様子をじーっと見ていた明日菜さんが手を振りながら大声で言う。

「ネギ、リイスちゃん早く」

「うん」

「わかりました」

明日菜さん達と一緒に武道会の予選会場まで移動した。

夕映さんやのどかさん、アーニャもなぜか付いて来てたけどいいのか？

その頃、フェイトはと言うと。

キッチンフードで休みながらネギから渡されたアイテムを操作していた。

このアイテムは名前、姿、年齢、住む場所まで改竄して住む事が出来る高等技術のアイテム。

別視点から見ると、明らかに犯罪レベルのアイテムなのだ。

「うゝん。名前、名前……思い浮かばないなあ。年はネギ君と同じでいいか。住む場所はマンションでもいいか。……名前だけは思いつかない。どうするか……」

最初の段階で苦戦していたという。

next 第49話へ 『学園祭編その14 武道会予選』

第48話『学園祭編その13』（後書き）

更新速度が遅くなってるのは申し訳ないです。

もう1年なのに48話ですか……できるだけ頑張りたいと思います。

武道会は重要部分以外は簡易な流れになります。

12月は武道会と一部のイベントを終わらせる予定です。

第49話『学園祭編その14 武道会？予選、フェイト改変』（前書き）

ちよつとルート変更。この世界に來たフェイトが……

今年中に武道会終わらす事できないです。

第49話 『学園祭編その14 武道会？予選、フェイト改変』

そろそろ時間になったので、準備をしなくちゃいけなくなった。と言っても、僕にはやる事が無いんだけど。

「ネギ先生、がんばってください」

「本屋ちゃんもがんばるわね」

「お、ネギやんか」

いきなり横から声をかけられた。

そいつを見ると、生意気そうなガキにしか見えなかった。

こういう奴ほど死に急ぐと言うものだ。

「……誰だお前？」

「小太郎や！ 犬上小太郎」

オレオレと主張してくる事自体怪しいんだが？

ああ、よく見るとやられ役のベジ……じゃない小太郎君じゃないか。

「ああ。小太郎か。何しに来たの？」

「もちろん賞金目当てやってまさかネギも？」

「そうなるかなあ」

明日菜達と話していたアーニヤが呆れる。

「コタローが参加しても予選で終わるんじゃない？」

「言ってくれるな。アーニヤ」

「二人とも仲がいいな」

「違う！」

「何言ってるのよ！ ネギ」

2人の息がピッタリ。

漫才とか合う気がするが、現実でやったら暴れそうだ。

「無詠唱による魔法か。一杯あるから迷うな」

雷の暴風、凍る大地、極光陽ってこれは駄目か。
最低6000度だから人が蒸発いや、消滅する。

「ネギの場合雷の暴風も無詠唱でしょ？」

「ネギ君の作った水晶の中ボロボロになってたし」

「まあ、魔力無しでやってみますか。そうですね、気限定で」

それならソニックブームや気功弾撃ち放題じゃないか。

本気でやらなければいいだけだ。

思考を巡っていると、刹那さんが真剣な表情で聞いてくる。

「ネギ先生は気を使えるんですか？」

「まあ」

「障壁無視の技使ってきたっけ？」

神鳴流を使えるし、別世界の技も使えるから有効法はかなり存在する。

最大限に気を利用すれば、魔を喰う存在にも対抗できる。

だから刹那さんや木乃香さんの父親にも教えてもらったわけだ。

教えてもらったのは今から数年後。

「ネギも参加するんやったら楽しめるやんけえ！」

「でも負けるんでしょ？」

「誰が負けるんやって!？」

小太郎とアーニヤが喧嘩し始めた。

人の多い所で叫ぶのは止めなさい、と口には出さないが。

「で？ 木乃香達は観客の方でしょ？」

「そうですね。このちゃんとのどかさんと夕映さんは不参加ですから」

「限界時間までネギ君まで居たかったんやけど？」

「……木乃香、のどか、行きましよう」

何かを悟りきった夕映さんが2人を連れて行った。

「じゃあ私も観客の方で見させてもらうね」

「予選だけだからつまらないよ？」

「ネギのだけ見るから関係ないわ」

アーニヤは背を向け、観客の方へ向かった。
これで予選が始まる。

「行きますか」

「ネギ、ほどほどにしてね」

「わかってますよ」

予選会場まで向かった。

予選会場に到着すると、観客が数百人いた。

人が大勢いたが、やれやれ金の亡者達め。
朝倉さんが司会をやっていた。

「予選は4つのブロックに分かれて行います。
そこで生き残った32名が予選突破とさせていただきます。
ちなみに4つのブロックに分かれる理由は、260名って人が多すぎなんじゃあ！ という事です」

観客が笑っていた。
アハハッ、260人ってえらい多いな。

「選手達はこちらに表示される番号に従い移動してください」

この世界では考えられない技術でウインドウ表示されていた。
ん、明日菜さん達とは関係ないブロック、か。

移動してみると、前とは違う男、男、男だらけの祭り状態がいた。
前より多いから醜いし、ヤバすぎる。

「さてと」

うーん、ゴミがごろごろというな。

人が多いだけだから別にどうでもいいが、フードをかぶったクウネルがいるな。

力見せない方がいいのかな？

いや、関係ないな。僕の目的を邪魔するものはたとえ神であろうと容赦はしない。

どうでもいい考えを閉じて、目の前に集中することにしよう。

「ほう？　子供がこういう所に出たら駄目だぞ？」

子供じゃないって。

どうでもいいが、筋肉モリモリで2メートルもある人間って……

「摘んで場外にさせてやる」

「あ、手が滑った」

男に掌を向けて気合を放った。

男の体重に関係なく吹き飛ばされ、場外になった。
それを見た朝倉さんがマイクで叫んだ。

「おーっと子供先生が2メートルも超える男を吹き飛ばしたあ！
まるで漫画とかにある気合で吹き飛ばしたかのようだ！！」

別にいいけどね。

「あの子供を集中的に狙え」

ある2名以外が突っ込んでくる。

「さて、微弱のソニックブームを発生させて吹き飛ばすか」

何も大人数でたかが子供一人に突っ込みに来るなんてやってられないな。
いな。

気を右腕に集中、出来る限りの加減をしながら音速で横切る。
風を起こし突っ込んできたゴミどもを場外へ吹き飛ばした。

「えっと、子供先生が不思議な現象を起こして大人数だった男どもを場外へやったあ!!」

「すげええ!」

「キャアアアア」

「すごいわあ」

観客からそれぞれの感想を述べていた。

その時、気の塊が僕の手前まできていた。

溜息を吐きながら軽く人差し指で弾き飛ばす。

「君、かなりやるね。俺と同じ気を使うようだ。しかも俺より気の使い方がいい」

「……とりあえず遊ぼうか」

「え?」

おもちゃを見つけた僕は気の塊を空中に生み出した。

驚愕した男は慌てて空中にある気の塊を潰そうとしたが、逆に向こうがつぶれた。

「くっ!」

「ニヤリ」

無数の気の塊を男の方へ飛ばした。

粘るなあ。なら、もう終わらせるか。

僕は地面を蹴り、相手の懐に入りお腹に拳を入れた。
グフッ! とか言いながら倒れこんだ。

「……二人しかない。しまったなあ」

そういえばそうだ。うーん、どうするか?

あ、明日菜さん達が、という期待を抱きながら別のブロックを見ると

「あはは、知ってる人たちばかりってあれ？　愛衣さんに脱げじやない高音さんもいる」

いつの間に参加してるんだか、もしかしてお金に釣られたのか？

予選が終わり、皆と集まっていた。

全員が呆れた視線で僕を突き刺していた。

さっきのソニックブームの余波で巻き込まれたとか何とか……。

「よし！　32名から16名になってるから賞金ゲットの可能性が増えた」

「ネギの場合、増えたとか関係ないんじゃない？」

「さっきの予選見てたんやけど、ネギ君、ソニックブーム発生させて場外させたやん」

「まさか全員が突っ込んでくるとは思いもしなかったですが」

あの光景を見た別の人達が僕を先に倒そうと一致団結して、攻めるような事するから吹き飛ばしただけ。

一般人を吹き飛ばすなんて簡単だし、しょーがないよ。

「ネ、ネギさん」

「どうかしたんですか？　愛衣さん」

「あ、あの……ネギさんは本当に強いんですね」

「愛衣ちゃん、ネギは強いんじゃないかって反則なのよ」

ひどい言われようですね。

確かに大人気なかったけど、さ。
そこで木乃香さんも刹那さんも頷かない！

「本選ではどうなることやら」

「そうだ！」

「どうかしたん？ 明日菜」

「いや、木乃香じゃなくて」

「じゃあ、何ですか？」

「試合ではお互い本気でやらない？」

な、何だと！？

木乃香さんならわかるが、エヴァにも勝てない明日菜さんが何を言
っちゃってるんだ？

「つまり、明日菜さんはこの世界、いや学園ごと消滅してもいいと
？」

「今聞いているいけない単語が聞こえた気がします」

「夕映、こういう時はスルーが一番や」

「明日菜は咸卦法があるからちようどいいかもしれない」

「明日菜さんは自殺志望者ですか？」

刹那さんもひどい事を言うな。

「何だよ？」

「ほら、ネギ先生は無詠唱で千の雷もできるんですよ？」

刹那さんが僕に聞いてきた。

「そうですよ？ だいたいの呪文はできますよ？」

「さすがサウザンドマスターの息子ですわ」

「いや、関係ないぞ」

高音さんが尊敬するような事を言うけど、エヴァの言うとおりにまったく関係ない。

「無詠唱も禁止にすればいいわね」

「ソニックブーム発生祭りになるな」

その光景を想像したのか、明日菜さん達の表情が青ざめる。マジで起こしたら学園が吹き飛ぶ。

その気になれば、地域が無くなってしまっただけ……。

「どうでもええけどな。俺の事忘れんなあ」

「いたんだ」

「私達はこれで失礼しますわ」

「あ、あのネギ先生、それでは」

愛衣さんと高音さんが用事を済ませるために行ってしまった。この時間だとそろそろアレだろうと僕も知ってたし。

「そういえば、告白阻止のアレですね」

「ああ、俺もそうやったな」

「いつてらっしゃーい！ 犬太郎！」

「……もうええわ。ほんじゃな」

忍者のように去っていった。
本当に犬太郎だな。

「小太郎君も大変やな」

「告白阻止の仕事だからね」

「ネギ先生も言われていたのでは？」

「刹那さん、僕にとってはそんな些細なことどうでもいいんです。問題はですね。ん？」

遠くからこちらに向かってくる気配一つ感じた。

超さんが僕達を見て、最後にリイスを見る。

「超か」

「これはこれはエヴァンジェリン、ネギ先生、バカレンジャー」

「ちよっと待ちなさいよ！」

「それはどうでもいいんで。何か用ですか？」

一体何のようだというのだ？

最後に見た視線が明らかに警戒の視線だった。

対策を取る必要があるかどうか……

「ネギ先生、強いアルね」

「鍛えてましたから」

「必要ないほど鍛えてどうすんのよ」

「アーニャ、この世の中には知らない方がいいこともあるよ」

「私の事も本当は知らない方がいいんです」

その時、超さんがリイスを見た。

警戒してるな、と思ったら満面の表情を僕に向ける。

「おや？ ネギ先生の彼女ネ？」

「違う！」

「違います！」

「全然ありえん！」

「……皆さんひどいです」

3人の否定に落ち込むリース
落ち込む姿を見ると、権限の鍵と同質存在とは思えない。

「ふむ。なるほどネ。これはまいったアル」

「何しに来たんだ？ 超」

「様子見してきたネ。その様子だとちよっとって感じ」
「そうか」

「私はこれで失礼するネ。ネギ先生、舞台で会おう」

超さんは背を向け、奥の方へ引っ込んでいった。

リースを必要以上に警戒してたな。

対策取られるかもしれないが、リースにとって関係ないな。

「これからどうするの？」

「修行に決まってます」

「エヴァちゃんのアレやな？」

「千雨さんも呼びましょうか」

「呼ぶんやなくて引き摺り出してくるの間違いやないん？」

「……それじゃあ僕は千雨さんを呼びに行きますので」

さっそく行動に移る僕は千雨さんの所まで走った。

（ハンバーガー屋2階）

1階はレジだった。

どうやら2階で食べる形式だ。

千雨さんの気配を辿って行くと、驚いた。

「千雨さん……何でフェイトと一緒になの？」

「知り合いですか？」

「おや？ ネギ君か。ネギ君のことを知ってるみたいだったから誘ったまで」

「ナンパかと思った」

フェイトはジーっと座り、目を瞑っていた。

興味深そうに装置を見つめる千雨さん。

「何か悩んでるの？」

「名前が決まらない」

「え？」

「今まで悩んでいたんだけど、名前が思いつかない」

ああ、フェイトの目の前には装置が起動中だ。

名前を決めてくださって部分だな。

「私も色々出したんですけど何かパツとしないとか」

「僕が考えようか？」

「ホントかい？　じゃあ頼むよ」

「……ネギ先生、もしかして」

「千雨さんの言う意味が分かりません」

フェイトⅡ運命。

ん？　他の言語で考えた方がいいね。

「じゃあ、シクザールってのはどう？」

「ドイツ語？」

「やっぱりそういう事にしておかないと、ね」

「運命という意味は変わらないんですね」

そこは変えたら駄目ですよ。

この装置、異世界の技術で発展したものだけど超さんの技術より低い。

「そういえば千雨さん、修行」

「予定も無いですしいいですよ」

「僕も行っているかな？」

「うーん、難しいなあ。そうだ姿を変えてみよう」

フェイトのままだと誤解どころかこの世界に飲み込まれてしまう。

飲まれてしまったら最後、ここにいるフェイトが消滅する。

「姿を変える？」

「ちよっと待って、人目があるから結界貼るね」

空間を隔離した。

念のため、認識不可結界を張る。

「これでばれることは無い」

「こんな凄い結界まで貼れるなんて」

「そんな事いいから、姿を変えましょうか」

「どんな姿するの？」

「色々気をつけないと駄目だから性別も変更しておく方がいいかな？」

「僕が女性に？」

念話に切り替えた。

「そうじゃないと分かる人にはわかる」

「わかった」

フェイトの返事を聞いた後、念話を切断した。

「偽似性別変更だから気にしないでいいよ」

「まずフェイトと認識されないかどうか千雨さんで実験しようか。それからだね。女性になるか、ね？」

「わかった」

「存在認識、再構成開始、終了、世界認識修復……完」

完成と続くはずの言葉がブー音で遮られた。

「何だ？」

「エラー……エラー原因不明。妨害ありってえ？」

とりあえず、装置を停止させる。

妨害ってどういう事だ？

「故障じゃないんですか？」

「そんなはずはないんだけど」

一応、この装置はナノマシンで自動修復させるから故障しても瞬時に直ってしまう。

故障じゃなくて妨害が原因。

おまけに妨害されたという事はやっぱり超さん、か？

「仕方ない。千雨さんは先に行ってもらえますか？」

「え？ わかりました」

千雨さんは立ち上がり、階段に向かおうとしたが、何かにぶつかった。

「……行けないのですが」

「あっ。この魔法陣で向かって」

地面に魔法陣を形成。

「これってどこに転移されるんですか？」

「エヴァンジェリンさんの別荘」

「わかりました」

千雨さんが躊躇も無く魔法陣を踏むと、魔法陣ごと消えた。

「これでいいか。妨害は後で調べるとして、権限の鍵で書き換えるか」

権限の鍵を右手に持って、フェイトを見る。

「覚悟はいい？」

「いいよ。いつでも」

目を瞑る。

ここで目を瞑られても困るんだけど。

権限の鍵に命令を記録させ、フェイトのお腹に突き刺した。

「っ!？」

「性別変更、組織改変、存在再構成、開始！」

フェイトの体が光りだす。

白く輝いてるフェイトの体の構図が変わっていく。

構図がもう変わらないところを見ると、完成したのだろう。
白く包まれた全身が元の状態に戻る。

「もういいよ」

「ん？ ……こ、これは」

フェイトの体が変わっていた。

髪の色が黒くなり、肩より少し長い。眼の色はそのままだが、胸の部分はふくらみがある。

背は同じだが。

「ネギ君の背が少し小さく見える」

「小さく見えるんじゃないかって実際にそうなの」

声もちゃんと女声になった。

権限の鍵でやった方が早かったな。

「あ、そうだ。あくまで偽似だから一定以上のダメージ喰らうと元に戻るよ」

「一定以上のダメージ？」

「そうだなあ。100あるとすれば残り5ぐらい？」

「全然平気じゃないか。魔力も以前より高いし」

そう。改変してしまったせいで、異世界の生命強化と同じレベルの強化になった。

潜在能力開放やさよさんの人間化とは違う。

全ての改変させているためである。

「とりあえず、別荘に向かおうか」

「そうだね」

フェイトの手を握り、エヴァの別荘まで転移した。

くエヴァの別荘く

到着してみると、轟音が響く。

どうやら、皆修行に励んでいる様子。

「フェイト、とりあえずここで休んでて」

「うん」

「ネギ、その子誰？」

「あ……明日菜さん」

明日菜さんがその子という理由は簡単。

僕より少しだけ背は高い。しかし、顔が幼く見えるからだ。

「えくと……」

「ルーシーと言います」

ええ？ フェイトさん、ルーシーって何ですか？

「ルーシーちゃんね。私は」

「知ってます。ネギさんから聞きました」

フェイトが女性になじんでる。

まあ、水の、とか居たからどうでもいいんですが、違和感ありすぎです。

リースが僕の隣まで来て、耳元で

「この人、フェイト・アーウェンクルスですよね？」

「そうだけど？」

「異世界のアレでどうにかなるって言ってたじゃないですか」

「妨害されてた。その妨害がどこからあるのか調べていないけど」

「危険じゃないんですか？」

「さあ」

そう言った後、リースは溜息を吐く。

大体予想は付くよ。多分、超さんのせいだな。

未来から来た人ならあの装置を防ぐぐらい容易いな。

僕の未来では消えてたけど……。

「千雨さん強化しようか」

「どうする気なん？」

木乃香さんの星光破壊、潜在能力開放状態ぐらいしかやってないし

「結局何をすれば？」

「パクティオカード発動して」

「わかりました。アデアット」

身長が小さめになった。

何で身長が縮むんだらうか？

調べた方がいいかもしれないけど、放置の方が面白いから放置で。

「これでいいのか？」

「口調が変わってる」

「魔法の打ち合いをすればいいかな？」

「魔法の射手のみだな」

「それで実力が上がるの？」

「限界まで撃ちまくればそれなりに慣れるだけだ」

明日菜さんは千雨さんの両肩に置き、何かを言った。

「がんばってね。千雨ちゃん」

「誰がやるん？」

「僕がしようか」

「「「え？」」」

明日菜さん達が哑然とした表情で固まる。

千雨さんも明日菜さん達を見て

「何か問題でも？」

「いや、ないな」

「無いわ」

「大丈夫や」

エヴァ、声が引き攣ってるぞ。

明日菜さんも木乃香さんも眼が泳いでるし、僕が何をしたんだ？

「では、お願いします」

ペコリと頭を下げるルーランルージュの千雨さん。

「よし、距離を取ってから打ち合おうか……大丈夫ですよ？
手加減は思いっきりしますね」

「あ、ああ……」

千雨さんと僕は10メートル間を取る。
それ以上離れても意味ない。

「そちらからどうぞ」

「雷の精霊500柱 魔法の射手 連弾・雷の500矢!!」

「光の10矢・集束 光の槍」

雷属性の500本の矢と光の槍が衝突する。

必死に光の槍を潰そうと物凄い速度でヒットしていく。

1秒経過した時、威力が同じなのか、結果は相殺で終わった。

「星光破壊を全魔力で撃ってくれない？」

「全魔力ですか？ ネギ先生怪我するんじゃない？」

「大丈夫ですよ。ささ」

「公開しても知りませんよ！」

千雨さんはステッキをくるくる回転させた後、ステッキをこちらに構えた。

その姿が戦闘形態で恥ずかしくないのかなあ。

「ビブリオルーランルージュ 光の粒子よ、我に仇名す存在に、罰
を与えん 星光破壊」

全魔力使った影響で千雨さんは地面に膝を付く。
この魔力は、なるほど瞬動とか戦闘系を習わせれば中クラスの魔法

使いには余裕で勝てる。

「計測完了したから消さないかね。…吸引消滅式…雷の暴風」

手を前に差し伸べ、雷の暴風を撃った。

星光破壊と雷の暴風が衝突した瞬間、衝突した魔力を中心に消滅していった。

「今の何？」

「吸引消滅式、今のようにぶつかった瞬間、消滅するよう設定した術式の事」

「すごいね。ネギ君」

フェイトじゃなかったルーシーが声をかけてきた。

「どんな強力な魔法でも吸引消滅式を組み込むことで消滅させられるぐらいだから」

「反則じゃない！」

「アーニヤ、この術式は弱点があるの」

「え？」

「魔力の消費が激しいぐらいかな？」

「ちなみに、ネギ先生は？」

「10000の1も消費してないけど何か？」

今の僕はその程度の術式で消費なんて無い。

普通の人が使うと2，3倍消費するデメリットがある、という事を明日菜さんに教えた。

「なるほど、自分より強い奴に使うと有効的だけど、1対1では完全不利だな」

「そやな。多数対1だったら有効やけど、隙が出来やすいんやなあ」
「習得する必要は無いって事？」

明日菜さんが首をかしげた。
「わかんないって顔だね。」

「大勢の攻撃を防ぐだけの役だったらアリと思う」

「そんな状況にならないから意味かな？」

「こんな魔法術式を習う必要はないですよ。千雨さん大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃない。倒れそうだ」

本当に顔色が悪そうになっていた。

「じゃあ直しますね」

権限の鍵を右手に生み出した。

鍵を見た瞬間、ぎょっとした千雨さんだが、僕はそんなもの無視して

「よいしょっと」

「うっ！」

背中から刺した。

痛みは無いはずんだけどね。

魔力を回復させる。

「何か違和感が」

「我慢してください」

千雨さんの魔力限界値を調べてみるとちょっとだけ大きくなってい

る。

効果はあったようだが、まだまだ。

権限の鍵から魔力を流し終えた後、鍵を抜いてから消した。

「ネギ、それって反則じゃないの？」

「そんな事無いですよ？ 武道会じゃあ反則負けですし」

「殺傷がある道具は禁止ってなってたから使えるんじゃないあ」

権限の鍵をもう一度右手に出して、その辺にある建物に向けて降ると、建物が倒れる音がした。

地面に到達した途端、切れた部分から原子分解した。

「……そう言う事」

「振ったら切断、原子分解されちゃうから死んじゃうよ？」

満面の笑みをくれてあげたら、明日菜さんが必死に横に振っていました。

攻撃する気じゃなかったら切れないけど。

「そんな事どうでもいいけど、結局この子誰よ」

「僕？」

「ほえゝ。僕っ子や！」

木乃香さんが目をキラキラさせてルーシーを見つめる。
フェイトは男だよ。今はルーシーって名乗ってるけど。

「ルーシー〓シクザールって名前だよ」

「え？」

「ルーシーちゃんやな。よろしゅうなゝ」

拍手を求めていたが、ルーシーが僕のほうへ見ていた。
対応法が分からないのか。僕は答えたら、と頷く。
ルーシーはジーっと木乃香さんの手を見たが、そっと握る。

「うんうん。私は」

「ネギ君から聞いてるからいいよ」

「そっか。じゃあよろしくね。ルーシー」

「よろしく。お姫様」

「え？」

姫様の部分で赤くなる明日菜さん。

この頃は何も覚えてないから。

明日菜さんの反応を見たルーシーは誤魔化すように咳払いして

「明日菜さん」

「ええ」

お互い握手をした。

「あゝあ。ネギ君を狙う子がまた増えた」

「僕はネギ君の事友達以外見てないよ？」

そりゃそうだよ。ルーシーはフェイトで男だし。

水の、だったらわかるけど……このフェイトはあくまで友達だ。

そういえば、水のってどんな印象があったっけ？

魔法世界に行けば会える、か。

「さっきから夕映さん達がいらないんですが」

「夕映達なら向こうの領域で魔法の特訓してたわよ。なんでもネギ先生の力になりたいとか」

明日菜さんが指差した場所はここからかなり遠い城だった。
あの中に僕の知らない物が存在するんだろうな。

「さてと再開しましょうか」

「だいぶ体を休めたので大丈夫だ」

「敬語だったり普通だったりややこしいわね」

「千雨ちゃん的には普通の方がいいんじゃない？」

まあ、そっちが素だから当然と言えば当然。

「じゃあ、これでいいのか？」

「ルーシーって強いのか？」

エヴァがルーシーを観察的な視線で見る。

ルーシーもエヴァを見て、僕を見る。

「試してみたら？」

生命強化してるからこの世界の人間より強いはずだ。

「貴様の實力、見せてもらおう」

「うんいいよ」

ルーシーは全身から魔力を開放する。

大量の魔力の影響で、周辺にスパークが走る。

プレッシャーを感じたエヴァは不敵の笑みを浮かべ

「フフフ……面白そうじゃないか！」

同じように魔力を纏うが、はっきり言ってルーシーの方が魔力が高い。
魔法は石化系列だけじゃない。僕が密かに記憶させといた魔法がある。

「どうなる事やら」

エヴァ対ルーシーの戦いが始まる、なんてね！

第50話『学園祭編その15 武道会？』へ

ルーシー||シクザール（ネギの世界から来たフェイト||アーウェル
ンクス）

権限の鍵によって存在改変した存在。

身長はそのまま改変させたただけなので、何も変わらない。

髪の色も眼の色も黒くなっている。

水のアーウェルンクスと関係はなく、この世界のフェイトとも関係ない。

第50話 『学園祭編その15 武道会?』 (前書き)

更新遅くなって申し訳ありません。
最低でも1ヶ月に1回更新はします。

第50話 『学園祭編その15 武道会?』

「そういえば、次ってどうなるの?」

「トーナメントとか言ってたが、表見てないな」

「私が見てきましようか?」

「リースちゃんが?」

「と言うか誰も見てなかったの?」

「行きますよ? えい!」

リースが手を前に出し、親指と中指を弾く音を鳴らすと、リースの目の前にモニターとなって表示された。

愛衣 V S 小太郎、エヴァ V S やられ役 A、クウネル V S やられ役 B、明日菜 V S 刹那

ネギ V S 高畑、楓 V S やられ役 C、古菲 V S 龍宮真名、高音 V S 田中
どうでもいいけど、順番が滅茶苦茶でいいのか?

「げっ!? 刹那さんとだ」

「そうみたいです」

「僕はタカミチ、か」

「大丈夫なんですか? 高畑先生は強いですよ?」

そりゃ戦艦のアレを撃破したぐらいだから強かったけど。
ここだと手加減するしかない。

「咸卦法を使ってきましたから油断は禁物だと」

「せっちゃん、そんな心配ないで」

「確かにそうなんです」

「心配なんやな」

木乃香さんの言葉にうつむく刹那さん。
さっきから向こうで爆発音がうるさい、気にしないでおこう。

「ところでルーシーちゃんって強いわね」

「エヴァちゃんと互角に戦っとる」

生命強化を施したフェイ、ルーシーが弱かったら逆に驚く。
あれでも手加減してるように見える。

「エヴァちゃんの攻撃を弾いたわね。そして、エヴァちゃんの上から氷の柱が落ちてくる所を必死にかわすっ」と

冥府の氷柱という単語が聞こえた。

ああ、やっぱり全ての属性を使えるように設定したのは正解だった。
理由はまだ秘密。

「ああ、同点やな」

「ちよつと見てきますか」

.....

「終わりましたか」

「ああ。お互い倒れそうも無いから中断だ。なるほど私並みか」

「そのようだね」

エヴァとルーシーがお互い握手を交わす。

でもさ、ルーシーの魔力全然減ってないよ？

「僕の知ってる魔法はまだ少ないんだ」

「私の家に魔導書がある。その本で習得したら全力でやれるな」

「別に僕は戦いが好きじゃないんだけど、目的のために戦ってたわけだから」

「そうなのか？」

「うん。前の僕は鎖に縛られてたからね。今の僕は自由を満喫したい」

魔法世界の崩壊、完全世界、???の復活、どれもこれもフェイトの役目だった。

だがそれは、今のルーシーには関係ないこと。
まあ、一部達成した後、ガノードに堕とされてるけど。

「ネギ、トーナメント表見てみると意外な人がいますね」

「ん？ 愛衣さんと高音さんも残ってたな」

「コタローとね。愛衣もお気の毒ね」

「どうしたの？ 影の薄いアーニヤ」

「影薄いとか言うな〜！」

手を上げて抗議するアーニヤをまあまあと咎めようとする明日菜さん。
ん。

「さてと、誰か撃ち合いしよう？ 明日菜さんでいいや」

「私かい！」

「しかも拒否権無しで」

「ひどい！」

僕と明日菜さんは一定距離を取る。

こうやって打ち合うのも何百年ぶりなのやら。

色んな世界に飛んでると時間がわからない。

修行空間から異世界に飛んでるから時間経過も計算しにくい。

外時間で1000歳を迎えてるが、異世界の時間まで含んだらどれ

ぐらいか検討できない。

今はソレとして、僕からだとい瞬で終わりそうだから先手はレディ
ーファーストですね。

「それじゃあ明日菜さんからどうぞ」

「ええ。……魔法の射手だけ？」

「何でもいいですよ？　僕は魔法の射手系、しか使いませんから」
「よかった。じゃあ遠慮なく行くわよ！」

明日菜さんは張り切るが、誰も集束は使わないなんて言ってない。
無詠唱から撃ってくるだろうなあ。

だが違った。明日菜さんの周りに赤いオーラが包み込まれた。
あの色、あの魔力といい、まさか……

「アタラクシア・エル・テオタナシア　神殺の咆哮」

「っ！？　この魔法は……くっ！　雷の暴風！」

名前を示すこの詠唱、呪文はまさか……

2つの光線がぶつかりあう。

雷の暴風が神殺の咆哮に押され気味だが、

「ネ、ネギ、雷の暴風では神殺を防げない」

やっぱり聞き違いじゃない、アスナが使っていた神殺の咆哮か。

勢いは明日菜さんが勝ってるのに余裕なさそうな声色で呟く。
でもね、使い始めたばかりの魔法で勝てると思われても困る。

伊達に1000年以上生きていないんだから。

「権限の鍵、解析実行。魔力、効力分析完了、天空の審判」

僕と明日菜さんの間に人が見えるレベルの光が照らされる。
光が雷の暴風の方へ照射されたその時、黒く変化し、神殺の咆哮の
勢いが止まる。

「え？ 何で」

「あゝあ。もういいや」

このまま爆発させたら別荘が崩壊してしまう魔力を感じた。

「神殺の咆哮、消去」
デリート

言ったのかわからないほどの速度で呟く。
2つの魔法が掻き消えた。

「嘘」

「ふう、一つだけ聞きたいんですが、その魔法どこで？」

「え？ 夢の中で誰かが呟いてた詠唱を真似してみたの。もちろん
練習はしたわよ」

夢、か。

アスナの記憶が明日菜さんに見せたって所か。

神殺の咆哮、神に作られたと本人が思えばどんなモノでも消滅でき
るんだっけ？

権限の鍵は対象に入らないって言ってたな。

「はあ。この魔法消費激しいわ」

「星光破壊より反則やないん？」

「消費が低い分、そっちのほうがいいわ」

「でもすごいですね。ネギ先生の雷の暴風を防ぐなんて」

刹那さんにほめられた明日菜さんは照れていた。
当たってもダメージ少ないから別にいいけど。

「私の闇の魔法で木乃香のも吸収してやる」

「吸収系って反則なのね」

「明日菜のソレも吸収されてオジャンやな」

「どうか、それしかできないの？」

「そんな事無いわよ。ルーシーちゃん」

「雷の暴風レベルも撃てますよ」

「リースちゃん、よく知ってるわね」

「はい」

リースは空間認識能力持ってるし、相手が何の力を持ってようがお構いなしで解析できる。

グリモワールの力って反則過ぎる。

とりあえず、リースには能力制限かけないと。

「リース」

「何ですか？」

リースの耳に声を伝く。

「あまり力を見せないで」

「どうしてですか？ 私やネギに世界の修正力は効かないですよ」

「宇宙……は効くんだけど」

僕の言葉にリースは腕を組んで考える。
手をポンと合わせ、小声で言い出した。

「じゃあ、私とパクティオーしませんか？ そうすれば真格者への

道がほんのちよつと進みますよ?」

「……そういえばしてなかったっけ?」

「そのパクティオじゃないです。私の契約です。グリモワールの契約をしてませんから」

「わかった」

あれ? 力の制限話はどうなったんだ?

まあいいか、制限は超さんがいる学園祭の終わりまでだし、リイス自身守る気なさそうだ。

「ネギ君、リイスちゃん何をする気なん?」

「契約」

「ちよつと待て!」

「待つのは嫌です」

物凄い勢いでリイスが僕の唇を奪った。

下を入れてくるたびに頭の中に情報が流れてくる。

何これ、訳が分からない。

遺跡、宇宙空間で浮いてる建物、宇宙を覆い尽くすほどの巨大な機械、巨大の戦艦がその場の空間を覆い尽くすほどの数、謎のエネルギーで惑星を汚染している光景、

見たことのない黒、赤、黄色が混じった大空に描かれた魔法陣など無数の知識が。

「これで終わりです」

リイスは残念そうに、未練タラタラしてそうな表情で離れる。離れるのはいいが、情報が入りすぎてなんか気持ち悪い。

「リイス、これは」

「だから契約ですよ。これで私の力がある程度使えるようになってるはずです。」

まあ、ネギには必要ないかもしれませんが」

木乃香さんがリースの隣に来て問いただしてきた。

「何の契約なん？」

「私って魔導書じゃないですか。その契約をするの忘れてまして」

「ああ。じゃあネギ君が強くなったんやな」

「そうですね」

知識以外何も習得していないのだが？

「そんなことよりあすの事をどうするかだな」

「そうでしたね」

「刹那さんだっけ？ 私絶対負けるわ」

「明日菜さんも強いですよ？」

そういえば、小太郎はああ、海岸のほうか。

海岸の方では水が膨れ上がったたり、弾けたりしていた。

水圧を甘く見ていたのか、それに飲み込まれたと見せかけて瞬動で脱出。

「小太郎君、いつ来たの？」

「好きに入っていいって言ったからな。ネギが」

「エヴァンジェリンさん、夕映さんやのどかさんに魔法教えますよね？」

「ああ、成長が早いな。念話で聞いてくるぐらいだから部屋でやっているのだろう？」

「正確にはこの別荘の部屋、ですけど」

茶々丸さんがエヴァの隣に寄ってきた。

「魔法の本を見て勉強って所ですか」

「エヴァちゃんの所は量が多いからね」

うんうんと頷いていた。

魔法の本か、使えない本は全て捨てたから仕方ない。

未来やら並行世界、異世界の魔導書ぐらいしかないし、僕以外触れられない部分も存在する。

明日菜さんがさきほど使った魔法も禁断区域の本だ。

「ネギ先生〜！」

こちらに走ってきた夕映さん、のどかさん、アーニヤってあれ？

「アーニヤ、どうして一緒なの？」

「何となくよ」

「アーニヤさんも卒業するほどの知識を持ってるみたいでしたので、修行してもらってる所を」

いつの間にしたんだろう。

見てなかったからそう思うだけなのかもね。

「とりあえず全員を集めるか」

「ややこしくなってきましたね」

そして……

全員がここに集まった。

小太郎は地面にへばりつき、疲れてだらけていた。
他の人はまだ大丈夫だったが。

「数時間ぶりだけど、成果は無いな」

「エヴァちゃんそれは当たり前やで」

ごもつともな意見です。

「私もアーティファクトなし戦闘はきつい」

「普通はそうじゃないかと」

「夕映ちゃんのアーティファクトすごいな」

明日菜さんが羨ましそうに夕映さんを見る。

初心かと思えば、ある程度の弱点まで分かる辞典だから、か。

「ですが、名前分らないと意味ないのですよ？」

「私のはハリセンだし」

「大剣になれるじゃないですか」

「でも刹那さんみたいに連撃できるわけでもないんだけど」

「そう言われましても……」

それでも明日菜さんはやっていけると思うが。

覚醒すれば素手でどうとでもできる。

知らないからしょうがないな。

「全員の成果を聞こうか」

エヴァが仕切るの？ まあいいけどさ……

皆が結果をエヴァに話す。小太郎はめんどくさそうに話していたが、

成果なしとか？

「夕映とのどかは既に中級に近いだろうが、戦闘経験は初心だな」

「はいです」

「私と夕映は後衛の方がいいと思います」

「それは当然だ。で、刹那はいいとして明日菜も魔法と剣が強くなっている」と

「はい。少しずつですけど驚くほど強くなってます」

「そうなのかな」

「そうですよ」

魔法世界に行ったらかなり上昇するんだけど、今以上に。

「千雨は私のアレで呪文を」

「いやいや、それは無いんじゃないかと」

「それは決定だ。だが今は基礎を高めるべきか」

「永遠にいらないます」

本人からしたら嫌過ぎるな。

立場が千雨さんだったら僕も却下要請をするが、何も問題ない。

「アーニヤも少しだけだな」

「夕映やのどかに付きっきりだし」

「そのおかげで色々と学べました」

まあこの辺は別に、ね。

「木乃香は……どうでもいいな」

「何でや！」

「星光破壊の開発だろ？ 完成しなくても上級でも通用する」

「それがなかったらウチ、雷の暴風、燃える天空ぐらいしか撃てん」

「それで十分だろ。後は実践だ」

「そうやな……」

「治療魔法は何処へ？」

本題の魔法を聞いてみたが、2人は固まった。

「ああ！」

「すっかり忘れてたな」

両手を合わせる木乃香さんとエヴァって忘れないで。

それをしてくれないと石化はどうするの？

権限の鍵で、てのは面倒だからご勘弁願いたいです。

「治療魔法だろ。魔力を使いこなせない事には意味が無い。せつか

くナギや私以上の魔力を持ってるんだ」

「エヴァちゃん以上なん？」

「当たり前だ。あいつの魔力で私は登校地獄を受けたんだ」

「じゃあネギ君は？」

「ネギは？」

ここでしーんと沈黙する。

「何で皆さん黙ってるんですか？」

「いや、だってねえ」

「うん」

腫れ物扱いされているような視線を感じる。
小太郎以外、顔を引き攣ってるしひどいな。

「ネギの魔力ってどれぐらいなの？ 出してみてよ」

「どこにですか」

「全身で魔力を高めてって意味」

「ああ…でもここでやると問題が」

「問題って何やねん！ そんな無視してやれ」

「無視って…：君は馬鹿なの？」

楽しそうにはしゃぐ小太郎を見て思った。

魔力を開放したら、ガノード以上の結果を生み出しそう。

ってかこの人達は世界を滅ぼしたいの？

「ネギ君の魔力見てみたい！」

「そうですね！」

「私も見たい」

全員が僕の方を見ていた。

期待する視線で、だ。リースとさつきから一言も呟かないルーシー以外は。

「それよりそろそろ時間ですよ。早く行きましょう」

僕は全員を無視して、別荘から抜け出した。

時間が完了してるから皆もネギの後を追っかけた。

（武道会場）

人が予選より多く集まっていた。

場所も全方位から中心を見るところ位置。

前も思ったけど10メートルはやばいほど短い。

水の部分を入れても15メートル？

図ったこと無いから分からないけど、とにかく狭い。

「選手席は外で、着替えるのが中って訳ね」

「選手控え席、やろうけど」

「どうでもいいわ。とにかく刹那さんに勝ってネギと戦ってみたい」

明日菜さん……

「私がネギ先生に勝つ可能性は考えませんか？」

「無いわね。ってあんた誰？」

明日菜さんの背後に高音さんと愛衣さんが立っていた。

顎に手を当て親密な表情で明日菜さんを見ている。

愛衣さんは言うまでもなく僕を見てるが……

「高音さんに愛衣さん、こんにちはわ」

「はい。ネギさん」

「小太郎に瞬殺される可能性は高いわね」

その時、朝倉さんが舞台に立ってマイクを通して叫んだ。

『これからトーナメントを行います。第1回戦の選手はあそこの入り口に立ってください』

朝倉さんが建物の入り口を指差した。

何かルール違うんだけど気のせい？

たいした歴史の影響はないから別に気にしないけど。

小太郎と愛衣さんが向こうへ行った。

「どっちが勝つと思います？」

高音さんがにこやかな表情で聞いてきた。
どっち？

愛衣さんって無詠唱だと弱いから無駄だと思う。
接近戦も弱そうだし、素手や箒で戦うような動きも出来ない。

「うん。小太郎かな」

「……勝負すればわかりますか」

観客から拍手と大声が聞こえた。

愛衣さんが緊張しながら試合場に立つ。

小太郎は掌を開き握り開き握りを繰り返す。

実力上がってないというがエヴァ視点からという意味。
それにしても、クウネルいないなあ。

『では、試合開始!!』

開始の合図が発動。

愛衣さんはカードを箒に変えて、腰に構える。
まるで抜刀術のような構え。

「ほないくで」

「え？」

そう呟いた瞬間、小太郎は地面を蹴って愛衣さんの懷に移動する。
小太郎の右手に黒い気を覆っているのが見えた。

そこでようやく気づいた愛衣さんは無詠唱の風盾を展開しようとしたが、小太郎の攻撃に対応できず場外へ飛ばした。
右手から黒い気が愛衣さんのお腹に当たり、後ろに吹き飛び場外の水に落ちた、って所か。

バシャバシャと手足を動かし助けてる愛衣さんがいた。
小太郎は助けに行こうとしたが、僕は溜息を吐く。

「泳げないのか……光の1矢」

僕は助けるため、愛衣さんよりちょっと離れた所に魔法の矢を当てる。

水が盛り上がり、溺れている人を巻き込み会場に押し上げられた。
その際、水が小太郎や朝倉さんを巻き込んだとさ。

「毎回思うけど、ネギのやる事が酷い」

「まともな助け方は無いのか？」

「極移だと魔法だとバレる」

「バレはしないだろ？」

それがバレるんだよ。

超さんの警戒視線を感じるし、おそらく今のも見られてる。

「リースちゃんやルーシーちゃんも出ればよかったのに」

「出たりますます激しい戦いになりそうだな」

「どうなるか見てみたいけど、そうなら優勝が遠ざかっていたわね」
「ネギ坊主」

こちらに向かって歩いてくる古菲さん
その隣には龍宮いや、隊長か、懐かしい。

「やあ、ネギ先生」

「こんにちわ。龍宮さんも出るんでしたね」

「ああ。私の試合はネギ先生の前だからまだ先だよ」

「その相手がワタシあるね」

「クー、手加減は無用だぞ」

「真名も手加減無用アル」

始まってもないのに2人とも戦う気満々だ。

古菲さんはお得意の構えを取り、龍宮さんも銃を構えるってええ!?

「ちょっと龍宮さん? 銃は駄目なんじゃあ」

「大丈夫さ。試合では代わりの物を使う。クー、試合で」

銃を腰に直してから、そのまま建物の中へ入っていく真名さん
代わりの物って500円玉ですね。

龍宮さんが立ち去った場所を見ていた古菲さんは僕のほうに向いて

「ネギ坊主、勝ち進む事が出来たら勝負するアル。この武道会ルールで!」

「いいですよ」

「約束アルよ!」

僕と古菲さんは約束した、という証でお互いの右拳を合わせた。

なぜか明日菜さん達の視線いや、観客の方からの視線が痛かった。
これはきつと木乃香さん達だな。

その時、試合場の中心に立つ朝倉さんが会場全体に声が響く。

『では次の試合を始めたいと思います! 次の選手は準備をお願いします!』

次の試合が始まるらしい。

第51話へ n e x t

第50話 『学園祭編その15 武道会?』 (後書き)

感想、評価、web拍手の感想お待ちしております。

次の更新は2011年2月5日予定

第51話『学園祭編その16 武道会?』

次の試合が始まるみたいだが、またまた遠い所から何かを感じた。このもやもやした気配は何なんだ?

いきなり発生したからどう対処すればいいのかわからない。

うーん、リイスに聞いてみるか。

(リイス、リイス)

(何ですか?)

(あの気配って何? 魔力を感じないけど別の力を持ってるのか? 先ほどから絡みつくような視線を感じる)

まるで僕の背中に死神がいるかのようだ。

多分、とりつかれたらこんな感覚だと思う。

(それは霊力と邪気を融合させたエネルギーです)

(霊力と邪気? って邪気! ? 何でそんなもんがこの世界に?)

(おそらく……イレギュラーです)

ま・た・か、いい加減にして欲しいなあ。

イレギュラーはもうあの龍と召喚士が操っていたアウルゲルミルだけだよ。

霊力と邪気って根本的な原理が違うのに融合って変な話だ。

(……ガノードみたいなもの?)

(そうですね。でもガノードに比べれば弱いでっ! ?)

(っ! ? ……あの気配が魔法世界まで移動した)

この近くではないが、とにかく日本から一気に魔法世界まで移動した。

早いなんてものじゃない。

XからYまでの移動速度が光速だったぞ。

（その事はひとまず置いてください。今は危険ありませんから）

（リースさん、何か知ってますね）

（あははは、大丈夫ですよ。ネギなら楽勝ですから）

「ネギ、次の試合が始まるわよ」

隣の明日菜さんが声をかけてきた。

話をしてたせいでいつの間にか、選手が試合場に立っている。

「ありがとうございます」

「いちいちお礼言わないの!」

明日菜さんは照れながら僕から顔を背けた。

その様子に笑みを浮かべ、リースへ念話を中断するように言う。

（それならいいんだけど、試合が始まるみたいだから切るよ）

（はい）

念話を切った。

イレギュラー、魔法世界の方へ集中してるのは丸分かりだ。

やっぱり対策取った方がいいか。

『第2試合、クウネルⅡサントース対その辺にいるモブキャラのお兄さんです!』

「モブってひでえ!」

朝倉さんの言葉に叫ぶモブキャラさん
事実だから僕からはノーコメントで。

さてさて、クウネルさんは白いコートを着て、フードもかぶってる。
エヴァにはバレてないみたいだ。
その本人が指を差してこう言った。

「何だあのフードを被った怪しい奴は」

「あれは確かアルって人です」

「な、何!？」

ほら、驚いた。

ってあれ？ サンタースって一文字違うような。

「フフフ、そうかあいつはここにいたのか」

「兄貴、よくわかったっすね」

僕の懷から生える様に出てきた。

何か違和感があるって思ったらカモか。

「父さんと似たような気配を感じただけ」

「しかし、あいつネギのほうちらって見てへんか？」

ベンチから離れていた小太郎がこちらに寄ってきた。

「うーん、この試合が終わったら聞いてみましようか」

「ああ、そうだな」

エヴァも賛同するって何でエヴァも頷くの？

『試合開始!』

朝倉さんの声でコングになった。

無名のモブキャラは両手を前に出し、掌に気を集束させていた。気の集束は続くが、クウネルはボーっと攻撃を待っていた。

この間に攻撃すれば時間の短縮になるんだが、してくれない。集束が終わったのか、両手で握りつぶすように強くすると、一気に膨れ上がり両手では包み込めないほどの気球? が完成した。

「いくぜ! この波動玉を受けてみる! 波動玉あああ!!」
『おおっと! あれは漫画や架空で噂の「気」と言われる力でしょ
うか!!!』

思いつきクウネルの方へ両手を突き出した。
弾ける音と共に波動玉が高速で突き進んでいく。

このままクウネルに当たると思っていた所で、ヒョイと右へ回避した。

波動玉は観客の方へ向かうかと思いきや、Uターンした。

自分のところへ戻ってくると感じたクウネルはモブキャラのほうへ走る。

走ってるというより飛んできてる方が正しい。

「俺のところへ来たな! もう一つの波動玉で終わりだ!」
「なかなかの技ですね。ですがこの私には勝てない」

先ほどと同じように作り出そうとしたが、
クウネルは瞬動でモブキャラの懐へ入り込み右の拳でお腹を当てる。

「隙が多すぎです。もう少し精進なさい」
「うっ!!」

あまりの苦痛で倒れこんだ。

クウネルの後方から飛んできてる波動玉を左腕で思いっきり横へ振り、掻き消した。

「フウ……危なかったですね」

満面の笑みをした表情で危なかったって思いっきり嘘くさいな。

余裕の笑みを浮かべ、僕の方をチラッと見た後、朝倉さんに声をかける。

カウントを10まで数え終えても相手が起きない事で結果が決まった。

『試合終了。勝者、クウネルⅡサントース』

結果を聞いた観客は大声で盛り上がった。

クウネルはそのまま僕達の方へ歩み始めた。
近くに來たクウネルにエヴァが張り倒す。

「おい！ 何でお前がここにいる！」

「おや？ エヴァンジェリンではありませんか」

「いいから何でここにいる！ お前の事も探してたんだぞ！」

「本当でしょうか……ネギ君が気になって私の事探しも」

「何を言っとるか！」

「学園長が言っていましたから」

「あのクソ爺、後で覚えておけ！」

ああ、やっぱり知ってたみたいだ。

これだと僕の実力も知ってそうかな？
クウネルが僕を見る。

「君が彼の息子のネギ君だね」

「はい。初めまして」

「君は彼と正反対の性格を持つようだ」

その言葉を聞いた明日菜さん達がクウネルに反論する。

「いや、全然同じよ!」

「どこが同じなんだ!？ ナギが80%ぐらい混ざってるぞ!」

「ひどいですね。僕は僕なりの性格を」

「私を平気で投げるし、エヴァちゃんをおちよくるし、魔法の修行はでたらめだし」

「後、ナギのようにモテるだな」

明日菜さんの言う事はうん、そうだなって思うけど、エヴァのは全く知らない。

それを聞いたクウネルは僕に手を差し出してきた。

「ん？ その手を切って欲しいんですか？」

「い、いえ：握手です」

「面倒ですが、今後ともよろしくお願いします」

お互い握手を交わす。

すると、その様子を見ていた愛衣さんや高音さんが僕の横に来て

「あなたがアルビレオ・イマですか!」

「え、ええ。でも今の私はクウネル・サントースです」

「どう違うんだ？ アル」

「フフフ……」

意味が分からないという表情のエヴァが僕や明日菜さんに助けを求め。

明日菜さんも何とも言えない顔になる。

「そ、そういえば次は誰の試合でしたっけ？」

「拙者でござる」

僕の背後からニンニンと現れた。

「楓さんとよく分からない人ですね。興味ないですが」

「ひどいっすね」

「うるさいよ。カモ君は明日菜さんに預けますか」

明日菜さんに向けて放り投げた。

それを慌てて受け止める明日菜さんは僕を睨む。

「何で私なのよ」

「邪魔ですから」

「極移で木乃香のほうにでもやればいいじゃない」

「ああ、その手がありましたね」

「ネギ先生ってたまにボケてますね」

刹那さんに言われちゃった。

極移の目的物質をカモに選び、転移場所を木乃香さんの前に設定してっ。

「カモ君、木乃香さんの所にでも行ってて」

「ちよっとアニー——」

カモ君の否定の言葉を貰う前に転移をさせてもらった。
今頃、木乃香さんの前に来ているだろうと思った。

さて、カモ君もいなくなった所で、腕を組んでいる楓さんを応援するか。

「楓さん、がんばってくださいね」

「うむ。やる所までやるでござるよ」

そう言って、楓さんは試合場へ向かった。

「それより、クウネルさん」

「何ですか？」

いきなり背後に現れんなよ。

実体じゃないからせこいな。

それはそれとして、一つだけ聞きたいことがある。

「クウネルⅡサントースじゃなくてサンダースの方がいいんじゃないですか？」

「それは名案ですね。今度からはそう名乗りましょう」

「そ、そうですか」

今後なんてあるの？

そういえば……何たら何たらの理由で招待されたっけ。

魔法世界に対策取っておかないと完全滅ぶな。

必要以上にイレギュラーの塊が移動したからって今はどうでもいい。

「次の試合が始まりますよ」

「ふう……」

『次の試合を開始したいと思います。長瀬楓VS前と同じくモブキヤラである中村達也ですが、別に名前を覚える必要がありません!』

「おい、ひどすぎるぞ!」

モブキヤラが批判の声を上げる。

言うまでもないが、その紹介はどうかと思います。朝倉さん

『さて、お互い準備が出来たようですね。では、開始!』

批判を無視して開始させる朝倉さんでした。

開始のコングが鳴り響いたと同時に中村でいいか、中村が右手に気を固め、

「いくぞ!」

「かかってくるでござる」

「くらえ!」

右手を斜め上に思いっきり振る。

気の塊が楓さんのほうへ飛んでいくが、楓さんの姿が一瞬に消えた。

「ど、どこに!?!」

「いっここでござるよ」

背後から聞こえた中村は振り向いて左手に気の塊をぶつけようとする。

その前に楓さんが中村の首に手刀を入れて気絶させた。

あまりのあっけない結果に立ち尽くす朝倉さんだったが、誤魔化すように咳を一回。

『おーっと！ 長瀬楓選手はまるで忍者のようにささっと移動して気絶させた！！』

どうみてもカウントをするまでもありません！ この試合の勝者、長瀬楓！！』

毎回思うけど、盛り上がりすぎだよ。
隣の明日菜さん達も呆れている。

「まったく朝倉は」
「一般人相手じゃあこうなるのは当然だな」

フツと笑みを浮かべ、腕を組むエヴァ

「さて、次は誰でしたっけ？」
「あの、アソコの掲示板にトーナメント表ありますよ」

刹那さんが微妙な笑みをしながら向こう側を指す。
確かに掲示板はあるが、うーん次はってあれ？

「龍宮さんが僕の前だって言っていましたけど違いますね」
「私が入ってませんわ」

「真名は知り合いで言ってたのでしょうか」
「ああ」
「なるほど、ようは高音さんの存在を知らないって事ね」

その納得の仕方はどうかと思う。明日菜さん
わからなくもない。

龍宮さんと高音さんの会話なんて存在しなかったし。
刹那さんが僕の方を見ながら緊張した声で言った。

「次の試合は派手になりますよ」

「クーちゃんは何とか何とかの優勝者だからね」

「明日菜はどんだけ物覚えが悪いんだ？ 一般にに関してだけ」

「う、うるさいわよ！ エヴァちゃんは覚えてるわけ？」

「当然だ。バカレッドと同じにされたら私の人生は落第まっしぐらだ」

だんだんとケンカ腰になってきた2人を聖なる鎖で拘束する。

「ネ、ネギ！？」

「何をする！？」

僕を睨む2人だったが、ここは何処だと思っていると念話と視線で返す。

2人はうっと恥ずかしくなり、顔を赤くする。

「わかったから外してくれない？」

「なぜか力が抜ける」

反省したみたいだから、聖なる鎖を消した。

拘束されてた2人は跡が残ってないか調べていた。

明日菜さんがジト目で見てきた。

「もうちょっと止める方法はないの？」

「血が昇ってる2人はちょうどいい薬です」

「それよりあの鎖、空間を割って出てきてたな」

エヴァの言うとおり、聖なる鎖は空間から出した、というかそうするよう設定した。

「普通の鎖に見えましたが？」

「あれは普通の鎖じゃないわよ。刹那さん」

「そうなんですか？」

「魔力が使えなかったし」

「力が抜けたから吸収特性の鎖か」

そう結論を出したエヴァはうんうんと納得する。

でも違うんだよそれ、聖の逆の属性を減少させる能力付きなだけ。

減少させてるだけだから吸収と間違えやすい。

減少させた力は別次元に流してるだけだし。

「それは後でこっそり話します。それより」

「ああ。そうだな」

「そうね」

そういえば、実況いない。

茶々丸さんがしないって言ってたから代役がいるかと思いました。

そんな存在いないんですね

『コッホン！ 次の試合を開始したいと思います。両選手準備してください！』

第4試合が今ここに始まろうとしていた。

第52話へ n e x t

第51話『学園祭編その16 武道会?』(後書き)

次の話は2011年2月19日予定。

第52話『学園祭編その17 武道会?』

2人が建物の前に立ち、会話をしていた。

龍宮さんと古菲さんの実力はこの時点でも離れすぎてる。半魔族したら一瞬で終わりそうだけどないね。

「やっともな戦いが見れる」

「今までののは序の口ですし、相手が一般人じゃあ勝負にもなりませんよ」

「そうね」

エヴァと刹那さんの言うとおりすぎる。

相手が一般人しか出てないと手加減するしかない。

「あ、あのく、私一般人じゃないのにやられたんですが」

愛衣さんが顔を伏せながら手を挙げていた。

小太郎に負けたのがショックだったのだろう。

うん、前より強くエヴァの別荘で鍛えてる小太郎に勝てるわけも無い。

「愛衣ちゃんはエヴァちゃんの別荘で修行してないから勝てるわけ無いわね」

「実力の差が天と地を比べるほど無駄だ」

「……私って」

「まあまあ」

落ち込む愛衣さんを刹那さんが慰めていた。妙な光景でちょっと苦笑いしてしまう。

とまあ、そんなこんなしていると朝倉さんの声が会場内に響く。

『では次の試合を始めたいと思います！ この場所を提供していただいた龍宮真名選手とウルティマホラの2002年度チャンピオンの古菲選手です！！ これはかなり期待できる試合になるでしょう』

古菲さんの名前が出た瞬間、観客が今までより盛り上がる。

どうやら古菲さんのファンが多くいる様だ。

両者の準備が出来たみたい。

今回は達人同士の戦いで、迫力のある激戦間違いなさだろう。

「ネギ、どっちが勝つと思う」

「龍宮さんは銃使用不可能な分、不利ですね。古菲さんは近距離特化した戦いをするから……どっちもどっちかな？」

「龍宮さんって強いのか？」

「強いですよ。彼女は近距離だろうと関係しないんです。おそらく今回も」

銃を持っていれば最強、無いなら前みたいに500円玉による指弾実行。

達人でさえ、まともに当たると飛ぶほどの威力を持つ。

『両者準備はよろしいですね？ ファイト！』

朝倉さんの合図で試合が始まった。

両者が小声で会話してるが、大体知ってるため聞かなくていい。

「フッ」

龍宮さんが鼻笑いすると同時に古菲さんが背後に吹き飛んだ。

吹き飛ぶ際、わざとダメージを無くす様に自ら背後へ体を動かした。

「強いわね」

「明日菜さんは見えたんですか？」

「ネギの魔法の射手の方が早いし」

「さすがにやるな」

「小太郎君は見えたわけ？」

「なめんなや、見えとるで。軌道はやけど回避する自信はないけど」

小太郎に回避できるなら誰でも回避できる気がする。

朝倉さんが500円玉だ！とか叫んでいた。

「くーちゃんにダメージは無いわね」

「自らダメージを削減するのは基本だな」

「私にも出来るかなあ」

「愛衣、私たちは魔法使いだからそういう技術より防御魔法を強化した方が早いわ」

「そうでしょうか？」

首を傾げ、疑問を抱く愛衣さん

呪文詠唱前に攻撃されたら一瞬で終了する。

経験済みである僕が言うんだ、間違いなし。

「常に魔法で攻撃するタイプならパートナーに任せればいいだけだ」
「僕も後方魔法使いですし」

「それはないない」

明日菜さん達の否定する声が揃う。

何もかもが酷い。

試合場から銃弾のような音が響く。

「おっ！？ 500円玉を連射している」

「あのお金、私にukれないかしら」

「明日菜さん……」

「バカレツド、哀れだ」

あまりの念願に呆れるエヴァ。

「だ、誰が哀れよ！ しょーがないでしょ！ 私に両親いないし」

「そういう意味じゃない。落ちてる金を拾う姿を想像して哀れだと思っただけだ」

「なるほど」

いえいえ、明らかに可哀相な表情で明日菜さんを見てますよ？

明日菜さんはようやくエヴァの真意に気づき、顔を顰めるが試合に視線を向ける。

視線の先には古菲さんが一瞬で八極拳の活歩を利用し、龍宮さんの懐に入る。

攻撃に入ろうと右拳を突き出すが、姿がブレて空を切る。

後方へ下がった龍宮さんは500円玉を弾き、古菲さんの顎に当たる。

「顎に当てた瞬間、連射を開始。後方へ飛ばすか、やるな」
「何枚持ってるんですの？」

「わからん。おそらく100枚以上だろ」

「100枚だとすぐに無くなるのでは？」

滅茶苦茶どうでもいい会話です。

明日菜さんは飛んでいく500円玉を見ていた。

「ほう、布槍術か」

「いまだき珍しい術使うんやな」

古菲さんは布を使って槍の様に扱い、次々と500円玉を叩き落す。観客も騒がしくなって大盛況。

今度は瞬動で龍宮さんの懐に入る。

「またか、同じ手は通じっ!？」

「攻撃を防いでしまえばこっちのもんね」

常に指弾していた左手が布によって封じられた。

抗おうと恐らく抜け出せないだろう。

古菲さんはチャンスと思い、封じてる布を自分に寄せる。

逆らうことができずそのまま前に引っ張られるが、右手には10枚以上の500円玉があった。

「硬気功!」

近づいたお互いの攻撃が同時に当たり、会場に響くような激音が鳴る。

お互いのお腹に500円玉、拳がめり込む。

そこからシーンと静かになる。

理由は試合場の2人が動かないからだ。

静かに待っていたら、2人とも倒れこんだ。

『……両者気絶によりこの試合は引き分けとします!!!』

「うおおおおおおおお」

「すげえ試合だったぜ!」

「菲部長一生ついていきます!!」

会場の盛り上がりと拍手が周りを包み込む。

試合場に倒れてる2人は係りの者に運ばれていった。

「クーちゃん大丈夫かな」

「あのくらい大丈夫だろ」

「最後の攻撃の音が凄かったですね」

「あれで気絶してもおかしくないな」

結局、この試合は引き分けになった。

次の試合は高音さんと田中ロボの試合か。

「次はお姉様ですね、がんばってください!」

「もちろんですわ」

愛衣さんの激励に勝利の確信を持つ高音さん

果たして脱げずに勝てるだろうか、それともやはり世界の真理として強制かな?

並行世界だと絶対100パーセント確定だ。

『次の試合は高音・D・グッドマンVS実験体ロボ田中さんだあ!』

! 果たしてポロリはあるのか!』

「そんなのありませんわ!!」

わざわざ突っ込みを入れる高音さん。

気にするとフラグ成立になるから止めた方がいいと思う。

「せいぜい負けてこい」

「そういえば」

「どうかしたの？ 刹那さん」

「古菲さんの様子見に行った方がいいんじゃない？」

「刹那だけ見に行けばいい」

「うわぁ、エヴァちゃん最悪……ネギはどうするの？」

「自分の試合が終わったら行きますよ。今はちよっと」

脱げるか、脱げないかどうか調べておきたい。

それに目の敵にもされていないから状況が違う。

何で参加したのかも理由すら知らない。

色々と確認しておかないと後で悔いを残すかも知れない。

いつの間にか真剣な表情になってる僕をジーツと眺めていた明日菜さんが溜息をはく。

「ネギはここにいるのね。刹那さん行きましょ」

「そうですね。ではまた」

2人は古菲さんの所へ向かった。

腕を組み、試合場を睨む小太郎に話しかけてみる。

「小太郎君はいかないの？」

「大丈夫やろ」

「一応行って見たら？ 次の試合は限りなく虚しいから」

「……まあええわ。ちょうど聞きたい事もあるんやった」

こうして、邪魔もじゃない、小太郎は古菲さんの元へ向かいました。
聞きたい事って何？

気にはなったが、小太郎の事だと興味が失せた。

「どんな試合になるだろう」

「相手はロボですけどアリなんですか？」

「アリだろう」

「そんな……」

『お互い準備ができたようですね！　では試合ファイト！！』

司会がもう投げやり過ぎるが、これも前と同じだ。

高音さんがロボに向けて宣言する。

「何も無いようですが、中途半端な格闘で私に勝てると思わないことね！」

そんな戯言無視するかのように田中ロボは口を開き、銃口みたいのが出てきて白い光線が放射される。

危険を感じた高音さんが悲鳴を上げながら体を左に傾け、回避する。

「なななな、何ですのアレは！？」

『どうやら実験体のロボで威力の制限が弱いらしいレーザーを持っているようです』

「何ですのその設定は！」

田中ロボが連続でレーザーを放射する。

回避しきれず服が破れていく。

スカートが半破りになった時、下着が見え会場が盛り上がる。

田中ロボは歩くごとに機械音が鳴る。

高音さんは近づいてくることに恐怖で青ざめる。

「ひっ！？　いやあああああああああああああ！！」

火事場の馬鹿力で田中ロボが上空へ飛んで行った。

上半身まで脱げなかったか、残念すぎる。

愛衣さんとエヴァは予想外の結果に呆れていた。

「……お姉様」

「脱げたな」

前者は心配と哀れみ、後者は確信だ。

さすが脱げ女の運命さだめを持つだけの事はある。

まったくその通りだから

『次の試合は15分後に行いたいと思います。しばらくお待ちください』

何もかも仕組まれている気がして嫌になる。

目を閉じて、ジーツと時間経過するまで待っていると気配が4つ帰ってきた。

一つは試合でスカートの被害を負った高音さんなのは言うまでも無い。

「ネギ」

「やっぱり魔法は凄いわ」

小太郎が人前で妙な事を発言した。

奇妙な視線で見つめた後、明日菜さんと刹那さんを見る。

「どうかしたんですか？」

「あのね、フードの人がくーちゃんのケガを治したのよ」

「ネギ先生を知ってたみたいです」

「アルが？」

明日菜さんの言葉にエヴァが反応した。

僕がいなくても治療フラグは成り立つのか。

「次、ネギの出番ね」

「高畑先生は強いですよ？ 学園長を除けば学園一ですから」

「よく海外にも任務で赴任してますし」

ガノード倒した半年後、タカミチと戦い、本気を発揮した。

僕は威力がどれぐらいかわざと受けたら、何キロか飛んでしまったほどだ。

あの時はビビりましたよ、ダメージは皆無だったが。

「大丈夫ですよ。タカミチは手加減しなきゃいけないし」

「ネギもでしょ？」

「ネギもだろ？」

二人の言葉に頷くが、わかりきってる態度で言われるのはつらい。

愛衣さんが僕の右手を両手で包み込むように握り激励をくれた。

「がんばってください」

「はい」

返事をくれた事を確認した愛衣さんは両手を離し、高音さんの隣に移動した。

そっちの方へ見ると、高音さんがこちらを見るが、赤くなってそっぽを向いた。

先ほどの事を気にしてるらしい。

前の方が被害酷かったから全然気にしない。

僕はベンチから立ち上がり、軽く手首の運動をする。

素手と無詠唱で戦うことになるからだ。

無詠唱でも派手な魔法は使えないし、超さんの警戒が一番の理由。
あ、でも一つだけやっておかないといけない事があった。

「さてとそろそろのはずだから準備しますか。権限の鍵監視モード
発動」

体内にある権限の鍵が赤く輝き、僕の全身に一瞬だけ赤色のオーラ
が放出される。

この世界では絶対反応できないほどの速度でオーラが消える。
魔法世界に移動したイレギュラーや色々と気になるため、広範囲に
監視を広める。

これで、いつでも対応可能だ。

『これから次の試合を開始したいと思います。両選手は準備をして
ください』

「ネギ、がんばってね」

明日菜さんの声援を聞いたら負けるわけにはいかない。

刹那さんやエヴァ、愛衣さんも応援してくれる。

あれ？ 高音さんの声が聞こえない、と首をかしげながら僕は建物の
入り口前に向かった。

第53話『学園祭編その17 武道会？』 next

第52話 『学園祭編その17 武道会?』 (後書き)

次の話から展開がちょっと早くなります。

第53話『学園祭編その18 武道会?』(前書き)

遅くなって申し訳ありません。

感想、web拍手など頂けると嬉しいです。

第53話『学園祭編その18 武道会?』

今、試合場でタカミチと向かい合っている。

こうしてみると僕にとっては不思議な気分だ。

まさかもう一度、タカミチと戦う事になるのだから。

けど、僕の過去ほどではない。

「ネギ君の力、見せてもらおうよ」

「いいよ。存分に味わってもらおうじゃないか」

『では、第6試合、子供先生ことネギスプリングフィールド対恐怖のデスメガネこと高畑・T・タカミチの試合をはじめます！ では、始め!』

コングが鳴った。

「ネギ君、いくよ」

「はあ……」

僕はタカミチの周辺に小さな光の塊を無数に作り出す。

当然びっくりするだろうが、そんな事は気にせず魔法の射手10を放った。

ポケットに両手をしまい込み、居合い拳で魔法の射手をあっという間に潰したが、そのときには既に瞬間移動でタカミチの背後にいた。

「タカミチ」

「なっ!？」

タカミチは慌てたように距離を取った。

本来なら声をかけるのではなく、魔力を込めたパンチで攻撃すれば終了だったけど、すぐに勝負が付いても面白くないし止めた。

「どうやら僕も本気で行かないと駄目のようだ」

「咸卦法使わないと足元にも及ばないかな？」

なら僕も使ってみようかな？ 結界を貼らなきゃ。

タカミチは左に気を、右に魔力を練り込み、融合させるとタカミチの体からオーラが漏れていた。

ってか、前より高くなってませんか？

思いつきりスパークが走ってますが！

「僕の方は準備完了だ」

「面倒だなあ。 宇宙抱擁結界」

僕は両手を天高く掲げて、今からする力で壊れないように宇宙規模の結界を貼る。

金色のオーラが町全体を覆い尽くしていくが、そこから速度が上昇していき、月、火星、土星、と金色のオーラが包まれた。

「な、何だいそれは？」

「混沌カオスの魔法」

黒いオーラが僕を包み込む。

周りにも向かっていくが、結界が押さえ込んで落ち着いた。

「目の色が」

「気にしないで。これはこの魔法の特徴だから」

自分では見た事あるが、目の色は青色になっている。
さっきよりも早くこちらに向かって攻撃してくるが、黒いオーラが
弾き飛ばした。

タカミチは場外どころか会場から神社の建物までぶっ飛んだ。

「おいおい、まだ何もして無いのにもう終わりなの？」

会場も沈黙していた。

そりゃそうだ。いきなり相手が後ろへ飛んでいったのだから。

『え、え〜と高畑先生の場合、10カウント……するまでもありませんね。』

第6試合勝者、ネギスプリングフィールドです！』

誰の声援も無いってどういう事なの。

試合が終わったから、黒いオーラを閉じ、結界を解除した。

「何か釈然としないなあ」

そのまま選手席のベンチまで歩く。

到着すると怪訝そうな表情をした明日菜さん達がいきました。

「おかえり……ネギ」

「今のは何だ？」

「闇の魔法の反作用で生まれた混沌の魔法、そして結界を貼ってないとヤバイ力」

「どんぐらい危ないの？」

顔に青筋を立てながら聞いてくる明日菜さん。

「ちょっとだけの力でも一つの島が消滅するぐらい」

「何だそれは！？ だいたい反作用ってのは何だ！！」

「エヴァちゃんうるさいわよ！」

「コホン、闇の魔法に副作用はあるが、反作用は無いぞ」

そう、エヴァの知ってる闇の魔法では存在しない。

僕の闇の魔法はエヴァの知ってる術式を改変させている。

世界の壁すらぶち壊し、他の力を取り込んだ影響で魔力、気と他の力が反発する。

反発しあっている内に別の力、術式が生まれた。それが混沌の魔法。一部を隠して教えて差し上げると、エヴァは腕を組み、考え始めた。

「そんな事で反作用が起きるのか？ いやだが、闇の魔法を暴走させて……」

暴走とか変な事を言い出すなあ。

「難しく考えても仕方が無いと思いますが」

「そうよね。刹那さん」

「はい」

二人ともいい加減すぎる。

それはともかく、次の試合はメイドの格好での明日菜さんと刹那さんか。

ここ、変わってたら僕は泣きます。

「そういえば次はあなたたちの試合ではなくて？」

「そうだった。刹那さん」

「はい」

2人は僕に手を振り、朝倉さんに耳打ちされてから建物の奥へ入った。

着替えのため、だな。

精神的に疲れただけの僕はベンチに座る。

その右隣に愛衣さんが座ってきた。

「ネギ先生、凄いです」

「タカミチに勝った事？」

「はい！」

子供のように目を輝かせる愛衣さん。

尊敬の眼差しで見られても困る。

「混沌の魔法を使ったただだから凄いもクソも無い気がする」

「混沌の魔法？」

かわいらしく首を傾げる。

左を見ると座っているエヴァは聞き耳を立てていた。

興味無さそうにそっぽ向いてるが、バレバレです。

「混沌の魔法は闇の魔法みたいに魔力を取り込みわけでは無いです。さきほどの試合では自分の魔力を利用してましたが、本来は戦う意志以外の全てを取り込んでから相手を叩きのめすだけの力です」

「戦う意志以外の全て？」

わかんないって表情をしてる。

「戦うという意志以外って事は魔力、生命力、何もかもを吸収して戦いの糧とする。余計な感情、無駄な力を戦うだけの力に変換する。戦うだけの意志を持つ究極の戦士だよ」

「そ、そうなんですか」

「そんなことをしてどうなるんだ？」

エヴァが話しに割り込んできた。

僕は苦笑した。

「生命力まで賭けなきゃいけないから結構、欠陥能力ですね。権限の鍵と同調すれば関係ないですが」

僕の場合、生命力を払っても意味が無いのは理由があるから。理由の一つとして権限の鍵がソレだ。

もう一つあるけど、これは今の所教える必要も無い。

「なるほど、あの鍵がそういう役割を持つとはな」

「僕も滅多な事では使いませんから関係ないですよ。この話はもういいですね？ 明日菜さん達に聞こえると困ります」

「フ、そうだな」

『次の第7試合を開始したいと思います。神楽坂明日菜対桜咲刹那。では出てきてください！』

合図と共に出てきたのは、メイド服の明日菜さんと刹那さんが試合場に来た。

「って何よこの服は！？」

『責任者によれば客にサービスだ、との事です』

「超のやつ……」

「まったく」

……二人の顔が赤い。

観客の盛り上がりが一段と高くなり、今までよりうるさい声援が聞こえた。

メイド萌え〜とかヤバイ発言が目立つ。主に男共。

『では試合を始めましょう!』

「このままでやるの!？」

『当然です。お互いががんばってください!』

何かに絶望した明日菜さんは頭を俯かせた。

刹那さんも観客というか木乃香さんの方をチラチラと見ていた。数秒後、お互い試合するため、向かい合う。

『では第7試合、始め!』

試合が始まった。

先攻は明日菜さんからだった。

明日菜さんがハリセンを思いっきり360度横切ると、全体に衝撃波が発生する。

って衝撃波!？

今の明日菜さんの力を考えると結界なんぞ役にも立つまい。

僕は指を鳴らし、空間歪曲結界を周囲に展開した。

衝撃波がこちら側にも来るが、空間歪曲の影響で別の場所へ押し流された。

審判の朝倉さんにも貼ってるから被害はない。

「どっちが勝つんでしょうか」

背後から白いフードを被ったクウネルが現れた。

気配を感じた隣のエヴァも背後を見ると驚愕の表情だった。
無理も無い。

「な、何でお前がここにいる!？」

「おや、エヴァンジェリンじゃないですか。隣に居るのはネギスプリングフィールド、彼の息子ですか」

興味深そうに僕を見つめてくる。

その間にも戦いは続いているが、エヴァはそんな事お構い無しでクウネルに話しかける。

「何しに来た」

「いえいえ、私も選手じゃないですか。ここにいる理由はソレで十分でしょ？　こうして再会したのでですから感動の一つでも」

「あつてたまるか！　本当の目的は？」

「神楽坂明日菜さんの力についてですが」

会話の内容が凄く変わってるし、ここでは僕の父親に関する賭けや明日菜さんへの手助けがあったはず。

そのイベントも起こらなくなったみたいだ。

別に影響ないから大丈夫かもしれないが。

明日菜さんと刹那さんの方を見ると、人では見えないほどの速度で激突していた。

あちこち移動しながら箒とハリセンがぶつかり合う、の繰り返し。

「ほう。かなりの成長ですね。咸卦法も使えてますし」

「当然だ。私が鍛えてるからな」

「めずらしいですね。あなたが弟子を持つなど」

目をキラッと輝かせてエヴァを見るクウネル

「明日菜だけじゃないが、な。ただもう一人は明日菜より強い」

「ほうもう一人居たのですか、それはどなたですか？」

「詠春の娘だ」

「なるほど。まあ、あなたなら大丈夫だと判断したのでしょう。確かに彼女はナギを超える魔力を持ちますし、鍛えやすいでしょう」

基本は僕が教えただけだ。

「運動神経も並みの魔法使いでは勝てない状態だったからな」

と言いつつも、眉を細めて僕を睨む。

運動神経というか基本の中に体力作りとして腹筋やらなんちゃらをやらせていたし。

エヴァの別荘みたいに時間を長くさせたから短期間で強くなった。

「おや？ 彼女の方が押してますね」

「刹那は油断しすぎている。それに、あいつはネギが鍛えた事を忘れてるようだな」

「ネギ君が、ですか？」

珍しい生き物を見るような目で僕を見てきた。

エヴァもエヴァで僕をどうしたいんだよ。

仕方が無い。

「明日菜さんにバレた影響で強くさせただけです。明日菜さんには不思議な能力がありましたから」

「完全魔法無効化能力。お前も知ってるだろ？ アル」

「クス、私の事はクウネル・サンダースとお呼びください」

エッヘンと胸を張られて言われても反応に困る。
頭が痛くなってきた。

エヴァも同じように頭を抱えた。

「おっ！　彼女が勝ちそうですね」

前を見ると明日菜さんがハリセンに魔力を、正確には魔法の射手光の矢20を覆わせていた。

刹那さんは僕が見てなかった内に折られたのか、箒ではなく素手を前に出す。

早く特攻できるように構えた。

お互い動かずに止まっていた。ここでシーンと会場も空気と呼んだかのように静かになる。

「凄いですね」

静かに沈黙していた愛衣さんが呟く。

その後ろには高音さんが腕を組み、顎に手を当てる。

「おそらく、この一手で決着ですね」

「お姉さまはどっちが勝つと思いますか？」

「決まってるでしょ？　先に動いた人の勝ちでしょう」

「じゃあ、ネギ君はどっちが勝つと思いますか？」

まるで愛衣さんの真似ごとく同じ声色で聞いてくるクウネル
笑みを浮かべながらだからさらにむかつくが。

「も、もちろん明日菜さんですよ」

「では、エヴァンジェリンは？」

「私も明日菜だな」

「では賭けをしましょう」

「賭け、だど？」

「そうです。もしあなたが負けたら次の試合でスクール水着＋猫耳を付けて戦ってもらいましょうか」

どこから取り出したのか、エヴァのサイズに猫耳をエヴァに見せる。エヴァはクウネルの条件に顔を青ざめている。

おそらく、自分が負けた時の状態を想像したのだろう。

「な、何で私がそんな事をしなければいけない！」

「そう来ると思っていました。あなたが勝てば、彼の情報を教えましょう」

「彼って父さんの事ですか？」

「そうです。妥当な取引だと思えますが？」

「思わん。第一そんな情報、今になってはどうでもいい」

エヴァの意外な反応に驚いたクウネルは横目で僕を見て、人差し指を立ててこう申した。

本人の表情はニヤニヤとして、悪戯してやろうという笑みだ。

「なるほど、つまりナギからネギ君に乗り換えたんですか」

「……とにかく、そんな取引応じる気は無い。というかいつまで立ち止まっている」

「残念です。合図を作ればいいんじゃないですか？」

クウネルは残念そうに猫耳とスクール水着をどっかに保存した。

僕も見えたかった気もするけど、しょーがないか。

動かない試合を見て飽きてきた僕は空に魔法の射手を放った。

放たれた魔法の射手は人の届かない場所で爆発した。

すると、明日菜さんと刹那さんが一斉に特攻した。
2人がすれ違い、立ち止まる。刹那さんが明日菜さんの方を見て、
疲れた声色で

「凄いですね。明日菜さん……油断していました。降参です」

遺言のように呟き、その場で倒れた。

明日菜さんのハリセンに魔法の射手20は消えていた。

光の矢って確か貫通だったよね？

妥当な判断だけど刹那さんじゃなかったら胴体切れてるよ。

審判というか何の解説もなしにただ見ていた朝倉さんは明日菜さん
手を天に差し出した。

『桜咲刹那選手、負けを認めたため、この試合は神楽坂明日菜選手
の勝ち！』

「せ、刹那さん！？」

朝倉さんの掴んでる手を解いて、刹那さんを持ち上げてから、その
まま担いで建物の方へ運んだ。

別にケガをしてるようには見えないけど、骨は折れてるのかな？

「はあ、この段階で強くさせすぎたかなあ……」

心配になった僕はその場にいるエヴァ達に治療してくると伝え、明
日菜さんの所へ向かった。

第53話 『学園祭編その18 武道会?』 (後書き)

明日菜が勝った事で、ネギVS明日菜になりました。
次の話はあまり見せ所がないため、展開が速いです。
武道会終了までは後2、3話ぐらいだと思います。

第54話『学園祭編その19 武道会？ 世界樹の改変と武道会の試合』（前編）

遅れてしまい本当に申し訳ありませんでした。

お気に入り登録が減っても仕方ないですが、ちゃんと完結まで更新しますのでよろしくお願いします。

2, 196, 792アクセス 213, 121人ありがとうございます
ます。

第54話 『学園祭編その19 武道会？ 世界樹の改変と武道会の試合』

龍宮神社には医務室が存在するというか大会用に一時設けた部屋がある。

その場所に刹那さんと明日菜さんがいる。
2人はソファ―に二人並んで座っていた。

「明日菜さん、刹那さん大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「検査では異常ないって。私も骨が折れたかと思ったわ」

それに苦笑する刹那さん

今の明日菜さんは魔法が使えるように僕が強化したせいでもあるが、まさか勝つとは。

「ところでネギ先生はどうしてここに？」

「ちょっと心配でここに来ました」

「そ、そうですか」

「ふーん」

明日菜さんがジト目で見てきた。

心配してるのは刹那さんなんだ、という嫉妬的な視線を感じた。
そんな事よりも別の事に書き換えないと。

「それよりも次の相手が明日菜さんになるんですね」

「そうね。ネギ、お互い本気で――」

「それはだめですよ」

「何でよ！」

怒鳴ってくる。理由わかってるだろうに。

「僕が本気出せば学園が消し飛ぶけどいいですか？」

「あ、そうだったわ」

忘れていたらしい。

エヴァと修行してれば忘れもするか。

僕が明日菜さんに何か言おうとした時、木乃香さんがいきなり部屋に入ってきて

「せっちゃん！ 大丈夫なん！？」

「こ、このちゃん！？」

抱きついてきた木乃香さんを受け止めた。

本当に百合百合しい光景です、というかすごく似合うのは気のせい？
背景がピンク色に薔薇を飾れば完璧。

「次ってネギ君と明日菜やろ？ ネギ君が優勝してくれるといいんやけど？」

「ネギに勝てないのは明白だししょーがないけど、だからってあきらめたくないわ」

「明日菜も負けず嫌いや」

「ネギ、武道会潰さない程度の本気でやってね」

「それでいいならそうします。僕も明日菜さんの実力が見たいです」

明日菜さんは嬉しそうに頷く。

刹那さんの様子を見ると、木乃香さんと百合百合しい雰囲気だからこの場から出るか。

それよりいい加減気づこうよ。

「明日菜さんの次の相手ってエヴァンジェリンさんですが」

「え？」

「そうやで、明日菜」

「明日菜さん、忘れてたんですか？」

「そうか、今、第1回戦だった？　アハハハって皆もノリノリだったじゃない！」

「ノリに乗っただけや」

見事に乗せられた、と落ち込む明日菜さんの姿が哀れに見えた。
落ち込む明日菜さんの肩を優しくポンと置き、

「明日菜さん、ファイトです」

「刹那さん……結構ひどいよ。それより木乃香も」

「あははは、だって明日菜も気づいてて言ってるもんやと思うてたもん」

「それならエヴァちゃんにも勝って、現実にする！」

立ち上がりテンションMAXで唸り挙げていた。

どうでもいいけど勝算は考えてるの、という疑問を聞くのはナンセンスだろう。

立ち直った明日菜さんを見てから、僕はもういいだろうと思い、この場から去った。

く世界樹く

僕の試合まで時間があるから武道会から離れ、世界樹前に空間転移していた。

世界樹にもたれ掛かると妙な鼓動、言葉が聞こえた。

！…ネギ、ス……

「ん？ この世界樹から聞こえた？ 違う、確かこの下ってアレだったか？」

僕の知ってる歴史ならこの下にはアレが眠ってるはず。

鼓動なんか聞こえないはずんだけど、何だこのヌルヌルしたような感覚は。

僕は権限の鍵を通して世界樹とリンクし覗いてみると一番下に眠ってるはずのアレが別の何かに変わっていた。

「！？ 人が入った氷というか冬眠状態のアレじゃない？ 何で繭なんだ？」

僕が目にしたのは、3メートルぐらいの繭だった。

鼓動はあの繭からだと理解した。

「お前は何者だ！」

！…ネギ、オレ……

声色的には男なんだろうけど、繭の影響でよく把握できない。いやアレは、まあいい。

繭は中から膨れ上がるように、いや心臓のように動いていた。

！…目覚め、の、時、ネギ……者……へ

聞こえる言葉に途切れでしか聞こえない。

訳が分からないけど、僕の中の権限の鍵が輝いてる。

その時、一瞬だけちゃんとした言葉が聞こえた。

「……もう間もなくだ。ようやく叶う……」

僕は疑問に思い、問いただそうと権限の鍵で聞きだそうとした瞬間、強制的に世界樹のリンクを解除された。

その場で座り込み、先ほどの繭を思い浮かべる。

「僕の知ってる世界から離れていく？ 世界樹の一番下に眠ってるモノが変わってる……じゃあ魔法世界の時、どんな影響が起きるんだ？」

僕の知ってる世界、経験した世界でもしガノードがこの世界に来なかったらどうなるか。

権限の鍵で見たから知ってるだけ。僕の世界ではそんなもん関係なかったからな。

魔法世界でいきなり現れたガノードにフェイト達が消滅してたから復活やら行えるはずが無かった。

さらに地球を含む宙域を滅ぼそうとしてたつてのが僕の経験した世界。

同じ経由の並行世界経験したって言っても1つの世界に数時間、数十日程度だから意味ない。

そこまで考えてまとめようと思ったら、ポケットの中が震えていた。

「ん？ ああ携帯電話か」

ポケットの中から携帯電話を取り、出してみる。

「ネギ先生」

「……誰？」

「のどか、です」

のどかさんがそんな声色な訳ない。

最後にです付ける子は夕映さん以外の何者でもない、です。

「どうみても夕映さんです。何のようですか？」

「試合見ないのでですか？ 選手席にいないようですが」

「もう始まってるんですか？」

「いえ始まる寸前です」

「わかりました。夕映さんって優しいですね」

「え、ええ！？ いえ私は別にその、しかし」

テンパってますね、夕映さん。

のどかさんでもそこまでテンパる事ないと思う。

受話器の向こうではハルナさんとのどかさんが何か言ってる。

「あのー」

「あ、はい！ 何ですか？」

「もう切っても良いですか？ 移動するんで」

「あ、そうですね。ではまた」

「はい」

携帯電話をそのままポケットの中に直す。

うーん、のどかさんやハルナさんの性格がちよっと違う気がする。

気にしてもしょーがないか、じゃあ選手席まで行きますか」

「極移」

呟いた時には既に僕の座ってる場所まで転移完了していた。
周りの人は騒いでるからこちらに気づく事はないっぽい。

「どこへ行ってたんだ？」

「どこでもいいじゃないですか」

「まあいい」

そう言ってエヴァは僕の腕に絡ませようとするが、もう片方の腕に愛衣さんが占領する。

何これ？

急に背中が寒くなった。

「ネギ、両手に花ねえ」

冷たい声色にゾクつとした僕は逃げ出したくなるが二人のせいで逃げられない。

ここで極移しても良かったのだが、暖かいし別にいいや。

「愛衣ちゃんはいいとしてエヴァちゃんは遠慮しなさいよ」

「何で私は駄目なんだ？」

「なんとなくというかネギの血吸う気でしょ」

「どっちかというとネギにキスだがな」

「そっちのほうがもっと駄目でしょうが！」

喧嘩に、ならない。一方的に明日菜さんがエヴァについて感じ。

エヴァは思いつきり流してるから成立しないんだよ。

ってあれ？

「そういえば次の試合ってエヴァンジェリンさんじゃあ」

「そうだったな」

そういつて立ち上がり、向こうへ行ってしまった。

明日菜さんはジーっとエヴァの背中を見つめていたから気になった。

「どうかしたんですか？明日菜さん」

「え？ この試合で負けてくれると嬉しいかなあって」

「ありえませんか」

「や、やっぱり？」

表情を引き攣った状態になり、なぜか俯いた。

「そこまで戦いたくないんですか？」

「エヴァちゃんって強いでしょ？」

「明日菜さんに魔法は効きませんが」

「それはそうなんだろうけど、まだ使いこなせてなくてたまに凍っちゃうし」

ああ、そういうばそうだった。

あれって自分で完全制御しないと魔法無効化は引き出せないってあの人が言ってたな。

「魔法無効化、天敵ですわね」

「え？」

後ろから声が聞こえたので振り向くと高音さんがいました。

あの黒装束っぽい姿ではなく普通に制服でしたが。

「次の試合一瞬で終わりそうですわね」

「あのエヴァンジェリンさんですから」

その時、ようやく朝倉さんが声を上げる。

『次の試合を開始したいと思います。第8試合3D柔道の使い手、山下慶一選手対麻帆中囲碁部エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル選手』

両者が試合場に現れた。

もう面倒だからここから何があったか僕の口で語らせてもらう。

相手は軽い気持ちでエヴァに近づき、肩を掴もうとした瞬間、エヴァが人では見えない速度で拳をお腹に突き出す。あまりのダメージに耐え切れずそのまま前へ倒れた。

朝倉さんはうわぁ、と呟き、相手の状態を見る。

『第8試合、エヴァンジェリン・A・K・マグタウエル選手の勝ち！』

エヴァは当然の結果のように鼻笑いしてから僕の元へ帰ってきた。

「つまらなかった」

「エヴァちゃん、一撃で終わらせたよね」

「さすが600万ドルの指名手配にされただけの事があります」

「封印状態だったらどうなっていたことやら」

僕の一言で周りの雰囲気が変わったと思ったら刹那さんが戻ってきました。

木乃香さんは観客のほうへ戻ったようだ。魔力、気配でわかる。

「もう大丈夫なんですか？」

「はい。クウネルさんに直してもらいましたから」

「そういえばいつの間にかいなくなってるな。最初からどうでもいいやつだから気にする価値はないな」

すると、いきなりエヴァの背後に現れたクウネルさんが困り顔で呟く。

「ひどいですね。せっかく直してさしあげたのにそれはないでしょう」

「別にお前じゃなくて木乃香が直せば問題なかった。つまりだな」
「しかし彼女はまだ数ヶ月程度の見習いレベルでしょう」

「完全治癒魔法も習得済みのやつが見習いレベルならできない奴はそれ以下だな」

「なるほど、どうやら私の予想とは違う使い手になりそうですね」
「別の意味で異常すぎる魔法を覚えているがな」

星光破壊のことですね。

障壁、結界の貫通、空間転移追尾効果などあるらしい。
本当、どうしてこうなった！って思うほどのイレギュラーだった。

「ネギ」

「ん？ ああ誰だっけ」

「小太郎や、忘れんな！」

今時の学ラン装着の小太郎が近づいてきた。
そういえば次の試合はボッコボコに終わる。

「負けに行くんだね。がんばって」

「ネギと勝負するまで負ける気ないで」

「何気に死亡フラグ立ってる。小太郎君一つだけ忠告するけど、クウネルさんはその辺にいる雑魚じゃないから数秒で負けないでね。
明日菜さんだったら勝てるでしょうけど反則な方法なら」

「え？ 私が勝てるの？」

僕と小太郎の話に入ってきた。
名前を呼ばれたら当然かもしれない。

「ハマノツルギを覚醒、思いっきりあの能力を制御しながら当てるだけというお仕事です」

「待ってよ。覚醒させたら大剣になるんだけど」

「そして、殺傷力のある武器を持つことになるから反則負け、確かに反則な方法ですね」

刹那さん、エヴァも後愛衣さんも何気にわかったみたいだ。

アレの制御できるようになるのは魔法世界後だったかな。

あの世界じゃあ一度魔法世界消えたっけ。むしろ火星ごと消えてるし、ガノードのせいだ！

そして権限の鍵で、て今はどうでもいい話だ。

「結局制御できないから今は無理なんじゃない？」

『第2回戦第1試合は10分後に開始したいと思います。対戦内容は犬上小太郎選手対クウネル・サンダース選手です。10分後までお待ちください。なお混雑してるかと思いますがくれぐれも騒動を起こさないでください』

「10分休憩か。今すぐでもできたぞ」

「まあいっか。とりあえずノートパソコンで現状を見てみようか」

僕は権限の鍵でノートパソコンを思い浮かべる。

記憶の中に千雨さんの持ってたモノが印象的だった。

だから僕はそのノートパソコンを引き出した。

僕の手元にソレが具現化した。

「ここであーして、そこであーしてっと」

ある程度覚えていたため、すらすらと情報を探ってみた。
するとやっぱり第1回戦の映像のリンクが掲示板に貼られていた。

「明日菜さんこれ見てください」

「え？ どれどれってはい！？ な、ななな」

ワナワナと震えていた。

それもそうだろう。見せパンやらメイド姿で自分が戦っている姿があったのだから。

ネットで、だからダメージもでかい。

「ここにいる全員の映像がありますよ」

「……これってお姉さま」

「ええ。まずいですわ」

心配するが、大丈夫だ。

魔法先生はまったく気にしてなかったからだ。

むしろ焦るのは超さんの計画だったからこの映像の処理はしていない
くてあの世界では証拠として残されたけど。

この世界では関係ないだろうと思い、放置しよう。

「ネットに流れてるならもう無理ですよ」

「わ、私のメイド姿が」

「明日菜さんがあるって事は私のもあるんですね。和風メイド姿が」

この映像見る限り、刹那さんも結構見えてるし派手すぎる。

でもさ、視点おかしくない？

何で必ずパンチラがあって普通ではありえない視点も混ざってるの？
この映像流したのも超さんだから不思議でもないかも知れない。

「愛衣さんがおぼれてる姿もありますね」

「うう、見ないでください。恥ずかしいですよ」

小太郎に吹き飛ばされ、水へダイプ後、バシヤバシヤと水の音を立てながらおぼれている姿。

なかなかの斬新すぎる光景だ。これで魔法使いだからさらに斬新だ。

『第2試合第1回戦を開始します。犬上小太郎選手対クウネル・サnder選手』

もう10分たったのか。

動画を見てただけだから当然といえば当然か。

ちなみに一部の動画は保存済みさ。

「ほないくで」

試合場に出る小太郎。

僕はベンチに座り、ノートパソコンで地下にあるアレをハッキングしながら試合場を見る。

「父さんの知り合いだから小太郎君では勝てないでしょうね」

「まあな。勝てる可能性ないが、せいぜい無駄な努力で足掻けっ所か」

「二人ともひどすぎません」

刹那さんが引き攣りながら僕とエヴァにいつてきた。

他人であろうと気遣う所の刹那さんが好きだよ。

『でははじめ!』

試合の合図になった。

・
・
・

結果から言おう。

前より短く、早く終わった。小太郎の惨敗で。

小太郎が以前のように突進するが背後を取られ上、下へ叩き落される。

哀れのように倒れている小太郎に何かをしゃべっていたが、小太郎はなめるなど意気込みながらも黒い気を自分にぶち込み強化し、先ほどよりも数倍、3倍も速く殴りかかるが、スカッと回避され重力魔法で落ちつぶされる。

重力魔法で潰されていた小太郎は狼化になろうとしたが、さらなる重力魔法を喰らい気絶した。

ここまでで1分も経っていないかもしれない。気絶した事で、勝利はクウネルさんとなった。

次の試合は僕と高音さんの試合が始まる。

「ネギ、がんばって」

「ネギ先生、がんばってください」

「何も言わなくても勝手に勝つだろ」

「ネギさん、がんばってください！」

ネ、ネギさん！？

愛衣さん、なぜ僕の応援なんですか？

応援すべき人は高音さんでしょ、と高音さんを見ると暗い雰囲気と

なっていた。

「ネットに流されるんですわよね。でしたら、ですがせっかくのこの機会はどう無いかも知れませんが、いえですが」

ネットのことを心配していた。

やはりあの姿で戦うのを見られたくないんだとわかった。

あの姿って無駄に色っぽ、ゲホゲホじゃなかった黒い何かにしか見えない。

「ねえ愛衣ちゃん、高音さんって強いのか？」

「お姉さまは油断さえしなければ普通の魔法使いには勝てるんです」「へえ、普通の、ねえ」

明日菜さんが普通を強調し、僕をジーっと見てくる。

まるで僕が普通じゃないと言いたげじゃないか、

「僕はあくまで普通ってそうじゃなくて試合場へ行きます」

僕は表に出た。

僕が出た途端、盛大に声が弾ける。

観念したのか、高音さんも出てきたけどやる気なさそう。

「ネギ先生、私と戦っていただきます。ただしあの力は使いませんが」

「わかりました」

高音さんの瞳の奥にある感情を理解した。

ようはわざと負けるといふ事だ。

しょーがない。一瞬で終わらせますか。

「はあ」

ため息を吐いてから、瞬動で相手の背後に回りこむ。

相手から見るといきなり消えたとしか見え、背後にいることも気づかない。

僕はわざと負けたいという高音さんの想いを叶えてあげようと首の方に手刀をかます。

と思ったら、高音さんは自分の黒い影を利用し、勢いを込めて手刀を弾き、僕から離れた。

「あれ？」

「危なかったですわ」

あれってわざと負けるんじゃないかってあの派手すぎる装備なしでって意味だったのか。

読み違いに頭を掻く僕に黒い影が襲う。

黒い影が布状で伸びたような感じだったからアレができるだろうと掴み

「魔法の射手 炎の10矢集束……爆炎」

右手で掴んでるから左手で集束し、一つになった炎の塊を影、布どっちでもいいがソレを通じて高音さんへ流し込んだ。

高音さんは手に持っている影を切り離し、後方へ下がるけどそれだけではこれを防ぐことはできない。

地面に落ちた布の先から竜の形をした炎が生まれ、突き進み、高音さんに当たる寸前で爆発した。

外野から「ネギやりすぎ」やら「アホ！」の暴言が飛んできた。

それをさり気なく無視して前を見ると高音さんが倒れていた。制服

は普通に焦げてる程度に収まり脱げることは無かった。

「朝倉さん」

『えくと、ネギ、子供先生の勝利です！』

毎回のように会場が盛り上がる。

やりすぎたか、と高音さんの方へ歩いてると心臓が人ではありえない程の鼓動がしたが気にしないことにした。

そんな事よりも今は高音さんをどうにかしないと。

高音さんをお姫様だっこで保健室もどきへ運んだ。

『……ネギ・スプリングフィールド、真……まで、a o 51%』

next 第55話『学園祭編その19 武道会？』

第54話『学園祭編その19 武道会？ 世界樹の改変と武道会の試合』（後

感想、web拍手からの感想等お待ちしております。

次の更新予定日は7月中です。

とりあえず優先更新はこっちで、ISのSSは不定期更新とさせていただきます。
では。

第55話 『学園祭編その20 武道会? こんな事でバレとか』 (前書き)

遅くなって申し訳ありません。

感想等あれば、励みになりますのでお願いします。

第55話 『学園祭編その20 武道会？ こんな事でバレとか』

高音さんを医務室に放り込み、治癒魔法をかけて戻ろうと扉を開けるとアーニャとリースが立っていた。
何しにきたんだらうか？

「ちょっとネギ！」

「何アーニャ」

「何よあの魔法は」

「収束させてから解き放つ普通の魔法だけど」

「あれくらいならアーニャさんもできますよ」

リースのいうとおり、アレは簡単だ。

ただ制御だけ複雑だからコツさえわかれば初心者でもできてお得。

「うーん、じゃあ後でおしえなさいよ！」

「はいはい。木乃香さんに教えてもらえばいいのに」

「さすがに星光破壊まで知りたくないわ」

「あれは木乃香さんと千雨さんだからこそって感じだね」

アーニャは僕の言葉に呆れたのかため息を吐く。

リースはリースで苦笑するだけ。

「本当ネギの周りって非常識人が多すぎるわ。エヴァンジェリンとか」

「アーニャ、それひどい」

「一番の非常識は学園長ですよ？」

「あ、それ凄く納得」

確かにあの頭だけはありえないけど、木乃香さんはまさに奇跡の賜物だよ。

「じゃあそろそろ行こうか。僕としては明日菜さんと戦うのが楽しみ」

「明日菜ってそんなに強いのか？」

「ハマノツルギ、カンカホウ、無詠唱による魔法の射手、雷の暴風等可能らしいです。ネギ強くさせすぎです」

前の明日菜さんより強いけど、ヘルマンに捕まってるから結局は変わらない気がしてきた。

アーニヤもパワーだけは上がってるから人のことも言えないんだよね。

「僕は選手席に戻るよ。アーニヤ達は観客の方？」

「うん。ってあ！ 夕映達の所に戻らないと、リス行くわよ」

「はい。ネギ、また」

「うん」

2人は観客の方へと駆け抜けた。

「僕はどうしようかな？ 選手席に戻って様子見しましょうか。次の試合は確か」

そういいながらも僕は普通に会場へ戻る。

到着すると明日菜さんとエヴァが睨み合っていたけど、何があった。苦笑いしてる刹那さんに尋ねてみる。

「何かあったんですか？」

「次の試合って明日菜さんとエヴァンジェリンさんじゃないですか。」

だからです」

「そういえばそうでしたね。どっちが勝つんでしょうか。詠唱禁止だから明日菜さん？」

僕の言葉に反応した2人が僕を見る。
何なんだ？

「ネギは私が勝つって思ってるのね？」

「何だと！？ ネギ、当然、私を応援するんだろうな！」

「……アスナサンモエヴァンジェリンサンモガンバツテクダサイ」

「何で棒読みのよ」

「まあいい。神楽坂明日菜、試合でけりをつけようか」

「いいわよ！」

やる気満々な二人にため息を吐く。

この2人、なんか因縁でもあるのでしょうか？

すると僕の背後に表れた気配を感じた。

「これはこれは面白いことになってますね。フッフ」

「クウネルさん」

「面白そうな対決ですね。見応えがありそうです」

そりゃあそうでしょう。

黄昏の姫巫女対真祖の吸血鬼なんて見れたものじゃないんだけど、でもさっきから明日菜さんから妙な感じがする。

この違和感って何だろう。

僕がこうして思考を巡らせていても2人はまだ言い合いをしていた。

「じゃあ勝った方がこれが終わったらネギと学園祭を回れる事にならない？」

「フッ、いいだろう。その条件後悔するなよ。バカレッド」
「何よ！ ……ここで言っても仕方ないわね」

明日菜さんは選手席から離れる。エヴァも同様だが。
さてさてどうなることやら。

2人の戦闘をシミュレートしてるとずっと黙っていた愛衣さんが悲しそうな声色で言う。

「ネギさん、明日菜さんかエヴァンジェリンさんのどっちかと回るんですか？」

「そうみたいです。僕の予定すら聞かずに決めるとは、なんて命知らず」

「ネ、ネギ先生怖いです」

「ネギ君」

刹那さんが震えていた。何を怖がってるんだろう。

背後から愛衣さんの隣に移動したクウネルが話しかけてきた。

「何でしょう」

「あの二人のどっちが勝つと思いますか？」

「知らない。戦闘経験でエヴァンジェリンさんじゃないですか？」

「先ほどと違いますね」

「よく考えれば明日菜さんの魔法無効化はあくまで魔法を、だから純粋な体術で攻めれば余裕な感じですよ」

「彼女も元から運動能力は高いですよ？　もしかしたらの結果になるかもしれませんよ？　その方が私は嬉しいですが」

僕が言いたいのはそのじゃない。

アスナだったらその程度造作も無いけど、この現在だと勝ち目はあまり無いに等しい。

向こうは吸血鬼だし、身体能力も尋常じゃない。それにさっきから違和感がする。

『次の試合を開始します。メイド姿の神楽坂明日菜選手対小さな子供ながら勝ち進んでる幼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル選手、出てきてください！』

今、気のせいだと思ったけど幼女って言いかけなかった？

エヴァが頬を痙攣させているぞ。明日菜さんは笑いを我慢してるし。2人が試合場の中心に立ち、お互い向き合う。

『両者準備はいいですか？ 返答は聞きません。では始め！』

コングの合図が出て、会場に響く。

毎回、試合の合図が変わっていくな。いや存在理由は変わらんけど。

「さあエヴァちゃん、行くわよ」

「来るがいい。わが弟子一号馬鹿レッドよ」

「ムカツ！ はあああああ」

明日菜さんは勢いを込めて突進する。

近づいた瞬間、何かに引っかかったように扱けそうになるも瞬動で背後へ回る。

エヴァもそれに気づき、いつの間に準備していたのか扇子で明日菜さんのお腹に当てる。

魔力？ 気を込めてる影響で明日菜さんは後方へ吹き飛ぶ。

愛衣さんと反対の隣にいる刹那さんが驚いた口調で呟く。

「扇子に気を覆わせて、いやエヴァンジェリンさんがなぜ気を！？」

エヴァ自身もとから気は使えるって知る僕やクウネルさんは気にせず試合を見る。

2メートルぐらい程度で済んだ明日菜さんはニヤツと口を吊り上げ、カンカホウを使う。

先ほどの数倍の速さでエヴァの前まで近づき、ハリセンを思いっきり振り下ろした。

しかし、エヴァも扇子を縦斜めに構え、ハリセンの勢いを殺し、人差し指で糸を操作する。

糸は明日菜さんの両足に括り付け、指をクイッと曲げる。

「え、ええ!？」

「ちっ!」

糸の引っ張られる勢いで後ろに倒れそうだったが、咸卦法で強化された素手であっさり切れ、元の体勢を戻す。

明日菜さんは何を思ったのか目を瞑る。

「ほう？ 余裕だな」

「別に余裕じゃないわ。私にとっても予想外の状況になったからね。だから今の『私』が勝つ方法を考えてただけ」

「何を言ってるんだ？」

え？ 今の私ってどういう事。ああ、今の実力って意味か。

実力の差を理解してる所は明日菜さんの凄さだ。でも明日菜さん、負けず嫌いだからどうにかしてしまうかも。

「わからなくていいわ。さてとエヴァちゃんを場外負けにさせたらいいのよね」

「できるものならな」

「じゃあいくわよ!」

そう言い放った瞬間、明日菜さんの姿が消えた。

瞬動してもエヴァは動きを読むから虚空瞬動も組み合わせないと駄目だろ。

でも明日菜さんの姿が見えないままだった。

「ふん！ 速さで誤魔化そうとしても無駄な事だ。見えづらいがな！」

エヴァは糸を全方位展開する。

しかし、次々と糸が切れていく。

エヴァの周辺を回ってるだけであり、ハリセンは構えてるから速度に応じて切れてるだけ。

「どうなってるんですか？」

一応、動き見えてるから愛衣さんの疑問を説明しよう。

「明日菜さんはカンカホウの出力を上げて瞬動の速度を上昇させてます。後、姿が見えないのはあまりの速さにブレてみえないだけです。普通の人には見えませんが、実力が高い人には見えますよ」

「はぁ……」

エヴァは単純な動きに溜息を吐いた瞬間、明日菜さんはハリセンを投げる。

投げてきたハリセンをエヴァは一番端っここまで移動するが、それを予想していた明日菜さんはエヴァの後ろに現れ、左手でエヴァを掴み、水の中へダイブさせた。

当然、このままなわけもなく明日菜さんも水の中へダイブした。

『お二人さん、そこは場外領域だよ！　では規定により10カウントします。1』

カウントダウンを取る朝倉さん。

水の中まではさすがに見えないから説明のしようが無い。

誰も出てこないからカウントダウンがさらに進む。

『2, 3, 4, 5, 6, 7, 8,』

次の瞬間、水が盛り上がりと同時に2人は試合場へ戻ってきた。

お互い息が荒いけど、明日菜さんはエヴァより疲れていないような様子だった。

「水中の戦闘って疲れるわね。まあいつかエヴァちゃん、勝たせてもらうわよ！」

「小娘ごときにできるか？」

「……『我が姫ノ愛』咸卦法」

明日菜さんは咸卦法で身体能力を大幅に上げ！？

いつもの出力より高い、いや数倍以上あるぞ。

しかし、明日菜さんの咸卦法でここまで能力が上がるわけない。

まさか、まさか……。

「何ッ!？」

「早めに終わらせましょうか」

と言ってから、明日菜さんの手から魔力と気を融合した剣状があった。

危険を察したのか、エヴァもエクスキューションソードを展開する。

僕が思ってるやつならエヴァの判断は正しいけど、出力が上だったらエヴァの負け確定。

明日菜さんは不敵の笑みを浮かべ、助走を付けて突進する。

2人の剣が触れた瞬間、急激な衝撃波が発生するけど結界の影響で観客まで被害は無い。

もちろんこちらもだけど。

「こんな力どこで!？」

「これは元からよ! 『私』のはね!」

力づくでエヴァのエクスキューショナーソードを切り裂き、胴体へ直撃し、吹き飛ぶ。

あんな力を込めればこうなるのは非常にわかりやすいが大丈夫か? 心配そうな表情になった明日菜さんは倒れてるエヴァの方へ駆け寄る。

口が動いてるから何か話してるけど小さすぎて聞こえない。

会話が終わったのか、明日菜さんは朝倉さんと呼んだ。

『えーと、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル選手の棄権により、神楽坂明日菜選手の勝利とします!』

「すごいです! あのエヴァンジェリンさんに勝つなんて」

「明日菜さんはエヴァンジェリンさんに鍛えてもらってますから、それに元の身体能力が高いです」

「ほえー」

「もはや一般人とは思えません」

ちなみに上から愛衣さん、刹那さん、愛衣さん、高音さんの言葉です。

確かに勝つとは思わなかったけど、これで確信したな。

あの咸卦法は未来じゃないと習得していない。

普通の咸卦法と違い？

それは数倍上昇する術式を実行してから咸卦法を使うとエヴァですら足元に及ばないほどの能力を得る。

だけど身体能力が高くなければいけないという。

「いや、もう僕自身が理解してるか」

溜息を吐いてる間に明日菜さんとエヴァがこちらに戻ってきた。

二人とも疲れた表情をしてるけど、僕は明日菜さんのほうへ駆け寄る。

「な、何？」

「ちょっと来てくれませんか？」

「えーと、どうして？ 次の試合は楓さんとクウネルさんの試合よ」

その時、朝倉さんがマイクを通して観客全員に聞こえるように

『このイベントのベスト4が決定しました。

次の試合まで10分間の休憩をはさみ、いよいよ準決勝に入りますので今のうちにトイレ休憩などお済ませください！』

「だ、そうですが？」

そう聞こえた僕は満面の笑顔で明日菜さんの目を直視する。

明日菜さんは顔を引き攣りつつも額に手を当て、返事をする。

「わかったわよ」

エヴァ達には明日菜さんだけに話があると伝えてから二人きりになれる場所へ移動した。

途中、別の人と鉢合わせになり混乱等もあったが、どうにか説得し

て誤解を解いた。

どこかの部屋内

神社の中だけど、結界等張ったから誰も来ないはず。

とりあえず明日菜さんを座布団の上に座らせた。

向かい側に僕も座り向かい合う。

「えーと、ど、どうしたの？ 改まって」

惚けてるもんだから単刀直入に言うしかないか。

僕は深呼吸をしてから口を開く。

「どうしても出られないはずの人物が表に出てるのかな？
ナス
アス

「あははは。やっぱりバレてた？」

「バレるも何もあの咸卦法や今の私って言葉でわかったよ」

「ああ、でもね。負けたくなかったから使うしかなかったわ」

なるほどね。負けず嫌いは相変わらずとしか言いようが無い。

「『我が姫ノ愛』は、今の明日菜さんには負担が凄いだよ？」

「大丈夫よ。私が表に出てる時はなぜか強化されていってるし」

「ふーん。つまり明日菜さんの体はアスナが乗っ取ってる間、進化してるって事？」

「そうみたい。理由は知らないけど」

進化、ね。

まるで権限の鍵みたいな力だな。ガノードに攫われてた時に変な事

された影響では、ないよね？

あいつ自身、100年後に影響でるとか言ってたし、アスナ自身寿命で死んじゃってるから意味ないはずなんだけど。

考えても仕方ないから頭の隅に置いておこうか、アスナ自身わからないみたいだし。

「所で、明日菜さんはどうなってるの？　もしかして意識同調」

「そ、それはないわ。明日菜と『私』は別だから」

「明日菜さんに融合していくというのは？」

「今は止まってる。突然、力が沸いてきたのよね。多分、世界樹の影響じゃない？」

世界樹の発光、あれか。

それが理由でアスナの存在が強くなれるならその間にアスナの体を作り、魂を分割すれば復活できる。

でもアスナはそれを望まないからこの案は意味無いけど。

それよりも気になることが一つだけあった。

「明日菜さんはいつ戻るの？」

「戻せるわよ。でも……」

「じゃあ、やってくれない？」

僕がそう言うと、アスナは難しい顔になり、僕を見る。

「後悔しない？」

「後悔？　そんなのどうでもいいからさ。そうじゃないと」

「わかったわ。本当は自然と消える方が良いのよねえ。跡が残らないし」

アスナは笑顔で呟いた後、目を閉じると数秒後、体が光りだす。

光は一瞬で消えた。

するとアスナの目が開き、僕を見ていきなりの爆弾の投下をしてくれた。

「この記憶……ネギって未来から来たの？」

「はいっ!？」

なぜか申し訳なさそうに上目遣いで僕を見つめていた。

焦った僕は明日菜さんの両肩を掴む。

「未来からってそんな事あるわけじゃないですか」

「でも私の夢の中にいた私の姿をした人の全てが私の中に入ってきて、それで知ったんだけど」

夢の中？ 本当に夢の中なのか怪しいな。意識共有は使えるはずだからソレの可能性が高い。

可愛らしい仕草で首を傾げる明日菜さんを見てアスナの言葉を思い出す。

後悔しないってそういう意味なのか。

「しょーがないかな？　そうですよ。僕は未来から来たネギ・スプリングフィールドです」

「そ、そうなんだ。じゃあ私の中にいる私の姿をした人って未来の私なの!？」

「そうです」

「エヴァちゃんと戦ってる記憶も見てたけど、未来の私ってエヴァちゃんよりも強いって事よね!」

「は、はい」

やけくそになってしまったけど、明日菜さんのあまり驚かない反応

を見て気が抜けてしまった。
こうしてみると試合の負担はまったく無い事にも呆れた。
反応の薄さに疲れた返事しか出ない。

「なるほどね。どうりで10歳に見えなかったわけか、ようやく疑問が晴れたわ。じゃあ木乃香にも教えてこよう！」
「へ？」

明日菜さんは子供のように目をキラキラと輝かせながら立ち上がり、この部屋から立ち去った、ってちよつと待て！

今現在で木乃香さんに教えるって冗談じゃないぞ！

一緒にいるはずの夕映さんやのどかさん、ハルナさんにも知れ渡る可能性が高いじゃないか。

僕は慌てて立ち上がり、明日菜さんを追った。

魔法を使えば簡単に捕らえる事ができるのに気づいたのはちよつと後の話。

第56話『学園祭編その21 楓VSクウネル（アル）、ネギVS明日菜、???』

第55話『学園祭編その20 武道会？ こんな事でバレとか』（後書き）

バレたとしても呼び名は初めだけ変わりません。あくまで初めだけです。

武道会編残り1話か2話です。こちらの描写的に1話の方が可能性高いかも。

残り3試合だから2話に分けた方がいいかもしれませんが、どっちの方が読みやすいでしょうか？ 次話のタイトルの最後が???なのはそういう理由です。

感想、web拍手などお待ちしております。

第56話『学園祭編その21 武道会？ 楓VSクウネル、ネギVS明日菜』

期限遅れて申し訳ありません。

色々と事情があった影響で投稿が遅くなりました。

戦闘シーンの描写苦しいかも、読み難かったらすみません。

感想、web拍手（の感想）押すだけでもいいので、ぜひよろしく
お願いします。

感想無かったらモチベーション下がります。更新停止にはなりませ
んが。

第56話 『学園祭編その21 武道会？ 楓VSクウネル、ネギVS明日菜』

木乃香の所へ向かっていた明日菜さんだが、僕は立ち止まる。

「これ、護る為に手に入れたんだけどまさか、こんな事に使うとは思いもしなかった。聖なる鎖、極移」

明日菜さんが転移されてきて、鎖が体中に巻きつく。巻きつき方が胸の谷間やら微妙にエロいけど。

「ちょ！」

「明日菜さん、困ります。こんな事されたらせっかくの計画がパーになってしまう」

「計画？」

「そうです。だからバラすのはやめてくれませんか？」

「理由はよくわかんないんだけど」

理由なんてそんなものはない。

ただ気になることは謎の声、僕の進化、ガノードを狙っていた龍、魔法世界に転移した何か、だ。

さらに、リースが言っていた真格者とやらも気になるからハーレムや暇つぶしの目的（2話参照）が消えるな。

それよりも明日菜さんに言っておく事がある。

「明日菜さん」

「何ってそうじゃなくてこれ解いて！ 変な所が絡んできて変な気分になるってば！」

「あ、ああごめんなさい」

指を弾くと聖なる鎖が消えた。

縛られていたせいで体力が減った明日菜さんは地面に膝を付く。

「……うーん、木乃香にはだめなの？」

「木乃香さんの近くに夕映さん達がいるじゃないですか」

「じゃあ木乃香だけにならないのね？」

「……計画を変更せざるを得ないかな？　ちゃんと人の居ない所ならいいですよ」

「計画って何よ」

「それは秘密です。一つだけのヒントを出すならそうですね。世界の安定のための対策でしょうか」

僕の世界じゃあ既に麻帆良しか存在しないから星とは言わない。

この世界の未来で僕の世界になってもしょうがない、そもそも人類滅んでるわけだし。

みんなみんなガノードのせいだけど。

だから僕は一つの計画を考えた。それは魔法世界に行かないと実行する気が無いから今は内緒。

「それってどうしてもしなきゃいけないの？」

「そうしないと魔法世界が消えてなくなりますよ？」

「それは、困るわね。って記憶だけしかないから実感無いけど」

元はアスナの記憶だからこの世界の明日菜さんが知るわけが無い。魔法世界の消滅、あの世界では権限の鍵で全てを修復したから消え去るという事はなかった。

しかしガノードが置き土産として魔法、発達した技術を世界のお偉いさんに情報提供。

すぐに作れるわけも無く年月が経過したけど、その後戦争となり、2つの世界が滅亡した。

麻帆良領地しか存在しないあの場所は戦争した後の未来だ。もちろん火星も無い。

「慣れていくしかないですよ。元々ありえない現象なんですから」「そうよね。一つ聞きたい。木乃香には話してもいいわよね？」

「……未来から来た程度は構いませんが、ちゃんと木乃香さん限定で話してくださいね」

「わかったわ」

「それじゃあ戻りましょうか」

「そうね」

明日菜さんと僕は会場に戻った。

選手席に戻ってみると、エヴァと愛衣さんが互いに見ていた。見ていたというよりも睨み合いっぽい。

高音さんがその様子を見て困惑しているが、何があった？

僕は溜息を吐き、2人に尋ねる。

「何してるんですか？」

「ネギさん、聞いて下さいよ！ エヴァンジェリンさんが駄目って言ってますよ！？」

「いきなり過ぎて訳が分からない。ちゃんと説明してくれませんか？」

エヴァが僕の方を見てあきれた表情で説明をする。

「この小娘が私に修行してくれと頼んでくるから断っただけだ」

「理由も無く断るなんてひどすぎませんか？ 私がネギさんのために強くなろうとしてもですよ！」

「それが駄目なんだ！ ただでさえ近衛木乃香が強敵なのにこれ以上増やせるか！」

愛衣さんに向け、怒鳴るエヴァ
修行ぐらい良いと思うけど、3人だと厳しいのか？ あ、夕映さん
達も含み5人以上か。

小太郎も予定だし、エヴァなら10人までなら鍛えるなんて造作も
無かるうに、しょーがない。

「エヴァンジェリンさん」

「な、何だ？」

僕の言葉に動揺しながらもこちらを見る。

それは気にせず説得してみるか。僕的には愛衣さんも強化したほうが良い。

「鍛えてあげてくれませんか？ 足手まといがいるとさすがに鬱陶しいから、強化すればそれなりに使えるようになりますし」

「はぁ……わかった。佐倉愛衣、貴様を鍛えてやろう」

「本当ですか！！」

「ああ。ただし学園祭が終わったらな」

「わかりました」

嬉しそうだな。愛衣さん

小太郎に向けてたはずの笑みが僕に、複雑な気分。

エヴァを見ると、めんどくさそうに愛衣を見る。

「炎が得意だったな。燃える天空まで習わせて、基礎も叩き込むか。これぐらいしないと駄目だな」

「燃える天空、がんばります！」

エヴァと愛衣さんの問題はこれで終わったな。

それより次の試合まだあ？

僕は自分の席に座ると、朝倉さんが出てきてマイクでしゃべる。

『次の試合はどう見ても忍者の長瀬楓VSクウネルⅡサンダース選手です。両者出てきてください！』

相変わらず観客が、もういいか。

楓さんとクウネル、アルが見合わせる。

お互い警戒しているのか気と魔力が膨れ上がる。

『両者、準備は良いですね？ 開始！』

試合のコングがなると同時に楓さんから動いた。

クナイを握り締め、飛びながら突っ込む。

アルはゆっくりと手を肩ぐらいの高さまで持っていき、下に振ると楓さんが地面に屈した。

範囲を自分周辺にした重力が発生したみたいだ。

しかし楓さんもこれぐらいで倒れるほど愚かではない。

地面に屈した楓さんは白い煙と共に消えた。

「ほう、分身ですか。これほどの精密された分身を見たのはいつぶりでしょう」

嬉しそうに呟くが、背後に楓さんが現れ気を練った攻撃を繰り出す。あっさりと前方に吹き飛ぶけど、予想していたのか受身を取り、体制を戻した。

「ダメージが無いでござるな」

「私も本気でやりましょうか。いや彼のお願いもありますし、ここは一つこれで」

懐から本を取り出し、本を開き、ところどころに挟んでいる葉を一つ取り本を閉じる。

アルから光が走った。楓さんも光に目を閉じてしまう。

光が止むと、アルの気配が変わっていた。

それに気づいた楓さんも警戒し、分身の術を使い突進する。

アルはニヤツと口だけ歪ませるといふか見えるのは口元ぐらいだけならな。

接近してきた楓さんの分身だけ先に拳一発で片付け、本体の首を絞める。

何かしゃべっているようだが、小声だから聞こえない。聞こうと思えばできるけど面倒だ。

アルはそのまま横にぶん投げ、少しだけ上昇。右腕にまで魔力を覆わせてからレーザーみたいに斜め下へ解き放つ。

当然、あまりの速度で回避行動が取れない楓さんはそのまま直撃し、水の中に落ちた。

魔力が含まれてる分、それも爆発した後、水飛沫をあげる。

「えげつないな」

「なんか人が変わったかのように感じますが」

「あれはアルのアーティファクトだ。説明は面倒だから本人に聞方がいい」

「イノチノシヘンですか」

「ネギ、知ってたのか？」

「カードの部分見えましたから」

カードを取り出した所で文字見えてたし、過去で一度説明聞いてたから。

エヴァは腕を組み、ふむ、と頷く。

何を納得してるのやら

飛び出してきた楓さんは試合場の地面にしゃがみ込む。

ものすごく気が弱くなっている。うん、これだけ低いと無理だね。アルも感知したのか、アーティファクトを解いて、楓さんに近づき何かつぶやいていた。

数秒後、楓さんの表情がいつものニンニンへ変わり、朝倉さんに言う。

「降参するでござる」

『楓選手、敗北宣言！　これにより決勝進出はクウネル選手に決定だ！！』

これでクウネルと僕が戦うのは確定したのか。前は憧れで戦ってたけど、今度は違う。

一人の戦士として限度にとどめて戦う事になる。

「さてと、ちょっと様子見ってきますか」

僕は席を立ち、楓さんの所へ向かった。

試合場の反対側に楓さんはいた。

反対側って言うけど、実際は建物の裏側にある通り道だけど。

構造が変わってる？　僕の気のせいかもしれないので突っ込まないでおく。

「楓さん、お疲れ様」

「ネギ坊主、やはりあの御仁は只者ではござらんよ。そうだ。伝言があったでござる」

「え？」

「決勝で待つ。そう言ってたでござる」

「わかりました」

「人を待たせてるから失礼するでござる」

上にある屋根に飛び、そのまま去ってしまった。

去った方向をじっと見てみると背後から気配を感じた。

「ネギ」

「明日菜さん」

次の試合は明日菜さんだっけ？

ああ、めんどくさいな……無詠唱でも僕の魔法無効化できないから相手にならない気がする。

数秒で終わるのか、と哀れな視線を向けてみると、明日菜さんは表情を変えた。

「ネギ、できるだけこの場で出せる全力で戦って！」

「つまり死にたいと？」

「違うわよ！ 過去の記憶みたいになって言ってるの！」

過去の記憶とは刹那さんと戦ったときのように？

あれ並みだと、明日菜さんに何秒で負ける事やら。

いや明日菜さんの実力より上程度にすれば問題ないか、でも残念。

「何だ……雷の暴風で次元切り裂きできる程の破壊力とか咸卦法による放出はできるんじゃないかと思った」

「そんな事したら次元の殻が破れて宇宙が……咸卦法はこの学園どころか日本が終わるわ！」

青ざめながら違う違うと否定する涙目の明日菜さん

記憶持つてるから僕の言ってる意味理解できるんだろ？

「わかりました。じゃあ手は抜きますけど、賭けをしましょう」
「賭け？」

「明日菜さんが勝ったら僕を一日好きにしてください」

「本当!？」

「ただし僕が勝ったら……そのときに決めましょうか。フッフ」

「わ、わかったわよ! それでいいわ」

引きつったような表情で肯定する明日菜さん。

さて、明日菜さんに施さないと駄目な事あるからって過去の記憶があるんだからあの時もあるよね？

確認するしかないか。

「ところで明日菜さん」

「何？」

「過去の記憶、この世界で言うところと未来だけどそれがあるという事は魔法世界の記憶は？」

「……そこだけないわ。小さいころの記憶がないのはそのままだけど？」

アスナ、全部渡してないんだ。

小さい頃の、黄昏の姫御子の時の記憶を、とすると一つじゃなく2つになってしまうな。

それはそれで別にいいか。フェイトに捕まって記憶復活より僕が施した方がいい。

僕は明日菜さんに笑みを浮かべると、明日菜さんも釣られて笑顔になる。

『次の試合、ネギスプリングフィールド選手VS神楽坂明日菜の試合がまもなく始まります』

「呼ばれましたね。行きましょうか」

「よし！ 絶対ネギに勝ってやる！！」

僕と明日菜さんは試合場に向かった。

朝倉さんの声と共に僕と明日菜さんは移動し、向かい合う。向かった先には先ほどよりも観客が増えていた。おまけに

「明日菜さん、あやかさん達が屋根の上にいます」

「え？ ほんとだ。何やってんのよ」

「多分、見に来てくれたんだと思います」

明日菜さんは頬を膨らまし、拗ねた声色で呟く。

「どうせネギの応援でしょ」

「そんなことないと思いますが」

「絶対そうよ。過去でもそうだし」

僕はその一言で黙った。

過去でも僕しか応援してなかったし、何も言い返せない。

『お二人さん、準備はいい？ じゃあ準決勝戦第2試合、はじめ！』

その瞬間、明日菜さんは咸卦法を解放した。

記憶の影響で魔力と気の密度が上がっている。

「はあっ！」

いきなり瞬動で僕の目前に接近してきてハリセンを振り落とす。当たると前に数メートル下がり、魔法の矢1本を放つ。

「えい！」

速度重視のため、放ったら既に相手の目前だった。
しかし、すぐさま反応した明日菜さんは振り落としていたハリセンを振り上げる。
魔法の矢が消えた。

「咸卦法使ってなかったら完全に防げなかったわ」

「じゃあこれならどうですか？」

「えっ！？」

接近し、打撃の残像を繰り出す。

明日菜さんはわけもわからず適当に防いだり回避したりするが、時々頬を掠る。

「くっ！ はあ！！」

後方に下がり、咸卦法の出力を強くした。

あの追加使わないなら問題ないな。

右手に魔力を覆わせながら発射の準備をする。

近づいた瞬間、追撃できるように充填しておく。

左も同じように充填しようとしたけど、後ろに下がったはずの明日菜さんがハリセンに千の雷クラスの魔力を込めて、こちらに接近してきた。

「はああっ！！」

「っ！？」

右手に充填していた魔力を解き放つ。

放たれた魔力はレーザーのように鋭く向かっていく。

明日菜さんはそれを撃退せず上にジャンプして僕を狙うように向かってくる。

「よし、ネギ！」

「くっ！　なんてね」

「え？」

僕はニヤツと口を歪ませ、右手の人差し指を曲げる。

観客に当たる寸前、いきなり逆の方向へ急転回する。

明日菜さんは厳しい表情をしたが、ハリセンを僕に振り落とす。

当たる寸前、左手に充填し、解放したと同時に急転回してきた魔力が一斉に明日菜さんへ直撃する。

明日菜さんは一瞬でハリセンの勢いを止め、体を捻じ曲げ回転斬りをするが、魔力とハリセンの魔力が衝突し爆発が起こる。
お互い後ろに吹き飛ぶ。

僕は直にバランスを取り戻す。しかし、明日菜さんはバランスを保てず、そのまま倒れてしまった。

「朝倉さん、判定」

『神楽坂明日菜選手ダウン、1. 2. 3』

審判である朝倉さんのカウントが始まる。

ダメージが大きいから立ち上がれないどころか動いていない。

『4, 5, 6, 7, 8, きゅ！　おおっと神楽坂明日菜選手、立ち上がりました！』

明日菜さんはハリセンを杖代わりにしてフラフラしながら立つ。
疲れたように呼吸が荒い。

「はあ、はあ、はあ……うん、これは無理だわ」

そして、また倒れる。

朝倉さんは倒れた明日菜さんに近づき、マイクを向ける。

『明日菜選手、降参ですか？』

「私の負け、降参」

『神楽坂明日菜選手の降参宣言により、この試合の勝者はネギスプリングワールド選手に決定しました!!』

僕の勝利を会場に伝わると、観客から盛大な歓声が響き渡る。

「うおおおおおおおおお！ 子供先生が勝ったぞ！」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「すげえじゃねえええええええええええか！」

[illegible]

最後誰だよ、変なこと言ったやつ。

そんなもん最初から無視して明日菜さんに近づく。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ。ネギが手加減してくれたから」

「でもあれ？　まだ力残ってるんじゃない？」

「咸卦法の使いすぎ、後日頃からの疲労みたい」

本当に疲れたような声色だった。

拾うって僕関連のせいだね、ツツコミ等やってるから
なんか申し訳ないと思った僕は明日菜さんをお姫様抱っこする。

「え？
ネ、ネギツ！？」

「さて、ここだと直せないから休める所に行きましょうか」
「ちよつと待って、ネー——」

僕はお姫様抱っこしたまま、試合場を後にし、奥の部屋へ向かった。
その際、朝倉さんが『おおつとネギ選手、明日菜選手をお姫様抱っこで……』と言ってたけど無視した。

『……ネギ・スプリングフィールド、真……まで、後 48%』

next 第57話『学園祭その22 武道会？ラスト、ネギV
Sナギ』

第56話 『学園祭編その21 武道会？ 楓VSクウネル、ネギVS明日菜』

次の更新予定日は1，2週間後の土曜日です。

第57話『学園祭編その22 武道会？ ネギVSナギ、またもやの状況』(前)

描写がやばい。

第57話 『学園祭編その22 武道会？ ネギVSナギ、またもやの状況』

お姫様抱っこしていた明日菜さんをソファアに下ろす。
しかし、ここまで成長するとは、でもまだまだだな。

「回復させますか」

「回復？ 休憩すれば大丈夫だからいいんじゃない」
「念のためですよ」

権限の鍵を出して明日菜さんの背中に刺す。
体をビクンと跳ね上がり、可愛い声を出す。

「ひゃ！ ななな、何これ」

「少し我慢してください」
「うん」

僕は権限の鍵に記憶復元の魔法を組み込む。
虹色から赤色に変化した瞬間、明日菜さんは声を漏らす。

「な、何これ、ネギ一体何を」

「小さい頃の記憶を復元させるだけです。破壊じゃないから復元なんて訳無いです」

「小さい頃の記憶……うっ」

明日菜さんはいきなりの情報に気絶した。

「記憶を戻すとショックで倒れる。これだけはどうしようもない」

頭を撫でると、ピクツと反応して目を開けた。

「こ、ここは？」

「起きましたか」

「そっか。記憶戻したのね。私がお姫様か、実感無いわね」

「アスナ自身と融合した？」

「まあね」

ソファーから立ち上がった明日菜さんは咸卦法を使う。

アスナと同じ魔力と気を開放していた。

体を動かしてから、僕に抱きつく。

「ああ、アスナと融合したから心地いいわ」

「融合したという事は全て、か」

「ええ。それにしても記憶を消すなんてひどいわ」

「それは明日菜さんの事を思ってたことだと」

「本人の許可もなしで？」

これは何とも言えない。

トラウマになるだろうと防ぐ方法が記憶消去だとは。

「じゃあ僕との初体験は？」

「お、覚えてるわよ！ 初めは普通だったけど、それ以降はめっちゃくちやドSだったわね」

「ふむ。じゃあ次はクウネルとの戦いか」

「正確にはカードによるナギでしょ？」

「よし、次代魔法で」

「やめなさい！ 消す気？」

「てへっ！」

「それじゃあ行くか」

「ええ」

外に出るとフードをかぶる怪しいやつがいた。

「おや？ ネギ君じゃないですか」

「次の試合、よろしく願います」

「ネギ君にとって最高の一日になるのではないのでしょうか。では後ほど」

薄気味悪い笑みを浮かべながら去っていった。

正確には姿を消したのほう为正しいけど、人前で消えるなよ。

「ネギ、話し噛み合ってなかったわね」

「そうですか？ 僕にとってどうでもいい事です。極光陽でも使いましょうか」

「ヘルマンを消したやつね？ あれって何なの？」

「ん？ 記憶戻ってるなら本当の事を言うけどアレはかなり圧縮したエネルギーを相手のどこかに設置、圧縮を開放すると相手を熱と極光で蒸発？ 消滅できるんだけど」

「それってすごいわね」

「温度も尋常じゃない。まあ、たったの6000度以上だけど」

「何でそんな温度なのよ！ それで蒸発したのね」

「あのときの温度は100万℃だけど、被害は絞ったからたいしたこと無い。でもこの極光陽の本質はまったく違うけど」

「本質？ 何それ」

「それは内緒」

「あのときのネギの面影が残ってないわ」

明日菜がネギにジト目で見てきたが、まったくその通りだよ。

並行世界の僕とまったく違いすぎるのも無理は無い。

そもそも目指してた道が違うから比べる意味など無い。

並行世界の僕はマギステル・マギと父親の行方だけど、僕は父親の強さだけだったり。

マギステルはついではか考えてなかった。

村を襲ったのがアレと知った時、「ついで」から「どうでもいい」に印象が変わった。

「さて行くか」

「話しそらしたわね」

僕と明日菜さんは試合場のベンチに戻る。

「次の試合、ネギだろ？ 行かなくていいのか？」

エヴァにいきなりそんな事言われた。

ひどいにも程がある。

「司会者が何も言ってませんし、まあだい――」

『さあ、次はとうとう決勝戦です。両者舞台上上がってもらいましょう』

「ネギ、出番だぞ」

「がんばってください！」

「ネギ先生、がんばってください」

……あれ？ 刹那さんが普通にいるけどタカミチはつて要請ないのか。

向かってタカミチは既に超さんから脱走してるもんね。

「ようしいきますか」

いつもの転移で舞台に立つと、クウネル、アルでいいか。そのアル

が不気味な笑みを浮かべていた。

目がきらきら輝いている。錯覚か？ 錯覚にしておこう。

『両者、準備はいいですね！ これが泣いても最後だ！ 決勝戦、ネギスプリングフィールド選手VSクウネルサンダース選手の対決、開始！』

試合開始の合図が鳴り響いた。

今までより鳴る音がすげえ。つか、うるせえ！

さっさとナギだせごらあ的な感じでアルを見る。

「これは彼との約束ですから仕方ないですね。ネギ君、父親と戦いたくないですか？」

「戦いたい」

「即答ですね。わかりました。このアーティファクトで願いをかなえてあげましょう」

と言った瞬間、あるを中心とした閃光が走る。

説明もなしに早いな。

うーん、まあいっか。一度聞いた説明なんて聞く気がしない。

フードを外し、こちらを見るアルいやナギがいた。

シロハトが上空へ羽ばたいた。

「アルのやつ、過剰すぎるだろ。ハトの羽がペツ、ペツ」

ナギは飛び去った後に残った羽を払う。

僕と視線が合い、驚いた表情をしていた。

「そうか。お前がネギか」

「……父さん。とうさあああああああん」

僕はかなりの年月ぶりに会う父さんの所へ駆けていく。
何か観客の方から騒がれてるのはきつと父さんの事だろうな。
面倒だから無視するけど。

後もう少しという所で僕は右手にコブシを作り、

「オラア！」

「ぐはっ！」

僕の父さんが数メートル吹き飛んだ。

いきなりの事で困惑してる父さんは僕に向かって叫んだ。

「いきなり何すんだ！ 仮にも父親だろうが！」

「もう開始ってなってるので」

「……ネギ、お前黒いな」

「それじゃあ始めましょうか」

僕は魔力のオーラを包み込む。

魔力の多さに驚いた父さんはニヤリと子供の様にはしゃぐ。

「へっいいいぜ。稽古付けてやるよ！」

「雷の暴風」

「詠唱禁止だろ！！」

「無詠唱だから何の問題性が無いです」

「そんなのありか！ てりゃあ！」

僕の雷の暴風を父さんの魔力をためた右拳で相殺するはずだったが、
爆発が起こった。

うーん、前に気配無いな。と言う事は後ろか？

無言で背後から反撃する父さん、しかし左足で防ぎ、両手で左腕を

掴んで上空へ投げ飛ばす。

ここで追撃しようと魔法の射手10本を周辺に蒔いた。上空から降ってきた父さんに魔法の射手10本追撃。

「いい!？」

父さんの背後に瞬間移動して突きを放つ。

魔法の射手と共にヒットして地面に墜落。

「こんな力があるとは、さすが俺の息子だ。いくぜ!」

「……あきた。無詠唱版の星光破壊」

凶悪に溜まった魔力の塊をビームのように発射する。

「くっ! 俺の全ての魔力をぶつけてやる!」

そう叫びつつ、今までに無い魔力を右腕にチャージした後、解き放つ。

おいおい、全力って言ったぞ。

結界張っとくか。宇宙抱擁結界を展開した。

星光破壊とナギビーム? が衝突した瞬間、衝撃波が発生して朝倉さんが後ろに吹き飛んだ。

水に落ちてないからどうでもいいや、放置。

「……押されている!? だがネギの魔力が切れたら俺の勝ちだぞ、ネギ」

「だからあきたって言ってるのに。……気分沸かないな、本物じゃないという意味ない。てい」

星光破壊の特性を「障壁無視など」から「対消滅」に書き換えると、

ナギビームをあつさと貫かれてナギに直撃する。
属性変換した影響で大爆発が発生。
爆発の煙が消えてから初めに見たものは

「……うつ」

真っ黒になっているナギだった。
もうボロボロになり倒れている。

「属性変換、いや特性変換するもんじゃないな」

頭をかきながら真っ黒にこげているナギの所に向かう。

「大丈夫ですか？」

「ネ、ネギ、強くなったな。言う、事は無い。元気に暮らせよ。さ、さらばだ」

惨め過ぎる退場だな、おい。

人柱の光が上空に向かって解き放たれた。

光の柱が消えると黒焦げになったフード姿のアルだった。

アルは自分の姿を嘔然としたまま、僕に聞いてきた。

「こ、これはどういう」

「木乃香さんの星光破壊と全力のナギビームの結果です」

「そうですか」

呆然と見ていた司会者、朝倉は僕とアルの所に来て困惑していた。

『えっと勝敗は……？』

「私の負けです。フードも真っ黒ですし」

『優勝者、ネギスプリングフィールド選手に決定しました!』

うおおおおおおおおおおおおおおお!

「私はこれで」

『ちょっ!?!』

アルは表情を暗くしながら消え去った。

「さて朝倉さん、賞金は?」

『これだよ。2000万』

「ども。ではこれで」

賞金を受け取った僕は巻き込まれたくないため、この場から極移で消え去った。

この際、見られた事すらどうでもいいほどに。

（世界樹前）

極移してきた場所は世界樹の前だった。

またここか、とデジャヴを感じながらも世界樹にもたれかかる。

「あ、忘れてた」

ズボンのポケットから携帯電話を取り出し、メールアドレス明日菜さん宛てにこちらの居場所付で送った。

色々あったから精神的に疲れた僕はこの場で眠った。

「ネギ! ネギ!」

僕を必死に起こす声がした。

目を覚ますと明日菜さん、周辺には木乃香さんやアーニャ、刹那さんに愛衣さん、えと後誰だ？

立ち上がり背伸びをする。

「あれ？ 高音さんがいないのは分かるけど、茶々丸さんとエヴァンジェリンさんは？」

「ちよつと用事があるんだって」

「何も企んでないといいけど」

エヴァが企んでないなど絶対にありえない。

それにどっかで見た事あるデジャヴを感じる。

それはそうと、そろそろあいつも鍛えるか。

メイド姿の明日菜さんに声をかける事にした。

「明日菜さん、小太郎君の居場所わかりますか？」

「知らないわよ。どっかにいるんじゃない？」

どうでもいい言い方してるよ。

木乃香さん達も苦笑いしながら話していた。

その時、逆行前とは違うありえもしない出来事が起こる。

遠くの方から、正確には空から巨大な打撃音が聞こえた。

僕にしか分からないけどこの世界に、強引に入ろうとするかのようだ。

「「「！？」」」」

その後、震度3ぐらいの地震が揺るがす。

それはいいんだよ。たいした事無いけど僕に抱きつくのはやめてほしいんだよ。

「ネギ！」

「ネギ君！」

「ネギさん！」

あらゆる所に抱きつかれてるせいで混乱してくる。
つか、リイスは抱きついてくる必要ないじゃん！
しばらくすると、地震が止んだ。

「今の地震は？」

（ネギ）

リイスから念話がきた。

念話という事は僕にしか話せない重要な事か？

（何？）

（今の地震はこの世界に来たイレギュラーの余波です。世界のどこかに降下しました）

（またイレギュラー？ 魔法世界に行く前に片付ける？）

（それは夏休みにしたほうがいいですよ？ 何せ余波で地震起こせるほどのエネルギーを持った存在ですし）

そこまでエネルギーを持つという事は強そうだな。

凄くめんどくさい事がまた起こるのか、この世界はどうなっている？
悩んでてもしょうがない、と体中抱きしめられているこいつらを気合で引き離す。

「いきなり何するの！」

「ネギ君成分補給してる所やったのに」

明日菜さん達がジーっと僕をジト目、目を細めてにらんでいた。
え？ 僕が悪いのか？ありえないだろ。

こんな状況をさらに悪化させるような出来事が起こった。
夕映さん達が僕達の所へ走ってきた。

「ネギ先生、ようやく探しましたです」

「ネギ先生、はあ、はあ、はあ」

「ハロ〜！ ネギ君、およ？ これはもしかして修羅場？」

ハルナさん、余計な事言わない！

「また増えた」

「人数多すぎやん。ネギ君、極移で人数絞って！」

「噴水広場にあるベンチまで移動しましょうか」

僕は魔力をもらしながら易しく言うと、皆がなぜか焦った表情でうんうんと頷いた。

とりあえず噴水広場のベンチに向かった。

「噴水広場」

人払いしてるから誰も居るわけが無い。

「ここは明日菜がチア姿で縛られた噴水広場やん！」

本乃香さんの天然な発言に明日菜さんが顔を引き攣らせていた。
いやな思い出なのは確かだろうけど、いやあれはあれで凄く似合ってた。

つい嬉しそうにしてると、明日菜さんは僕を見て小声で呟く。

「バカ……」

「まあええやん！ それよりネギ君、ここで何するん？」

「そうですね。今後の予定を――」

「ああああ！ ネギ君だ！ 亜子、こっちこっち」

「え？」

「ちよっとお待ちなさい！ あ、ネギ先生」

まき絵さん、亜子さん、あやかさんがこちらに駆けてきた。

人払い結界張ったのに何で、ああ……あやかさんがいるから結界無意味なんだな。

この先が面倒になった僕は口を歪ませながら魔力を放出する。

「とにかく全員ベンチにす・わ・れ」

「「「はいっ！！」「」「」」

全員が一斉に慌てて何かに縋る様に座る。

「ねえ、今の何、何ですか？」

「今のは魔力、すなわち魔法使いだからね僕は」

「ネギ先生が魔法使いなん！？」

「すごい！！」

亜子さんとまき絵さんが驚愕となぜか喜びの声を上げる。

それとは逆に2人以外は、いやあやかさん以外はまたか、と溜息をしていた。

「で、ネギ」

「何ですか？」

「この2人も巻き込み？」

「明日菜さんはわかってますよね？」
僕がしたい事」

そんな俯かれても困る。

裏世界に巻き込んだら命がどうのこうのと言う。

でも僕は彼女達を強化する前提で動くから、だからどうしたって話。

「ネギ先生、あ、あの……」

「仮契約してもらいましょうか」

「仮契約って何なの？」

「まき絵、仮契約っちゅうのはな。ネギ君とキスするねんで！」

「え、
ええええええええええ！？」

「キ、キスって！」

2人がトマトのように真っ赤に染まっていた。

「で、でもネギ君とキスできるなら私」

「ウ、ウチもネギ君が嫌いやないんやけど、まだ10歳や」

「ちなみにネギ先生は既に十回以上キスしてますが。特に木乃香さんが強引に、ですが」

「あはは……夕映怖いわあ」

ゆ、夕映さんの背後から黒いオーラが発生している。

それを察した木乃香は頬を掻き、愛想笑いする。

これが黒夕映か？という冗談は置いて、うーん。

「どうするか？」

僕は2人を今の戦力とこれからの戦力を思考しながら、先の状況を

眺めていた。

第58話『学園祭編その23 時間操作による全メンバー強化修行
(仮)』

第57話『学園祭編その22 武道会？ ネギVSナギ、またもやの状況』（後

次の話は11月26日更新予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7454i/>

全ての終焉より戻りし1000歳のネギ

2011年11月12日19時41分発行